沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 110 集

中城御殿跡（首里高校内）・櫨園跡

－首里高校校舎改築に伴う発掘調査（2）－

令和３（2021）年９月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立首里高等学校の校舎改築に伴い、沖縄県立埋蔵文化財センターが、平成29(2017) ～平成 30(2018) 年度に実施した発掘調査成果をまとめたものです。

現在の首里高校の敷地は、1700 年代に描かれたとされる首里古地図に照らし合わせると、中城御殿や大美御殿、櫨園、浦添按司屋敷、浦添殿内余地の範囲にあたります。

今回の発掘調査は、平成 25(2013) ～平成 26(2014) 年度に当センターが発掘を行った中城御殿跡の敷地内と考えられる範囲に加え、櫨園跡とされている部分の調査を実施しました。

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として 1621 ～ 1640 年代に現在の首里高校の敷地に創建され、明治 8 (1875) 年に首里大中町の県立博物館跡地に移転しました。

櫨園跡は、創建された年代等は明らかではありませんが、蝋燭や漆器の原料となる漆を採取するための櫨園があった場所とされています。

発掘調査の結果、中城御殿と櫨園に関する遺構が見つかりました。それぞれの遺跡毎に紹介します。

中城御殿の部分では、屋敷敷地の北東隅にあたると考えられる石牆や屋敷内部の石垣、中城御殿の東側にある道跡を確認することが出来ました。これらの発見により、中城御殿の敷地範囲を明確に把握することが可能となりました。また、道の検出によって、隣接する屋敷との境界も明らかになり、当該地の屋敷配置がより明確にわかるようになりました。また、屋敷全体を造成した痕跡があり、造成工事を行うために一部の石積や遺構を埋めている状況が確認できました。このことから、中城御殿は屋敷全体を大きく改築していたことが判明しました。

櫨園跡の部分では、石組土坑内から多くの貝殻片が確認され、これらは人為的に割り取りがされているものがほとんどで、貝製品製作を行っていたと考えられます。漆をとるための場所に加え、漆器に使う螺鈿やその他の製品製作を行っていた場所である可能性が高いことがわかりました。

首里高校の敷地内にある埋蔵文化財は、首里地区においても他に類を見ない遺跡であることから、関係機関と調整を重ねた結果、地中に保存することが可能な部分がありました。様々な歴史の語り部である遺跡は、再び私達の前に姿を現すときまで、地中に大切に保管されることとなります。このような大事な遺構を地中に残すことができたのは、学校関係者の皆様をはじめ、県教育庁施設課、県土木建築部施設建築課、工事業者の皆様の協力があったことにほかなりません。

このような成果をまとめた本報告が、首里地区の歴史のみならず、沖縄県の歴史や文化を理解する資料として活用されるとともに、広く文化財の保護・活用について関心をもっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査及び資料整理作業、遺構保護に際し、様々な御指導、御助言、御協力をいただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

令和 3 (2021) 年 9 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　瑞慶覧　勝利

巻頭図版 1　上：米軍撮影航空写真（1945 年撮影）（沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵）
下：中城御殿跡（首里高校内）・樑園跡周辺航空写真

巻頭図版 2　上：中城御殿の北側石牆（SA3001）と門（H29 年調査 III区）
下：中城御殿の北側石牆（SA3001 西側）（H29 年調査 III区）

巻頭図版 3　中城御殿の北側石牆（SA3001）（H29 年調査III区）　※写真奥は首里高校の外壁

巻頭図版 4　上：中城御殿内の石積（SA4001）（H29 年調査Ⅳ区）　下：検出した道跡（SF5001）（H30 年調査Ⅴ区）

巻頭図版 5　上：SM3001 完掘状況（H29 年調査III区）　下：SM5002 遺物出土状況（H30 年調査 V 区）

巻頭図版 6　調査区遠景（H30 年 Ⅴ区調査時の写真）

例　言

1　本報告書は教育庁施設課から予算令達を受け、平成29(2017)～平成30(2018)年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した首里高校敷地内に所在する埋蔵文化財(中城御殿跡・櫨園跡)の発掘調査成果をまとめたものである。

2　本報告書で報告する中城御殿跡は那覇市首里真和志町２丁目 首里高等学校敷地内に所在する。明治８(1875)年に移転した那覇市首里大中町に所在する中城御殿と区別するため、本報告書では中城御殿跡(首里高校内)と標記する。

3　発掘調査は、沖縄県立埋蔵文化財センターが担当し、民間調査組織に調査支援業務を委託した。

4　整理作業は、現地作業と並行しながら平成29(2017)～令和２(2020)年度まで実施した。報告書作成作業は令和２(2020)～令和３(2021)年度に、沖縄県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　首里高校敷地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、記録保存を目的とした調査を実施していたが、関係機関と調整を行い、一部の遺構は、現地に保存することができた。

6　遺物注記は、遺跡を表す名称として「首里高校内埋蔵文化財発掘調査」を簡略化し、「首高内」を用いた。

7　本書で用いたレベル数値は、標高である。

8　地図データは、国土地理院の電子国土webシステムから配信されたものを使用している。

9　本報告書で使用している座標は、世界測地系の第XV系を用い、方位は座標北を用いた。

　座標軸は、X軸(水平方向)・Y軸(垂直方向)の標記となっている。

10　土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』に基づく。

11　遺物実測図の縮尺は、陶磁器類1/3、瓦・塼等1/5、銭貨1/2を基本とする。その他、大型製品などの例外については、実測遺物毎に縮尺を示した。

12　本書の編集は、当センター職員の協力を得て、亀島慎吾が行い、編集補助を太田樹也が行った。執筆は下記以外を亀島が行った。また、第５章は下記執筆者とそれぞれ検討を行い、亀島が執筆した。

　第４章　第２節　第１項・第２項

　　中国産陶磁器・・・古堅あゆみ・太田樹也

　　タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、貝製品、骨製品・・・太田樹也

　　ガラス製品、瓦、塼瓦・・・平良和樹

13　引用文献は本文中に(執筆者　発表年)で示し、執筆者は適宜略称を用いた。引用・参考文献は、巻末にまとめて掲載した。

14　本書に掲載された写真は、現地調査記録写真を亀島慎吾、玉城綾、太田樹也、我喜屋優真、島袋桃子、平良悟、根間翔吾、波照間紗希、外間裕一、株式会社アーキジオパシフィック支店が撮影した。

　遺物写真等は伊禮若奈、與儀暁裕が撮影した。

15　今回の調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

16　報告書掲載資料について、文化財保護・教育普及・学術研究を目的として利用する場合は、掲載許可申請等は不要ですが、出典を明記してください。

目次

序
巻頭図版
例言
第１章　発掘調査に至る経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査体制 …… 2
第３節　調査経過 …… 3
第４節　立会調査
第１項　経緯と経過 …… 10
第２項　立会調査成果 …… 10
第５節　遺構の現地保存
第１項　現地保存に至る経緯 …… 16
第２項　遺構保護 …… 16
第３項　校舎基礎と遺構 …… 16
第２章　位置と環境
第１節　地理的環境 …… 30
第２節　歴史的環境 …… 30
第３章　発掘調査の方法
第１節　発掘調査 …… 37
第２節　整理等作業 …… 38
第３節　層序 …… 39
第４節　調査区毎の概要 …… 39
第４章　発掘調査の成果
第１節　遺構 …… 51
第１項　Ⅲ区 …… 52
第２項　Ⅳ区 …… 61
第３項　Ⅴ区 …… 69
第２節　遺物
第１項　遺物の概要・分類 …… 86
第２項　塼瓦Ⅷ類 …… 183
第３節　自然遺物
第１項　脊椎動物遺体 …… 188
第２項　貝類遺体 …… 217
第４節　人骨 …… 226
第５章　総括 …… 239
引用・参考文献 …… 287
巻末図版 …… 289
報告書抄録 …… 322

挿図目次

第 1 図　調査経過１ …… 8
第 2 図　調査経過２ …… 9
第 3 図　工事立会箇所 …… 13
第 4 図　工事立会１ …… 14
第 5 図　工事立会２ …… 15
第 6 図　遺構保護砂 …… 17
第 7 図　遺構保護１ …… 17
第 8 図　遺構保護２ …… 18
第 9 図　遺跡と新校舎地中梁基礎重ね図 …… 19
第 10 図　遺跡と校舎基礎重ね図（Ⅰ区） …… 20
第 11 図　遺跡と校舎基礎重ね図（Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区） …… 21
第 12 図　校舎断面図と遺構保護高さ１ …… 22
第 13 図　校舎断面図と遺構保護高さ２ …… 23
第 14 図　校舎基礎地中梁と遺構１ …… 24
第 15 図　校舎基礎地中梁と遺構２ …… 25
第 16 図　校舎基礎地中梁と遺構３ …… 26
第 17 図　校舎基礎地中梁と遺構４ …… 27
第 18 図　校舎基礎地中梁と遺構５ …… 28
第 19 図　校舎基礎地中梁と遺構６ …… 29
第 20 図　沖縄県の位置 …… 32
第 21 図　中城御殿跡（首里高校内）の位置及び周辺の遺跡 …… 33
第 22 図　首里古地図 …… 34
第 23 図　中城御殿北側にある井戸 …… 35
第 24 図　水場遺構 …… 35
第 25 図　洞穴遺構 …… 35
第 26 図　内の井戸（ウチヌカー） …… 35
第 27 図　指（佐）司笠樋川（サシカサヒージャー） …… 35
第 28 図　グリッド配置図 …… 37
第 29 図　層序１ …… 43
第 30 図　層序２ …… 43
第 31 図　層序３（１） …… 44
第 32 図　層序３（２） …… 45
第 33 図　層序４（１） …… 46
第 34 図　層序４（２） …… 47
第 35 図　層序５ …… 48
第 36 図　層序６ …… 49
第 37 図　層序７ …… 50
第 38 図　全体図 …… 51
第 39 図　Ⅲ区平面図 …… 52
第 40 図　SD3001 検出状況（南西から） …… 53
第 41 図　SD3001 平面図・断面図 …… 53
第 42 図　SA3001 平面図・立面図 …… 54
第 43 図　SA3001 断面図 …… 55
第 44 図　SA3002 立面（東から） …… 56

第 45 図　SA3003 検出状況（北から）…… 56
第 46 図　SA3005・SA3010 検出状況（北から）…… 56
第 47 図　SA3006 検出状況（南東から）…… 56
第 48 図　SK3001 半截状況（北から）…… 57
第 49 図　SK3002 断面（南から）…… 57
第 50 図　SS3002 検出状況（東から）…… 57
第 51 図　SX3002 検出状況（北から）…… 57
第 52 図　SX3003・SX3004 検出状況（北西から）… 57
第 53 図　SM3005 半截状況（北から）…… 58
第 54 図　SM3005 平面図・立面図・断面図 …… 58
第 55 図　SM3007 検出状況（南から）…… 58
第 56 図　SM3004･SM3008･SM3009 検出状況（南から）
…… 58
第 57 図　SM3008 平面図・立面図 …… 58
第 58 図　SM3009 平面図・立面図・断面図 …… 59
第 59 図　SM3001 平面図・立面図・断面図 …… 59
第 60 図　SM3002 平面図・立面図・断面図 …… 60
第 61 図　SM3003 カンギク出土状況（南東から）… 60
第 62 図　SM3003 平面図・立面図・断面図 …… 60
第 63 図　Ⅳ区平面図 …… 61
第 64 図　SD4001 検出状況（南から）…… 61
第 65 図　SA4001 平面図・立面図（１）…… 62
第 66 図　SA4001 平面図・立面図（２）…… 63
第 67 図　SA4001 石材加工痕跡 …… 64
第 68 図　SM4004 検出状況（北から）…… 64
第 69 図　SA4003 検出状況・断面 …… 64
第 70 図　SA4003、SP4022、SX4007 平面図・立面図・
断面図・検出状況・半截状況 …… 65
第 71 図　遺構検出部分 …… 66
第 72 図　SA4002・SR4004・SS4002 平面図・立面図・
断面図 …… 66
第 73 図　SR4001・4002 検出状況（北東から）…… 67
第 74 図　SM4001 平面図・立面図・断面図 …… 67
第 75 図　SM4003 断面（東から）…… 67
第 76 図　SD4002 完掘状況（西から）…… 68
第 77 図　SM4002・SS4001 重複状況（南から）…… 68
第 78 図　SM4002 平面図・断面図 …… 68
第 79 図　SK4007 半截状況（西から）…… 68
第 80 図　Ⅴ区平面図 …… 69
第 81 図　SX5005・SD5004 検出状況（北から）…… 70
第 82 図　SX5006 検出状況（北から）…… 70
第 83 図　SS5003 平面図・断面図・検出状況 …… 70
第 84 図　SS5003 半截状況（西から）…… 71
第 85 図　SS5004・SX5003・SP5031 ・SQ5001 平面図・
断面図 …… 71
第 86 図　SX5003 平面図・断面図 …… 71
第 87 図　SS5004 検出状況（北から）…… 71
第 88 図　SS5004・SQ5001 半截状況（東から）…… 71
第 89 図　SX5003 検出状況・半截状況 …… 71
第 90 図　SQ5001 半截状況（南西から）…… 72
第 91 図　SS5005・SX5007 平面図・断面図…… 72
第 92 図　SS5005 検出状況（南から）…… 72
第 93 図　SX5007 検出状況（北東から）…… 72
第 94 図　SA5002 検出状況（南西から）…… 72
第 95 図　SA5002 平面図・立面図・断面図 …… 73
第 96 図　SA5004 立面（南から）…… 73
第 97 図　SA5005 立面（南から）…… 73
第 98 図　SA5006 断面（南から）…… 74
第 99 図　SA5006・SS5009 平面図・立面図・断面図 74
第 100 図　SM5002 平面図・立面図・断面図 SS5002
検出状況・半截状況 …… 75
第 101 図　SP5032・SP5037・SP5040 完掘状況
（南西から）…… 76
第 102 図　SP5032、SP5037、SP5040 平面図・断面図・
半截状況 …… 76
第 103 図　SP5037 半截状況（南西から）…… 77
第 104 図　SP5040 半截状況（南から）…… 77
第 105 図　SX5004 検出状況・半截状況 …… 77
第 106 図　SD5004 検出状況・断面 …… 77
第 107 図　SD5008 平面図・立面図・断面図・検出状況・
断ち割り状況 …… 78
第 108 図　SA5003 西側堆積状況（北から）…… 79
第 109 図　Ⅴ － Ⅴ’ SA5003 西側堆積状況（北から）‥ 79
第 110 図　SD5006 平面図・立面図・断面図 …… 79
第 111 図　Ⅴ － Ⅴ’ SF5001 堆積状況（北東から）…… 79
第 112 図　SF5001 堆積状況（北から）…… 79
第 113 図　SF5001 平面写真 …… 80
第 114 図　SF5001 ほか関連遺構　平面図 …… 81
第 115 図　SF5001 ほか関連遺構　立面図・断面図‥ 82
第 116 図　SF5001 ほか関連遺構　立面図・断面図‥ 83
第 117 図　SF5001 ほか関連遺構　層序 …… 84
第 118 図　SF5001 設定トレンチ各種状況 …… 85
第 119 図　明朝系軒丸瓦　分類表 …… 94
第 120 図　明朝系軒平瓦　分類表 …… 94
第 121 図　Ⅲ区の出土遺物１ …… 106
第 122 図　Ⅲ区の出土遺物２ …… 107
第 123 図　Ⅲ区の出土遺物３ …… 108
第 124 図　Ⅲ区の出土遺物４ …… 109
第 125 図　Ⅲ区の出土遺物５ …… 110
第 126 図　Ⅲ区の出土遺物６ …… 111
第 127 図　Ⅲ区の出土遺物７ …… 112
第 128 図　Ⅲ区の出土遺物８ …… 113
第 129 図　Ⅲ区の出土遺物９ …… 114
第 130 図　Ⅲ区の出土遺物 10…… 115

第 131 図　Ⅲ区の出土遺物 11 …… 116
第 132 図　Ⅲ区の出土遺物 12 …… 117
第 133 図　Ⅲ区の出土遺物 13 …… 118
第 134 図　Ⅲ区の出土遺物 14 …… 119
第 135 図　Ⅲ区の出土遺物 15 …… 120
第 136 図　Ⅲ区の出土遺物 16 …… 121
第 137 図　Ⅲ区の出土遺物 17 …… 122
第 138 図　Ⅲ区の出土遺物 18 …… 123
第 139 図　Ⅲ区の出土遺物 19 …… 124
第 140 図　Ⅲ区の出土遺物 20 …… 125
第 141 図　Ⅲ区の出土遺物 21 …… 126
第 142 図　Ⅲ区の出土遺物 22 …… 127
第 143 図　Ⅲ区の出土遺物 23 …… 128
第 144 図　Ⅲ区の出土遺物 24 …… 129
第 145 図　Ⅲ区の出土遺物 25 …… 130
第 146 図　Ⅲ区の出土遺物 26 …… 131
第 147 図　Ⅲ区の出土遺物 27 …… 132
第 148 図　Ⅳ区の出土遺物 1 …… 139
第 149 図　Ⅳ区の出土遺物 2 …… 140
第 150 図　Ⅳ区の出土遺物 3 …… 141
第 151 図　Ⅳ区の出土遺物 4 …… 142
第 152 図　Ⅳ区の出土遺物 5 …… 143
第 153 図　Ⅳ区の出土遺物 6 …… 144
第 154 図　Ⅳ区の出土遺物 7 …… 145
第 155 図　Ⅳ区の出土遺物 8 …… 146
第 156 図　Ⅳ区の出土遺物 9 …… 147
第 157 図　Ⅳ区の出土遺物 10 …… 148
第 158 図　Ⅳ区の出土遺物 11 …… 149
第 159 図　Ⅳ区の出土遺物 12 …… 150
第 160 図　Ⅳ区の出土遺物 13 …… 151
第 161 図　Ⅴ区の出土遺物 1 …… 161
第 162 図　Ⅴ区の出土遺物 2 …… 162
第 163 図　Ⅴ区の出土遺物 3 …… 163
第 164 図　Ⅴ区の出土遺物 4 …… 164
第 165 図　Ⅴ区の出土遺物 5 …… 165
第 166 図　Ⅴ区の出土遺物 6 …… 166
第 167 図　Ⅴ区の出土遺物 7 …… 167
第 168 図　Ⅴ区の出土遺物 8 …… 168
第 169 図　Ⅴ区の出土遺物 9 …… 169
第 170 図　Ⅴ区の出土遺物 10 …… 170
第 171 図　Ⅴ区の出土遺物 11 …… 171
第 172 図　Ⅴ区の出土遺物 12 …… 172
第 173 図　Ⅴ区の出土遺物 13 …… 173
第 174 図　Ⅴ区の出土遺物 14 …… 174
第 175 図　Ⅴ区の出土遺物 15 …… 175
第 176 図　Ⅴ区の出土遺物 16 …… 176
第 177 図　Ⅴ区の出土遺物 17 …… 177
第 178 図　Ⅴ区の出土遺物 18 …… 178
第 179 図　Ⅴ区の出土遺物 19 …… 179
第 180 図　Ⅴ区の出土遺物 20 …… 180
第 181 図　Ⅴ区の出土遺物 21 …… 181
第 182 図　Ⅴ区の出土遺物 22 …… 182
第 183 図　塼瓦Ⅷ類　模式図 …… 183
第 184 図　塼瓦Ⅷ類 1 …… 184
第 185 図　塼瓦Ⅷ類 2 …… 185
第 186 図　塼瓦Ⅷ類 3 …… 186
第 187 図　塼瓦Ⅷ類 4 …… 187
第 188 図　脊椎動物遺体　同定標本数（NISP%）… 189
第 189 図　魚類　同定標本数（NISP%）…… 189
第 190 図　Ⅴ区　遺構出土魚類　同定標本数（NISP%）
…… 191
第 191 図　哺乳類　同定標本数（NISP%）…… 191
第 192 図　Ⅰ区　遺構出土哺乳類　同定標本数（NISP%）
…… 192
第 193 図　Ⅲ区石組土坑（SM）　巻貝出土数（NISP）218
第 194 図　Ⅲ区石組土坑（SM）　二枚貝出土数（NISP）
…… 218
第 195 図　Ⅴ区石組土坑（SM）　貝類出土数（NISP%）
…… 218
第 196 図　ヤコウガイ殻　出土数（NISP%）…… 219
第 197 図　ヤコウガイ殻破片　出土数（NISP%）… 219
第 198 図　ヤコウガイ殻　分類 …… 220
第 199 図　ヤコウガイ殻破片　分類 …… 221
第 200 図　チョウセンサザエ　出土数（NISP%）… 222
第 201 図　チョウセンサザエ　分類 …… 223
第 202 図　サラサバテイラ　分類 …… 224
第 203 図　サラサバテイラ　出土数（NISP%）…… 225
第 204 図　マガキガイ　分類 …… 225
第 205 図　タカラガイ　分類 …… 225
第 206 図　設置されたシャコガイ（SA3001 門跡）‥ 226
第 207 図　出土人骨　歯 …… 226
第 208 図　グスク時代の遺構 …… 240
第 209 図　近世前期の遺構 …… 242
第 210 図　近世後期の遺構 …… 242
第 211 図　近世後期の遺構面標高 …… 244
第 212 図　近世後期の屋敷内段差構造 …… 244
第 213 図　出土遺物一覧 1 …… 263
第 214 図　出土遺物一覧 2 …… 264
第 215 図　出土遺物一覧 3 …… 265
第 216 図　出土遺物一覧 4 …… 266
第 217 図　出土遺物一覧 5 …… 267
第 218 図　出土遺物一覧 6 …… 268
第 219 図　出土遺物一覧 7 …… 269
第 220 図　出土遺物一覧 8 …… 270

第 221 図　出土遺物一覧 9 …… 271
第 222 図　出土遺物一覧 10 …… 272
第 223 図　出土遺物一覧 11 …… 273
第 224 図　出土遺物一覧 12 …… 274
第 225 図　出土遺物一覧 13 …… 275
第 226 図　出土遺物一覧 14 …… 276
第 227 図　出土遺物一覧 15 …… 277
第 228 図　出土遺物一覧 16 …… 278
第 229 図　出土遺物一覧 17 …… 279
第 230 図　出土遺物一覧 18 …… 280
第 231 図　出土遺物一覧 19 …… 281
第 232 図　出土遺物一覧 20 …… 282
第 233 図　出土遺物一覧 21 …… 283
第 234 図　出土遺物一覧 22 …… 284
第 235 図　出土遺物一覧 23 …… 285
第 236 図　出土遺物一覧 24 …… 286

図版目次

図版 1　遺構 1 …… 289
図版 2　遺構 2 …… 290
図版 3　遺構 3 …… 291
図版 4　遺構 4 …… 292
図版 5　遺構 5 …… 293
図版 6　出土遺物 1 …… 294
図版 7　出土遺物 2 …… 295
図版 8　出土遺物 3 …… 296
図版 9　出土遺物 4 …… 297
図版 10　出土遺物 5 …… 298
図版 11　出土遺物 6 …… 299
図版 12　出土遺物 7 …… 300
図版 13　出土遺物 8 …… 301
図版 14　出土遺物 9 …… 302
図版 15　出土遺物 10 …… 303
図版 16　出土遺物 11 …… 304
図版 17　出土遺物 12 …… 305
図版 18　出土遺物 13 …… 306
図版 19　出土遺物 14 …… 307
図版 20　出土遺物 15 …… 308
図版 21　出土遺物 16 …… 309
図版 22　出土遺物 17 …… 310
図版 23　脊椎動物遺体 1 …… 311
図版 24　脊椎動物遺体 2 …… 312
図版 25　脊椎動物遺体 3 …… 313
図版 26　脊椎動物遺体 4 …… 314
図版 27　脊椎動物遺体 5 …… 315
図版 28　脊椎動物遺体 6 …… 316
図版 29　脊椎動物遺体 7 …… 317
図版 30　巻貝 1 …… 318
図版 31　巻貝 2 …… 319
図版 32　二枚貝 1 …… 320
図版 33　二枚貝 2 …… 321

挿表目次

第 1 表　工事立会一覧 …… 10
第 2 表　中城御殿跡　関連年表 …… 36
第 3 表　遺構記号凡例 …… 37
第 4 表　遺構面対照表 …… 40
第 5 表　遺構面対照表(つづき) …… 41
第 6 表　塼瓦分類対照表 …… 93
第 7 表　Ⅲ区瓦当分類表　明朝系瓦 …… 95
第 8 表　Ⅳ区瓦当分類表　明朝系瓦 …… 95
第 9 表　Ⅴ区瓦当分類表　明朝系瓦 a …… 95
第 10 表　Ⅴ区瓦当分類表　明朝系瓦 b …… 96
第 11 表　Ⅲ区塼瓦　分類表 …… 96
第 12 表　Ⅳ区塼瓦　分類表 …… 96
第 13 表　Ⅴ区塼瓦　分類表 a …… 96
第 14 表　Ⅴ区塼瓦　分類表 b …… 96
第 15 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 a …… 97
第 16 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 b …… 98
第 17 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 c …… 99
第 18 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 d …… 100
第 19 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 e …… 101
第 20 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 f …… 102
第 21 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 g …… 103
第 22 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 h …… 104
第 23 表　Ⅲ区出土遺物観察一覧 i …… 105
第 24 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 a …… 133
第 25 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 b …… 134
第 26 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 c …… 135
第 27 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 d …… 136
第 28 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 e …… 137
第 29 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 f …… 138
第 30 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 a …… 152
第 31 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 b …… 153
第 32 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 c …… 154
第 33 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 d …… 155
第 34 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 e …… 156
第 35 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 f …… 157
第 36 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 g …… 158
第 37 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 h …… 159
第 38 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 i …… 160
第 39 表　塼瓦Ⅷ類観察一覧 …… 184
第 40 表　脊椎動物遺体種類一覧 …… 188
第 41 表　脊椎動物遺体　出土数 …… 188
第 42 表　魚類　同定標本数(NISP) …… 188
第 43 表　Ⅴ区　遺構出土魚類　同定標本数 (NISP) 190
第 44 表　鳥類　同定標本数(NISP) …… 190
第 45 表　哺乳類　同定標本数(NISP) …… 190
第 46 表　Ⅲ区　遺構出土哺乳類　同定標本数(NISP) …… 190
第 47 表　Ⅴ区　遺構出土哺乳類　同定標本数(NISP) …… 190
第 48 表　Ⅰ区　遺構出土哺乳類　同定標本数(NISP) …… 192
第 49 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 a …… 193
第 50 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 b …… 194
第 51 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 c …… 195
第 52 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 d …… 196
第 53 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 e …… 197
第 54 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 f …… 198
第 55 表　Ⅰ区イノシシ／ブタ臼歯計測値(mm) … 198
第 56 表　Ⅰ区ウシ臼歯計測値(mm) …… 198
第 57 表　Ⅲ区魚類出土状況 …… 199
第 58 表　Ⅳ区魚類出土状況 …… 200
第 59 表　Ⅴ区魚類出土状況 a …… 201
第 60 表　Ⅴ区魚類出土状況 b …… 202
第 61 表　Ⅴ区魚類出土状況 c …… 203
第 62 表　Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a …… 204
第 63 表　Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b …… 205
第 64 表　Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 c …… 206
第 65 表　Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 d …… 207
第 66 表　Ⅳ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a …… 208
第 67 表　Ⅳ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b …… 209
第 68 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a …… 210
第 69 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b …… 211
第 70 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 c …… 212
第 71 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 d …… 213
第 72 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 e …… 214
第 73 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 f …… 215
第 74 表　Ⅲ区ウマ臼歯計測値(mm) …… 216
第 75 表　Ⅲ区鳥類上腕骨計測値(mm) …… 216
第 76 表　Ⅲ区哺乳類四肢骨計測値(mm) …… 216
第 77 表　Ⅳ区ウマ臼歯計測値(mm) …… 216
第 78 表　Ⅳ区鳥類中手骨計測値(mm) …… 216
第 79 表　Ⅳ区哺乳類計測値(mm) …… 216
第 80 表　Ⅳ区哺乳類四肢骨計測値(mm) …… 216
第 81 表　Ⅴ区ウマ臼歯計測値(mm) …… 216
第 82 表　Ⅴ区ニワトリ肢骨計測値(mm) …… 216
第 83 表　Ⅴ区イヌ四肢骨計測値(mm) …… 216
第 84 表　Ⅴ区ネコ四肢骨計測値(mm) …… 216
第 85 表　Ⅴ区ウマ四肢骨計測値(mm) …… 216
第 86 表　Ⅴ区イノシシ／ブタ四肢骨計測値(mm) ‥ 216
第 87 表　Ⅴ区ウシ四肢骨計測値(mm) …… 216
第 88 表　貝類の生息場所類型 …… 217
第 89 表　Ⅲ区石組土坑(SM)　巻貝出土数(NISP) ‥ 217

第 90 表　Ⅲ区石組土坑(SM)　二枚貝出土数(NISP) ····· 217
第 91 表　Ⅴ区石組土坑(SM)　貝類出土数(NISP) ·· 218
第 92 表　ヤコウガイ殻　出土数 ····· 219
第 93 表　ヤコウガイ殻破片　出土数 ····· 219
第 94 表　チョウセンサザエ　出土数(NISP) ····· 222
第 95 表　サラサバテイラ　出土数 ····· 225
第 96 表　ギンタカハマ　出土数 ····· 225
第 97 表　マガキガイ　分類 ····· 225
第 98 表　タカラガイ　分類 ····· 225
第 99 表　人骨出土一覧 ····· 226
第 100 表　Ⅲ区ギンタカハマ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 101 表　Ⅲ区サラサバテイラ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 102 表　Ⅲ区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 103 表　Ⅲ区ヤコウガイ　破片出土状況 ····· 227
第 104 表　Ⅲ区チョウセンサザエ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 105 表　Ⅲ区マガキガイ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 106 表　Ⅲ区タカラガイ科　貝製品 ····· 227
第 107 表　Ⅳ区ギンタカハマ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 108 表　Ⅳ区サラサバテイラ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 109 表　Ⅳ区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類 ····· 227
第 110 表　Ⅳ区ヤコウガイ　破片出土状況 ····· 228
第 111 表　Ⅳ区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類 ····· 228
第 112 表　Ⅳ区マガキガイ殻の欠損状況による分類 228
第 113 表　Ⅳ区タカラガイ科　貝製品 ····· 228
第 114 表　Ⅴ区ギンタカハマ　殻の欠損状況による分類 ····· 228
第 115 表　Ⅴ区サラサバテイラ　殻の欠損状況による分類 ····· 228
第 116 表　Ⅴ区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類 ····· 228
第 117 表　Ⅴ区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類(つづき) ····· 228
第 118 表　Ⅴ区ヤコウガイ　破片出土状況 ····· 228
第 119 表　Ⅴ区ヤコウガイ　破片出土状況(つづき) 229
第 120 表　Ⅴ区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類 ····· 229
第 121 表　Ⅴ区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類(つづき) ····· 229
第 122 表　Ⅴ区マガキガイ殻の欠損状況による分類 ····· 229
第 123 表　Ⅴ区マガキガイ殻の欠損状況による分類(つづき) ····· 229
第 124 表　Ⅴ区タカラガイ科　貝製品 ····· 229
第 125 表　Ⅲ区巻貝出土状況 a ····· 230
第 126 表　Ⅲ区巻貝出土状況 b ····· 231
第 127 表　Ⅳ区巻貝出土状況 a ····· 231
第 128 表　Ⅳ区巻貝出土状況 b ····· 231
第 129 表　Ⅴ区巻貝出土状況 a ····· 231
第 130 表　Ⅴ区巻貝出土状況 b ····· 232
第 131 表　Ⅴ区巻貝出土状況 c ····· 233
第 132 表　Ⅲ区二枚貝・ウニ網出土状況 a ····· 234
第 133 表　Ⅲ区二枚貝・ウニ網出土状況 b ····· 235
第 134 表　Ⅳ区二枚貝・ウニ網出土状況 ····· 236
第 135 表　Ⅴ区二枚貝・ウニ網出土状況 a ····· 237
第 136 表　Ⅴ区二枚貝・ウニ網出土状況 b ····· 238
第 137 表　Ⅲ区出土遺物点数表 a ····· 247
第 138 表　Ⅲ区出土遺物点数表 b ····· 248
第 139 表　Ⅲ区出土遺物点数表 c ····· 249
第 140 表　Ⅲ区出土遺物点数表 d ····· 250
第 141 表　Ⅲ区出土遺物点数表 e ····· 251
第 142 表　Ⅳ区出土遺物点数表 a ····· 252
第 143 表　Ⅳ区出土遺物点数表 b ····· 253
第 144 表　Ⅳ区出土遺物点数表 c ····· 254
第 145 表　Ⅳ区出土遺物点数表 d ····· 255
第 146 表　Ⅴ区出土遺物点数表 a ····· 256
第 147 表　Ⅴ区出土遺物点数表 b ····· 257
第 148 表　Ⅴ区出土遺物点数表 c ····· 258
第 149 表　Ⅴ区出土遺物点数表 d ····· 259
第 150 表　Ⅴ区出土遺物点数表 e ····· 260
第 151 表　Ⅴ区出土遺物点数表 f ····· 261
第 152 表　Ⅴ区出土遺物点数表 g ····· 262
第 153 表　巻貝出土一覧 ····· 321
第 154 表　二枚貝出土一覧 ····· 321

第１章　発掘調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

埋蔵文化財事前審査願　平成 22 年度に沖縄県立首里高等学校(以下、首里高校)の現校舎の老朽化に伴い、耐震化を図る必要性が生じたため、グラウンド部分を含めた首里高校敷地内に新校舎を改築することが決定した。事業者である沖縄県は那覇市教育委員会文化財課(以下、那覇市文化財課)に、「埋蔵文化財事前審査願」を平成 22 年 10 月 7 日付で提出した。これを受けた那覇市文化財課は平成 22 年 11 月 5 日付で沖縄県に対し、「現況不明」とし、今後調整が必要と回答した。

試掘調査と初期の調整　那覇市文化財課は、平成 23 年８月１日から試掘調査を実施し、遺物包含層と遺構を確認した。那覇市文化財課から試掘調査結果の報告を受けた沖縄県教育庁文化財課(以下、県文化財課)は、８月 30 日に現地視察し、８月 31 日には県文化財課、沖縄県教育庁施設課(以下、県施設課)、沖縄県土木建築部施設建築課(以下、県施設建築課)による合同現場調整が行われた。９月９日に現地の首里高校グラウンドにて県文化財課、那覇市文化財課、受注業者である国吉設計、国吉組による話し合いがもたれた。９月 21 日には県施設建築課、県施設課、県文化財課、国吉設計の集った調整会議において、継続して実施される発掘調査に要する経費は原因者である県施設課が負担することになった。なお、グラウンド北側の沈砂池予定地の発掘調査方法及びグラウンド南側の試掘調査は、現石積に近すぎると、石積倒壊の恐れがあることから、掘り下げ対象は約 2.5m 以上離れた場所とすることとなった。さらに、グラウンド北側の普通教室棟改築予定地の発掘調査については、平成 24 年度以降に実施することが決定した。

工事の中止　校舎改築予定地内の埋蔵文化財の広がりを確認するため、平成 23 年 12 月８日までの間、那覇市文化財課が試掘・確認調査を断続的に実施した。その結果、グラウンド全域に遺物及び遺構が確認されたため、工事は中止されることとなった。試掘・確認調査を実施した那覇市文化財課は、本発掘調査を要すると県文化財課に報告し、平成 24 年３月 27 日に調査結果をまとめた報告書を提出した。

中城御殿跡の確認　平成 24 年２月から３月にかけて、県文化財課立ち会いのもと、校舎改築予定地内のグラウンド部分の造成土を掘削したところ、遺構の保存状態が良いことが確認された。遺構の平面測量を実施した上で、発見された石積遺構と 1700 年代に描かれたとされる「首里古地図」を重ね合わせる作業などを行い、当該地が 17 世紀前半に創建された中城御殿跡である可能性が非常に高いことが判明した。

工事中断と不発弾の発見　平成 24 年３月には埋蔵文化財の発見により中止していた工事について、継続が困難と判断され、校舎改築工事の契約が終了した。ここまでの間、不発弾が 17 発発見され、今後の発掘調査や改築工事に伴い、新たに不発弾が発見される可能性が指摘された。

調査実施主体の決定　この間、那覇市文化財課と県施設課は埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、県文化財課が実施主体となり発掘調査を実施することとなった。これを受け、平成 24 年１月 20 日に県文化財課から沖縄県立埋蔵文化財センター(以下、埋蔵文化財センター)へ発掘調査実施の打診があり、発掘調査に伴う必要経費の算出や現地確認などを行うこととなった。

関係者への説明会と要請　平成 24 年度には、首里高校関係者への工事中止説明会や首里高校保護者説明会を実施した。そのような状況の中、首里高校校舎改築の早期実現を求める要請が首里高等学校 PTA 会長、養秀同窓会会長、元首里高校校長会雄志の会会長の連名で、平成 24 年 11 月 19 日付で沖縄県教育長あてに「首里高校校舎改築の早期実現を求める要請」が提出された。

南側石積の写真測量　平成 25 年２月 14 日から平成 25 年３月 29 日の間、県文化財課は、発掘調査に先立ち、南側石積のトレンチ掘削及び石積の写真測量作業を実施した。

文化財保護法に基づく手続き　平成 25・26 年度当初、文化財保護法に基づく諸手続きは、改築工事に伴う範囲として首里高校グラウンド部分のみを対象として行われていた。今後の校舎改築工事は、首里高校の敷地全域に及ぶことから、事業主体である県施設課と県文化財課で調整を行い、改めて文化財保護法に基づく手続きを行うこととなった。

平成 27 年 12 月８日付で沖縄県知事から那覇市教育委員会に対し、首里高校全域を対象とした「埋蔵文化財審査願」が提出された。これを受けた那覇市教育委員会は、平成 28 年１月 26 日付で沖縄県に対し、首里高校改築工事のために申請された敷地内には遺跡があり、保存のための調整が必要との回答を行った。

首里高校敷地内の埋蔵文化財の取り扱いについて那覇市教育委員会は、平成 28 年２月２日付那市文財第 419 号で沖縄県教育委員会に対し、首里高校内の埋蔵文化財について、確認調査等の対応を実施するよう依頼した。これを受け、平成 28 年２月９日付教文第 1646 号で那覇市教育委員会に対し、首里高校校舎改築工事に伴う確認調査等は、沖縄県教育委員会が実施すると回答した。

平成 28 年 10 月 24 日付教施 1123 号により沖縄県知事から那覇市教育委員会経由で、文化財保護法第 94 条

に基づく埋蔵文化財発掘の通知が沖縄県教育委員会へ提出された（進達文書は平成 28 年 10 月 27 日付那市文財第 298 号）。これを受け、平成 28 年 11 月 7 日付教文第 1228 号で、校舎改築に伴う土木工事等は、埋蔵文化財に影響を及ぼすため、工事着手前に発掘調査を実施することに加え、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は、その保存等について別途協議することと定めた。

その後、県施設課、県施設建築課と調整を行い、解体工事に伴う立会調査は、県文化財課と埋蔵文化財センターが行い、本調査は埋蔵文化財センターが実施することとなり、調査に着手した。

工事立会　本調査の他、校舎改築工事の際に、埋蔵文化財へ影響が及ぶ可能性がある際には、立会調査を実施した。立会調査中に確認した遺構の一部は、関係機関との調整の結果、現地保存や記録保存の処置をとった。詳細については、第４節で述べる。

現地保存　発掘調査で確認された各種遺構は、近世期の中城御殿やそれらに関連する遺構について、校舎改築工事に影響しない部分は現地保存することとした。また工事に影響する部分は、校舎設計図や施工図と照らし合わせ、最小限の掘削になるように現地で調整を行いながら調査を実施した。保存方法については第５節で述べる。

第 2 節　調査体制

本報告書の首里高校内埋蔵文化財発掘調査は、平成 29(2017)・平成 30(2018) 年度に現地での発掘作業、平成 29(2017) ～令和 3 (2021) 年度にかけて資料整理作業及び報告書作成を実施した。なお、現地での発掘調査は民間調査組織の支援業務委託を導入した。実施体制は以下の通りである（職名は当時のもの）。

事業形態　沖縄県教育庁施設課令達事業

平成 29（2017）年度（発掘調査・資料整理）

事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　平敷昭人
教育管理統括監　宜野座葵
教育指導統括監　與那嶺善道

事業所管課　沖縄県教育庁文化財課
課長　萩尾俊章
記念物班　班長　上地博
主任専門員　中山晋

事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　金城亀信
総務班　班長　比嘉智博
主任　糸数晃子
調査班　班長　仲座久宜
主任　亀島慎吾
専門員　玉城綾
専門員　田村薫
発掘調査作業　史跡・埋蔵文化財調査員
我喜屋優真、平良和輝、波照間紗希、外間裕一
資料整理作業　埋蔵文化財資料整理員
糸数永子、慶田秀美、鈴木友璃子、照屋芳美、仲間文香、宮城友香

支援業務委託　株式会社アーキジオパシフィック支店
現場代理人　天久朝海
調査員　本村麻里衣

平成 30（2018）年度（発掘調査・資料整理）

事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　平敷昭人
教育管理統括監　宜野座葵
教育指導統括監　與那嶺善道

事業所管課　沖縄県教育庁文化財課
課長　濱口寿夫
記念物班　班長　仲座久宜
主任専門員　羽方誠

事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　登川安政
総務班　班長　比嘉智博
主任　糸数晃子
主事　當山彬
調査班　班長　中山晋
主任　亀島慎吾
専門員　玉城綾
発掘調査作業　史跡・埋蔵文化財調査員
太田樹也、我喜屋優真、小橋川里江、島袋桃子、城間宏次朗、平良和輝、平良悟
資料整理作業　埋蔵文化財資料整理員
糸数永子、上田麻紀子、金城礼子、新城京美、鈴木友璃子、照屋芳美、渡慶次学、仲間文香、宮城友香、玉那覇美野

支援業務委託　（試掘調査）
株式会社アーキジオパシフィック支店
現場代理人　手塚美穂
技師　宮平千春
（本調査）
株式会社アーキジオパシフィック支店
現場代理人　本村麻里衣
調査員　天久朝海

平成 31・令和元（2019）年度（発掘調査・資料整理）

事業主体　沖縄県教育委員会

教育長　平敷昭人
教育管理統括監　儀間秀樹
教育指導統括監　半嶺満
事業所管課　沖縄県教育庁文化財課
課長　濱口寿夫
記念物班　班長　仲座久宜
主任専門員　羽方誠
主任　宮城淳一
事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　城田久嗣
総務班　班長　池田みき子
主事　當山彬
調査班　班長　中山晋
主任　玉城綾
専門員（臨任）　太田樹也
発掘調査作業　史跡・埋蔵文化財調査員
我喜屋優真、島袋桃子、平良和輝、平良悟、波照間紗希
資料整理作業　埋蔵文化財資料整理員
上田麻紀子、金城礼子、新城京美、鈴木友璃子、照屋芳美、比嘉なおみ、手嶋永子、池宮城聡子、宮城友香、仲間文香

令和２（2020）年度（発掘調査・資料整理）
事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　金城　弘昌
教育管理統括監　儀間秀樹
教育指導統括監　半嶺満
事業所管課　沖縄県教育庁文化財課
課長　諸見友重
記念物班　班長　仲座久宜
主任専門員　新垣力
事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　瑞慶覧勝利
総務班　班長　池田みき子
主事　當山彬
調査班　班長　中山晋
主任　亀島慎吾
主任　玉城綾
発掘調査作業　史跡・埋蔵文化財調査員
太田樹也、平良和輝、古堅あゆみ
資料整理作業　埋蔵文化財資料整理員
安次嶺沙織、兼島小百合、金城礼子、新城京美、照屋芳美、上田麻紀子、仲間文香、宮城友香、安里メグ、東仲千夏

令和３（2021）年度（報告書刊行）
事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　金城　弘昌
教育管理統括監　佐次田薫
教育指導統括監　半嶺満
事業所管課　沖縄県教育庁文化財課
課長　諸見友重
記念物班　班長　仲座久宜
主任専門員　新垣力
事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　瑞慶覧勝利
総務班　班長　池田みき子
主任　石原昌一郎
調査班　班長　中山晋
主任　亀島慎吾
主任　玉城綾

発掘調査・資料整理協力者・協力機関
（所属等は当時のもの）
沖縄県立首里高等学校
教育庁施設課
沖縄県立埋蔵文化財センター　根間翔吾、市川里恵、大城友理華、大村由美子、津多恵、比嘉美智子
那覇市市民文化部文化財課　島弘、樋口麻子、吉田健太
西村貞雄（琉球大学）、池田榮史（琉球大学）、後藤雅彦（琉球大学）、上原静（沖縄国際大学）、丸山真史（東海大学）、大庭康時（福岡市経済観光局文化財活用部）、當眞嗣一（沖縄考古学会会長）、江上幹子（沖縄考古学会）、山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）

第３節　調査経過

過年度の調査概要　首里高校のグラウンド部分において、平成 25 年 7 月 29 日から平成 27 年 2 月 27 日までの約 19 か月間、現地での発掘調査を実施した。調査の結果、多くの石積遺構や井戸、ゴミ捨て場跡、敷地造成の痕跡がみられ、当該地が中城御殿跡であることが判明した。加えて中城御殿が創建される以前にも当該地で生活した人々がいたことが判明した。

調査中には、一般県民を対象とした現地説明会を平成 25・26 年度に各 1 回ずつ実施した。また、首里高校社会科の授業の一環として在学生を対象とした現地説明会を随時実施するとともに、首里高校関係者を対象とした現地説明会を行った。

発掘調査の際に出土した遺構の一部は、その歴史的価値や保存状態の良さから、関係機関と協議を重ね、現地保存に至った。なお、この協議により、今後の首里高校内に所在する埋蔵文化財については、現地保存が可能な場合は、関係機関と調整等を行いながら工事や調査を進めていくこととなった。

現地保存方法等も含めた平成 25・26 年度の調査成果については、沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第

93 集『中城御殿跡（首里高校内）－首里高校校舎改築に伴う発掘調査－』に収録している。

調査区　平成 29(2017)・平成 30(2018) 年度に現地での発掘作業を実施した際に、調査区をⅢ区～Ⅵ区まで設定した。平成 29(2017) 年度は、Ⅲ・Ⅳ区、平成 30 (2018) 年度はⅤ・Ⅵ区の調査を実施した。今回の報告では、遺構及び出土遺物量や、継続して調査を実施している状況から、便宜的にⅢ～Ⅴ区までの調査成果について報告する。

平成 29 年度本調査の概要　平成 29 年度の調査は８月 24 日から年度を繰り越した平成 30 年４月 27 日まで実施した。調査前には、旧校舎の地中構造物が残存しており、これらの解体工事を実施する際に、立会調査を実施した。地中基礎と地中梁の間で溝跡を確認したため、記録保存調査を行った。この立会調査の結果や過年度までの遺構検出状況から、地中構造物の間に遺構が残存している可能性が高いため、解体工事を実施する際には立会調査を実施することとした。

発掘調査の支援業務委託として平成 29 年５月 15 日から平成 30 年３月 16 日まで「平成 29 年度　首里高校内埋蔵文化財発掘調査に伴う支援業務委託」契約を株式会社アーキジオパシフィック支店と締結した。その後、関係機関との調整を行いながら調査を実施するなか、校舎改築工事の計画変更や想定深度以上の部分で遺構を検出し、調査期間を延長する必要性が生じた。そのため、受注業者と協議を行い、平成 30 年３月９日及び同年３月 27 日に計２回の契約期間延長の改訂契約を締結し、平成 30 年４月 30 日に業務を完了した。

また、平成 29 年度中に平成 30 年度以降の本調査実施予定地で試掘調査を計画していたが、校舎改築の計画変更に伴い、調査を次年度に延期することとなったため、調査費用の次年度予算への繰越手続きを行った。

平成 29 年度に確認した主な遺構は、中城御殿の北側石垣や門跡、石組土坑などである。

平成 30 年度試掘調査の概要　調査着手前は、旧校舎が残った状態だったため、これらの解体工事を実施している最中に複数回現地確認を行った。解体工事に関しては、地中部分に遺構が残存している可能性が高いことから、上部躯体と下部躯体の解体工事を別々に実施するよう関係機関へ依頼した。

平成 29 年度から計画変更を行った試掘調査は、平成 30 年９月 18 日から 11 月７日まで実施した。試掘調査の支援業務委託として平成 30 年７月 23 日から平成 30 年９月 28 日まで「平成 30 年度　首里高校内埋蔵文化財発掘調査（試掘調査）に伴う支援業務委託」契約を株式会社アーキジオパシフィック支店と締結した。調査期間中、校舎改築工事の計画変更に伴い、調査期間を延長する必要性が生じたことから、平成 30 年９月 26 日に契約期間延長の改訂契約を締結し、平成 30 年 11 月 30 日に業務を完了した。

試掘調査は、旧校舎の基礎や梁の間を対象に実施した。この試掘調査で、次年度以降に調査実施計画があるⅦ区部分において堆積土の厚さや遺構の残存状況を把握した。

平成 30 年度本調査の概要　本調査は、前述した試掘調査と並行しながら、９月 12 日に着手し、年度を繰り越した平成 31 年４月 24 日に完了した。発掘調査の支援業務委託として平成 29 年７月 23 日から平成 31 年３月 29 日まで「平成 30 年度　首里高校内埋蔵文化財発掘調査（本調査）に伴う支援業務委託」契約を株式会社アーキジオパシフィック支店と締結した。調査を実施する中、中城御殿の東側に隣接する道跡を検出したが、遺構直上まで旧校舎の基礎や地中梁等が残存している状況で、遺構全体を確認するため、地中構造物の解体及び撤去の必要性が生じた。そこで、平成 30 年 11 月 30 日に、数量等変更の協議（第１回）を行い、地中構造物の解体及び撤去作業を実施した。

また、当初想定していた以上の遺構数が確認され、調査期間を延長する必要性が生じたため、平成 31 年３月 28 日に契約期間延長の改訂契約を締結し、平成 31 年４月 26 日に業務を完了した。

平成 30 年度の調査では、中城御殿東側の石牆や隣接する道跡、櫨園跡に伴う遺構等を確認した。

文化財保護法に基づく届出　調査着手後には、文化財保護法第 99 条の規定により、県文化財課へ着手報告を行った（平成 29 年９月 28 日付け埋文第 399 号、平成 30 年９月 18 日付け埋文第 441 号）。調査終了後には終了報告を行った（平成 30 年５月２日付け埋文第 97 号、平成 31 年４月 26 日付け埋文第 127 号）。発掘調査により発見された遺物については、文化財保護法第 100 条２に基づき、県文化財課に埋蔵文化財発見届を提出した（平成 30 年５月 28 日付け埋文第 102 号、平成 31 年４月 26 日付け埋文第 126 号）。

普及活動　一般県民を対象とした現地説明会を平成 29 年度分の調査成果は、平成 30 年４月 14 日に午前１回、午後２回の計３回説明会を実施した。

平成 30 年度分の調査成果は、平成 31 年３月２日、同年３月９日に、午前１回、午後２回の計６回の説明会を実施した。発掘調査中ということで、安全確保等の制限があり、人数制限を設けて説明会を実施したが、県民の関心が高いこともあり、参加希望定員は応募期間が始まってすぐに定員に達する状況だった。定員に達した後も参加希望の連絡が多かった。安全面を考慮しつつ、より多くの県民に公開できるよう、説明会の開催方法等を

検討する必要があり、今後の課題である。

首里高校の敷地内で調査を実施しているため、調査進捗に応じて首里高校関係者や首里高校生に対して現地案内や現地説明会を実施した。

調査中には、考古学を専門とする研究者や県内及び県外の埋蔵文化財に携わる職員とともに現地確認を行い、遺跡の評価を行う際の助言を受けた。特に、那覇市市民文化部文化財課（旧那覇市教育委員会文化財課。平成 25 年４月１日から市長部局へ移行。）の職員には、遺跡を管理する当該市町村の関係者として、何度か現地で調査進捗や遺構内容の確認を行い、情報共有を図った。

日誌抄　以下、調査経過を調査日誌抄にて示す。また、発掘調査時は多くの遺構を確認し、調査を実施したが、時期決定やそのほか遺跡の本質的な価値づけを行う際に重要となる遺構の概要を中心にまとめる。

発掘調査

平成 29（2017）年度

７月３日　旧県立博物館跡地に現場事務所設置のための準備を実施。

８月 11 日　校舎建築工事に伴い、立会調査を実施。アスファルトや旧校舎の基礎跡等を確認。

14 日　立会調査部分で、石列遺構を確認。石列遺構は SX3001 と遺構番号を付与。建築工事を一時中断し、遺構調査に着手。

15 日　民間調査組織を導入して、石列遺構の検出及び記録作業を実施。

19 日　記録作業が完了した SX3001 の掘削及び、校舎建築工事の再開。

24 日　建築工事終了し、センターに現場引き渡し。Ⅲ区の発掘調査着手。

25 日　磁気探査を実施。

28 日　Ⅲ区の重機掘削開始。

30 日　各種遺構を検出。記録作業と掘削作業（重機・人力）を並行して調査を継続。

９月８日　SA3001 の上部を検出。石積遺構と判断した。

20 日　SA3001 の根石を確認。SA3001 を境目として、北側と南側では根石部分の堆積土の様相が異なることが判明。

10 月６日　SA3001 の北側部分で岩盤が平たく整形された部分を確認。SA3001 の構築時に岩盤を整形していることが判明。

10 日　SA3001 の根石周辺で、近世の堆積層が根石下にもぐることを確認。

13 日　那覇市文化財課の島氏、樋口氏、吉田氏が現地確認。

18 日　調査が完了した部分に遺構保護のための保護砂を敷き詰めた。

23 日　調査区北側を埋戻し。

24 日　これまでの調査成果や、過年度調査の成果と合わせ、SA3001 は中城御殿の北側石牆である可能性が高いと判断した。調査完了写真撮影を実施。

25 日　調査区北側の埋戻し。遺構がある部分は保護砂を敷き詰めた後に調査発生土で埋戻した。

11 月１日　Ⅲ区の西側を掘削開始。

21 日　近代頃の遺構を確認。記録作業を行いつつ、掘削を継続

24 日　近世期の造成土を確認。一部先行トレンチを設けて下層部分の確認を行ったところ、グスク時代の層を確認した。

12 月５日　石組土坑（SM）や石敷（SS）等を確認。

７日　SA3001 が西側に広がっていることを確認。近代期の堆積層を除去後、SM3001 を検出。近世期と考えられる層を削平後に構築されていることから、近世期のなかでも新しい時期の遺構の可能性があることを確認。

18 日　SM3001 構築以前の石敷遺構を検出。

20 日　石敷遺構の下部から石積遺構を検出。

22 日　SM3001 の発掘作業。

26 日　SM3001 の完掘。Ⅲ区西側の基本層序壁面の記録作業を実施。

27 日　現場養生。

１月 10 日　Ⅲ区西側の完掘写真撮影。順次記録作業を実施。那覇市文化財課の樋口氏、吉田氏が現地確認。県立博物館・美術館の山崎氏が現地視察。

11 日　那覇市文化財課の島氏が現地確認。沖縄考古学会の當眞会長、江上役員、後藤役員、上原役員が現地視察。

12 日　琉球大学の池田教授が現地視察。

16 日　検出した遺構を保護砂で覆い、埋戻し作業を開始。

17 日　Ⅳ区の表土掘削開始。50 ㎝掘削する毎に随時磁気探査を実施。

30 日　SA4001 の上部を検出。

２月２日　SA4001 の北側に炭層を確認。ガラス片等が多く混入することから、戦後に炭等を片付けた際の土と判断。

６日　SA4001 の裏込め部分の検出。

７日　Ⅳ区南側の近世段階の層検出。

９日　SA4001 の根石がⅢ 12 層上に設置してい

る状況を確認。
13 日　SA4002、SM4002 を検出。
27 日　SA4001 の立面記録。
３月１日　SA4001 の裏込め部分を掘削して状況を確認した。確認後は土嚢袋を詰めて保護し、埋戻しを行った。
９日　層序確認用トレンチの完掘。これらの状況から近世段階の造成土の状況が判明。校舎建築の影響のない部分については、掘削を行わず現地保存することとした。
14 日　Ⅳ区北側の掘削開始。Ⅳ区南側の遺構について記録作業を実施。
15 日　SA4003 の検出。
20 日　SA4001 の西側部分を検出。
22 日　西村貞雄氏に SA4001 の現地確認及び指導を受ける
23 日　SA4001 の西側部分を保護砂で覆い、埋戻しを開始。
27 日　調査区東壁の記録作業。
29 日　上原静氏に SA4001 の現地確認及び指導を受ける
４月５日　SA4003 の全体状況確認。歩道に用いられた石積であると判断した。
10 日　一般現地説明会前に、当センター所長を含めた職員による現地打ち合わせ。
11 日　調査完了状況の空撮を実施。
14 日　一般県民対象の現地説明会を実施。
16 日　市町村関係者対象の現地説明会を実施。
17 日　首里高校生を対象とした現地説明会を実施予定だったが、雨天のため室内にて遺物等の見学会を実施した。
18 日　検出した遺構及び調査区全体を保護砂で覆い、埋戻しを開始。
19 日　SA4001 北側部分も保護砂で覆い保護。
20 日　Ⅳ区南側の土層確認用トレンチ内部はすべて保護砂で埋戻した。
26 日　埋戻し作業が完了。
27 日　仮囲いや現場事務所等の撤去完了。平成 29 年度の発掘調査を完了した。

平成 30（2018）年度

８月７日　Ⅴ区にあたる旧管理・特別教室棟の解体工事の立会調査を実施。
８日　SD5001 を検出。
９日　SD5001 及び関連する石敷遺構を確認。近世期の遺構と判断。
10 日　層序確認用のトレンチを設定し、記録作業を実施。
14 日　SD5001 部分は今回の解体工事では撤去しないで工事を進めることを協議。遺構を残した状況で解体工事を進めることとなった。
20 日　地中梁等を除去後に、柱穴等を確認。記録作業を実施。
22 日　立会調査完了。現場引き渡し等について協議し、９月 12 日から調査着手することとなった。
９月 12 日　発掘調査に着手。磁気探査を実施。
18 日　表土掘削開始。試掘調査に着手。Ⅴ区にトレンチ１～２を設定。Ⅶ区にトレンチ３～ 10 までを設定した。
21 日　トレンチ１の層序確認。トレンチ２で SS5001 の検出。
26 日　台風 24 号接近のため、調査現場の台風対策を実施。
10 月３日　台風 25 号接近のため、調査現場の台風対策を実施。
10 日　トレンチ２の下層確認を実施。トレンチ２の調査完了。トレンチ３で近世期の遺構を検出。
16 日　トレンチ３、４の記録作業。
22 日　トレンチ１、７の遺構検出。
23 日　トレンチ５の遺構検出。トレンチ７の下層確認及び遺構検出。
24 日　トレンチ６の遺構検出。
25 日　県文化財課の濱口課長、仲座班長、羽方主任専門員が現地確認。
26 日　トレンチ３～７の埋戻し。掘削した面は保護砂で覆い、保護砂の上には調査発生土を埋戻した。
29 日　トレンチ８～ 10 の調査開始。
30 日　トレンチ８～ 10 の遺構検出。
11 月６日　トレンチ８～ 10 の埋戻し。掘削した面は保護砂で覆い、保護砂の上には調査発生土を埋戻した。
７日　試掘調査完了。調査区北壁の記録作業。
９日　近代、近世２面、グスク時代１面の合計４面の遺構面があることが判明。
27 日　那覇市文化財課の職員が現地確認。
29 日　トレンチ１内で SM5002 の検出。
12 月６日　Ⅴ区西側に残存していた旧校舎の基礎解体及び撤去。
17 日　SM5002 の半截。ヤコウガイ片などが多量に出土。
19 日　SD5001 に隣接する道跡（SF5001）の検出。

この道跡を切る形で SD5004 を検出した。
27 日　SM5002 の完掘。昨年度検出した SA3001 の東側部分を検出。
1 月 7 日　昨年度検出した SA4001 の東側部分を検出。遺構名は新たに SA5005 と付与した。
9 日　近世期の遺構が確認できているので、校舎改築に影響のある部分までの掘削を実施することとなった。
21 日　SF5001 の全体確認。
22 日　高麗大学考古研究所関係者 15 名が現地視察。
24 日　Ⅴ区の空撮。
25 日　SF5001 の全体状況の写真撮影。中城御殿が機能していた当時の中城御殿の石牆や隣接する道跡、道に伴う溝跡と判断した。
30 日　一部調査完了部分に保護砂を搬入。インターンシップの一環で仲西中学生２名を受入。
2 月 7 日　現場に残存している旧校舎の地中梁を解体及び撤去。VI区の表土掘削
12 日　VI区の地山面で柱穴跡や石組土坑等の遺構を多数確認
14 日　トレンチ１に保護砂搬入。VI区の近代以降の堆積土が残っている部分の掘削。
25 日　SA5004 の南側部分の掘削。東海大学丸山氏、学生１名現地確認。
26 日　RBC の取材を受ける。SF5001 を中心とした調査成果を説明した。
3 月 2 日　一般県民対象の現地説明会を実施。
4 日　校舎改築に影響がある高さまで掘削した部分に、下層確認トレンチを設定して下層確認を実施。
5 日　市町村埋蔵文化財関係者対象の現地説明会を実施。
9 日　一般県民対象の現地説明会を実施。
11 日　グスク時代の遺構面を確認した部分で、階段状に段を構築している部分を確認。VI区の近世期の遺構検出。
13 日　SA5003 の石積の高さが２m 以上になることを確認した。
18 日　当センター職員、恩納村教育委員会、与那原町教育委員会職員による現地視察。
19 日　首里高校職員が現地見学。
20 日　校舎改築の際の校舎基礎新設部分の位置出しを現地で実施。基礎部分にかかる遺構を記録保存し、それ以外の部分は現地保存することとなった。
25 日　SA5002 の断ち割り。
26 日　Ⅴ区北側部分の調査完了。
4 月 3 日　SA5004 部分に保護砂を搬入。
4 日　Ⅴ区北側に保護砂を搬入し、埋戻し開始。
9 日　当センター所長を含めた職員が現地視察。
17 日　VI区に保護砂搬入し、埋戻し開始。Ⅴ区埋戻し完了。
19 日　VI区埋戻し完了。
24 日　現場事務所等の撤去完了。平成 30(2018) 年度の発掘調査完了。

整理等作業

報告書掲載事項　今回の報告書作成にあたり、遺構及び遺構出土遺物を掲載することを最優先とした。その中でもⅢ区の石組土坑(SM)など、出土遺物組成が良好で、年代観等を把握するうえで重要な遺構を中心に、選定を行った。

今回報告するⅢ～Ⅴ区は、調査時期が複数年にまたがり、各調査区が別々に調査していることに加え、人為的な造成により同時期の層でも土色や混入物等が異なることから、層序把握が困難だった。そのため、層序の対応関係等について、堆積層の由来や造成方法、遺物組成などを詳細に検討した結果、対応層序について把握することが出来た。これらの層序の年代観を示すため、包含層出土遺物を掲載することとした。

掲載遺物　図化可能遺物と、年代観の把握が可能な中国産陶磁器、本土産陶磁器等を中心に選定した。また、遺物組成等がわかるように遺物を選定した。図化困難な遺物でも、遺構の時期を示す遺物等の存在や、遺構内での遺物組成を示すため、第５章で各遺構や層序の出土遺物の点数表を示すこととした。

自然遺物　脊椎動物遺体及び貝類遺体が多く出土した。これらの遺物は、当遺跡の食性等を考える上で重要なことから、現生標本を用いて同定作業を行い、結果を集計した。同定作業の際には、丸山真史氏(東海大学)の指導を得た。

人為的割り取りの見られる貝類　自然遺物の同定・集計作業を進めるなかで、貝類遺体のなかに、食料残滓とは異なる人為的割り取りのみられるものが確認できた。これらは、首里城跡銭蔵東地区や東村跡等で類例資料があることから、両遺跡出土資料を参考にして検討を行うこととした。

報告書の刊行計画の変更　報告書は、令和２年度中に刊行予定だったが、遺物実測、写真撮影等に想定以上に時間を要したため、報告書刊行の計画を令和３年度へ変更し、それに伴う印刷製本費について教育庁施設課と調整後、令和３年度への繰越を行った。

1　Ⅲ区磁気探査状況

2　Ⅲ区表土掘削状況

3　Ⅲ区重機掘削状況

4　Ⅴ区重機掘削状況

5　Ⅴ区校舎基礎撤去状況

6　Ⅲ区遺構検出状況

7　Ⅳ区遺構内掘削状況

8　Ⅲ区遺構保護砂搬入状況

第１図　調査経過１

1　首里高校生インターンシップ①

2　首里高校生インターンシップ②

3　首里高校関係者現地説明会

4　首里高校生遺跡内容説明会

5　市町村埋蔵文化財関係者対象の現地説明会

6　一般県民対象の現地説明会

7　上原 静教授（沖縄国際大学）現地指導

8　遺物洗浄

第２図　調査経過２

第４節　立会調査

第１項　経緯と経過

首里高校内で確認された遺構は、現地保存が可能な部分に関しては地中保存している。

調査が完了し、遺構保護した後に埋戻しを実施したが、校舎改築工事に伴い、遺構付近まで掘削を行う場合があった。その際には、関係機関と事前調整を行い、当センター職員及び教育庁文化財課職員の立会調査を実施することとなった。立会調査時には、遺構への影響の有無を確認した。一部､遺構を掘削する必要がある部分は、掘削を最小限にするよう調整し、記録保存調査を実施した。

立会調査は、平成 28 年度から随時実施し、令和３年度現在も校舎改築工事に伴い実施している。

立会調査実施経過については、第１表に示す。

第２項　立会調査成果

立会調査成果については、調査実施順に報告する。立会調査の結果については、工事に伴う包含層や遺構の掘削状況について３段階の判別を行った。

１　旧理科棟部分

旧理科棟基礎埋設物の解体工事に伴い、立会調査を実施した。旧理科棟浄化槽を解体後、側面に中城御殿に伴う造成土層を確認した。これより下部にも中城御殿に伴う堆積層を確認したが、この掘削面で解体工事が完了したため、これら堆積層の掘削は行っていない。

旧理科棟のフーチング及び地中梁部分について、解体を行うために掘削した範囲で中城御殿に伴う堆積層は確認されなかった。

第１表　工事立会一覧

№	調査年	西暦	期間	立会箇所・工事	埋蔵文化財への影響
1	平成 28	2016	12 月 14 日～ 19 日	旧理科棟（調査Ⅲ区にあたる）	A
2	平成 29	2017	1 月 10 日～ 17 日	Ⅱ区	A
3	平成 29	2017	3 月 30 日	A 型側溝設置工事	A
4	平成 29	2017	4 月 14 日	綾門大道 旧校舎南西部（案内看板撤去）	A
5	平成 29	2017	6 月 8 日	旧普通教室棟南側 電気配管	A
6	平成 29	2017	6 月 30 日	綾門大道 街灯移設工事	B
7	平成 29	2017	8 月 11 日～ 23 日	Ⅲ区 校舎基礎梁掘削（SD3001 確認）	C
8	平成 29	2017	9 月 21 日～ 10 月 6 日	南門（校舎側・綾門大道側）の掘削	B
9	平成 29	2017	10 月 11 日	水道管埋設場所の掘削（２か所）	C
10	平成 29	2017	10 月 13 日	南門（校舎側）既設石積の撤去工事	C
11	平成 29	2017	11 月 1 日	南門（南西側）入口部分の排水桝設置工事	A
12	平成 30	2018	5 月 10 日	Ⅳ区（現Ⅶ区）部分の土掘削	A
13	平成 30	2018	6 月 27 日～ 7 月 27 日	校舎（旧管理棟）上屋部分解体	A
14	平成 30	2018	8 月 7 日～ 22 日	Ⅴ区校舎（旧管理棟）基礎部分掘削 先行調査として緊急発掘調査を実施	C
15	令和元	2019	5 月 30 日～ 6 月 18 日	Ⅴ・Ⅵ区　校舎基礎梁撤去工事	B
16	令和元	2019	7 月 9 日～ 12 日	H 鋼打設工事	B
17	令和元	2019	9 月 30 日・10 月 11 日	新校舎（東棟）根切工事	B
18	令和 2	2020	2 月 10 日～ 17 日	旧校舎基礎梁撤去工事	B
19	令和 2	2020	2 月 25 日～ 4 月 20 日	汚水桝移設工事（試掘調査実施）	C
20	令和 2	2020	4 月 28 日～ 5 月 15 日	新校舎（東棟）根切工事・既設汚水管撤去工事	C
21	令和 2	2020	7 月 30 日～ 31 日	新設雨水管設置工事	A

A：影響なし。もしくは包含層・遺構の確認のみ　　B：包含層の掘削を伴う　　C：遺構の掘削を伴う

２　発掘調査Ⅱ区

校舎改築工事の進捗に伴い、今後の発掘調査を実施することが困難と考えられる部分について、発掘調査を実施した。このとき発掘調査を実施した部分をⅡ区としている。

調査開始前の地表面の標高は89.6ｍでそこから約1.5ｍの掘削を実施し、標高88.1ｍまでの遺構及び堆積層の確認を実施した。

調査の結果、調査を実施した深度までは客土で構成されている状況だった。平成24年度に不発弾処理壕があった部分に重なっていることもあり、攪乱が激しかった。

一部で中城御殿に伴う造成土と思われる層序を確認したが、Ⅱ区部分は標高88.1ｍ以下については校舎改築工事の影響が及ばないことから、これ以上の掘削は行わず、地中に保存することとした（第４図１）。

３　A型側溝設置工事

首里高校敷地の西側にA型側溝を設置する部分があり、立会調査を実施した。当該部分は、平成25・26年度の調査時には、現在の首里高校擁壁が崩落する可能性があったことから、調査が実施不能だった部分にあたる。

調査の結果、平成25・26年度調査時のⅠ層とした客土のみを確認した。地中に残存する埋蔵文化財への影響はなかった。

４　綾門大道　旧校舎南西部　案内看板撤去工事

首里高校敷地の南側の道路部分は、綾門大道にあたることが那覇市教育委員会の試掘調査により確認されている（那覇市教育委員会 平成27年３月９日 埋蔵文化財事前審査報告書）。

綾門大道の部分で、改築に伴う工事を実施する際には、立会調査を実施することとしていたため、案内看板撤去工事の際に立会調査を実施した。

案内看板は、地中まで基礎が延びておらず、地表面近くに設置されているものだったため、地中に残存する埋蔵文化財への影響はなかった。

５　旧普通教室棟南側

電気配管の設置工事に伴う立会調査。工事関係者との調整の結果、既存石積や地表面の掘削は行わず、地表に露出する形での設置となった。埋蔵文化財への影響はなかった。

６　綾門大道（首里高校南西部）

街灯移設工事に伴う立会調査を実施した。既設街灯の移設地点を掘削した。オーガーを用いて円柱状に掘削を行った（第４図２）。

当該地の周辺は、平成27年２月23日～26日に那覇市教育委員会が試掘調査を実施しており、その調査成果を参考とした。

調査成果については、オーガーでの掘削だったため、写真記録及び断面模式図を作成して記録した。

調査の結果、地山を含めて５枚の層序を確認した。１～３層は、アスファルトなどの混入を根拠に、近代以降の層と判断した。４層は暗褐色土で礫が混入していた。４層は、那覇市の試掘調査で暗褐色混礫層として確認されており、綾門大道に関連する層だと考えられるが、整地の痕跡等は確認出来なかった。その下部は地山だった。４層からの出土遺物はなかった。

７　Ⅲ区 校舎基礎梁撤去工事

調査区のⅢ区にあたる部分の校舎基礎梁の撤去工事に伴い立会調査を実施した。基礎梁と基礎梁の残されたわずかな範囲で溝跡（SD3001）を確認した（第４図３）。

支援業務委託した民間調査組織の作業員を導入し、検出及び記録作業を実施した。後に実施したⅢ区の調査成果と合わせて検討した結果、確認した溝跡は近代以降の首里高校に関連する溝跡だと判断した。

調査後は、遺構の掘削を実施した。

８　南門（校舎側・綾門大道側）の掘削

南門側のコンクリート壁撤去に伴う立会調査を実施した。コンクリート壁の下部からは石積遺構を確認した。また、一部では石敷遺構も確認した（第４図４・５）。これらの遺構に伴う遺物は確認できなかったため、遺構の使用年代等は不明である。

当該部分では、排水桝の設置工事があったため、確認した石積や石敷遺構については保護土で覆ったあとに施工した。

９　水道管埋設場所の掘削

水道管設置に伴う立会調査。１か所は、包含層や遺構まで到達しない深度での工事だった。

もう１か所は、西側の石積擁壁を掘削した後、石積内部の掘削を実施した。その結果、石積内部ではグスク時代と考えられる包含層及び柱穴跡を確認した（第４図６）。石積擁壁は、既設の水道管の上部に設置されていることから現代の石積擁壁であることが判明した。

確認した部分は、これ以上の掘削がなかったため、写真記録をとり、調査を終了した。

10　南門（校舎側）既設石積の撤去工事

今回対象となる既設石積に関しては、試掘調査や写真測量の結果、近代以降の石積と考えられていたため、工事影響部分の石積撤去を実施した。築石及び裏込めの掘削を実施した（第４図７・８）。

11　南門（南西側）入口部分の排水桝設置工事

工事のため、掘削等を実施したが工事影響範囲がすべて攪乱層の範囲でおさまった。

12　Ⅳ区（現Ⅶ区）の土掘削

既設のプレハブやトンブロックの撤去に伴う工事だった。遺構や包含層に及ばない範囲での工事だった。

13　校舎（旧管理棟）上屋部分解体

第３節で述べたとおり、通常の解体工事とは異なり、上部躯体と下部躯体の解体を分けて実施した。基本的に上部躯体の解体だったので、遺構や包含層へ及ぶ掘削等はなかった。

14　Ｖ区校舎（旧管理棟）基礎部分掘削

普通教室棟建築に伴い、深い深度まで掘削が必要な部分を先行して工事する必要があることから、立会調査を実施した。

この際、道跡及び排水溝跡を確認した（SF5001 及び SD5001）また、グスク時代と考えられる柱穴跡を確認した（第５図１・２）。

これらの道跡は、首里古地図に描かれる道跡等の可能性が高かったことから、関係機関と調整を行い、当該部分の掘削は行わず、後の本調査で詳細に調査を行うこととなった。柱穴跡部分は、旧校舎の基礎等が近くまで及んでいたため、撤去のために掘削する必要があることから、記録保存調査を実施した。

このとき確認した道跡の遺構は、Ｖ区の本調査の際に改めて記録作業等を実施した。

15　Ｖ・VI区校舎基礎梁撤去工事

旧校舎の基礎梁棟を撤去する際に、遺構に抵触する可能性があることから立会調査を実施した。基礎梁周辺のみを掘削する工事方法で実施したため、当該部分での遺構掘削等は発生しなかった。

16　Ｈ鋼打設工事

首里高校敷地内の北西側に工事用地確保のため、Ｈ鋼打設を実施した。調査区の端にあたる部分で安全上の対策が困難な箇所で未調査部分への打設となった。

オーガーによる掘削だったため、掘削土で土色の変化や遺物の有無を確認した。その結果、掘削が近世の包含層やグスク時代の包含層まで及んでいることが確認できた。

17　新校舎（東棟）部分根切工事

新校舎建設部分の根切工事を実施する際に、遺構や包含層に抵触する可能性があったことから、立会調査を実施した。

一部の包含層の掘削があったが、遺構に影響が及ぶ範囲での工事はなかった。

18　旧校舎基礎梁撤去工事

旧校舎の基礎梁撤去の際に遺構や包含層に抵触する可能性があったことから立会調査を実施した。

一部包含層の掘削が発生し、遺構の近くまで影響が及ぶ部分があった。遺構部分は掘削せず、工事を実施することとなった。

19　汚水桝移設工事（試掘調査実施）

汚水桝の設置工事に伴う立会調査を実施した。２か所の立会調査を行い、それぞれ包含層及び遺構を確認した。

１地点　汚水桝を設置するための掘削部分で、溝跡（SD5008）を確認した。この遺構は、溝に使用される石材や漆喰等の状況から、近代の首里高校に関連する溝跡と考えられる。記録後、掘削を行ったところ、遺構下部から道跡及び溝跡を確認した。これらの遺構はＶ区で確認した道跡（SF5001）にあたる。確認した遺構は、工事の影響を受けないことが判明したため、記録後に現地で埋戻して地中保存している（第５図４）。

２地点　溝跡（SD7001）及び石組土坑（SM7002）を検出した。溝跡は（SD7001）は溝石１点確認したのみであるが、溝石の後方部の包含層の状況等から近世期の溝跡と考えられる。この溝石は工事影響範囲内にあったため、記録後は遺構掘削を行った。

石組土坑（SM7002）は、周辺調査区の様相と合わせると、グスク～近世期の遺構と考えられる（第５図３）。この遺構も工事影響範囲内にあったため、記録後に石組土坑の上から１段目の石を掘削した。２段目以降の石は現地で地中保存している。

20　新校舎（東棟）根切工事・既設汚水管撤去工事

新校舎（東棟）建設に伴う根切工事があるため立会調査を実施した。当該部分は、調査区Ｖ区にあたり、当初設計で遺構に抵触する範囲が判明していた部分もあり、調査中に遺構を一部掘削している部分もあった。遺構にかなり近い状況で校舎基礎等を設置している部分もあるため、遺構保護のための防湿シート等を設置した。遺構と校舎基礎等の状況については、第５節で詳述する。工事影響範囲にあった遺構は、SA4001、SA5001、SA5002、SD5001、SD5002、SD5008、SF5001 である（第５図５～８）。石積遺構や道跡に伴う遺構が主である。

21　新設雨水管設置工事

新設雨水管設置工事に伴い、立会調査を実施した。

立会調査の結果、工事影響範囲内に包含層及び遺構が含まれていなかったため、立会調査を完了した。

第３図　工事立会箇所（番号は第１表工事立会一覧の番号に対応）

1　№２ Ⅱ区 完掘状況（南東から）

2　№６ 新設街灯部分 堆積状況（東から）

3　№７ Ⅲ区 SD3001 検出状況

4　№８ 南門 石積検出状況（南東から）

5　№８ 南門 石積・石敷検出状況（南から）

6　№９ 水道管埋設部分 堆積状況（南から）

7　№10 南門既設石積 掘削状況（北から）

8　№10 南門既設石積 掘削状況（北東から）

第４図　工事立会１

1　№ 14 SF5001 検出状況（北から）

2　№ 14 SP5001 ～ 5027 完掘状況（西から）

3　№ 19 SF5001・SD5004 検出状況（南西から）

4　№ 19 SD7001・SM7002 検出状況（北東から）

5　№ 20 SA5003 検出状況（西から）

6　№ 20 地山検出（南東から）

7　№ 20 SA5002 防湿シート敷設状況（南から）

8　№ 20 フーチング範囲（南西から）

第５図　工事立会２

第５節　遺構の現地保存

第１項　現地保存に至る経緯

経緯　遺構の現地保存に至る経緯については、『中城御殿跡（首里高校内）』（沖縄県立埋蔵文化財センター2017）に記載しているので、参照されたい。前回の調査と同様、重要な遺構が確認された際には、関係機関の協力を得て、現地保存が可能な部分があった。

保護方法　発掘調査において検出した遺構を保護するにあたり、当センターで実施した遺構保護事例として、伊是名村具志川島遺跡、船越原遺跡の保護方法を参考にした。両遺跡で実施された、保護砂で埋戻す方法を採用して遺構保護を実施した。

遺構保護後の現地　遺構保護が完了した後は、開発工事側に引き渡した。改築工事が開始されると、それに伴い掘削等を実施するが、遺構保護砂が確認された際には、連絡を受け、現地確認を行うことがあった。材質の異なる保護砂を用いることで、誤って遺構が掘削されることがなかったので、保護砂の採用は有効だったといえる。

これらの事例をもとに、Ⅲ～Ⅴ区までの遺構保護については、遺構を保護砂で覆う方法を採用した。

第２項　遺構保護

Ⅲ区　東側と西側に調査区を分けて調査を実施し、東側部分が完了後、埋戻しを行い、埋戻し完了後に西側部分の調査を実施した。埋戻しは調査発生土を用いたが、遺構がある部分に関しては、保護砂を用いた。

埋戻しの材料　遺構を覆う部分の保護材料として、材料名：路盤材料－種類・呼び方：海砂（白砂）（以下、保護砂）を採用した。この際、塩抜きされた海砂を使用することとした（第６図）【塩分（NaCl％）0.001（規格・基準 0.04％以下）（一財）沖縄県建設技術センター　管理番号 201795408　平成 29 年４月 12 日付】。

遺構保護　Ⅲ区で確認された遺構の保護は、調査区内の窪地に保護砂を充填する形で実施した。保護砂で遺構を覆った後は、調査発生土で埋戻しを行った（第７図１～３）。

Ⅳ区　Ⅲ区で用いた保護砂を使用して遺構保護を行った。SA4001 を境として北側部分から遺構保護を開始した。SA4001 の根石を覆う高さまで調査区全体に保護砂を充填し、その後 SA4001 の北面を埋戻さないように法面を残す形で調査発生土で埋戻しを行い、SA4001 の天端付近まで全体的に埋戻した段階（第７図４）で、SA4001 の北面部分に保護砂を充填した（第８図１）。SA4001 の南側は、全体的に保護砂を充填し、最後に SA4001 の中央部分（最も残存高がある部分）に保護砂を盛る形で遺構保護を実施した。その後、調査区全体を調査発生土で埋戻した。

Ⅴ区　Ⅲ区と同様の保護砂（第６図）を採用した（材料名：路盤材料－種類・呼び方：海砂（白砂）【塩分（NaCl％）0.003（規格・基準 0.04％以下）（一財）沖縄県建設技術センター　管理番号 201809142　平成 30 年４月 23 日付】。

道跡（SF5001）　西側に土嚢で小堤を設け、保護砂を搬入し、東側部分は調査発生土で埋戻しを行った（第８図２）。

校舎基礎間の遺構保護　トレンチ部分等の遺構保護は、土嚢やベニヤ板等を用いて区画をつくり、その内部を保護砂で充填した（第８図３）。

窪地の遺構　調査によって窪地（トレンチ等も含む）となった部分の遺構は、内部を保護砂で充填する形で遺構保護を行った（第８図４・５）。

SA5002　土嚢で周囲に小堤をつくり、その内部を保護砂で充填した（第８図６）。

SA5004　SA5004 の南側に調査発生土で小堤をつくり、その内部を保護砂で充填した（第８図７）。

岩盤部分　調査により岩盤を露出した部分は、保護砂や調査発生土で埋戻しを実施しなかったため、埋戻し完了時には露出している（第８図８）

第３項　校舎基礎と遺構

校舎基礎　新校舎の基礎杭及びフーチング、梁などの配置図については、県施設課より提供していただいた。それを遺構図に重ねたのが第９～ 11 図である。設計上、基礎杭やフーチング、梁の位置が主要な遺構にかかる場合は、関係機関と調整を行い、遺構への影響が出ない部分へ設置位置等を変更していただいた。変更が出来ない部分は、記録保存調査を実施することとなった。

遺構と校舎基礎の重ね図（見通し断面図）を第 12・13 図に示す。第 13 図には断面部を示す平面図を掲載しており、赤線は新校舎断面で、緑線が対応する遺構の断面を示している

道跡（SF5001 等）　校舎設計上、遺構に影響の出る部分は、記録保存調査を実施した（第 14 図）。このときの記録保存調査は、基礎杭やフーチングにあたる部分のみをトレンチ調査を実施した。そのため、トレンチ部以外は現地保存することができた。また、梁の部分は遺構に接触しない部分もあったため、接触しない部分はそのまま現地保存している。なお、SF5001 路面については、一部基礎杭が打設されている部分がある。

１－１’断面（第 15 図）　西側部分では、立会調査時に近代の溝跡が確認できたが、新しい時代の遺構だったため、記録後に遺構を取り外した。その下部では SF5001 の路面を検出した。東側の SA5001 の石積の一部が基礎

にあたるため、記録後に取り外した。SD5001 の石敷等はそのまま現地保存できた。

２－２’断面（第 15 図）　梁の下部で一部、SA5001 に非常に近い部分にあたるため、当該部分は防湿シートで覆い、現地保存している。

３－３’断面（第 17 図）　基礎や梁により、SA5001 や SA5003、SD5002、SF5001 の路面の一部が接触する部分について、記録後に掘削を行った。

４－４’断面（第 15 図）　梁にあたる部分だったが、遺構への影響はなかった。

５－５’断面（第 16 図）　西側部分は、校舎基礎にあたる部分で、SA5003 の一部を掘削した。東側部分は、SD5001 にあたる部分だが、石敷等が残存していない部分だった。また、梁が遺構に接触しないように、形状変更していただいた。

６－６’断面（第 16 図）　校舎基礎と梁の部分だが、遺構への影響はなかった。

７－７’断面（第 17 図）　校舎基礎と梁の部分で SA5001、SD5001、SD5008、SF5001 の路面部分の一部を記録後、掘削している。

８－８’断面（第 16 図）　校舎基礎により、SA5001 にあたる部分があり、記録後に掘削した。その際、基礎部分からわずかに外れる部分は防湿シートで覆い現地保存している。また、梁が遺構に接触しないように、形状変更していただいた。

SA5002（第 18 図）　石積遺構に梁があたる部分があるため、その部分を断ち割り、断面構造を記録した。

９－９’断面（第 18 図）　遺構に接触する部分もあったが、一部、梁の形状変更により、造成部分が残存している。

10 － 10’見通し図（第 18 図）　遺構に接触する部分は記録後に掘削している。梁に近い部分は防湿シートで覆い、現地保存している。

SA4001（第 19 図）　遺構を掘削していないが、遺構に近い部分に梁が来るため、その部分に関して防湿シートで覆い、遺構保護を実施した。

第 6 図　遺構保護砂

1　Ⅲ区西 保護砂埋戻し状況（北東から）

2　Ⅲ区東 保護砂埋戻し状況（南西から）

3　SA3001 保護砂埋戻し状況（南西から）

4　Ⅳ区北 保護砂埋戻し状況（北東から）

第 7 図　遺構保護１

1　SA4001 埋戻し状況（保護砂＋残土）（北東から）

2　SF5001 保護砂埋戻し状況（南東から）

3　Ⅴ区トレンチ１ 保護砂埋戻し状況（南西から）

4　Ⅴ区トレンチ８保護砂埋戻し状況（南西から）

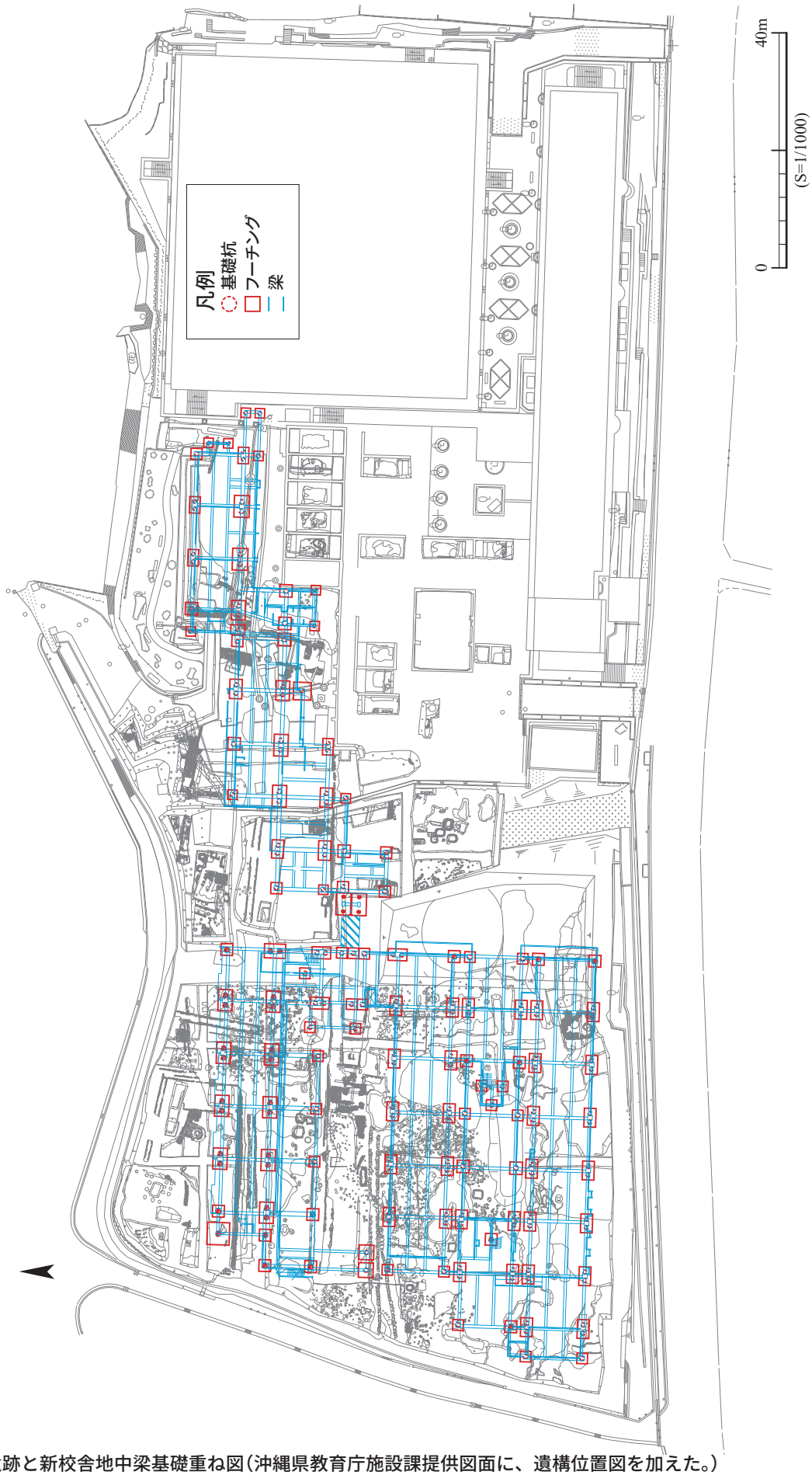
5　SD5002 保護砂埋戻し状況（南東から）

6　SA5002 保護砂埋戻し状況（南東から）

7　SA5004 保護砂埋戻し状況（南東から）

8　Ⅴ区 埋戻し完了状況（南東から）

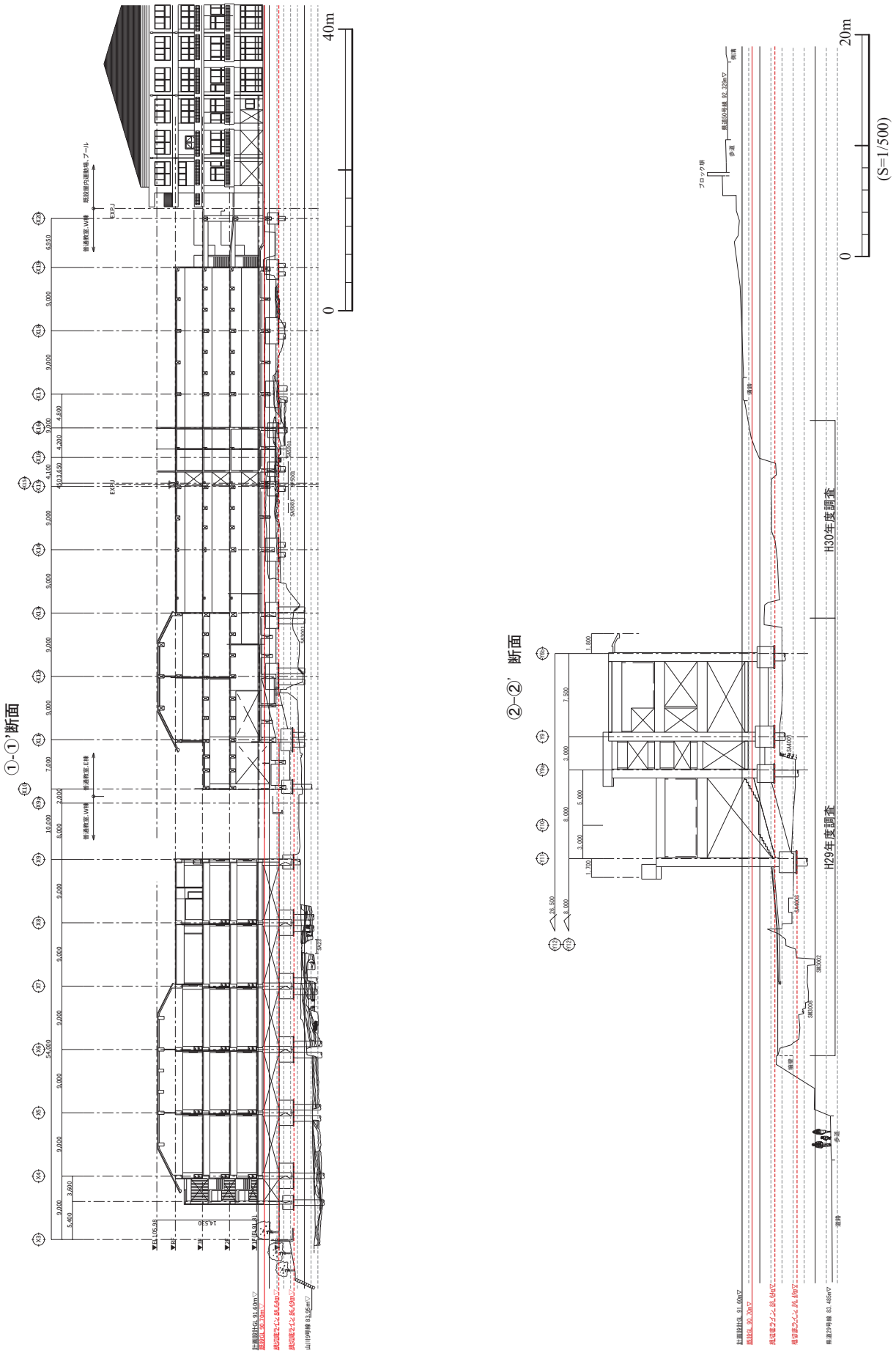
第８図　遺構保護２



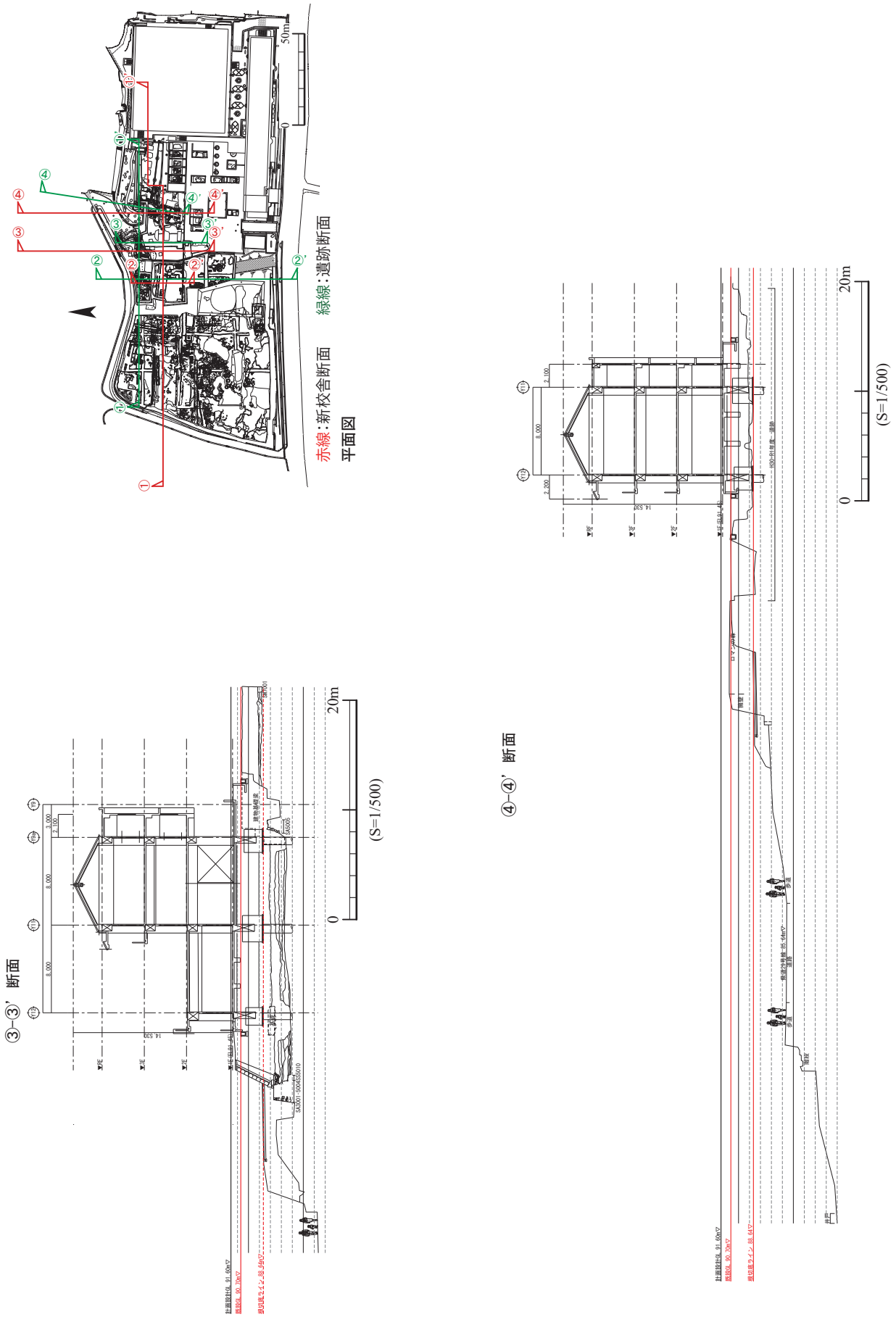
第９図　遺跡と新校舎地中梁基礎重ね図（沖縄県教育庁施設課提供図面に、遺構位置図を加えた。）

第 10 図　遺跡と校舎基礎重ね図（Ｉ区）（沖縄県教育庁施設課提供図面に、遺構位置図を加えた。）

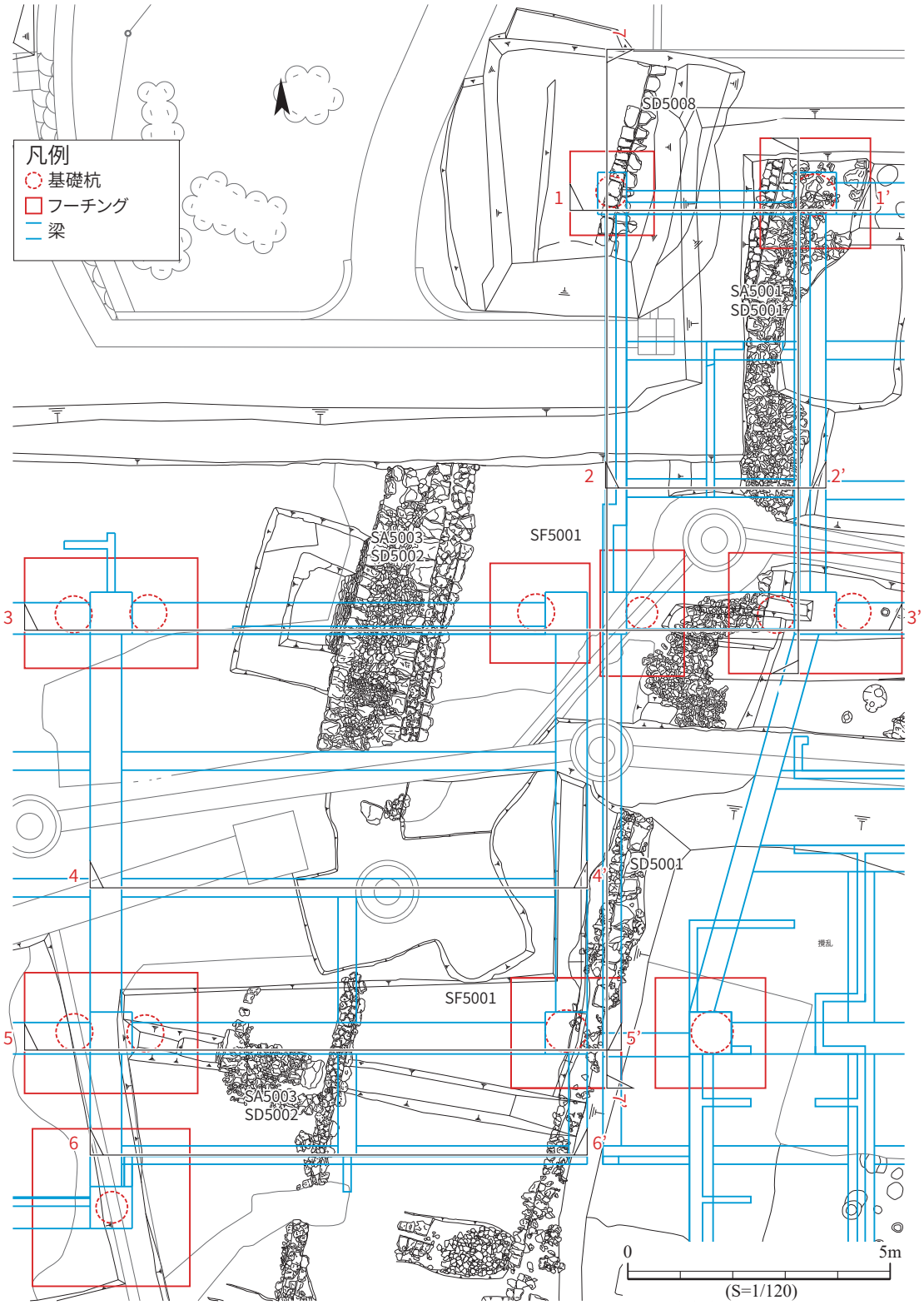
第 11 図　遺跡と校舎基礎重ね図（III区、IV区、Ⅴ区）（沖縄県教育庁施設課提供図面に、遺構位置図を加えた。）



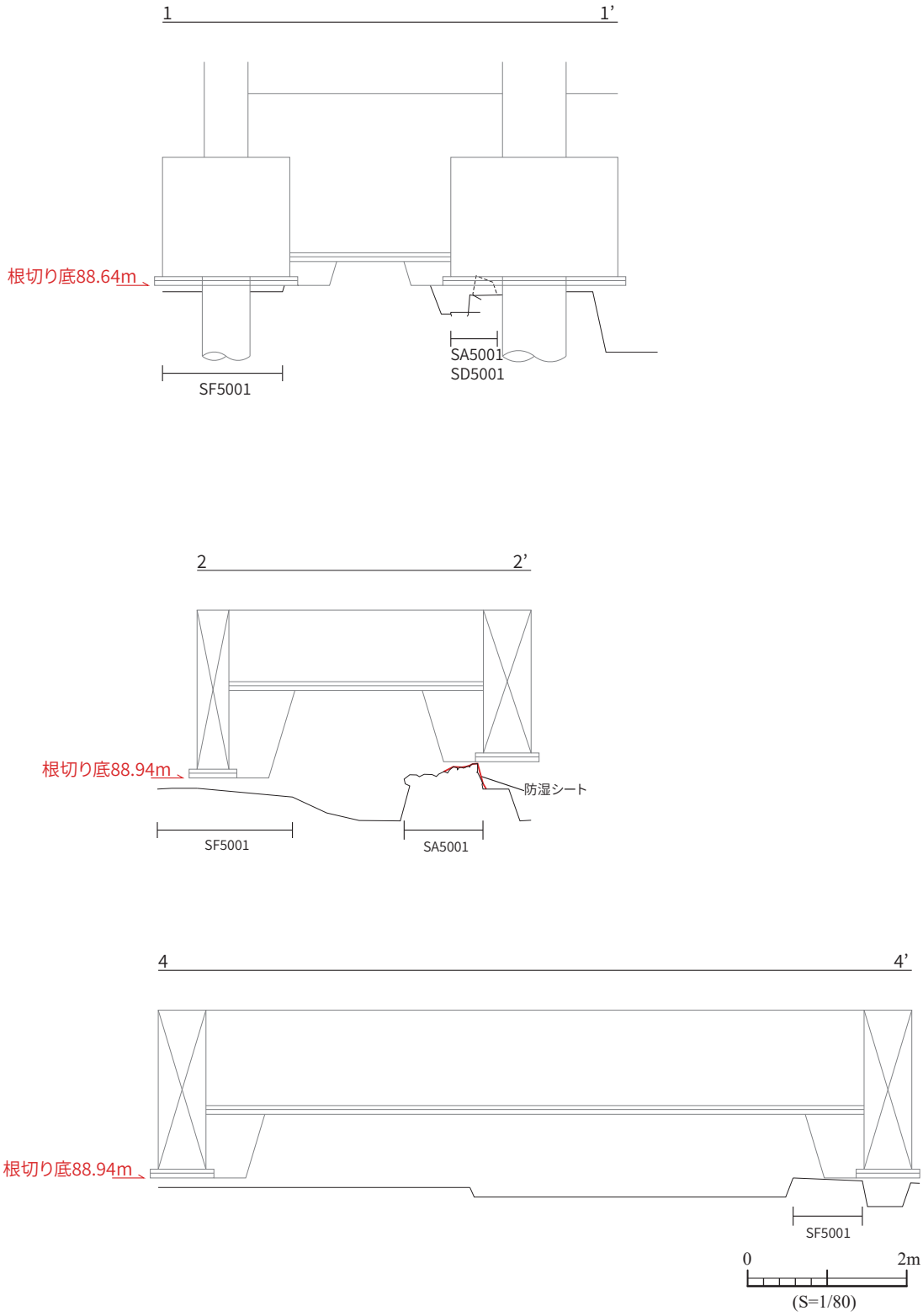
第 12 図　校舎断面図と遺構保護高さ１（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）



第 13 図　校舎断面図と遺構保護高さ２（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）

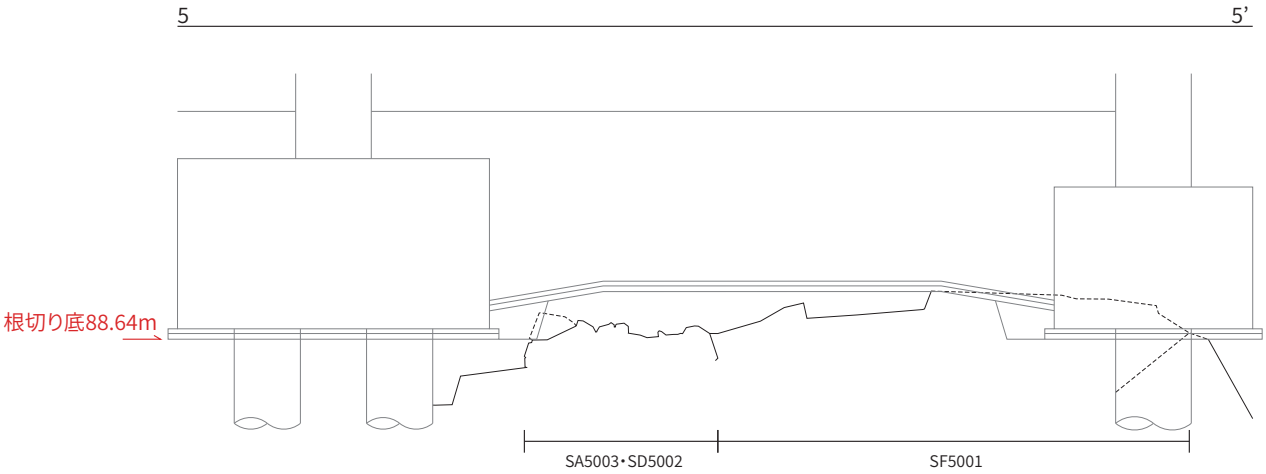


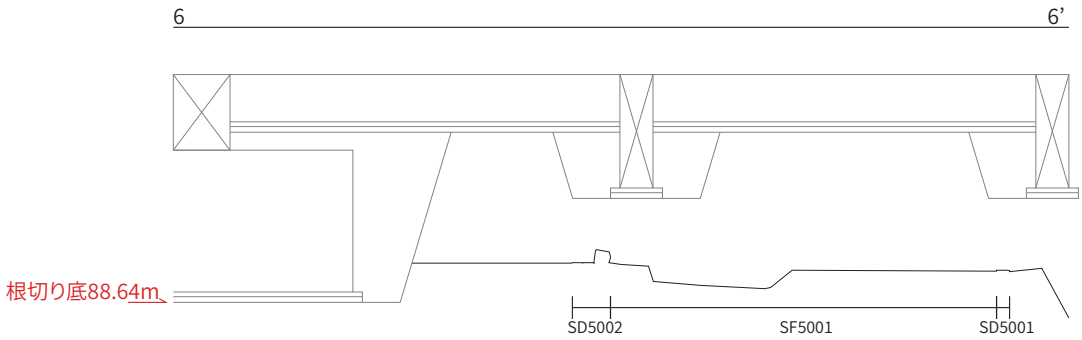
第 14 図　校舎基礎地中梁と遺構１（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺構位置図を加えた。）

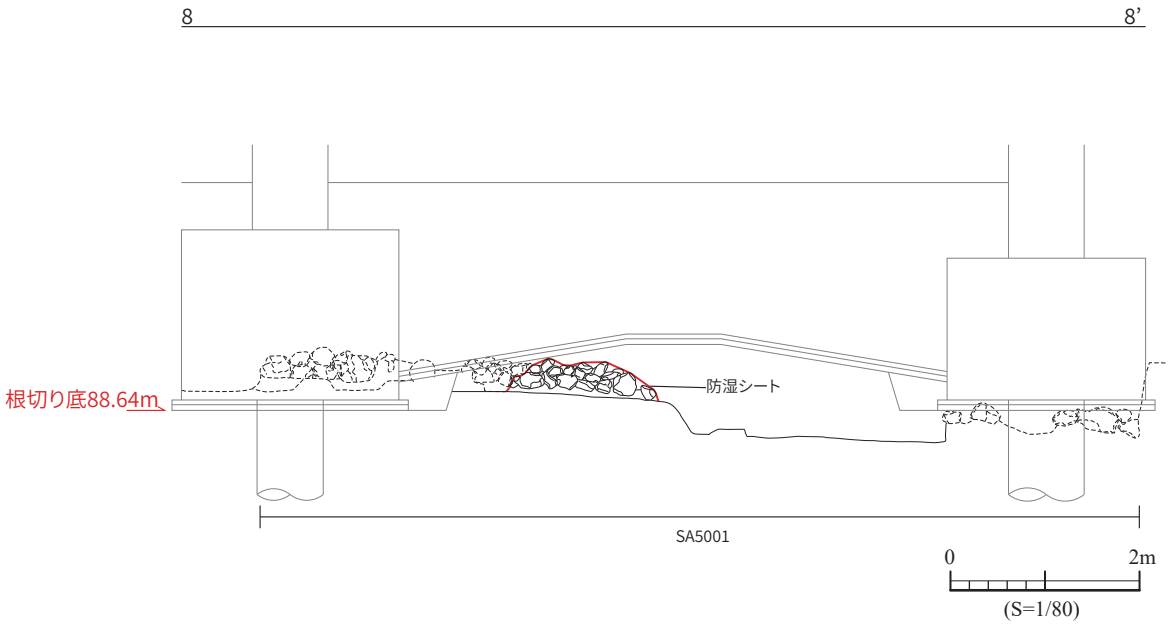


凡例：破線は記録保存部分

第 15 図　校舎基礎地中梁と遺構２（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）

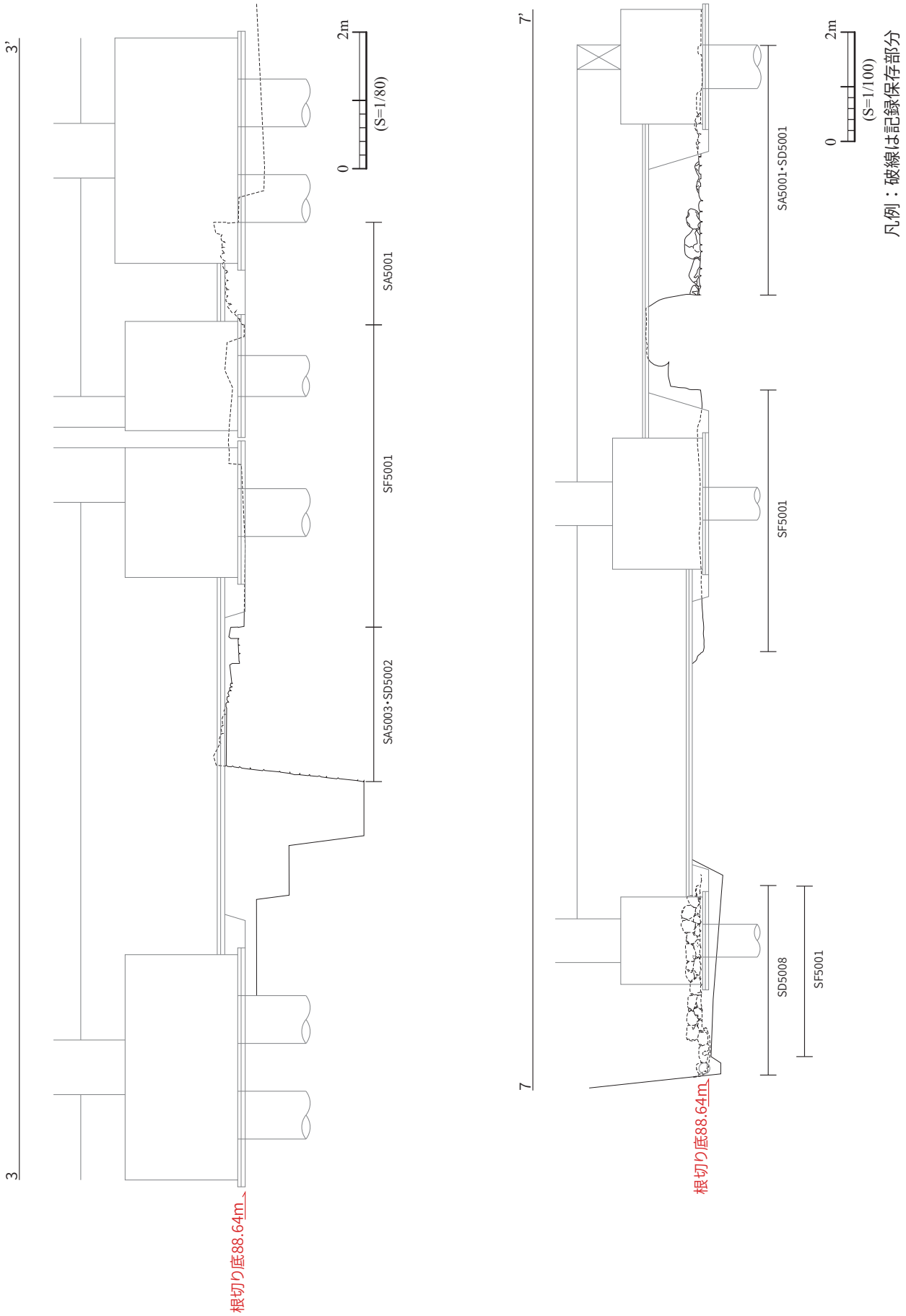




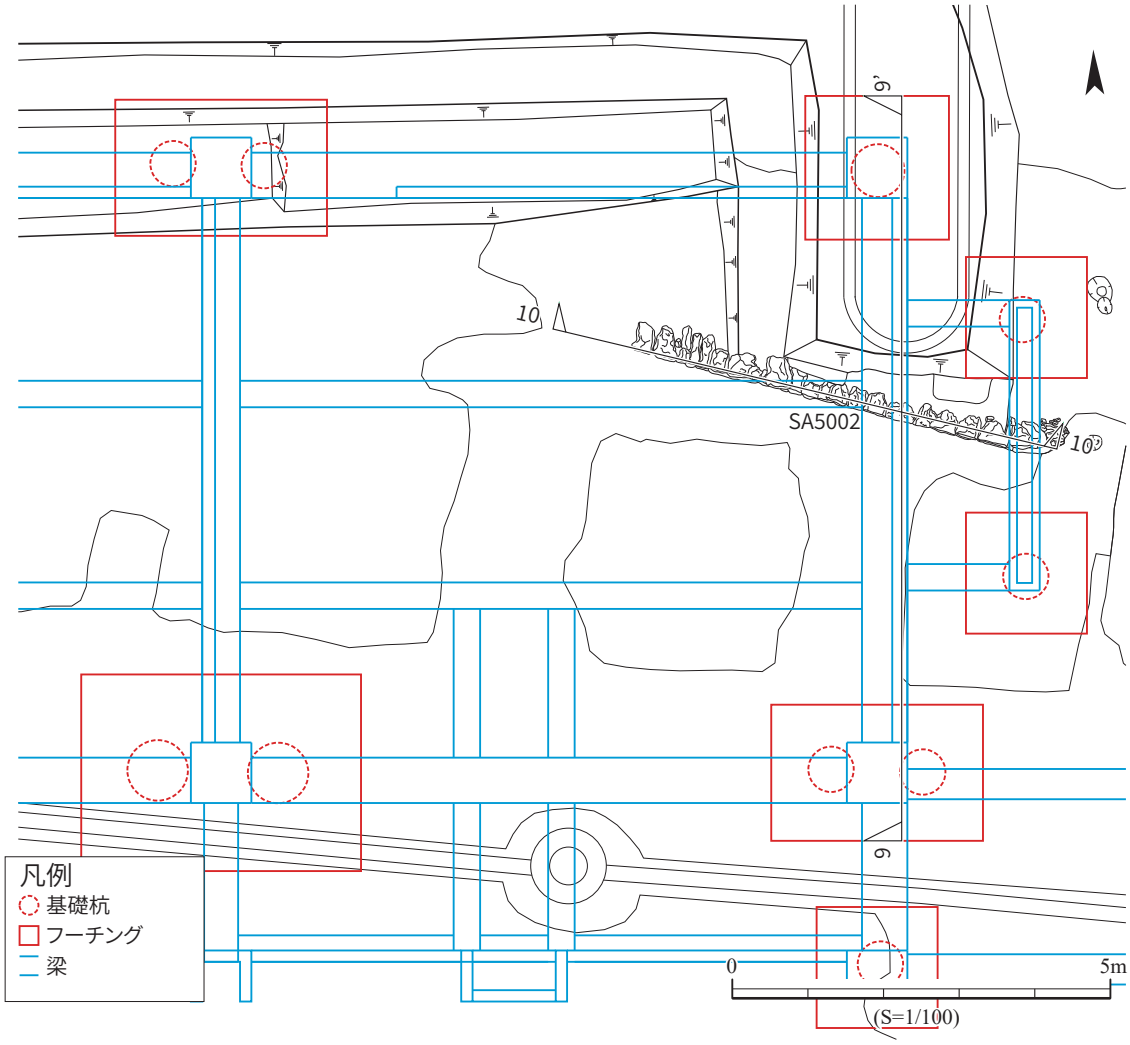


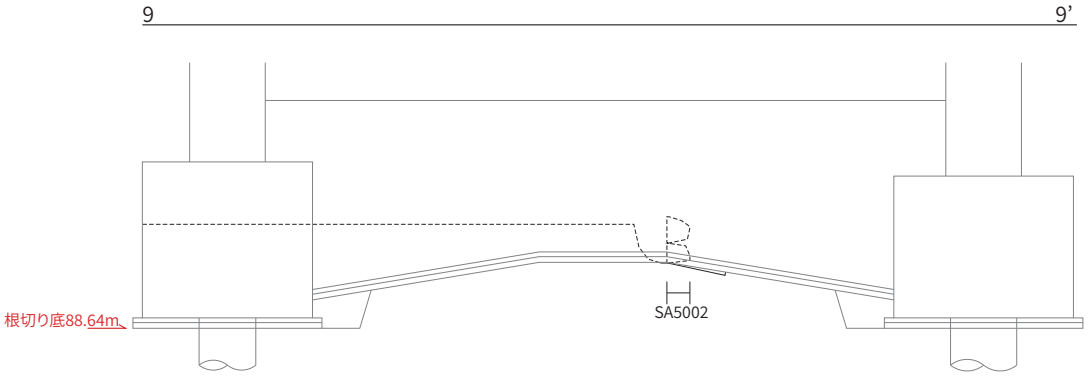
凡例：破線は記録保存部分

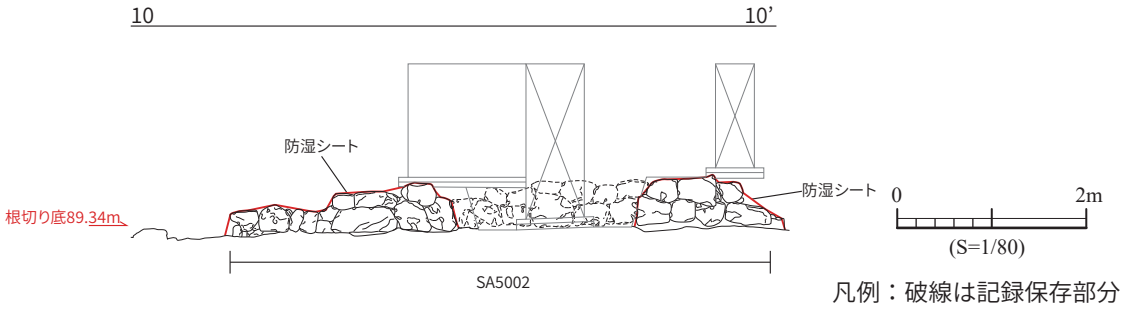
第 16 図　校舎基礎地中梁と遺構３（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）



第 17 図　校舎基礎地中梁と遺構４（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）

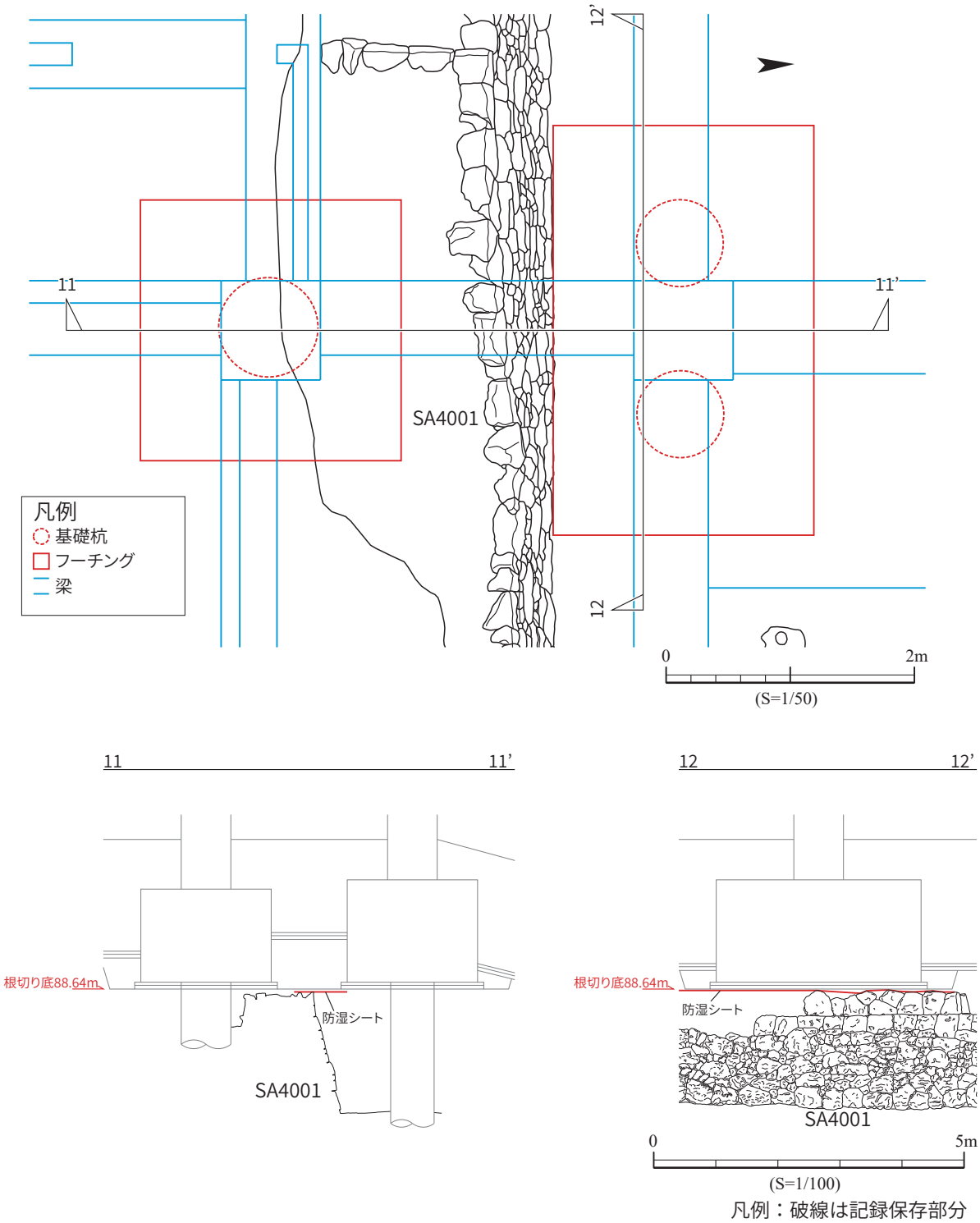






凡例：破線は記録保存部分

第 18 図　校舎基礎地中梁と遺構５（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）



第 19 図　校舎基礎地中梁と遺構６（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

平成 29・30 年度の調査では、過年度から継続して発掘調査を実施している中城御殿跡に加え、櫨園跡とされる部分が対象となっている。

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切（現在の中城村、北中城村）及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。中城御殿は 1621 ～ 1640 年、17 世紀前半に王府の別邸である大美御殿の西側、現首里高等学校敷地内（首里真和志町）に創建された。その後、明治３（1870）年に旧県立博物館跡地（首里大中町）に移転することが決まり、明治８（1875）年に移転する。ここでは、今回の調査対象となる移転する以前の中城御殿について記す。

遺跡の位置　中城御殿跡及び櫨園跡は、沖縄本島南部の那覇市首里真和志町２丁目に所在し、標高約 90 ～ 100 mの台地縁辺部及び斜面地に位置する。

基盤層　この基盤を構成しているのは、地質時代の第四紀更新世（180 － 160 万年前～１万年前）に区分される琉球石灰岩で、遺跡全体に広がりが確認できた。下位には、鮮新世（500 万年前～160 万年前）から中新世（2,300 万年前～500 万年前）に区分される島尻層群が堆積している。表層を成す琉球石灰岩は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）の面でとめられ、両者の境界から湧き出すこととなる。平成 25・26 年度の調査時に確認した中城御殿跡関連の、井戸や水を溜めるための遺構は、クチャ層まで掘り込まれ、現在でも水が湧き出すほど豊富な水量を誇っている。

平成 29・30 年度の調査では、改築工事に影響のある部分で掘削を止めたため、クチャ層まで確認した部分はない。

遺跡地からの景観　当該遺跡地からは、首里城跡や移転後の中城御殿跡の所在する場所に比べわずかに標高が低い位置に所在している。当遺跡が盛行していた時期には、ここから首里城を見上げるような場所だったことが想定される。

第２節　歴史的環境

平成 29・30 年度の調査では、過年度から継続して発掘調査を実施している中城御殿跡に加え、首里古地図に描かれる櫨園跡とされる部分を対象として発掘調査を実施した。

中城御殿　次期国王の世子殿として、尚豊王代（在位 1621 ～ 1640 年）の崇禎年間に綾門大道の北側に創建されたと『琉球国旧記』にある（伊波普猷ほか編纂 1972）。1700 年代に描かれたとされる「首里古地図」をみると、東側には大美御殿、北側には金武按司の屋敷が描かれている。『中山世鑑』によると大美御殿は王府の別邸として 1548 年に創建され（沖縄県教育庁文化財課 1983）、王家の冠婚葬祭などの行事を行う場所でもあった。金武按司は 1526 年に首里に移転した（金武町誌編纂委員 1983）とされている。大美御殿の東側には浦添按司に関係する場所が描かれ、その北側には美里御殿、かじ木植所（櫨園）がそれぞれ描かれている。美里御殿（みさとうどぅん）は、尚穆王の五男・尚恪、美里王子朝規（1770 年－1846 年）を元祖とするとされていることから、1770 年以降に美里御殿が所在することが想定されるが、首里古地図には、寺関係や王府関係の屋敷は詳細に描かれるが、各按司の土地については、詳細に描かれていない。

創建時期　中城御殿は、1621 ～ 1640 年代に創建とされたことから、大美御殿や金武按司などの敷地の間に創建されたことになる。創建以前の当該地の敷地について記載のある文献史料は不明である。

関連する可能性のある史料として『李朝実録』世祖８（1462）年２月の項に済州島の梁成等が琉球に漂着した記事があり、その中で「王子は国王と同処せず、別に他所に在り。」とある（池谷ほか 2005）。首里高校敷地内を指しているかは不明だが、15 世紀中頃には、王子は別の場所に屋敷があったことが考えられる。

創建年代については、『李朝実録』の記事等で 15 世紀中頃にはすでに中城御殿があったことと捉え、尚豊王代の崇禎年間に創建されたというのは正確ではないという意見もある（高良 1996）。

中城御殿の拡張　そのような中、「（省略）寛永中尚豊第二子、佐敷王子尚文の為に営建されたもので、当時は規模それほど大ではなかったと見えて、延宝（康熙十六年）（1677 年）五月の例寄に、「中城御殿狭有之候間、玉城御殿・豊見城御屋敷相済候様被追仰付候こと」とある。玉城・豊見城両家の屋敷を繰り入れて取り広げた意味である。…」（東恩納寛惇 1950「中城殿」『南島風土記』：138 頁３－８行）の項目に記載がある。このことから、中城御殿が創建された当初は、大美御殿や金武按司の屋敷のみならず、玉城・豊見城両家の屋敷に隣接していたことが想定される。その後、中城御殿の敷地を玉城・豊見城両家の屋敷地を取り入れる形で拡張したことが伺える。発掘調査の結果でも幾度かの造成を繰り返し、屋敷敷地を拡張している様子が確認されている。遺跡の堆積状況から、南から北へと拡張している様子がうかがえ

ることから、北側部分に両家の屋敷地があった可能性が高いが、それを示す遺構は明確に確認できていない。

首里古地図　首里古地図の情報から読み取ると、描かれた当時の中城御殿は、四方を石積に囲まれ、屋敷内に南北を区分するような形で東西に石積が描かれている。この石積には２か所石積が途切れている部分があり、一か所は道が描かれ、もう一か所は何も描かれていない。

屋敷配置　屋敷の外への出入り口は北側に１か所、南側に１か所、東側に１か所描かれている。北側と東側は石積が途切れている表現のみだが、南側は入口を引き込むような形で石積が描かれ、東側に門の屋根のようなものが描かれている。このことから、中城御殿の中心に入るための入口は南側にあったと考えられる。その門をくぐると、一つの建物があり、それを超えると御庭（うなー）のような広場があり北側及び南側に建物が描かれている。広場の東側には建物が描かれ、階段のようなものが描かれていることから、まわりよりも高い場所に建物があったことが想定される。このことから、基壇があったことやこの部分が屋敷の中心部で正殿であったことが考えられる。この屋敷配置は首里城の御庭や北殿、南殿、正殿の立地とよく類似している。

屋敷入口　入口について注目すると、隣接する大美御殿と比べ、入口までの引き込み道が長く描かれる。これは高低差があり、それをスロープ状に引き込んでいることが想定される。

今回、綾門大道の一部を試掘した部分があり、那覇市文化財課の教示も得ながら綾門大道の遺構面と考えられる層を確認した。この層と平成 25・26 年度の調査成果を合わせると、綾門大道と中城御殿の機能面には高低差があることが判明している。

中城御殿の移転　明治元（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。この場所の選定理由については、1868 年に久米村の地理師である与儀親雲上ら３人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされている（球陽 2206 号　球陽研究会編 1974）。選定立地から設計・施工までが計画的に行われたとされていることから、中城御殿の移転する理由のひとつとして、風水的な屋敷の立地が大きく関わっていたことが想定される。明治８（1875）年に移転した後の当該地は薬草園になり、その後、国学が置かれたとされる。

移転後の土地利用　中城御殿の移転の際には、使用できる資材などを移転地に搬入したことが想定される。発掘調査においても、屋敷を区画するような石積遺構は数多く発見されたが、屋敷の柱などを支える礎石などについては一部を除き、確認することが出来なかった。礎石の割れた破片石材は多く見られたが、屋敷配置を示す遺構として原位置を保っているものはなく、屋敷の規模や広がりを想定することは非常に困難である。

このような資材を移転先に持ち込んだと考えられるが、移転後も当該地が薬園や学校として、何らかの形で人が利用する場所として使用され続けることや、一部では沖縄県立第一中学校などの遺構が、中城御殿の石積に組み合わせる形で検出される部分も存在する。以上のことから、資材などは移転時に全て搬出されたわけではなく、一部の資材は残存しており、その後も使い続けられたと考えられる。

櫨園　中城御殿から道を挟んで東側に所在し、首里古地図には、かぢ木植所と描かれている。当該地の名称は、「球陽」に照らし合わせると櫨園とされていることから、誤りであると指摘されている（久手堅 2000）。

蝋燭や漆器の原料となる漆を採取する櫨園が置かれた場所とされている。

球陽では、尚灝 18（1821）年、これまで蝋立主取の家宅で櫨実や桐実の醸造をしていたのを改め、この櫨園の一部に醸造所を設置して、鬢附油や蝋燭を製造した（球陽 1617 号　球陽研究会編 1974）と記述がある。

創建時期　創建された時期については、判然としないが、検出された遺構などから、16 世紀以降には当該地が利用されていたことが伺える。

櫨園に関連する遺構　今回の調査で SM5002 とした石組土坑を確認した。この土坑からは、ヤコウガイ片、シャコガイ片、チョウセンサザエ片が出土しており、これらは意図的に割取されている痕跡がある。このような遺物の出土は、首里城跡銭蔵東地区（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016）、東村跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2017）で確認されており、螺鈿関係に使用されたと考えられている。SM5002 からの貝殻片は螺鈿素材も含めた貝製品製作の痕跡だと考えられる。櫨園では、漆器の原料となる漆の採取に加え、貝製品製作に関する作業を行っていたことが考えられる。

首里旧真和志村跡　首里高校敷地内の東側部分で一部発掘調査が行われ、14 世紀後半から 16 世紀代の柱穴跡や、近世以降の石組（シーリ）の一部が確認されている（那覇市教育委員会 2005）。当該部分は、浦添按司屋敷範囲内と考えられる。柱穴跡は、首里高校敷地内の全域で 16 世紀代頃の遺構が確認されており、当該時期の集落の広がりを検討する上で、関連性が高いと考えられる。

120°
130°
140°
モンゴル
Mongolia
ロシア連邦
Russian federation
ウラジオストク
Vladivostok
朝鮮民主主義人民共和国
North Korea
40°
北京
Beijing
平壌
Pyongyang
ソウル
Seoul
大韓民国
South Korea
東京
Tokyo
日本
Japan
中華人民共和国
China
博多
Hakata
上海
Shanghai
30°
東中国海
East China Sea
那覇
Naha
台北
Taipei
沖縄
Okinawa
台湾
Taiwan
香港
Hong Kong
太 平 洋
Pacific Ocean
20°
南中国海
South China Sea
マニラ
Manira
フィリピン諸島
Philippines
0
500
1000km
World Geodetic System 1984
10°

第 20 図　沖縄県の位置

第 21 図　中城御殿跡（首里高校内）の位置及び周辺の遺跡（濃いトーンは概ね近世の海岸線　新島 2005 参照）

首里古地図（1910年　具志氏模写図　沖縄県立図書館所蔵CCBY4.0 一部改変）（http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja）

首里古地図と遺構重ね図（1910年　具志氏模写図　沖縄県立図書館所蔵CCBY4.0 一部改変）（http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja）

第 22 図　首里古地図

首里古地図にみられる井戸　首里古地図では、中城御殿の北側に、井戸が描かれており、この井戸は現存している（第 23 図）。平成 25・26 年度の調査で、中城御殿内には、井戸や水場関係の遺構が水場遺構（第 24 図）、洞穴遺構（第 25 図）、SS24 の 3 か所確認された。これらの井戸や水場関連の施設は、首里古地図に描かれていない。加えて、美里御殿内と想定される場所に現存する井戸（内の井戸）（那覇市教育委員会 2010）（第 26 図）も、首里古地図には描かれていない。

首里古地図に描かれない井戸があることについて、井戸の築造年代と首里古地図の描かれた年代が異なるため、描かれていないことを想定した（沖縄県立埋蔵文化財センター 2017）。しかしながら、前述した美里御殿やその他の按司屋敷内の井戸等は基本的に描かれていないことから、屋敷内にある井戸や水場関係の施設は、首里古地図に描かれていないと考えられる。

洞穴遺構　平成 25・26 年度調査で確認した水場遺構と SS24 では、明確な井戸として認識できる遺構が確認された。対して洞穴遺構では、明確な円形の遺構は確認できなかった。洞穴遺構は、クチャを掘りこみ、石積を構築した水溜施設と想定した（沖縄県立埋蔵文化財センター 2017）。洞穴遺構は、地下に掘りこむ形で形成されているため、遺跡周辺に所在する指（佐）司笠樋川（サシカサヒージャー）のように、階段等で水源までおりるための構造があった可能性がある（第 27 図）。しかしながら、洞穴遺構周辺は、沖縄戦時の爆弾破裂痕があり、攪乱された状況で遺構等が確認できないことから、あくまで想定の範囲に留まる。

首里古地図に描かれる道路　首里古地図に描かれる地形や道路に関しては、近世当時の道路が多く残存していることが判明している（高橋 2000）。北側に現存する井戸と、確認された道跡では高低差があるが、道跡は北側に向けて緩やかに傾斜していることから、井戸がある部分まで続いていたことが想定される。

第 23 図　中城御殿北側にある井戸

第 24 図　水場遺構

第 25 図　洞穴遺構

第 26 図　内の井戸（ウチヌカー）

第 27 図　指（佐）司笠樋川（サシカサヒージャー）

第２表　中城御殿跡　関連年表

西　暦	元　号 琉球 / 日本 / 中国	事　項
1547 年	尚清 21/ 天文 16/ 嘉靖 26 年	大美御殿着工
1548 年	尚清 22/ 天文 17/ 嘉靖 27 年	大美御殿竣工
1621 ～ 1640 年	尚豊王代	尚豊王代　中城御殿が現県立首里高校の地に建設される。
1677 年	尚貞 9/ 延宝 5/ 康熙 16 年	玉城・豊見城両家の屋敷を繰り入れて敷地拡張する。
1798 年	尚温 4/ 寛政 10/ 嘉慶 3 年	中城御殿内に公学校(国学)を開く。
1801 年	尚温 7/ 享和 1/ 嘉慶 6 年	国学が龍潭近くに移転する。
1808 年	尚灝 5/ 文化 5/ 嘉慶 13 年	王子邸にて冊封使に「料理馳走躍」が出される。
1821 年	尚灝 18/ 文政 4/ 道光 1 年	蝋立主取の家宅で櫨実や桐実の醸造していたものを、 櫨園の一部に醸造所を設置して鬢附油や蝋燭を製造した。
1854 年	尚泰 7/ 安政 1/ 咸豊 4 年	大美御殿でペリー提督首里城訪問の際に接待する。
1864 年	尚泰 17/ 元治 1/ 同治 3 年	尚典(のちの中城王子)が生まれる。
1866 年	尚泰 19/ 慶応 2/ 同治 5 年	尚泰王が冊封をうける。
1868 年	尚泰 21/ 明治 1/ 同治 7 年	尚典が尚泰王の世子となる。
		久米村の与儀親雲上ら３人を福州に派遣 風水を学ばせ中城御殿の風水看を行う。
1870 年	尚泰 23/ 明治 3/ 同治 9 年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる。
1872 年	尚泰 25/ 明治 5/ 同治 11 年	琉球藩設置
		久場川薬園を廃除し、中城旧殿の宅内にて改めて薬園を開き、栽培を行う。
		按司奉行や親方奉行をこの役所に配置。
1874 年	明治 7/ 同治 13 年	中城御殿(現在の県立博物館跡地)竣工。
1875 年	明治 8 年	中城王子尚典公新築した屋敷に移る。
1879 年	明治 12 年	3 月　廃藩置県　首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る。
		廃藩置県に伴い、国学は県庁の所管となる。
1880 年	明治 13 年	東京師範学校から教員を招聘し、教則の認可を受け、首里中学校と改称。
1887 年	明治 20 年	沖縄県尋常中学校と改称。
1891 年	明治 24 年	沖縄県尋常中学校が現在の敷地(首里高校敷地内)に移る。
1899 年	明治 32 年	沖縄県中学校と改称。
1901 年	明治 34 年	尚泰逝去し玉陵に葬られる。
1911 年	明治 44 年	沖縄県立第一中学校と改称。分校が独立し沖縄県立第二中学校と称した。
1925 年	大正 14 年	大美御殿建物が、県立第一中学校の運動場拡張に際して撤去される。
1930 年	昭和５年	沖縄県立第一中学校、鉄筋コンクリート校舎が新築落成。
1944 年	昭和 19 年	10 月 10 日　米軍による空襲により旧那覇市の 9 割が焼失する(十・十空襲)。
1945 年	昭和 20 年	首里の町並みとともに沖縄第一中学校も沖縄戦により壊滅する。
1946 年	昭和 21 年	糸満高等学校首里分校として発足、首里高等学校として独立。
1980 年	昭和 55 年	創立 100 周年に際し校舎を改築する(元のグラウンド部分)。
2011・2012 年	平成 23・24 年	那覇市教育委員会(試掘)、県教育庁文化財課(造成土掘削、測量)
2013・2014 年	平成 25・26 年	8 月　沖縄県立埋蔵文化財センターによる本調査開始。
2015 年	平成 27 年	首里高校敷地内の遺構について、可能な限り現地保存することが決定する。
2016 年	平成 28 年	管理・特別教室棟着工
2017・2018 年	平成 29・30 年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区)
		管理・特別教室棟竣工
2019 年	平成 31 年・令和１年	普通教室棟(西棟)着工
2020 年	令和２年	普通教室棟(西棟)竣工・普通教室棟(東棟)着工・竣工

第３章　発掘調査の方法

第１節　発掘調査

グリッド設定　平成 25・26 年度の調査の際に、中城御殿の遺構検出状況から、１グリッド 10 m× 10 mを東西南北に合わせて設定した。この際、校舎改築にあわせて東側へ調査区が拡張していくことから、北西の部分を起点として東側のラインについては数字の１～、南側のラインはアルファベットのＡ～を設定した。ラインが重なる北西の部分をグリッド名とし、Ａ－１グリッド、Ａ－２グリッド・・・とした。

発掘調査区　平成 25・26 年度の調査時には、遺構検出状況等から、便宜的にⅠ～Ⅶ区まで地区分けを行った。継続して調査を実施していくなかで、調査を実施した年度毎に調査区を設定し、混乱をさける必要が生じた。そのため、平成 25・26 年度に実施した調査区全域は改めてⅠ区として設定し、調査の年度や改築工事に伴う調査区分けに応じて、Ⅱ区以降の調査区を設定した。

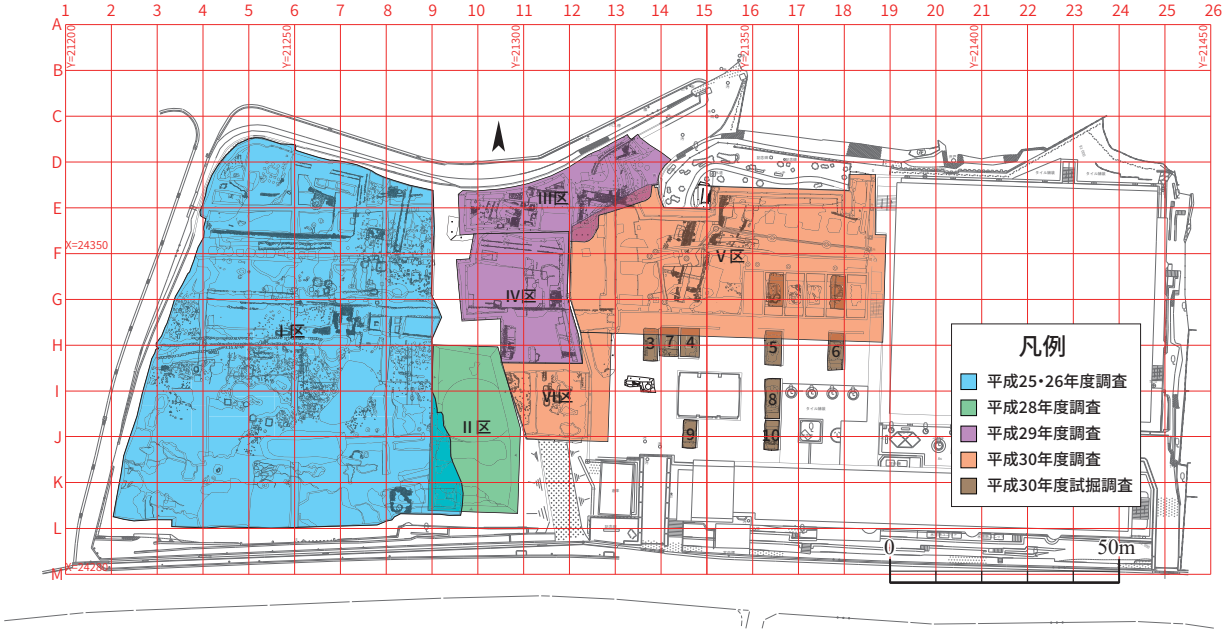
調査区毎のエリア分け　発掘調査を実施する際には、改築工事により先行して調査に着手する部分や、既設配管等の使用状況等の要因で調査区を分ける必要があった。そのため、分けた調査区をⅢ区西、Ⅲ区東など、ある程度の調査実施箇所がわかるように呼称しながら調査を進めた。

層序付与方法　層序付与は、過年度の調査を踏襲して層序付与した。層序及び調査区毎の概要については第３節・第４節で述べる。

遺構名付与方法　遺構は、遺構記号＋数字で遺構名とした。遺構記号については第３表のとおりである。今後の調査が継続して実施されることから、Ⅲ区で確認した遺構は○○（遺構記号）3001、Ⅳ区では○○（遺構記号）4001 とし、遺構名で検出した調査区が判明するようにした。これは、土坑や柱穴など調査区全域で検出する遺構に対し、同じ番号を付与し、整理段階で、どの調査区の遺構か混乱するのを避けるために採用した。結果としては管理が容易で、整理作業等の際も混乱することはなかった。

調査区をまたがって検出する遺構　今回の報告では、中城御殿の石牆など、調査区をまたいで遺構が確認される場合が多々あった。遺構としては同一の遺構なのだが、混乱を避けるため、確認した調査区毎で遺構番号を付与した。そのため、調査成果をまとめる際には、一列の石牆でも、遺構番号が複数付与されている遺構もある。

立会調査　本調査の着手前や調査中に、調査区以外で改築工事に伴う立会調査を実施した。立会調査の詳細は



第 28 図　グリッド配置図

第３表　遺構記号凡例

遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類
SA	石積	SG	集石	SM	石組土坑	SS	石敷・塼敷	SB	建物	SH	－
SN	－	ST	－	SC	－	SI	－	SO	－	SU	遺物集積
SD	溝	SJ	遺物埋設	SP	柱穴・ピット	SV	－	SE	井戸	SK	土坑
SQ	石組柱	SW	石積擁壁	SF	道	SL	炉・カマド	SR	石列	SX	不明遺構

第１章第４節に記述した。

表土の掘削　表土層の掘削は、重機を用いて実施した。不発弾等が地中に残存している可能性もあることから、磁気探査を行った。表面探査と掘削深度 50 ㎝毎に経層探査を実施した。

遺構の検出　調査区によるが、掘削深度１m以内で近・現代の遺構が確認された。遺構を確認した際には、重機掘削を止め、人力掘削で遺構の調査を行った。石積等は、石積の根石前面部分を掘削し、根石設置層の確認を行った。石組土坑、土坑、柱穴等は基本的に半截を行った。半截記録を取った後、完掘した。一部完掘せず、現地保存している遺構もある。柱穴等で柱の並びが確認できるものは、その並びに沿って半截した。

今回の調査では、地中に保存可能な遺構も多かったことから、遺構の断ち割り等は、攪乱部分を用いて行い、校舎改築工事に影響の出る範囲のみで実施した。

出土遺物の取り上げ　調査中は、包含層出土遺物と遺構出土遺物を分けて取り上げを行った。なるべく現地で層序を付与して取り上げたが、判断が困難な遺物は、出土位置や土色などの特徴を記載しておき、調査が進む中で層序が決定した際に層序付与した。

写真撮影　写真撮影には、フィルムカメラ（白黒・スライド）、デジタルカメラを主に使用した。遺構検出、半截、完掘など作業工程に沿って写真撮影を行った。作業状況を示す写真や定点撮影等も適宜行った。遺構の完掘写真や調査区全体の完了写真等については、中判カメラ（白黒・スライド）も使用した。また、遺構や調査区の状況に応じて、高所作業車やドローンを用いて空撮等を行った。遺構の記録作成時には、支援業務委託業者がオルソ撮影を実施した。

第２節　整理等作業

整理作業の概略　整理等作業は、平成 29 年度から順次開始した。平成 29・30 年度は現地作業も実施していたことから、整理等作業は並行して実施した。平成 30 年度調査分の整理等作業は、平成 31 年５月から順次実施した。

平成 31・令和元年度中は、遺構図の整理、出土遺物の分類及び報告書掲載遺物の選定を行った。また、実測作業も実施した。実測作業と並行して、遺物の集計作業を実施した。

令和２年度は、前年度までの作業の続きを行い、トレース作業、写真撮影を実施した。図面の作成やトレース作業等は、作図ソフト（Adobe　Illustrator、Photoshop）を用いた。

上記作業で作成した図面等及び写真、文字原稿も含めて編集ソフト（Adobe InDesign）を用いて DTP 印刷用の編集を行い、すべての頁を PDF ファイルとして作成した。

以下、時系列的に整理作業の流れを示す。

出土遺物の搬入　調査完了後、調査現場で遺物洗浄及び、コンテナ整理まで終えた状態でセンターへ搬入した。現場での遺物洗浄は、主に雨天時に実施した。調査現場での整理作業は、遺物量が多く、時間も限られていたため、効率的に行う必要があった。その際、調査員を一人配置し、情報整理しながら整理作業を進めたため、すべての作業をスムーズに行うことができた。結果として、出土遺物をセンターへ搬入後、すぐに次の作業を開始することができたため、整理作業の時間短縮につながった。

室内での整理作業　室内での整理作業は、注記作業から行った。注記作業はすべて手作業で実施した。

遺物の分類・報告書記載遺物の選定　注記作業が完了した遺物は、接合をした後分類作業を行った。分類を行う際は主に遺物種類、器形、残存部位について観察した。分類を行いながら、報告書に掲載する遺物の選定を行った。

遺物の選定基準は、遺構及び層序の年代決定の判定に用いる遺物や、遺物組成を示せるものとした。

報告書掲載の遺構　報告書へ掲載する遺構は、遺跡の変遷過程を示す遺構を中心に選定を行った。遺構の詳細が不明な場合でも、層序との関係性で重要な遺構は掲載することとした。掲載する遺構から出土した遺物は報告書へ掲載することとしたが、なかには、遺物が小破片で実測等が困難な遺物のみ出土している遺構もあった。この場合は、遺物の掲載は行っていない。

遺構のなかには、調査区壁面でのみ確認したものや、現地保存可能なものがあり、掘削を途中で止めたものがある。そのような遺構を掲載する場合は、検出写真等を掲載した。

集計作業　出土遺物は、すべて集計作業を行った。集計結果については、第５章に掲載している。集計表は、各遺構からの出土遺物をまとめたものを掲載し、自然遺物も合わせて掲載している。また、層序についてはⅠ～Ⅳ層として細かい層序はまとめて集計し、遺構面に関連する層序は別で掲載した。

遺構と出土遺物の検討　遺構及び堆積土の年代観等を確認する際に、現場所見と合わせて出土遺物の照合を実施した。その際、主に中国産青花及び本土産陶磁器の年代観、沖縄産施釉陶器及び無釉陶器の出土状況に加え、明朝系瓦の出土状況等を検討材料とした。

貝類遺体　貝類遺体は、当センター所蔵の貝類遺体サンプルを用いて同定作業を実施した。また、遺構内から人為的な割り取りを行っている貝片が多量に確認された。この貝片については、第４章第３節で述べる。

脊椎動物遺体　貝類遺体と同様、当センター所蔵の動物遺体サンプルを用いて同定作業を実施した。同定作業の際には、平成 29 年 11 月、平成 30 年３月、平成 31 年２月、令和２年 12 月に東海大学の丸山真史氏を招聘し、同定資料の確認及び検討、分析等を依頼した。

塼瓦の分類　今回、Ⅴ区から出土事例のない塼瓦が出土しており、その遺物について所見を得るため、令和２年 12 月に上原静氏（沖縄国際大学）を招聘し、出土資料の確認を依頼した。この塼瓦の詳細は第４章第２節で述べる。

実測・トレース作業　報告書掲載遺物は実測作業を行った。トレース作業はデジタルトレースで行った。陶磁器の文様等については手書きで絵付けを行ったが、近代磁器等については遺物写真との合成作業を実施したものもある。

写真撮影　整理作業を行いながら遺物写真撮影を実施した。当初、図版毎に遺物を並べて撮影していたが、途中から遺物を１点ずつ撮影する方法に切り替えた。

第３節　層序

今回の発掘調査では、平成 25・26 年度の調査成果を踏まえながら、大きく４層に区別した。

Ⅰ層：現代　首里高校に関連する造成土や攪乱層。

Ⅱ層：近代　戦前、戦後に堆積したと考えられる層。

Ⅲ層：近世　中城御殿、櫨園、道跡に関連する層。17 ～ 19 世紀。

Ⅳ層：グスク　中城御殿が創建される以前の層。15 ～ 16 世紀。

中城御殿や道などを築造するにあたり、大量の造成土が用いられ、同時期の堆積と考えられる層でも、土色や混入物等が異なった様相をしていた。そのため、検出した土層毎に、Ⅲ１層、Ⅲ２層といったように層序を付与した。そのため、Ⅲ１層とⅢ 10 層で、層の堆積順序で新旧関係を示しているわけではない。調査中に、ほぼ同一の造成単位と判断できた場合は、Ⅲ 10a 層、Ⅲ 10b 層といったような層序付与方法も行った。

Ⅰ層　Ⅰ層（現代）は、板ガラス片や近代陶磁器等が多く出土し、旧校舎に関連するコンクリート等も確認できたため、層序判断は比較的容易であった。ただ、前述したように出土地点によってその様相は様々であった。

ほとんどが造成のために持ち込まれた土で、一部では、遺跡内の土が動かされている状況も確認できた。

Ⅱ層　Ⅱ層（近代）は、Ⅰ層と見分けることが困難な状況だったが、板ガラス片の混入が少なくなり、石造りの遺構が見られることにより、近代に堆積した層であると判断できた部分もあった。近代期に、土を掘り返して整地している状況もあり、層序出土遺物は近世遺物のみで占める状況等もあった。下層にあたるⅢ層との判断が困難な場合もあり、一部混入している可能性はある。

Ⅲ層　Ⅲ層（近世）は、中城御殿や櫨園、道に関する造成土である。前回の調査時には、Ⅲ層を造成土単位で分類することが可能だったが、今回の調査では、調査進捗と建築工事の進捗等により、調査区を分断せざるを得ない状況等があり、調査区をまたいでの層序確認を行うことが非常に困難だった。そのため、調査区毎に層序付与を行い、その層の特徴等から堆積状況の並行関係を把握した。調査区毎で層序名が異なるが、相関関係については、第４・５表の通りである。

造成のために持ち込まれた土が多く、遺跡内もしくは遺跡外から持ち込まれた可能性がある。近世期に造成された土だが、持ち込む場所に由来し、古手の遺物が出土を占める場合もあった。また、機能時の面を確認した部分があり、この層からは機能時期の遺物と考えられるものが出土している。

Ⅳ層　Ⅳ層（グスク）は、石灰岩礫等の混入物が少なくなり、暗褐色～黒褐色の層にマージ粒等が混入している特徴がある。この層は、地山直上に堆積しており、近世の段階で掘り返され、再度埋戻されていることもあった。機能時の面と考えられる部分があり、この層で柱穴跡を確認できる部分があった。

地山　地山は、明褐色の土（マージ）が確認できた。一部では掘り返されている部分があり、岩盤整形後、埋戻されていることも確認できた。掘り返された地山には、石灰礫が混入したり、暗褐色土が混入する等の特徴があったため、その土に関しては造成土として扱った。前回の調査では青灰色の泥岩層（クチャ）が確認できた部分もあったが、今回は確認されなかった。前回調査のような深く掘り込む井戸跡がなかったことや、遺構が現地保存可能で、泥岩層まで調査しなかったことによる。

第４節　調査区毎の概要

今回報告するのは、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区の合計３つの調査区で確認した包含層及び遺構である。それぞれの調査区で、遺構及び機能時の面を遺構面と認識して調査を進めた。遺構面は上層から確認したものを第１遺構面として、それぞれ番号を付与した。なお、遺構面については、調査時に遺構面と認識していたが、調査中は第１遺構面など明確に番号を付与していない状況だった。そのため整理作業を進めながら、出土遺物を観察した上で遺構面の番号付与や年代観を把握した。各調査区の遺構面対照表が第４・５表で、調査区全体を通して基準となる層に色塗りをしている。

Ⅲ区の調査　Ⅲ区の調査は、調査区内に既設配管があり、調査段階においても使用されており撤去が困難なこ

とから、この配管を基準として西側と東側にわけて調査を実施した。

堆積状況から、近代～グスク時代までの時期の遺構・遺物が確認できた。そのなかでも、近世期には層序の堆積状況から大きく三時期に細分することが出来たが、出土遺物によって細かく年代を把握することは、遺物組成の変化が少なく困難な状況だった。

Ⅲ区西　Ⅲ区の西側で近代～グスク時代までの堆積層を確認することができたため、Ⅲ区西側の南壁を基本層序とした。

客土はすべてⅠ層とし、Ⅱ層（Ⅱ６層）検出段階でSM3005を検出した。SM3005はⅠ層に削平され、Ⅱ層を掘り込んでいるため、より新しい時期（近代～近世）の遺構と考えられる。

第１遺構面　Ⅱ６層上面。造成時に、Ⅲ４層とそれに伴う遺構を削平している。そのため、Ⅲ４層上面で検出した遺構は、天端が残存せず、Ⅱ層に覆われている部分が多い。

遺構面そのものは後世に削平されているが、第１遺構面と捉えた。第１遺構面で検出した遺構は、近世末以降の時期と考えられる。

Ⅱ６層は、Ⅲ区西の北側では、何枚かの層に細分できることが判明したが、結果としては一つの層序にまとめた。その部分でSM3008、3009等を確認している。

第２遺構面　Ⅲ４層上面。Ⅲ４層検出時に、上部が削平されたSM3001、3002を検出した。この層を第２遺構面とした。

Ⅲ４層は、SS3004の検出状況から、Ⅲ６層の遺構面を覆う形で堆積した造成土と考えられる。

第３遺構面　Ⅲ６層上面。石灰岩を細かく砕いた石敷遺構（SS3004）を確認したため、この層を第３遺構面とした。この第３遺構面は、削平されず、そのままⅢ４層に覆われたものと考えられる。近世期の遺構面と考えられる。

Ⅲ６層は、下層にある石積遺構の天端が残存していない状況から、下層を削平した上で造成された層と考えることができる。

第２遺構面と第３遺構面には、層序の状況から時期差があると考えられるが、短い期間のなかでの築造が考えられ、遺物組成等も同様なため、明確な時期差を把握するのは困難だった。

第４遺構面　Ⅳ層上面。石積遺構（SA3005）を確認した。Ⅳ層は、Ⅲ層までの様相と異なり、暗褐色で層序内に礫等の混入物が少なくなることが特徴である。Ⅳ層上面は、上層にあたるⅢ６層を造成する際に削平されている。Ⅳ層の下部で地山を検出し、地山面で柱穴跡等を確認した。

Ⅳ層は、平成25・26年度調査で確認したⅣ層の様相と同様なことから、グスク時代の層と考えられる。第４遺構面で検出した遺構は、Ⅳ層がグスク時代の時期を示しているので、近世初頭の時期と考えられる。

第５遺構面　Ⅳ層中及び地山面。下層確認のためサブトレンチを設定した部分で確認した。Ⅳ層より下部で地山面を確認し、柱穴跡を検出した。柱穴等が機能していて建物等があった面は、前述したようにⅢ６層により削平されている状況だった。

Ⅲ区東　Ⅲ区東では、中城御殿の北側石牆（SA3001）にあたる部分を検出した。この石牆の根石部分を確認し、その部分を基本層序とした。

第１遺構面　Ⅲ１ｃ層及びⅢ２ｂ層上面。SA3001の北側部分では、根石付近まで客土が多かった。掘削中の安全確保のため、一部分のみ、根石より下部の掘削を行った。その結果、SA3001の根石はⅢ２ｂ層上に設置されていることがわかった。また、下層にあたるⅢ２ｆ上で

第４表　遺構面対照表

Ⅲ区西				Ⅲ区東				Ⅳ区北			
遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考
								1	Ⅰ		
1	Ⅱ６	近世末～近代						2	Ⅱ７ Ⅲ10a・b Ⅲ10a1・2	近世	SA4001機能時
2	Ⅲ４	近世	SM3001、3002削平層					3	Ⅲ10a4・Ⅲ11b Ⅲ12・Ⅲ12b	近世	平場造成 SA4001根石設置
				1	Ⅲ1c Ⅲ2b	近世	SA3001根石設置	4	Ⅲ11c Ⅲ15e1・2	近世初頭？	SA4002機能時
3	Ⅲ６	近世									
4	Ⅳ	近世初頭									
5	Ⅳ 地山	グスク		2	Ⅳ1a~d	グスク		5	地山	グスク	

石敷遺構(SS3001)を確認した。これは、石牆の根石設置の際に、地面を切土し、造成を行った上で地盤層を整える工法の痕跡と考えられる。同様の設置方法は、平成25・26年度の調査時にも確認できた。

第２遺構面　Ⅲ区東の北側で確認できたⅣ１ａ～ｄ層。一部分のみで確認した。

Ⅳ区北の調査　堆積状況から、近代からグスク時代までの遺構・遺物を確認した。近代の遺構は、首里高校の校舎関連の遺構が残存していた。近世の段階は、大きく三時期に細分できることが確認できた。

第１遺構面　Ⅳ区の客土層を掘削すると、近代以降の首里高校に関連する遺構が確認出来た。炭層に覆われ、板ガラス片等を多く含んでいた。

第２遺構面　近代の遺構を掘削すると、屋敷内にあたる石積(SA4001)の天端部分を検出した。SA4001は、平成25・26年度に確認したSA２の延長部分にあたる。

SA4001は、東西方向に延びており、この遺構を挟んで北側と南側では堆積状況が異なることが確認できたため、Ⅳ区南とⅣ区北に分けて調査を進めた。SA4001の南側は、SA4001が機能していた時期の面を築造するための造成土(Ⅲ10層)が確認できた。クチャを造成土として使用しており、間に礫層を挟む堆積をしていた。Ⅲ10層造成時には、さらに南側にあたる部分を削平して造成されていることが確認できた。

SA4001の北側は、SA4001の根石付近まで客土が堆積している状況だったが、わずかに根石を１段覆う層が確認できた。この層からは近代磁器等が多く出土したため、調査時にはⅡ７層とした。根石の状況やⅠ層に削平されている状況から、上層は機能面だった可能性があるが、削平されて残存していない。遺構面は根石周辺で確認することができた。この遺構面は、SA4001が機能していた時期よりやや古く、平場拡張及びSA4001の構築時の面である。このことから、SA4001の南側と北側では、機能していた当時には、高低差のある構造をしていたことが考えられる。

SA4001の構築面は把握することができたが、機能時の地表面は、後世の削平等により確認できなかった。

第３遺構面　SA4001の根石が設置されるⅢ11b層及びⅢ12b層を確認した。これらの層は、掘削した部分が分かれていたため、別の層序名を付与したが、後に層序を検討した結果、同一層として捉えることが可能だと判断した。

SA4001構築層は、Ⅳ区の南北で広がる状況が確認できた。南側は、SA4002部分まで確認することが出来た。SA4002は、SA4001の背面を造成する際に天端が削平されている状況が確認できた。そのため、SA4001より古い遺構にあたる。SA4002は平成25・26年度調査時のSA３の延長部分にあたる。

第４遺構面　SA4002の機能時の面はⅢ11c層が考えられる。これは、SA4002の根石が埋まっている点と、西側で設けたサブトレンチでⅢ11c層上に石敷遺構を確認したためである。

SA4002を構築するにあたり、地山及び岩盤層まで掘削を行い、地盤整形を行っていることが確認できた。地盤整形した後の地山面にSA4002を設置し、Ⅲ11d及びⅢ11e層で根石部分を覆っている。この地盤整形時にグスク時代の柱穴跡等を削平している。

第５遺構面　明確な層は第４遺構面の地盤整形時に削平されている。地山面でグスク時代の柱穴跡を確認したが、前述した地盤整形等で大きく削平を受けており、遺構の数も少ない状況だった。

Ⅴ区の調査　Ⅴ区の調査は、広範囲に及び、旧校舎基礎や既設配管が多く、後世の攪乱も多かった。そのため、確認できた遺構が分断され、層序の把握が困難な部分も

第５表　遺構面対照表(つづき)

Ⅴ区				Ⅴ区北				Ⅰ区			
遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考
1	Ⅲ17~25 Ⅲ1	近世末～	中城御殿に伴う遺構を埋戻す層								
2		近世	SF5001	1	Ⅲ7				造成２	近世1~2	水場遺構
3	Ⅲ27・Ⅲ31		SA5004 ２段目機能時 SA5005機能時								SJ３(18世紀後半)
4	Ⅲ29・Ⅲ33・34		平場造成 SA5005根石設置						造成４	近世２	18世紀代
				2	Ⅲ12						
5	Ⅲ36	近世初頭	SA5004当初						造成６ 造成８	近世３	
6	Ⅳ2 Ⅳ3	グスク		3	Ⅳ1				Ⅳ	グスク	SK51（16世紀中葉～後半）

あった。また、Ⅴ区では中城御殿、櫨園、両施設の間にある道が確認され、土層の堆積状況が記録した地点毎で異なる様相を示している。

堆積状況から近世末からグスク時代までの遺構・遺物を確認した。

第１遺構面　首里高校の校舎関連の土を除去すると、Ⅱ層が確認できた。Ⅱ層は、造成等で動かされた層である可能性が高く、中城御殿の機能が終了した際の堆積土と考えられる。この層に伴う遺構は、SD5002・5003などの排水溝跡で、後述するSF5001を削平した後に形成されていた。また、SA5003の西側に堆積しているⅢ17～25層及び、SA5003東側に堆積しているⅢ１層は、近世期と考えられる遺構面の上部に堆積しており、SA5003の石積を覆うように堆積しているので、これらの堆積土も中城御殿の機能が終了した際に埋戻された土であると考えられる。

第２遺構面　SF5001及びそれに関連する遺構SD5001等が確認された。SF5001の西側にはSA5003があり、この遺構は中城御殿の東側石牆と考えられる。SA5003の根石に近い部分では、石灰岩を細かく砕いたコーラル層が確認されたことから、この層が機能時の遺構面と考えた。SF5001と中城御殿の遺構面は、約１m前後の高低差がある。中城御殿は道跡よりも低い部分に機能時の面があったことが伺える。平成25・26年度の調査成果でも、中城御殿の南側にある綾門大道より遺構面が低いことが判明している。

第３遺構面　Ⅴ区西側で確認されたⅢ27層で、SA5005の根石を覆っている層。SA5005機能時の面と考えられる。北側にはSA5004があり、SA5004は上部と下部で分かれ、上部石積は下部石積より石１個分後退させて積まれている。このことから積み増ししていたことが伺える。Ⅲ27層は、下部石積を覆っており、かつ上部石積の下から２段目まで埋まっていることから、上部石積機能時の面として捉えることができる。Ⅲ27層はⅣ区で確認されたⅡ７層と同一の可能性がある。

SA5005の南側部分は、上部が削平されている状況だったがクチャによる造成土（Ⅳ区のⅢ10・Ⅲ10aに相当）が確認された。

第２遺構面と第３遺構面は、調査時に確認された部分に校舎基礎等があり、直接層序で前後関係を確認することは出来なかった。

第４遺構面　Ⅴ区西側で確認されたⅢ29層で、SA5005が築造される以前の平場形成のための造成土が確認された。この層上にSA5005の根石が設置されている。また、北側では前述したSA5004の下部石積がⅢ33・34層に埋まっている状況なので、中城御殿全体で平場形成した痕跡が伺える。Ⅳ区のⅢ12b層と同一層と考えられる。

第５遺構面　Ⅴ区北側のSA5004の下部石積と隣接するSS5010、Ⅲ36層にあたる。このような堆積状況から、SA5004は積み増し等を行いながら、長期間機能していた石牆と考えられる。

第６遺構面　Ⅴ区南側の一部と、Ⅴ区北東部のⅣ２・Ⅳ３層がこれにあたり、その下層で柱穴跡等が確認できた。また、この柱穴跡を確認した面には、高低差がある部分があり、この境界に石積（SA5006）がみられることから、この時期の土地利用についても階段状に高低差があることが確認できた。

Ⅴ区北　この部分で確認できた層は、中城御殿敷地内部の体積と異なり、櫨園に関する層にあたる。

第１遺構面　調査区の北壁面付近でⅢ７層（コーラル層）の遺構面が確認できた。これらの遺構面は、SF5001とほぼ同じ標高に位置しているため、Ⅴ区の第２遺構面の時期に近いと考えられる。

第２遺構面　Ⅲ10層下部でⅢ12層（コーラル層）の遺構面が確認できた。この層は、SF5001を築造する際の造成土（Ⅲ３層）に削平されている状況だった。また、Ⅳ層上面に堆積していることから、Ⅴ区の第２遺構面より古く、第６遺構面より新しい時期の遺構面と考えられる。

第１及び第２遺構面は、いずれも櫨園に伴う遺構面と考えられるが、部分的にしか確認できなかったため、全容は不明である。

第３遺構面　層序確認のためのサブトレンチでⅣ１層を確認した。上面は削平されている状況だった。

まとめ　Ⅴ区では、中城御殿に関連する遺構を埋戻している層が確認できた（Ⅴ区：Ⅲ17～25層・Ⅲ１層）。これらは中城御殿の機能が終了した後に埋められた層なので、機能終了した後の当該地は土地整形のために一部埋められたことが考えられる。他調査区では、後世の攪乱の影響で、明確に機能終了時に埋戻されたと考えられる層を確認できなかった。

一部埋めた部分の上面には、首里高校の旧校舎に伴う排水溝等が見られた。

Ⅴ区で確認された道跡（SF5001）は遺構面としては上層にあたる遺構面だと考えられる。この道跡の形成状況は、Ⅳ区・Ⅴ区で確認できた石積遺構SA4001及びSA5005（第65図・第66図）の形成状況と同じ様相を示しており、ほぼ同時期に築造されたと想定できる。この石積遺構は、遺構名は異なるが調査区をまたいで確認した同一の石積遺構で、平成25・26年度調査時にもSA２として確認しており、今回の調査成果をあわせ、中城御殿の敷地全体に東西に伸びる石積だったことが判明した。石積の根石が設置されている層（Ⅲ区：Ⅲ４層、

Ⅳ区：Ⅲ 10a4 層・Ⅲ 11b 層・Ⅲ 12 層・Ⅲ 12b 層、Ⅴ区：Ⅲ 29 層・Ⅲ 33 層・Ⅲ 34 層、Ⅰ区：造成４）は、調査区全体で確認でき、既存の遺構を削平し埋戻すといった特徴があり、大規模な平場造成が行われていることが確認できた。

平場造成時に削平された遺構（SM3001）がⅢ区で確認できた。SM3001 は上端が残存していない状況だが、遺構内埋土からの出土状況が良好で、概ね 17 世紀末頃の遺物を中心に出土している。このことから、中城御殿全体における平場造成は早くても 17 世紀末以降に実施されたと考えることができる。平成 25・26 年度調査時に確認した造成４が、大きく平場造成した層で、同一層だと考えられる。造成４上面では SJ３が確認され、18 世紀後半頃の遺構と判明している。これらをふまえ、中城御殿内における大規模造成は、17 世紀末以降～ 18 世紀後半までの間に行われたことが想定される。道跡（SF5001）に接して築造されている中城御殿の東側石牆（SA5003）の機能面は、前述した東西に伸びる石積の機能面と同じ面にあたるため、中城御殿の大規模造成と同じ時期に道跡も築造されたことが考えられる。

1　①－①'Ⅳ区南 西壁（北東から）

2　①－①'Ⅳ区西 西壁（東から）

第 29 図　層序１

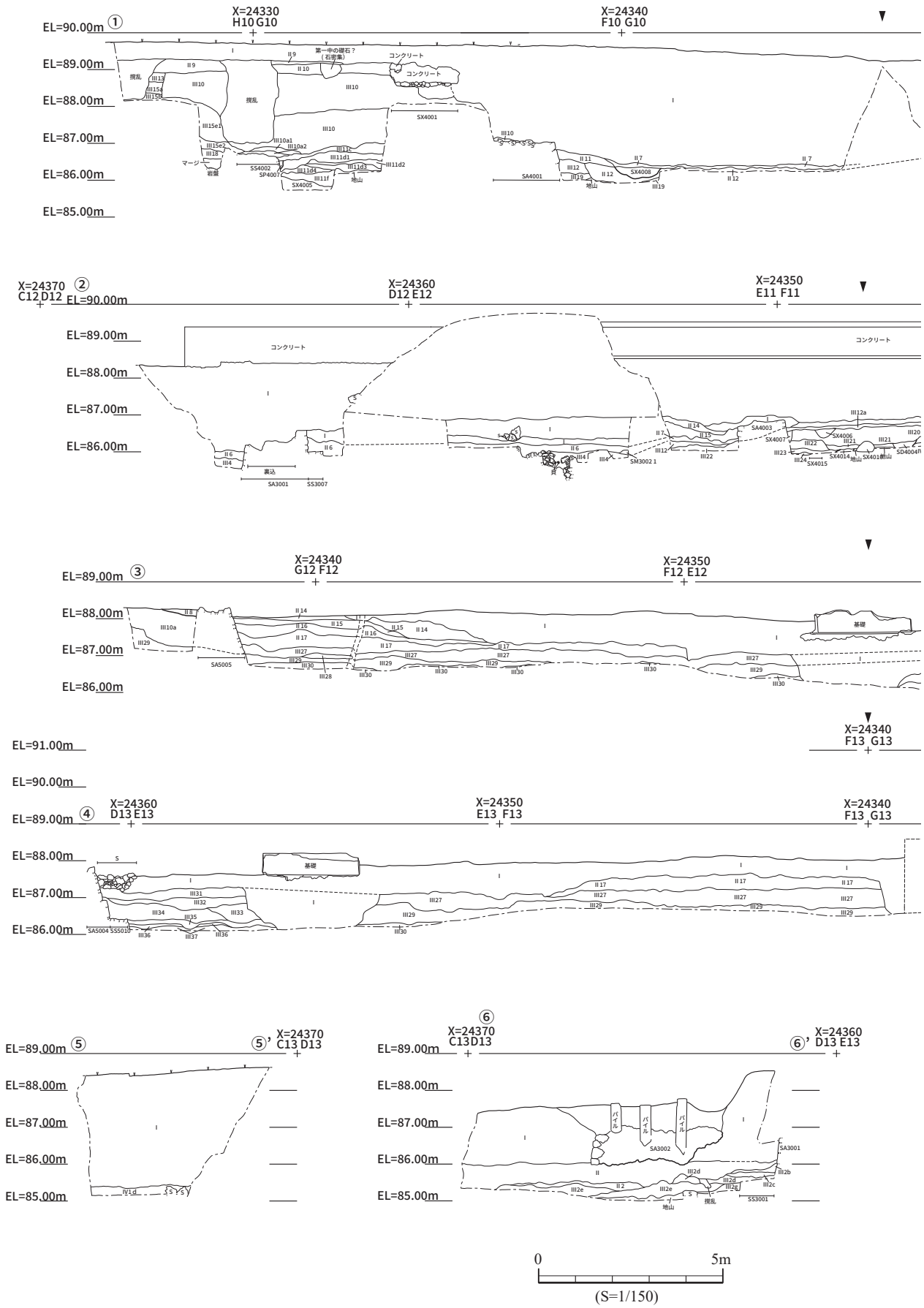
1　①－①'Ⅳ区北 西壁（東から）

2　①－①'Ⅲ区西 西壁（東から）

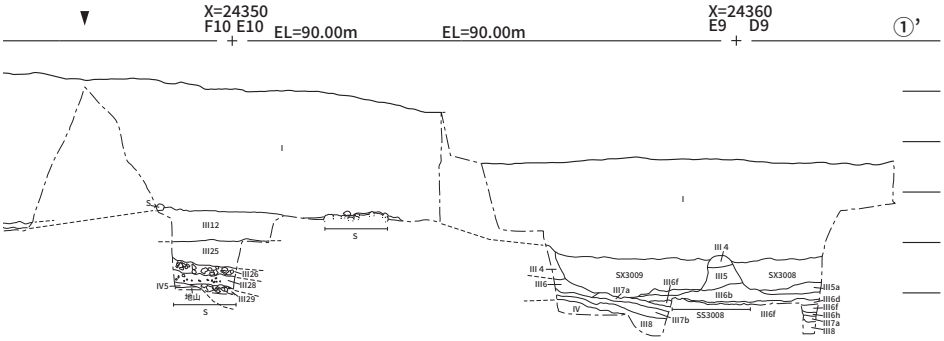
3　②－②'Ⅲ区西 東壁（西から）

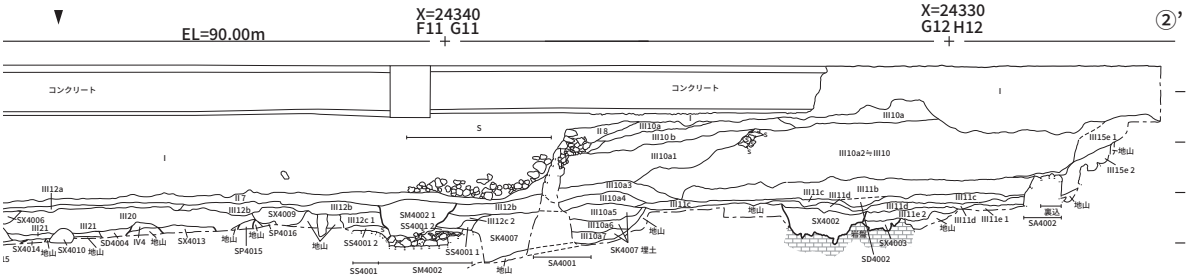
4　②－②'Ⅳ区北 東壁（西から）

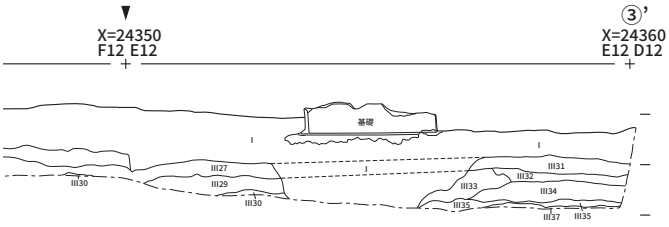
第 30 図　層序２

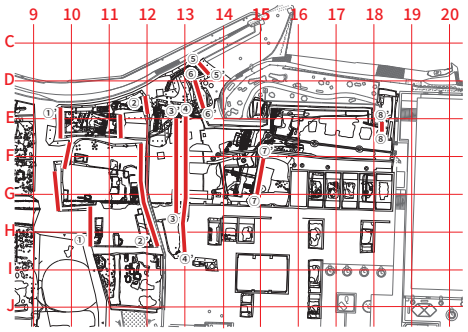

①
X=24330
H10 G10
X=24340
F10 G10
EL=90.00m
EL=89.00m
EL=88.00m
EL=87.00m
EL=86.00m
EL=85.00m
第一中の礎石？
（石寄集）
コンクリート
撹乱
SX4001
SA4001
SX4008
SS4002
SP4007
SX4005
マージ
岩盤
地山
②
X=24370
C12 D12
X=24360
D12 E12
X=24350
E11 F11
裏込
SA3001
SS3007
SM3002 1
SA4003
SX4007
SX4006
SX4014
SX4015
SX4018
SD4004
③
X=24340
G12 F12
X=24350
F12 E12
SA5005
基礎
EL=91.00m
EL=90.00m
EL=89.00m
EL=88.00m
EL=87.00m
EL=86.00m
④
X=24360
D13 E13
X=24350
E13 F13
X=24340
F13 G13
SA5004
SS5010
⑤
⑤'
X=24370
C13 D13
⑥
X=24370
C13D13
⑥'
X=24360
D13 E13
パイル
SA3002
SA3001
SS3001
0
5m
(S=1/150)

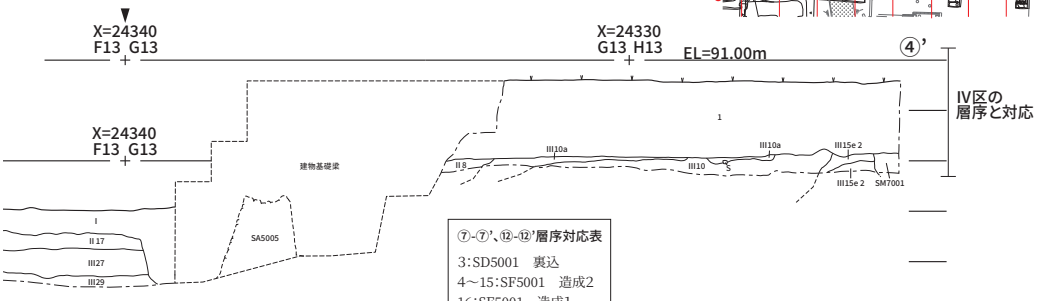
第 31 図　層序３（１）

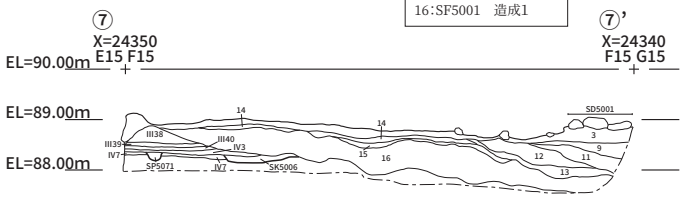


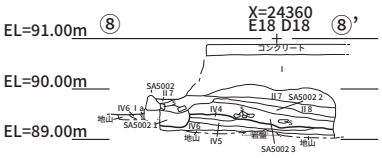








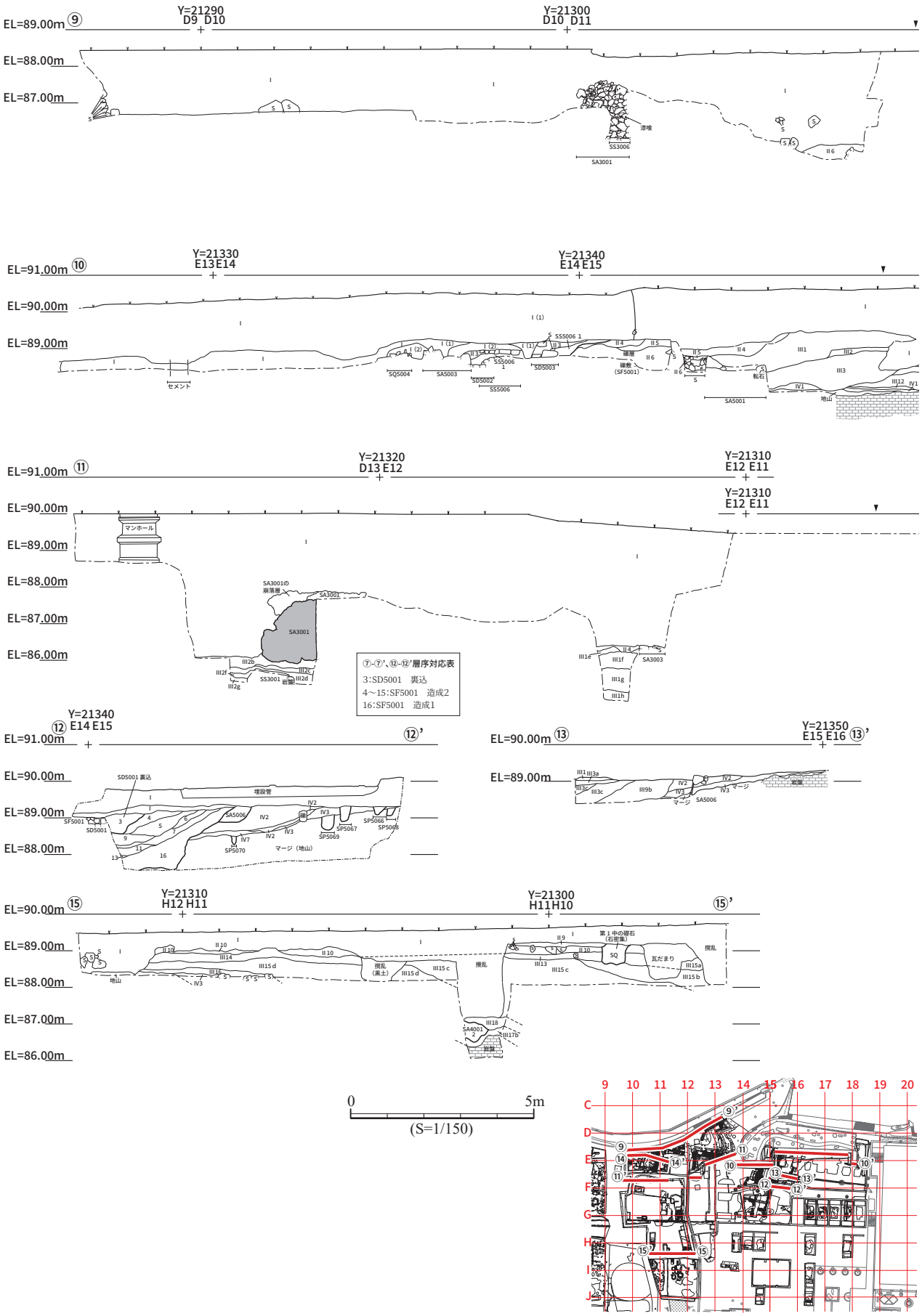




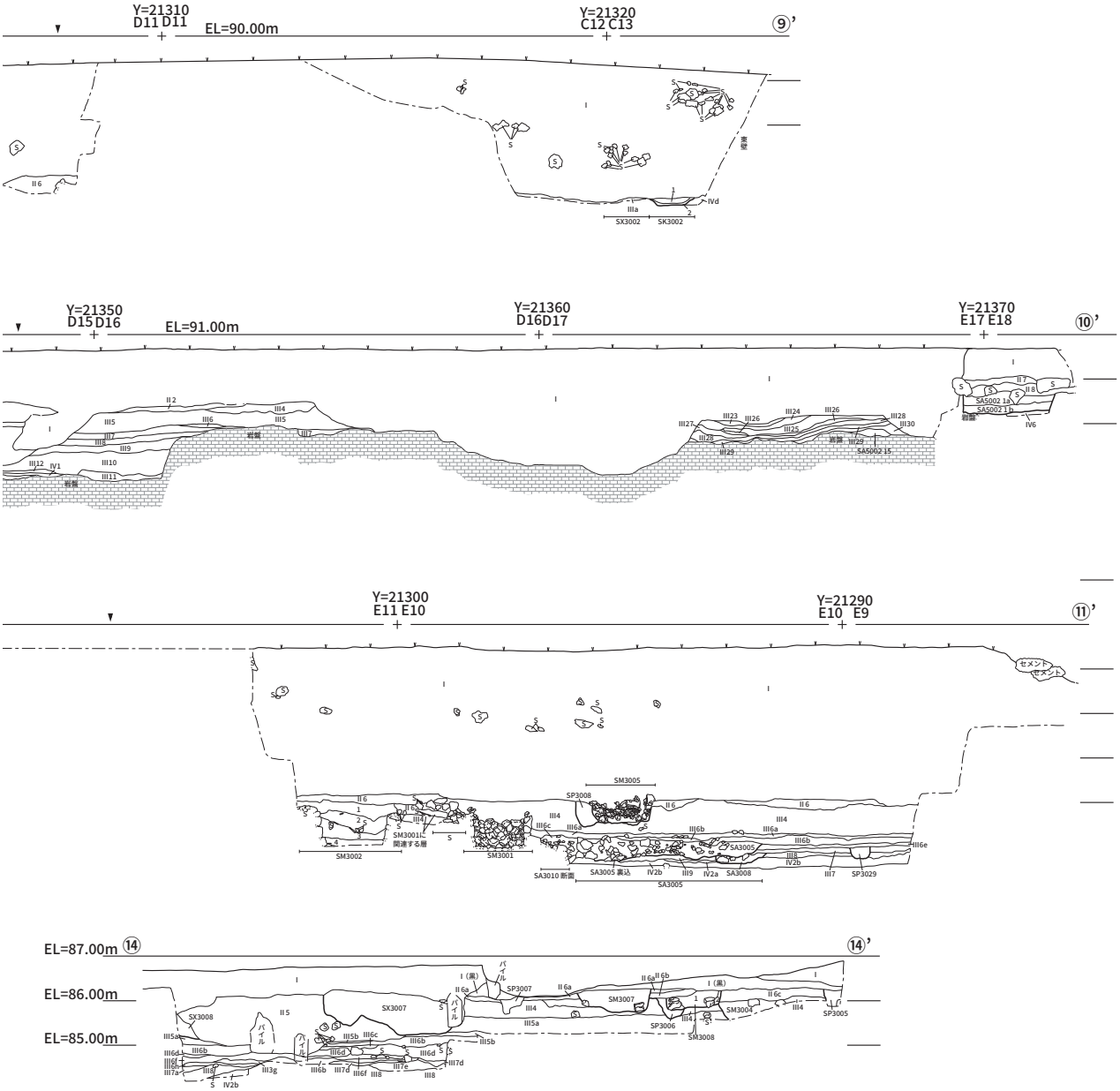
1　②－②'Ⅳ区北東壁(西から)

2　②－②'Ⅳ区南 東壁(西から)

第 32 図　層序３(２)


EL=89.00m ⑨
Y=21290
D9 D10
Y=21300
D10 D11
EL=88.00m
EL=87.00m
EL=91.00m ⑩
Y=21330
E13 E14
Y=21340
E14 E15
EL=90.00m
EL=89.00m
EL=91.00m ⑪
Y=21320
D13 E12
Y=21310
E12 E11
EL=90.00m
EL=89.00m
EL=88.00m
EL=87.00m
EL=86.00m
⑦-⑦'、⑫-⑫'層序対応表
3:SD5001　裏込
4～15:SF5001　造成2
16:SF5001　造成1
EL=91.00m ⑫
Y=21340
E14 E15
⑫'
EL=90.00m
EL=89.00m
EL=88.00m
EL=90.00m ⑬
Y=21350
E15 E16 ⑬'
EL=89.00m
EL=90.00m ⑮
Y=21310
H12 H11
Y=21300
H11 H10
⑮'
EL=89.00m
EL=88.00m
EL=87.00m
EL=86.00m
0
5m
(S=1/150)
9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
C
D
E
F
G
H
I
J

第 33 図　層序４（１）



1　②－②'Ⅳ区南 東壁（西から）

2　②－②'Ⅳ区南 東壁（南西から）

第 34 図　層序４（２）

1　②－②'Ⅳ区南 東壁(南西から)

2　③－③'Ⅴ区 トレンチ８ 西壁(東から)

3　③－③'Ⅴ区 トレンチ８ 西壁(東から)

4　③－③'Ⅴ区 トレンチ８ 西壁(東から)

5　④－④'Ⅴ区 トレンチ８ 東壁(西から)

6　④－④'Ⅴ区 トレンチ８ 東壁(西から)

7　④－④'Ⅴ区 トレンチ８ 東壁(西から)

8　④－④'Ⅵ区 東壁５(南西から)

第 35 図　層序５

1　⑤－⑤'Ⅲ区東 東壁(西から)

2　⑥－⑥'Ⅲ区東 東壁(西から)

3　⑦－⑦'Ⅴ区 西壁６(南東から)

4　⑧－⑧'Ⅴ区 トレンチ７西壁(東から)

5　⑨－⑨'Ⅲ区西 北壁(南から)

6　⑩－⑩'Ⅴ区 北壁(南東から)

7　⑩－⑩'Ⅴ区 北壁１(南東から)

8　⑩－⑩'Ⅴ区 北壁(南から)

第 36 図　層序６

1　⑪－⑪'Ⅲ区東 南壁（北から）

2　⑪－⑪'Ⅲ区東 南壁（北から）

3　⑪－⑪'Ⅲ区西 南壁（北から）

4　⑫－⑫'Ⅴ区 北壁５（南から）

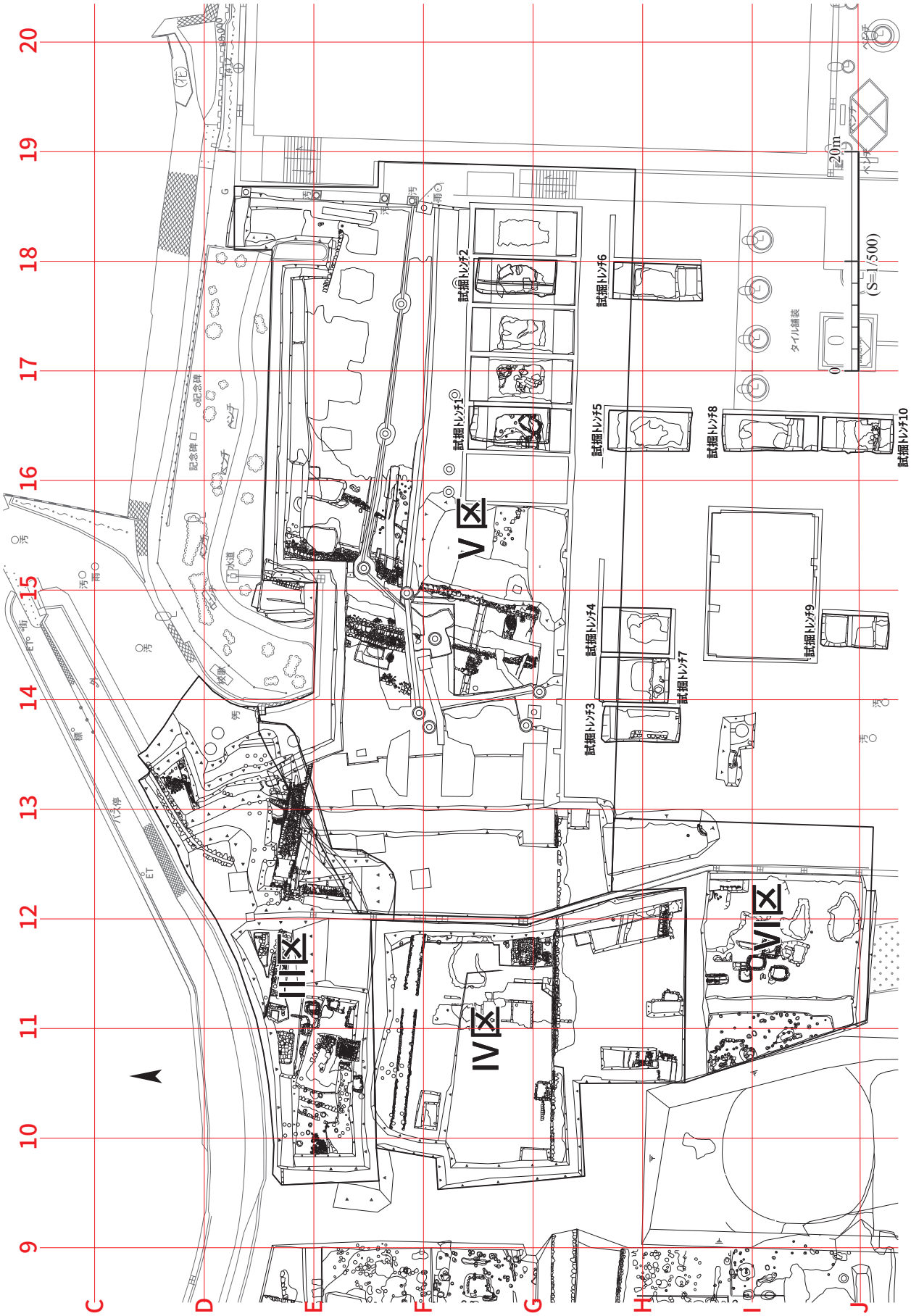
5　⑬－⑬'Ⅴ区 北壁６（南東から）

6　⑭－⑭'Ⅲ区西 北壁（南から）

7　⑭－⑭'Ⅲ区西 北壁（南から）

8　⑮－⑮'Ⅳ区 南壁（北東から）

第 37 図　層序７


20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
C
D
E
F
G
H
I
J
試掘トレンチ1
試掘トレンチ2
試掘トレンチ3
試掘トレンチ4
試掘トレンチ5
試掘トレンチ6
試掘トレンチ7
試掘トレンチ8
試掘トレンチ9
試掘トレンチ10
V区
III区
IV区
VI区
タイル舗装
(S=1/500)
20m
0

第 38 図　全体図

第 39 図　III区平面図

第４章　発掘調査の成果

第１節　遺構

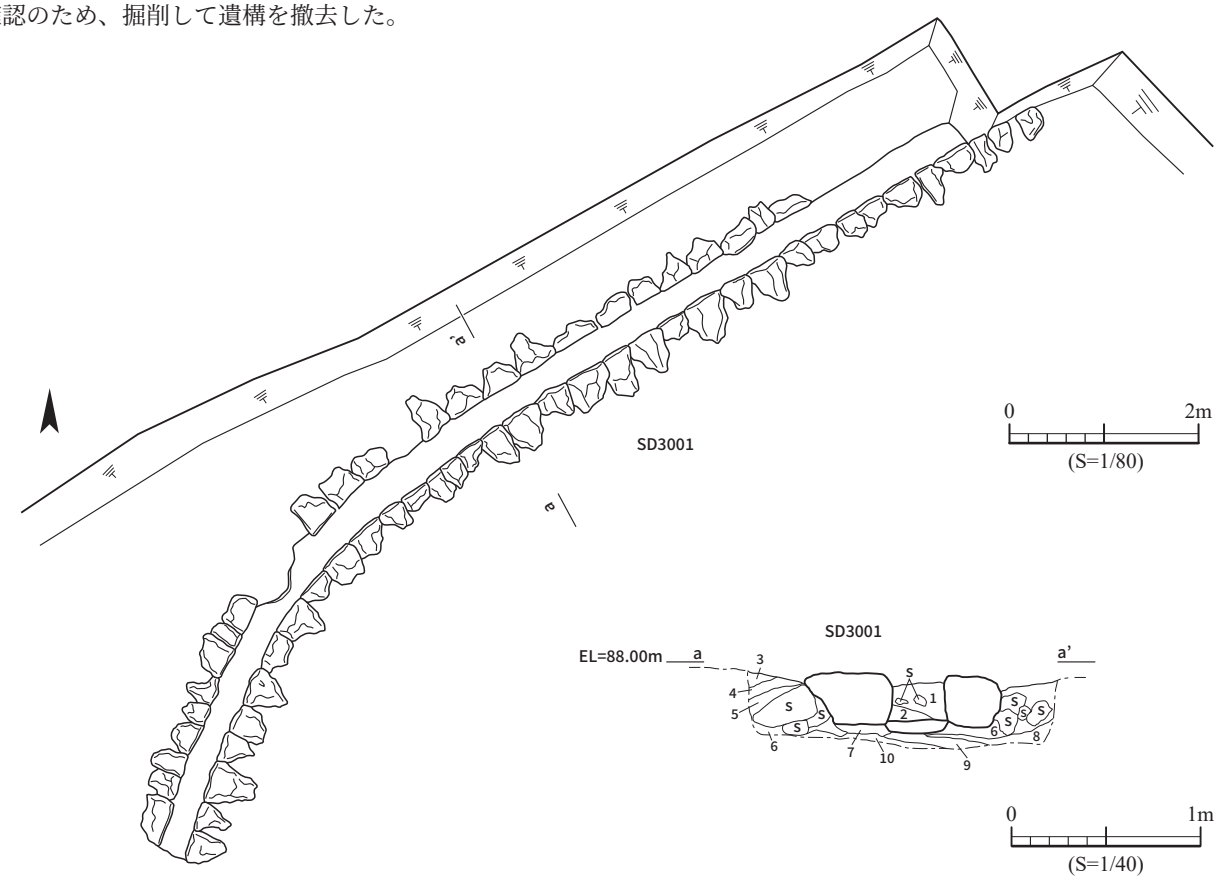
今回の発掘調査で確認された遺構を、調査区毎に述べる。

第１項　III区

SD3001

Ⅰ層中に確認した溝跡。溝石は１段のみ残存しており、溝床の石材には漆喰を塗り、平坦になるように整形されている。堆積状況や漆喰利用の点などから、近代以降の首里高校校舎に関連する溝跡と判断した。記録後に下層確認のため、掘削して遺構を撤去した。

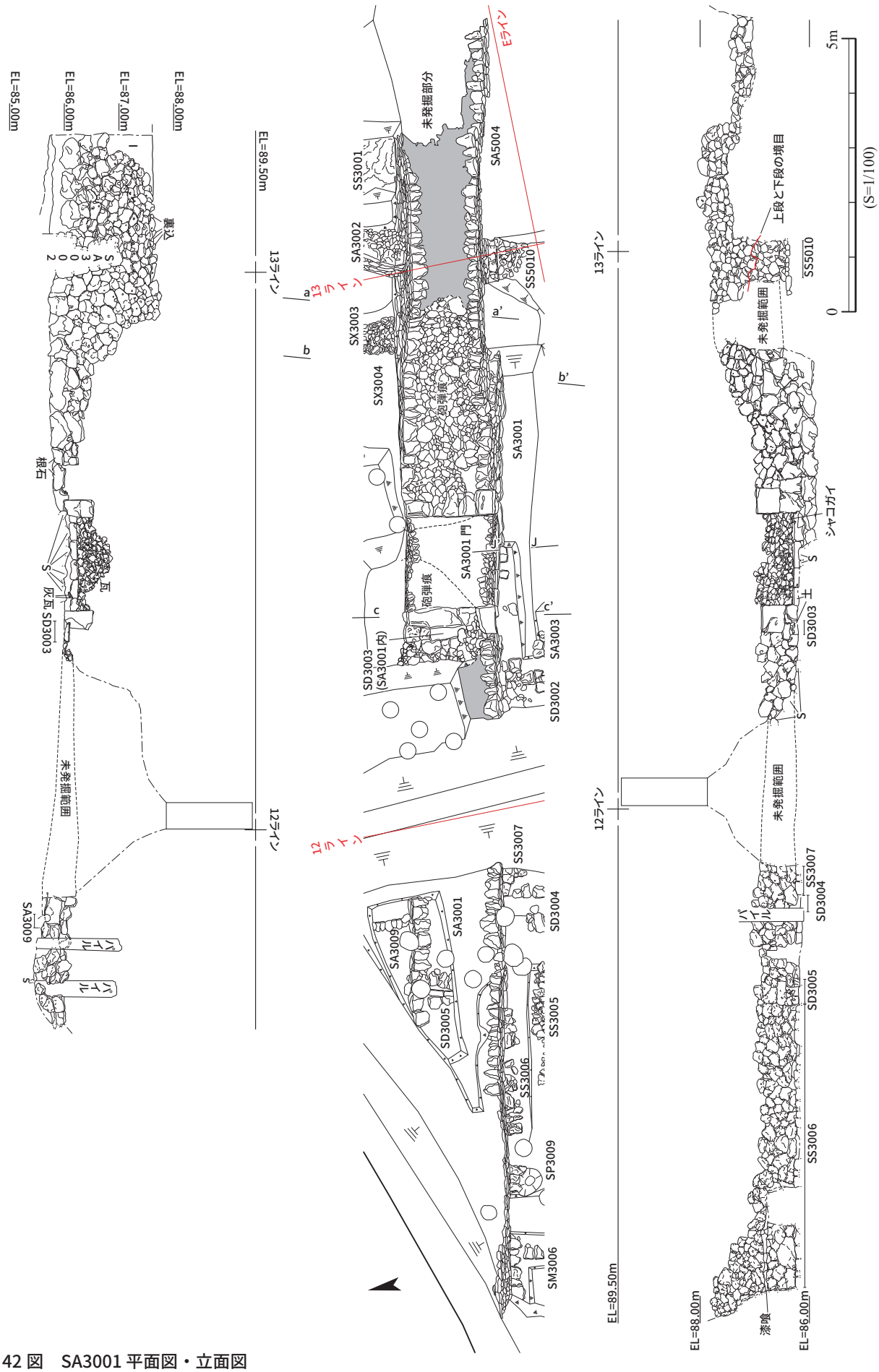
第 40 図　SD3001 検出状況（南西から）



SD3001
1　Hue7.5YR4/6 褐色、少量の炭・多量の石灰岩礫を含み、多量の鉄片が見られる。
2　Hue7.5YR4/6 褐色、砂質で炭を少量含む。
3　Hue10YR4/3 にぶい黄褐色。
4　Hue10YR5/6 黄褐色、砂質の層。
5　Hue2.5YR3/3 暗オリーブ褐色、ブロック状に（Hue10YR4/6）褐色が混ざる。
6　Hue2.5YR5/6 黄褐色、砂の層。
7　Hue10YR4/3 にぶい黄褐色、石灰岩の大礫～巨礫を含む。
8　Hue10YR4/6 褐色、（Hue7.5YR5/6）明褐色が混ざる。マージ由来の白砂粒がやや含まれ、鉄片や釘が見られる。
9　Hue2.5YR4/6 オリーブ褐色、マージ粒が僅かに混入し、白砂がやや入る。
10 Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色、マージ粒・石灰岩の小礫を含む。

第 41 図　SD3001 平面図・断面図

SD3001 断面（北東から）



第 42 図　SA3001 平面図・立面図

SA3001（Ⅴ区：SA5004）・SS3001

調査区北側で確認した石積遺構。Ⅲ区で確認できた根石部分はⅢ２ｂ層上に設置されていた。根石が設置されている部分の下層には、石敷遺構としたSS3001等が確認できた。これは石灰岩の岩盤上部を整形しており、SA3001設置時に地盤整形している痕跡だと考えられる。同様の地盤整形は平成25・26年時に確認した石積（SA19）部分で確認された。

石積上部はⅠ層で覆われている状況で出土遺物はこの層からの出土が多い。石積の天端が残存している部分はなく、沖縄戦時の爆弾破裂等の影響と考えられる円形の破裂痕が確認できた。北側部分の崩落が大きいことから、着弾地点は北側と想定される。円形の破裂痕が２か所みられることから、２発以上の着弾があったと考えられる。SA3001の残存状況をみると、破裂痕のある部分で、石積の根石から３～４段目より上部が被害を受け残存していない。残存部分は、後述するSA3001の増築後の２段目石積部分より下部にあたる。これらのことも、増築時には埋められ、地表に露出していた部分が爆弾破裂の被害にあったことによるものと考えられる。

SA3001周辺では、首里高校校舎の基礎柱等が打設されていた。ほぼ同一地点に２本打設されている部分もあり、石積裏込めや面石部分には打設が困難だったことが伺える。石積に設置された暗渠部分には基礎杭が打設されており、暗渠として空間があった状況を示している。

石積には門跡が確認でき、門内部は石積裏込め石より小さい石で埋められていた。石積増築時に下層部分が埋戻されたと考えられる。門内の南東隅の最下部にはシャコガイが伏せられた状態で設置されていた。このシャコガイについては、第４章第３節で詳細を述べる。

根石は約50㎝前後の石材が用いられ、１段で構成されている。それ以外の面石は約30㎝前後の石材が用いられている。裏込めには石灰岩が用いられていた。

この石積が確認された地点や門跡の存在から、中城御殿の北側石牆であると判断した。

この石積が機能していたと考えられる層があり、中城御殿内側にあたる南側ではⅢ１ｃ層に根石が設置され、その根石１段を埋めるようにⅢ１ａ・Ⅲ１ｂ層があり、Ⅲ１ａ層上面には石敷遺構等（SS3001）があり、この門跡等が機能していた当時の層だと考えられる。

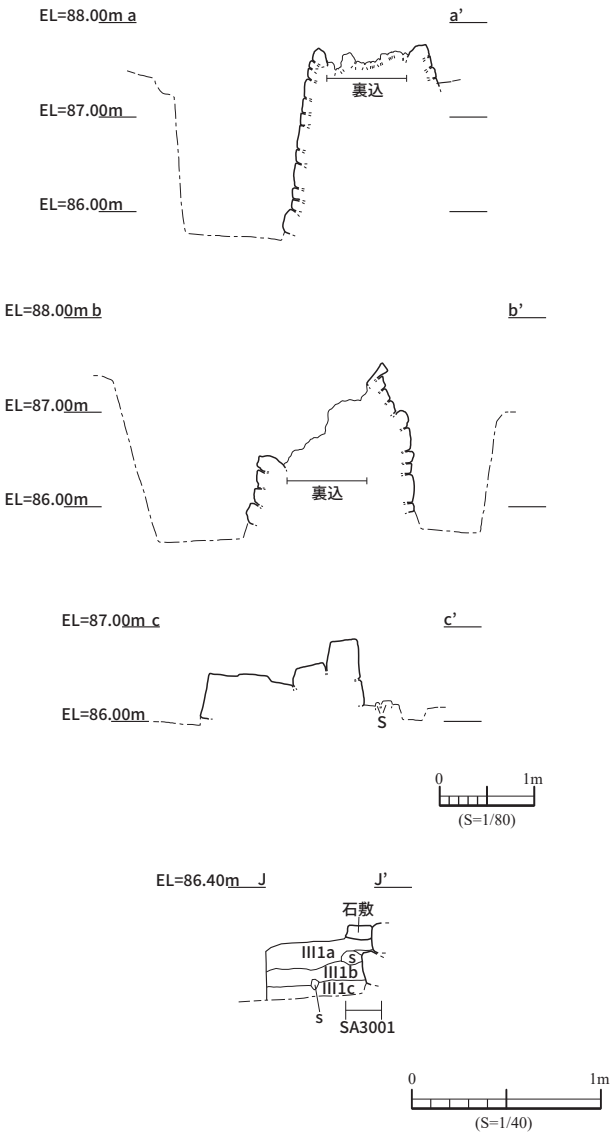
中城御殿外側にあたる北側では、根石設置Ⅲ２ｂ層は確認できたが、機能面にあたる層は確認することが出来なかった。

石積に関連する遺構として、SD3003、SD3004、SD3005の３か所の溝跡を確認した。この溝跡は暗渠として機能していたと考えられ、雨水等を場外へ排水する機能を有していたと考えられる。

SA3001の西側部分では、石積の途中に漆喰と思われるものが塗布された部分もあることから、石積の機能面として二時期あることが伺える。Ⅲ区の調査ではこの部分はⅠ層中に含まれていたことから、明確に確認できなかったが、Ⅴ区の調査で、この石積が上段と下段に分かれ、二時期にかけて利用されていたことが判明した。

SD3003・SD3004・SD3005

SA3001内に設置された溝跡。石積より南側まで溝が延長されている状況がわずかに確認できたが、削平等されており、その構造等は不明な状況だった。SD3003は、溝内部までⅠ層が堆積している状況だったため、石積内部分には、検出時には土が堆積している状況だった。南側からみると、石がない状況でその部分に土が堆積している状況だったので、機能時には暗渠として機能していたと考えられる。



第43図　SA3001断面図

SA3002

SA3001 北面に対して垂直に構築された石積。SA3002 はⅡ層上に設置されており、根石の石が小さく、面石に用いられた石材のほうが大きい状況だった。裏込めからは本土産近代磁器が確認できた。SA3002 は北東に向けて延長されると考えられるが、延長部分は首里高校校舎基礎杭等により削平されており、確認することは出来なかった。

SA3003

SA3001 の南側で確認された石積で１段のみ確認できた。Ⅲ１ｅ層上に設置されている。SA3001 の機能面より上層の堆積土に設置されている状況だったが、造成工事等の堆積差と考えられるため、機能時はほぼ同時期だったと考えられる。南側に延びるが、延長部分を確認することは出来なかった。

SA3005

Ⅲ区の南壁部分でのみ確認した石積。Ⅳ２層及び地山に近い部分に設置され、Ⅲ６ａ層により覆われており、その際に天端等や裏込めが削平されている。北側への延長については、確認できなかった。南側については、Ⅳ区の調査時に、この遺構を検出した深度までの掘削を行わなかったため、確認することが出来なかった。

北東側に向くように面石が設置されている。

SA3010

SA3005 の北東部分に隣接して確認した石積。Ⅲ７ｃ層上に設置されており、SA3005 よりわずかに新しい。Ⅲ６ａ層、Ⅲ６ｃ層に覆われる。南北へ延びるが、延長部分の掘削を行っていないので、全容は確認していない。

東側に向くように面石が設置されている。

SA3006

Ⅰ層上に設置されており、隅丸方形状の石積遺構。堆積状況から近代の遺構だと考えられる。付近に近代と考えられる遺構があり、それに関連する遺構だと考えられるが、全容は不明。記録後に下層確認のため、南側部分は掘削して遺構を撤去した。

SK3001

SA3001 の北側で検出した上部が削平された浅い土坑。遺構内から金属製品が出土した。SA3001 の根石が設置されているⅢ２ｂ層上で検出したが、関連性等については不明。

第 44 図　SA3002 立面（東から）

第 45 図　SA3003 検出状況（北から）

第 46 図　SA3005・SA3010 検出状況（北から）

第 47 図　SA3006 検出状況（南東から）

SK3002

調査区北壁付近で検出した上部が削平された浅い土坑。北側は壁面内に残存している。Ⅲａ層を掘りこんで形成している。遺構完掘時には、下層に明朝系灰色瓦等が確認できた。

SS3002

Ⅳ１ｄ層上で確認した石敷遺構。上層にはSX3002が確認でき、下層確認のためサブトレンチを設置した部分で確認した。石敷遺構としたが、石灰岩の小礫を敷き詰めたような遺構で、密に充填はされておらず、まばらな状態である。何らかの遺構面で歩道等の機能が考えられるが、広がりについては確認していない。類似する遺構は平成25・26年度調査時（SS10、SS16）にも確認している。

SX3002

Ⅱ３層を掘削後、Ⅲ３ａ層とした層序中に確認した瓦列遺構である。瓦列部分は３～４枚の瓦が重なった状況だった。北東方向に列がある状態で、北西側には石灰礫や瓦片等が多く確認できた。

用途や機能については不明だが、屋敷区画等の可能性がある。

SX3003・SX3004

SA3001の北側で確認した遺構で、石灰岩礫の小片等が多く混入した遺構。遺構保存が可能な深度だったため、検出段階で調査終了し、現地保存した。また、掘削部が狭い状況で詳細を確認することはできなかった。

第48図　SK3001半截状況（北から）

第49図　SK3002断面（南から）

第50図　SS3002検出状況（東から）

第51図　SX3002検出状況（北から）

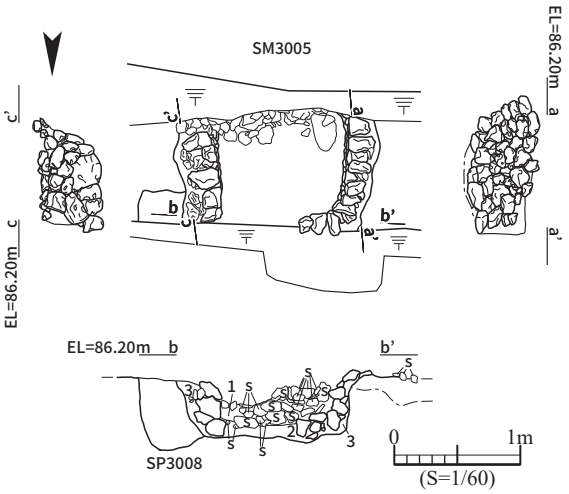
第52図　SX3003・SX3004検出状況（北西から）

SM3005

１層掘削後に検出した石組土坑で、Ⅱ６層を掘りこんでいる。上部及び北側は削平されていた。南側は壁面内に残存している。

方形状と考えられ、遺構内からは明朝系瓦や沖縄産無釉陶器、本土産近代磁器が出土した。検出状況及び遺構内出土遺物から、近代以降の遺構と判断した。床面には石敷等はなかった。

第 53 図　SM3005 半截状況（北から）



SM3005
1　Hue10YR3/3　暗褐色、大礫を含み、沖無が見られる。
2　Hue10YR3/3　暗褐色、大礫と小礫を含む。
3　Hue7.5YR3/3 暗褐色、大礫と小礫を含む。

第 54 図　SM3005 平面図・立面図・断面図

SM3007

１層除去後、確認した石組土坑。上部と南側が削平されていた。遺構検出時には、石組の石は確認できなかったが、掘りこみが確認できたことから遺構と捉え、掘削したところ、石組土坑であることが判明した。

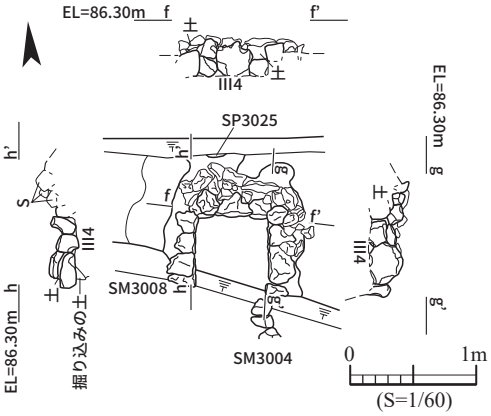
１つの石組ではなく、２つの石組が重なったような構造をしているが、残存状況から詳細を把握することは困難だった。床面に石敷等はなかった。

第 55 図　SM3007 検出状況（南から）

SM3008

１層除去後、確認した石組土坑で上部と南側は削平されていた。遺構の下部には SM3004 があり、削平するような形で形成されている。

第 56 図　SM3004・SM3008・SM3009 検出状況（南から）

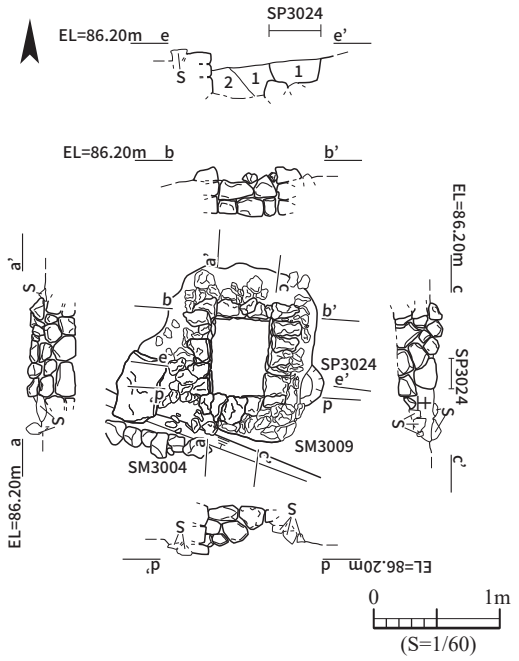


第 57 図　SM3008 平面図・立面図

SM3009

１層除去後、確認した石組土坑で上部が削平されていた。SM3004 を削平する形で形成されていた。また SM3009 の南西側に大型の石灰岩が設置されているが、関連性については不明である。床面に石敷等はなかった。

半截記録をとった後、南側を断ち割って断面を確認した。面石となる石の隙間に裏込めを密に充填している状況が確認できた。石組土坑を形成するための掘りこみはわずかに確認でき、下部にいくにつれほとんど確認できない状況だった。



SM3009
1　Hue10YR5/4　にぶい黄褐色、炭を含み、瓦(赤)が見られる。
2　Hue10YR5/3　にぶい黄褐色、自然遺物が多く見られる。

第 58 図　SM3009 平面図・立面図・断面図

SM3001

Ⅲ４層上で検出した石組土坑で、検出時には北半分は攪乱を受けていた。石組上部も削平されており、Ⅲ４層上で検出した際には、この遺構に関連するオリーブ褐色土が堆積していた。Ⅲ４層中の高さで、東側に向けて石組の石が崩れている状況だったので、Ⅲ４層堆積時に削平が行われ、Ⅱ６層堆積時に完全に覆われたと考えられる。

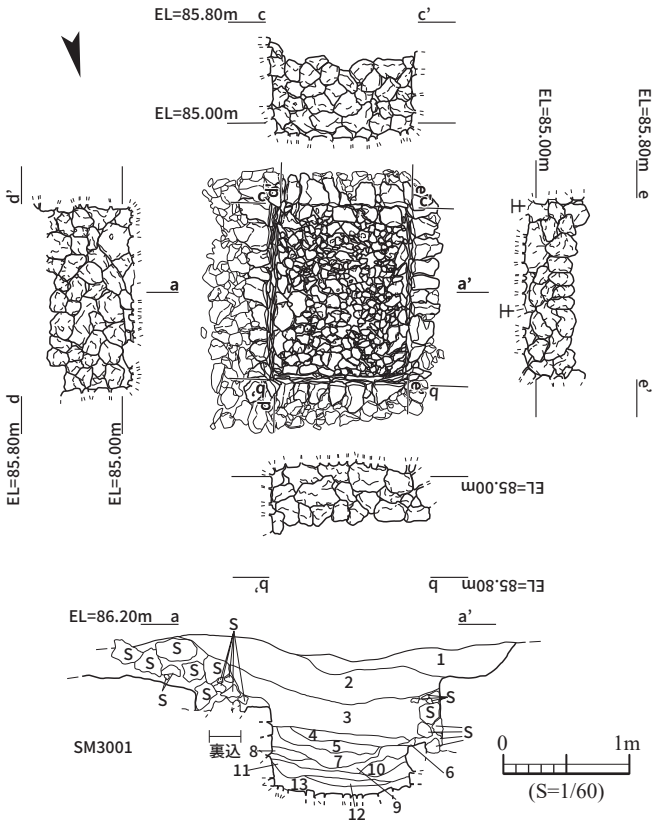
この遺構の構築時にはⅢ６a 層も掘りこんでいることが確認できるため、機能時には約１m 前後の深度があったことが想定できる。

石組が残存している高さの遺構内堆積土からは、炭化物片や人工遺物、貝･骨などの自然遺物が多く得られた。石組床面は石敷になっている。レンズ状堆積しており、人為的に何度か掘り返されている状況が想定できる。部分的にはいる層(５・８・10・12)とこれらの層を覆う層(４・６・７・９・11)と堆積度で様相が異なる状況が観察できた。このことから、掘り返したのち、水平にならすことを短期間のうちに複数回行われていることが伺える。

このような何度か掘り返したような遺構は、平成 25・26 年度のグスク時代の遺構(SK51 等)で確認できた。また、首里城跡淑順門南側でシーリ遺構とされた遺構でも確認されている(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010)。

以上のような状況から、有機質のものを廃棄した土坑で、何度か掻き出しを行っている遺構と判断した。

出土遺物には、中国産青花、沖縄産無釉陶器(初期沖縄産無釉陶器が主体)、煙管、瓦が見られた。



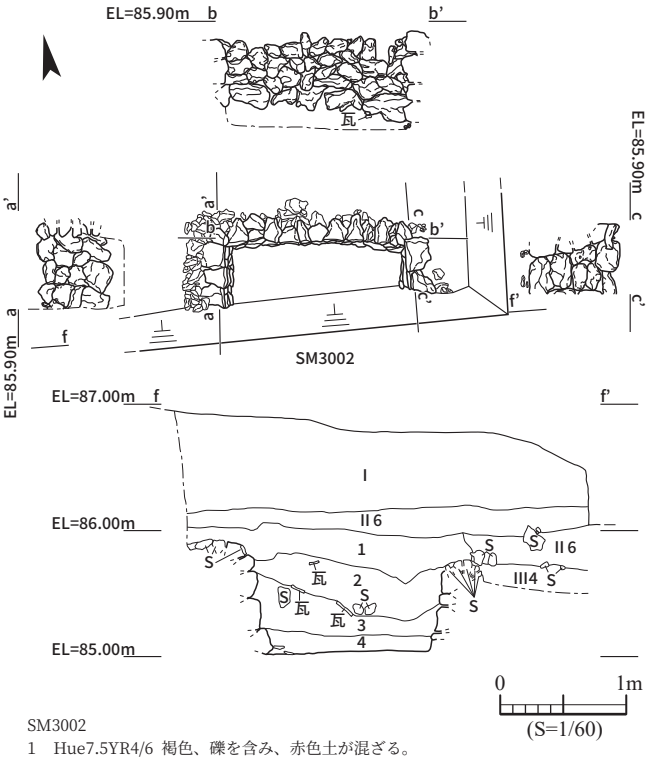
SM3001
1　Hue10YR4/4　褐色、礫を含み、赤色土が混ざる。
2　Hue2.5YR4/4　オリーブ褐色、炭・マージ粒・礫を含み、瓦(赤)が見られる。
3　Hue10YR4/4　褐色と(Hue5YR5/3)灰オリーブ色が混ざり、一部(Hue2.5YR4/4)オリーブ褐色も入り、礫がつめられる。オリーブ褐色の所は炭･マージ粒が少量含まれる。
4　Hue2.5YR4/3　オリーブ褐色、炭を多く含む、大礫・小礫・瓦(赤・灰)・赤色の瓦当などが見られる。
5　Hue2.5YR4/3　オリーブ褐色、砂・小礫・炭・マージ粒を含む、瓦・陶器などが見られる。
6　Hue2.5YR4/3　オリーブ褐色、炭・小礫を多く含む。
7　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、礫・炭を含み、瓦や陶器が見られる。
8　Hue2.5Y5/4　黄褐色、礫・炭を含む。
9　Hue2.5Y4/4　オリーブ褐色、マージ粒・炭を含む。
10　Hue2.5Y4/4　オリーブ褐色、小礫・瓦・炭を含む。
11　Hue2.5Y5/4　黄褐色、炭が多く、砂目・礫・少量のマージ粒を含む。
12　Hue2.5Y4/3　オリーブ褐色、炭が多く、マージ粒を少量含む、瓦・陶器などが見られる。
13　Hue2.5Y4/4　オリーブ褐色、炭が多く、少量の礫・マージ粒を含む。

第 59 図　SM3001 平面図・立面図・断面図

SM3002

SM3001 の東側で隣接して検出した石組土坑。南側は南壁内に残存している。Ⅱ６層掘削後に確認した。石組床面には石敷等はなく、遺構内埋土もほぼ水平堆積をしていた。遺構内埋土の４層上に西側の石組最下段の石が設置されているのに対し、東側の石は４層より下部に設置されていた。石組に用いられた石材は石灰岩が中心だが、１石のみサンゴ石灰岩が用いられていた。

隣接する SM3001 に比べ、人工遺物や自然遺物が少ない状況があり、床面に何もない状態であることから、石組土坑という構造は同様だが、機能には差があることが考えられる。遺構内埋土が水平堆積で短期間のうちに堆積したような状況から、中が空いた状態で機能しており、機能終了後に当遺構を埋めたことが伺える。床面を土のまま露出させている状況もあわせ、遺構内廃棄物等を溜めるのではなく、生活用水等の排水として利用したのではないかと想定している。



SM3002
1　Hue7.5YR4/6　褐色、礫を含み、赤色土が混ざる。
2　Hue10YR4/4　褐色、小礫が含まれる。
3　Hue2.5Y4/4　オリーブ褐色、マージ粒・大礫・小礫が含まれ、一部瓦が見られる。
4　Hue2.5Y4/3　オリーブ褐色、少量の小礫が含まれる。

第 60 図　SM3002 平面図・立面図・断面図

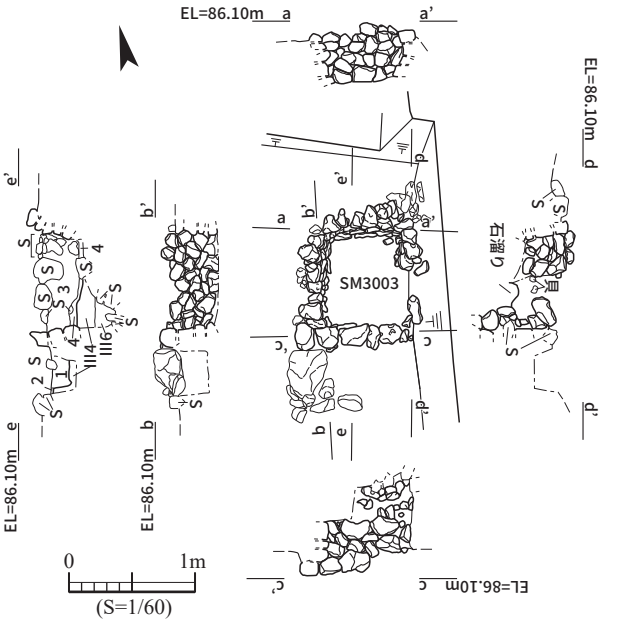
SM3003

SM3002 の北側で確認した石組土坑で、北側石組に一部石列が追加された遺構。Ⅱ６層掘削後に確認した。石組内の床面は明確ではないが、石灰岩礫が一面に敷かれている状況だった。遺構検出時には、遺構上部に石や石灰岩小片が敷かれて埋められているような状況が確認できた。

４層とした層では、動物骨のほかカンギクが多く確認できた。このカンギクは量が多く取り上げが困難だったため、土壌サンプルとして一括で取り上げた。

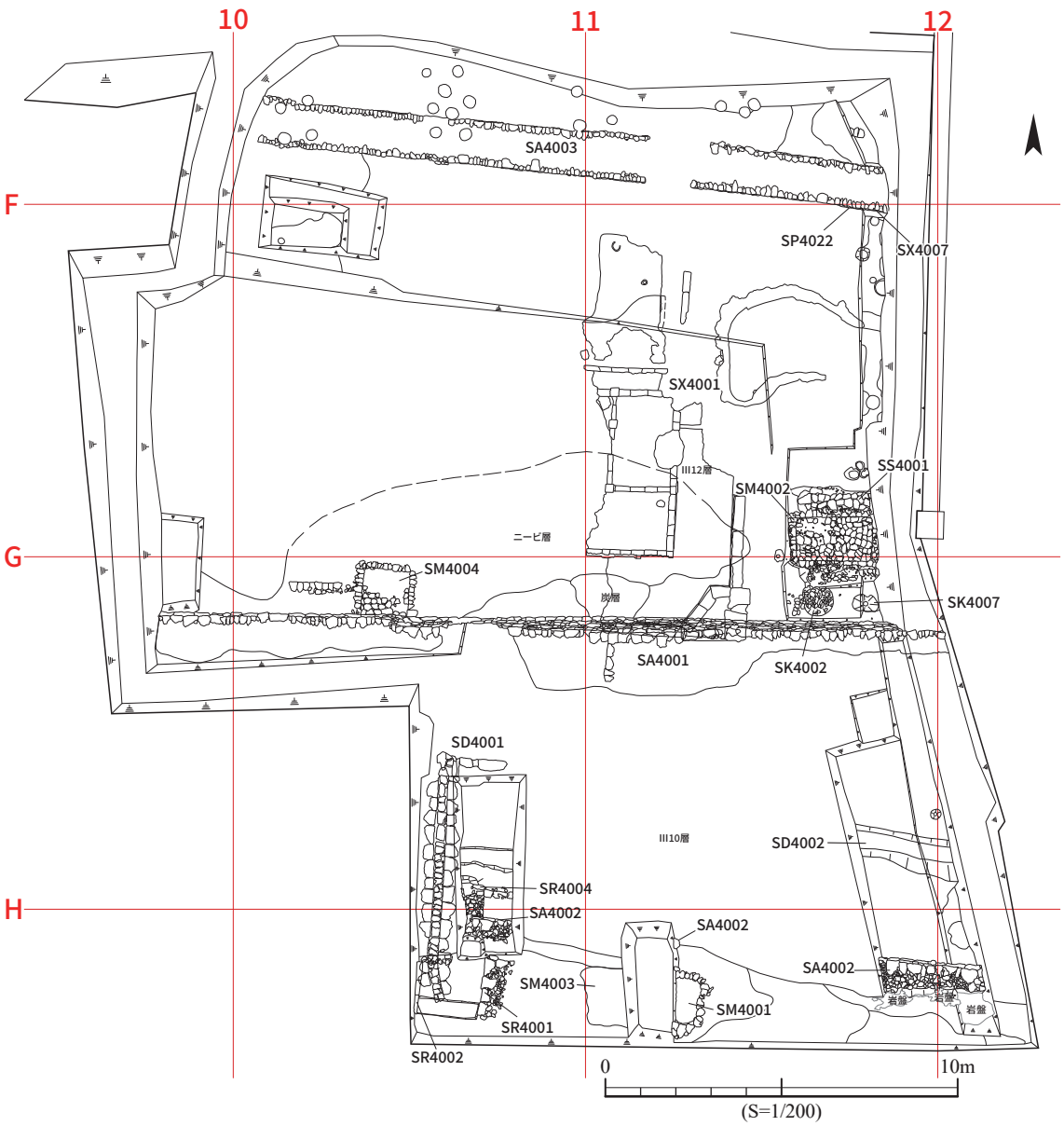
食料残滓が多く出土している特徴がある。

第 61 図　SM3003 カンギク出土状況（南東から）



SM3003
1　Hue10YR4/4　褐色、炭を含み、焼土粒・砂が混ざる。
2　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、多量に小礫を含む。
3　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、炭・焼土粒・石灰の大礫を含み、ヤコウガイ・瓦（灰）が見られる。
4　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色。

第 62 図　SM3003 平面図・立面図・断面図



第 63 図　IV区平面図

第２項　IV区

SX4001

Ⅰ層掘削中に、コンクリート造りの遺構を確認した。表面にはモルタルが塗布されていた。付近には花壇跡？と思われるものも確認したが全容は不明。また、表面には焼けたような炭が全体的に堆積している状況だった。首里高校の校舎関連の遺構だと考えられる。下層調査のため、写真撮影及び測量後に掘削した。

SD4001

Ⅰ層中に確認した溝跡。Ⅲ区で確認した SD3001 と同様に、溝床面に石敷があり、石と石の隙間に漆喰が塗布されている状況を確認できた。

確認できた層序と、構築技法から近代以降の首里高校校舎に伴う遺構と判断した。記録後、下層調査のため掘削を実施した。

第 64 図　SD4001 検出状況（南から）

SA4001・（Ⅴ区：SA5005）・（Ⅰ区：SA２）

Ⅰ層掘削後に検出した石積。当初検出した際は、方形石組かと思われたが、掘削を進めると石積であることが判明した。この石積は、Ⅳ区の東西方向に延びており、平成 25・26 年度に確認された SA２の延長部分であることが判明した。SA4001 の北側には、根石付近までⅠ層が広がっていたが、南側にはクチャを主体とした造成土が確認でき、中城御殿に伴う堆積土が残存していた。遺構が埋められた状況からも、遺構が機能していた当時から、北側と南側で高低差があったことが考えられる。

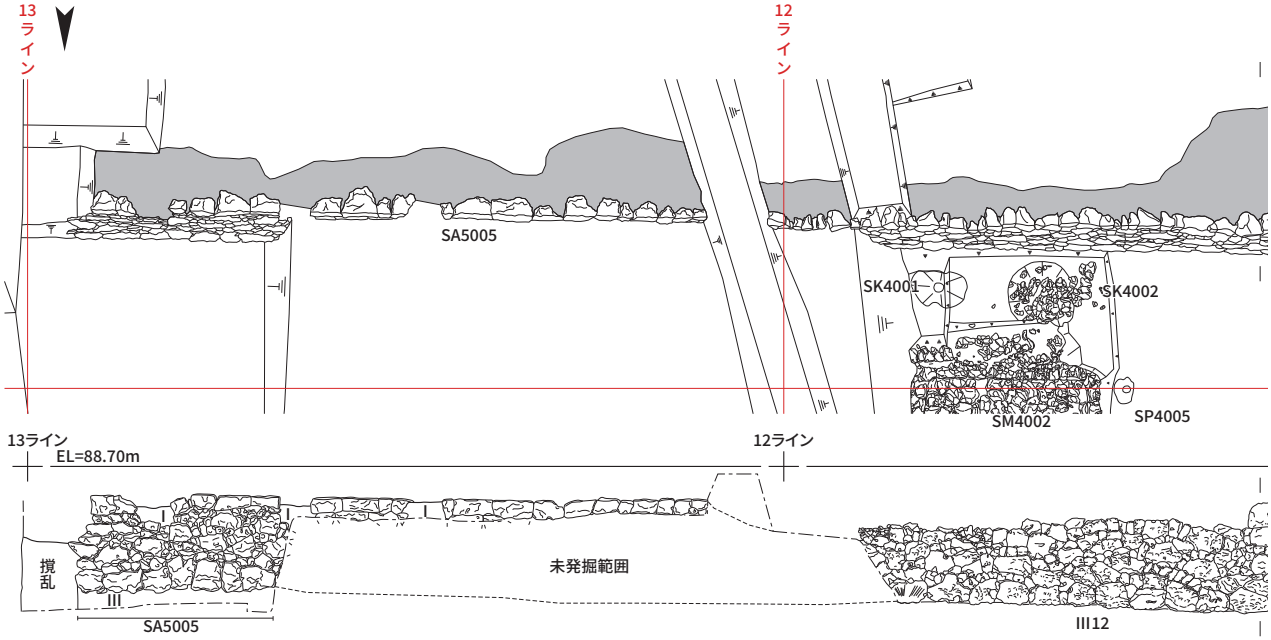
根石は、南側はⅢ 10a4 層及びⅢ 11b 層、北側はⅢ 12b 層上に設置されている。これらの層は、混入物や土色等は異なる状況だが、同一層として捉えられる。

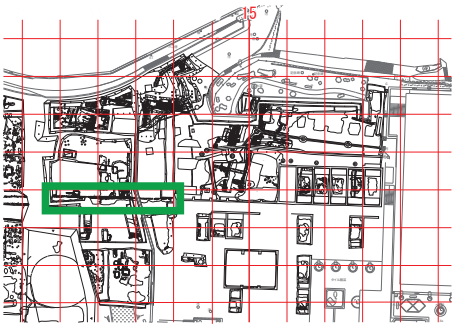
SA4001 北側では、根石を１段分埋める形でⅡ７層が堆積していた。調査中には、この層上に炭層等が確認でき、この炭層及びⅡ７層中から本土産近代陶磁器が出土したため、近代以降の層と判断した。しかし、隣接するⅤ区の調査時にも根石を１段埋める形で堆積したⅢ 27 層とした層を確認した。Ⅳ区Ⅱ７層とⅤ区Ⅲ 27 層は同一層と考えられることから、Ⅳ区で確認したⅡ７層についても近世頃までさかのぼる堆積土の可能性がある。近代遺物は上層からの混ざり込みの可能性が高い。

石積は積みなおし、もしくは積み増しした痕跡が確認された。天端を一度そろえた後に、石が積まれている部分が確認できる。

根石部分は、地形の斜面に沿って設置されているため、東側にいくにつれ設置標高がやや高くなる状況があり、天端から根石までの長さが短くなる。対して天端付近は、長方形上の面石の高さが揃うため、石積背面で平場形成することを第一に考えて設置した石積と考えられる。

この石積の特徴として、面石が人頭大の琉球石灰岩と、約 40 ㎝前後のサンゴ石灰岩を組み合わせて構築されて





SA4001 北側炭層検出状況（東から）

第 65 図　SA4001 平面図・立面図（１）

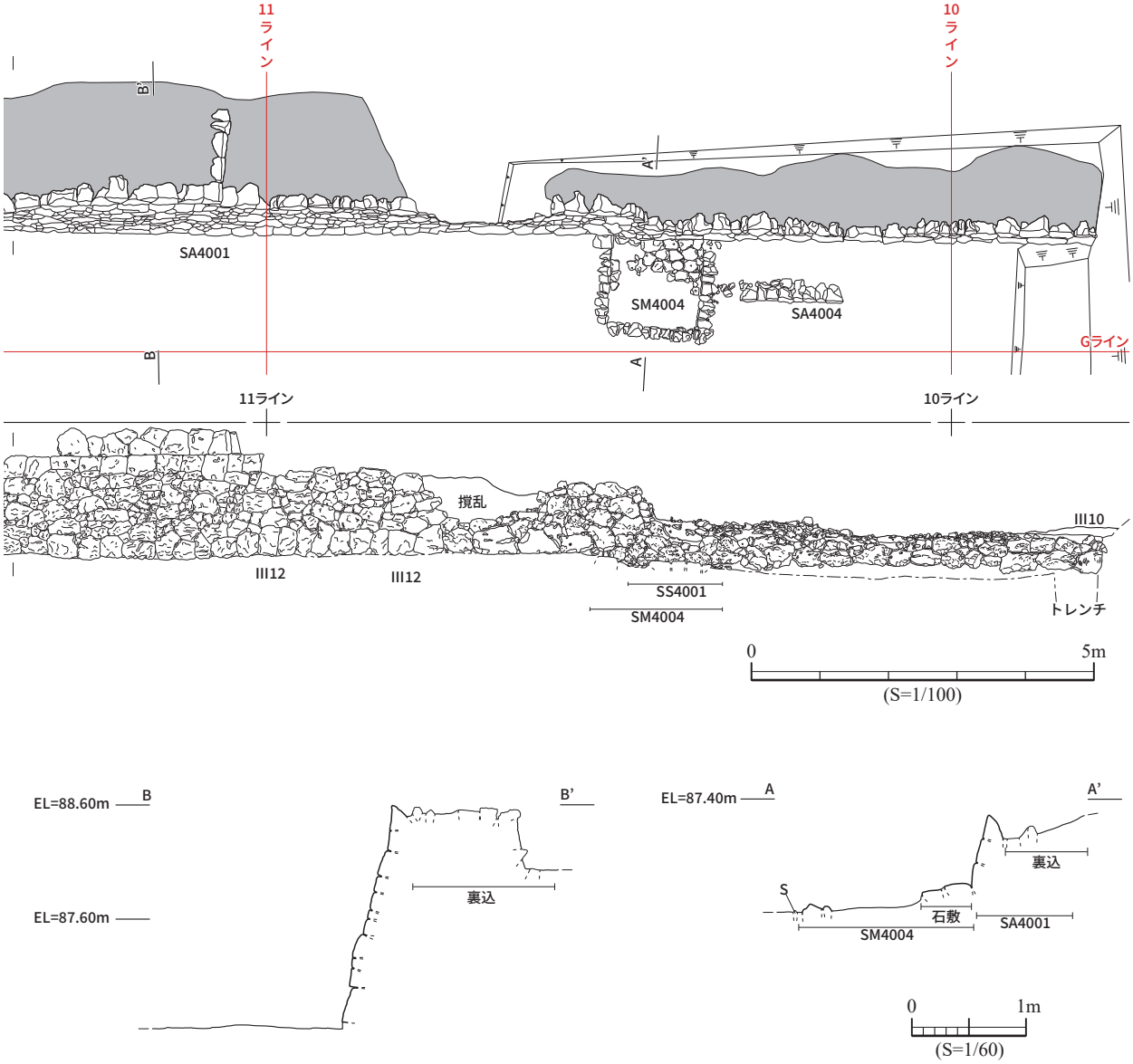
いる。中城御殿の調査において、この石積以外は基本的に琉球石灰岩のみで構築されている。また、Ⅰ区部分の石積では、一部に縦目地があり、積み直しの痕跡が確認され、この積み直しから東側（今回のⅣ区・Ⅴ区）にかけては、琉球石灰岩とサンゴ石灰岩の２種類の石材を組み合わせて用いている。

調査時には、２種類の石材の組み合わせについて、材料不足に伴う石材調達の問題、もしくは何らかの意図があり、石積の意匠表現を目的としたのではないかという議論を行った。その際、西村貞雄氏（琉球大学）、上原静氏（沖縄国際大学）に現地を確認していただいた。その結果、意匠表現を見出すことは困難だが、今後類例調査等を行うようにという助言をいただいた。首里周辺の石積遺構等で、２種類の石材を組み合わせた石積遺構について確認できなかったので、今後の課題としたい。

面石の表面には、ノミ状の工具で加工された痕跡が確認できた。ノミの刃の横幅が約４㎝前後の工具で加工されており、面石表面が平坦になるように加工しているが、加工痕跡についてはそのままの状態にしていることが確認できた。

SA4001 の南側は、近世期の造成土が堆積していたが、機能時の面は残っていなかった。また、南側には SA4002 を確認しており、SA4001 の構築後の造成土により削平後、埋められていることが判明した。

今回の調査の結果、建物を建築するための基礎構造として南側に平場形成するための石積と考えられる。前回調査及び今回の調査成果を合わせると、中城御殿内で東西に延びる遺構であり、かつ建物建築のための平場形成を目的としていることから、「首里古地図」に描かれている中城御殿内で東西に延びる石積にあたる可能性がある。



第 66 図　SA4001 平面図・立面図（２）

1　SA4001 石材加工痕１

2　SA4001 石材加工痕２

第 67 図　SA4001 石材加工痕跡

SM4004

SA4001 の北側に隣接して設置された石組土坑。遺構上部の一部に石敷がされており、石組土坑の機能終了後は、埋められた状態で機能していたことが伺える。検出した深度から、現地保存が可能な遺構だったので、平面検出のみで調査を終了した。

第 68 図　SM4004 検出状況（北から）

SA4003

Ⅰ層掘削後に確認した石積遺構で、石牆などではなく、歩道のような機能を有していたと考えられる。歩道面は削平により確認することが出来ないが、残存部分よりやや上部が歩道面と考えられる。

同様の遺構はⅠ区：SA４で確認されている。

東側ではⅡ７層上に設置され、西側ではⅢ 12a 層上に設置されている。Ⅱ７層とⅢ 12a 層はほぼ時期差がないことが想定される。Ⅱ７層とⅢ 12a 層は、SA4001 の機能時の面と考えられるため、同時期に使用されていた遺構と考えられる。

西側の根石がやや低く、東側にかけて高くなることから、緩やかな傾斜があったことが想定される。

SA4003 の北側では、根石より下層にⅡ７層を確認し、南側では、Ⅱ７層は石積と同じ高さに堆積していた。このことから、斜面地にこの石積を構築したことが考えられる。

SP4022

SA4003 の構築層より下層で確認した柱穴跡、炭が多く混入している状況だった。柱痕は確認出来なかった。

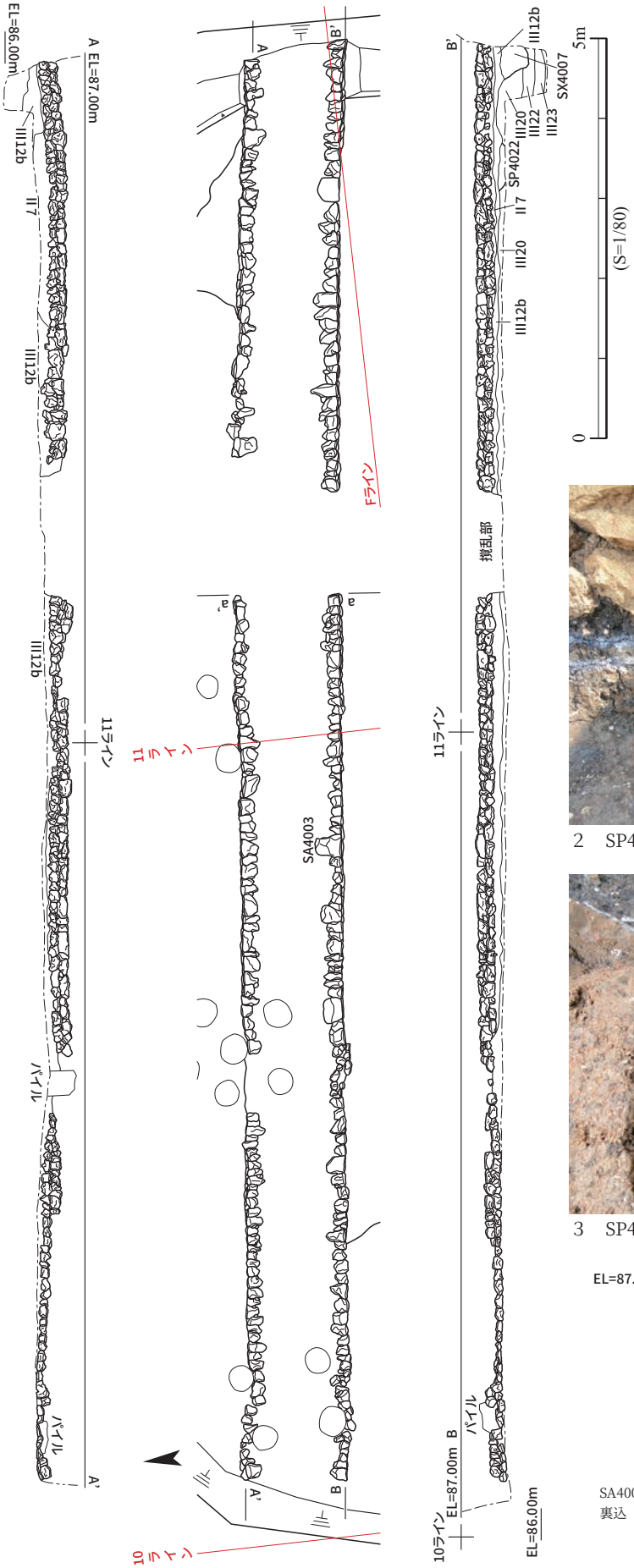
SX4007

SA4003 構築層の下層で確認した遺構、柱穴跡の可能性もあるが不明遺構とした。全体的に炭が多く混入しており、石灰岩礫等も入っていた。

1　SA4003 検出状況（南西から）

2　SA4003 断面（東から）

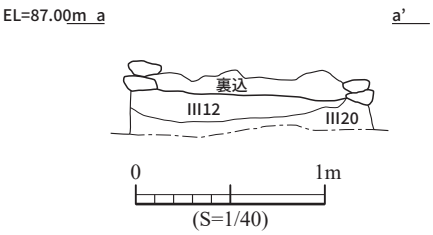
第 69 図　SA4003 検出状況・断面



1　SX4007 検出状況（南から）

2　SP4022 検出状況（南から）

3　SP4022 半截状況（南から）



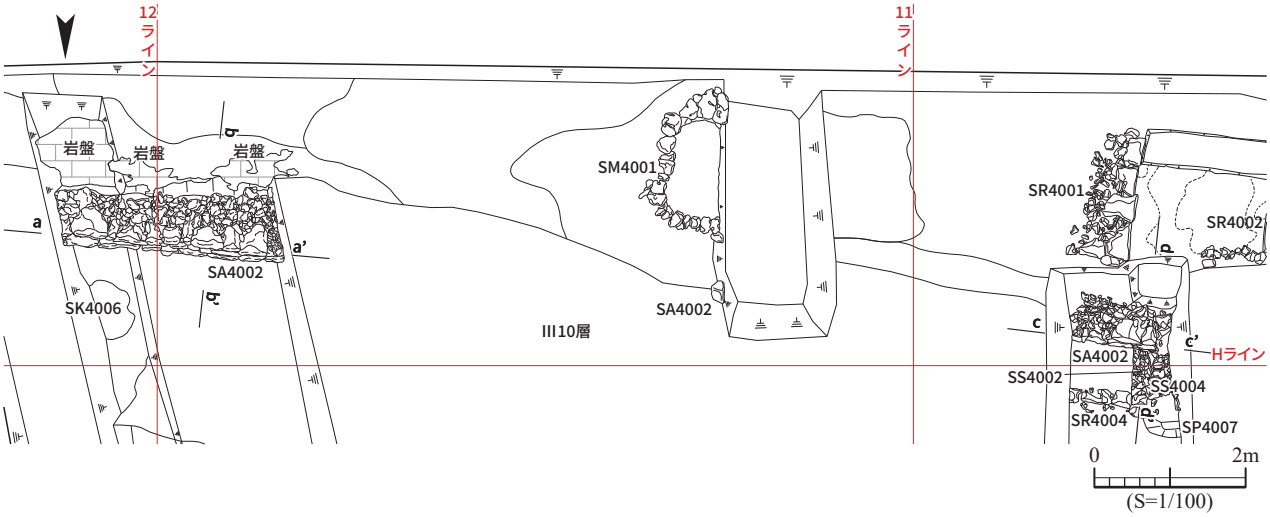
SA4003
裏込　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、少量の炭・多量の石灰岩礫を含み、瓦（赤・灰）・貝蓋・貝・青磁・青花・漆喰・沖施・沖無・河原石が混ざる。

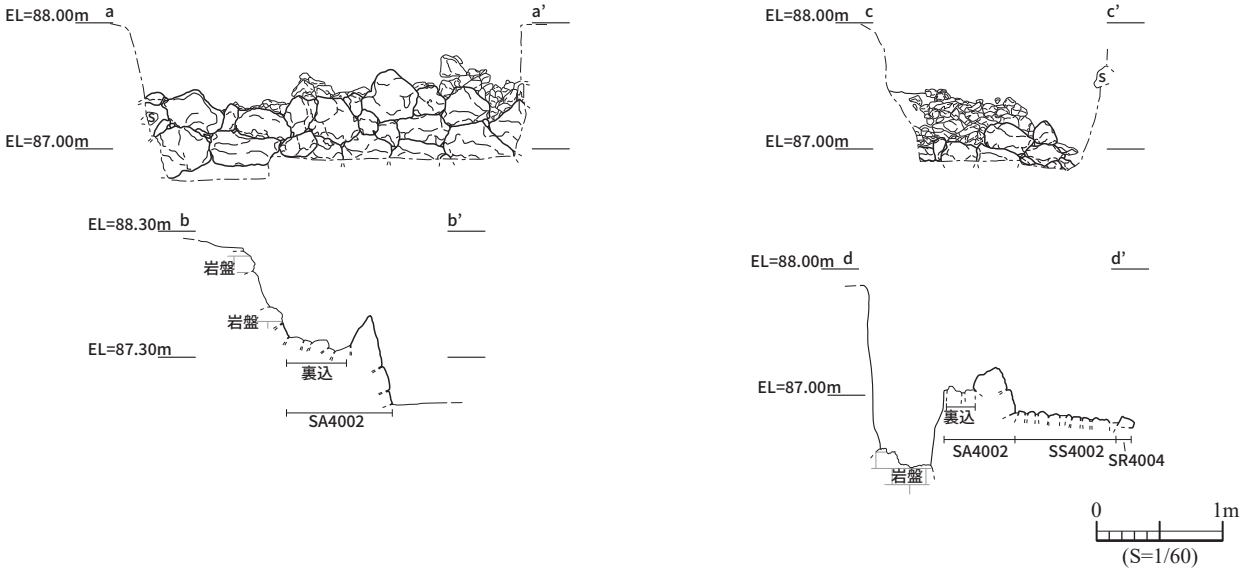
第 70 図　SA4003、SP4022、SX4007 平面図・立面図・断面図・検出状況・半截状況

SA4002・（Ⅰ区：SA３）・SR4004

クチャ層を主体とするⅢ 10a 層を掘削すると確認できた石積。根石は地山とわずかにⅢ 11e 層上に設置されていた。石積上部はⅢ 10a 層堆積時に削平されており、石積南側には、この石積に伴う造成土が残存していた。石積に伴う造成土は、SA4001 に伴う造成土とは異なる特徴を有しており、中城御殿内の調査でⅣ層としているグスク時代の土を主体に礫が混入する層が見られる。

第 71 図　遺構検出部分





1　SA4002 検出状況（北西から）

2　SR4004・SS4002 検出状況（北から）

第 72 図　SA4002・SR4004・SS4002 平面図・立面図・断面図

この石積構築時の造成土と考えられるため、周辺地形の改変が行われ、その発生土を用いたことが想定できる。

石積設置に伴う地盤整形の痕跡が北側で確認された。地山を掘りこんで地盤を整形し、そこで発生した土を埋戻すという工法を用いていたと考えられる。この工法は、Ⅲ区：SA3001 でも確認された。

削平された石積上部と、SA4001 の根石を設置した層の標高が合うことから、SA4001 は構築前に中城御殿全体の石積等を削平し平場造成を行ったことが考えられる。

この石積もやや軸がずれるが、東西方向に延びており、Ⅰ区で確認した SA３の延長部分である。西側については未調査区にあたるため、今後の調査で確認される可能性がある。

東側の一部では、南側に石敷遺構（SS4002）とそれに伴う SR4004 が確認された。この石積に伴う遺構と考えられる。

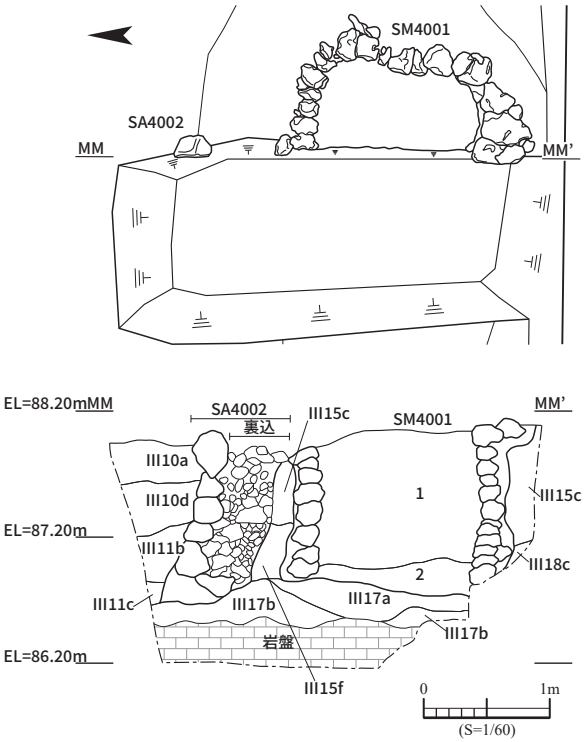
SR4001・SR4002

Ⅲ 15b 層上で確認した２列の石列遺構。石列間には、石灰岩を細かく砕いたようなものでわずかに敷かれている状況が確認できた。北側はⅢ 10 層により削平されており、全容は不明だが、歩道等に関する遺構の可能性がある。

SM4001・SM4003

SA4002 の南側にあった石組土坑で攪乱により削平を受けている状況だった。天端が残存しておらず、SA4002 南側の造成土（Ⅲ 15c 層）を掘りこんで構築されていることから、SA4002 より新しい時期の遺構と考えられる。SM4001 と SM4003 は中央部分が攪乱により削平されていた。両遺構を平面上でつなげると長方形状になり、これまで確認されている石組土坑は円形もしくは正方形に近い形をしていることと、堆積状況が異なることから別遺構とした。廃棄土坑の一種だと考えられるが、全容は不明。

第 73 図　SR4001・4002 検出状況（北東から）



SM4001
1　Hue10YR5/4　にぶい黄褐色、炭粒、多量の大礫・小礫とわずかにマージ粒を含む。貝が見られる。
2　Hue2.5Y4/3　オリーブ褐色、礫と少量の炭粒・マージ粒を含む。

SM4001 断面（西から）

第 74 図　SM4001 平面図・立面図・断面図

第 75 図　SM4003 断面（東から）

SD4002

SA4002 の北側で確認した素掘りの浅い溝跡。Ⅲ 11c 層を掘りこんだ状況で検出し、溝跡にはわずかに埋土が残存していたが、Ⅲ 11b 層の礫が多く混入している状況だった。用途等は不明。

第 76 図　SD4002 完掘状況（西から）

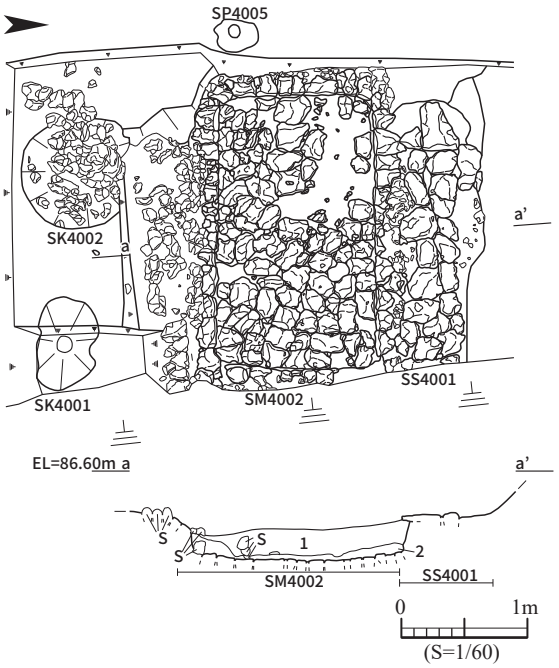
SM4002・SS4001

Ⅱ７層掘削後に確認した石組土坑と石敷遺構が組み合わさった遺構。当初は石組等が確認できず、素掘りの土坑と想定していたが、掘削を進めると石組土坑であることが判明した。

SK4007 の一部が掘削されて SS4001 が設置されている。SS4001 ２層は機能時に堆積した層と考えられる。ほぼ同時期に SM4002 が SS4001 の中心部を掘削するように設置され、隣接している状況から、同時に利用していた可能性が高い。SM4002 ２層はほぼ使用時の層と考えられ、全体的に薄く堆積している。その後、Ⅲ 12b 層などの大規模な造成により埋められるが、その後 SM4002 まで到達する深度の掘削が行われており、その部分を埋めた土を SM4002 １層とした。本来は別遺構と考えられるが、何らかの関連性が考えられることから層序付与した。

石組土坑内の石と石の隙間には漆喰が塗布されている状況が確認できた。

第 77 図　SM4002・SS4001 重複状況（南から）



SM4002
1　Hue2.5Y4/3　オリーブ褐色、多量の大礫・小礫・砂利・炭、少量のマージ粒を含み、瓦（赤・灰）・陶磁器が多く見られる。
2　Hue10YR4/2　灰褐色、大礫・小礫と、少量のマージ粒含み、瓦（灰）が見られる。

第 78 図　SM4002 平面図・断面図

SK4002

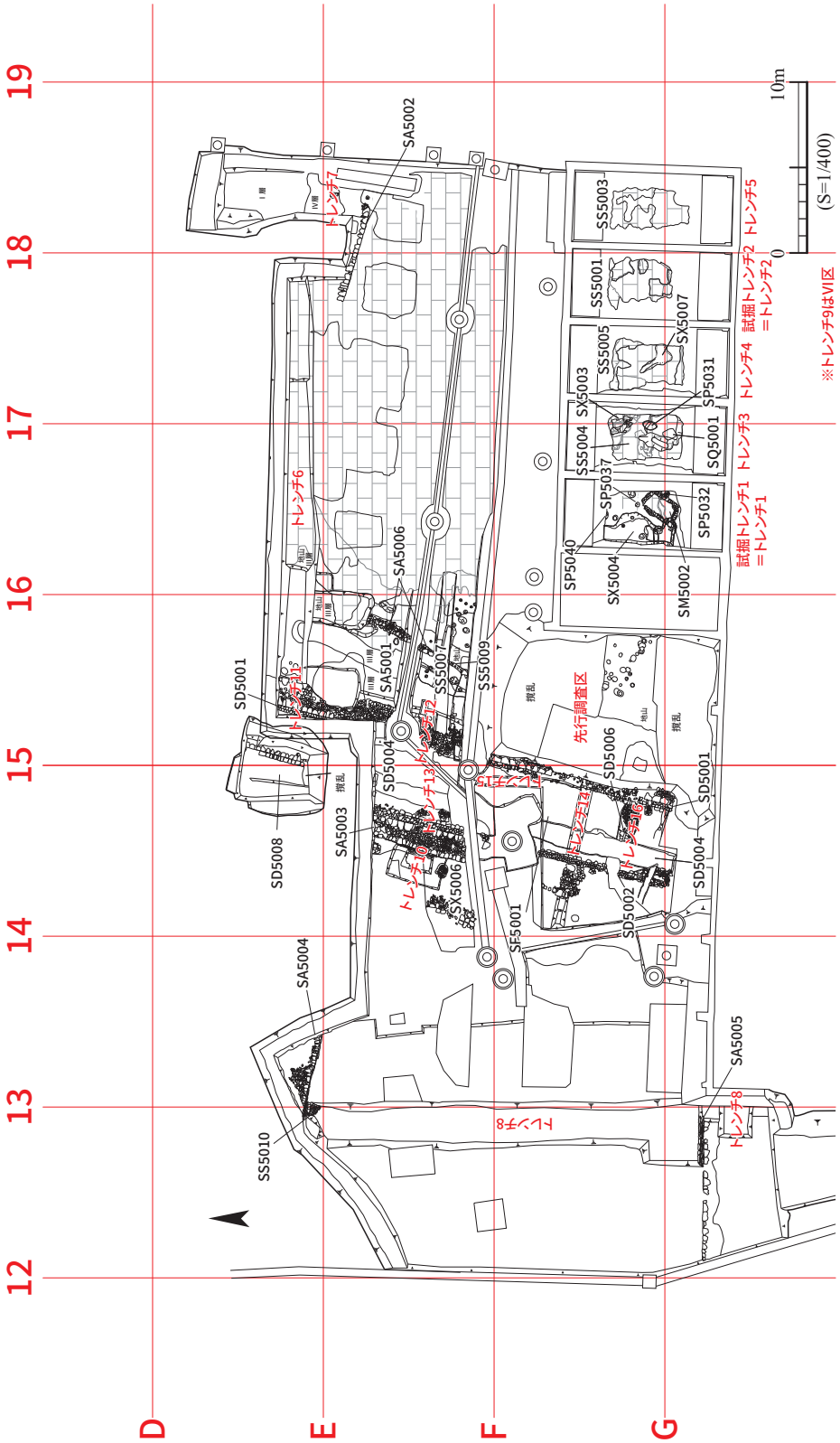
SA4001 の北側で確認した素掘りの土坑。Ⅲ 12b 層を掘りこんで形成されていた。遺構の下部は、炭等が混ざる土が堆積しており、上部には石灰岩礫のほか瓦等が混入して堆積していた。用途等は不明。

SK4007

SA4001 の北側で確認された大型の素掘り土坑。調査区壁面等まで広がっているため、全容は不明。SA4001 の南側でも地山を掘りこんでいる部分があり、当初同一遺構か不明だったため、遺構名は付与していないが、Ⅲ 10a ５～７層は、SK4007 に伴う土層の可能性が高い。地山を掘りこみ形成され、Ⅲ 12b 層で埋まる状態だったため、SA4001 に伴う造成以前に機能していた遺構と考えられる。

第 79 図　SK4007 半截状況（西から）

第３項　Ｖ区



第 80 図　Ｖ区平面図

SX5005

SF5001 上で検出した石灰岩礫主体の遺構で、SD5004 の溝に切られている。SD5004 に関連する遺構だと考えられるが、詳細については不明。本土産近代磁器や明朝系瓦、沖縄産陶器類が出土していることから、近代頃の遺構と考えられる。

第 81 図　SX5005・SD5004 検出状況（北から）

SX5006

Ⅰ層中に構築された集石遺構で、方形状の石灰岩があるが、密に敷き詰められている状況ではなかった。周辺に集石遺構があったことから同様の遺構かと考えられたが、敷き詰められている状況やⅠ層中の堆積ということで近代以降の不明遺構とした。

第 82 図　SX5006 検出状況（北から）

SS5003・SS5004・SS5005

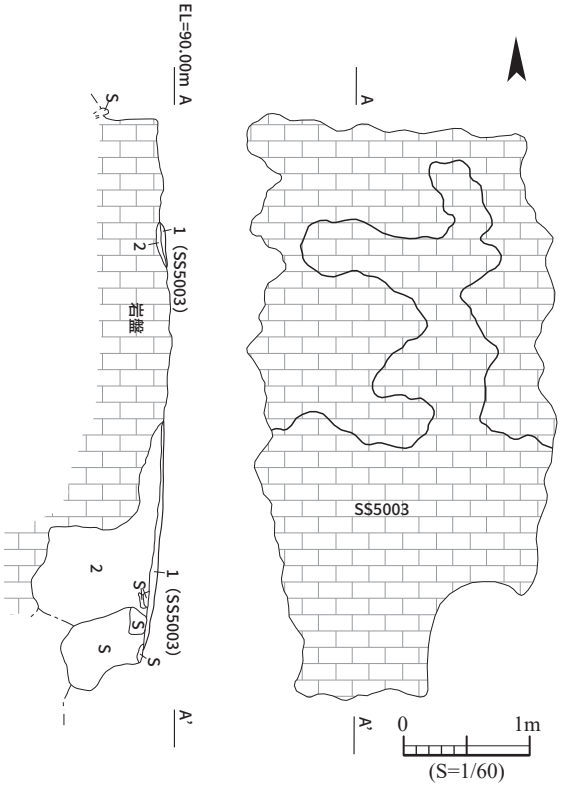
首里高校校舎基礎の間でそれぞれ確認した石敷遺構。上部は削平されている状況だった。石敷も拳大の礫があるところや、細かい石灰岩片と土がまざったような遺構だった。標高約 88.8 m前後で確認できたが、上部は全て首里高校の校舎基礎により削平されているため、遺構面にあたるかどうかは不明。関連遺構として北東側にある SA5002があるが、根石が 89.0 m前後にあることから、遺構面はより高い標高にあったと考えられるため、上面は削平されていると考えられる。

SX5003

トレンチ３で確認した遺構で、礎石を据えるための基礎部分の可能性がある遺構。岩盤をわずかに埋め、方形状の石灰岩が設置されている。周囲には円形になるように未加工の石灰岩が配置されていた。この遺構の周囲は大きく削平されており、関連遺構等については判然としない。

SX5007

トレンチ４の SS5005 の下層から検出した溝状遺構。レンズ状の掘りこみがあるが、岩盤で途切れている状況が確認できた。SS5005 の下部構造の一種の可能性がある。

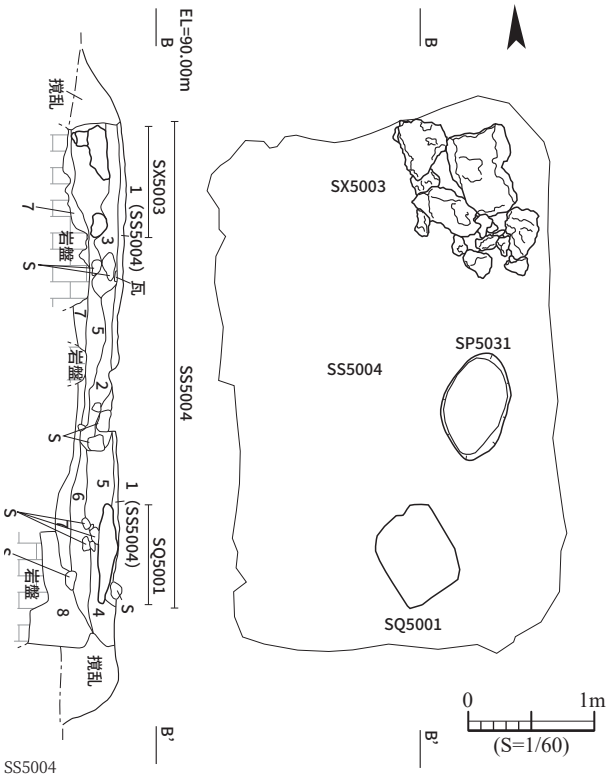


SS5003
1　Hue7.5YR5/8 明褐色、マージ主体で少量の炭、多量の中礫を含む。
2　Hue10YR4/3 にぶい黄褐色、少量の炭、多量のマージ粒・大礫・中礫を含み、（Hue10YR5/8）黄褐色のマージが多く混ざる。

SS5003 検出状況（東から）

第 83 図　SS5003 平面図・断面図・検出状況

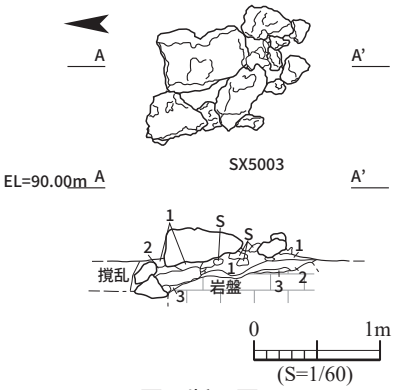
第 84 図　SS5003 半截状況（西から）



SS5004

1	Hue 2.5Y4/4	オリーブ色、礫主体。
2	Hue 2.5Y4/4	オリーブ色、中礫・マージ粒を含む。
3	Hue 10YR4/4	褐色、大礫・中礫を含む。
4	Hue 2.5Y4/4	オリーブ色、マージ粒、中礫を含み、瓦が入る。
5	Hue 10YR4/6	褐色、小礫を含む。
6	Hue 7.5YR4/6	褐色、マージ粒主体、炭・小礫を含む。
7	Hue 7.5YR4/6	褐色、マージ粒主体、大礫・中礫を含む。
8	Hue 7.5YR4/6	褐色、マージ粒主体、中礫を含む。

第 85 図　SS5004・SX5003・SP5031　・SQ5001
平面図・断面図



第 86 図　SX5003 平面図・断面図

第 87 図　SS5004 検出状況（北から）

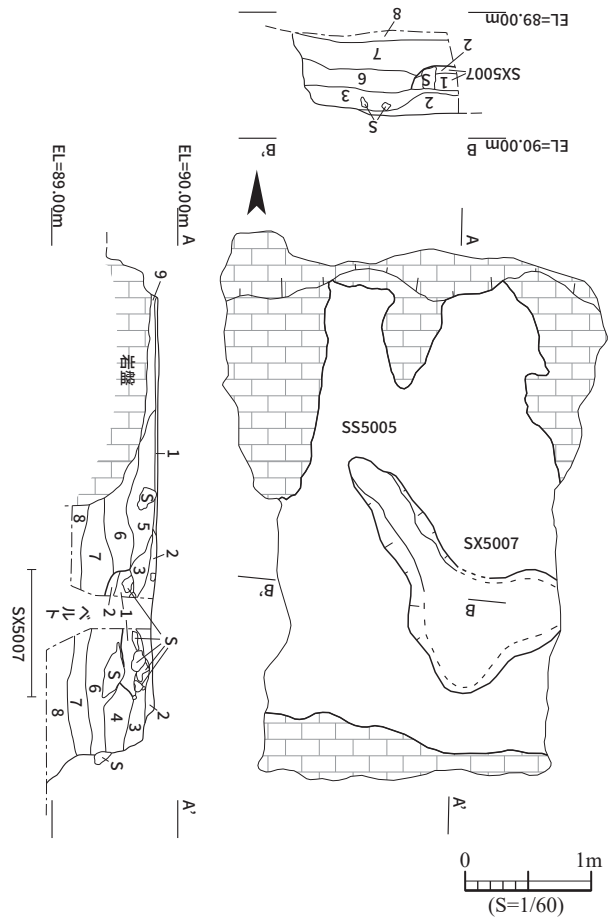
第 88 図　SS5004・SQ5001 半截状況（東から）

1　SX5003 検出状況（東から）

2　SX5003 半截状況（東から）

第 89 図　SX5003 検出状況・半截状況

第 90 図　SQ5001 半截状況（南西から）



SS5005

1　Hue10YR5/6　黄褐色、中礫･小礫と、少量の炭･マージ粒を含み、瓦が見られる。
2　Hue10YR3/1　黒色、小礫と少量の炭、マージ粒を含む。SX5002 の埋土。
3　Hue10YR4/6　褐色、礫主体。
4　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、多量の大礫・中礫・小礫を含む。
5　Hue10YR3/3　暗褐色、マージ粒、小礫、炭を含む。
6　Hue10YR5/6　黄褐色、大～小礫と、少量の炭、マージ粒を含み、瓦が見られる。
7　Hue7.5YR4/6　褐色、マージ主体の層で、礫を含み、Hue10YR4/2 灰黄褐色土が一部に見られる。
8　Hue7.5YR5/6　明褐色、マージ主体の層で、礫を含み、Hue10YR4/1 褐灰色土が一部に見られる。

SX5003

1　Hue10YR4/4　褐色、多量の中礫･小礫、少量のマージ粒を含み、白砂が混ざる。
2　Hue10YR4/6　褐色、マージ粒主体、多量の中礫・小礫を含む。
3　Hue10YR4/6　褐色、マージ粒主体、中礫を含む。

第 91 図　SS5005・SX5007 平面図・断面図

第 92 図　SS5005 検出状況（南から）

第 93 図　SX5007 検出状況（北東から）

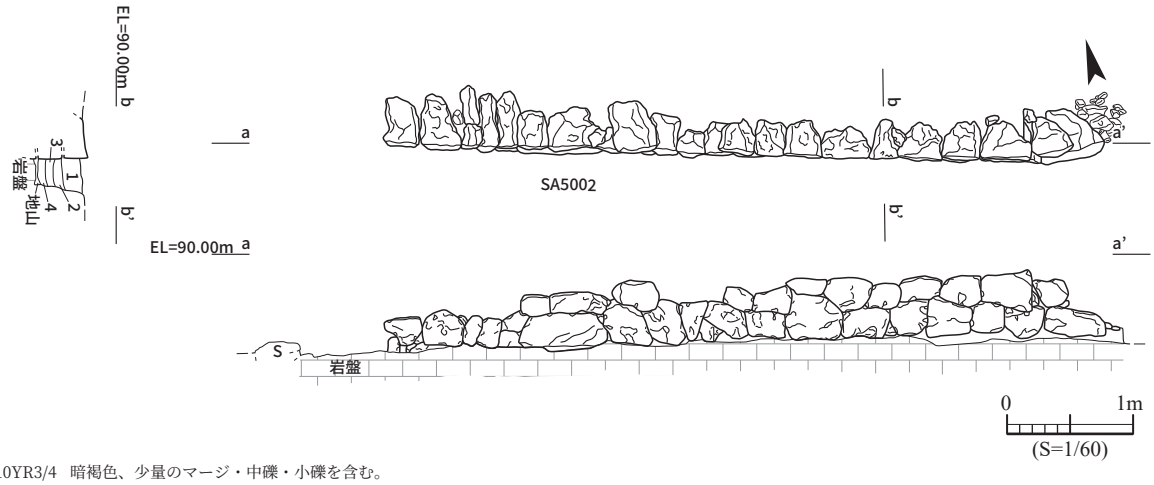
SA5002

岩盤層及び一部掘削した造成土上に設置された石積遺構。SA5002 の南側は岩盤が広がり、西側部分の根石は岩盤上に設置されている。SA5002 北側は、グスク時代の土を掘削している状況が確認でき、東側の一部は根石設置のため、地山を掘削後、その土を埋戻して設置している。造成を行うなかで土留めとして SA5002 を構築したと考えられる。造成土中には、礫を主体とする層（Ⅲ19 層）も見られ、水はけを意識した造成だったことが伺える。SA5002 に伴う機能面は確認出来なかった。

SA5002 は、新校舎建築に伴い一部削平されることがわかっていたため、校舎設計図をもとに、削平される部分について断ち割りを行い、背面構造を確認した。

検出した位置から、櫨園内の遺構と考えられるが、判然としなかった。

第 94 図　SA5002 検出状況（南西から）



SA5002
1　Hue10YR3/4　暗褐色、少量のマージ・中礫・小礫を含む。
2　Hue10YR4/6　褐色、少量の小礫、多量のマージブロックを含む。
3　Hue10YR3/4　暗褐色、少量のマージ、多量の中礫を含み、砂が混ざる。
4　Hue10YR3/3　暗褐色、少量のマージブロック・小礫を含む。

第 95 図　SA5002 平面図・立面図・断面図

SA5004・（III区：SA3001）・SS5010

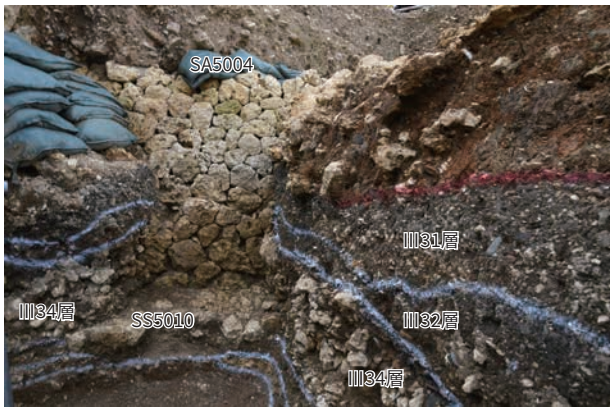
Ⅲ区で検出した SA3001 の東側延長部分にあたり、一部重複して検出している。調査区の北端にあたるため、石積の南面の調査を実施した。

SA5004 の下層確認のため、トレンチ８を設けて下層確認を行った。その結果、SA5004 は積み増しの痕跡があり、上段と下段に分かれ、上段の石積は下段の石積より内側に積まれ段差がある状況が確認できた。

また、下段の石積には石敷遺構（SS5010）が伴い、下段が機能していた時期の遺構面（Ⅲ 36 層）を確認した。

その後の造成により、下段部分は埋められ、上段石積の下側１段を埋める形でⅢ 31 層が堆積していた。この層は攪乱により分断されていたが、Ⅲ 27 層と同一層と考えられ、SA5005 が機能していた際の遺構面と同一層である。

Ⅲ区で確認した SA3001 の漆喰塗布の高さは標高約 86.5 mで、SA5004 の上段に関連する機能面の高さは標高約 87.2 mで、緩やかな傾斜がある部分で機能時の面となっている。



第 96 図　SA5004 立面（南から）

SA5005・（IV区：SA4001）・（Ⅰ区：SA２）

Ⅰ区及びⅣ区で確認した石積遺構の東側延長部分。この石積遺構の東側は、首里高校校舎基礎等により削平されている状況だが、より東側に延びていた可能性が高い。

Ⅲ 29 層上に根石が設置されている。Ⅲ 29 層は、Ⅳ区のⅢ 11ｂ層・Ⅲ 12ｂ層と同一だと考えられる。Ⅲ 29 層は、SA5005 を挟んで北側と南側の両側に広がっていることから、SA5005 設置前には、この周辺一帯に平場造成を目的とした造成が行われていたことが想定できる。

根石下層には、一部掘りこみ等が確認できたが、石積との関連性は不明である。

根石及び天端石はサンゴ石を用いており、その間の石材は琉球石灰岩を使用しており、２種類の石材を用いている。

SA5005 南側の機能面は、上部が後世の削平で残存していない状況だったので、判然としない。

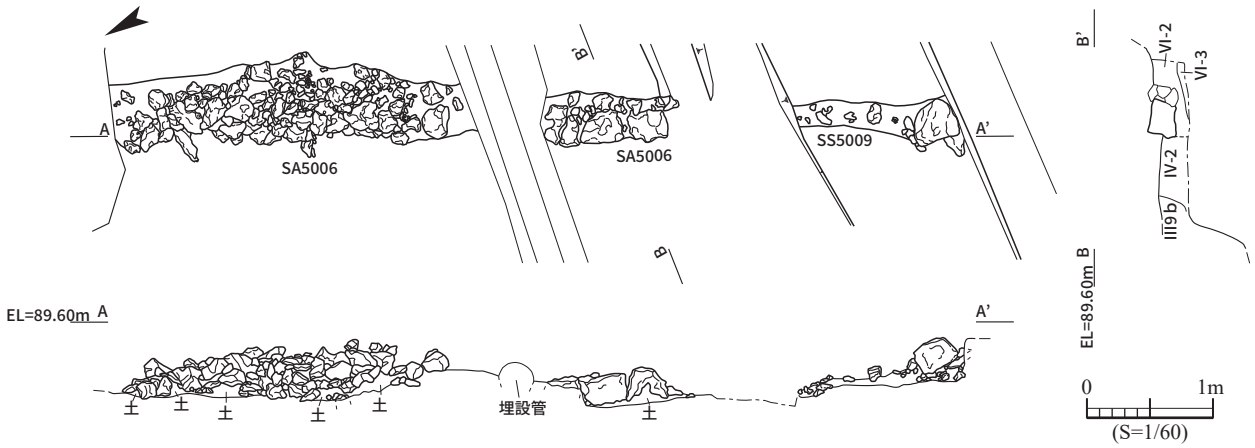
第 97 図　SA5005 立面（南から）

SA5006

Ⅳ２層上で確認した石積遺構。１段もしくは２段のみ残存している。また、面石が削平されていることもあり、断片的に残存している状況だった。

この石積を挟んで東側と西側では、グスク時代と考えられる遺構面について高低差がある状況が確認できた。このことから、グスク時代においても、このような石積などを用いて段々状の土地利用を行っていたと考えられる。

第 98 図　SA5006 断面（南から）



第 99 図　SA5006・SS5009 平面図・立面図・断面図

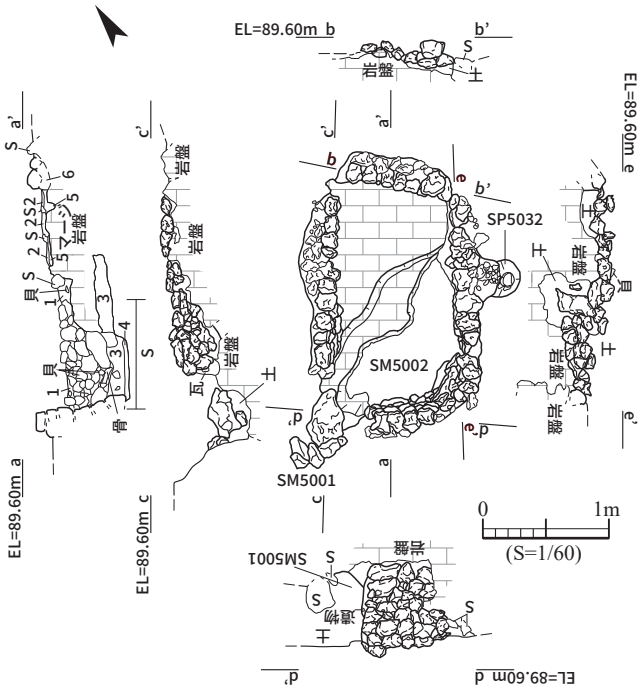
SM5002

首里高校校舎基礎の間で確認された石組土坑で、地山を掘りこんで構築されていた。この遺構の上部ではSS5002 が確認できた。石敷遺構としたが、下層にあたるこの遺構の土が後世の削平等により混入した状況のものを検出したと考えられる。また、SS5002 及びSM5002 は SM5001 により切られる。

検出時、北東側部分では、貝殻片が多く確認された。その後、半截を行ったところ、北東部分で岩盤を検出し、南西部分は岩盤がない部分が掘削されていた。堆積土からは、中国産陶磁器のほか、ヤコウガイやシャコガイ等の貝類、動物骨などが出土した。出土状況から廃棄土坑と考えられる。出土遺物では、小破片や胴部片のため図化できなかったが、中国産青磁や褐釉陶器が主体を占める。しかしながら沖縄産の陶質土器が１点、混入の可能性も否めないが出土している。全体的に人工遺物が少なかった。SS5002 からは中国産青磁、中国産白磁（徳化窯系）、明代の青花が出土している。これらに加え本土産陶器（薩摩系）、沖縄産無釉陶器も見られることから、新しい時期の遺物をみると 18 世紀代までには機能終了したことが考えられる。年代幅が 16 ～ 18 世紀代の遺構と考えられるが、これまでの当該地区の発掘調査成果では、グスク時代等の遺構ではわずかに新しい時期の遺物の混入が見られるが、遺物組成としては良好な状況で出土している。このことを考えると当該遺構が最も機能していた時期は近世段階の可能性が高い。

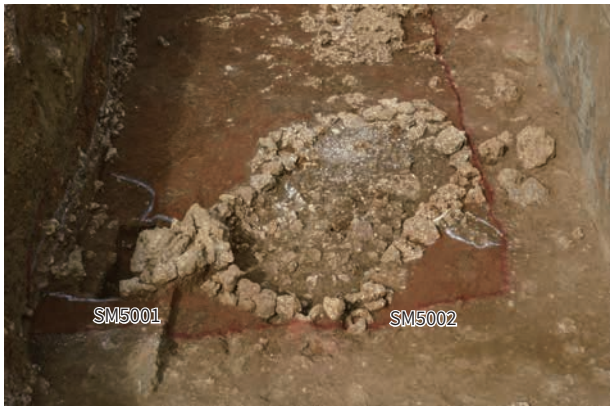
この遺構からは、人為的に割り取られたヤコウガイ、サラサバテイラ等が出土した。このような割り取られ方は、首里城跡銭蔵東地区（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016）、東村跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2017）で出土しているものと類似している。そのため、これらの貝殻片は両遺跡の分類を参考として分析を行った（第４章第３節 参照）。分析の結果、ヤコウガイやサラサバテイラなどの貝殻片は螺鈿素材及びその他製品素材として用いられた後の残滓である可能性が高いことが判明した。また、マガキガイやタカラガイを用いた未成品等も出土している。

この遺構は、首里古地図で櫨園とされる部分から検出した。櫨園は、漆器の原料となる漆の採取する施設であったとされる（久手堅 2000）。廃棄土坑中に螺鈿素材に用いられたと考えられる貝類遺体の出土から、漆器関連の製作等についても行っていたことが考えられる。また、螺鈿以外の製品製作にも関わっていた可能性が高い。



SM5002
1　Hue10YR4/4　褐色、中礫が混ざり、炭・マージ粒を含む。
2　Hue7.5YR4/6　褐色、小礫・炭粒・マージ粒を含み、１㎝～５㎝の貝の細片が多量に混ざる。
3　Hue10YR4/6　褐色、しまりが弱い。小礫･マージ粒を多量含み、骨の細片が混ざる。
4　Hue7.5YR4/7　褐色、小礫・マージ粒を含む。
5　Hue7.5YR5/8　明褐色、中礫が混ざり、炭・マージ粒を含む。
6　Hue7.5YR4/6　褐色、多量の大礫・中礫を含む。

1　SS5002 検出状況（南から）



2　SM5002 検出状況（南から）

3　SM5002 半截状況（南東から）

第 100 図　SM5002 平面図・立面図・断面図　SS5002 検出状況・半截状況

SP5032・SP5037・SP5040

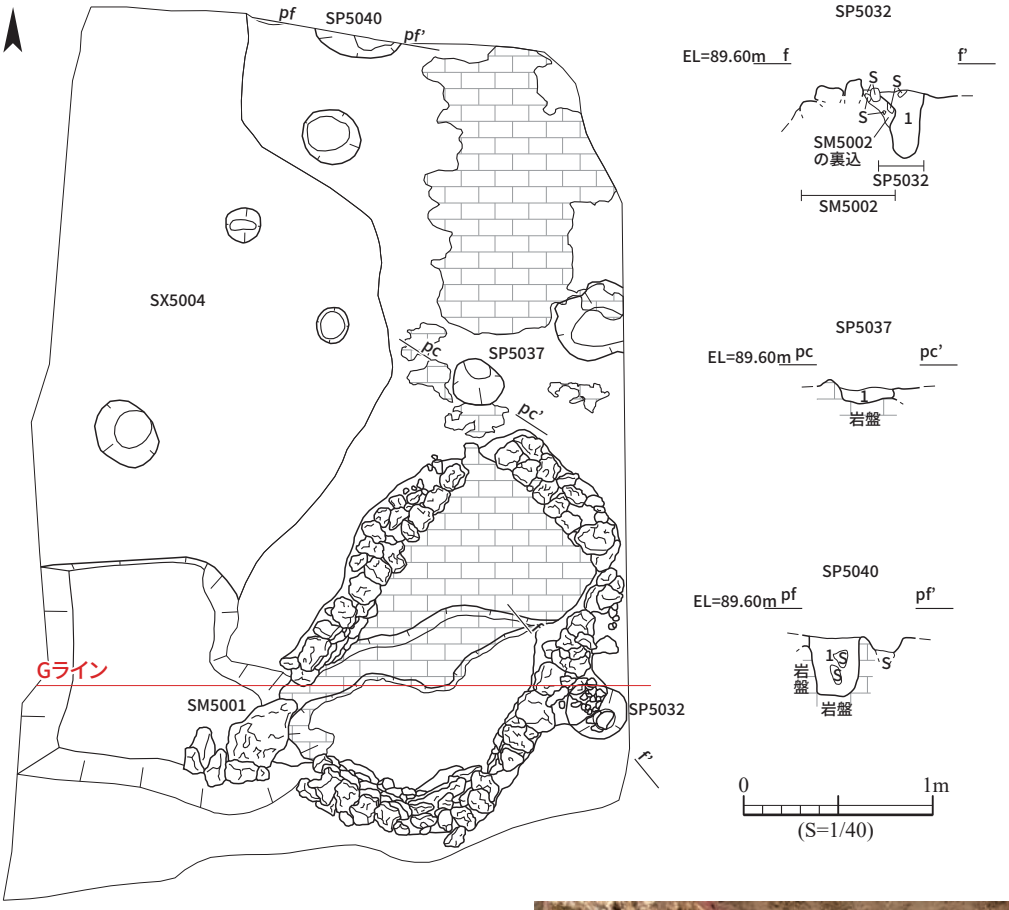
SP5032、SP5037、SP5040 で建物プランが組め、６本柱の建物跡だった可能性が高いが、校舎基礎等により攪乱を受けているため全容は不明。柱穴間の長さは約４mで SP5032 は堆積土が１層のみで構築されており、石灰岩礫等を多く含む。中国産褐釉陶器や産地不明土器等が出土している。SP5037 及び SP5040 は柱穴を掘る際に岩盤まで掘削している。

これまで中城御殿で確認されたグスク時代の柱穴はⅣ層とした土が柱穴内に埋まっているが、３つの柱穴は近世期の土と考えられる造成土が埋まっていた。出土遺物はグスク時代の様相を示すが、近世初期頃の遺構である可能性が高い。SP5032 は SM5002 に切られているので、建物跡があった場所の利用形態が変わったことが考えられる。

SX5004

トレンチ１で確認した大型土坑と考えられる遺構で、地山を掘って形成されていた。遺構内の土は、Ⅳ層に類似しているが、小礫片等が混入する状況があり、再堆積していることが考えられる。Ⅰ区でも用途不明の大型土坑(SX14)を確認したが、堆積している土等が異なる状況である。SM5001 により切られている状況は、SM5002 と同様のため、同時期もしくは近い時期に機能していた遺構の可能性がある。土取り後の穴を埋戻されている可能性が考えられる。

第 101 図　SP5032･SP5037 ･SP5040 完掘状況（南西から）



SP5032
1　Hue10YR4/4　褐色、炭・マージ粒・小礫を少量含み、白砂が混じる。

SP5037
1　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、炭・マージ粒・小礫・中礫を少量含み、全体的に白砂が混じる。

SP5040
1　Hue10YR4/4　褐色、中礫・小礫・少量の炭・マージ粒を含み、砂質の土(Hue10YR5/4)と粘質の土が混ざる。

SP5032 半截状況(南西から)

第 102 図　SP5032、SP5037、SP5040 平面図・断面図・半截状況

第 103 図　SP5037 半截状況（南西から）

第 104 図　SP5040 半截状況（南から）

1　SX5004 検出状況（東から）

2　SX5004 半截状況（東から）

第 105 図　SX5004 検出状況・半截状況

SD5004・SD5008

SF5001 などの道跡遺構を削平して設置された溝跡。平面検出した部分は素掘りの溝で、北壁面ではこの溝上部に溝石や石敷遺構等が確認できた。また、北側延長部分では、溝石及び素掘り部分が確認できたため、素掘りの溝に、後に溝石等を設置したと考えられる。

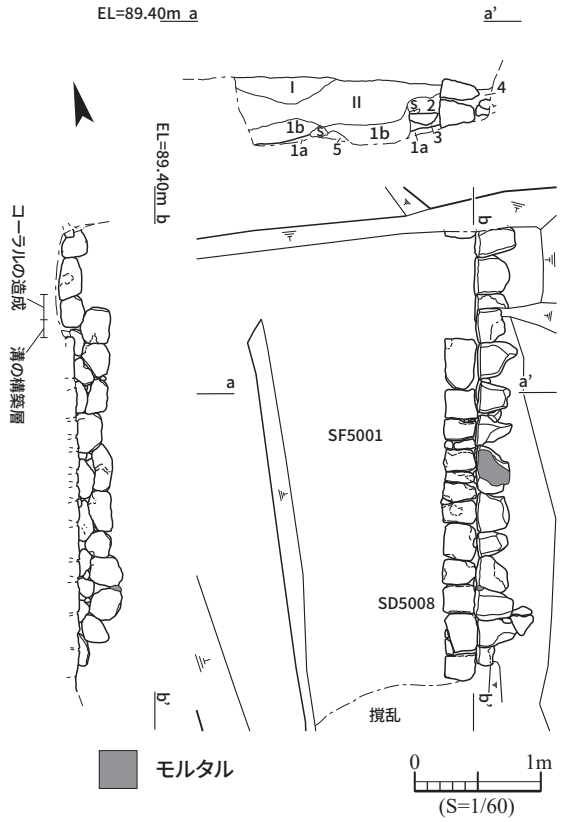
堆積状況等から、近代頃の首里高校校舎に伴う溝跡と考えられ、この遺構が削平している SF5001 に対して軸が同じであることから、SF5001 の機能終了後の早い段階で構築されたと考えられる。

立会調査時に、北側部分で SD5004 の延長部分を確認した。この際、SD5008 としたが、同一遺構である。

1　SD5004 検出状況（北から）

2　SD5004 断面（北から）

第 106 図　SD5004 検出状況・断面



SD5008
1a　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、多量に中礫を含む。
1b　Hue10YR4/2　灰黄褐色。
2　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色。
3　Hue10YR4/4　褐色、少量の礫を含む。
4　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、大礫を含む。
5　Hue10YR4/3　にぶい黄褐色、少量の炭・マージ粒・小礫を含み、焼土粒が混ざる。

1　SD5008 検出状況（南西から）

2　SD5008 断ち割り状況（南から）

第 107 図　SD5008 平面図・立面図・断面図・検出状況・断ち割り状況

SF5001・SA5001・SA5003・SD5001・SD5002・SD5006

北東方向を基軸として南北に延びる道跡で、道跡に伴う溝跡や石積等が確認できた（第 114 図）。

道跡の西側には、SA5003 と SD5002 が確認でき、東側には SA5001 と SD5001 が確認できた。このうち SA5003 は、その位置から、中城御殿の東側石牆にあたると考えられる。東側の SA5001 は、櫨園と道の境界となる石積と考えられる。

これらの道跡の構築については、地山及び下層にあるⅣ層を主体としたグスク時代の層を南から北側に向けて斜めに掘削を行っていた（第 36 図３）。これは道跡の斜面形成のための地盤整形だと考えられる。また、掘削後には、石灰岩礫を主体とした層を構築している。これは水はけを考慮し、排水効果をもたせるための基礎構造だと考えられる。東から西側に向けて斜状に造成を行っている状況が確認できた。この造成土中には、暗褐色でⅣ層を主体とする造成土も確認できたことから、掘削時の発生土を利用して造成を行ったことが想定できる。大規模掘削後、石灰岩礫を埋める工法を用いていることから、石灰岩礫を主体とする基礎構造を構築することが、当該期の造成工事等において重要な工事工程だったと考えられる。

道跡及び溝石等は、一部削平されている部分もあるが、歩道面の残存状況や溝石上面が平坦になっている部分も確認できることから、ほぼ機能時の面を残していると考えられる。歩道面は石灰岩を細かく砕いたもので充填されていた。SA5001 及び SA5003 は、面石や裏込めが削平されている状況が確認できたことから、道跡や溝跡より高く積まれていたものが、後世に削平されたことを示している。

歩道面と考えられる部分は、石灰岩礫を細かく砕いたものを敷き詰めており、中央部分が僅かに高く、両側にかけて緩やかに傾斜している。両側には溝が設置されていることから、雨水等の排水を行うための構造だったと考えられる。

また、削平を受け、全体が判然としないが、歩道面に対して垂直方向に走る溝跡（SD5001、SD5002）が２列確認できた。この溝跡も堆積状況等から、歩道が機能していた時期と同時利用されていたことが考えられるため、歩道面に溝も有する道跡だったと考えられる。

SA5003 の南側と北側の２か所に下層確認のためのトレンチ 10 とトレンチ 14 を設定した。その結果、コーラルが敷かれた遺構面を確認した。北側では標高 86.8 m 部分で遺構面が確認でき、僅かに南側にむけて傾斜が確認できた。南側では標高 88.3 m部分で確認した。南側で確認したコーラル層は道形成時の造成土上で見られ

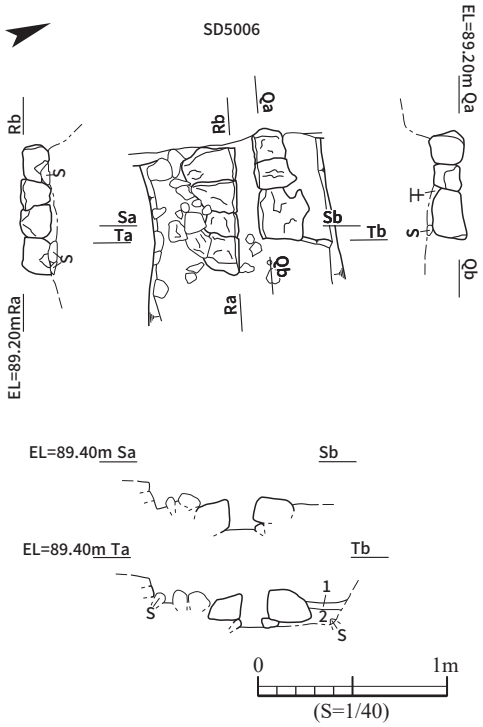
た。北側と南側で高低差があることから、南から北にかけて段差もしくは傾斜があったことが考えられる。

道跡と中城御殿の機能面について考えると、SA5003機能時から、道と中城御殿側の機能面は高低差があったことが考えられる。また、この遺構面に対して道跡の歩道面は標高 89.0 m前後であるため、歩道面と中城御殿内の地面には１～２m前後の高低差があったと想定される。南側にいくにつれ、中城御殿の機能面もあがっていく状況と、前述した SA4001 の南側に建物建築のための平場形成が見られることから、中城御殿の北側部分は、道跡と高低差が大きいが、南側になるにつれ、高低差が小さくなっていくことが考えられる。

中城御殿内の遺構面は、機能終了後に埋められている層（Ⅲ 17 ～ 25 層）が確認できていることから、中城御殿移転後には埋戻され、道跡と高さをそろえるような造成が行われている。

SF5001 を構築する造成土中からは、中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、瓦等が出土している。歩道面からは、中国産白磁や中国産青花が出土している。加えて、沖縄産陶器や明朝系瓦の出土から 18 世紀以降の出土状況を示していると考えられる。

この道跡は、歩道面の年代観等から、「首里古地図」に描かれる中城御殿と櫨園・大美御殿の間にある道と考えられる。この道跡を確認したことにより、中城御殿の範囲や境界が判明した。



SD5006
1　Hue10YR7/6　明黄褐色、少量の炭、多量の小礫を含み、焼土が混ざる。
2　Hue10YR4/6　褐色、少量の炭、中礫、マージ粒を含み、焼土が混ざる。

第 110 図　SD5006 平面図・立面図・断面図

第 108 図　SA5003 西側堆積状況（北から）

第 109 図　Ⅴ－Ⅴ’SA5003 西側堆積状況（北から）

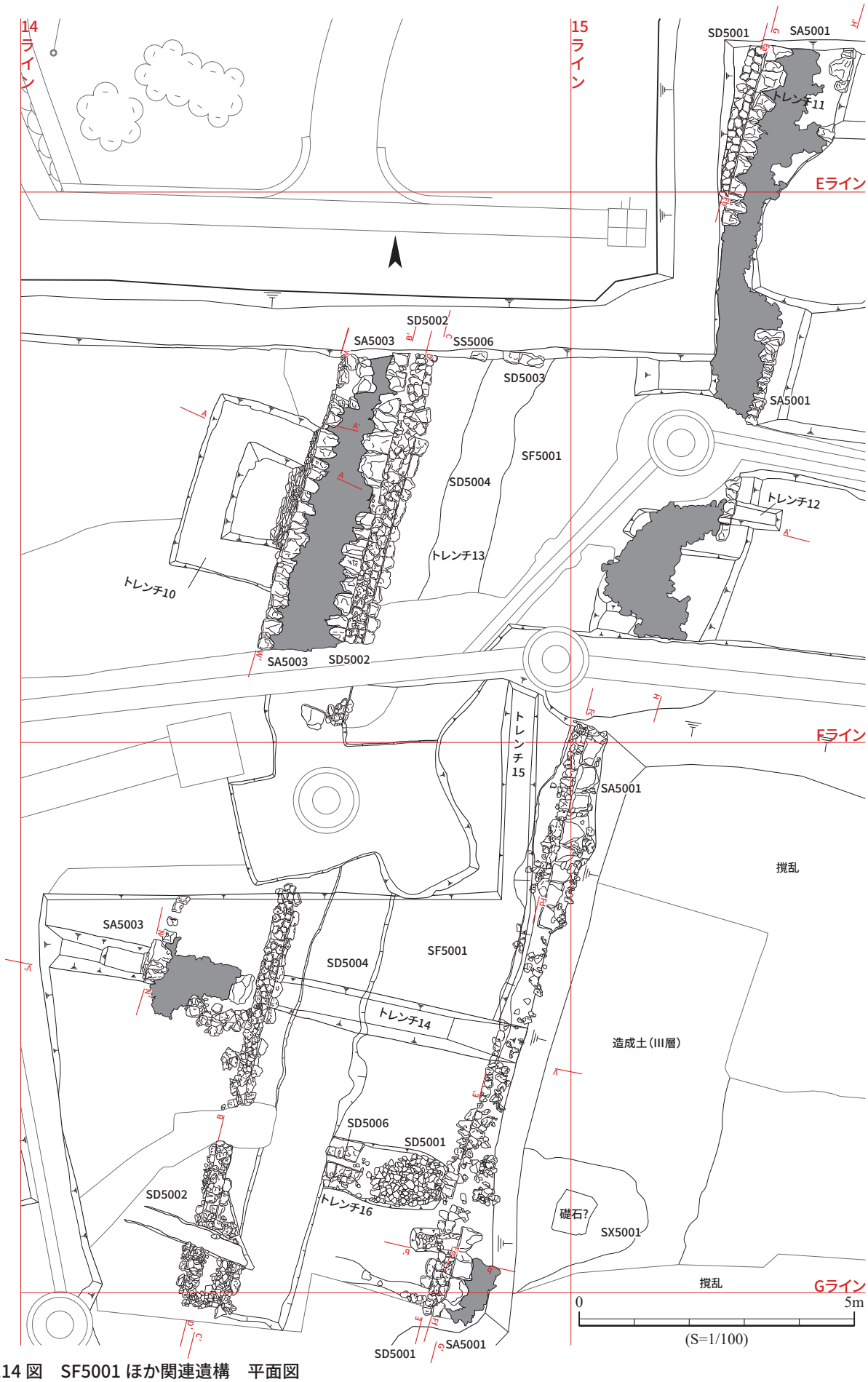
第 111 図　Ⅴ－Ⅴ’SF5001 堆積状況（北東から）

第 112 図　SF5001 堆積状況（北から）

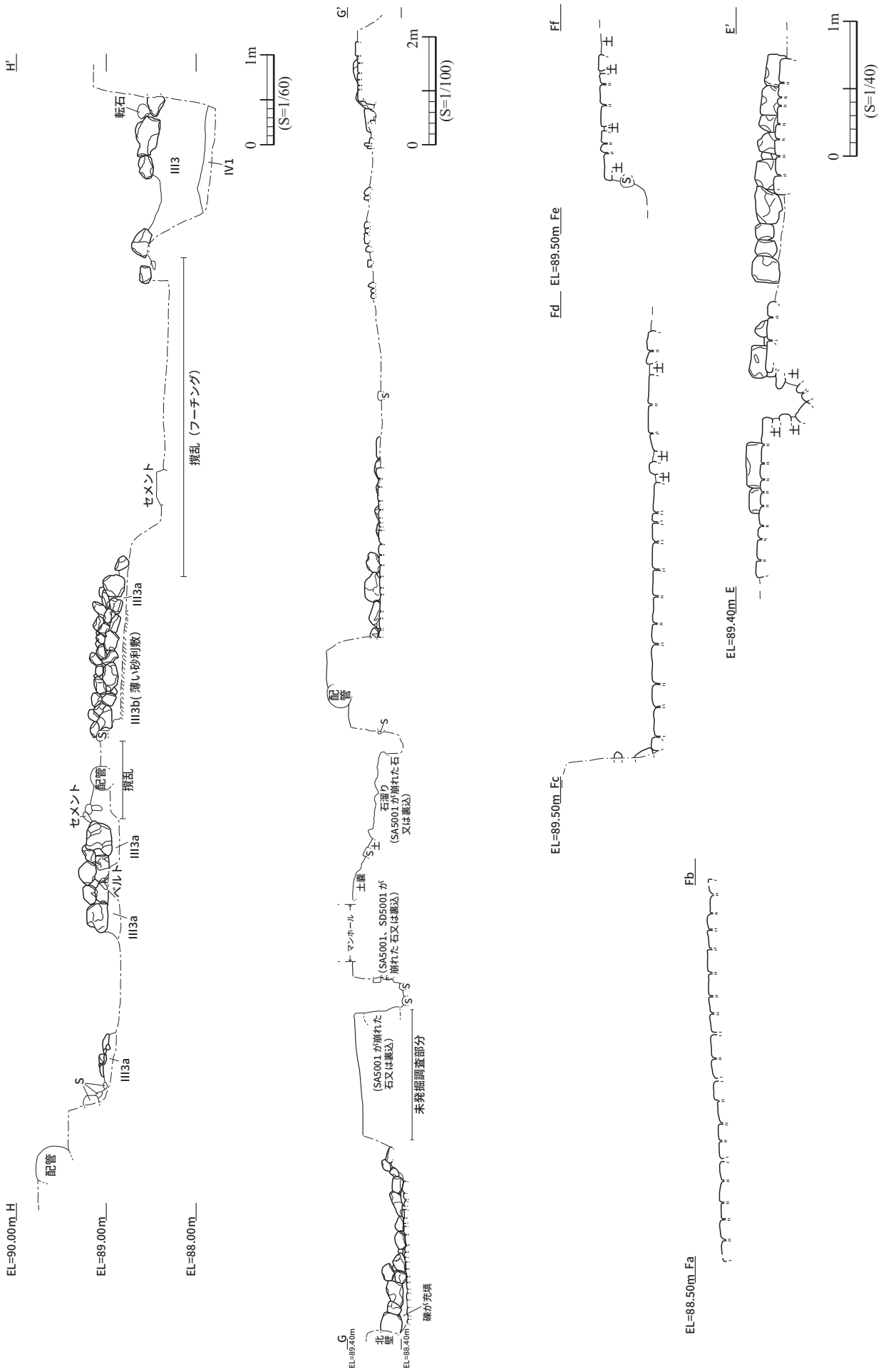
1　SF5001 北側

2　SF5001 南側

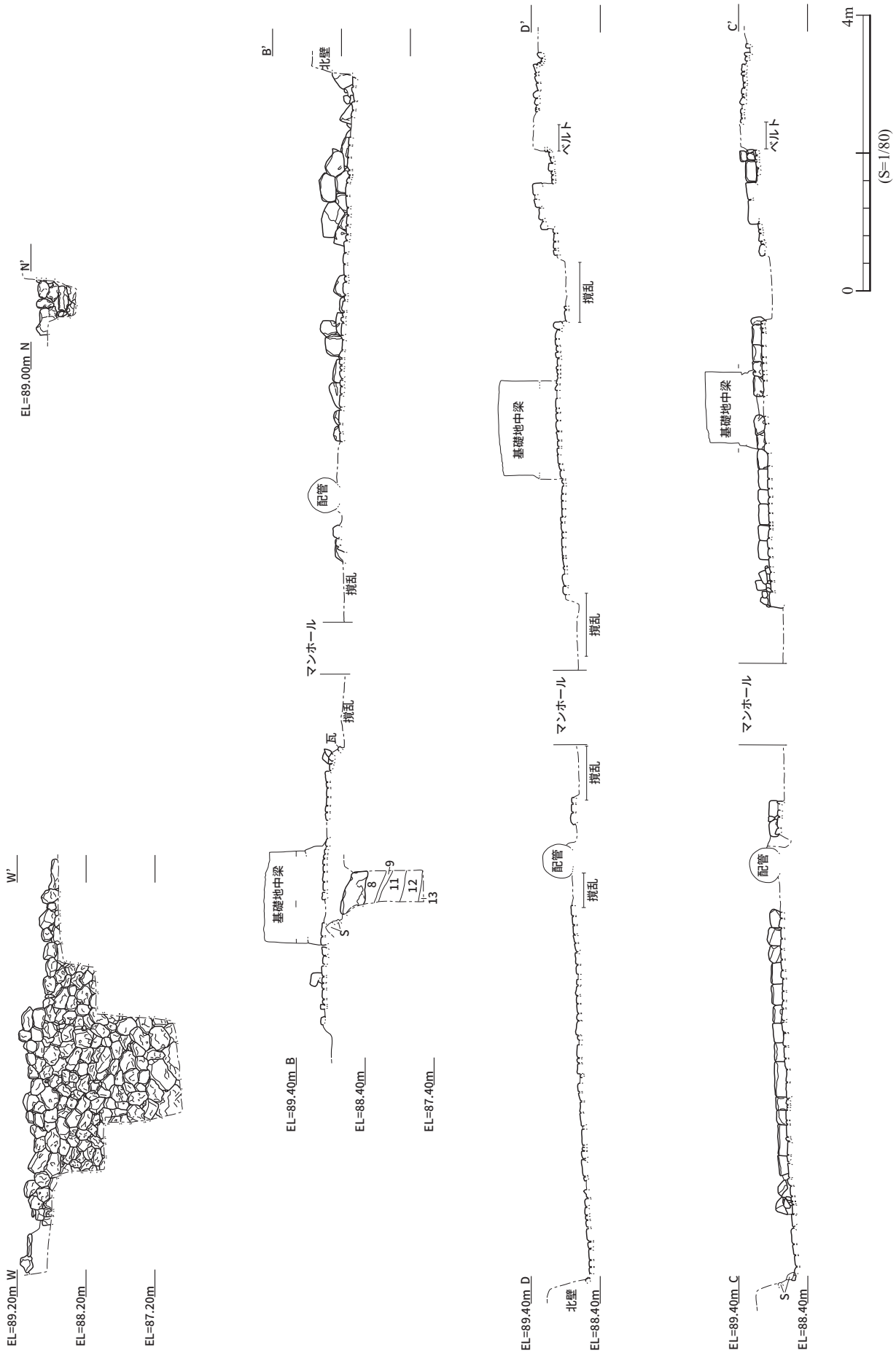
第 113 図　SF5001 平面写真　（黄色線：校舎基礎構造設置部分　青線：トレンチ設定部分を写真に加筆）



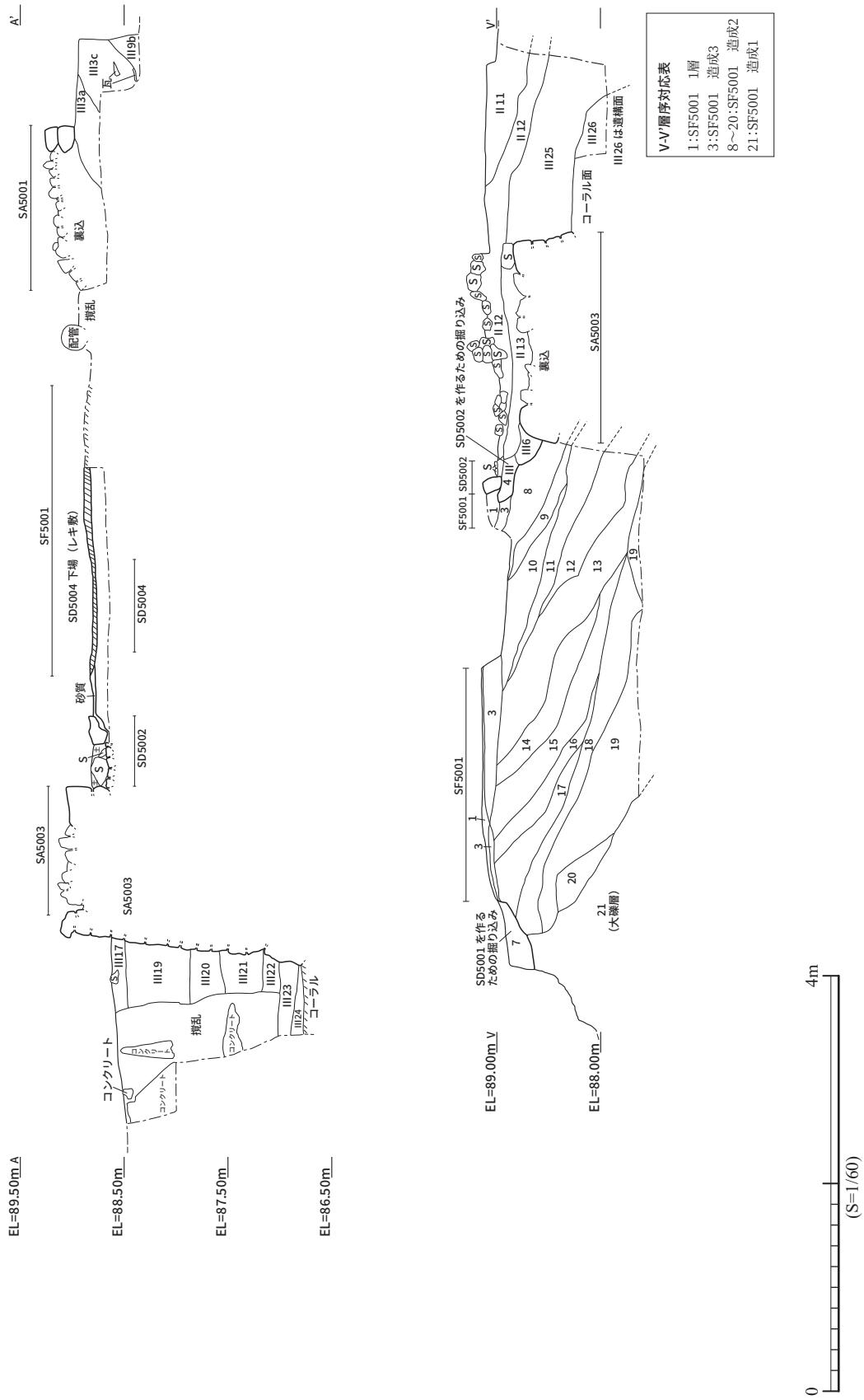
第 114 図　SF5001 ほか関連遺構　平面図



第 115 図　SF5001 ほか関連遺構　立面図・断面図



第 116 図　SF5001 ほか関連遺構　立面図・断面図



第 117 図　SF5001 ほか関連遺構　層序

1　SF5001 トレンチ完掘状況（南から）

2　トレンチ１完掘状況（南から）

3　トレンチ２完掘状況（南西から）

4　トレンチ 13 完掘状況（南東から）

5　トレンチ 10 完掘状況（南西から）

6　トレンチ 15 完掘状況（北東から）

7　トレンチ 14 完掘状況（北西から）

8　トレンチ 16 北壁（南から）

第 118 図　SF5001 設定トレンチ各種状況

第２節　遺物

第１項　遺物の概要・分類

本項では、遺物別に概要を述べていく。なお分類を付した遺物については分類概念を記述する。

１　中国産陶磁器

中国産の陶磁器は、主体的なものとして青磁、白磁、青花、褐釉陶器、少数なものとしては色絵、三彩などが見られた。

青磁　青磁の碗・皿に関しては、沖縄出土分類（瀬戸ほか 2007）に基づいて分類を行った。この分類では器形による分類を行った後、外面文様による細分を行っている。今回、外面文様が確認できるものは細分を行った。

碗　Ⅳ類～Ⅶ類のものが出土した。

Ⅳ類　外底が露胎するもので、胴部は緩やかで張りがある。素地はやや軟質で灰色、釉はオリーブ灰色。文様は鎬蓮弁文、ヘラ書きの草花文、内底に花文、弦文などが見られる。今回Ⅳ－０、Ⅳ－１が出土した。

Ⅳ－０　外面が無文のもの。口縁は外反するものが多い。Ⅳ類の中でも粗雑なもの。

Ⅳ－１　外面に蓮弁文を施すもの。蓮弁文に鎬がほとんどないものや、輪郭が複線になるものがある。器形は内湾しており、腰部は緩やかで張りがある。また、内底が平坦に近いものが多い。

Ⅳ’類　口縁が玉縁状になるもので、内面胴部に型押し文様を描くものや、内底の釉を剥ぎ内面無文のものなどがある。器形がⅣ類に近いものやⅤ類に近いものが見られる。

Ⅴ類　外底を釉剥ぎするもので、高台が角形でハの字形になる。素地は堅緻で白色、釉は濃い緑色で厚く施釉される。今回、Ⅴ－１～３が出土した。

Ⅴ－１　外面に蓮弁文を施すもの。ヘラ描きによる蓮弁文や、弁先の尖った剣先蓮弁文などがある。内面には草花文や花文を施すものが多い。

Ⅴ－２　外面口縁部に雷文を施すもの。口縁は直口になる。文様はヘラ彫りや型押しで施し、ヘラ彫りのものは高台が方形、型押しのものは高台が三角形で細長く八の字状になるものが多い。

Ⅴ－３　その他の文様をもつもの。一般的なものはラマ式蓮弁文。

Ⅵ類　外底途中までしか施釉しないものや、外底露胎になるもので、底径が小型化し厚みが増すもの。素地は精良なものと粗雑なものがあり、釉は濃い緑色である。今回Ⅵ－０、Ⅵ－１が出土した。

Ⅵ－１　外面に線刻蓮弁文を施すもの。弁尻が腰部下半まで及ぶものと、及ばない簡略化されたものが見られる。

Ⅶ類　Ⅵ類と比べると、底径は小型化し器高も低くなるもの。腰が張らず直線的に開く。

小碗　外底が釉剥ぎされ、ヘラで内外面に蓮弁文と思われる文様が施された資料が１点出土している。

皿　Ⅳ’～Ⅵ類のものが出土している。

Ⅳ’類　内底を釉剥ぎする、玉縁状口縁のもの。今回、内底を釉剥ぎし、外底が露胎するものが出土した。

Ⅴ類　外底を釉剥ぎし、釉が濃い緑色で厚く施釉されるもの。口折皿・直口皿・腰折皿などが見られる。以下、外面文様により細分を行ったもので、今回Ⅴ－０、Ⅴ－１が出土した。

Ⅴ－０　外面が無文のもの。口折皿以外の器形が見られる。

Ⅴ－１　外面に蓮弁文を施すもの。口折皿と直口皿がある。

Ⅵ類　高台が小型化し、器高が低くなるもの。直口皿と稜花皿が主流を占める。今回Ⅵ－０が出土した。

Ⅵ－０　外面が無文のもの。内底の印花文と、素地と釉が粗雑になる。稜花皿と直口皿が見られ、稜花皿は内底を釉剥ぎするものもある。

景徳鎮窯系　景徳鎮窯系の青花と同一の素地や釉で、器壁は薄く、高台は凹み、高台は逆三角形で端部を釉剥ぎするもの。菊花皿が多い。

盤　碁笥底のものや波状口縁で口折のもの、鍔状口縁のものが見られた。文様は蓮弁文や印花文、草花文があり、碗Ⅴ類と同時期と思われる釉が厚く施釉されるものと幅広高台タイプのものが見られる。

瓶　胴部が丸みを帯びるものや口縁部が外反する資料が見られた。文様は蓮弁文のみ確認でき、碗Ⅴ類と同時期と思われる釉が厚く施釉されるものが出土した。

擂鉢　高台の抉りが深く、外底が平坦な資料。擂目を密に施す。

香炉　直口口縁で外底が平坦なものや口縁部断面が方形状になるもの、口縁部が平坦で器厚が薄いものが出土した。

蓋　酒会壺の大型で器厚が厚いものと、中型の壺の蓋と思われるものが出土した。

器台　器厚と釉が厚く、文様はヘラ描きで葉文と思われるものが出土した。

合子　やや内湾し、口唇が釉剥ぎされる。文様はヘラ描きで不明文様のものが出土した。

白磁　白磁の碗・皿に関しては、森田勉（森田 1982）と沖縄出土分類（瀬戸ほか 2007）、大宰府分類（太宰府市 2000）に基づいて分類を行った。今回はＣ群～Ｆ群と大

宰府Ⅳ類が出土した。

景徳鎮窯系　皿・小皿・杯が出土している。磁器質で、釉調は灰白色、Ｅ群に入るものが多かった。

Ｅ群　全体に釉を掛けた後に、畳付のみ釉剥ぎするもの。器形は蓮子碗に近いものや端反皿、碁笥底の杯、菊花皿がある。今回得られた資料は、全て畳付が釉剥ぎされており、菊花皿や碁笥底の皿、杯が出土した。

福建産

大宰府Ⅳ類　器厚が厚く、口縁部が玉縁状になるもの。胎土は灰白色、釉は黄色ないし灰色を帯びた白色で、外底が露胎するもの。

Ｃ群　胎土は灰色で軟質のものが多く、高台の抉りが薄く厚手の内湾するもの。

Ｄ群　陶器質だが胎土のきめが細かく、底部は厚いが高台は低く、全体的に小型のもの。

Ｄ’群　胎土や釉調はＤ群と類似しているが、釉が全体に掛けられず、内底もしくは胴部途中から露胎しているもの。

Ｆ群　広い高台から胴部が直線的に開く直口浅めの碗。釉は青みがかっており、内面胴部途中から露胎するものと、内底蛇の目釉剥ぎするものがある。

徳化窯系　徳化窯系の白磁に関しては新垣力の分類（新垣 2003）に基づいて判別を行った。徳化窯系のものは型造りにより成形しており、器形にバリエーションが見られること、型成形の影響で粘土ジワが確認できるものが多い特徴がある。今回は碗、小碗、小皿、小杯、燭台が出土した。

鉢　畳付が平坦にされているもの、胴部・高台の器厚は厚いが高台内は非常に薄いものが出土した。

壺　口縁部が外反するものや畳付が削り調整されるもの、器厚が厚いものが出土した。

蓮華　口唇部が丸みを帯び、胎土が精良なものが出土した。

蓋　袴部が薄い小型の壺の蓋と思われるものが出土した。

人形　人の顔を模したものが出土した。

青花　　青花は首里城跡銭蔵東地区の分類（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016）を参考に分類を行った。また、上記の報告書で記載されていないものについては、小野正敏（小野 1982）と森毅（森 1995）、沖縄出土分類（瀬戸ほか 2007）の分類を基にした。

明代　明代の青花は景徳鎮窯系のものが主体を占め、碗、皿、杯、小杯などが確認された。

景徳鎮窯系　景徳鎮窯系は、時期で大きく３つに分けて整理し、形態などの違いにより細分されている。今回、細分に必要な器形の情報が得られるものは細分を行った。

碗　分類されたものだと、明Ⅱ類が多く見られた。

Ⅰ類　小野分類のＢ１群や、それと文様構成が似ているもの。今回、Ⅰ－１類が出土した。

Ⅰ－１類　見込みがほぼ平坦で広く深めの端反碗で多くは小野Ｂ１群に含まれる。文様は、外面に唐草文、宝相華文、内面に雷文、四方襷文、内底に福字文などが見られる。

明Ⅱ類　小野分類でＣ・Ｄ群とされるもの。やや粗雑なものも見られる。今回、Ⅱ－２、Ⅱ－３が出土した。

明Ⅱ－２類　直口碗のうち、内底が平坦で広く深めの器形で、大きめの高台をもつ腰折碗。文様は、外面の上半に雲状の横帯文、下半に鎖状の唐草文、内底が十字文のものが圧倒的に多い。比較的に粗雑な一群が見られる。小野分類Ｄ群にあたる。

明Ⅱ－３類　Ⅰ－１類と同様の端反碗だが、外面の文様が少なく、口縁がやや厚めで、腰部は丸みを帯び、高台が小さく内底が凹む。口縁部端部の反りが 70°ぐらいのものが多く口縁が稜花状のものもある。沖縄出土分類Ｃ’群にあたる。

Ⅰ群　型押し成形されたいわゆる芙蓉手タイプのもの。

小碗　小碗は、文様・形態ともに碗と共通点が多い。そのため、碗と同様の分類を行った。

皿　Ⅰ類～Ⅲ類の資料が確認出来た。

Ⅰ類　碗と同様の文様を持つ口径約 20cm になる大型の端反皿。

Ⅱ類　小野分類ではＢ１群やＣ群とされるもの。碗Ｃ・Ｄと同時期の資料で、胎土や釉調で精粗が見られる。

Ⅱ－１類　端反皿で、口径が約９㎝、約 12 ㎝、約 15 ㎝の３サイズがある。文様は外面に唐草文を描くものが多く、内底に玉取り獅子文や十字文が描かれる。小野分類Ｂ１群にあたる。

Ⅱ－２類　碁笥底皿で、文様は外面に蕉葉文などが描かれ、内底に寿字文や花文が見られる。小野分類Ｃ群にあたる。

Ⅲ類　碗Ⅲ類とほぼ同時期と考えられる一群。器壁が非常に薄手で、文様はペンシルドローイングで描かれる。小野分類Ｅ群に相当する資料もここに入る。

漳州窯系　景徳鎮窯系と比べると胎土が軟質で、釉・呉須が鈍いものが多く、白化粧を施すものもある。

碗　内底がやや膨らみ、高台が八の字状のもの。文様は寿字文が描かれる。

皿　内底に膨らみがあり、高台が高く土が付着する。白化粧が施されるもの。

器種不明　小片のため器種は判別できないもの。直口

口縁。

清代　景徳鎮窯系、徳化窯系、産地が特定できない福建・広東系のものが見られた。

景徳鎮窯系　器壁は薄く、胎土は堅緻でロクロ成形が多い。碗、小碗、皿、杯、小杯、瓶などが見られた。

徳化窯系　徳化窯系は森達也の研究（森 2014）に基づいて判別した。徳化窯系は景徳鎮窯系より器厚が厚いものが多く、内底の中心部がやや膨らむ。また、胎土は白色で型成形のものが多く、粘土ジワが見られる特徴がある。今回、碗、皿、杯、小杯、瓶などが出土した。

福建・広東系　胴部下半や底部が露胎する一群。碗は基本的に直口碗で、アラベスク風の文様を描くものがあり、内底が広く蛇の目釉剥ぎされるものが見られる。その他、福建産と考えられる資料を「福建系」とした。福建系は、福建周辺地域で作られたと考えられるが、どこか断定できなかった資料。碗や皿、杯がある。

褐釉陶器　今回確認された褐釉陶器は、分類を行うには残存部分が足りなかったため、分類を行わなかった。

壺　大型・中型・小型のものが見られ、小型のものは器厚が薄いものが多かった。器形は、口縁部が方形状のものや平坦のもの、玉縁状になるものが見られ、底部はベタ底のものが出土した。

鉢　小型で底部がベタ底のものと、大型で口縁部が半円状に肥厚するものが出土した。

擂鉢　口縁部に比べると外底が小型のものと、口縁部が玉縁状の内湾するものが出土した。

その他陶磁器類

色絵　碗、小碗、皿、蓮華、水滴などが出土した。碗類や皿は口縁部が外反するものが多く見られた。

青磁染付　景徳鎮窯系の小碗が見られ、高台が高く、外底に銘がある。

瑠璃釉　口縁部が大きく外反する瓶が出土。

三彩　皿、水注、水滴、把手、盤などが出土した。水注は鴨形、水滴は魚形、盤は口縁部が鍔状になるものが多く見られた。

翡翠釉　皿と小皿が出土した。器厚が薄いものが多く、口縁部が内湾するものと外反するもの、高台が逆三角形状になるものが見られた。

天目　直口口縁の碗が１点出土した。

褐釉染付　器厚が薄い碗が１点出土した。

褐釉磁器　高台が逆三角形で、八の字状になる碗が１点出土した。

磁器　碗が２点出土しており、器厚が薄く釉を鮫肌状にするものと、大型の直口口縁のものが見られた。

陶器　宜興窯系の茶器類が出土した。茶器、茶器の蓋、茶壺などが見られ、どれも表面を丁寧に研磨されている。

２　タイ産陶磁器

褐釉陶器　底部が碁笥底状の鉢が出土。

半練土器　外面にタタキが見られる壺と、撮み部が宝珠形の蓋が出土。

鉄絵　合子の蓋と身が出土。

３　ベトナム産陶磁器

青花が得られており、器種は瓶が出土している。胎土が陶器質で生地土と釉薬の間に白化粧を施している。文様は蓮弁文が施される。

４　本土産陶磁器

本土産陶磁器は、染付、色絵、陶器などがあり、産地は肥前系、備前、関西系などが確認された。また、近代（明治以降）の陶磁器も確認された。なお、肥前系の陶磁器については、九州陶磁編年（九州近世陶磁学会 2000）を基に分類を行った。

磁器

肥前系

Ⅲ期　1650 ～ 1690 年代に焼かれたと考えられるもの。

Ⅳ期　1690 ～ 1780 年代に焼かれたと考えられるもの。

Ⅴ期　1780 ～ 1860 年代に焼かれたと考えられるもの。

染付

碗　Ⅲ期のものは、口縁部が直口の丸碗で文様が雲龍見込み荒磯文碗がある。Ⅴ期のものは、口縁部が微弱な外反をし、外面胴部と内面口縁部に二重格子文を施す資料が出土。

皿　Ⅲ期のものは、芙蓉手の大皿と思われる資料が見られ、文様は内面に区画と宝文を施す。Ⅳ期のものは、内底に白抜きで花文を施文するものと型打ち成形された波縁皿が見られる。

瓶　外面胴部に網目文を施すものが出土。

色絵　小碗が出土しており、文様は外面に赤色の葉文と茶色の花文、黒色の線、内底に赤色の不明文様を施すものが確認された。

陶器

肥前系

Ⅲ期　1650 ～ 1690 年代に焼かれたと考えられるもの。

Ⅳ期　1690 ～ 1780 年代に焼かれたと考えられるもの。

碗　Ⅲ期のものは、京焼風陶器と思われる資料がある。Ⅳ期では、銅緑釉を施したものがあり内底は蛇の目釉剥ぎ、外面底部は露胎となるものが確認された。

皿　Ⅲ期のものは、器形が胴部上端で口縁部が屈曲し口縁部が鍔縁状となるもので、文様は内面口縁部に沿って象嵌の蓮弁文を施す。また、内面胴部には白土の圏線を施すものもある。Ⅳ期では、銅緑釉を施し、内底を蛇の目釉剥ぎ、高台から外底を露胎とするものがある。

薩摩系　口縁部が逆Ｌ字状を呈する鉢が出土。

美濃系　鉢類の鉄絵の平向付の底部資料が出土しており、美濃地域で 16 世紀末頃から 17 世紀初頭にかけて作られたものと考えられる。底部に半環状の脚が付く。岐阜県元屋敷跡（土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター 2008）の出土資料に類似している。

備前系

擂鉢　頸部が「く」の字に屈曲し、底部に向かって窄まる。

関西系

碗　口縁部がやや内湾し高台径が小さく、高台先端の断面が方形状を呈する。

擂鉢　口縁部が玉縁状を呈する。褐色釉を内面から外面胴部途中まで施釉。内面は擂目を密に施し、内底部分は使用による摩滅が見られる。

近代陶磁器　器種は、碗、小碗、皿、急須、瓶などがあり、絵付け技法は、型紙摺り、銅板転写、ゴム版、染付がある。クロム青磁なども確認された。産地は、瀬戸・美濃系、砥部産などが確認された。陶器では、外底に不死鳥のマークと「…IRONSTONE CHINA」、「14」の文字が書かれた NIKKO 社の製品と思われる洋皿が出土した。

５　沖縄産施釉陶器

沖縄産陶器の中で、「上焼（ジョウヤチ）」と称される一群で、器面に釉薬及び絵付けを施す製品である。器種は、碗、小碗、皿、鉢、急須などが出土した。火入れ及び火取は、沖縄の方言（佐賀県立九州陶磁文化館 1998）を参照し火取（ヒトゥイ）に統一した。

碗　生地土に白化粧後、透明釉を施し、畳付を釉剥ぎ、内底を蛇の目釉剥ぎするものと灰釉碗が確認された。前者は、外面胴部の文様が中国産青花の文様を模したものが出土。灰釉碗については、池田分類（池田 1991）を基に分類を行った。

灰釉碗

Ⅰ類　フィガケ技法によって口縁部から胴部途中まで釉を施すもので内外面の底部が露胎となり、畳付及び内底に耐火土が付着するもの。

Ⅱ類　釉掛け技法は、Ⅰ類と同様で、畳付及び内底に耐火土が付着しないもの。

Ⅷ類　器の内外面を異なる釉薬掛け分け、高台部分を除いて全面施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎするもの。

小碗　生地土に白化粧後、全面に透明釉または内外面を異なる釉薬で施釉し、畳付を釉剥ぎ、内底を蛇の目釉剥ぎする資料がある。また、外面胴部に面取がされる資料とされない資料がある。

皿　口縁部を花弁状に成形する、波縁の皿などが出土。

小杯　灰釉を全面に施釉するが外面腰部から外底まで露胎のものも出土。

瓶　高台を削り出す資料と高台をスカート状に付けた資料が見られる。

壺　いわゆる「油甕（アンダガーミ）」と称される、黒褐色釉を施し、肩部に耳が付く資料が出土。

鉢　口縁部が内湾する資料と大型の角鉢が得られた。

鍋　器高が低くなると思われ、口縁部に蓋受を形成する。

香炉　口縁断面が逆「Ｌ」字状になり、短頸で胴部が膨らみ、底部は平底で３点の脚を設ける。脚部尖端が獣面になる資料がある。

火炉　口縁部内面に鍋や急須などを置くための突起を有する。

火取　口縁部は直行し、腰部で「く」の字に屈曲する。口唇部が使用中の打割によって欠けたものがある。

蓋　急須の蓋、鍋の蓋が出土。袴部を持つ資料と持たない資料が見られる。

急須　全面を白化粧後に透明釉またはコバルト色の釉薬を施釉する。注口の直上とその反対側に把手を付けるための耳を有する。底部に脚を３脚設けたと思われる。

酒器　俗に言う「カラカラ」で、胴部が丸味を持つ資料と「く」の字に屈曲する資料が見られる。

灯明皿　口縁部に灯心受を有する資料が見られる。

灯明具　高台を有する資料が見られる。

燭台　口縁部が内湾し、外底面に糸切痕が残る。

６　初期沖縄産無釉陶器

湧田古窯跡を中心に焼成されたと考えられる資料で、高火度で焼成され器面に泥釉などが施釉される一群である。高火度で焼成されるため、胎土に白土が帯状に層をなす（上原ほか 2011、新垣 2013）資料が多数確認される。器種は、碗、壺、擂鉢などが出土した。

碗　外面はナデ調整が施されており、底部は付け高台で円盤状の粘土を貼付した後に内抉りを削り出すものが確認された。

瓶　胴部が膨らみ、外面に黒褐色の泥釉を施す。

壺　外面には縄目状突帯を付ける資料がある。口縁部は外へ折り曲げた後、内側に折り返して玉縁状に成形。

擂鉢　口縁部が肥厚帯から直立し、底部縁を面取しな

い。また、擂目の間隔が空く。

水鉢　口縁部が内湾し、胴部に波状文を施す。

甕　口縁部が方形状で有頸と無頸の資料が見られる。

香炉　角形と筒形が見られる。円柱状やコブ状の脚を付ける。

火炉　口縁部が「く」の字に折れる。

蓋　釉薬は内外面に庇から胴部に暗赤褐色の泥釉と外面の一部に自然釉が掛かり、外面胴部に貝目(二枚貝類)が付着する資料がある。

灯明皿　直口口縁で厚手のベタ底。口縁部付近に煤が付着する。

７　沖縄産無釉陶器

沖縄産陶器の中で「荒焼(アラヤチ)」と称されるもので、高火度で焼成された焼き締め陶器の一群。基本的には無釉を主体とするが、泥釉、マンガン釉が施釉されるものもある。確認された器種は壺、甕、鉢、瓶などとなっている。

碗　高台内抉が浅い厚手の碗。外面高台脇に抉りを入る。

瓶　口縁部が鍔状で、胴部下位に最大径を持ち、底部は若干の上げ底。

壺　口縁断面が玉縁状、方形状、鍔状を呈する資料がある。

擂鉢　口縁部に１カ所の注口を有し、口縁部断面は逆Ｌ字状で内面に擂目を密に施す。また、小型の擂鉢も見られ、内面の擂目は間隔が空く。底部に高台が付く資料も見られる。

水鉢　口縁部が内湾し、断面形が舌状、玉縁状、三角形状に形成する。胴部に波状文を施す。

甕　口縁部は方形状で短い顎部を有し、外面胴部に波状文と円突帯を施文。内底部中央は一定方向にナデ調整がある。

火取　胴部が筒状に立ち上がる。底部に脚が付く資料と底高台が付く資料が見られる。

植木鉢　口縁部が逆「Ｌ」字状。口唇部と口縁部に波状凸帯、胴部に菊花文を施す。

鈴　手捏ねによる成形で柄の部分が扇形を呈する。鈴口の端部が円形となる。

人形　人面を模した人形。

８　陶質土器

陶質土器は、壺屋において「アカモノ」などと称されるもので、胎土は細かく、白色粒、赤色粒などを含む。器色は、橙色、浅黄橙色のものがある。焼成温度は低く、脆いものが多い。器種は、水鉢、鍋、火炉などが出土した。

水鉢　口縁部が内湾し、舌状や方形状に形成。胴部に波状文を施す。

鍋　口縁部を「く」の字に外反させ、蓋受を作り、胴部に紐状の把手を付ける。

火炉　畳付を浅く成形し、外面を白土による装飾をする。また、内面に種子類の圧痕が見られる資料がある。

蓋　袴部を有しその先端が平坦に成形される資料と撮みが逆高台形になる資料が見られる。

急須　底部が丸底で胴部途中から「く」の字状に屈曲し口縁部が窄まる。底部には煤が付着する。

灯明皿　ロクロ成形で厚手のベタ底状で外底部にヘラによる線刻が見られる。口縁部には煤が付着する。

鈴　胴部中位から下位にかけて鈴口が残る。鈴口の端部が円形となる。

９　瓦質土器

器種は、植木鉢、鉢、火炉、台、脚が得られた。

鉢　底部に脚を有する。

火炉　馬蹄形焜炉の火入部と思われる資料が出土。

植木鉢　器厚が厚く、大型になる製品が出土。文様は外面に円筒印章による草花文。

台　胎土に空洞が見られ、種子類と思われる。また、器面全面に同様なものが見られる。

10　土器

出土した土器は、グスク土器、宮古式土器、八重山諸島産土器、産地不明の土器が得られた。器種は壺、甕、鍋、蓋が確認された。

グスク土器

甕　器厚は薄く、口頸部を「く」の字に屈曲させる。内外面にナデ調整が見られる。

鍋　口縁部が内湾し、口唇部が舌状、平坦に成形するものが見られる。内外面に指頭痕を残す。

宮古式土器

壺　口縁部は外反し肩部で膨らみ、底部は平底となる。胎土に白砂や赤色粒が混入する。

鍋　口縁部は外反し無頸。外面は磨き調整がなされており、煤が付着する。

八重山諸島産土器

パナリ焼　壺が出土しており、口縁部は外反し、胴部は膨らみ、底部は丸底またはやや平底となる。胎土に石灰岩片や白砂が混入する。

産地不明土器　円盤状になると思われる蓋。

11　坩堝

碗型が出土しており、内面に銀か鉛と思われるものが付着する。

12　窯道具

トチンが出土。内外面は褐色に釉化する。上面に糸切痕がみられ、外底に砂が付着する。

13　石製品

石製品は、小杯、砥石、石像と思われる資料、文具類

（硯、石筆、石盤）が確認された。

小杯　内面に加工痕や調整痕が残り、外面胴部に掘り出された蓮弁文が施される。

砥石　砂岩製で残存する全面に研磨痕がある。

石像　砂岩製と思われ、表面に坊主状の２条の沈線が施される。

硯　全形が長方形の硯が出土した。裏面に産地・商品名、所有者名と考えられる線刻がみられる。

石筆　石製の筆記具。石盤と共に用いられる。

石盤　黒色粘板岩製の板状の文具で、表面に石筆で文字や絵を描くために用いられる。

14　骨製品

骨製品は、歯ブラシ、半環状製品、ボタンが出土。

歯ブラシ　全面が磨かれ光沢を持っている。ブラシ部分と柄が得られている。ブラシ部分は３列 23 孔、背部分に２列 10 孔残存する資料が見られる。柄部分の資料は、腹部に文字が刻まれた資料と端部の孔に金属製の鋲が打たれた資料が得られた。

半環状製品　イノシシまたはブタの下顎犬歯製とウシの四肢骨製のものがある。前者は、歯のエナメル質を残し、背面は研磨される。後者は、骨幹部縦方向に切断痕が見られ、表面と横方向の切断面は丁寧に磨かれており光沢を持つ。また、製作途中の段階の資料（図版 28 － 19）も得られており、近－遠位部が切断され、縦方向に分割するような切断痕が見られる。

ボタン　全面が磨かれ光沢を持つ。断面形状が表裏平坦の資料と表面が平坦で裏面は凸面になる資料が確認された。両者とも糸通し孔が５点見られ、後者は中心の孔が貫通しない。

15　貝製品

貝製品は、碁石、貝窓、貝玉が見られる。碁石は、白色の碁石で全面が磨かれており光沢を持つ。貝窓は、マドガイを方形状に加工し作成。貝玉は、巻貝の螺殻部を円盤状に整形加工し玉にしたもので、出土した資料には製作途中の段階のものが見られる。貝玉については、勝連城跡のマガキガイ分類（勝連町教育委員会 1990）を参考に分類を行った。

Ⅰ類　加工する前でほぼ完形のもの。

Ⅱ類　殻口から螺軸に沿いながら体層部を欠きとる。

Ⅲ類　前段階同様に螺軸を中心に体層部を欠きとる。螺軸の上部が水平に加工される。

Ⅳ類　螺軸面と体層の打割面を水平方向に研磨し、平坦に仕上げる。

16　円盤状

円盤状製品の素材は、中国産青磁、中国産青花、中国産褐釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器、瓦が見られる。

17　煙管

煙管の雁首と吸口は陶製と金属製が見られる。分類については、首里城跡御内原北地区（以下、御内原北地区）の分類（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）を参考にした。

雁首

陶首Ⅰ類　筒型で火皿のみでなる。瓦の再利用品が出土。

陶首Ⅱ類　角のない丸形で、脂返しに湾曲や角が見られず首もなく全長も短い。中国産瑠璃釉製の資料が出土。

陶首Ⅲ類　六角形や八角形をはじめ直線的で角をもち、多面体形を呈する。脂返しは角をもち、首と肩が分かれない。沖縄産無釉陶器製が出土。

吸口

陶口Ⅰ類　小口から口付にかけて内湾する。

陶口Ⅱ類　小口から口付までの内湾が小さく、直線的で細長い形状をしている。

金口Ⅱ類　肩がなく、小口から口付にかけて内湾するもの。

18　金属製品

金属製品は、装飾品、簪、釘、県立一中関係資料などが出土した。

武具類　笠鞐と八双金具が出土。八双金具は首里城廣福門地区（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001）に類例あり。

装飾品　両端が出八双で厚手のものと上部が入八双で薄手のものが見られる。前者は全面無文で方孔が１カ所、小孔が８カ所見られる。後者は、表面に鍍金や魚々子、毛彫りの草花文が装飾され、２点の孔が穿たれる。

簪　竿本体の断面が六角形のものと扁平で鎬を有するものが見られる。

釘　角釘と丸釘が出土。

学校関係資料　一部が欠損し折れ曲がるが、花弁中央に「中」の文字がある校章と、校章と同様の文様と文字の学生ボタンが出土。「髙」の文字があるボタンも出土。

その他　腕時計のバックル、地下足袋のものと思われる鞐、頭部に文字が掘られた鈎金具、急須の把手と思われる資料、糸抜きが出土。

19　鉄製品

鉄製品は、両面から砥がれ刃部が形成される刀子、鎌の刃部、角釘と丸釘、押さえ金具が出土。

20　銭貨

銭貨は中国銭、日本銭、鉄銭、無文銭が出土している。中国銭は宣和通寶、嘉定通寶または紹定通寶、洪武通寶

を確認。また、嘉定通寶または紹定通寶の背面には「一」の文字がある。日本銭は寛永通寶が見られる。寛永通寶については、時期区分がされているため『日本出土銭総覧 1996 年版』（永井 1996）を参考に分類を行った。

寛永通寶

１期　古寛永。初鋳年 1636 年。「寛」の 12 画目と 13 画目の頭部が相接し、「寶」の貝画末尾が「ス」の字状になる。

２期　新寛永。初鋳年 1668 年。「寛」の 12 画目と 13 画目の頭部が離れ、「寶」の貝画末尾が「ハ」の字状になる。背面に「文」字を持つ。

３期　新寛永。初鋳年 1697 年。書体は２期と同様で背面が「文」以外のもの。

21　玉類

勾玉と玉が出土した。勾玉は乳白青色の破片が１点確認された。玉では青色、緑色の色調のものがみられる。

玉の形態分類では『中城御殿跡２』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）による分類を用い、以下のタイプが確認された。

Ⅱ類　扁平形に呈するもの。

Ⅲ類　２つ以上の玉がコイル状に連なっているもの。

22　ガラス製品

ガラス製品には瓶を主体に、皿、菓子容器と考えられるもの、シャーレなどが確認された。

瓶　用途別分類、色調記載には『ガラス瓶の考古学』（桜井 2019）や『神山古集落』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2019）を参考にした。ビール瓶などの酒瓶、清涼飲料瓶、牛乳瓶、調味料瓶、薬瓶、染料瓶、インク瓶等が出土している。

皿　プレス成型された小皿片が出土した。

菓子容器か　小杯形で、砂糖菓子を詰めた「ペロペロ」と呼ばれる菓子容器（斎藤・井上 2016）に類似したものが出土した。

その他　シャーレやランプの笠・火屋の破片、鏡、板ガラスが出土している。

23　瓦類

屋瓦と塼瓦が出土した。屋瓦、塼瓦の分類は、沖縄国際大学の上原静氏による分類（上原 2011、2013）（以下、上原分類）を基本に、御内原北地区の分類（沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 274 頁－275 頁）を加えて行った。また、一部瓦類は上原静氏に実物を観察して頂き、分類の助言を頂いている。

屋瓦　屋瓦は高麗系瓦、明朝系瓦、大和瓦が出土した。

高麗系瓦　高麗造瓦技術を基に作られた還元炎焼成の瓦である。打捺具による銘や羽状文が凸面にみられる。

明朝系瓦　中国明朝から造瓦技術が琉球へ伝わり、変容しながら定着したとされる瓦である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、近代大和タイプが確認された。色調は灰色と褐色、赤色で分け、一部に褐釉・マンガン釉が掛かるものもみられる。

軒丸瓦　上原分類を一部簡易化して分類を行った（第 119 図）。瓦当文様の草花文を巨視的に観察した側視１型を「Ⅰ類」、側視２型を「Ⅱ類」、正視型を「Ⅲ類」と設定した。以下に出土した各タイプを記す。

Ⅰ類　草花文を巨視的にみて側視した構図で、花や茎、子葉まで全体を表現したもの。

Ⅰ－Ⅰ　中心に花芯を置いて上下左右に３対の花弁を備える。上段の花弁は兎の耳状に大きく長い。

Ⅰ－Ⅰ－Ａ　花弁や花芯の隆起が弱く平盤的なものと、強く立体的なものがある。

Ⅰ－Ⅰ－Ｂ　花柱が付き、花弁が瓦当全体に広がる。

Ⅰ－Ⅱ　瓦当文様が蓮様で花柱がある。

Ⅰ－Ⅱ－Ａ　花芯は柿の種形で、直上に二重線の花柱が付く。また、花芯の下位には４枚の花弁が描かれる。花弁上段の余白に菱型文様が左右一対で付される。

Ⅱ類　草花文を巨視的にみて側視した構図で、花部分を強調し、その他の部分を省略したもの。

Ⅱ－Ⅰ　花弁の展開が上下で対照的に配される。

Ⅱ－Ⅲ　隅丸方形状の花芯が上下にあり、表面に縦位３本の刻線を施している。花弁に多数の稜線がある。

Ⅱ－Ⅳ　鏡餅状になった花芯と、その周りに三つ又状や三角状の花弁を配する。

Ⅲ類　花文様が正視型をなすもの。

Ⅲ－Ⅰ　文様が菊に類似する。

軒平瓦　軒丸瓦と同様に上原分類を一部簡易化して分類を行った（第 120 図）。側視１型を「Ⅰ類」、側視２型を「Ⅱ類」とした。以下に出土した各タイプを記す。

Ⅰ類　草花文を巨視的にみて側視した構図で、花や茎、子葉まで全体を表現したもの。

Ⅰ－Ⅰ　牡丹をモチーフにした文様とされ、花芯を中心に花弁が凡そ上中下段に配置される。

Ⅰ－Ⅰ－Ａ　花芯や葉の表現の違いから多くのタイプに分けられる。

Ⅰ－Ⅱ　花を縦断面に描いたような文様で、花芯を複数の花弁で覆う。

Ⅰ－Ⅲ　文様が具象的なＡと抽象的なＢに分けられる。

Ⅰ－Ⅲ－Ａ　花文が写実的で梨の花に似る。葉は長く深い切込みがあり、茎にヒゲが一対付く。

Ⅰ－Ⅲ－Ｂ　花芯が二分しているようにみえるものや一つだけのもの、上部の花弁が湾曲して覆うものや、

Ｖ字状に表現されるものがある。

Ⅱ類　草花文を巨視的にみて側視した構図で、花部分を強調し、その他の部分を省略したもの。

Ⅱ－Ⅱ　花部分は摸式化され、僅かに葉で植物の造形を残すもの。

丸瓦　丸瓦は御内原北地区（沖縄県立埋蔵文化財センター 2013）を基に、ヘラ描きやスタンプによる刻線や印を施す箇所で分類した。ヘラ描き・印が玉縁のみに確認されるものをＡ群、筒部にみられるのはＢ群、玉縁と筒部の両方にあるのはＣ群に分けた。一部、筒部に釘孔が空けられたものもみられる。

平瓦　丸瓦と同様にヘラ描き・印が確認されるものがある。凹面に桶板留紐の圧痕がみられる

近代大和タイプ　形態や胎土、色調などから大和瓦の形態を取り入れた沖縄産と考えられる瓦である。軒丸瓦は瓦当に文様がみられない。

大和瓦　日本本土で作られ、移入したと考えられる瓦である。那覇市に所在する御細工所跡出土の鬼瓦（那覇市教育委員会 1991 105 頁）に類似したものが確認された。

塼瓦　　塼瓦は形態から以下の８タイプに分類した。破片での出土が多く、明確なⅠ類、Ⅴ類は確認できなかった。また、赤色、褐色、灰色の色調のものがみられ、ヘラ描き印やスタンプによる刻印が一部確認される。

Ⅰ類　噛み合わせタイプ。平面形が長方形で、長軸か短軸の側面に噛み合わせの段があるもの。その他のタイプの塼に比べ厚手のものがみられる。上原分類Ⅲ式相当。

Ⅱ類　下駄状タイプ。平面形が長方形または三角形を呈し、下駄状の突起が付くもの。玉陵の屋根材として使われている事例がある。上原分類Ⅳ式相当。

Ⅲ類　Ⅰ類、Ⅱ類共通特徴有タイプ。上記Ⅰ類、Ⅱ類の特徴はみられるが決定的違いが確認できないもの。全て破片。

Ⅳ類　平面敷きタイプ。平面形は正方形、三角形を呈する。上原分類Ⅰ式相当。

Ⅴ類　積み重ねタイプ。平面形が長方形を呈し、重ねて使うために造られたものと考えられる。上原分類Ⅱ式相当。

Ⅵ類　Ⅳ類、Ⅴ類共通特徴有タイプ。上記Ⅳ類、Ⅴ類の特徴はみられるが決定的違いが確認できないもの。全て破片。

Ⅶ類　煉瓦タイプ。概観が直方体を呈し、かなり厚手。耐火材としての使用が想定される。上原分類Ⅵ式相当。

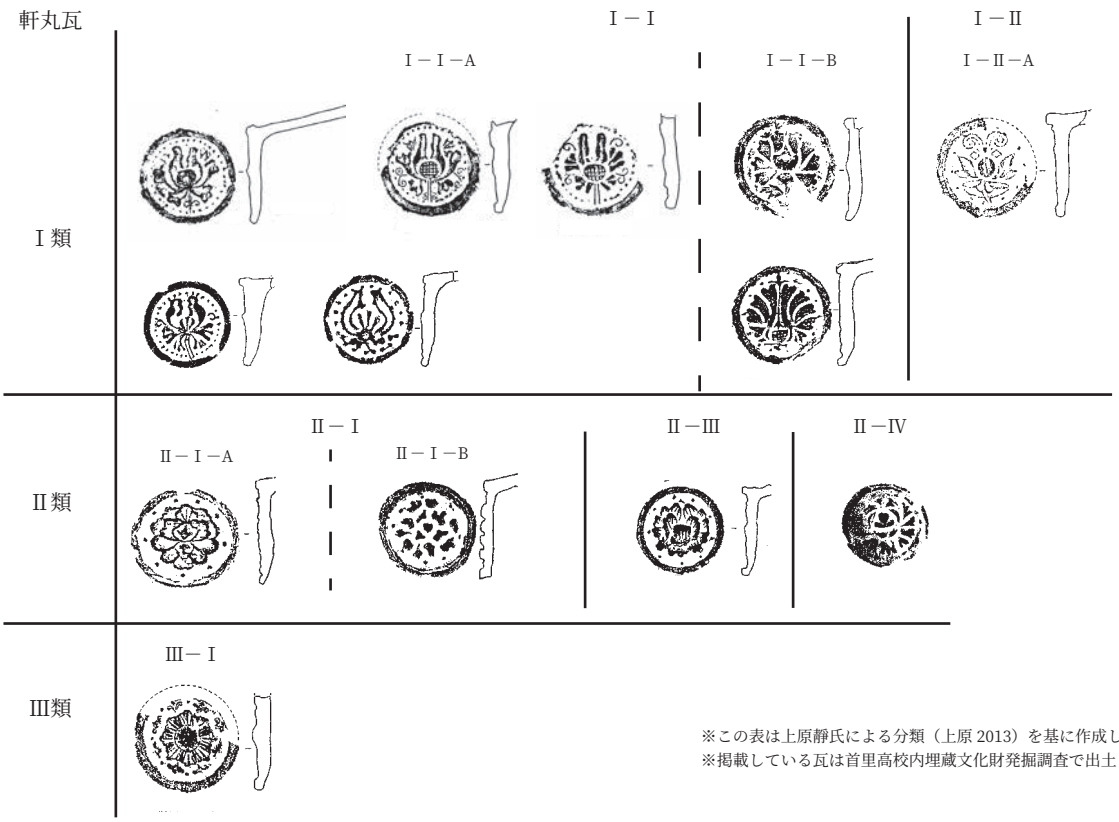
Ⅷ類　棟瓦タイプ。想定される全形は箱冠状で、建造物の棟に用いたと考えられる。頂部は丸瓦の様な形状、側面に文様を施すものやアーチ状に整形するもの等が確認される。詳細は後述する。

第６表　塼瓦分類対照表

首里高分類	
Ⅰ類	噛み合わせタイプ
Ⅱ類	下駄状タイプ
Ⅲ類	Ⅰ類、Ⅱ類共通特徴有タイプ
Ⅳ類	平面敷きタイプ
Ⅴ類	積み重ねタイプ
Ⅵ類	Ⅳ類、Ⅴ類共通特徴有タイプ
Ⅶ類	煉瓦タイプ
Ⅷ類	棟瓦タイプ

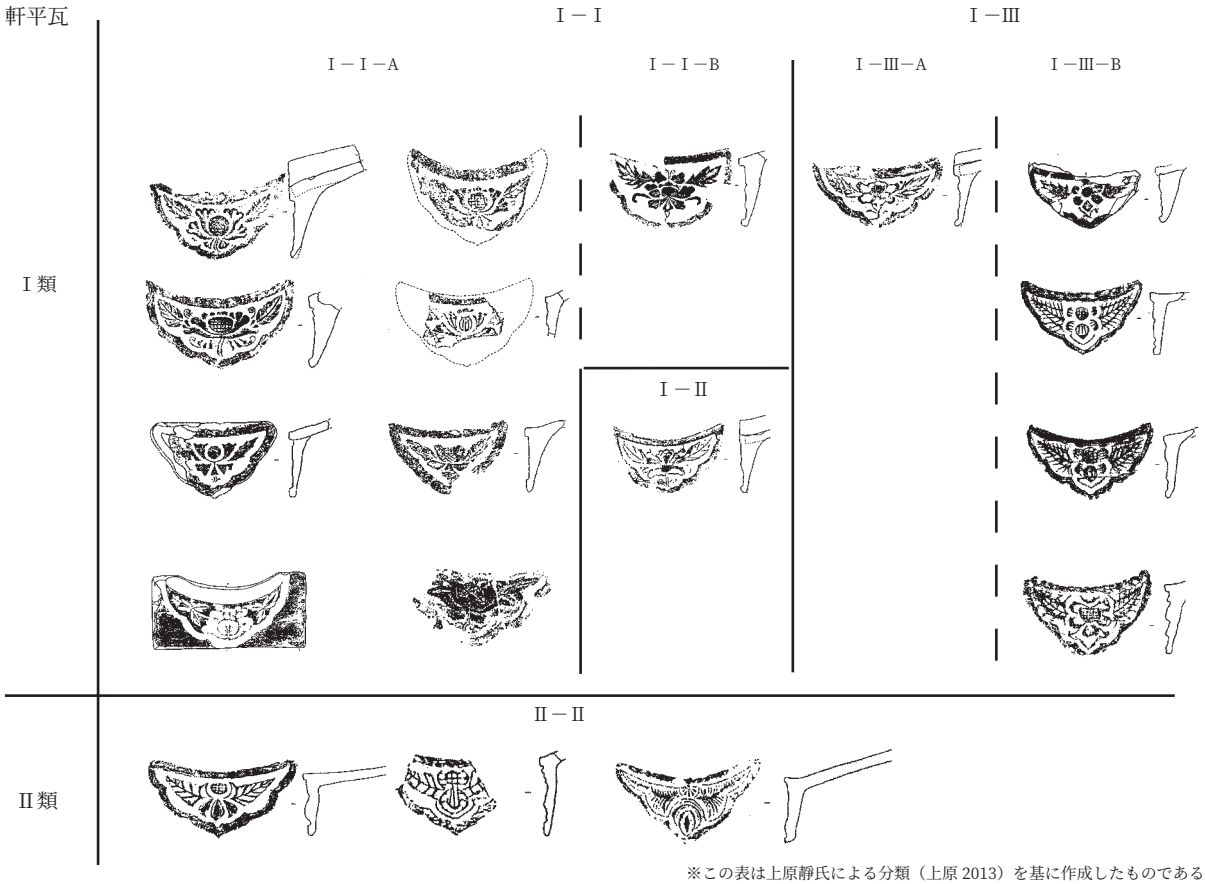
御内原北〈2〉分類(2013)	
Ⅰ	噛み合わせタイプ
Ⅱ	下駄状タイプ
Ⅲ	平面敷き用タイプ
Ⅳ	積み重ね用タイプ

上原分類(2011)	
Ⅰ式	形態は平板な正方形と三角形
Ⅱ式	平面形が長方形のいわゆる条塼
Ⅲ式	平面形が長方形の平板で、長軸か短軸の端面に階段状の噛み合わせを造形した製品
Ⅳ式	外観が下駄状の突起を有する製品
Ⅴ式	形態が方向の異なる二枚で構成され、側面に噛み合わせの段を造形する
Ⅵ式	概観が直方体を呈し、いわゆる煉瓦として一般的に認識されるもの



※この表は上原静氏による分類（上原 2013）を基に作成したものである。
※掲載している瓦は首里高校内埋蔵文化財発掘調査で出土した瓦ではない。

第 119 図　明朝系軒丸瓦　分類表



※この表は上原静氏による分類（上原 2013）を基に作成したものである。
※掲載している瓦は首里高校内埋蔵文化財発掘調査で出土した瓦ではない。

第 120 図　明朝系軒平瓦　分類表

第７表　III区瓦当分類表　明朝系瓦

器種・色調・分類 ＼ 出土地			SA		SM							SP	I	II		III							合計
			3001	3005	3001					3005	3008	3009		1	6	3	6				7		
			門Ｉ層炭	裏込	2	4	5	6	7	13	1	1	1			a	a	b	c	d	e	a	b	
軒丸瓦	灰色	Ｉ－Ｉ-A				1														1	1			3
		分類不可																				1		1
	赤色	Ｉ－Ｉ-B											1											1
		Ⅱ－Ⅰ											1											1
		Ⅱ-Ⅲ											2											2
		近代大和タイプ	1																					1
	褐色	Ｉ－Ｉ-A		1									2		1	2		1		3				10
		Ｉ－Ｉ-B			1	2		1		1			7	1	1									14
		Ⅲ-1							1															1
		分類不可					1				1		3		1	3				1				10
軒平瓦	灰色	Ｉ－Ｉ-A	1			1							1			1								4
		Ｉ類															1					1		2
		分類不可											1											1
	赤色	Ｉ-Ⅲ-B											1											1
	褐色	Ｉ－Ｉ-A		1									3		1				1	1				7
		Ｉ-Ⅲ-A									1													1
		Ｉ-Ⅲ-B											4											4
		Ｉ類										1	2				1		1					6
		分類不可																		2			1	3
合計			2	2	1	4	1	1	1	1	1	2	1	28	1	4	6	2	1	2	8	1	2	1	73

第８表　IV区瓦当分類表　明朝系瓦

器種・色調・分類 ＼ 出土地			SA	SK	SM		SR		I	II		III										合計
			4003	4007	4002		4001			7	8	10		11			12		20	22		
			裏込	層不明	1	2	1	層不明				層	a	b	a	b	c	層	a	b			
軒丸	灰色	Ｉ－Ｉ-A							1													1
		Ｉ－Ｉ-B				1																1
		分類不可							1													1
	赤色	Ⅱ-Ⅲ	1						1									1				3
		Ⅱ-Ⅳ							1													1
		分類不可	1						2	1												4
		近代大和タイプ							2													2
	褐色	Ｉ－Ｉ-A							2				2					1			2	7
		Ｉ－Ｉ-B	1		1				4			2		1		1				1	1	12
		Ⅱ-Ⅲ							1													1
		分類不可	1				1	1	6		1		1			1					1	13
	釉掛？	Ⅱ-Ⅲ							1													1
軒平	灰色	Ｉ－Ｉ-A							1						1							2
		Ｉ－Ⅱ																			1	1
	赤色	Ｉ-Ⅲ-B							2									2				4
		Ⅱ－Ⅱ								1												1
		分類不可							2													2
	褐色	Ｉ－Ｉ-A							1				1									2
		Ｉ-Ⅲ-B							4									1	1			6
		Ｉ類							1									1				2
		分類不可		1					1	1		2			2		1		1			9
	硬・陶質	Ｉ-Ⅲ-B																1				1
軒丸平不明	褐色	分類不可							1													1
合計			4	1	1	1	1	1	35	3	1	4	4	1	3	2	1	7	2	1	4	1	78

第９表　Ｖ区瓦当分類表　明朝系瓦ａ

器種・色調・分類 ＼ 出土地			SA		SD	トレ 13		トレ 14				トレ 15	トレ 1	トレ 13	トレ 3			SS	SX		I	II
						SF		SF				SF	SM	SQ	SS							
			5003	5005	5002	5001		5001				5001	5001	5006	5004			5007	5005	5005		
			裏込	南ｸﾁｬ～裏込	下Ⅲ	1	造成２・３	1	造成２	造成２炭	造成２・３	造成２・３	2	1	1	2 層上面	3	Ⅲ 1b		1		
軒丸	灰色・有孔	分類不可					1															
	灰色	Ｉ－Ｉ-A							1							1					3	
		Ｉ－Ｉ-B																				
		分類不可							1												3	
	赤色	Ｉ－Ｉ-A								1												
		Ｉ－Ｉ-B													1							
		Ⅱ-Ⅲ		1									1								4	
		近代大和タイプ																			1	
		分類不可							1													
	褐色	Ｉ－Ｉ-A	1			1	2	2	3	1										1	7	
		Ｉ－Ｉ-B									1							2			7	1
		Ｉ－Ⅱ-A															1					
		分類不可			1				1		1	1							1			1
軒平	灰色	Ｉ－Ⅱ																			1	
		Ｉ類																				
		分類不可																		1	1	
	赤色	Ｉ-Ⅲ-B									1										1	
		Ｉ類																			2	
		Ⅱ類					1							1								
		分類不可																			1	
	褐色	Ｉ－Ｉ-A					1			1											2	
		Ｉ－Ⅱ																			3	
		Ｉ-Ⅲ-A																			2	
		Ｉ-Ⅲ-B																			5	
		Ｉ類				1	1													1	6	
		分類不可					1		1										1		2	
	褐・ﾏﾝｶﾞﾝ掛	Ｉ－Ｉ-A							1													
軒丸平不明	褐色	分類不可																			3	2
合計			1	1	1	2	7	2	9	3	3	1	1	1	1	1	1	2	2	3	54	4

第 10 表　Ⅴ区瓦当分類表　明朝系瓦 b

器種・色調・分類 ＼ 出土地			Ⅱ			トレ 6 Ⅱ	Ⅱ			Ⅲ	トレ 11 Ⅲ	Ⅲ	トレ 6 Ⅲ	Ⅲ				トレ 12 Ⅲ	Ⅲ	トレ 12 Ⅲ		Ⅲ	トレ 14 西 Ⅲ	トレ 8 Ⅲ	合計
			3																						
			層	b	c	4	10	11	12			1	1	1 b	2	3	3 a	3 a	3 c	3 c	9 b		25	27	
軒丸	灰色・有孔	分類不可																							1
	灰色	Ⅰ - Ⅰ -A										1				1				1					8
		Ⅰ - Ⅰ -B														1									1
		分類不可																							4
	赤色	Ⅰ - Ⅰ -A																							1
		Ⅰ - Ⅰ -B																							1
		Ⅱ - Ⅲ																							6
		近代大和タイプ																							1
		分類不可																							1
	褐色	Ⅰ - Ⅰ -A	2	1	1		1					2		1		1					1				28
		Ⅰ - Ⅰ -B			1			1		2		4			1	1			1		1			1	24
		Ⅰ - Ⅱ -A						1																	2
		分類不可		1					1			2				1		1	1						13
軒平	灰色	Ⅰ - Ⅱ																							1
		Ⅰ類									1				1										2
		分類不可																							2
	赤色	Ⅰ - Ⅲ -B				1						1													4
		Ⅰ類																							2
		Ⅱ類																							2
		分類不可																							1
	褐色	Ⅰ - Ⅰ -A	1							1	1	1	1	1		1	1			1		1			14
		Ⅰ - Ⅱ																			1				4
		Ⅰ - Ⅲ -A														1									3
		Ⅰ - Ⅲ -B										1													6
		Ⅰ類									1					1					1				12
		分類不可									1					3	1		3						13
	褐・ﾏﾝｶﾞﾝ掛	Ⅰ - Ⅰ -A																							1
軒丸平不明	褐色	分類不可																							5
合計			3	2	2	1	1	2	1	3	4	12	1	2	2	11	2	1	5	2	4	1	1		163

第 11 表　Ⅲ区塼瓦　分類表

分類 ＼ 出土地	SA			SD	SM				SX	Ⅰ	Ⅱ			Ⅲ					Ⅳ	合計
	3001		3005	3001	3001	3005		3008	3001		1	3	6	3	4	6			1	
	門Ⅰ層炭	門裏込	裏込	層不明	5	1	2	1	2					a		a	b	c	b	
Ⅱ類			2							2			1	4		2	1	2	2	16
Ⅲ類												1								1
Ⅳ類	4	1			1	2	1	1	1	32			2		1			3		49
Ⅳ類・ヘラ描き	1																			1
Ⅵ類	1			1						9					1	1			1	14
Ⅵ類・ヘラ描き										1										1
Ⅷ類																		1		1
分類不可						2				2			2			1	1		1	9
分類不可・刻印											1									1
合　計	6	1	2	1	1	4	1	1	1	46	1	1	5	4	2	4	2	6	4	93

第 12 表　Ⅳ区塼瓦　分類表

分類 ＼ 出土地	SA	SK	SK	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ										合計
	4003	4006	4007		7	10		11			12	12	15	20		
	裏込	層不明	層不明			a	b	層	b	d		a	d			
Ⅳ類		1	1	12	1	2			1	1	1	1	1			22
Ⅳ類・ヘラ描き				1												1
Ⅵ類	2			8	1	3	1									15
Ⅷ類				1										1		2
分類不可				2	1			1								4
合　計	2	1	1	24	3	5	1	1	1	1	1	1	1	1		44

第 13 表　Ⅴ区塼瓦　分類表 a

分類 ＼ 出土地	トレ 12 SA	SD			トレ 13 SF			トレ 14 SF				トレ 15 SF	トレ 1 SM	トレ 1 SP	トレ 13 SQ	トレ 3 SS			トレ 4 SS	SS	トレ 4 SX	SX	Ⅰ	Ⅱ	トレ 14 西 Ⅱ	Ⅱ 3			トレ 6 Ⅱ	Ⅱ		
	5001	5002		5004	5001			5001				5001	5002	5041	5005	5004			5005	5007	5002	5005							4	10	10 層下 瓦	11
	裏込	堀形	下Ⅲ	1	1	造成 2･3	1	造成 2	造成 2 炭	造成 2･3		造成 2･3	1	1	1	1	2	3	5	Ⅲ 1b	2	1			Ⅱ	層	b	c				
Ⅱ類																							1									
Ⅲ類																																
Ⅳ類	1	1	1	1	2	5		4	5	2		6			1	2	1	1	2	3	1	3	39	2	2	6	3	2		1	2	4
Ⅳ類・ヘラ描き								1															2									
Ⅳ類・刻印																																
Ⅵ類						1		1				2	1	1		2				3		1	16	1					1		1	
Ⅵ類・ヘラ描き																							1									
Ⅶ類																							1	1								
Ⅷ類					2	1			1	1		2													1		1					1
分類不可		1				4	1	1						1									11		2		1					
合　計	1	2	1	1	4	11	1	7	6	3		10	1	2	1	4	1	1	2	6	1	4	71	4	5	6	4	3	1	1	3	5

第 14 表　Ⅴ区塼瓦　分類表 b

分類 ＼ 出土地	Ⅲ	トレ 1 Ⅲ	先行 北壁Ⅲ	Ⅲ 1		2	3			トレ 12 Ⅲ 3	Ⅲ		トレ 6 Ⅲ 9	Ⅲ 9			トレ 10 Ⅲ		トレ 14 西Ⅲ	トレ 8 Ⅲ		先行 Ⅲ・Ⅳ	合計
				層	a	層	層	a	c	c	5	7	a	b	13	17	17	20	25	27	34		
Ⅱ類																							1
Ⅲ類																	1		1				2
Ⅳ類	1	3	1	6	1		6	3	5	1		1	1	4	2	2		1	2	1	4		148
Ⅳ類・ヘラ描き														1									4
Ⅳ類・刻印																					1		1
Ⅵ類				4	1				3												1	1	41
Ⅵ類・ヘラ描き																							1
Ⅶ類																							2
Ⅷ類						1		2	6										1				20
分類不可	1			1				1			1												26
合　計	2	3	1	11	2	1	6	6	14	1	1	1	1	5	2	2	1	1	4	1	6	1	246

第 15 表　III区出土遺物観察一覧 a

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 121 図 図版６	1	中国産青花	碗	―	口縁部	(10.4)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面腰部に蓮弁文、胴部に山水文、内面口縁部には四方襷文。	SA3001	門Ⅰ層炭
	2	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(12.0)	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻、褐色粒と黒色粒が混入。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に寿字文。粘土シワあり。	SA3001	門Ⅰ層炭
	3	本土産染付	皿	磁器皿Ⅳ期	口～底部	(10)	2.35	(4.9)	胎土は灰白色で堅緻、黒色粒が混入。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内面に草花文。型打ち成形の波縁皿。	SA3001	門Ⅰ層炭
	4	本土産染付	皿	磁器皿Ⅳ期	底部	―	―	(4.6)	胎土は灰白色でやや堅緻、黒色粒が混入。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に唐草文、内底に白抜きで花文。	SA3001	門Ⅰ層炭
	5	本土産近代磁器	碗	―	口縁部	(11.2)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、口唇口銹。文様は外面と内面口縁部にあり、外面は葉に赤で彩色。	SA3001	門Ⅰ層炭
	6	本土産近代磁器	小碗	―	口～底部	(8.3)	4.3	3.2	胎土は白色で堅緻。釉はクロム釉で内面全施釉、外面は高台まで釉が掛かり、外底露胎。文様は外面に飛び鉋。	SA3001	門Ⅰ層炭
	7	本土産近代陶器	皿	―	口～底部	(17.6)	(2.0)	(9.9)	胎土は灰白色で堅緻。釉は透明で内外面施釉。文様は内面に青色で３本の圏線。外底に銘があり、不死鳥のマークと「…IRONSTONE CHINA」と「14」の文字。NIKKO 社の銘か。	SA3001	門Ⅰ層炭
	8	沖縄産施釉陶器	碗	―	口～底部	(13.4)	5.8	(6.6)	胎土は褐灰色と浅黄橙色でやや堅緻、白色粒が混入。釉は白化粧後、灰白色の釉を掛け、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎされ白土付着。貫入あり。蛇の目釉剥ぎ部に白土付着。	SA3001	門Ⅰ層炭
	9	沖縄産施釉陶器	碗	―	口～底部	(13.3)	6.05	(6.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は内外面に白化粧後、灰白色の釉を掛け、内底蛇の目釉剥ぎに重ね焼き痕、畳付釉剥ぎ。文様は外面に寿字文、梅花文、蓮弁文を模したと思われるもの。	SA3001	門Ⅰ層炭
	10	沖縄産施釉陶器	瓶	―	底部	―	―	6.15	胎土は褐灰色でやや堅緻、黒色粒が混入。釉は白化粧後、灰白色の釉を掛け、畳付釉剥ぎ。ロクロ成形。外底に砂付着。	SA3001	門Ⅰ層炭
	11	本土産陶器	擂鉢	関西系	口～底部	(28.5)	11.5	(14.8)	胎土は浅黄橙色で軟質、白色粒が混入。釉は褐色で外面は口縁から底部近くまで施釉し底部露胎、内面は全面施釉。使用により擂目は摩滅。畳付部分に刻み目あり。	SA3001	門Ⅰ層炭
第 122 図 図版６	12	本土産陶器	擂鉢	関西系	口縁部	―	―	―	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は褐色で内外面に施釉。内面には擂目を密に施す。注口あり。	SA3001	門Ⅰ層炭
	13	沖縄産施釉陶器	急須	―	口縁部	(7.2)	―	―	胎土は灰白色と一部明黄褐色で軟質。全面白化粧後、外面に透明釉を施釉。口唇部釉剥ぎ。文様は線刻により区画し格子文、丸文。	SA3001	門Ⅰ層炭
	14	沖縄産施釉陶器	酒器	―	底部	―	―	(8.0)	胎土は浅黄橙色でやや軟質。釉は透明釉を外面の高台脇まで施釉。文様は外面胴部に施文。	SA3001	門Ⅰ層炭
	15	沖縄産施釉陶器	灯明皿	―	口縁部	(10.2)	―	―	胎土は浅黄色で軟質。釉は内面に白化粧、透明釉を内面と外面口縁部に施釉。口唇部に灯心受を設ける。	SA3001	門Ⅰ層炭
	16	沖縄産無釉陶器	壺	―	口縁部	(13.4)	―	―	胎土は赤褐色で堅緻、白色粒が混入。外面は暗赤色、内面は明赤褐色を呈する。口縁を外に折り曲げて成形。口唇部に刻みあり。	SA3001	門Ⅰ層炭
	17	沖縄産無釉陶器	水鉢	―	口縁部	(19.05)	―	―	胎土は赤褐色で堅緻、赤色粒が混入。外面はにぶい赤褐色、内面は明赤褐色を呈する。口縁を外側に折り曲げて成形。	SA3001	門Ⅰ層炭
	18	骨製品	歯ブラシ	―	―	―	―	厚さ 0.5	残存部はブラシ部分に３列 23 孔、背部分に２列 10 孔残存。全面磨かれており光沢を持つ。	SA3001	門Ⅰ層炭
	19	金属製品	飾り金具	―	―	縦 7.7	横 2.7	厚さ 0.2	上下両端は出八双。表面及び裏面は無文。方孔が１カ所、小孔が８カ所見られる。	SA3001	門Ⅰ層炭
	20	銭貨	―	(新)寛永通寶	―	外径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	寛永通寶。新寛永（３期：1697 年）で背面無文。	SA3001	門Ⅰ層炭
第 123 図 図版６	21	本土産近代磁器	碗	瀬戸・美濃系	底部	―	―	(4.1)	胎土は白色で緻密。釉は外面にクロム釉、内面に透明釉を施釉、畳付釉剥ぎ。文様は外面に白色の文様と金の絵付け、内底に動物文。	SA3001	門裏込
	22	沖縄産施釉陶器	火取	―	口縁部	(10.2)	―	―	胎土は浅黄色で軟質。釉は全面白化粧後、外面に透明釉を施釉、口唇部は釉剥ぎ。ロクロ成形。	SA3001	門裏込
	23	沖縄産施釉陶器	急須	―	底部	―	―	(8.4)	胎土は褐灰色で堅緻。釉は内外面に白化粧後、透明釉を内面と外面腰部まで施釉。円錐状の脚が１本残存しており元は３本と思われる。底部に窯詰め痕。	SA3001	門裏込
	24	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	口縁部	―	―	―	胎土は赤褐色でやや堅緻、石英粒、巻貝と思われるものが混入。内面に擂目を施す。	SA3001	門裏込
	25	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(12.4)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は内外面に透明釉を施釉後、口唇部は釉が剥がれる。文様は外面胴部に草花文か。粘土シワあり。	SA3005	裏込
	26	陶質土器	火炉	―	口縁部	―	―	―	胎土は橙色で軟質、赤色粒、雲母が混入。文様は外面に白色土の圏線。	SA3005	裏込
	27	貝製品	貝玉	マガキガイ Ⅱ類	―	縦 4.55	横 2.65	―	貝玉製作途中の未製品。螺軸頂部から体層部にかけ打割が見られる。	SA3005	裏込
	28	明朝系瓦 （褐色）	軒平瓦	Ⅰ－Ⅰ－A	瓦当	―	―	―	瓦当中央部のみ残存。花芯は円く格子状の刻みが入り、花弁は弁先が円く３枚に割れる。瓦当裏は横方向にナデが施される。	SA3005	裏込
	29	塼瓦	―	Ⅱ類	―	―	―	厚さ 7.1	色調は表面が橙色、胎土は灰色。断面がＬ字状に残り、側面には段を成形する。下駄状突起はカギ状に整形され、側面は斜めに削られる。	SA3005	裏込
	30	中国産白磁	小碗	徳化窯系	口縁部	(8.6)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は内外面に透明釉を施釉後、口唇部釉剥ぎ。外面に型成形時の粘土シワあり。	SA3006	１層

第 16 表　III区出土遺物観察一覧 b

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 123 図 図版 6	31	中国産青花	器種不明	漳州窯系	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色で軟質。釉は外面と内面口縁部に白化粧後、灰白色の釉を施釉。外面胴部に不明文様。貫入あり。	SA3006	１層
	32	沖縄産無釉陶器	碗	－	底部	－	－	(6.0)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、赤色粒が混入。畳付は平坦。ロクロ成形。	SA3006	１層
	33	瓦質土器	脚	－	－	－	－	－	胎土は橙色で堅緻、白粒、赤色粒、黒色粒が混入。底面に紐切痕か。煤付着。	SA3006	１層
第 124 図 図版 6	34	中国産青磁	碗	Ｖ－３類	底部	－	－	5.5	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉、外底は蛇の目釉剥ぎ。外面胴部に唐草文、内底に印花文。	SD3001	１層
	35	本土産近代磁器	碗	瀬戸・美濃系	口縁部	(10.4)	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は外面胴部、内面口縁部に透明釉を施釉。文様は外面に色絵で茶色の３条の区画線、緑色の竹文、赤色の文様。	SD3001	１層
	36	沖縄産施釉陶器	壺	－	口縁部	(12.0)	－	－	胎土は灰白色で軟質。釉は褐色で外面口縁部から胴部にかけて施釉、内面は胴部に施釉。	SD3001	１層
	37	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	(8.3)	4.75	(3.0)	胎土は白色で堅緻。内外面に透明釉を施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面にゴム判による唐草文、丸文。	SD3001	２層
	38	中国産青花	碗	C’群 明Ⅱ－３	口縁部	－	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に草花文か。景徳鎮窯系。	SD3001	４層裏込
	39	中国産磁器	碗	－	胴部	－	－	－	胎土は白色で緻密。釉は内面に透明釉を施釉、外面は透明釉を鮫肌状にし、浅黄色の釉を施釉。ロクロ成形。	SD3001	４層裏込
	40	本土産磁器	碗	－	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。全面無文。	SD3001	４層裏込
	41	沖縄産無釉陶器	壺	－	口縁部	(12.4)	－	－	胎土は暗赤褐色で堅緻、白色粒が混入。自然釉が口唇部と外面胴部に掛かる。	SD3001	４層裏込
	42	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	－	－	7.0	胎土は淡黄褐色で軟質、黒色粒が混入。釉は灰白色で内面と外面高台途中まで施釉し、外底も施釉。内底蛇の目釉剥ぎ。文様は外面胴部に草花文か。	SK3002	１層
	43	中国産青花	小碗	C’群 明Ⅱ－３	口縁部	(9.6)	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に草花文か。景徳鎮窯系。	SM3001	１層
	44	中国産褐釉陶器	壺	－	底部	－	－	6.3	胎土は灰褐色でやや軟質、石英粒が混入。釉は褐色で外面胴部途中、内面に施釉。ロクロ成形。小型の壺。	SM3001	１層
	45	中国産褐釉陶器	鉢	－	底部	－	－	(10.0)	胎土は灰褐色でやや軟質、石英粒が混入。釉は褐色で内面及び外面腰部まで施釉。ロクロ成形。外底に砂付着。	SM3001	２層
	46	煙管	－	陶首Ｉ類	雁首	幅 3.3	－	－	胎土はにぶい橙色で軟質、赤色粒混入。明朝系瓦の転用で火皿内と小口に煤付着。火皿内径は 1.35cm。	SM3001	２層
	47	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ｉ－Ｉ－Ｂ	瓦当	－	－	－	瓦当文様は中央部がやや不明瞭だが、花弁が瓦当全体に広がる。瓦当裏はナデが見られるが粗く凹凸面を呈する。	SM3001	２層
第 125 図 図版 7	48	初期沖縄産 無釉陶器	碗	－	口～底部	(12.7)	6.6	5.05	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒と赤色粒が混入。釉は外面の一部に自然釉が掛かる。底部は付け高台。外底に高台削り出しの道具の跡か。	SM3001	４層
	49	初期沖縄産 無釉陶器	灯明皿	－	口～底部	(11.0)	2.3	(7.2)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒が混入、白土が筋状になる。外面に自然釉が掛かる。口縁部に煤付着。	SM3001	４層
	50	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ｉ－Ｉ－Ｂ	瓦当	－	－	－	文様は笵のズレがみられ、下段花弁が潰れ、花柱も途中で途切れる。瓦当裏のナデは丁寧で、顎部は湾曲する。	SM3001	４層
	51	明朝系瓦(灰色)	軒平瓦	Ｉ－Ｉ－Ａ	瓦当	－	－	－	笵バリあり。平瓦部との接合角度は鈍角で、瓦当裏はナデが明瞭。	SM3001	４層
	52	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	Ａ	玉縁部	－	－	－	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、種子状のヘラ描きあり。筒部凸面は縦ナデが明瞭で、玉縁側に横位のナデを施す。	SM3001	４層
	53	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	Ａ	玉縁部	－	－	－	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、斜線のヘラ描きあり。筒部凸面は縦ナデが明瞭で、側面寄りに漆喰が付着。	SM3001	４層
第 126 図 図版 7	54	本土産陶器	鉢	美濃系	底部	－	－	－	鉄絵の向付。胎土は淡黄色で軟質。釉は内面に灰白色の釉を施し、外面は底部露胎。内底に不明文様。底部に半環状の脚を付ける。岐阜県元屋敷跡に類例あり。	SM3001	６層
	55	初期沖縄産 無釉陶器	灯明皿	－	口～底部	(7.8)	2.3	(4.0)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白土が筋状になる。内外面に自然釉が掛かる。外面にケズリ調整痕あり。口縁部に煤付着。	SM3001	６層
	56	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	Ａ	玉縁部	－	－	－	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、頂部に×字のヘラ描きあり。筒部凸面は縦ナデ、玉縁側に横位のナデを明瞭に施す。	SM3001	６層
	57	中国産青花	碗	C’群 明Ⅱ－３	口縁部	(9.9)	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に花鳥文、ダミ塗、ペンシルドローイング。景徳鎮窯系。	SM3001	７層
	58	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	Ａ	玉縁～端部	－	－	－	玉縁部に縦位１本のヘラ描き。筒部凸面は縦位、玉縁側に横位のナデ。筒部凹面上部に正方形の窪み。広端部を面取り整形。	SM3001	７層
第 127 図 図版 7	59	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	Ａ	玉縁部	－	－	－	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、斜状に四連のヘラ描き。筒部凸面玉縁側に横位のナデを施す。	SM3001	９層
	60	中国産青花	皿	Ｅ群 明Ⅲ	口～底部	(11.9)	2.7	(6.7)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内面口縁部に四方襷文、内底に草文か。畳付に砂付着。内底に鉋痕あり。景徳鎮窯系。	SM3001	11 層

第 17 表　III区出土遺物観察一覧 c

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 127 図 図版 7	61	初期沖縄産 無釉陶器	灯明皿	－	完形	10.25	2.5	6.4	自然釉が外面に掛かる。底部はベタ底。口縁部の一部に煤付着。	SM3001	11 層
	62	煙管	－	陶首Ｉ類	雁首	幅 3.05	高さ 3.95	－	胎土は褐灰色で軟質。明朝系瓦の転用で火皿に煤付着。小口外径は 1.09cm。	SM3001	11 層
	63	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	－	－	－	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、Z 字状のヘラ描きあり。玉縁部凹面に布重ね縫い痕。	SM3001	11 層
第 128 図 図版 7	64	中国産青花	碗	C' 群 明Ⅱ－３	口縁部	(12.2)	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に草花文か、内面口縁部に四方襷文。景徳鎮窯系。	SM3001	13 層
	65	中国産青花	碗	D 群 明Ⅱ－２	底部	－	－	(4.4)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内底に十字文、ダミ塗り、ペンシルドローイング。景徳鎮窯系。	SM3001	13 層
	66	中国産青花	皿	E 群 明Ⅲ	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に四方襷文。景徳鎮窯系。	SM3001	13 層
	67	中国産天目	碗	－	口～底部	11.6	6.5	4.0	胎土は灰白色と一部淡黄褐色で堅緻、黒色粒混入。釉は黒褐色で外面を胴部途中、内面全面施釉。ロクロ成形。	SM3001	13 層
	68	初期沖縄産 無釉陶器	灯明皿	－	口～底部	(9.9)	2.6	(6.0)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色土が筋状になる。自然釉が内外面に掛かる。口縁部の一部に煤付着。	SM3001	13 層
	69	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ｉ－Ｉ－Ｂ	瓦当	－	－	－	笵バリあり。文様は花弁が瓦当全体に広がる。	SM3001	13 層
	70	中国産青磁	碗	VI類	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色で堅緻、黒色粒と白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面施釉。文様は外面に線刻蓮弁文。龍泉窯系。	SM3002	１層
	71	中国産青花	碗	－	口縁部	(12.4)	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は内外面の口縁部に２本の圏線。	SM3002	１層
	72	中国産青磁	皿	Ｖ類	口縁部	(11.4)	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻、黒色粒が混入。釉は灰オリーブ色で内外面施釉。文様は外面に線刻蓮弁文。龍泉窯系。	SM3002	３層
	73	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	口～底部	(15.2)	4.9	(9.0)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、口唇部と畳付釉剥ぎ。文様は外面に草花文、内面に草花文と菊花枝文。ロクロ成形。外面一部に白い斑点あり。畳付に砂付着。	SM3002	３層
	74	初期沖縄産 無釉陶器	火炉	－	口縁部	－	－	－	胎土は赤褐色で堅緻、白色粒と筋状に白色の土が混入。 外面に自然釉が掛かり、内面露胎。肩部は「く」の字状に折れ、口縁部は少し弧を描くように削られている。	SM3002	３層
	75	中国産白磁	皿	E 群	底部	－	－	(11.0)	胎土は灰白色で堅緻、黒色粒が混入。釉は白色で施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に砂付着。景徳鎮窯系。	SM3002	４層
	76	中国産白磁	灯明皿	D' 群	口縁部	－	－	－	胎土は白色でやや堅緻、黒色粒が混入。釉は灰白色で内面施釉後、口唇部釉剥ぎ、外面は露胎。ロクロ成形。福建系。	SM3002	４層
	77	中国産青花	碗	Ｉ群	口縁部	(12.0)	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に山形蓮弁文内に宝珠、内面に山形蓮弁文内に折枝文。型により口縁部を輪花形に成形。景徳鎮窯系。	SM3002	４層
第 129 図 図版 8	78	中国産青花	皿	徳化窯系	口～底部	(16.0)	3.25	(9.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に簡略化された宝文、内面胴部に草花文、内底に折枝文。粘土シワあり。	SM3005	１層
	79	本土産近代磁器	小碗	－	口～底部	8.4	4.45	3.4	胎土は白色で堅緻。釉は全面に透明釉を施釉後、畳付釉剥ぎ、口銹。文様は外面胴部に草花文、内底に不明文様。	SM3005	１層
	80	沖縄産施釉陶器	碗	－	口～底部	(13.8)	6.3	6.5	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。内底と畳付に耐火土付着。	SM3005	１層
	81	沖縄産施釉陶器	小碗	－	口～底部	(8.6)	5.4	(3.6)	胎土は褐灰色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉、畳付釉剥ぎ。外面胴部は面取り。畳付に耐火土付着。	SM3005	１層
	82	沖縄産施釉陶器	火取	－	口～底部	10.4	8.6	7.2	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を口唇部を除く外面全体に施釉後、畳付釉剥ぎ。	SM3005	１層
	83	沖縄産施釉陶器	急須	－	口～底部	(6.8)	(7.7)	(6.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉は透明釉を外面胴部途中、内面は全面に施釉、蓋の受け口を釉剥ぎ。蓋の受け口に鉋痕あり。	SM3005	１層
	84	沖縄産施釉陶器	酒器	－	底部	－	－	(7.6)	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は褐色で外面胴部から高台脇にかけ施釉。	SM3005	１層
	85	沖縄産無釉陶器	瓶	－	口～底部	(6.85)	(19.4)	(12.0)	胎土は赤褐色で堅緻、黒色粒、白色粒が混入。外面胴部に４条の圏線。	SM3005	１層
	86	陶質土器	蓋	－	胴～袴部	庇径 (9.6)	－	袴径 (7.0)	胎土は浅黄橙色で軟質、赤色粒、雲母が混入。袴部の先端が平坦に成形される。外面の一部に煤付着。	SM3005	１層
第 130 図 図版 8	87	陶質土器	急須	－	口～底部	8.2	12.05	17.6	胎土は浅黄橙色で軟質、雲母、白色粒が混入。外面は底部から胴部中段まで煤付着。	SM3005	１層
	88	瓦質土器	火炉	－	口～底部	－	－	－	胎土は灰黄褐色と明赤褐色でやや軟質、貝類、種子類、赤色粒、白色粒、雲母が混入。口唇部から口縁内面に煤付着。	SM3005	１層
	89	明朝系瓦(褐色)	軒平瓦	Ｉ－Ⅲ－Ａ	瓦当	－	－	－	瓦当文様の葉に切れ込みがみられる。平瓦部との接合角度は鈍角で、瓦当裏はナデが明瞭。	SM3005	１層
第 131 図 図版 8	90	明朝系瓦(赤色)	丸瓦	B	玉縁～端部	－	－	－	完形。玉縁凹面に布重ね縫い痕。筒部凸面は縦位のナデが明瞭に残り、玉縁側に斜線１本のヘラ描き。漆喰が筒部周縁を巡るように付着。	SM3005	１層

第 18 表　III区出土遺物観察一覧 d

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 131 図 図版８	91	明朝系瓦(赤色)	丸瓦	B	玉縁～端部	—	—	—	筒部凸面は縦位、玉縁側に段差が出来るほどの横位のナデを施す。×字のヘラ描きが筒部凸面上端にみられる。	SM3005	１層
第 132 図 図版８	92	明朝系瓦(赤色)	平瓦	—	広端～狭端部	—	—	—	凹面の桶板留紐圧痕が４個残り、狭端部側に横位に１条の布糸綴り痕がみられる。凸面に格子状に浅い沈線がみられる。	SM3005	１層
	93	明朝系瓦(褐色)	平瓦	—	広端～狭端部	—	—	—	凸面に十字に沈線、漆喰が上部の両側面に付着する。凹面に桶板留紐圧痕が６個、狭端部側に横位に１条の布糸綴り痕がみられる。	SM3005	１層
	94	明朝系瓦(褐色)	平瓦	—	広端～狭端部	—	—	—	狭端面から凹面上部にかけてマンガン釉掛けを施す。凹面には僅かに漆喰が付着する。	SM3005	１層
第 133 図 図版９	95	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(15.2)	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に寿字文。	SM3005	２層
	96	沖縄産施釉陶器	皿	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰オリーブ色で内外面に施釉。文様は内外面胴部にイッチン。	SM3005	２層
	97	円盤状製品	—	—	—	縦 7.75	横 8.2	厚さ 2.25	中国産青磁碗の底部を加工。内外面からの打割。	SM3005	２層
	98	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	—	—	(5.8)	胎土は灰白色と一部淡黄褐色で軟質。釉は灰白色で外面腰部まで施釉、底部露胎。	SM3007	１層
	99	本土産磁器	袋物	—	底部	—	—	4.2	胎土は白色で堅緻。釉は外面に褐色釉を施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に砂付着。	SM3008	１層
	100	沖縄産施釉陶器	碗	—	口～底部	(8.8)	5.9	(4.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は褐釉色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。	SM3008	１層
	101	明朝系瓦(灰色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁部に斜線３本を重ねたヘラ描き。筒部凸面は玉縁側に横位のナデ。凹面に横位１条の布糸綴り圧痕。	SM3008	１層
	102	中国産青花	小杯	徳化窯系	底部	—	—	(2.6)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。外底に銘款あり。	SM3009	２層
	103	中国産青花	碗	福建・広東系	口縁部	(11.7)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で外面、内面口縁部から胴部途中まで施釉。文様は外面に花文、鳳凰文。	SM3009	断割 III４層
	104	中国産青花	皿	B１群 明Ｉ－１	口～底部	(11.0)	2.7	(5.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ、砂付着。文様は外面胴部に宝珠唐草文、内底に草花文。胴部に孔あり。景徳鎮窯系。	SM3009	断割 III４層
	105	中国産青磁	碗	VI類	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色でやや厚く施釉される。文様は外面にヘラ描きによる幅の狭い線刻蓮弁文。	SM3009	底面
第 134 図 図版９	106	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口縁部	(10.6)	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に草花文。	SX3004	層不明
	107	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	—	—	(7.4)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で外面施釉後、畳付釉剥ぎ。内面は胴部途中から内底が露胎。文様は外面胴部に草花文。外面胴部腰に鉋痕あり。	SX3004	層不明
	108	中国産色絵	碗	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に赤色で花文。	SX3004	層不明
	109	中国産色絵	碗	—	底部	—	—	(4.9)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に緑色でラマ式蓮弁文、外底に圏内に銘款あり。	SX3004	層不明
	110	中国産色絵	蓮華	—	—	—	—	—	胎土は灰白色堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は柄の内面に赤色の文様。	SX3004	層不明
	111	本土産染付	瓶	肥前系	頸部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で外面と内面胴部途中まで施釉。文様は外面胴部に網目文。	SX3004	層不明
	112	本土産色絵	小碗	—	口縁部	(8.0)	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に赤色の文様と茶色の花文か、内面口縁部に赤の圏線。	SX3004	層不明
	113	本土産色絵	小碗	—	底部	—	—	(2.85)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面に赤色の葉文、黒色の線、内底に赤色の文様。	SX3004	層不明
	114	本土産近代磁器	碗	砥部産	口～底部	(13.6)	6.25	5.0	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は型紙摺りで外面胴部に花唐草文、内面口縁部に五弁花文、内底に昆虫文か。内底５カ所に目痕あり。	SX3004	層不明
	115	本土産近代磁器	皿	—	口縁部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は内外面に施釉後、口唇部から内面口縁部を釉剥ぎ。文様は外面に波文、幾何学文。	SX3004	層不明
第 135 図 図版９	116	沖縄産施釉陶器	碗	—	口～底部	(13.2)	6.05	(6.4)	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に丸文。内底及び畳付に耐火土付着。	SX3004	層不明
	117	沖縄産施釉陶器	碗	—	底部	—	—	(6.7)	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は外底の一部を除く全面に白化粧後、透明釉を施釉、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に線刻の文様。内底及び畳付に耐火土付着。	SX3004	層不明
	118	沖縄産施釉陶器	小碗	—	口～底部	(8.6)	4.5	3.8	胎土は黄橙色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。内底及び畳付に耐火土付着。	SX3004	層不明
	119	沖縄産施釉陶器	火取	—	底部	—	—	(6.8)	胎土は褐灰色でやや軟質。釉は外面胴部に褐色釉を施釉、外面腰部から底部及び内底は露胎。	SX3004	層不明
	120	沖縄産無釉陶器	擂鉢	—	口～底部	(27.8)	11.9	(10.6)	胎土は明赤褐色でやや堅緻。内面に擂目を密に施し、口縁部をケズリ調整。外面はロクロ痕が顕著。	SX3004	層不明

第 19 表　III区出土遺物観察一覧 e

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 136 図 図版 9	121	中国産青磁	皿	Ⅵ－０類	口～底部	13.6	3.5	(6.2)	胎土は明褐灰色でやや軟質、白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面施釉後、外底釉剥ぎ。文様は内面胴部にヘラで唐草文、内底圏線内にヘラで花文。龍泉窯系。		Ⅰ層
	122	中国産青磁染付	小碗	景徳鎮窯系	底部	－	－	(3.7)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。外底に銘あり。		Ⅰ層
	123	中国産青磁染付	小碗	景徳鎮窯系	底部	－	－	(4.0)	胎土は灰白色でやや堅緻、黒色粒が混入。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内面に太極文。外底に銘あり。		Ⅰ層
	124	中国産白磁	小碗	徳化窯系	口～底部	(8.6)	4.0	(4.8)	胎土は白色で堅緻、黒色粒が混入。釉は白色で内外面施釉後、口唇部釉剥ぎ。粘土シワあり。		Ⅰ層
	125	中国産白磁	小皿	徳化窯系	口～底部	(8.0)	1.9	(5.6)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内面と外面口縁部から胴部まで施釉、口唇部口剥で外底は露胎。粘土シワあり。口縁部に刻み目あり。		Ⅰ層
	126	中国産白磁	小杯	徳化窯系	口～底部	4.3	2.9 2.7	2.0	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面全施釉後、畳付釉剥ぎ。粘土シワあり。内底に砂付着。		Ⅰ層
	127	中国産白磁	鉢	福建系	底部	－	－	7.8	胎土は浅黄橙色で軟質、暗褐色粒子が混入。釉は灰オリーブ色で、内面と外面の胴部途中まで施釉し、釉が垂れる。貫入あり。目痕あり。		Ⅰ層
	128	本土産近代磁器	蓋	－	胴～袴部	庇径 (27.8)	－	袴径 (21.4)	胎土は淡黄色で硬質だが粗い、白色粒が混入。釉は灰白色で外面施釉、内面露胎。内面に指の痕か。		Ⅰ層
	129	中国産白磁	蓮華	－	－	－	－	－	胎土は白色でやや堅緻。釉は灰白色で、内外面施釉。		Ⅰ層
	130	中国産青花	碗	－	口縁部	(13.4)	－	－	胎土は灰白色で堅緻、褐色粒が混入。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に花文と唐草文。		Ⅰ層
	131	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(23.0)	－	－	胎土は白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に草花文か。		Ⅰ層
	132	中国産青花	小碗	景徳鎮窯系	口縁部	－	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は内外面ともに区画文。芙蓉手。		Ⅰ層
第 137 図 図版 10	133	中国産青花	皿	－	口縁部	－	－	－	胎土は白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に草文、内面に八宝文か。貫入あり。		Ⅰ層
	134	中国産青花	皿	徳化窯系	底部	－	－	(11.4)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内底に折枝文。外底に銘款あり。内底中央が僅かに膨らむ。		Ⅰ層
	135	中国産青花	皿	Ｂ１群 明Ⅱ－１	底部	－	－	(7.1)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に唐草文、内底に玉取獅子文。景徳鎮窯系。		Ⅰ層
	136	中国産青花	瓶	景徳鎮窯系	胴部	－	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に唐草文。		Ⅰ層
	137	中国産青花	鉢	福建・広東系	底部	－	－	(11.2)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に宝文。高台脇に鉋痕あり。		Ⅰ層
	138	中国産褐釉陶器	壺	－	口縁部	(8.5)	－	－	小型の壺。胎土は黄灰色でやや軟質、石英粒が混入。釉は褐色で外面から内面口縁部に施釉後、口唇部釉剥ぎ。		Ⅰ層
	139	中国産褐釉染付	碗	－	胴部	－	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉は外面に黄褐色釉、内面に明緑灰色釉を施釉。内底に２条の圏線。		Ⅰ層
	140	中国産褐釉磁器	碗	－	底部	－	－	(4.6)	胎土は灰白色で堅緻。釉は外面に褐色釉、内面に灰白色釉を施釉、外底の中心が露胎。		Ⅰ層
	141	中国産陶器	茶器	宜興窯系	口縁部	(13.0)	－	－	円筒状の茶壺か。胎土はにぶい赤褐色で堅緻。内外面に紫泥を施す。ロクロ成形。		Ⅰ層
	142	中国産陶器	茶器	宜興窯系	胴部	－	－	－	茶壺か。胎土はにぶい赤褐色で堅緻。内外面に紫泥を施す。縦位に２条の沈線。内面に縦位に指頭の調整痕。		Ⅰ層
	143	中国産陶器	茶壺	宜興窯系	底部	－	－	(4.5)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻。内外面に紫泥を施す。底部は碁笥底状。		Ⅰ層
	144	本土産染付	碗	磁器碗 Ⅲ期	口～底部	(14.0)	7.15	5.4	胎土は白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に雲龍文、内底に簡略化された荒磯文。全面に細かな貫入が見られる。		Ⅰ層
	145	本土産陶器	碗	陶器碗 Ⅲ～Ⅳ期	口～底部	(11.4)	8.0	4.7	胎土は灰白色で軟質。釉は浅黄色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に砂目付着。全面に貫入あり。		Ⅰ層
第 138 図 図版 10	146	本土産陶器	皿	－	底部	－	－	(5.2)	胎土は灰白色で軟質。釉は黄褐色で内外面に施釉後、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。文様は内面胴部に蓮弁文。		Ⅰ層
	147	本土産陶器	器種不明	－	底部	－	－	(7.6)	水注か。胎土は灰白色で軟質。釉は透明釉を内面と外面腰部まで施釉。底部露胎。底部は碁笥底状。		Ⅰ層
	148	本土産近代磁器	鉢	－	口～底部	(19.0)	5.7	9.0	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ、外底蛇の目釉剥ぎ。文様は型紙摺りで内外面に青海波、花文、内底に流水文か。蛇の目凹形高台。		Ⅰ層
	149	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅷ類	底部	－	－	(6.0)	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は外面胴部に褐色釉、内面は白化粧後、明オリーブ灰色を施釉、見込み蛇の目釉剥ぎ。畳付に耐火土付着。外底に墨書で「外城」か。		Ⅰ層
	150	沖縄産施釉陶器	皿	－	口～底部	(13.4)	3.95	(7.8)	波縁の皿。胎土は灰白色で軟質。釉は浅黄色を全面施釉後、畳付釉剥ぎ。		Ⅰ層

第 20 表　III区出土遺物観察一覧 f

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 138 図 図版 10	151	沖縄産施釉陶器	瓶	―	底部	―	―	7.0	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は外面胴部途中まで白化粧後、透明釉を外底まで施釉し、畳付釉剥ぎ。内面露胎。文様は外面に草花文。		Ⅰ層
	152	沖縄産施釉陶器	瓶	―	底部	―	―	(5.2)	胎土は橙色で軟質。釉は外面に褐色釉を施釉後、畳付釉剥ぎ、内面露胎。		Ⅰ層
	153	沖縄産施釉陶器	鉢	―	底部	―	―	(10.0)	胎土はにぶい橙色で軟質。釉は内面に白化粧後、内外面に透明釉を施釉し、畳付釉剥ぎ。内底蛇の目釉剥ぎ。文様は外面胴部に白土の刷毛目装飾。内面胴部に葉文。		Ⅰ層
第 139 図 図版 10	154	沖縄産施釉陶器	香炉	―	口～底部	(20.4)	(11.4)	(11.6)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻。釉は黒褐色で口唇部から外面胴部まで施釉、外底と内面露胎。脚の尖端は獣面（獅子か）。		Ⅰ層
	155	沖縄産施釉陶器	火取	―	底部	―	―	(8.8)	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は外面胴部に褐色釉を施釉、内面及び外面腰部から外底まで露胎。外面胴部に耳が取れた跡あり。高台脇に整形痕あり。		Ⅰ層
	156	沖縄産施釉陶器	蓋	―	胴～袴部	庇径 (12.0)	―	袴径 (10.1)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は全面に白化粧後、透明釉を外面から裾まで施釉。外面胴部に印による「理明」の文字あり。		Ⅰ層
	157	沖縄産施釉陶器	蓋	―	撮	―	撮径 6.0	―	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は外面に褐色釉を施釉後、撮みの上部を釉剥ぎ、内面露胎。撮みの断面は逆「ハ」の字状。撮みに砂付着。		Ⅰ層
	158	沖縄産施釉陶器	急須	―	口～底部	(8.3)	12.0	9.4	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は内外面に白化粧後、外面は口縁部から腰部までコバルト釉、内面は透明釉を施釉後、口唇から口縁内側を釉剥ぎ。注口接着部分に７個の孔を穿つ。		Ⅰ層
	159	中国産褐釉陶器	壺	―	口縁部	(27.2)	―	―	胎土は灰白色と茶褐色で軟質、石英粒、黒色粒が混入し白土筋状になる。口縁部は外側貼付し、断面は三角形状。外面胴部に格子状のタタキあり。		Ⅰ層
第 140 図 図版 10	160	初期沖縄産 無釉陶器	水鉢	―	口縁部	(16.8)	―	―	胎土は暗赤色で堅緻、白色粒と筋状に白色の土が混入。釉は黒褐色で外面と内面口縁部から口縁部下まで施釉。文様は外面胴部に３条の波状文。ロクロ成形。		Ⅰ層
	161	沖縄産無釉陶器	碗	―	底部	―	―	(5.0)	胎土は赤色でやや軟質、白色粒が混入。外底に×状の沈線あり。畳付部に煤付着。		Ⅰ層
	162	沖縄産無釉陶器	壺	―	口縁部	(12.6)	―	―	胎土は赤褐色で堅緻、黒色粒と白色粒が混入。口縁部断面が鍔状。ロクロ成形。		Ⅰ層
	163	沖縄産無釉陶器	植木鉢	―	口縁部	―	―	―	胎土は赤褐色でやや堅緻、黒色粒と白色粒が混入。文様は外面胴部に線刻で菊花文、外面口唇部と口縁部に波状凸帯文。		Ⅰ層
	164	沖縄産無釉陶器	火取	―	口縁部	(17.8)	―	―	胎土は暗赤褐色でやや堅緻、黒色粒が混入。釉は黒褐色で外面と内面口縁部の一部に掛かる。文様は外面口縁部下と胴部に２条ずつの沈線、内面口縁部下に不明文様。		Ⅰ層
	165	沖縄産無釉陶器	火取	―	底部	―	―	(7.8)	胎土は暗赤褐色でやや堅緻、褐色粒が混入。内外面に自然釉が掛かり、外面に黒褐色釉が垂れる。ロクロ成形。		Ⅰ層
	166	沖縄産無釉陶器	火取	―	底部	―	―	(15.0)	胎土は赤褐色でやや堅緻、白色粒が混入。文様は外面腰部に沈線が１条引かれる。ロクロ成形。		Ⅰ層
	167	坩堝	碗型	―	口縁部	―	―	―	胎土は黒褐色で軟質。重さは 2.0g。内面に銀か鉛と思われるものが付着。		Ⅰ層
	168	石製品	硯	―	ほぼ完形	縦 13.8	横 5.8	厚さ 1.9	黒色粘板岩製。平面形は長方形。側面は垂直で、右側面に「三丙 與那城朝惇」、左側面に「與那城朝惇」の線刻。		Ⅰ層
第 141 図 図版 11	169	貝製品	碁石	―	―	縦 2.2	横 1.9	厚さ 0.45	白色の碁石。一部欠落。		Ⅰ層
	170	骨製品	半環状製品	―	―	縦残存 (4.25)	横残存 (0.9)	厚さ (0.3)	歯のエナメル質を残し、背面は研磨される。イノシシ / ブタの下顎犬歯か。		Ⅰ層
	171	骨製品	歯ブラシ	―	柄	縦残存 (5.45)	横 1.0	厚さ 0.65	表面に光沢あり。「EXTRA…」の文字が刻まれている。		Ⅰ層
	172	骨製品	歯ブラシ	―	柄	縦残存 (4.3)	横 1.3	厚さ 0.7	柄の端部。金属製の鋲が打たれる。一部剥離。		Ⅰ層
	173	煙管	―	陶首Ⅲ類	雁首	―	―	―	沖縄産無釉陶器製。胎土は赤褐色でやや堅緻。釉は褐色で内外面施釉。煤付着。長さ 3.8cm、火皿外径 1.9cm、内径 1.2cm、小口外径 1.6cm、内径 1.1cm。		Ⅰ層
	174	煙管	―	陶首Ⅱ類	雁首	―	―	―	中国産瑠璃釉製。胎土は白色でやや堅緻。釉は瑠璃釉で外面と火皿を施釉。小口外径 1.25cm、内径 0.85cm。		Ⅰ層
	175	煙管	―	金口Ⅱ類	吸口	―	―	―	金属製。内面に石灰質付着。長さ 4.45cm、口付外径 0.7cm、内径 0.3cm、小口外径 0.9cm、内径 0.85cm。		Ⅰ層
	176	金属製品	簪	―	完形	縦 12.95	横 0.5	厚さ 0.3	竿本体が断面六角形。		Ⅰ層
	177	金属製品	校章	―	―	縦残存 (3.15)	横残存 (2.15)	厚さ 0.3	一部欠損し、折り曲がっている。花弁の中央に「中」の文字。沖縄県立第一中学校の校章か。		Ⅰ層
	178	金属製品	ボタン	―	―	縦 2.15	横 2.15	厚さ 0.4	五弁花の中央に「中」という文字。沖縄県立第一中学校のものか。		Ⅰ層
	179	銭貨	―	(新)寛永通寶	―	外径 2.50	孔径 0.5	厚さ 0.14	寛永通寶。新寛永（３期：1697 年）。背面無文。		Ⅰ層
	180	銭貨	―	永楽通寶	―	外径 2.50	孔径 0.6 ～ 0.62	厚さ 0.13	永楽通寶（初鋳：1408 年）。背面無文。		Ⅰ層

第 21 表　III区出土遺物観察一覧 g

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 141 図 図版 11	181	銭貨	―	□定通□	―	―	―	厚さ 0.13	「□定通□」と背面の「一」という文字が確認できる。嘉定通寶(初鋳 1208 年)か紹定通寶(初鋳 1228 年)と考えられる。		Ⅰ層
	182	銭貨	―	無文銭	―	外径 2.10	孔径 0.7	厚さ 0.1	無文銭。		Ⅰ層
	183	銭貨	―	(新)寛永通寶	―	―	―	厚さ 0.14	「寛□通□」と背面の「文」という文字が確認できる。新寛永（２期：1668 年)。		Ⅰ層
	184	銭貨	―	無文銭	―	外径 2.80	孔径 0.68	厚さ 0.18	鉄製の無文銭。		Ⅰ層
第 142 図 図版 11	185	明朝系瓦(赤色)	軒丸瓦	Ⅱ－Ⅲ	瓦当	―	―	―	笵バリあり。文様はやや不明瞭。瓦当裏はナデが粗く、凹凸面を呈する。		Ⅰ層
	186	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ⅰ－Ⅰ－A	瓦当	―	―	―	文様は明瞭。瓦当裏はナデが粗く、凹凸面を呈し、上部に長方形状の窪みがある。		Ⅰ層
	187	明朝系瓦(灰色)	軒平瓦	―	瓦当	―	―	―	瓦当上辺を除き、側面が直線的。他の軒平瓦にもみられる文様だが、それを囲む外縁が瓦当上辺に無い。		Ⅰ層
	188	明朝系瓦(赤色)	軒平瓦	Ⅰ－Ⅲ－B	瓦当	―	―	―	笵バリあり。瓦当裏に削痕が２条。		Ⅰ層
第 143 図 図版 11	189	大和瓦	役瓦	―	―	―	―	―	鬼瓦の一種か。色調は表面がいぶし銀、胎土は灰色。平面形は渦巻きを３個配する。御細工所跡に類例あり。		Ⅰ層
	190	大和瓦	役瓦	―	―	―	―	―	色調は表面は黒色、胎土は灰色。全形不詳。表面は２条の沈線有りの面と、無しの面に段差がある。裏面は指ナデされ、凹凸を呈す。		Ⅰ層
	191	塼瓦	―	Ⅳ類	―	―	―	厚さ 4.3	色調は灰色。平面形は三角形を想定。裏面は粗い。		Ⅰ層
第 144 図 図版 11	192	中国産白磁	壺	―	底部	―	―	(8.5)	胎土は灰白色で堅緻。釉は緑灰色で外面胴部、内面は胴部から底部まで施釉、高台及び外底露胎。内面はロクロ痕が顕著に残る。		Ⅱ１層
	193	煙管	―	陶口Ⅰ類	吸口	―	―	―	沖縄産施釉陶器製。胎土は灰白色でやや軟質。釉は浅黄色で外面全面にを施釉。小口外径 1.3cm、内径 1.0cm。		Ⅱ１層
	194	金属製品	釘	―	完形	縦 2.8	径 0.2	頭部 0.6	丸釘。		Ⅱ１層
	195	銭貨	―	(新)寛永通寶	―	外径 2.25	孔径 0.61	厚さ 0.13	寛永通寶。新寛永（３期：1697 年）で背面無文。		Ⅱ１層
	196	塼瓦	―	―	―	―	―	厚さ 3.4	色調は灰褐色。表面に欠けたスタンプ印がみられ、圏線内に「大」の字を記すタイプか。		Ⅱ１層
	197	塼瓦	―	Ⅲ類	―	―	―	厚さ 3.1	色調は灰色。端面に階段状の段差。		Ⅱ３層
	198	中国産青磁	碗	Ⅴ－２類	口縁部	(19.6)	―	―	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰オリーブ色で内外面に施釉。文様は内外面に型押しの雷文帯、内面胴部に草花文。細かな貫入が見られる。		Ⅱ６層
	199	中国産磁器	碗	―	口縁部	(15.0)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、口唇部釉剥ぎ。ロクロ成形。		Ⅱ６層
	200	中国産陶器	茶壺	宜興窯系	注口	―	―	―	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒が混入する。外面に紫泥を施す。		Ⅱ６層
	201	本土産染付	小杯	―	口縁部	(4.4)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。文様は外面胴部に草文。		Ⅱ６層
	202	沖縄産無釉陶器	灯明皿	―	口～底部	(11.0)	2.85	(5.3)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、赤色粒が混入。外面胴部の一部に自然釉が掛かる。口縁部に煤付着。		Ⅱ６層
	203	煙管	―	陶首Ⅲ類	雁首	―	―	―	沖縄産無釉陶器製。胎土はにぶい赤褐色で堅緻。釉は外面に黒褐色釉を施釉。火皿外径 1.75cm、内径 1.2cm。		Ⅱ６層
	204	金属製品	笠鞐	―	完形	縦 0.95	横 3.7	厚さ 0.4	両端が尖り気味で薄手。		Ⅱ６層
	205	銭貨	―	無文銭	―	外径 1.80	孔径 0.9 ～ 1.0	厚さ 0.1	周りが削られ、薄くなる。		Ⅱ６層
第 145 図 図版 11	206	鉄製品	釘	―	完形	縦 3.8	最大径 0.7	最小径 0.4	断面方形の角釘。頭部を一方へ折る。		Ⅲ 1c 層
	207	中国産色絵	皿	景徳鎮窯系	口～底部	(14.4)	3.15	(7.4)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に唐草文、内底に不明文様。		Ⅲ 2c 層
	208	鉄製品	押さえ金具	―	―	縦 3.6	横 2.2	厚さ 0.25	上下両端を並行に造る。小孔を穿つ。断面形が湾曲する。		Ⅲ 2d 層
	209	中国産青磁	碗	Ⅴ－２類	口縁部	―	―	―	胎土は灰白色でやや軟質。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉。文様は外面にヘラ描きの雷文帯。細かな貫入が見られる。		Ⅲ４層
	210	中国産青磁	瓶	―	胴部	―	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉。文様は外面に蓮弁文。		Ⅲ４層

※銭貨：欠損している部分の銭文は□で示した。　※釘(鉄製品)：実測した部分の法量を記載した。

第 22 表　III区出土遺物観察一覧 h

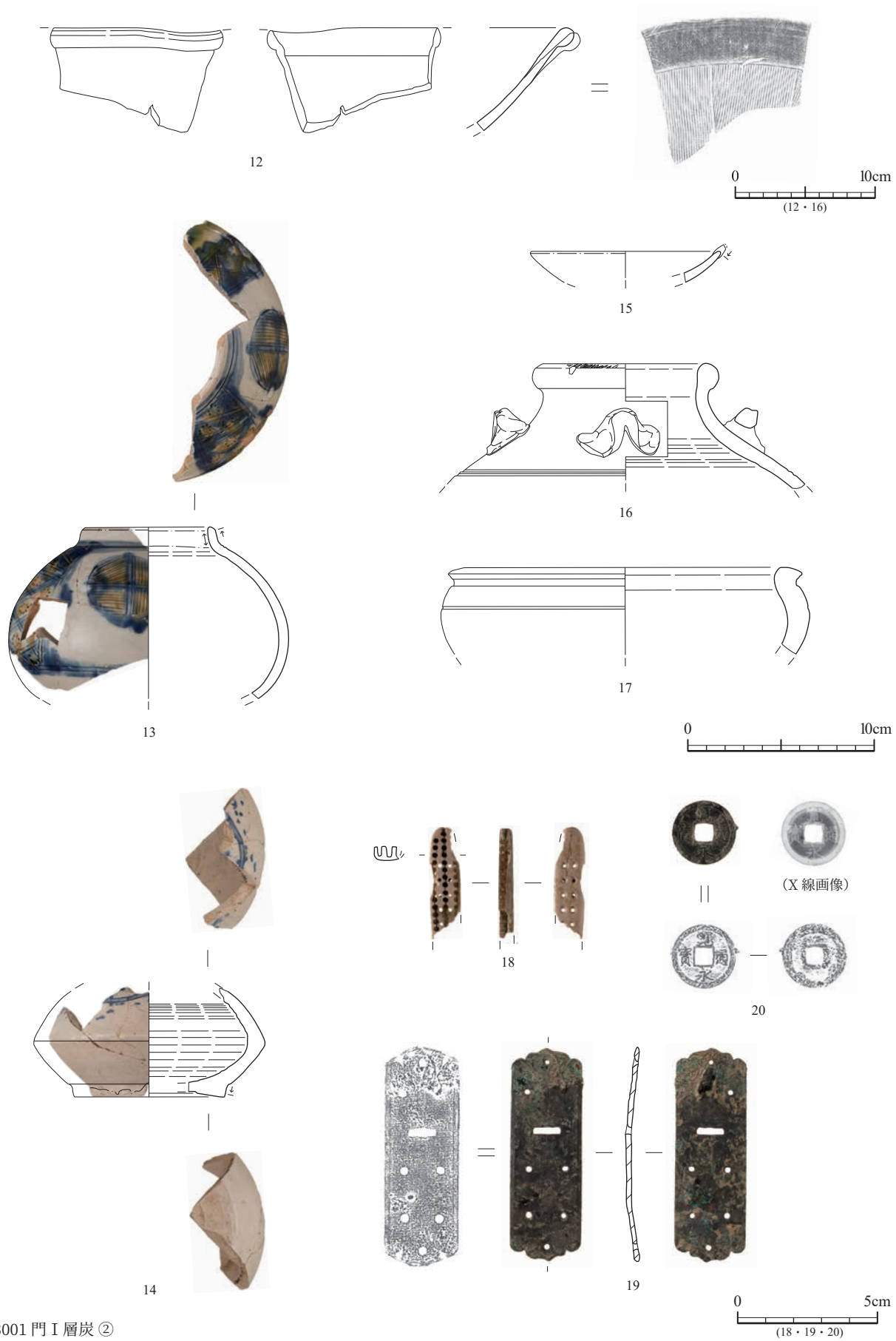
挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 145 図 図版 11	211	中国産青磁	香炉	―	口～底部	(15.0)	5.2	(6.6)	胎土は淡黄色で軟質。釉は灰白色で外面は口縁部から高台脇、内面は内底を除く全面に施釉後、一部釉剥ぎ。底部に脚の痕あり。被熱を受ける。		Ⅲ４層
	212	初期沖縄産 無釉陶器	蓋	―	撮～庇部	撮径 8.1	4.1	庇径 19.6	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、赤褐色粒が混入、白土が筋状になる。釉は内外面に庇から胴部に暗赤褐色の泥釉、外面の一部に自然釉が掛かる。外面胴部に貝目(二枚貝類)付着。		Ⅲ４層
	213	金属製品	器種不明	―	―	―	横 1.0	厚さ 0.4	長軸が湾曲し短軸断面形が三角形状。		Ⅲ４層
第 146 図 図版 12	214	中国産青花	皿	漳州窯系	底部	―	―	(8.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉は全面白化粧後、明緑灰色釉を施釉、畳付釉剥ぎ。文様は内底に草花文、輪郭線を描きダミ塗り、ペンシルドローイング。畳付に砂付着。外底に釉付着。		Ⅲ 6a 層
	215	中国産三彩	水注	―	胴部	―	―	―	鴨形水注の尾の部分か。胎土は淡黄色で軟質。釉は外面に緑色、茶色、黄色の釉薬を施す。内面にナデ調整。		Ⅲ 6a 層
	216	金属製品	八双金具	―	完形	縦 1.9	―	厚さ 0.15	左右両端が入八双。文様は魚々子を密に施し、毛彫の菊唐草文。孔は２カ所に穿たれており方形状。鍛造か。首里城廣福門地区に類例あり。		Ⅲ 6a 層
	217	中国産青磁	擂鉢	―	底部	―	―	(5.6)	胎土は淡黄色で軟質。釉は暗オリーブ色で外面胴部途中まで施釉、底部と内面露胎。内面に擂目を密に施す。		Ⅲ 6b 層
	218	中国産白磁	壺	―	口縁部	―	―	―	胎土は灰白色堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。ロクロ成形。		Ⅲ 6b 層
	219	円盤状製品	―	―	完形	縦 6.2	横 6.2	厚さ 1.4	明朝系瓦を加工。胎土は明黄褐色で軟質、赤色粒が混入。内外面からの打割。		Ⅲ 6b 層
第 147 図 図版 12	220	中国産青磁	碗	Ｖ類	底部	―	―	(7.6)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉後、外底釉剥ぎ。文様は見込みに沈線。貫入が見られる。		Ⅲ 6d 層
	221	中国産青花	杯	福建系	口縁部	(6.8)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に草文。		Ⅲ 6d 層
	222	中国産瑠璃釉	瓶	景徳鎮窯系	口縁部	(7.4)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は外面に瑠璃釉、内面は灰白色釉を施釉。		Ⅲ 6d 層
	223	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ⅰ－Ⅰ－Ａ	瓦当	―	―	―	笵バリあり。文様は花弁・珠文が不明瞭。瓦当裏はナデが粗く、凹凸面を呈する。		Ⅲ 6d 層
	224	明朝系瓦(灰色)	軒丸瓦	Ⅰ－Ⅰ－Ａ	瓦当	―	―	―	笵バリあり。瓦当は丸瓦部に文様を逆さに接合。花芯が不明瞭。瓦当裏は横位のナデが目立つ。		Ⅲ 6e 層
	225	銭貨	―	無文銭	―	外径 1.40	孔径 0.65	厚さ 0.1	周りが削られ、内側の孔の角に小孔か。		Ⅲ 6f 層
	226	中国産白磁	皿	Ｄ群	口～底部	(8.6)	2.4	(4.4)	胎土は灰白色で軟質。釉は淡黄色で全面に施釉。抉り高台。		Ⅲ 7a 層
	227	金属製品	簪	―	完形	縦 8.5	横 0.45	厚さ 0.2	カブが小型の匙状。ムディが螺旋状。竿は扁平で稜を持つ。		Ⅳ 1a 層
	228	中国産青磁	盤	―	底部	―	―	(10.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で全面に施釉。文様は内底に花文、内面胴部に櫛描蓮弁文。		Ⅳ 2a 層
図版 22	229	ガラス製品	瓶	薬瓶	口～底部	1.6	6.1	2.65 1.5	目薬瓶。色調は無色系。いかり肩で胴部に縦溝。エンボスは胴部に「参天堂」「大学目薬」。	SA3001	門Ⅰ層 炭
図版 22	230	金属製品	鞐	―	―	―	―	―	地下足袋のものと思われる。上部を欠き、糸を通すための孔が２カ所残存。裏面に「新スポンヂ㊫」のエンボスあり。	SK3002	１層
	231	金属製品	鞐	―	完形	縦 2.0	横 2.25	厚さ 0.1	地下足袋のものと思われる。糸を通すための孔が４カ所。裏面に「新スポンヂ㊫」のエンボスあり。	SK3002	１層
	232	金属製品	鞐	―	完形	縦 2.0	横 2.25	厚さ 0.1	地下足袋のものと思われる。糸を通すための孔が４カ所。裏面に「新スポンヂ㊫」のエンボスあり。	SK3002	１層
	233	中国産三彩	水注	―	胴部	―	―	―	鳥形水注の羽部分。胎土は淡黄褐色で石英粒、黒色粒が混入。釉は白化粧後、緑色の釉と僅かに黄色の釉。内面に指頭のナデ調整。		Ⅰ層
	234	金属製品	バックル	―	完形	―	―	―	腕時計のバックルか。平面観は方形状。青錆付着。		Ⅰ層
図版 22	235	ガラス製品	瓶	インク瓶	口～底部	2.2	4.7	6.3 5.15	色調は青色系。胴部はひし形を呈する。首部は歪み、胴部にかけて金型の合わせ目が目立つ。		Ⅰ層
	236	ガラス製品	瓶	インク瓶	口～底部	2.9	5.5	4.6	色調は無色系。胴部が円筒形。全体的に擦れて銀化している。		Ⅰ層
	237	ガラス製品	瓶	インク瓶	口～底部	2.25	5.7	5.1	色調は無色系。滑らな円錐状に胴部は成型。胴部に山と雲のような模様、底部に三角形のエンボス。		Ⅰ層
	238	ガラス製品	瓶	インク瓶	口～底部	2.3	4.3	5.15	色調は無色系。内部にインクが残り、紫色を呈する。胴部が円形で、口縁にかけて煙突状に成型。		Ⅰ層
	239	ガラス製品	瓶	薬瓶	口～底部	1.65	4.1	2.0	色調は茶色系。小型の瓶で、胴部横断面が円形。口縁内側が擦れているため、共栓が用いられていたと考えられる。		Ⅰ層
	240	ガラス製品	瓶	薬瓶	口～底部	1.4	5.2	2.0	色調は無色系。肩部がいかり肩で胴部横断面が円形。		Ⅰ層

第 23 表　III区出土遺物観察一覧 i

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
図版 22	241	ガラス製品	瓶	薬瓶	口縁部	3.1	―	―	色調は青色系。共栓で塞がれたままの口縁部片。被熱によるものか、変形している。		Ⅰ層
	242	ガラス製品	瓶	染料瓶	口～底部	1.3	7.05	2.95 1.55	色調はコバルト色系。いかり肩で胴部横断長方形。胴部に「志らが赤毛染 ナイス」、底部に「T .M.」のエンボス。		Ⅰ層
	243	ガラス製品	瓶	染料瓶	口～底部	1.45	6.6	2.35 1.6	色調は無色系。いかり肩で胴部横断長方形。胴部に「志らが赤毛染 ナイス」、底部に「T .M.」のエンボス。		Ⅰ層
	244	ガラス製品	菓子容器？	―	口～底部	(3.2)	1.45	(1.75)	菓子瓶の一種か。色調は無色系。小杯形で高台が付き、縦位の筋が巡る。		Ⅰ層
	245	ガラス製品	瓶	調味料瓶	口～底部	1.9	8.1	3.85	色調は無色系。スクリュー栓で胴部横断面方形。底部に「S＆B」「YX」「24」のエンボス。		Ⅰ層
	246	ガラス製品	皿	―	口～底部	(10.6)	2.1	(6.8)	プレス技法によって作られた皿と考えられる。色調は青色系。外面を水玉模様で覆い、それに草の模様が加わる。口唇部は鋭利。		Ⅰ層
	247	ガラス製品	瓶	牛乳瓶	口縁部	2.8	―	―	色調は無色系。スクリュー栓で口縁から胴部にかけて合わせ目が残る。「蒸気消」のエンボスを胴部に確認できる。		Ⅰ層
	248	ガラス製品	瓶	薬瓶	口～底部	1.6	7.8	2.1	色調は無色系。首部が長く、胴部横断面円形。胴部に「エス ヨヂユム丁幾」「本村商會」のエンボス。		Ⅱ１層
図版 22	249	中国産三彩	水注	―	把手	―	―	―	胎土は淡黄色で粗い。石英粒が混ざる。断面方形状。白化粧後、緑色の釉を全面に施釉。無文。		Ⅲ 6d 層
	250	中国産三彩	水注	―	把手	―	―	―	胎土は淡黄色で粗い。断面三角形状。白化粧後、緑色の釉を全面に施釉。無文。		Ⅲ 6d 層

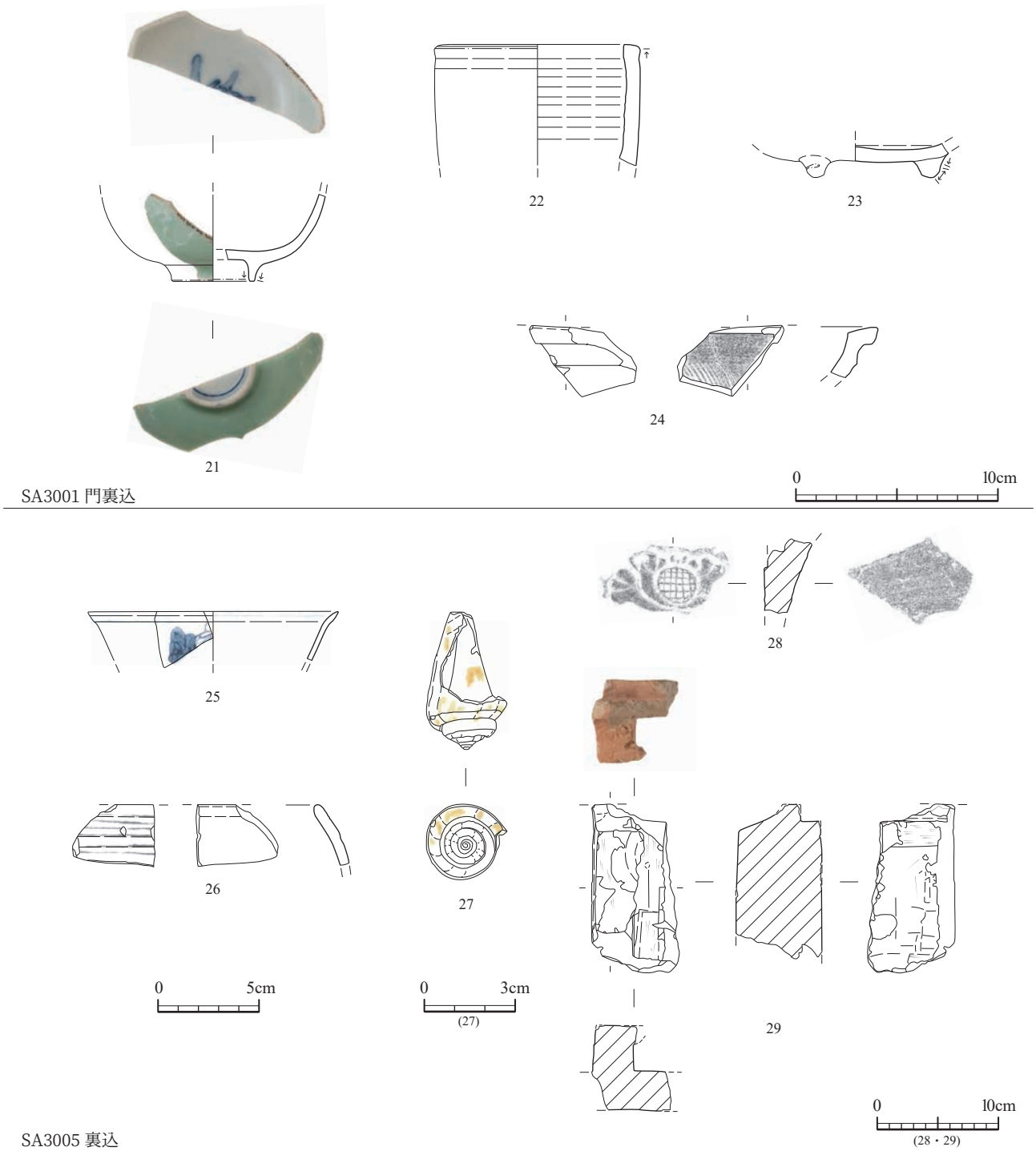
SA3001 門Ⅰ層炭 ①

第 121 図　Ⅲ区の出土遺物１

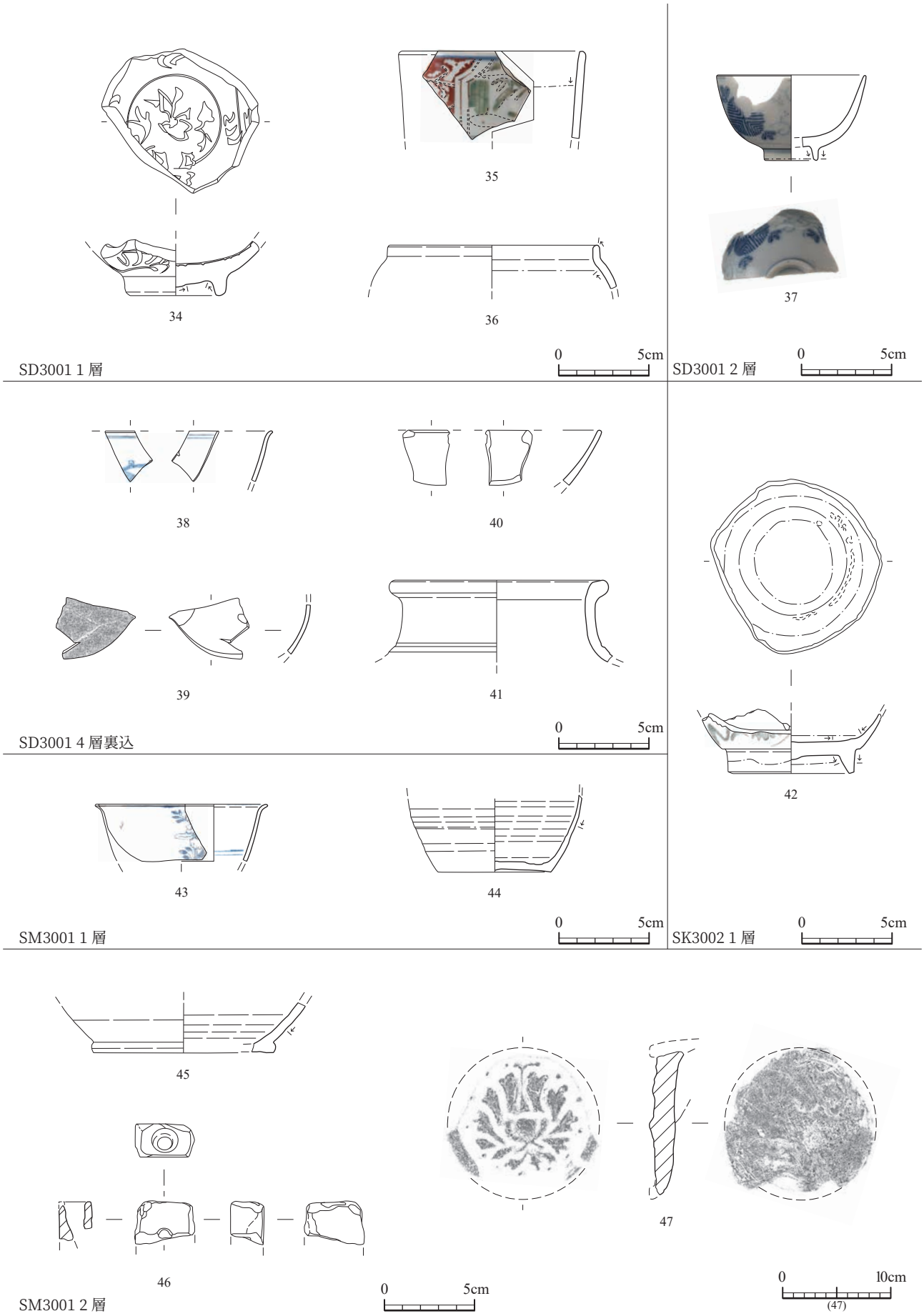


SA3001 門Ⅰ層炭 ②

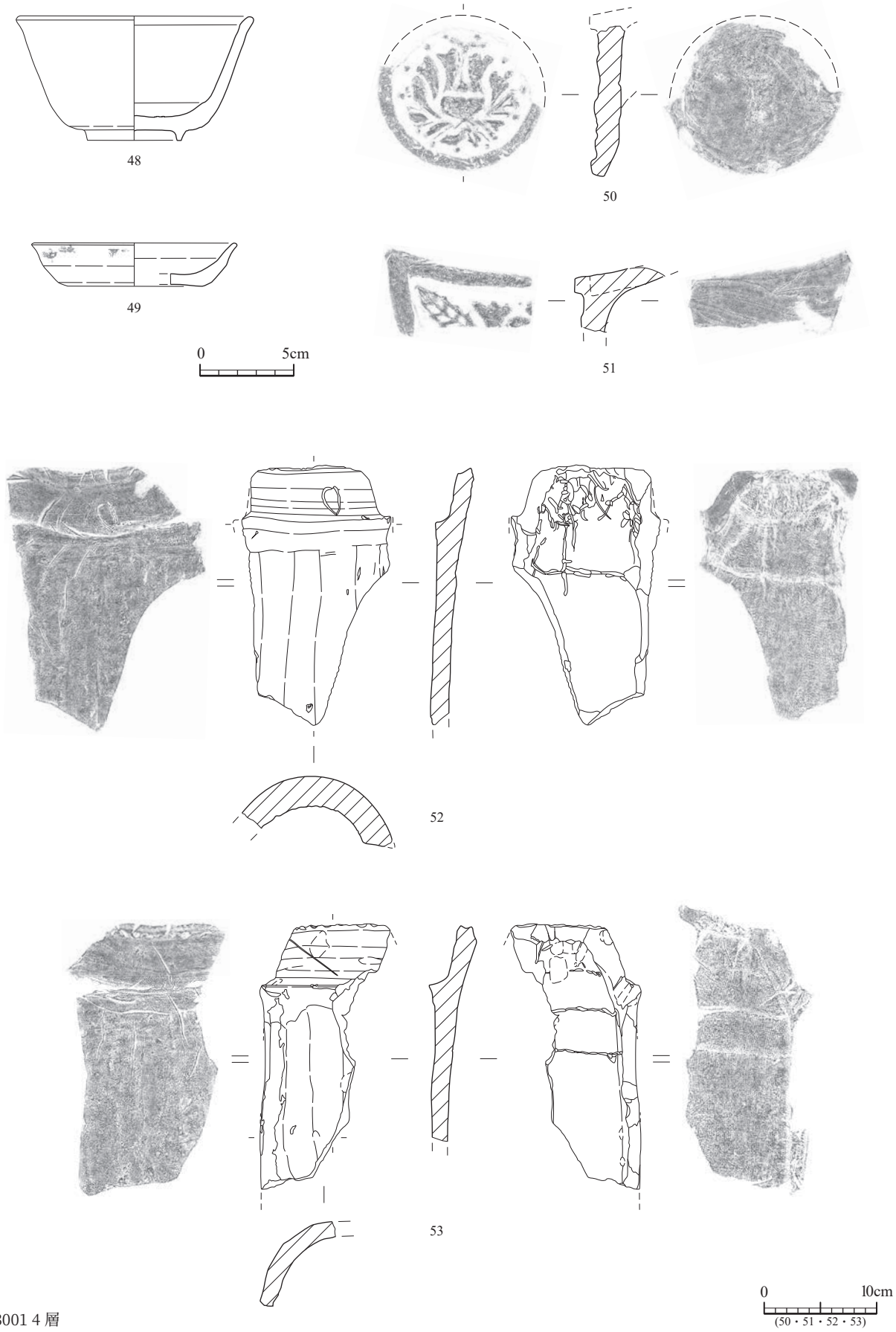
第 122 図　Ⅲ区の出土遺物２



第 123 図　III区の出土遺物３

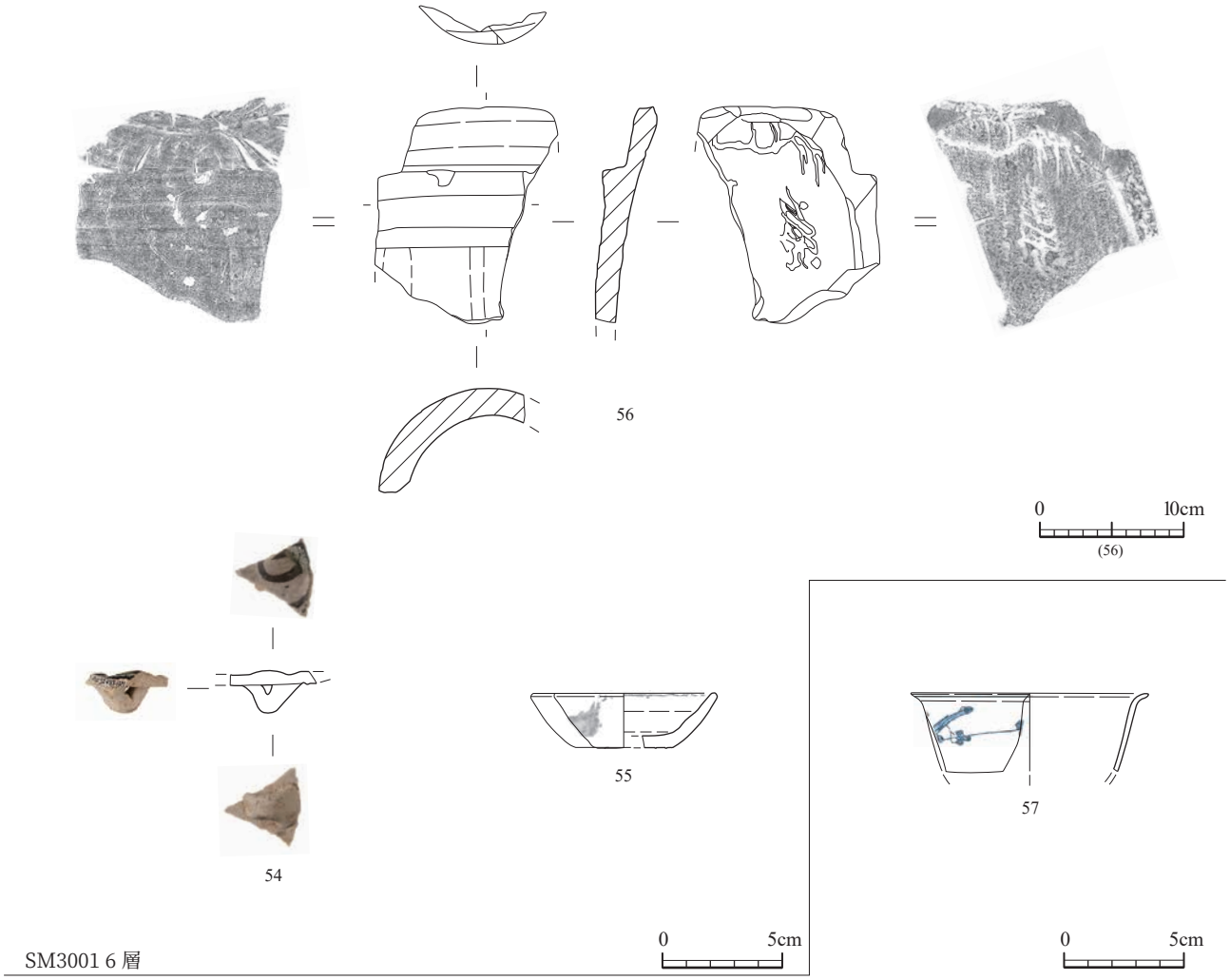


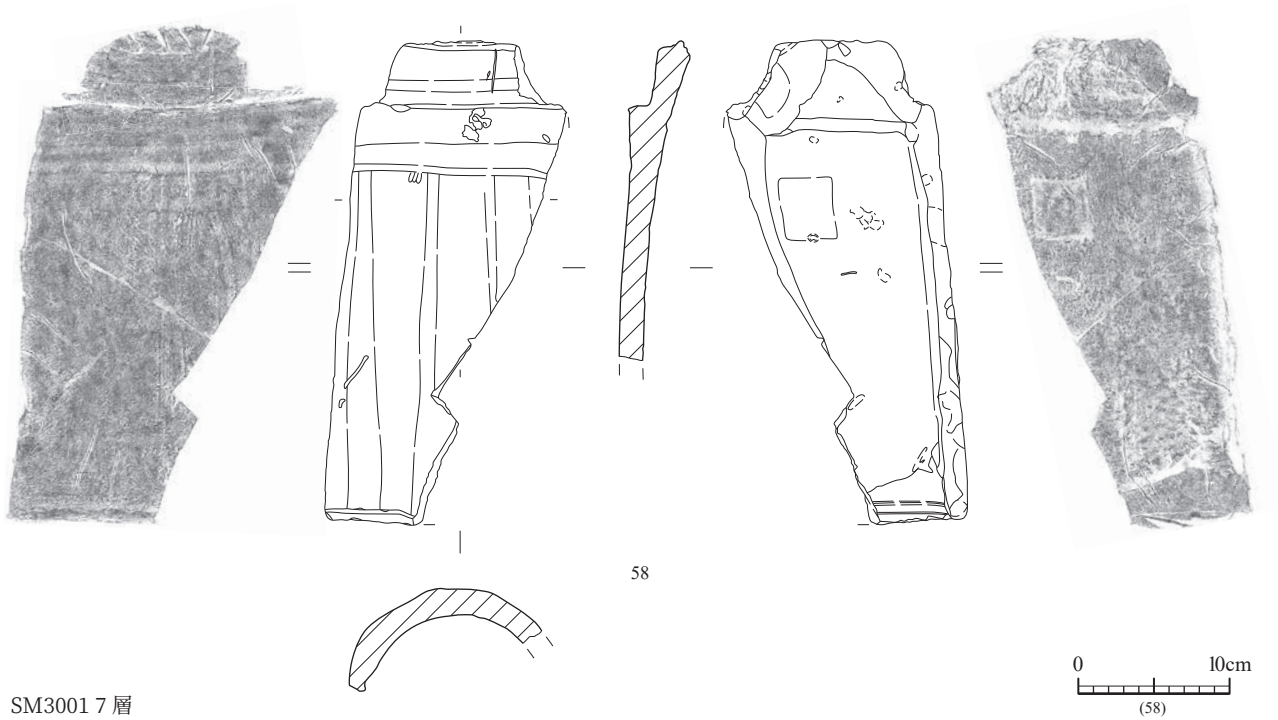
第 124 図　III区の出土遺物４



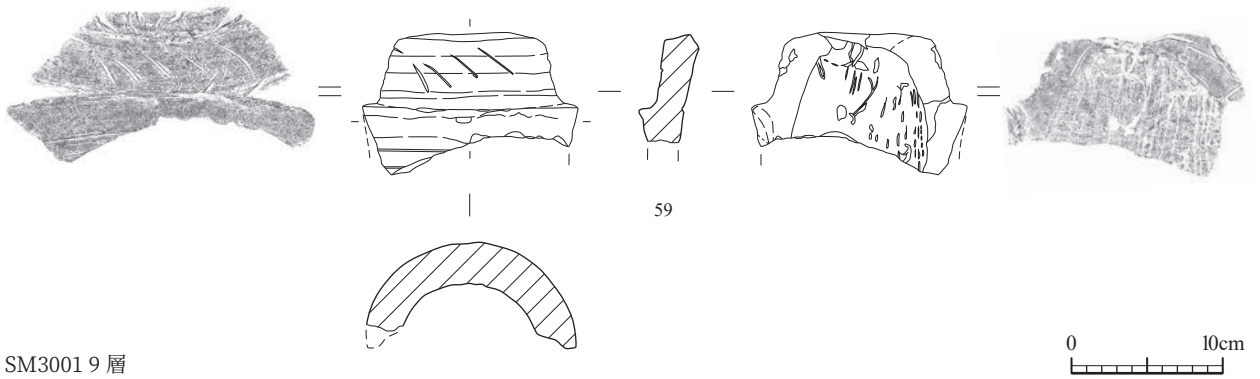
SM3001 4 層

第 125 図　III区の出土遺物５

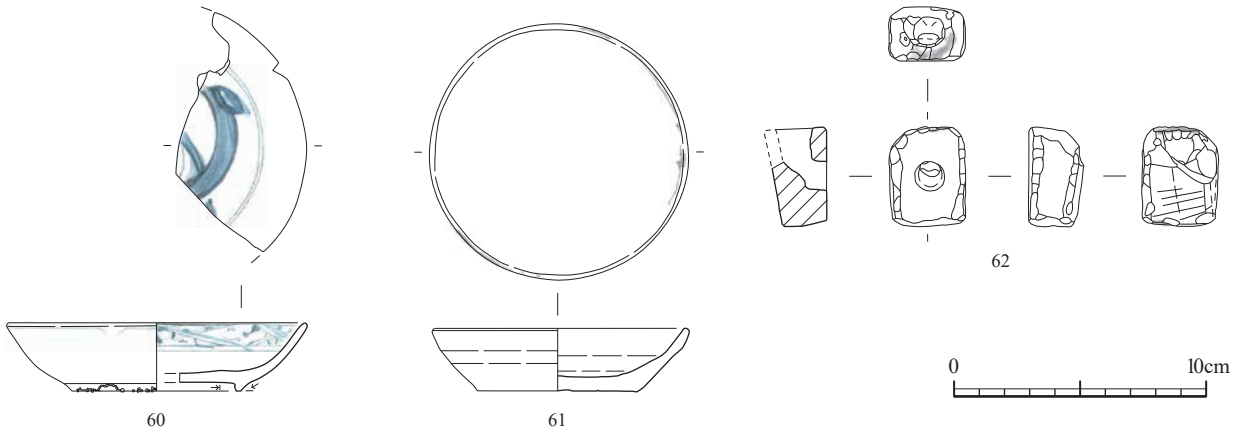


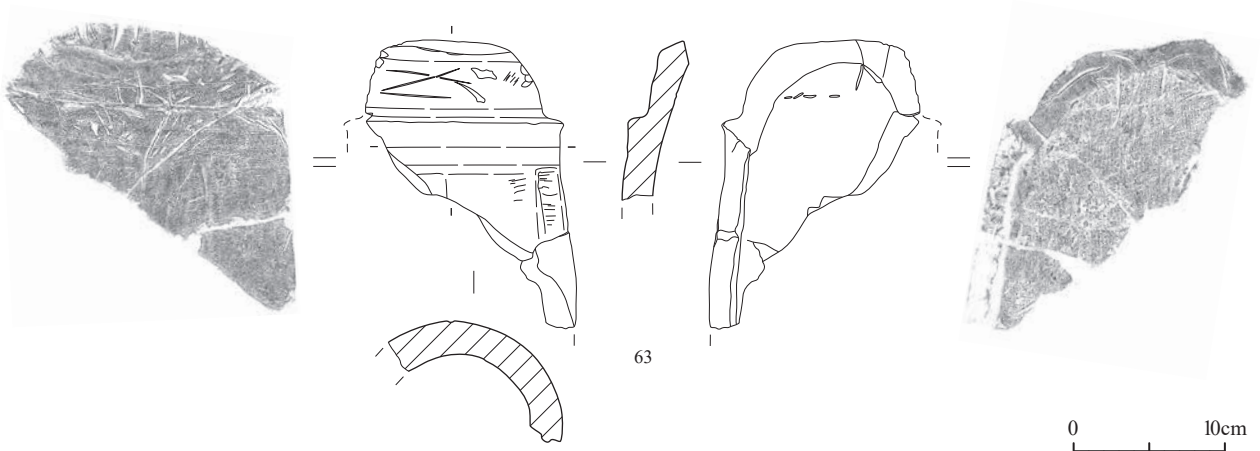


第 126 図　III区の出土遺物６



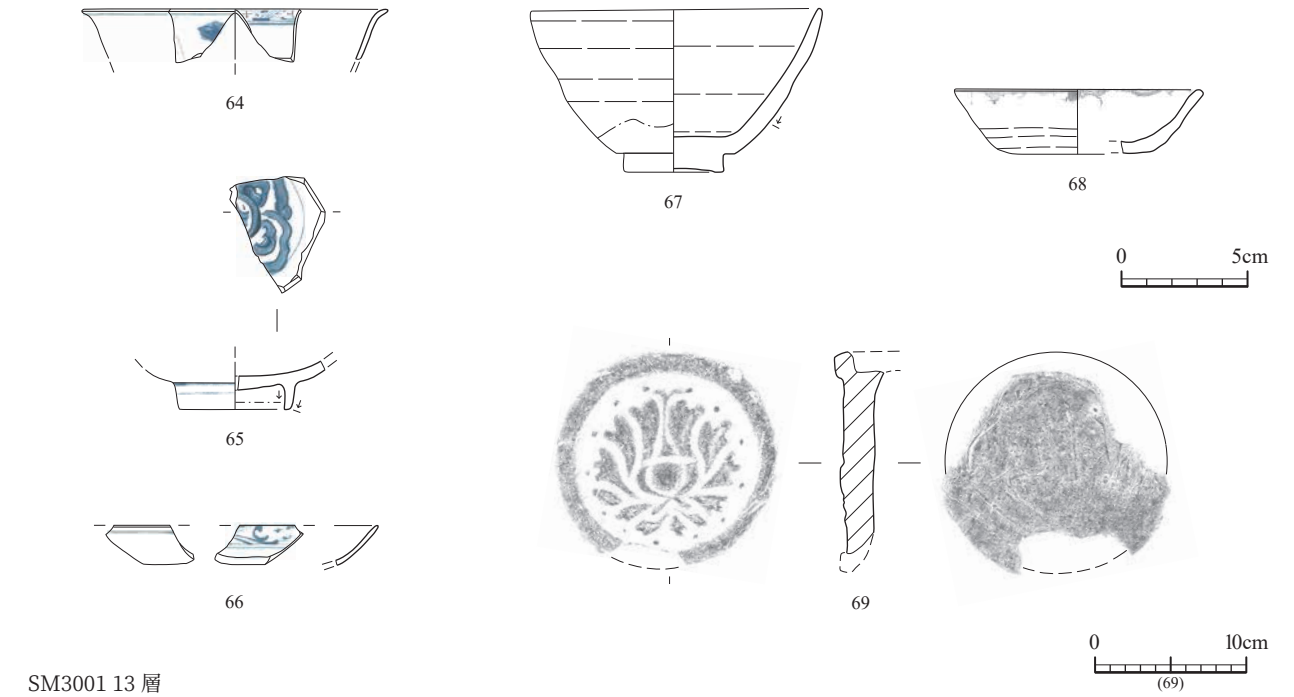
SM3001 9 層

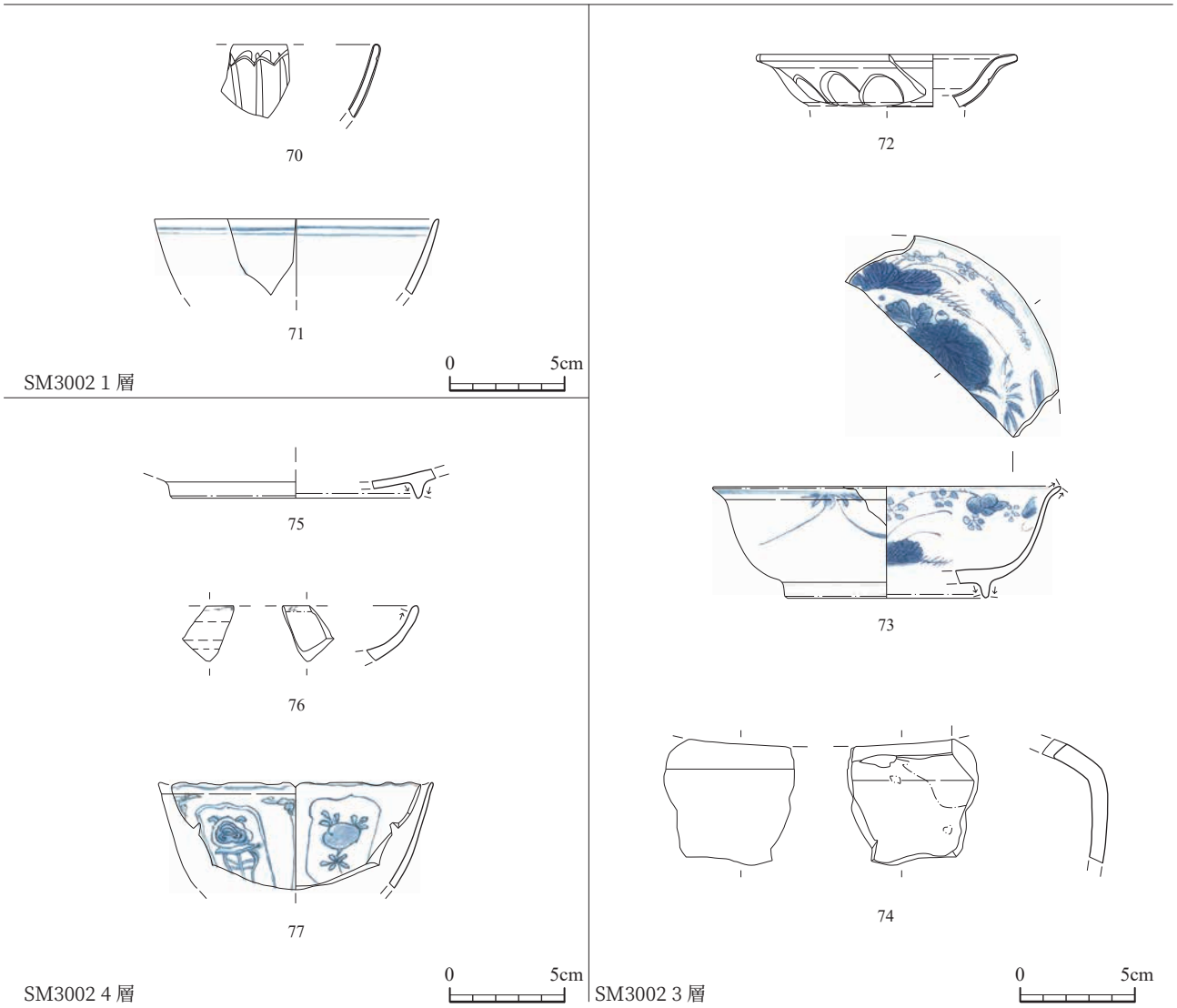




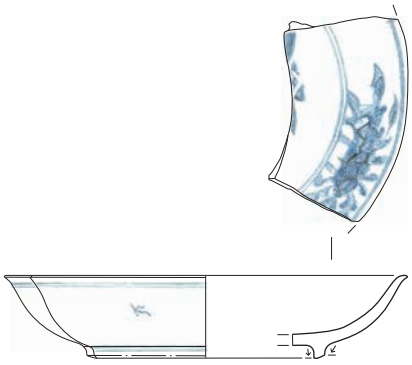
SM3001 11 層

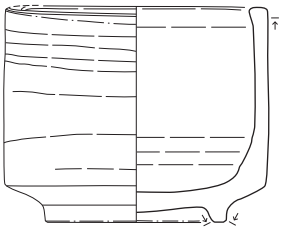
第 127 図　III区の出土遺物７

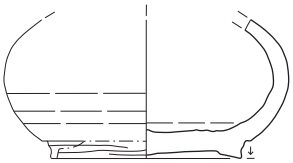


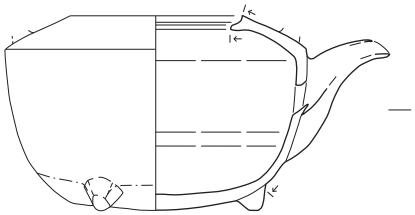


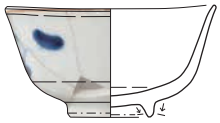
第 128 図　III区の出土遺物８


78

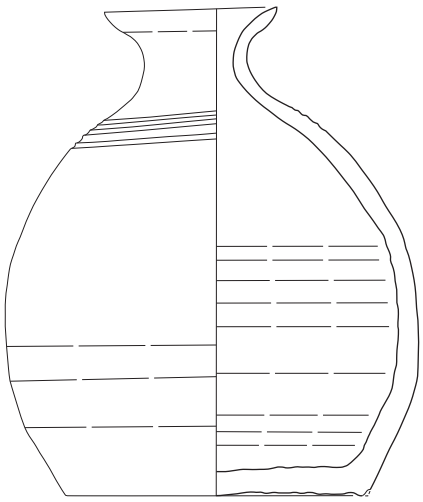

82

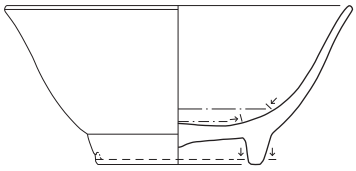

84

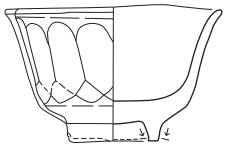

83

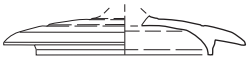


79


85


80


81


86

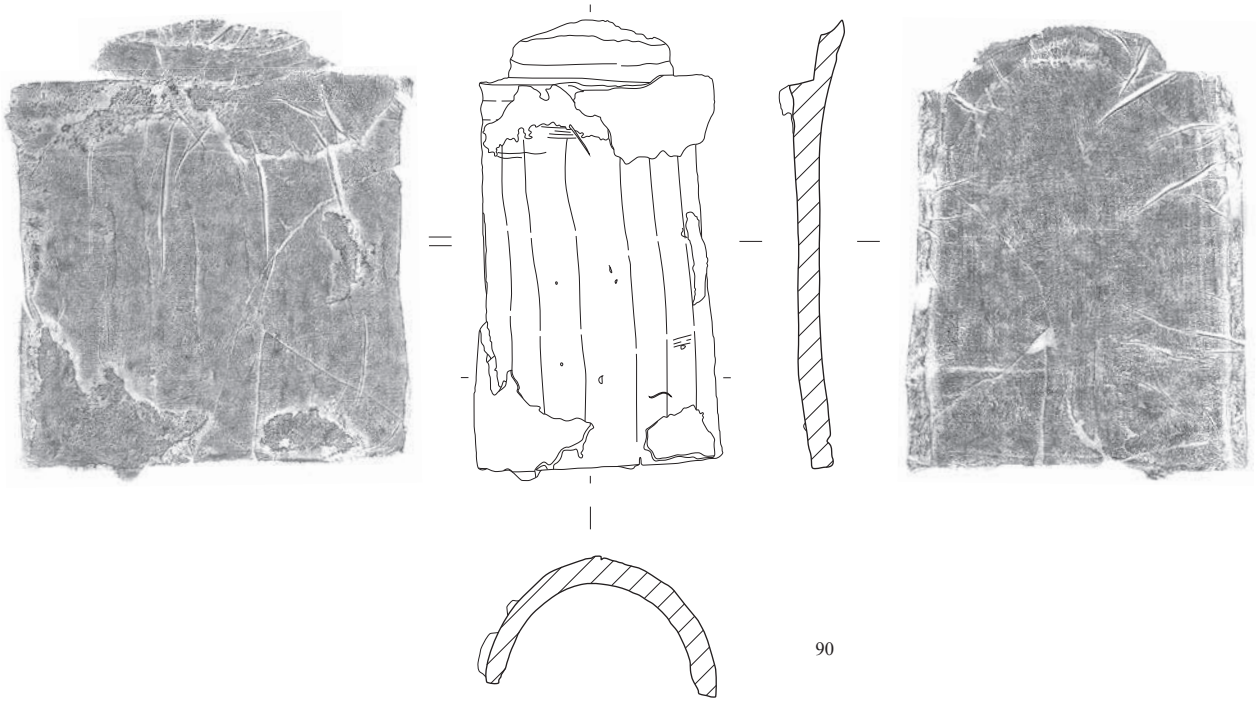
SM3005 1 層 ①

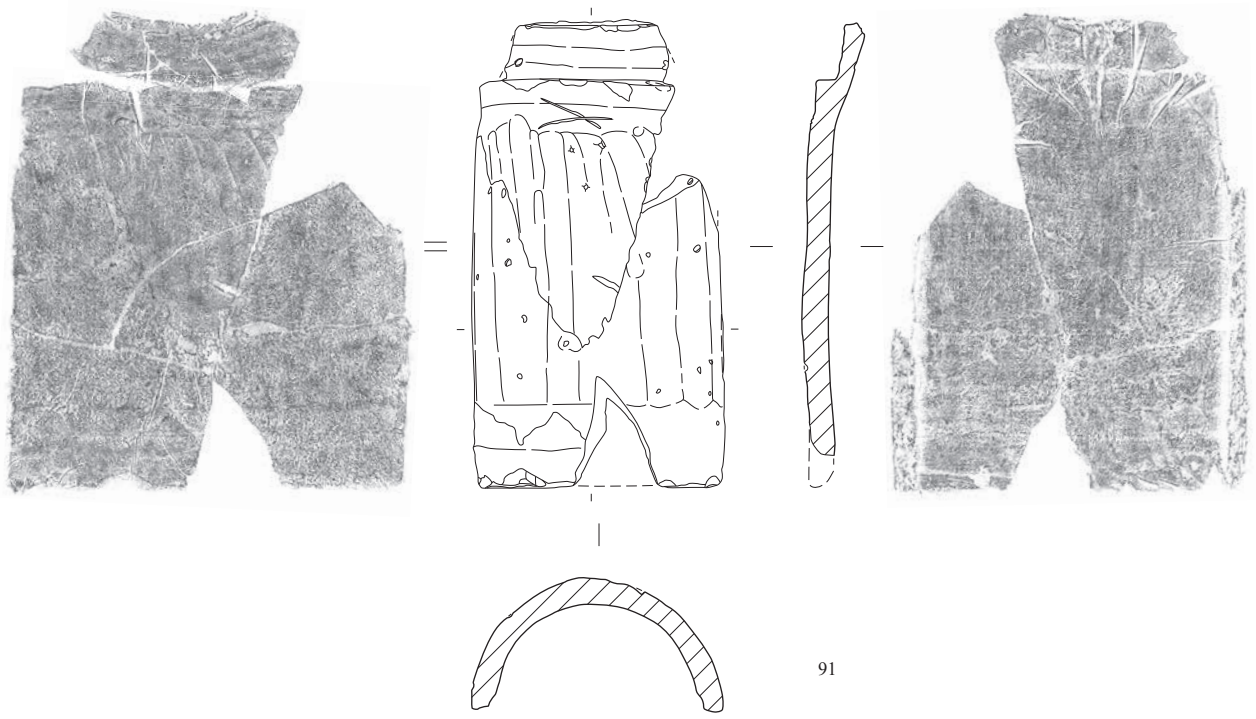
0　10cm

第 129 図　III区の出土遺物９

SM3005 1 層 ②

第 130 図　III区の出土遺物 10

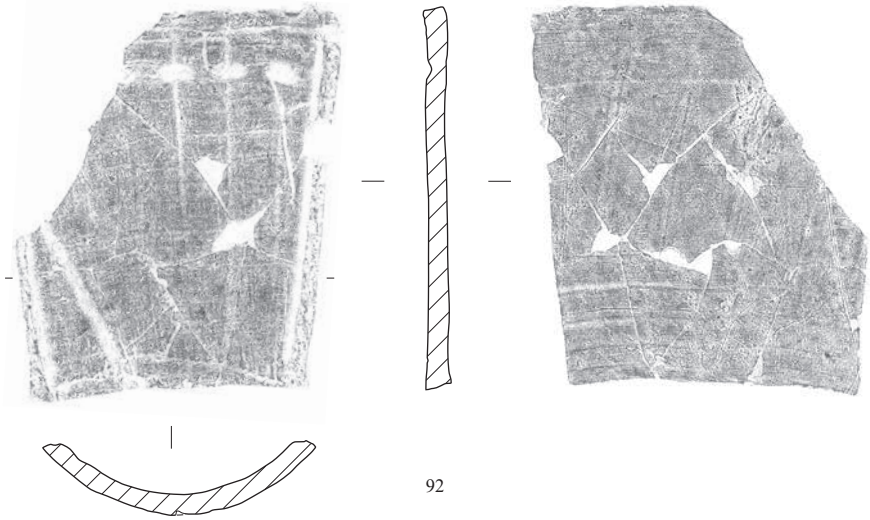




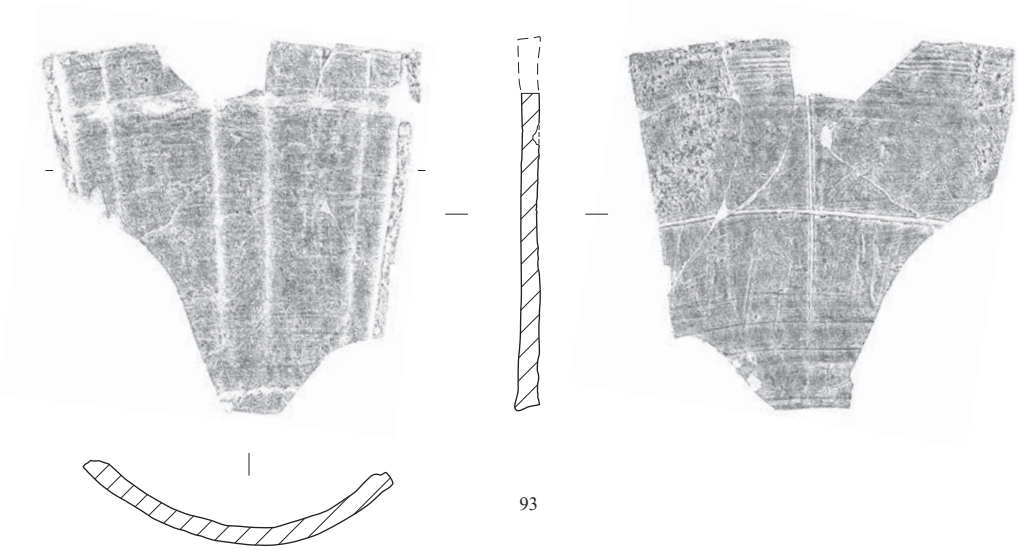
SM3005 1 層 ③

0　10cm

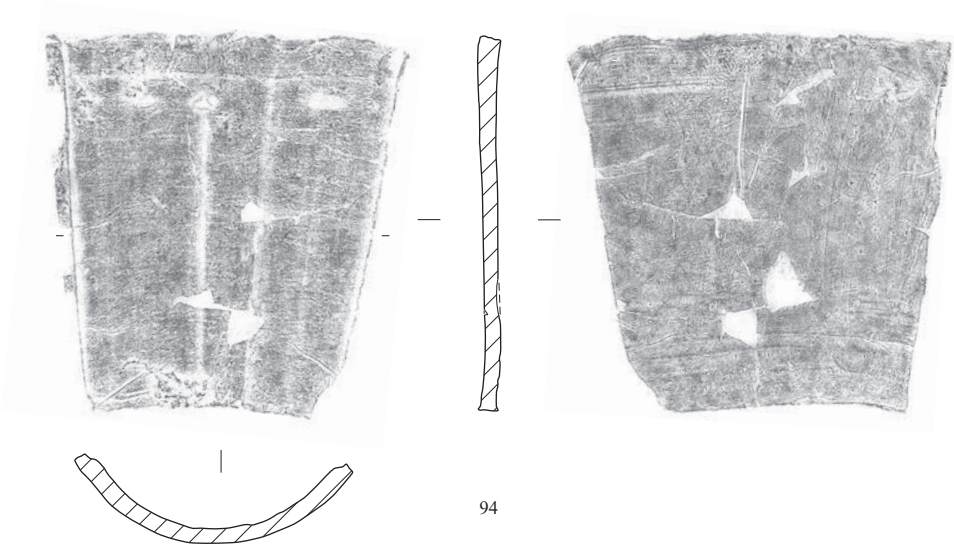
第 131 図　III区の出土遺物 11



92



93

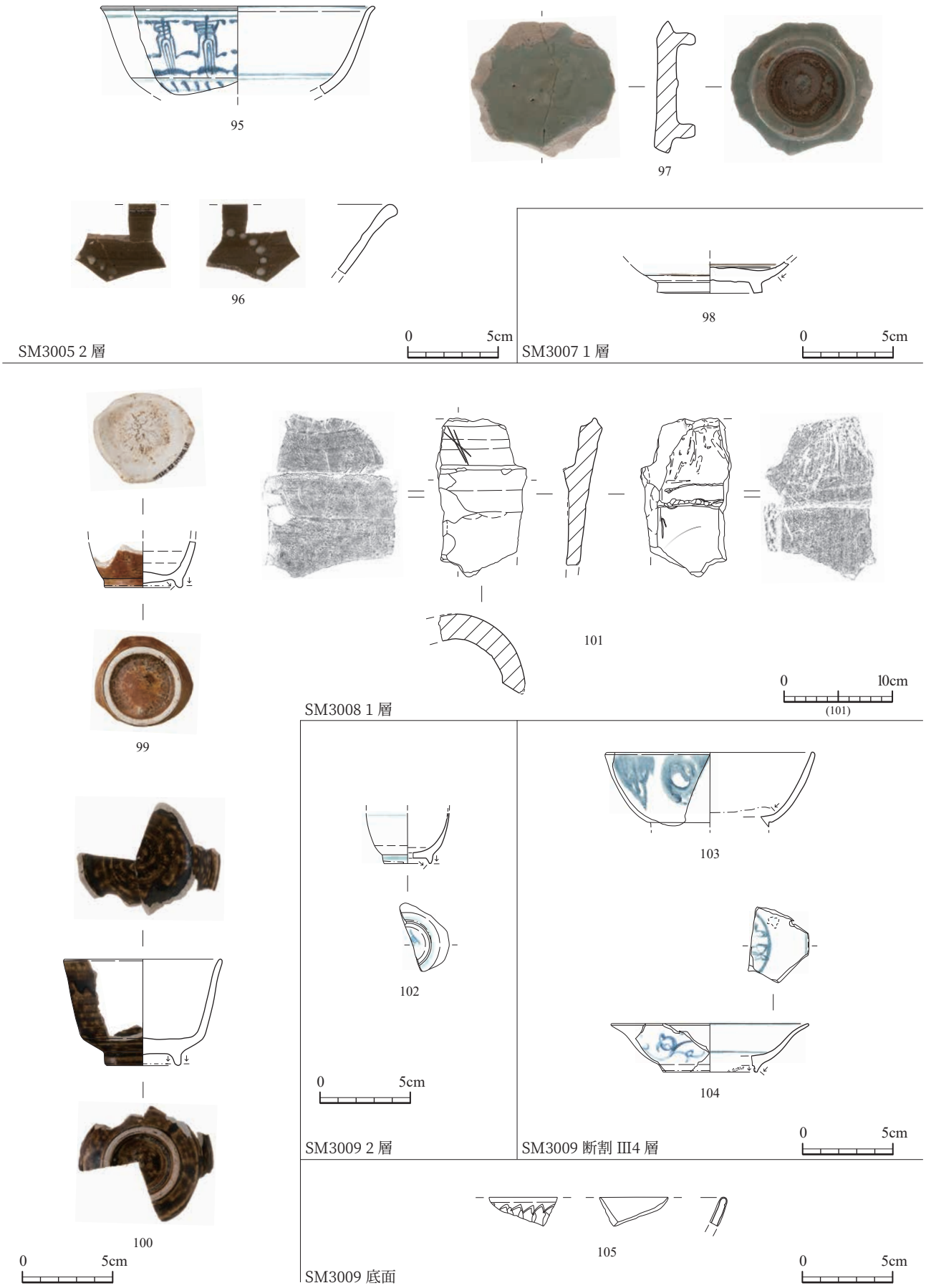


94

SM3005 1 層 ④

0　10cm

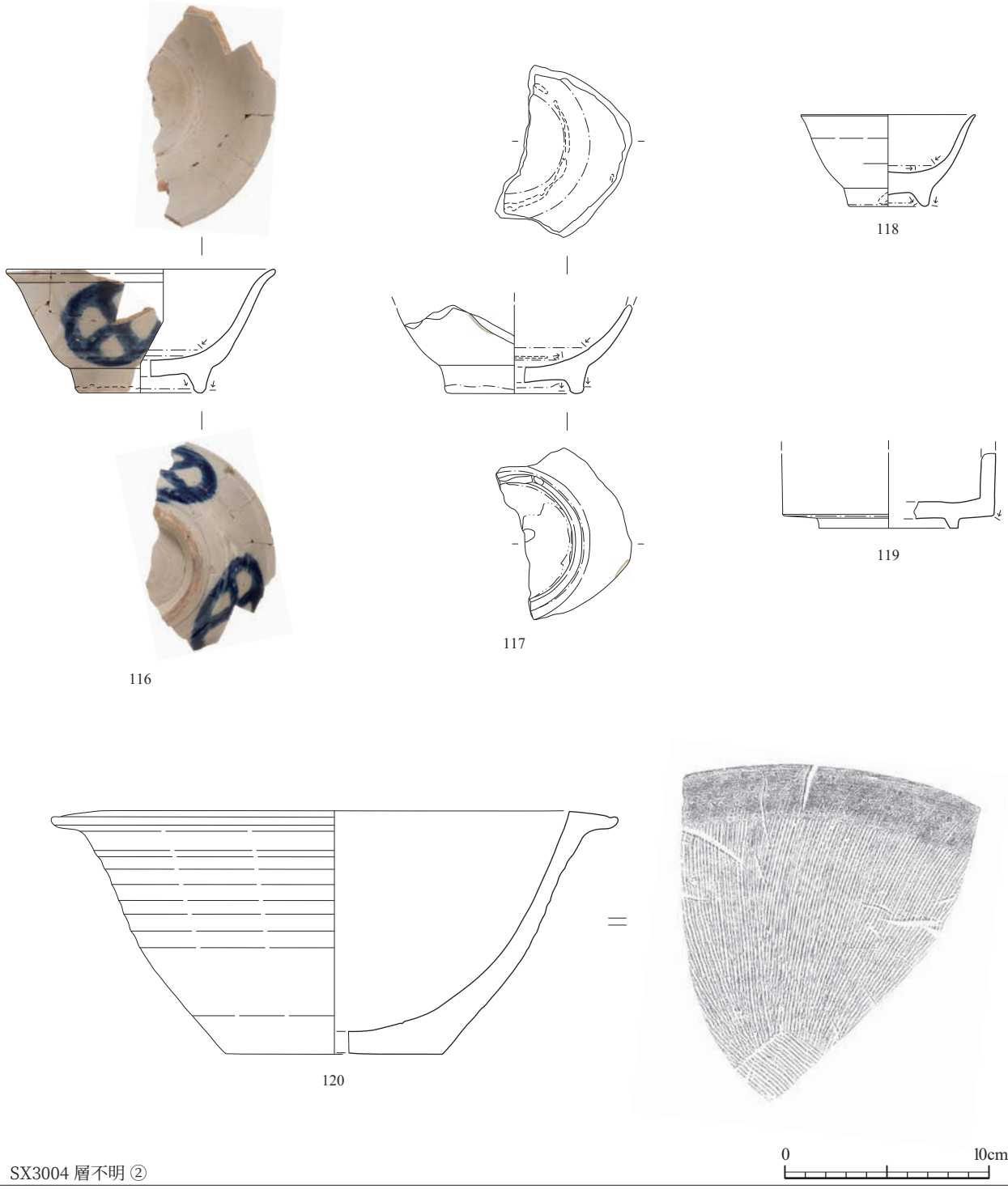
第 132 図　III区の出土遺物 12



第 133 図　III区の出土遺物 13

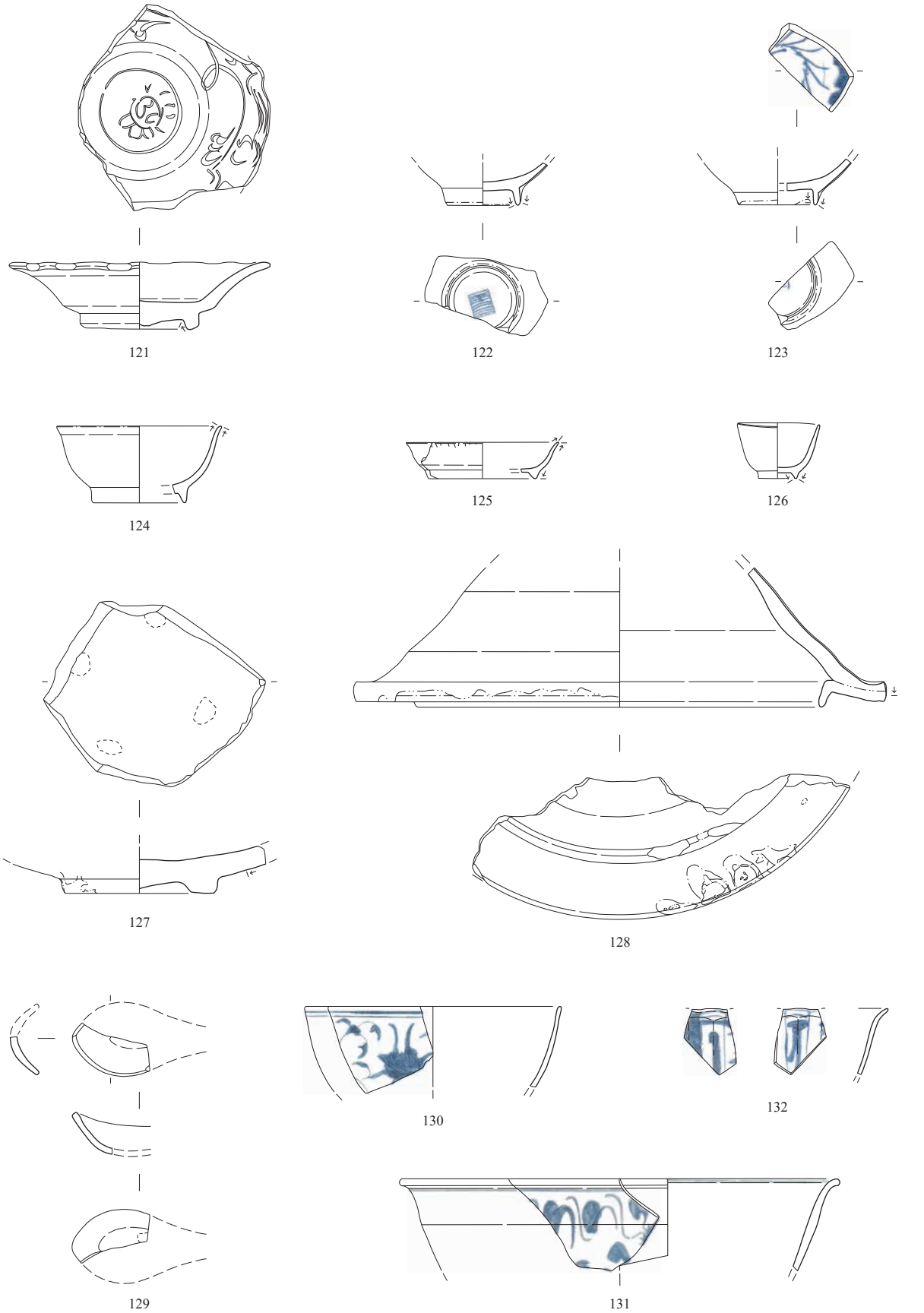
SX3004 層不明 ①

第 134 図　III区の出土遺物 14



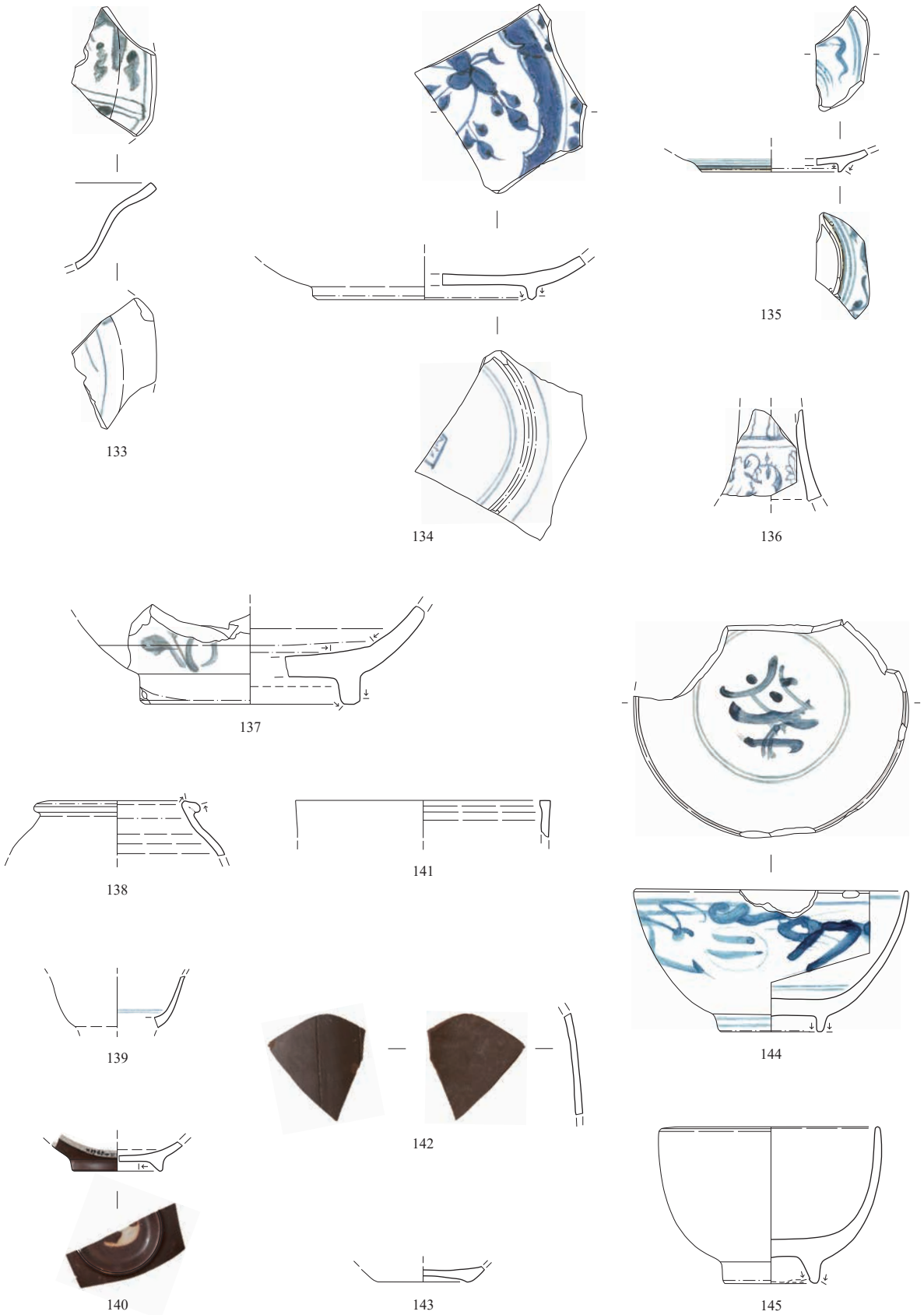
SX3004 層不明 ②

第 135 図　III区の出土遺物 15



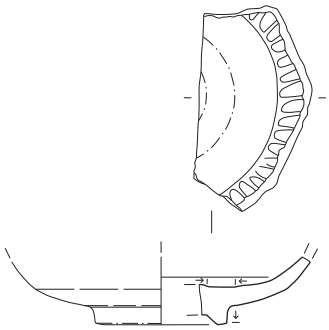
Ⅰ層①

第 136 図　III区の出土遺物 16

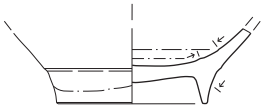


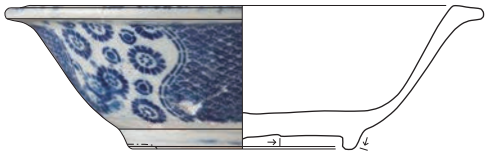
Ⅰ層②

第 137 図　Ⅲ区の出土遺物 17

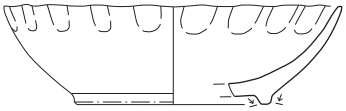

146

147

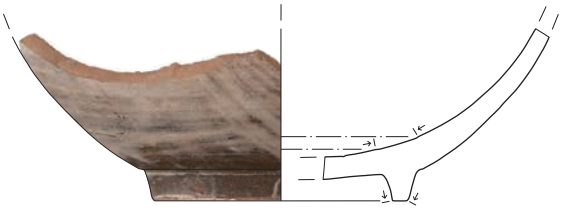


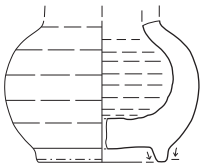

148

149


150

151



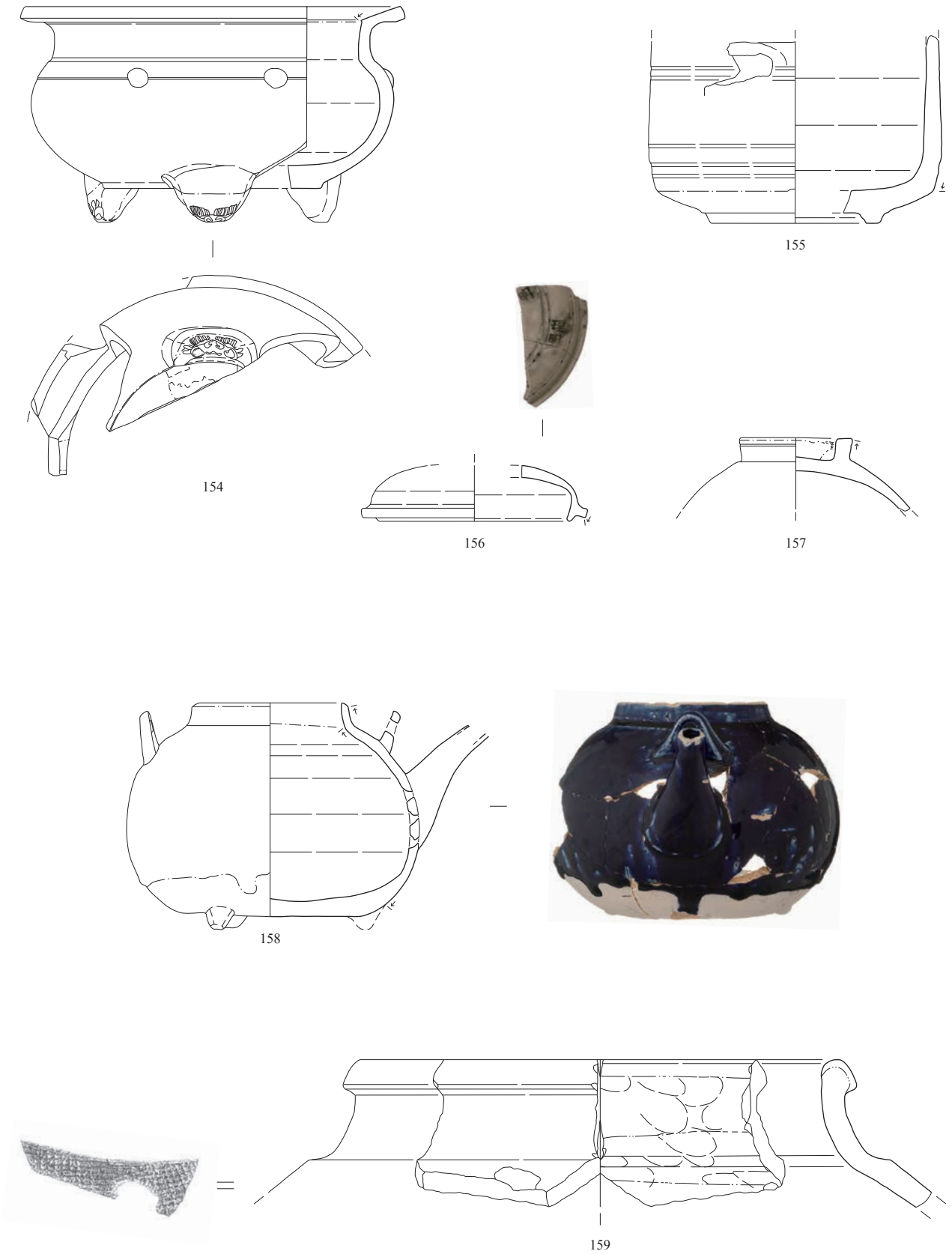

152

153

Ⅰ層③

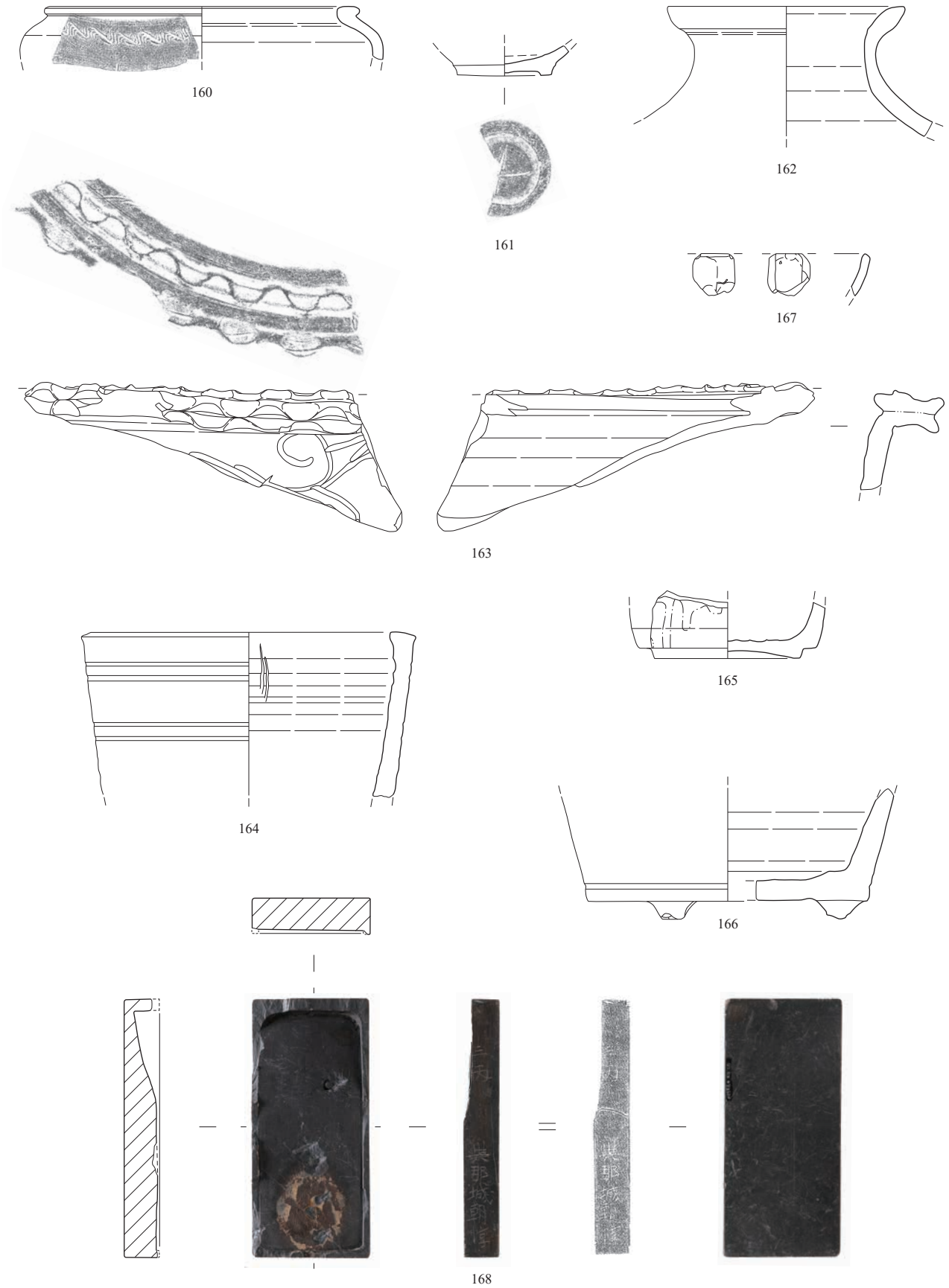
0　10cm

第 138 図　Ⅲ区の出土遺物 18

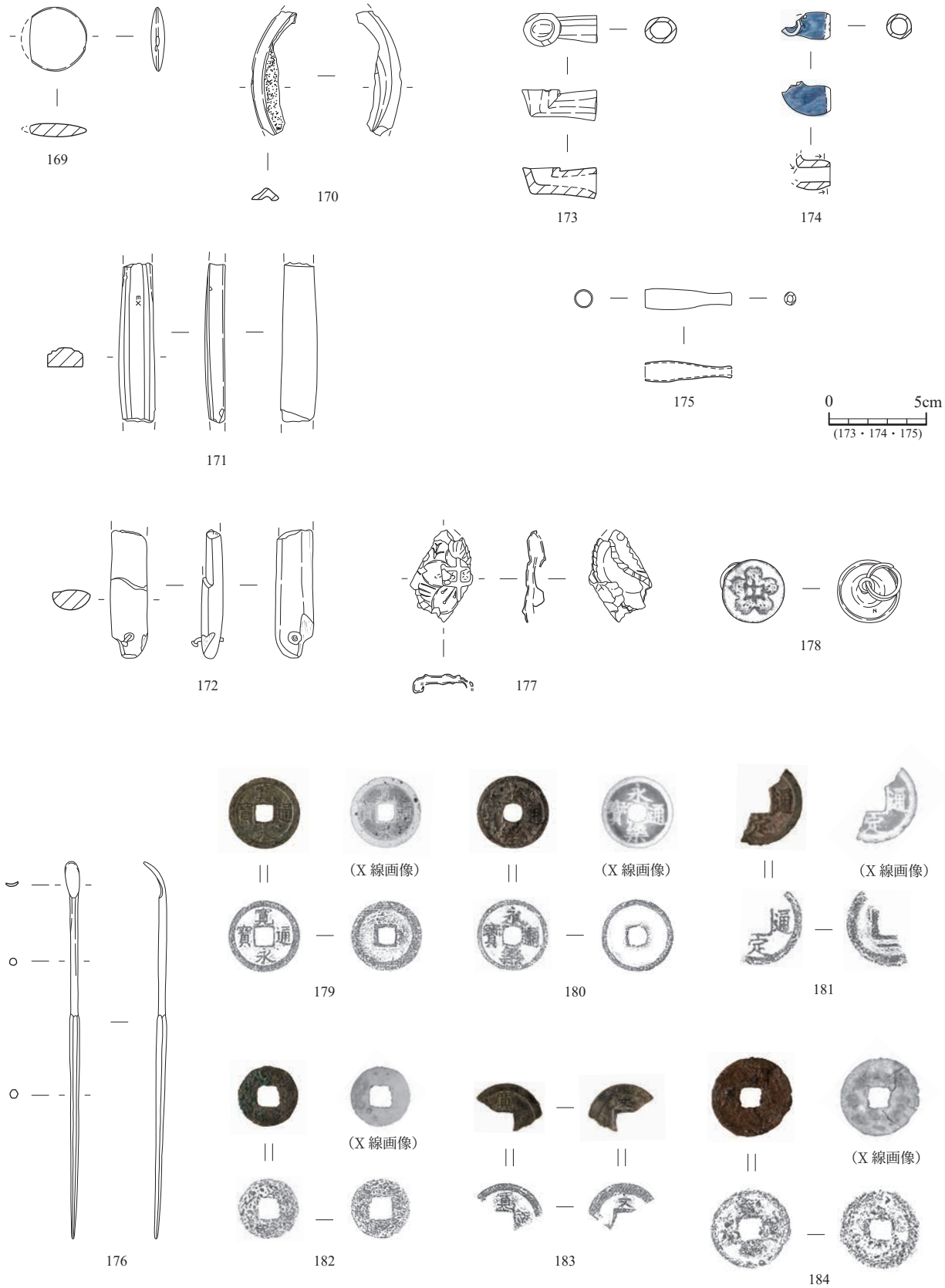


Ⅰ層 ④

第 139 図　III区の出土遺物 19

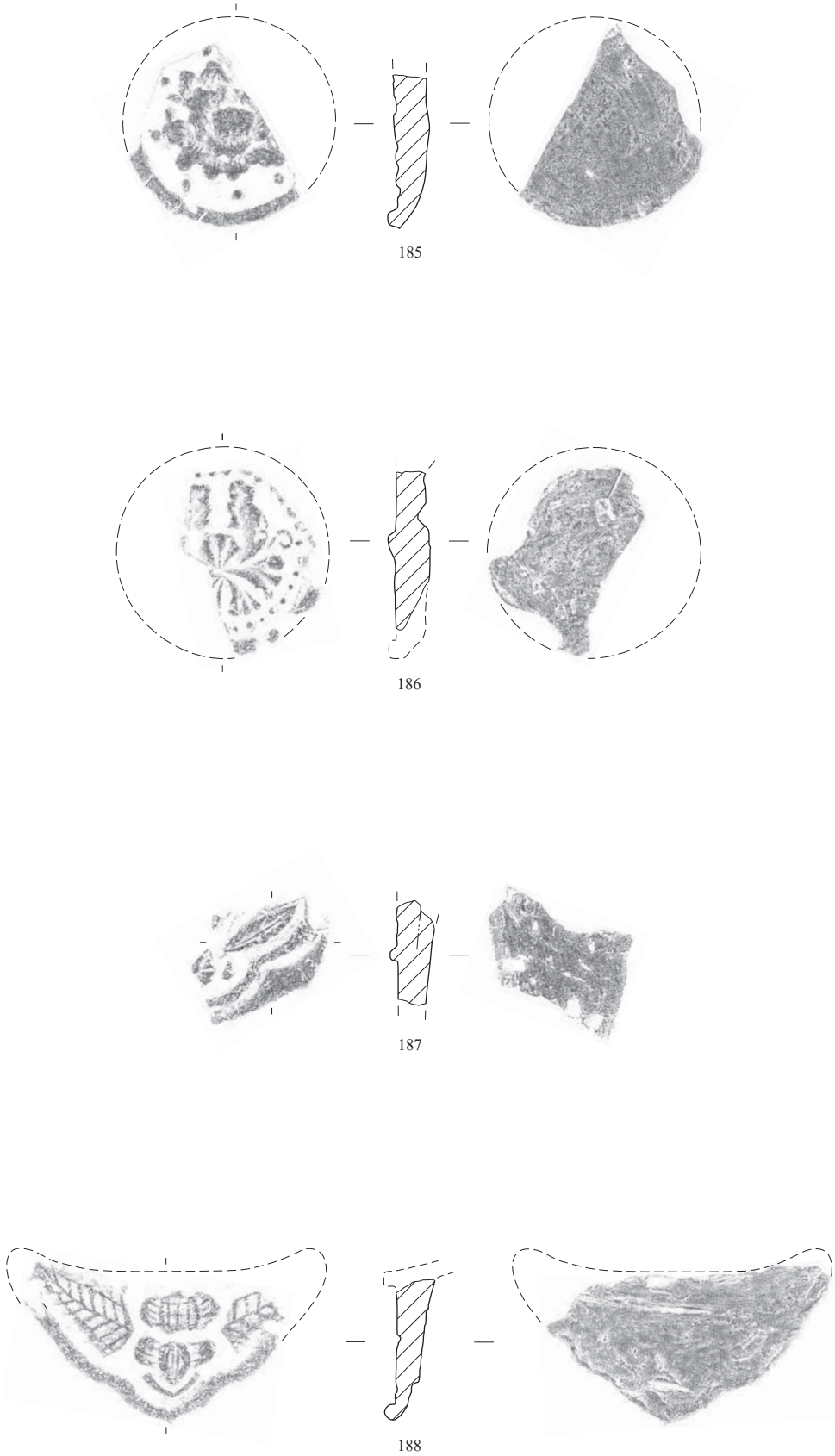


第 140 図　III区の出土遺物 20

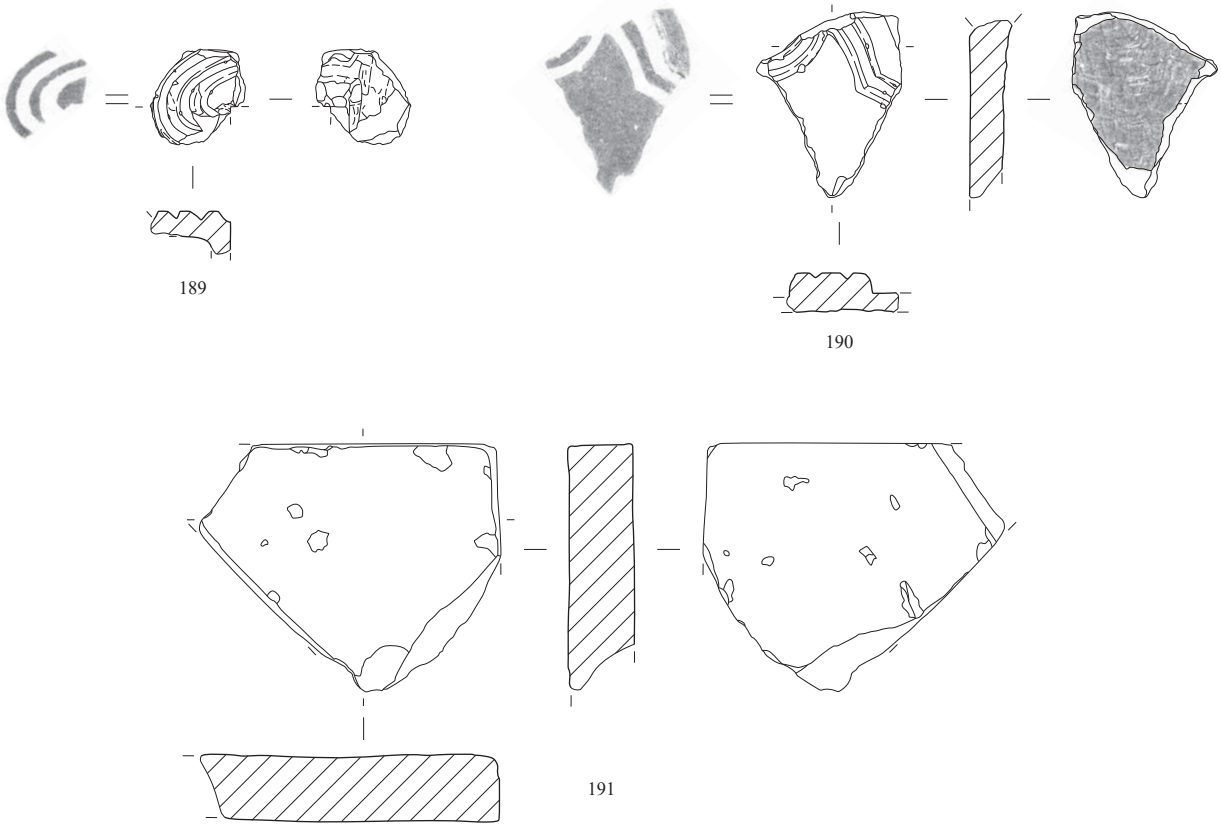


Ⅰ層⑥

第 141 図　III区の出土遺物 21

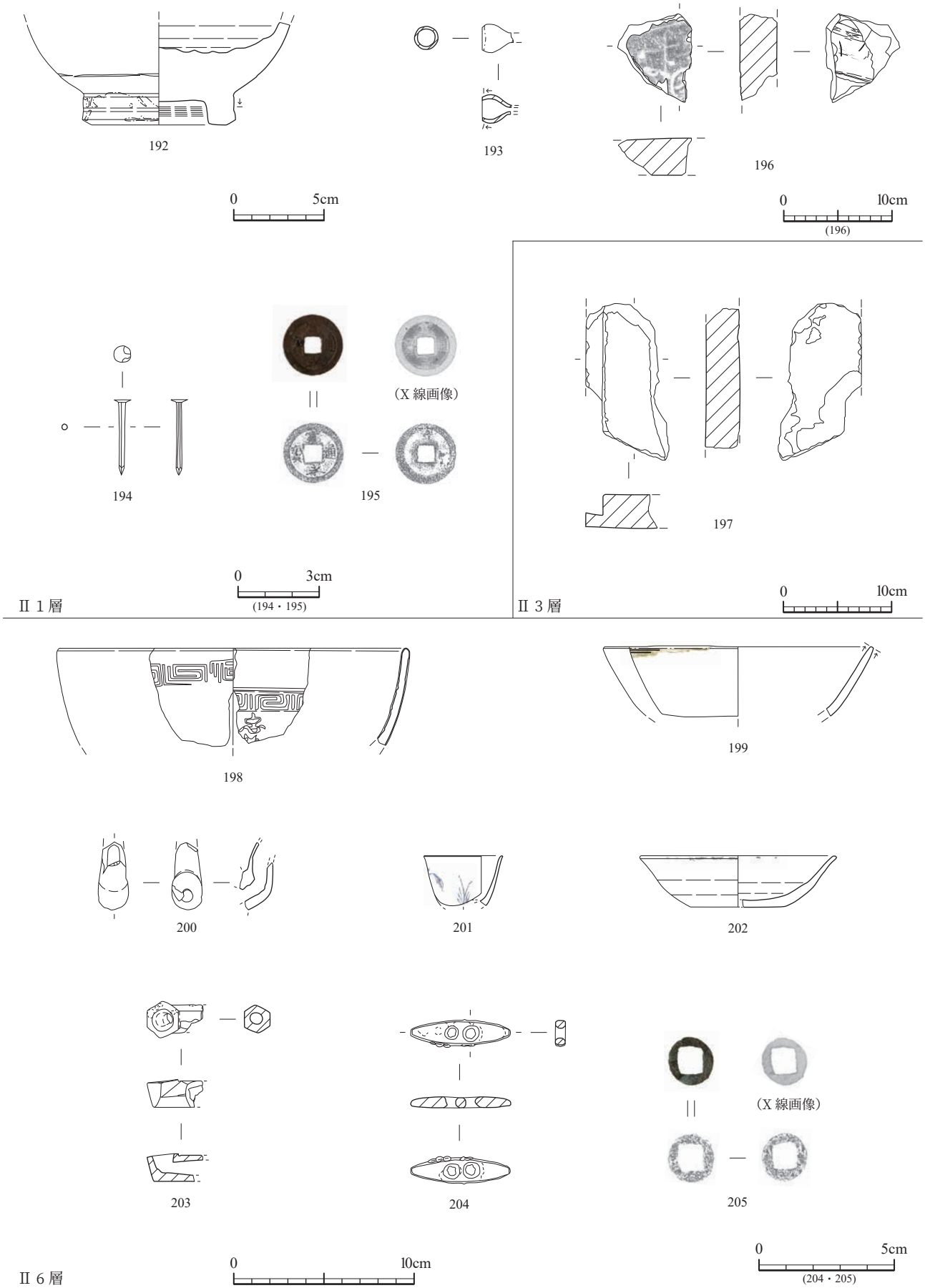


第 142 図　III区の出土遺物 22

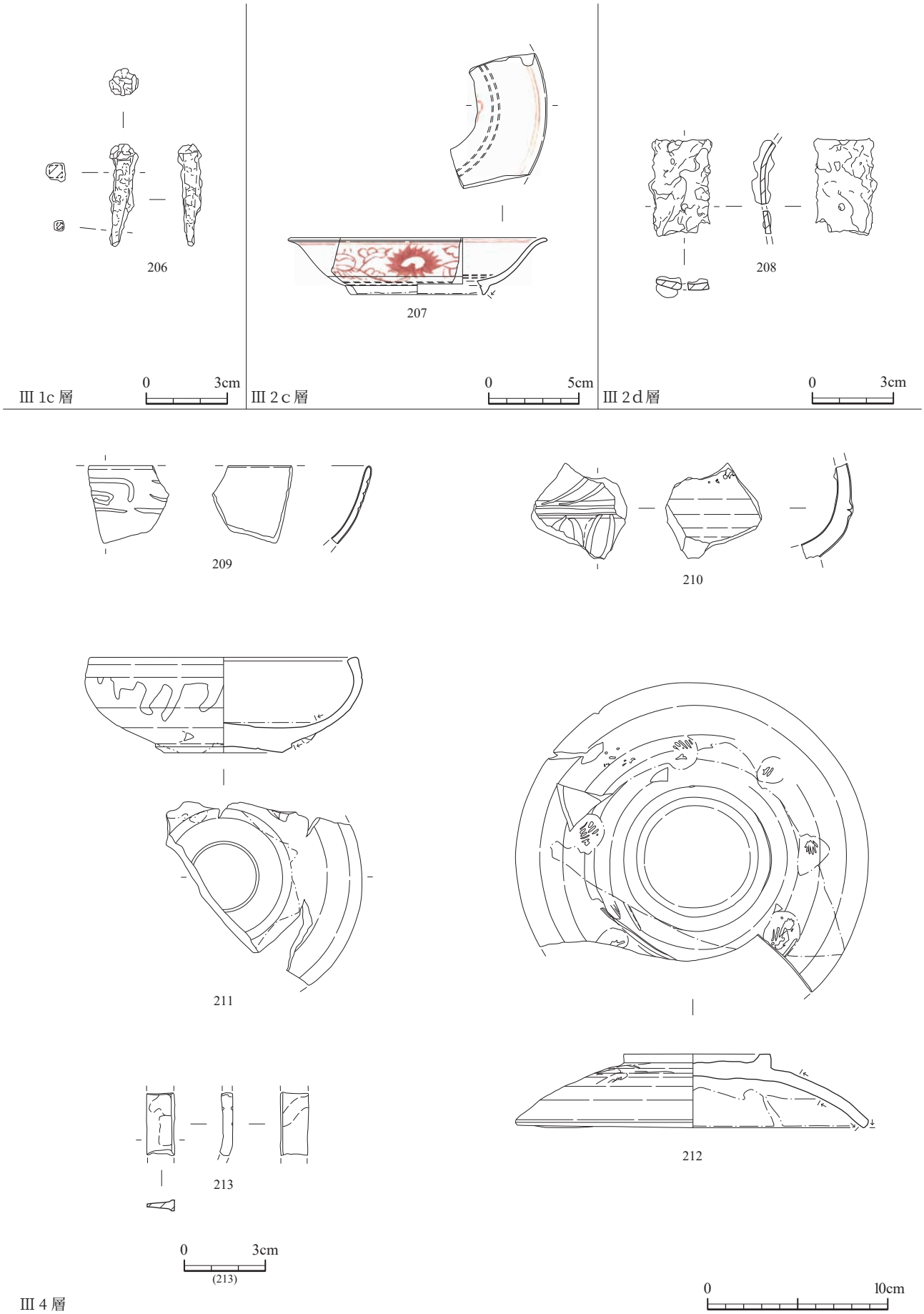


Ⅰ層⑧

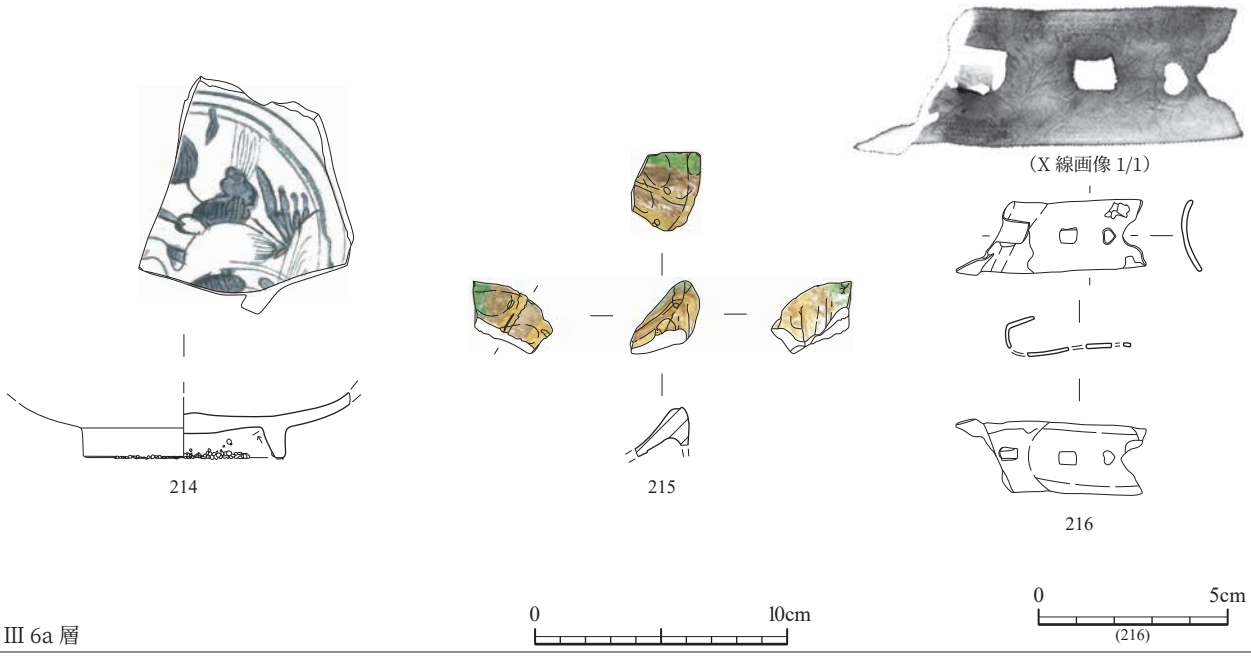
第 143 図　III区の出土遺物 23

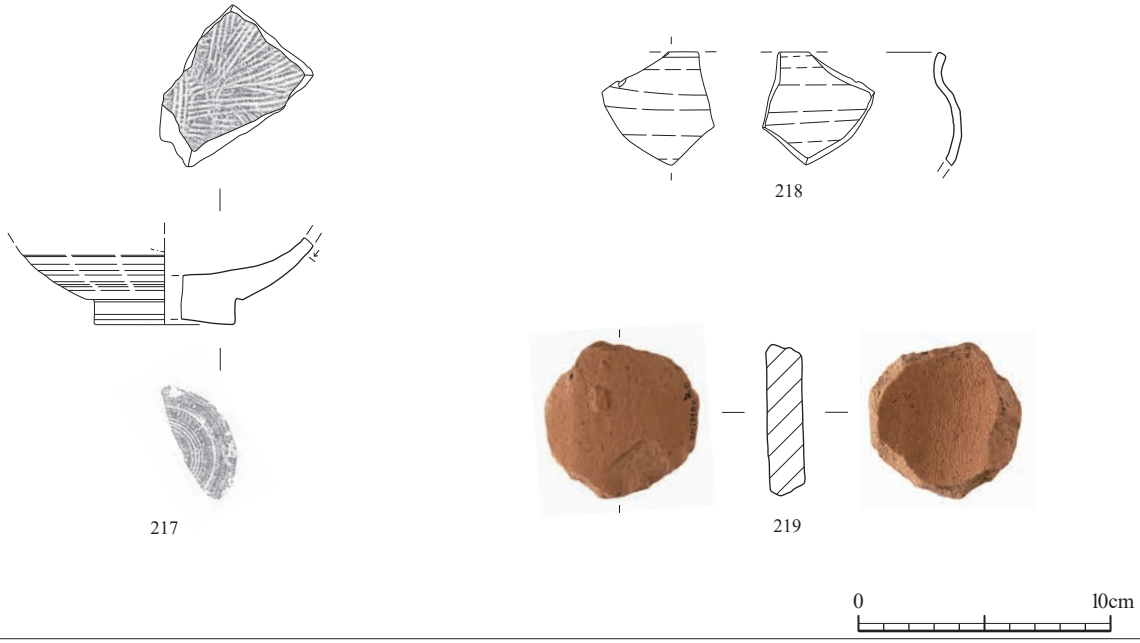


第 144 図　III区の出土遺物 24

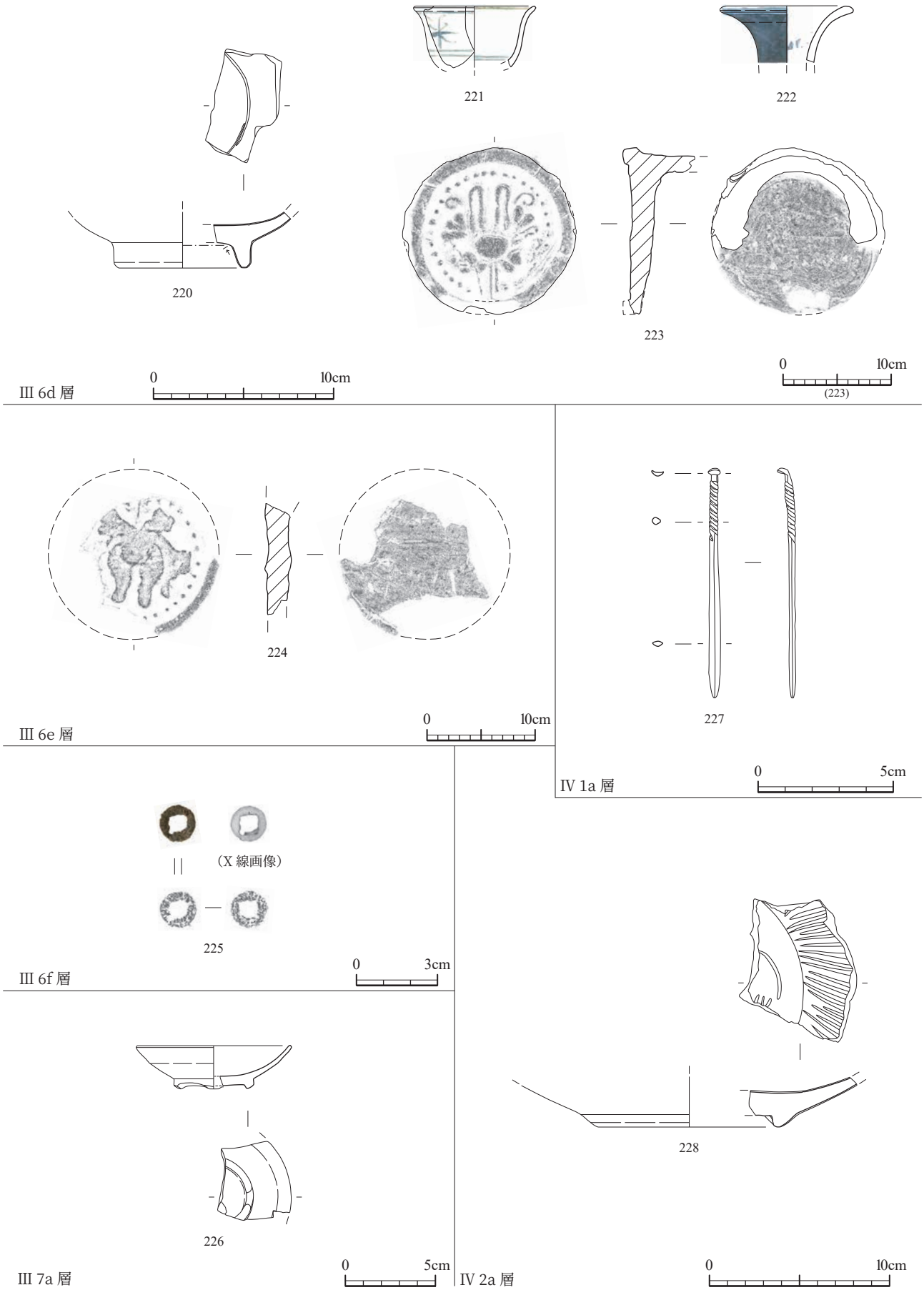


第 145 図　Ⅲ区の出土遺物 25





第 146 図　III区の出土遺物 26



第 147 図　III区の出土遺物 27

第 24 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 a

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 148 図 図版 12	1	本土産染付	碗	磁器碗 Ⅴ期	口縁部	(9.2)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。文様は外面と内面口縁部に二重格子文。	SA4003	裏込
	2	鉄製品	釘	―	完形	縦残存 (3.7)	最大径 0.7	最小径 0.65	角釘。頭部を一方へ折る。	SA4003	裏込
	3	骨製品	ボタン	―	完形	縦 1.4	横 1.4	厚さ 0.3	糸通し孔が５点穿孔。両面磨かれており光沢を持つ。表面の孔は大きく、裏面の孔は小さい。	SA4003	裏込
	4	金属製品	鈎金具	―	完形	縦 1.75	横 2.25	厚さ 0.2	基部の尖端をカギ状に折る。頭部に「ニホン□レート」の文字。	SD4001	１層
	5	金属製品	把手	―	完形	―	―	厚さ 0.2	急須の把手か。断面形は円形。両端をカギ状に折る。	SD4001	１層
	6	初期沖縄産 無釉陶器	擂鉢	―	底部	―	―	(11.4)	胎土は明赤褐色で堅緻、石英粒、黒色粒が混入し、白土は筋状になる。内面に５条１組の擂目を施し、内底が使用により摩滅。外底に巻貝類の圧痕。	SD4002	層不明
	7	中国産青磁	合子？	―	口縁部	―	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面施釉後、口唇部釉剥ぎ。文様は外面胴部にヘラ描きによる不明文様。	SK4002	２層
	8	中国産青花	碗	福建・広東 系	底部	―	―	(6.8)	胎土は灰白色でやや堅緻、白色粒が混入。釉は明緑灰色で内外面胴部まで施釉、内底と底部は露胎。文様は外面胴部に不明文様。	SK4007	層不明
	9	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅲ期	底部	―	―	(4.6)	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は浅黄色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付と内底に砂目あり。	SK4007	層不明
	10	沖縄産施釉陶器	鉢	―	胴部	―	―	―	胎土はにぶい黄褐色、一部灰白色で堅緻、白色粒、赤色粒が混入。釉は灰オリーブ色で外面胴部途中と内面まで施釉。文様は内面に葉文。	SK4007	層不明
第 149 図 図版 12	11	中国産白磁	小碗	徳化窯系	底部	―	―	(3.6)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。粘土シワあり。畳付に砂付着。	SM4002	１層
	12	中国産白磁	鉢	福建系	底部	―	―	(13.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。	SM4002	１層
	13	中国産青花	碗	徳化窯系	胴部	―	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に梅花文と蓮弁文。	SM4002	１層
	14	中国産色絵	小碗	景徳鎮窯系	口縁部	(6.6)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は透明で内外面施釉後、内面の口縁部釉剥ぎ。文様は外面に草花文か。	SM4002	１層
	15	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅱ類	底部	―	―	(6.8)	胎土は浅黄色でやや軟質、黒色粒が混入。釉は灰白色で内外面の胴部途中まで施釉、内底と底部は露胎。ロクロ成形。	SM4002	１層
	16	沖縄産施釉陶器	碗	―	底部	―	―	―	胎土は橙色でやや軟質、白色粒が混入。ロクロ成形。外底に墨書あり。	SM4002	１層
	17	沖縄産施釉陶器	小碗	―	底部	―	―	(3.9)	胎土は浅黄橙色と一部灰白色でやや軟質、黒色粒が混入。釉は掛分で外面は褐色の釉を全面施釉後、畳付釉剥ぎ。内面は白化粧後、透明釉を施釉。内底蛇の目釉剥ぎ。	SM4002	１層
	18	沖縄産施釉陶器	鉢	―	底部	―	―	6.5	胎土は浅黄橙色と褐灰色でやや軟質、白色粒が混入。釉は黒褐色で内外面胴部途中まで施釉、内底と底部は露胎。内底には渦巻き状の窯道具痕か。外底に刻み目あり。	SM4002	１層
	19	初期沖縄産 無釉陶器	壺	―	口縁部	(18.6)	―	―	胎土は赤灰色で軟質、白色粒と褐色粒が混入、白土が筋状になる。釉は黒褐色で内外面に掛かる。口縁部は外へ折り曲げた後、内側に折り返して成形。	SM4002	１層
	20	初期沖縄産 無釉陶器	蓋	―	胴～庇部	庇径 (12.9)	―	―	胎土は橙色で軟質、白色粒が混入。釉は黒褐色釉で外面途中まで掛かる。ロクロ成形。	SM4002	１層
	21	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	口～底部	(31.2)	15.0	(11.8)	胎土は明赤褐色でやや軟質、黒色粒と白色粒が混入。擂目は口縁部下から内底まで施されている。注口あり。	SM4002	１層
	22	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	底部	―	―	(10.7)	胎土は赤色と一部暗赤色でやや堅緻、褐色粒と白色粒が混入。釉は褐色で外面に掛かる。高台は貼付け。	SM4002	１層
	23	沖縄産無釉陶器	灯明皿	―	口～底部	(10.0)	2.2	(4.3)	胎土は赤色でやや堅緻、黒色粒が混入。内外面ともにロクロ痕顕著。口縁部に煤付着。	SM4002	１層
	24	陶質土器	火炉	―	底部	―	―	(13.9)	胎土は赤色でやや軟質、白色粒と雲母が混入。文様は外面に白土を規則的に剥ぎ取り横線文状にしたもの。ロクロ成形。	SM4002	１層
第 150 図 図版 13	25	中国産白磁	碗	徳化窯系	底部	―	―	(5.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に砂付着。	SM4002	２層
	26	沖縄産施釉陶器	小碗	―	口～底部	(9.2)	4.6	(4.0)	胎土は浅黄色でやや軟質。釉は掛分で、外面暗褐色釉を高台脇まで施釉。底部露胎。内面は浅黄色を施釉後、内底蛇の目釉剥ぎ。内面口唇部は釉剥ぎか。	SM4002	２層
	27	沖縄産無釉陶器	人形	―	―	―	―	―	ヒト形の顔か。胎土は明赤褐色で堅緻、白色粒が混入。眉は貼付けで、立体的に成形。裏面に指頭痕あり。	SM4002	２層
	28	中国産褐釉陶器	壺	―	胴部	―	―	―	胎土は浅黄色でやや軟質、白色粒と赤褐色粒が混入。釉は褐色で外面の文様を描いた後に施釉、内面露胎。文様は草花文か。	SM4003	１層
	29	中国産青花	碗	Ｂ１群 明Ⅰ－１	口縁部	(11.8)	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、口銹。文様は外面に草花文。景徳鎮窯系。	SR4001	２層
	30	鉄製品	釘	―	―	縦 5.0	最大径 0.6	最小径 0.4	角釘か。断面円形か。全体的に錆膨れが激しく、形状不明。	SR4001	４層

※釘(鉄製品)：実測した部分の法量を記載した。

第 25 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 b

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 150 図 図版 13	31	ベトナム産青花	瓶	―	胴部	―	―	―	胎土は灰白色でやや軟質。釉は透明で外面白化粧後、内外面施釉。文様は蓮弁文か。縦溝が入れられる。	SR4001	６層
	32	中国産青磁	碗	Ⅵ―１類	口縁部	(13.2)	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻、白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面に施釉。文様は外面に幅の狭い線刻蓮弁文。		Ⅰ層
	33	中国産青磁	碗	Ⅳ類	底部	―	―	(5.2)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉、畳付から外底露胎。文様は内底に印花文。		Ⅰ層
	34	中国産青磁	皿	Ⅳ'類	底部	―	―	4.2	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、内底釉剥ぎ、畳付から外底露胎。		Ⅰ層
	35	中国産青磁	香炉	―	口縁部	6.0	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は明オリーブ灰色で外面と内面口縁部に施釉。		Ⅰ層
	36	中国産青磁	蓋	―	胴部	―	―	―	酒会壺の蓋。胎土は白色で堅緻。釉はオリーブ灰色釉を外面に厚く施釉、内面は灰白色釉を施釉。文様は外面にヘラ描きによる蓮弁文。		Ⅰ層
	37	中国産青磁	器台	―	底部	―	―	(15.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉後、外底釉剥ぎ。文様は外面胴部にヘラ描きの葉文か。		Ⅰ層
第 151 図 図版 13	38	中国産白磁	小皿	景徳鎮窯系	口～底部	(10.2)	1.9	(5.2)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。内底に印の丸文。		Ⅰ層
	39	中国産青花	碗	徳化窯系	口～底部	(15.0)	6.7	(8.0)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面に折枝文、内底に不明文様。		Ⅰ層
	40	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	底部	―	―	(4.4)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様はペンシルドローイングで外面に如意頭唐草文。外底に銘あり。		Ⅰ層
	41	中国産青花	小碗	景徳鎮窯系	底部	―	―	(3.9)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面に霊芝文､内底に木の葉文。外底に銘あり。		Ⅰ層
	42	中国産青花	皿	徳化窯系	口～底部	12.65	2.8	6.8	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ｡文様は外面に簡略化した宝文､内面は圏線内に人物文。内面の４か所に窯詰め痕か。		Ⅰ層
	43	中国産青花	皿	徳化窯系	底部	―	―	(11.2)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内底に唐草文。		Ⅰ層
	44	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	底部	―	―	(8.8)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内面に喜字文と素描草花文。外底に銘あり。		Ⅰ層
	45	中国産青花	鉢	―	口縁部	(8.8)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。外面に不明文様。八角形を呈す。		Ⅰ層
第 152 図 図版 13	46	中国産三彩	水滴	―	胴部	―	―	―	魚形水滴か。胎土は灰白色で軟質、石英粒、赤色粒が混入。釉は外面胴部に緑色の釉と黄色の釉。内面に指頭のナデ調整。		Ⅰ層
	47	中国産陶器	茶壺	宜興窯系	底部	―	―	(6.0)	胎土は明赤褐色と黄褐色で軟質、白色粒が混入。外面は磨かれて光沢を持つ。底部は碁笥底状。		Ⅰ層
	48	本土産陶器	小碗	陶器碗 Ⅲ期	口～底部	(7.8)	4.3	(3.0)	京焼風の肥前か。胎土は白色で軟質。釉は灰白色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。全面に細かな貫入。		Ⅰ層
	49	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅲ期	口縁部	―	―	―	胎土はにぶい橙色で軟質、白色粒が混入。釉は褐色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に象嵌の蓮弁文か。		Ⅰ層
	50	本土産陶器	擂鉢	備前系	底部	―	―	(14.3)	胎土は赤褐色で堅緻、白色粒が混入。内面に６条１組の擂目を施す。		Ⅰ層
	51	沖縄産施釉陶器	小碗	池田Ⅷ類	底部	―	―	(4.0)	胎土は黄橙色で軟質。釉は外面に黒褐色釉を高台脇まで施釉。内面に灰白色釉を施釉後、内底蛇の目釉剥ぎ。外底に墨書の「酉」の文字。		Ⅰ層
	52	沖縄産施釉陶器	火取	―	底部	―	―	(6.7)	胎土はにぶい橙色で軟質、白色粒が混入。釉は褐色で外面腰部まで施釉、底部と内面露胎。外底に墨書あり。		Ⅰ層
	53	沖縄産施釉陶器	蓋	―	撮～袴部	庇径 5.9	2.95	袴径 4.2	54 の蓋か。胎土は灰白色で堅緻。釉は外面全面に透明釉を施釉、内面露胎。		Ⅰ層
	54	沖縄産施釉陶器	急須	―	口～底部	5.4	7.05	6.4	53 の身か。胎土は灰白色で堅緻。釉は透明釉を外面腰部まで施釉。内面は透明釉を全面に施釉後、口縁部釉剥ぎ。注口との接着部分に孔を２点穿つ。		Ⅰ層
	55	初期沖縄産 無釉陶器	甕	―	口縁部	(28.0)	―	―	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、石英粒が混入、白土が筋状になる。口唇部の一部と外面胴部に自然釉が掛かる。外面胴部に縄目状の突帯を１条施す。		Ⅰ層
	56	初期沖縄産 無釉陶器	蓋	―	胴～袴部	庇径 (13.1)	―	袴径 (9.4)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、黒色粒、赤色粒が混入。袴部に自然釉が掛かる。		Ⅰ層
第 153 図 図版 13	57	沖縄産無釉陶器	甕	―	口～底部	41.8	71.0	26.0	胎土は赤褐色でやや堅緻、白色粒、巻貝類が混入。文様は外面胴部に２条の波線内に８条の波線、円文突帯、かまぼこ状突帯。内底中央部は一定方向にナデ調整が施される。		Ⅰ層
	58	沖縄産無釉陶器	鈴	―	―	―	―	―	胎土は明赤褐色でやや堅緻。柄の部分に紐通しの孔を穿つ。内面上部に直径約 1.2 cmの土球が詰まる。		Ⅰ層
	59	石製品	小杯	―	口縁部	―	―	―	外面胴部に掘り出された蓮弁文か。内面に加工・調整時の線状痕が横位に走る。		Ⅰ層
	60	石製品	石盤	―	―	縦残存 (11.2)	横残存 (8.65)	厚さ 0.45	黒色粘板岩製。表裏共に丁寧に磨かれ、端部は厚さが薄くなる。		Ⅰ層

第 26 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 c

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 153 図 図版 13	61	石製品	硯	―	ほぼ完形	縦 9.0	横 4.15	厚さ 1.3	黄緑色頁岩製。小型の長方形硯。海部・陸部の隅に橙色の朱墨のようなものが付着。裏面は上部に「阿」の線刻、その下から隅丸長方形に窪む。		Ⅰ層
	62	石製品	硯	―	ほぼ完形	縦 13.55	横 7.4	厚さ 2.3	黒色粘板岩製。長方形硯で縁の殆どが欠損している。裏面は平坦で上下左右の縁に直線の線刻し、右上に「□政正」と逆さに刻む。		Ⅰ層
第 154 図 図版 14	63	石製品	硯	―	ほぼ完形	縦 14.8	横 7.3	厚さ 2.0	赤色頁岩製。長方形硯。裏面は隅丸長方形に浅く窪み、その中央に「赤間関？」の線刻あり。		Ⅰ層
	64	貝製品	貝窓	―	破片	―	―	0.1	マドガイの縁辺部。貝窓素材を切り取った際の加工痕が１辺残存。		Ⅰ層
	65	円盤状製品	―	―	―	縦 1.85	横 2.0	厚さ 0.3	陶質土器を加工。内外面から打割。		Ⅰ層
	66	円盤状製品	―	―	―	縦 1.9	横 1.8	厚さ 0.4	陶質土器を加工。内外面から打割。		Ⅰ層
	67	円盤状製品	―	―	―	縦 2.4	横 2.4	厚さ 0.45	中国産青花の碗の胴部を加工。内外面から打割。		Ⅰ層
	68	円盤状製品	―	―	―	縦 5.75	横 5.65	厚さ 2.05	中国産青磁の壺の底部を加工。元あったひび割れを利用し打割。周縁部分は研磨される。		Ⅰ層
	69	金属製品	簪	―	カブ～竿	縦残存 (5.5)	横 0.35	厚さ 0.2	竿本体の断面が六角形。		Ⅰ層
	70	銭貨	―	(古)寛永通寶	―	外径 2.4	孔径 0.45	厚さ 0.1	寛□通寶。古寛永（１期：1636 年)。「寛」の文字の左右に小孔あり。		Ⅰ層
	71	明朝系瓦(赤色)	丸瓦	―	玉縁部	―	―	―	筒部上端に 5 mm台の孔を穿ち、その周囲に漆喰が残る。		Ⅰ層
	72	塼瓦	―	Ⅳ類	―	縦残存 (16.4)	横残存 (14.3)	厚さ 4.25	表面は灰色、胎土中央部はにぶい橙色を呈す。表面は滑面になるが、僅かに凹み、製作時のものか弧状の擦痕がある。裏面は粗い。		Ⅰ層
第 155 図 図版 14	73	中国産青磁	小碗	―	底部	―	―	(3.6)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に施釉後、外底釉剥ぎ。文様は内外面胴部にヘラ描きによる蓮弁文か。		Ⅱ７層
	74	中国産白磁	小碗	徳化窯系	口～底部	(9.4)	4.25	(4.8)	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、口唇部釉剥ぎ。型成形時の粘土シワあり。		Ⅱ７層
	75	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	―	―	―	胎土は白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に人物文。		Ⅱ７層
	76	中国産青花	皿	徳化窯系	口縁部	(14.6)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は内面に火炎宝珠文。		Ⅱ７層
	77	中国産青花	小杯	徳化窯系	底部	―	―	2.35	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内面と外面畳付まで施釉後、畳付釉剥ぎ、外底露胎。文様は外面に不明文様、内底圏線内に跳魚文。		Ⅱ７層
	78	本土産陶器	碗	陶器碗 Ⅳ期	底部	―	―	(4.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉は外面胴部に銅緑釉、内面全面に灰黄色釉を施釉、外面底部露胎。		Ⅱ７層
	79	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅱ類	口～底部	(13.1)	7.3	(6.8)	胎土は淡黄色で堅緻。釉は灰オリーブ色で内外面の口縁部から胴部途中まで施釉、内底、底部露胎。		Ⅱ７層
	80	沖縄産施釉陶器	鉢	―	口縁部	(11.4)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、口唇部から口縁内側を釉剥ぎ。		Ⅱ７層
	81	沖縄産施釉陶器	香炉	―	底部	―	―	(13.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉、脚の尖端が露胎。底部に脚が１本残存しており元は３本あったと思われる。全面に細かな貫入が見られる。		Ⅱ７層
	82	沖縄産施釉陶器	火取	―	口縁部	(11.8)	―	―	胎土は淡黄色で堅緻、白色粒が混入。釉は褐色で外面口縁から胴部に施釉、内面露胎。外面胴部に縦位の丸彫の短沈線。		Ⅱ７層
	83	沖縄産施釉陶器	蓋	―	撮～袴部	庇径 (9.1)	3.6	袴径 (6.2)	胎土は黄橙色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を外面庇部まで施釉。文様は外面胴部に沈線の区画文。袴部に耐火土付着。		Ⅱ７層
	84	初期沖縄産 無釉陶器	灯明皿	―	口縁部	(8.6)	―	―	胎土は褐灰色やや堅緻、白色粒が混入。外面胴部にケズリ調整痕。口縁部に煤付着。		Ⅱ７層
	85	瓦質土器	台	―	底部	―	―	―	胎土は明褐色で軟質、石英粒、赤色粒が混入。上面、側面、底面に種子の圧痕あり。		Ⅱ７層
	86	円盤状製品	―	―	―	縦残存 (3.7)	横 5.6	厚さ 0.9	中国産青花の皿の底部を加工。内外面から打割。		Ⅱ７層
	87	煙管	吸口	陶口Ⅱ類	完形	―	―	―	沖縄産施釉陶器製。胎土は灰白色で堅緻。釉は透明釉を全面に施釉。長さ 3.1cm、吸口外径 0.85cm、内径 0.3cm、小口外径 1.45cm、内径 1.05cm。		Ⅱ７層
	88	鉄製品	刀子	―	―	縦残存 (2.2)	横残存 (5.0)	厚さ 1.0	刀子の中央部。両面から研がれ刃部を成形。全面錆に覆われる。		Ⅱ７層
第 156 図 図版 14	89	中国産褐釉陶器	擂鉢	―	底部	―	―	(9.3)	胎土はにぶい黄色でやや堅緻、石英粒が混入。外面胴部から底部、内面は露胎。内面に 10 条１組の擂目を施す。		Ⅱ８層
	90	金属製品	糸抜き	―	完形	縦 4.05	横 0.6	厚さ 0.2	軸部の先端が刃状に成形。		Ⅲ 10 層

※銭貨：欠損している部分の銭文は□で示した。

第 27 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 d

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 156 図 図版 14	91	銭貨	―	(新)寛永通寶	―	外径 2.5	孔径 0.4	厚さ 0.25	２枚重なる。ともに新寛永（３期：1697 年）。		Ⅲ 10 層
	92	銭貨	―	宣和通寶	―	外径 2.8	孔径 0.6	厚さ 0.18	宣和通寶（初鋳 1119 年）。背面無文。		Ⅲ 10 層
	93	中国産青花	碗	福建系	底部	―	―	(6.0)	胎土は灰白色で堅緻、黒色粒が混入。釉は明緑灰色で畳付釉剥ぎ。文様は内底に不明文様。畳付に砂付着。貫入あり。		Ⅲ 10a 層
	94	中国産青花	鉢	―	口縁部	(5.8)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様はペンシルドローイングで外面に松文と草文。		Ⅲ 10a 層
	95	中国産褐釉陶器	壺	―	口縁部	―	―	―	胎土は淡黄色でやや堅緻、白色粒が混入。釉は褐色で外面口縁部、内面に施釉。注ぎ口あり。		Ⅲ 10a 層
	96	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅲ期	口縁部	(37.4)	―	―	胎土はにぶい橙色で軟質、白色粒が混入。釉は褐色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に白土の圏線と刷毛描き。		Ⅲ 10a 層
	97	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅳ期	底部	―	―	(6.6)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は銅緑釉を外面腰部、内面全面に施釉後、内底蛇の目釉剥ぎ、高台から外底露胎。		Ⅲ 10a 層
	98	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅲ期	底部	―	―	(4.1)	胎土は灰黄色でやや軟質、白色粒と黒色粒が混入。釉は灰白色で外面は高台脇まで、内面は全面施釉、畳付から外底露胎。文様は内底に鉄絵による不明文様。		Ⅲ 10a 層
第 157 図 図版 14	99	沖縄産施釉陶器	火取	―	口～底部	(10.8)	8.4	(7.0)	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は褐色で口縁内側から外面腰部まで施釉。文様は外面胴部に丸彫の葉文か。外面腰部に鉋痕あり。		Ⅲ 10a 層
	100	沖縄産無釉陶器	灯明皿	―	口～底部	(9.9)	2.0	(5.0)	胎土は橙色で軟質、白色粒と赤色粒が混入。外底部にヘラによる線刻あり。口縁部に煤付着。		Ⅲ 10a 層
	101	宮古式土器	壺	―	口縁部	―	―	―	胎土に白色粒、赤色粒が混入。内外面頸部に指頭痕、内面胴部にナデ調整痕あり。		Ⅲ 10a 層
	102	貝製品	碁石	―	ほぼ完形	縦 2.2	横 2.2	厚さ 0.4	貝製の碁石。全面磨かれ光沢を持つ。		Ⅲ 10a 層
	103	明朝系瓦(灰色)	平瓦	―	筒部	―	―	―	凸面に、圏線に「大」の字とその下に「二」字を重ねたタイプの刻印を施す。		Ⅲ 10a 層
	104	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	口～底部	(10.3)	4.0	(3.4)	小型の擂鉢。胎土はにぶい赤褐色で堅緻。内面に４条１組の擂目を施す。		Ⅲ 10a 1 層
	105	初期沖縄産 無釉陶器	擂鉢	―	底部	―	―	(9.6)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、石英粒と赤色粒が混入、白土が筋状になる。釉は外面胴部に泥釉を施し、一部自然釉が掛かる。内面に擂目を密に施す。外面胴部に窯詰めの痕か。		Ⅲ 10a 3 層
	106	初期沖縄産 無釉陶器	壺	―	口縁部	(16.0)	―	―	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、石英粒が混入。釉は内外面に自然釉が掛かる。口縁部は外へ折り曲げた後、内側に折り返して成形。		Ⅲ 10a 7 層
	107	本土産陶器	碗	関西系	口～底部	(13.6)	4.7	(4.6)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は淡黄色で内面から外面腰部まで施釉。底部露胎。全面に細かな貫入がみられる。		Ⅲ 10b 層
	108	瓦質土器	鉢	―	底部	―	―	―	胎土は灰色で軟質、石英粒と雲母が混入。内外面の器面は黒褐色を呈する。		Ⅲ 10b 層
	109	貝製品	碁石	―	完形	縦 2.15	横 2.15	厚さ 0.45	貝製の碁石。全面磨かれ光沢を持つ。		Ⅲ 11 層
第 158 図 図版 15	110	中国産青磁	蓋	―	胴～袴部	―	―	袴径 (14.6)	酒会壺の蓋。胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で外面に厚く施釉。文様は外面にヘラ描きによる唐草文。		Ⅲ 11b 層
	111	本土産染付	皿	磁器皿 Ⅲ期	口縁部	(42.2)	―	―	芙蓉手皿。胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面に区画と宝文、外面に不明文様。		Ⅲ 11b 層
	112	初期沖縄産 無釉陶器	碗	―	口縁部	(13.4)	―	―	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒が混入。内外面に自然釉が掛かる。		Ⅲ 11b 層
	113	陶質土器	火炉	―	口縁部	―	胴径 (18.5)	―	胎土は橙色で軟質、雲母と赤色粒が混入。口縁部に煤付着。内面胴部に種子類の圧痕か。		Ⅲ 11b 層
	114	石製品	砥石	―	破片	縦残存 (2.4)	横残存 (4.8)	厚さ 2.95 ～ 4.05	砂岩製。残存する４面に研磨痕あり。		Ⅲ 11b 層
	115	中国産色絵	水滴	―	―	―	―	―	鳥形の水滴か。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を外面に施釉、内面露胎。外面に線刻で羽を描き、緑色の絵付け。成形は上部と下部を合わせる。		Ⅲ 11c 層
	116	宮古式土器	壺	―	口縁部	(21.7)	―	―	胎土に白色粒、赤色粒が混入。内外面頸部に指頭痕、内面にナデ調整痕あり。		Ⅲ 11c 層
	117	煙管	雁首	陶首Ⅲ類	―	―	―	―	沖縄産無釉陶器製。胎土はにぶい赤褐色で堅緻。小口外径 1.75cm、内径 1.1cm。		Ⅲ 11c 層
	118	金属製品	飾り金具	―	完形	縦 (2.4)	横 3.05	厚さ 0.05	上面は折れ曲がるが入八双。文様は魚々子を密に施し、毛彫りの草花文。鍍金が施される。２点の孔が穿たれる。鍛造か。		Ⅲ 11c 層
第 159 図 図版 15	119	石製品	石像か	―	―	縦残存 (7.4)	横残存 (4.35)	厚さ (1.8)	砂岩製。表面に２条の沈線が施される。		Ⅲ 11c 層炭
	120	金属製品	釘	―	完形	縦 2.9	径 0.25	頭部 0.5	角釘。頭部を一方へ折る。		Ⅲ 11e 層

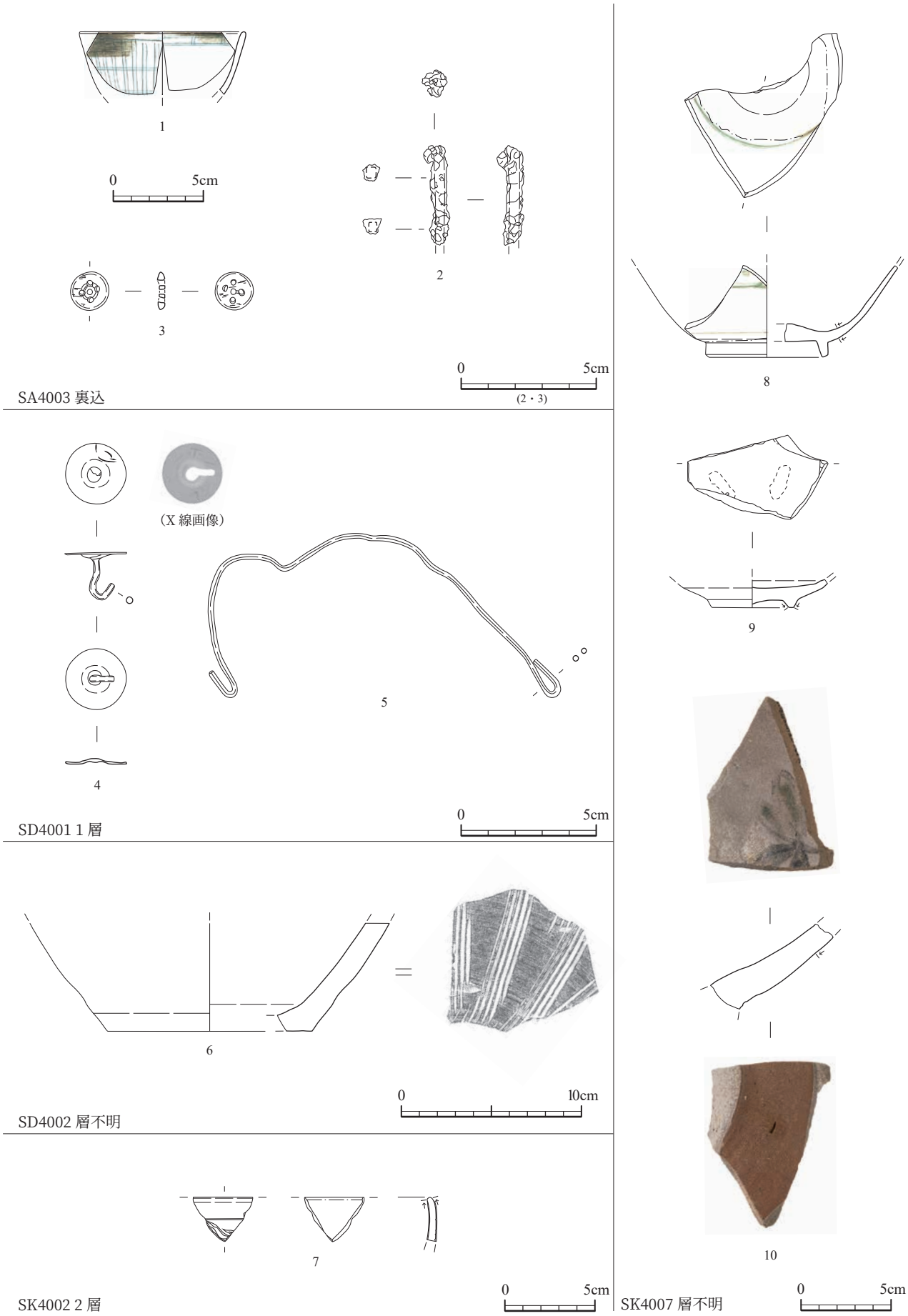
第 28 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 e

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 159 図 図版 15	121	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅲ期	口縁部	(37.6)	―	―	胎土はにぶい橙色で軟質、白色粒が混入。釉は褐色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に白土の圏線。		Ⅲ 12 層
	122	沖縄産施釉陶器	鉢	―	口縁部	(20.5)	―	―	胎土は灰黄色で堅緻、白色粒が混入。釉は外面胴部と内面口縁部に褐色釉、内面胴部に灰白色釉を施釉、内面口縁部を釉剥ぎ。		Ⅲ 12 層
	123	沖縄産施釉陶器	火取	―	底部	―	―	(9.8)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で外面に施釉、外面底部と内面露胎。文様は外面胴部に葉文。外底に釉薬による文字か。		Ⅲ 12 層
	124	煙管	雁首	陶首Ⅰ類	―	幅 2.5	高さ 3.4	―	明朝系瓦（灰色）を転用。火皿と底面に煤付着。火皿内径 1.2cm、小口外径 0.9cm。		Ⅲ 12 層
	125	明朝系瓦(褐色)	軒平瓦	Ⅰ－Ⅲ－Ｂ	瓦当	―	―	―	笵バリあり。瓦当文様は全体的に摩滅する。瓦当裏はナデが丁寧。平瓦部凹面に瓦当と平瓦部の接合部境界が僅かに見える。		Ⅲ 12 層
第 160 図 図版 15	126	中国産青磁	瓶	―	口縁部	(6.0)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉。文様は口唇部に鉄斑文。		Ⅲ 12a 層
	127	中国産青花	小杯	―	口縁部	(5.0)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に梵字文。		Ⅲ 12b 層
	128	銭貨	―	□武通寶	―	外径 2.2	―	厚さ 0.13	洪武通寶（初鋳 1368 年）か。背面無文。		Ⅲ 15d 層
	129	中国産白磁	皿	Ｄ群	底部	―	―	(4.3)	胎土は灰白色で軟質。釉は淡黄色で全面に施釉。抉り高台。		Ⅲ 15e ２層
	130	ベトナム産青花	瓶	―	胴部	―	―	―	胎土は灰白色でやや軟質、黒色粒が混入。釉は透明で外面白化粧後、内外面施釉。文様は蓮弁文か。		Ⅲ 15e ２層
	131	中国産青磁	皿	Ｖ類	口縁部	―	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉。文様は内面口縁部にヘラ描きの唐草文。		Ⅲ 20 層
	132	中国産青花	碗	Ｄ群 明Ⅱ－２	口縁部	―	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面口縁部に波涛文、胴部にアラベスク文。景徳鎮窯系。		Ⅲ 20 層
	133	鉄製品	釘	―	―	縦残存 (4.8)	最大径 0.8	最小径 0.55	角釘。頭部を一方へ折る。全面錆に覆われる。		Ⅲ 20 層
	134	鉄製品	鎌	―	刃部	―	―	―	鎌の刃部。全面錆に覆われる。		層不明
図版 22	135	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	8.6	3.85	3.3	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内外面に圏線。内底にハリ痕あり。口銹。		Ⅰ層
	136	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	8.8	3.7	3.2	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内外面に霊芝文。		Ⅰ層
	137	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	8.7	3.6	2.6	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様はゴム判による染色体文。		Ⅰ層
	138	本土産近代磁器	皿	瀬戸・美濃系	口～底部	(10.6)	1.85	(6.6)	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。内面に型紙摺りの文様。		Ⅰ層
	139	本土産近代磁器	杯	瀬戸・美濃系	口～底部	6.4	4.35	3.0	胎土は白色で堅緻。釉は外面口縁部から高台までクロム釉を施釉。内面と外面高台内に透明釉を施釉。畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に松文。		Ⅰ層
	140	本土産近代磁器	瓶	―	口縁部	―	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。		Ⅰ層
	141	本土産近代磁器	鉢	―	口～底部	(11.4) (8.6)	6.2	11.4 8.6	蓋付きの鉢。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、口縁内面及び畳付を釉剥ぎ。口唇部釉剥ぎ。外面胴部に銅板転写による花文。		Ⅰ層
	142	本土産近代磁器	鉢	瀬戸・美濃系	口～底部	10.6	8.0	6.8	143 の身。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、口縁内面及び畳付を釉剥ぎ。外面胴部に銅板転写による文様。		Ⅰ層
	143	本土産近代磁器	蓋	瀬戸・美濃系	完形	庇径 11.0	3.0	袴径 9.9	142 の蓋。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、袴部を釉剥ぎ。外面に銅板転写による文様。		Ⅰ層
	144	本土産近代磁器	急須	瀬戸・美濃系	口～底部	7.1	6.7	6.5	胎土は白色で堅緻。釉はクロム釉が外面口縁から胴部、透明釉が内面全面に施釉、口唇部釉剥ぎ、底部露胎。文様は外面胴部に松文。注口の接着部分に孔を 10 点穿つ。		Ⅰ層
	145	本土産近代磁器	急須	―	底部	―	―	6.5	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉、底部露胎。外面胴部と把手に銅板転写による文様。		Ⅰ層
	146	沖縄産施釉陶器	壺	―	口縁部	(5.5)	―	―	油甕。胎土は明黄褐色でやや軟質。釉は黒褐色で内外面に施釉後、口唇部釉剥ぎ。		Ⅰ層
	147	沖縄産施釉陶器	壺	―	底部	―	―	(11.4)	油甕。胎土は明黄褐色でやや軟質。釉は黒褐色で内外面に施釉、内底露胎、高台露胎。外底に砂付着。		Ⅰ層
	148	沖縄産施釉陶器	鉢	―	口～底部	(22.2)	10.0	(8.4)	胎土は浅黄橙色でやや軟質。釉は外面に褐色釉、内面は白化粧後に透明釉を施釉、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。内底と畳付に耐火土付着。		Ⅰ層
	149	沖縄産施釉陶器	鉢	―	底部	―	―	(11.2)	胎土は浅黄橙色でやや軟質。釉は外面に褐色釉、内面は白化粧後に透明釉を施釉、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ。内底に耐火土付着。		Ⅰ層
	150	沖縄産施釉陶器	植木鉢	―	口～底部	―	―	―	胎土は浅黄橙色でやや堅緻、白色粒が混入。釉は褐色で内外面に施釉、外底の一部を釉剥ぎ。底部に孔が２カ所穿たれており１カ所は漆喰により埋められる。		Ⅰ層

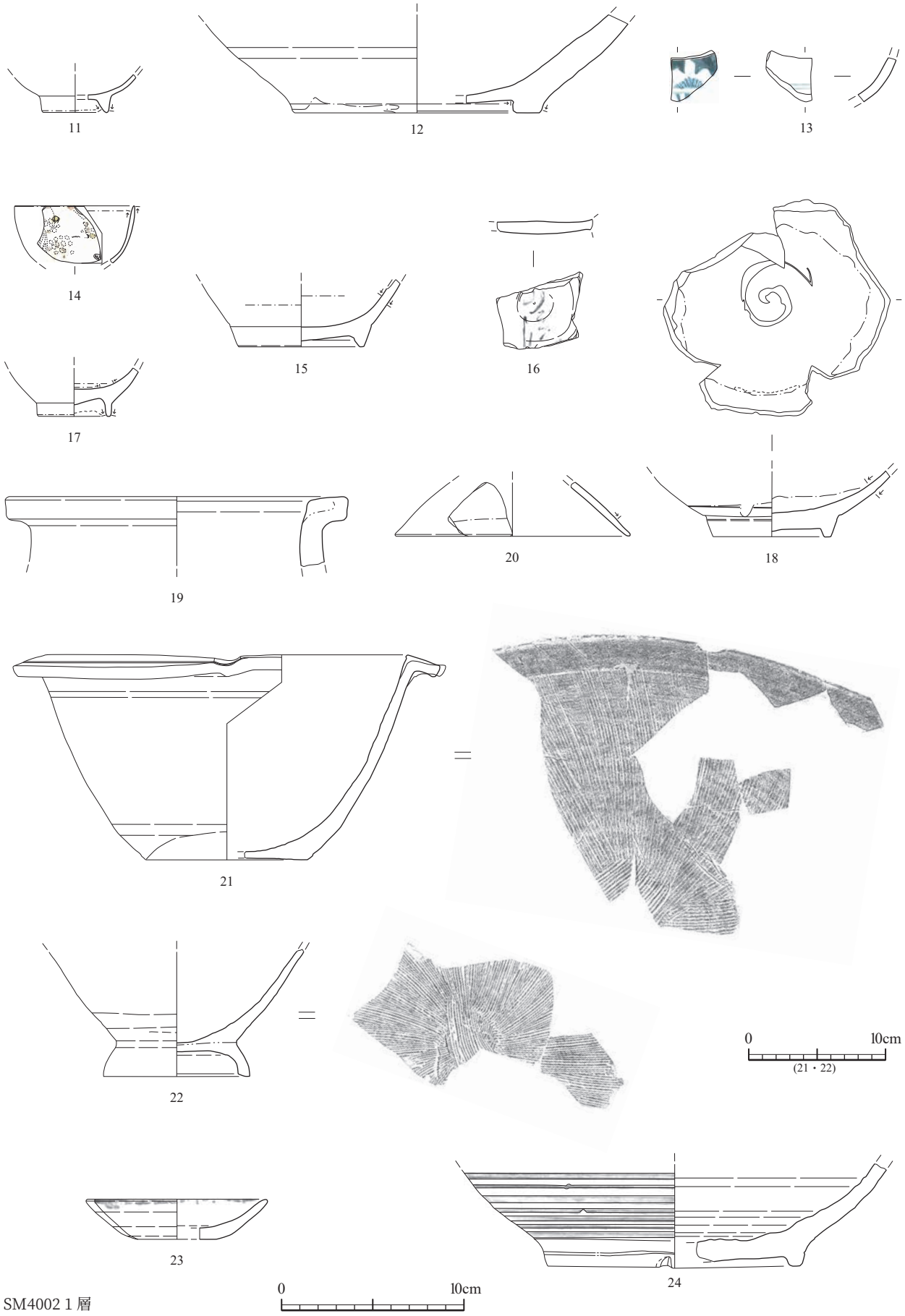
※銭貨：欠損している部分の銭文は□で示した。　※釘(鉄製品)：実測した部分の法量を記載した。

第 29 表　Ⅳ区出土遺物観察一覧 f

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
図版 22	151	沖縄産施釉陶器	鍋	―	口縁部	(13.6)	―	―	152 の身。胎土は灰黄色でやや軟質。釉は外面に灰オリーブ色釉を口縁から胴部まで施釉、内面は白化粧後に透明釉を施釉。口唇部釉剥ぎ。文様は外面に鉄絵と盛絵による松文。		Ⅰ層
	152	沖縄産施釉陶器	蓋	―	胴～庇部	庇径 (13.2)	―	―	151 の蓋。胎土は灰黄色でやや軟質。釉は外面に灰オリーブ色釉を胴部に施釉、内面は白化粧後に透明釉を施釉。庇部露胎。文様は外面胴部に鉄絵と盛絵による松文か。		Ⅰ層
	153	沖縄産施釉陶器	火取	―	口～底部	11.0	8.7	7.8	胎土は浅黄橙色でやや軟質。釉は全面白化粧後に外面全面透明釉を施釉、腰部と畳付釉剥ぎ。口唇部にコバルト釉を塗布。口縁部は灰落とし時の打割が見られる。		Ⅰ層
	154	石製品	石筆	―	―	縦残存 (7.4)	―	厚さ 0.65	滑石？製。加工・調整時の線状痕が縦位に走る。両端部が丸みを帯びるように摩滅。		Ⅰ層
	155	石製品	石筆	―	―	縦残存 (3.9)	―	厚さ 0.73	蝋石？製。加工・調整時の線状痕が縦位に走る。片方の端部はほぼ一直線に裁断されている。		Ⅰ層
	156	石製品	石筆	―	―	縦残存 (3.7)	―	厚さ 0.58	蝋石？製。加工・調整時の線状痕が縦位に走る。		Ⅰ層
図版 22	157	ガラス製品	瓶	薬瓶	底部	―	―	6.9	色調はコバルト色系。肩部はいかり肩で、胴部横断面円形。		Ⅰ層
図版 22	158	本土産近代磁器	皿	瀬戸・美濃系	口～底部	10.8	2.1	6.4	胎土は白色で堅緻。釉は内面から外面高台までクロム釉を施釉。高台内に透明釉を施釉。畳付釉剥ぎ。文様は内底に鳥文、盛絵による梅。		Ⅱ７層

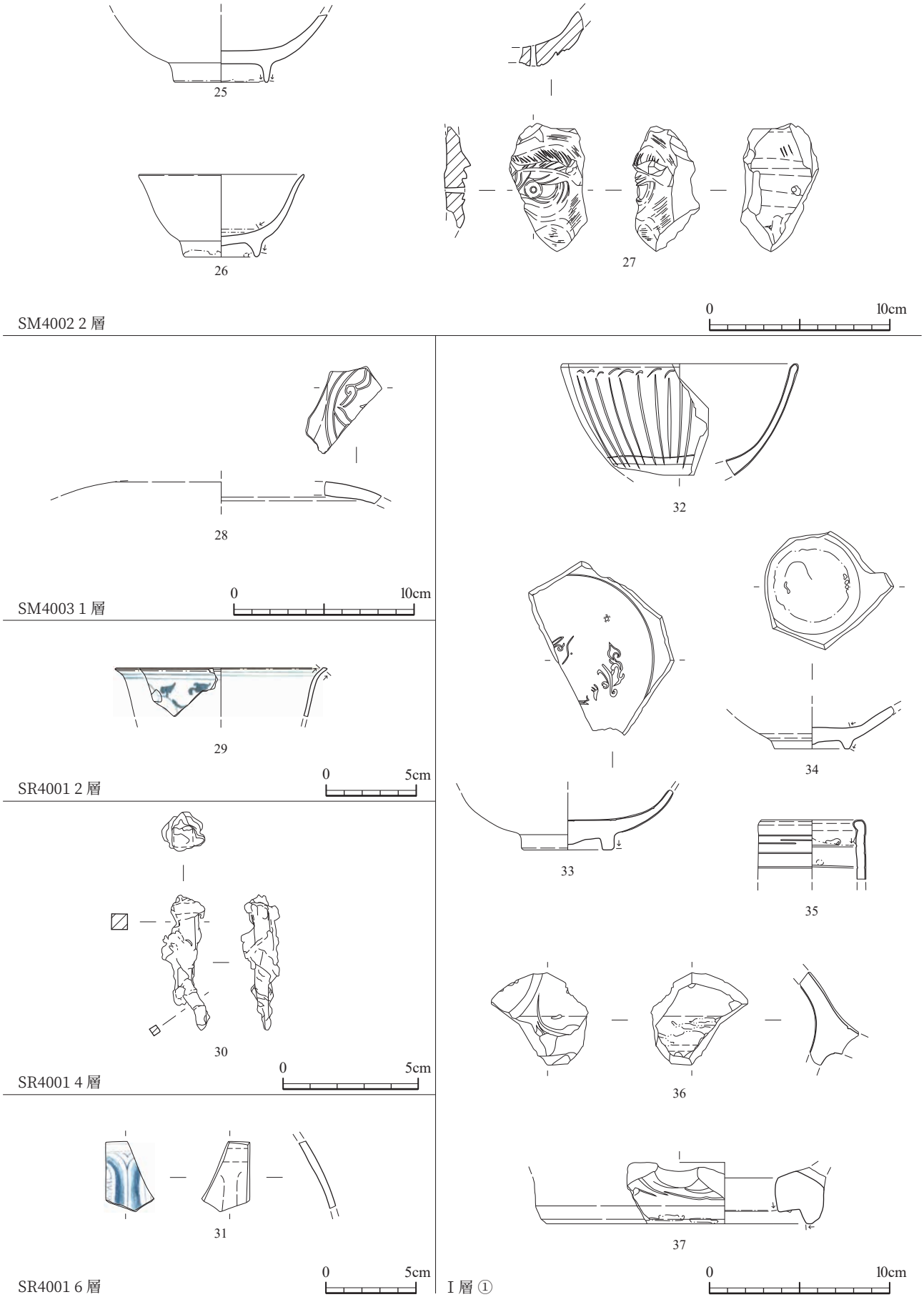


第 148 図　Ⅳ区の出土遺物１

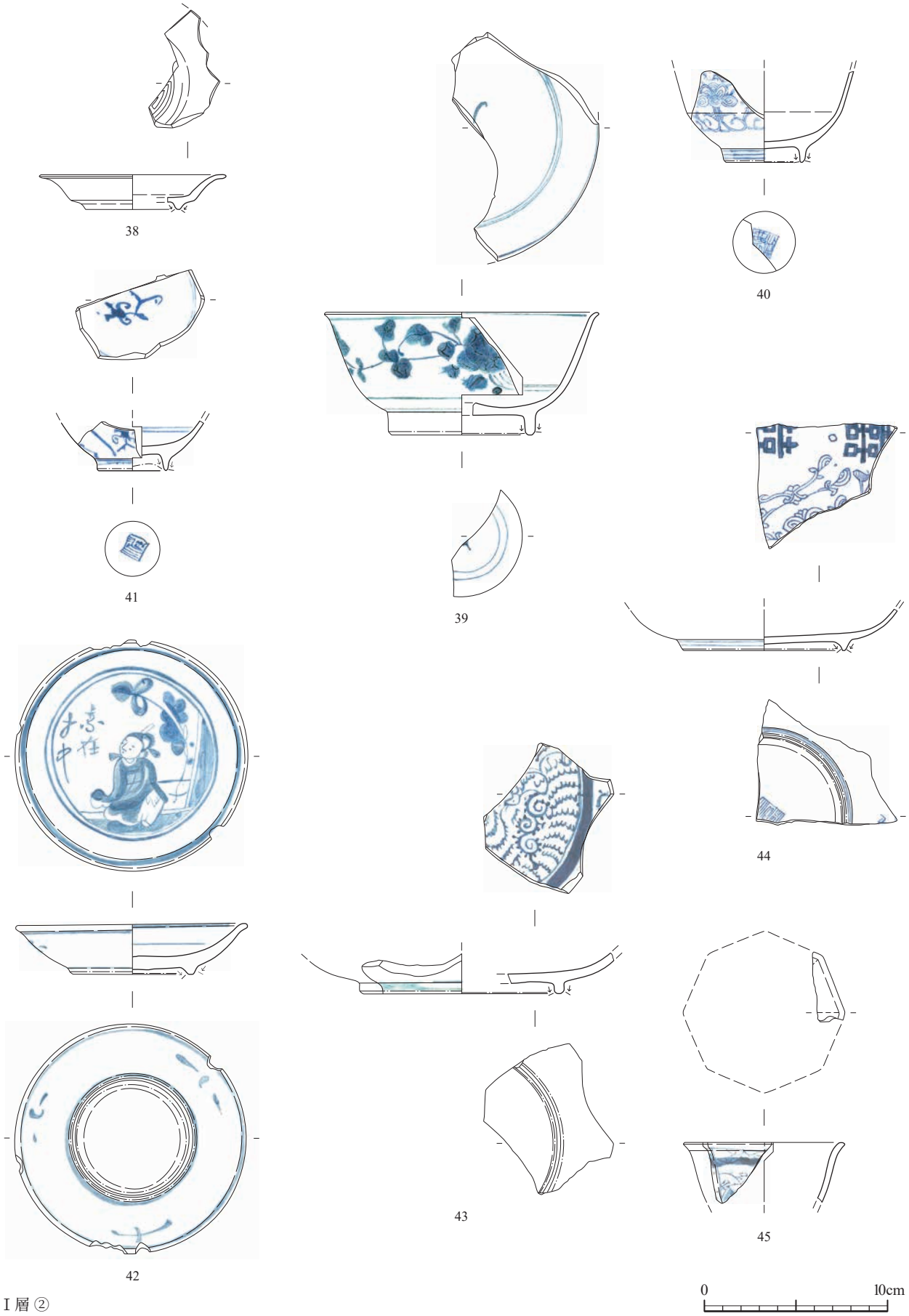


SM4002 1 層

第 149 図　Ⅳ区の出土遺物２

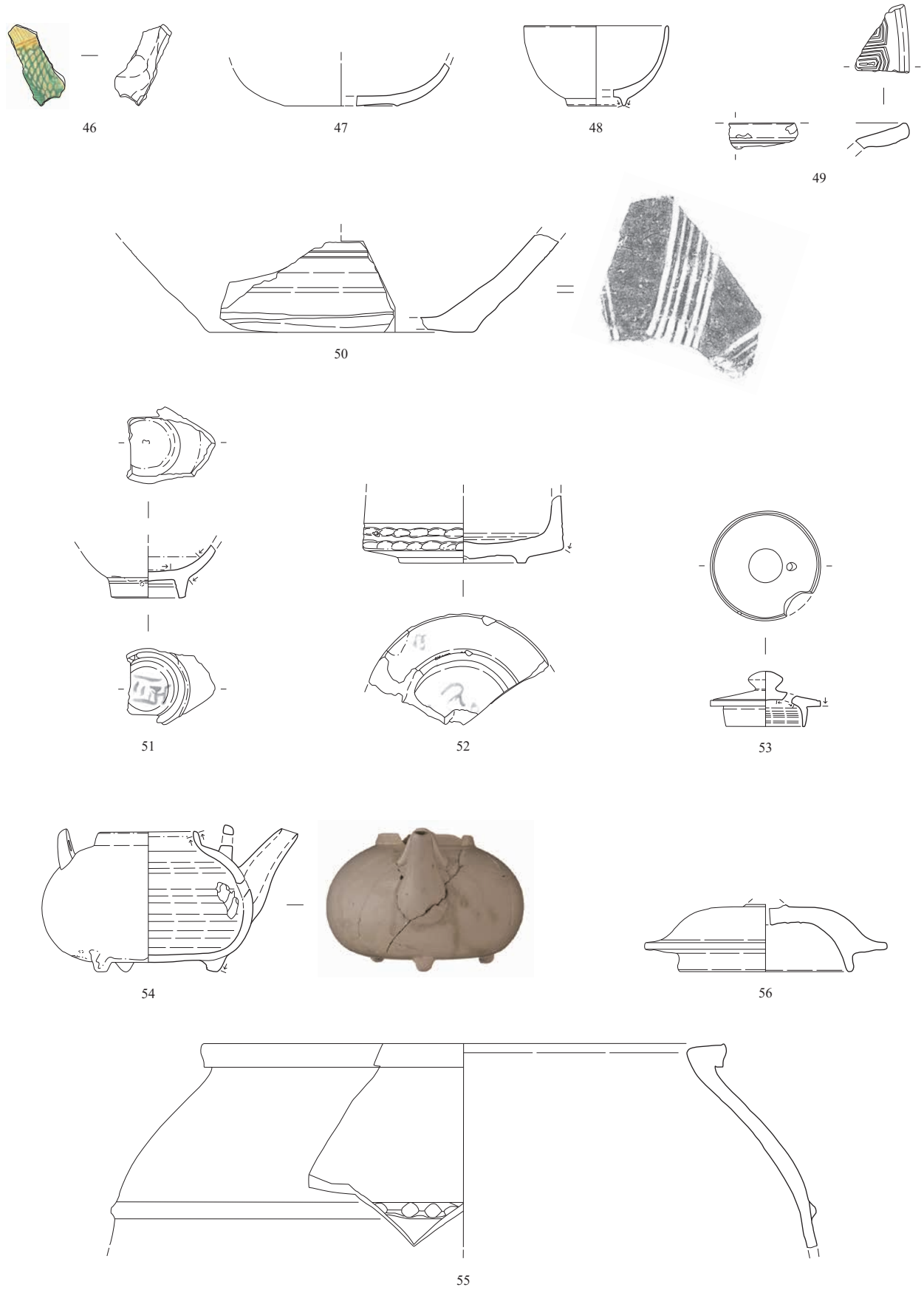


第 150 図　Ⅳ区の出土遺物３



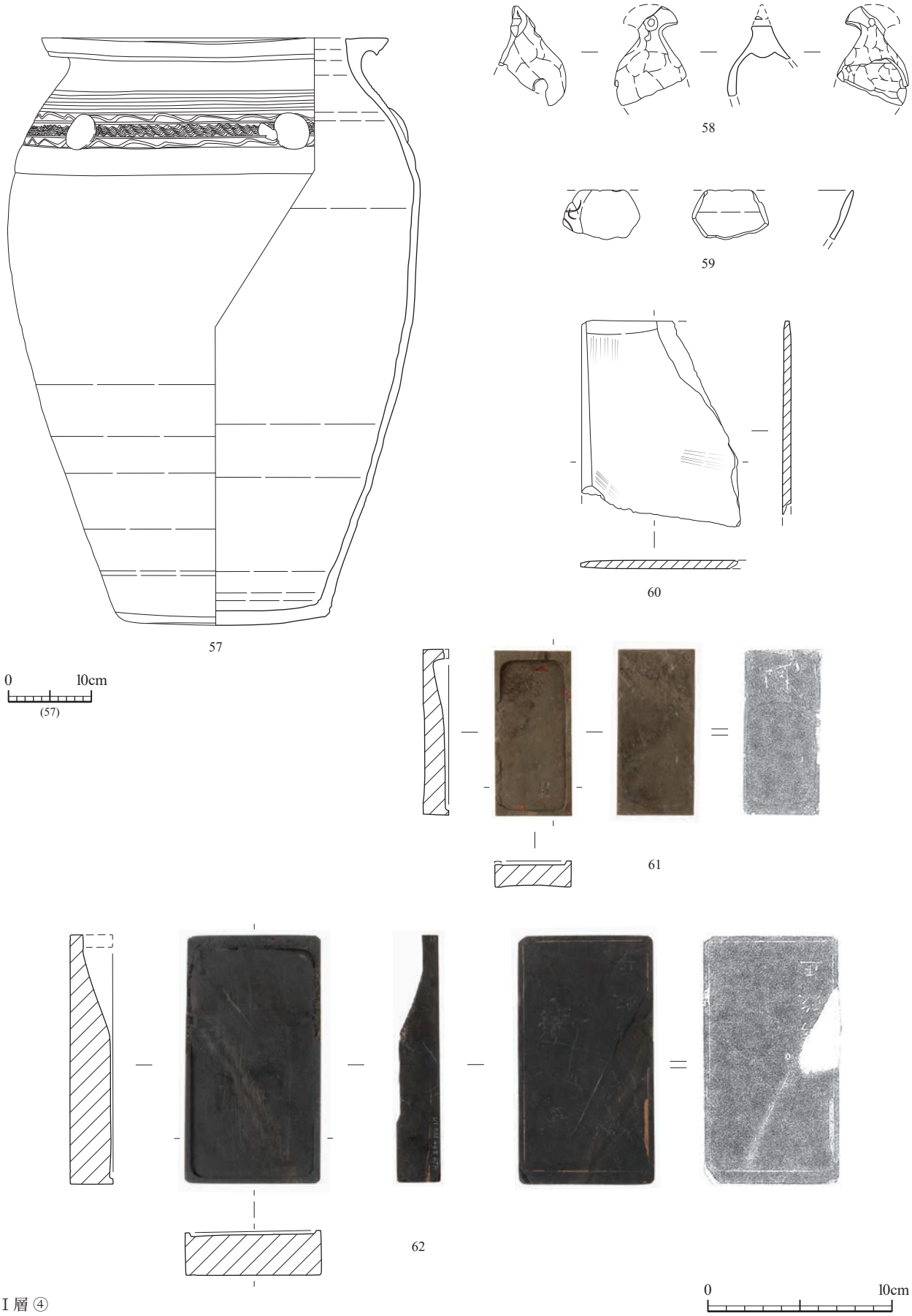
Ⅰ層 ②

第 151 図　Ⅳ区の出土遺物４



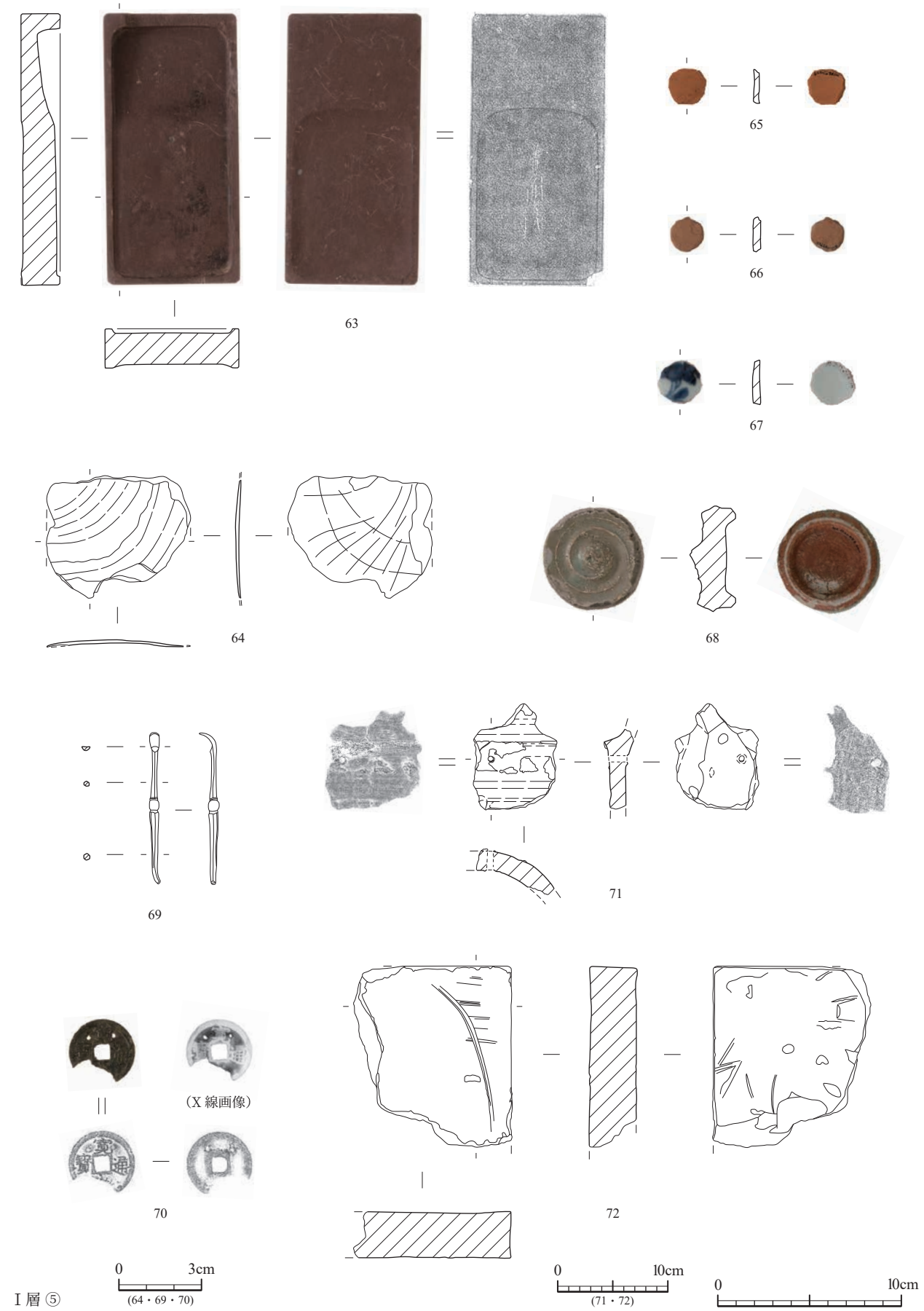
Ⅰ層③

第 152 図　Ⅳ区の出土遺物５

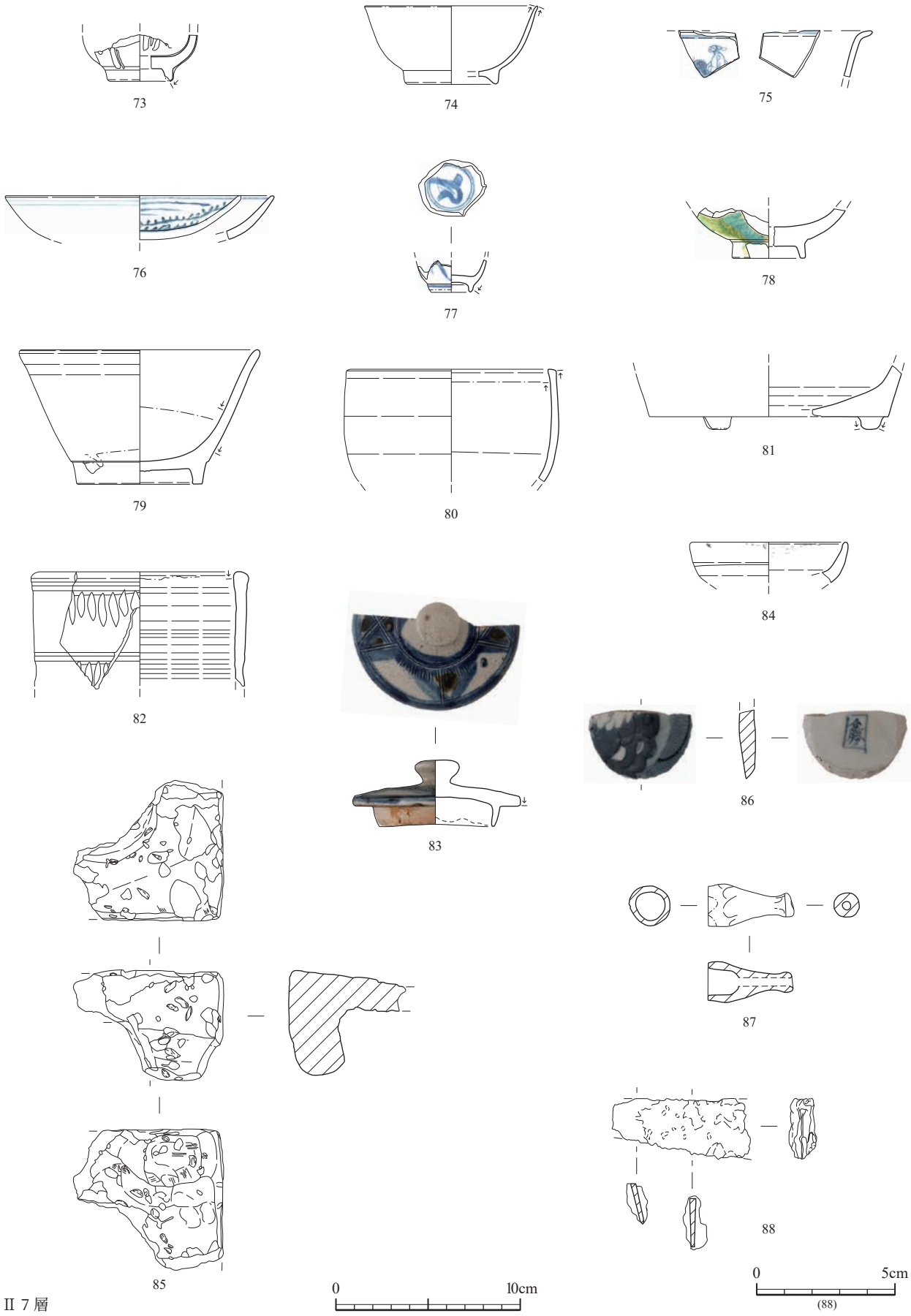


Ⅰ層④

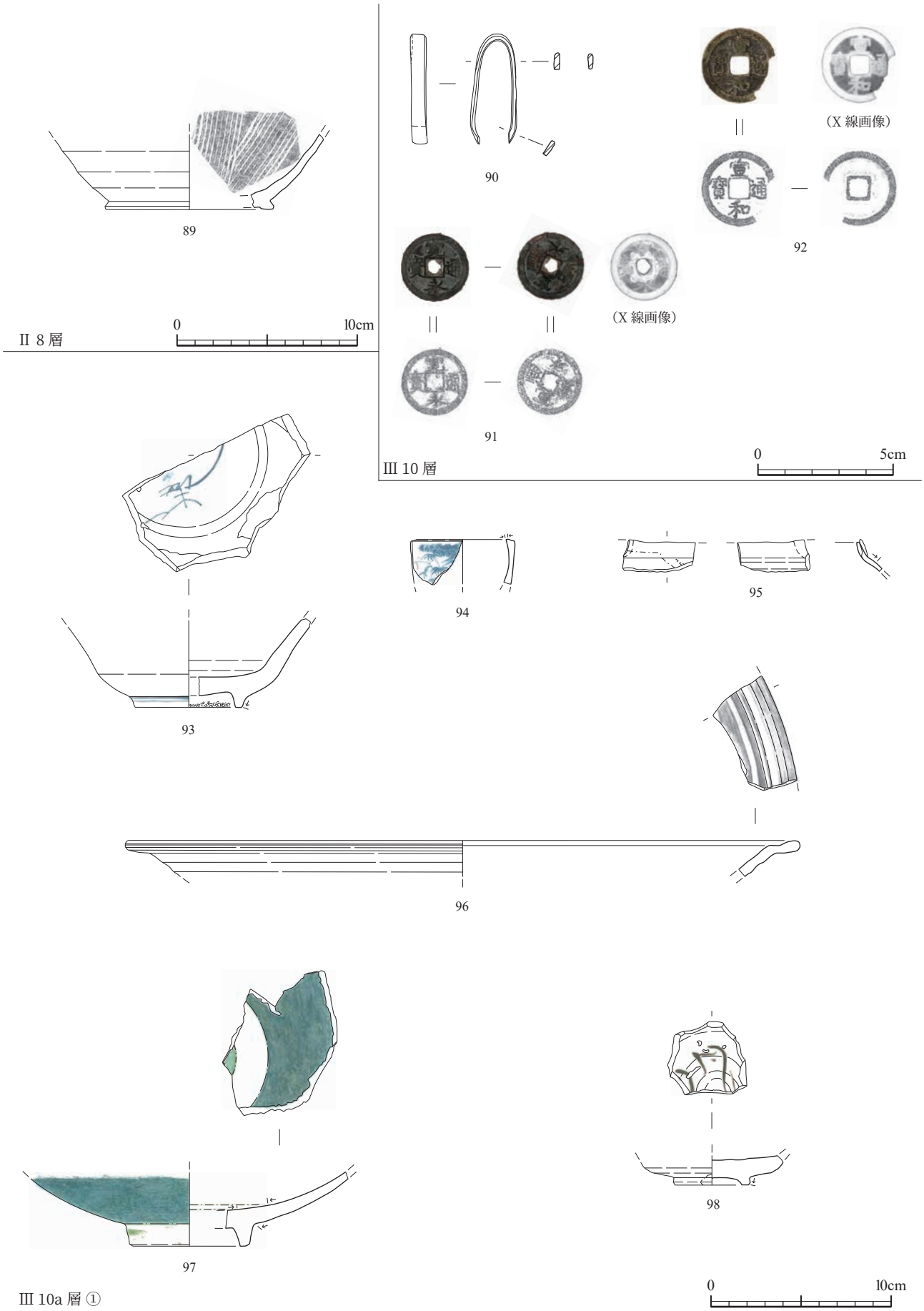
第 153 図　Ⅳ区の出土遺物６



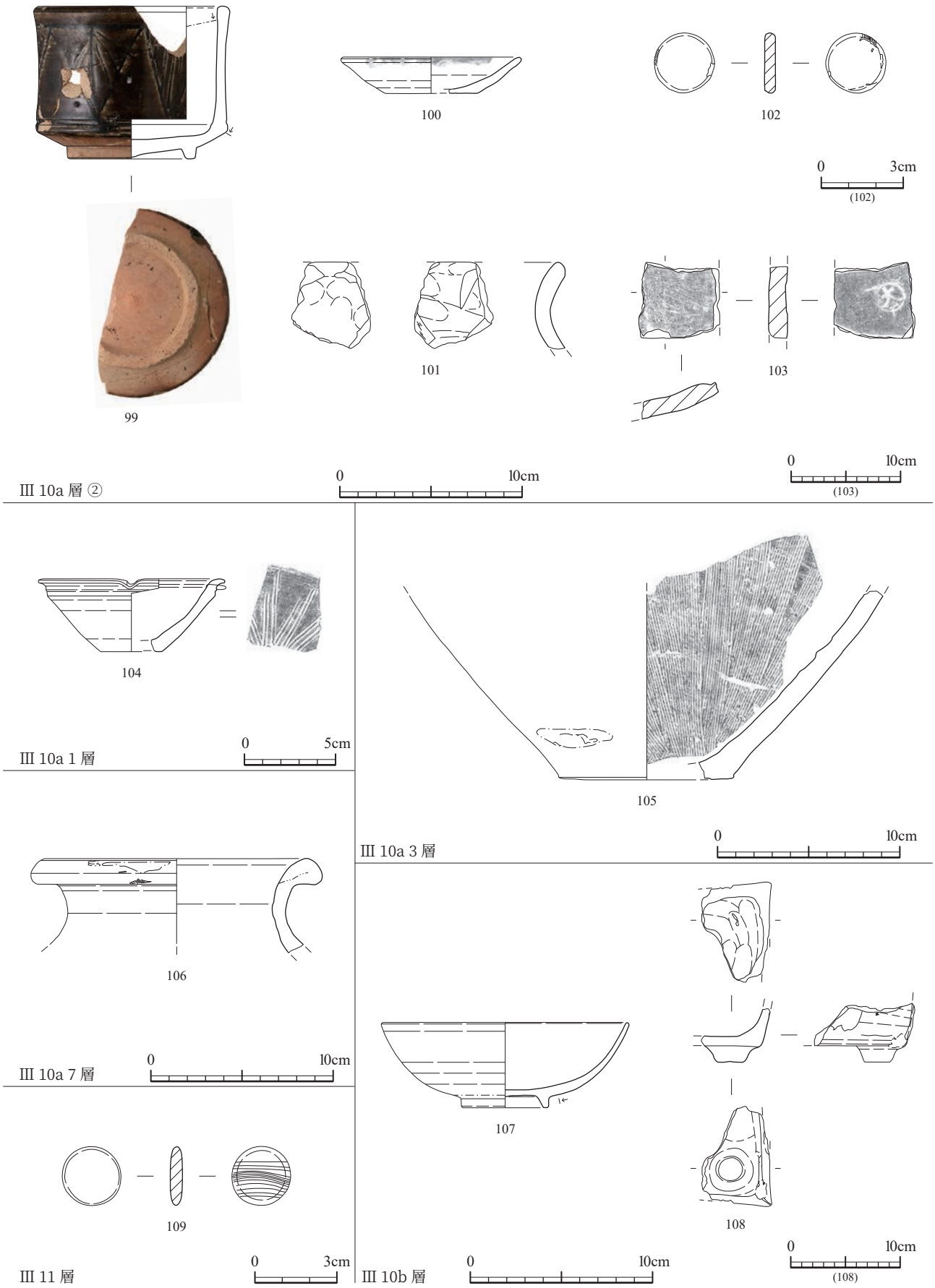
第 154 図　Ⅳ区の出土遺物７



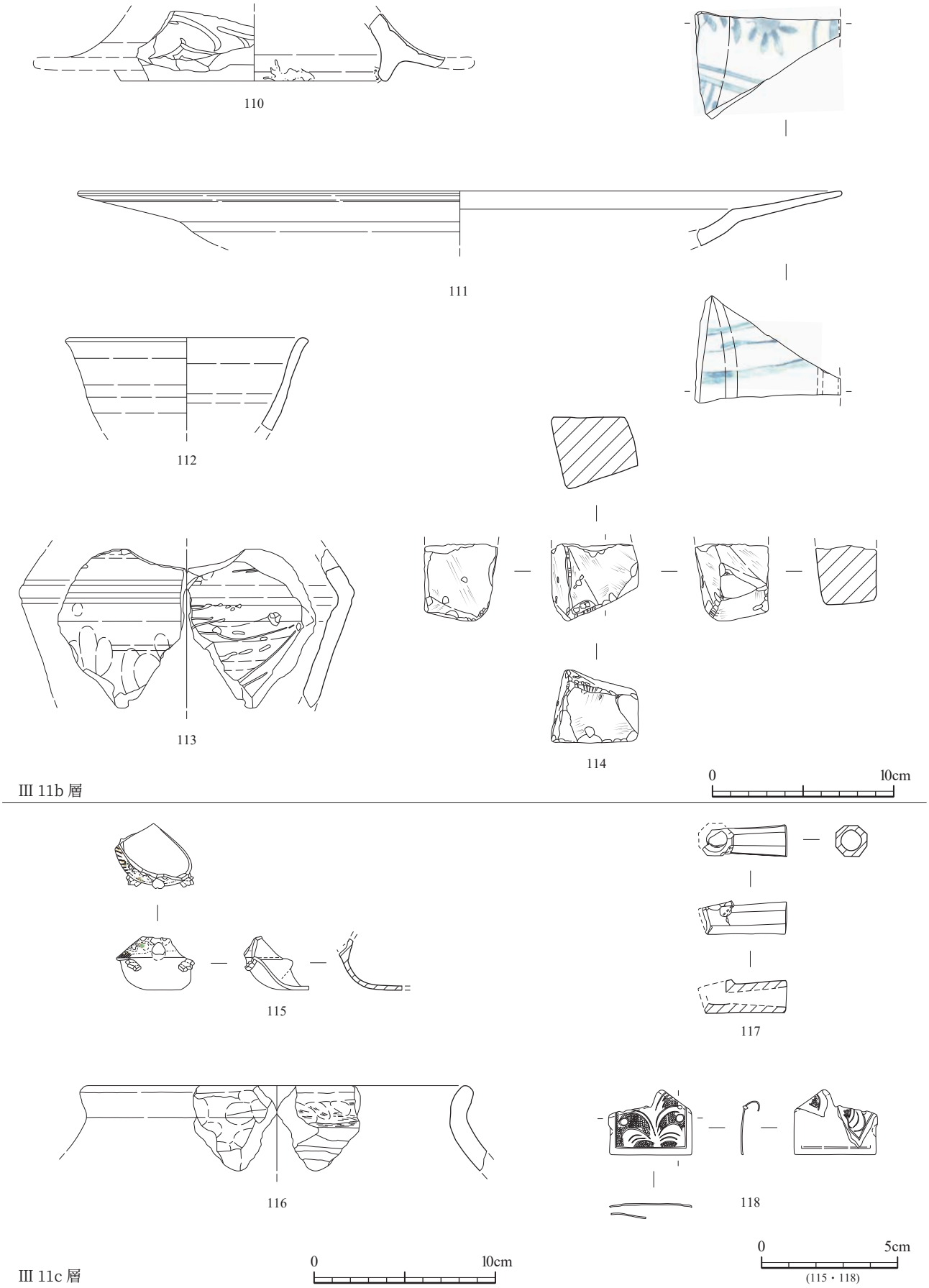
第 155 図　Ⅳ区の出土遺物８



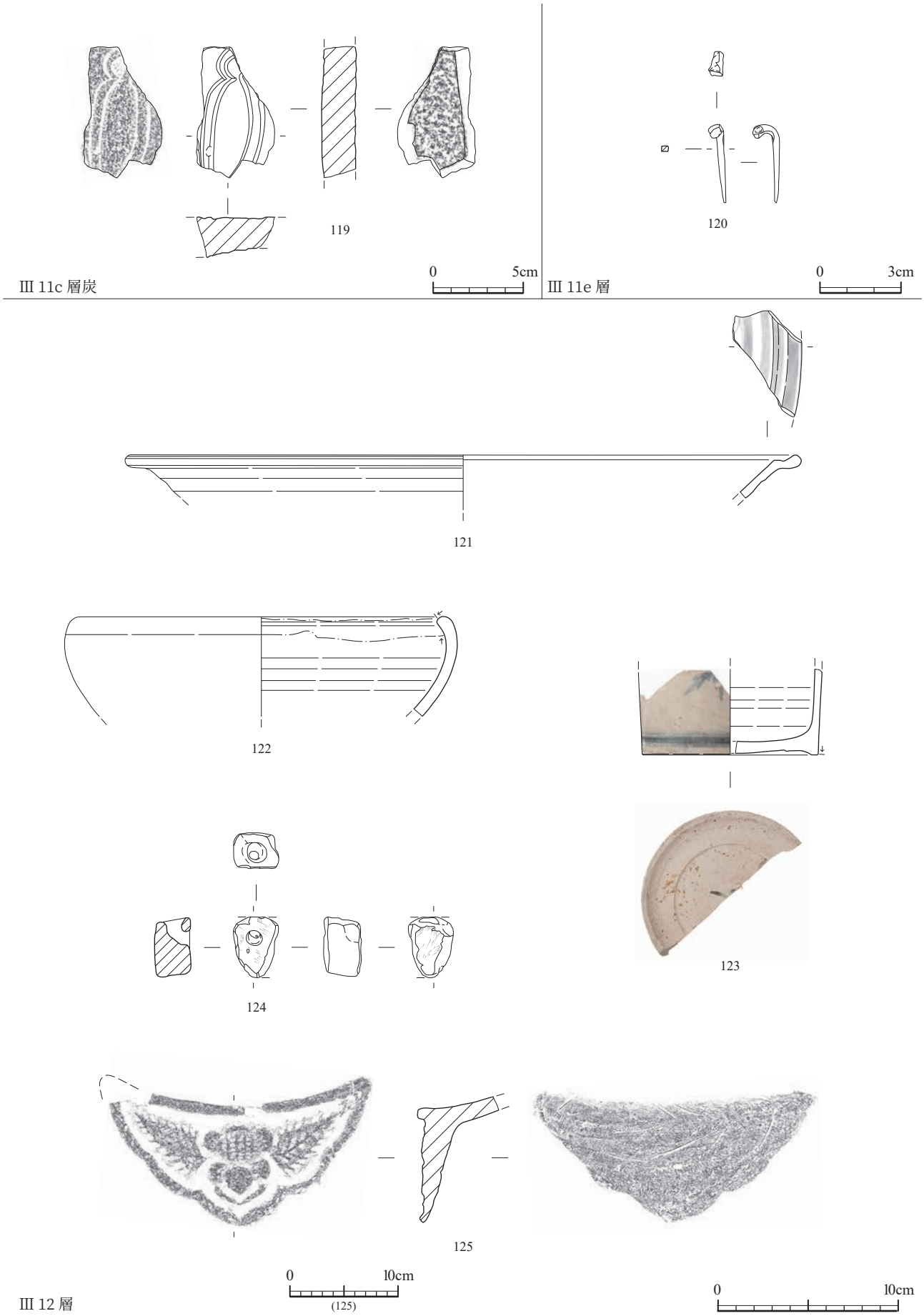
第 156 図　Ⅳ区の出土遺物９



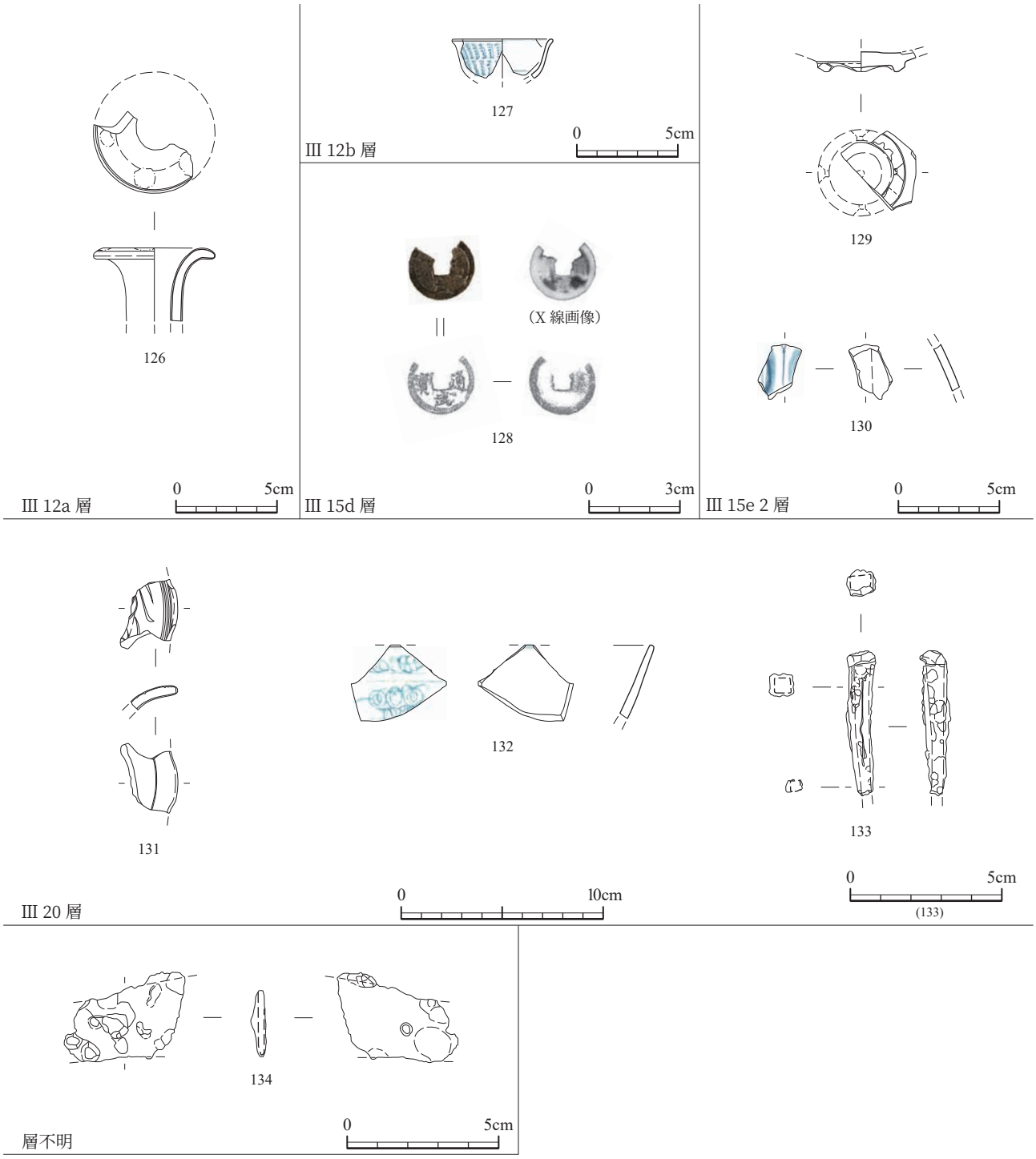
第 157 図　Ⅳ区の出土遺物 10



第 158 図　Ⅳ区の出土遺物 11



第 159 図　Ⅳ区の出土遺物 12



第 160 図　IV区の出土遺物 13

第 30 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 a

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 161 図 図版 15	1	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	口縁部	－	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に不明文様、外面口縁部に花文、ペンシルドローイング。	トレ６ SA5002	
	2	陶質土器	鈴	－	－	－	－	－	胎土は橙色で軟質、白色粒、黒色粒、雲母が混入。胴部中位から下位にかけて鈴口を持つ。	SA5002	１層
	3	中国産白磁	人形	－	－	－	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で外面全面に施釉。人の顔が造られる。	SA5002	３層
	4	中国産青花	碗	福建系	底部	－	－	(7.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面腰部にラマ式蓮弁文、内底に草花文。外底に銘あり。	SA5004	裏込検出
	5	沖縄産施釉陶器	小杯	－	口～底部	(5.0)	(2.55)	(2.2)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で外面口縁部から胴部途中、内面は全面に施釉、外面底部露胎。	SA5004	検出
	6	中国産色絵	小碗	徳化窯系	口縁部	(8.2)	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、口唇部から内面口縁部を釉剥ぎ。文様は外面胴部に青色の草花文。	SA5005 南	クチャ層
	7	本土産染付	碗	磁器碗Ⅲ期	口縁部	(12.0)	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。文様は外面胴部に山水文か。	SA5005 南	クチャ層
	8	沖縄産施釉陶器	小碗	－	口～底部	(9.2)	4.65	3.8	胎土は灰黄色でやや軟質。釉は掛分で外面に褐色釉、内面は白化粧後に透明釉を施釉、畳付釉剥ぎ、内底蛇の目釉剥ぎ。畳付と内底に耐火土付着。	SA5005 南	クチャ層
	9	沖縄産施釉陶器	火炉	－	口縁部	(13.8)	－	－	胎土は灰黄色で堅緻。釉は黄褐色で内外面に施釉。文様は外面胴部に象嵌の花文。	SA5005 南	クチャ層
	10	初期沖縄産 無釉陶器	壺	－	胴部	－	－	－	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒、赤色粒、石英が混入。釉は外面に黒褐色の泥釉を施釉。文様は肩部に沈線。	SA5005 南	クチャ層
	11	初期沖縄産 無釉陶器	水鉢	－	口縁部	(14.0)	－	－	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、赤色粒が混入。外面口唇部から口縁部の一部に自然釉が掛かる。文様は３条１組の波状が２段施文される。	SA5005 南	クチャ層
第 162 図 図版 16	12	初期沖縄産 無釉陶器	人形か	－	－	－	－	－	胎土は浅黄色で軟質、白色粒、石英が混入、白土が筋状になる。釉は褐色で外面に施釉。内面に調整痕あり。	SA5005 南	クチャ～ 裏込層
	13	中国産褐釉陶器	壺	－	底部	－	－	－	胎土は褐灰色でやや堅緻、黒色粒、石英が混入。釉は褐色で内外面に施釉。	トレ 13 SF5001	造成 ２・３
	14	中国産三彩	水滴	－	尾鰭部	－	－	－	魚形水滴か。胎土は浅黄橙色でやや軟質、石英が混入。釉は外面の鱗部分が緑色釉、尾鰭部分は黄色で一部緑色。内面は指頭による調整痕あり。	トレ 13 SF5001	造成 ２・３
	15	明朝系瓦(灰色)	軒丸瓦	－	玉縁部	－	－	－	瓦当は欠損、大きめの玉縁で釘孔あり。玉縁と筒部側端を面取。凸面筒部上端に僅かに漆喰付着。	トレ 13 SF5001	造成 ２・３
	16	中国産白磁	碗		口～底部	(14.5)	4.25	(6.0)	胎土は灰白色でやや軟質。釉はオリーブ灰色で内外面の口縁部から胴部途中まで施釉、外面底部と内底露胎。	トレ 14 SF5001	造成２
	17	中国産白磁	皿	E 群	口～底部	(11.2)	2.2	(6.2)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に砂付着。	トレ 14 SF5001	造成２
	18	中国産青花	皿	C 群 明Ⅱ－２	口～底部	(10.0)	2.8	3.2	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で外面口縁部から胴部下半まで、内面は全面に施釉。文様は外面に波濤文と蕉葉文、内底に簡略化された捻花文。	トレ 14 SF5001	造成２
	19	タイ産鉄絵	合子	－	蓋	(9.9)	－	－	胎土は灰色でやや軟質、白色粒、黒色粒が混入。釉は外面に透明釉を施釉後、裾部を釉剥ぎ。外面に草花文。	トレ 14 SF5001	造成２
第 163 図 図版 16	20	石製品	香炉	－	底部	－	－	－	サンゴ石製。長軸の側面は弧状になる。短軸の側面はほぼ垂直に立ち上がる。外面に線状痕、内面はノミ痕が見られる。	トレ 14 SF5001	造成２
	21	塼瓦	－	Ⅳ類	－	－	－	厚さ 4.05	表面は滑面で、ヘラ描きのある側面も合わせて明赤褐色を呈す。裏面は粗く、胎土と同じく色調は橙色をなす。ヘラ描きは間隔を離して斜線を２条。	トレ 14 SF5001	造成２
	22	中国産白磁	壺	－	底部	－	－	(5.9)	胎土はやや堅緻。釉は灰白色で内面と外面胴部途中まで施釉、外面底部露胎。ロクロ痕顕著。	トレ 14 SF5001	造成２ 炭
	23	タイ産鉄絵	合子	－	口縁部	(8.4)	－	－	合子の身。胎土は浅黄色で軟質、黒色粒が混入。釉は灰白色で外面と内面に施釉、口唇部釉剥ぎ、内面の一部が露胎。文様は外面に格子文と圏線。	トレ 14 SF5001	造成２ 炭
	24	土器	壺	－	口縁部	(13.4)	－	－	胎土に石灰岩片、白砂が混入。内面胴部に指ナデ調整、内外面口縁部に指頭痕。外面口縁部と胴部下半に煤付着。パナリ焼きか。	トレ 14 SF5001	造成２ 炭
第 164 図 図版 16	25	中国産青磁	蓋	－	胴～袴部	庇径 (16.6)	－	袴径 (14.4)	酒会壺の蓋。胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明オリーブ灰色で外面胴部に施釉。	トレ 14 SF5001	造成 ２・３
	26	中国産白磁	灯明皿	D 群	口～底部	(8.8)	2.25	(4.4)	胎土は淡黄色で軟質。釉は灰白色で内面から外面口縁部まで施釉。外面胴部あたりまで釉ダレあり。以下露胎。口唇部釉剥ぎ。口縁部に煤付着。	トレ 14 SF5001	造成 ２・３
	27	中国産色絵	皿	景徳鎮窯系	口縁部	(13.0)	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面胴部に喜字文、草花文。	トレ 14 SF5001	造成 ２・３
	28	中国産褐釉陶器	擂鉢	－	口縁部	－	－	－	胎土はにぶい赤褐色でやや軟質、石英粒が混入。釉は褐色で口縁内側から外面に施釉。内面胴部は露胎。内面に僅かに擂目が残る。	トレ 14 SF5001	造成 ２・３
	29	中国産白磁	皿	－	口縁部	(16.5)	－	－	胎土は淡黄色で軟質、黒色粒が混入。釉は灰白色で内外面に施釉。口縁部を波状に成形。	トレ 15 SF5001	造成 ２・３
	30	中国産青花	碗	C’群 明Ⅱ－３	口縁部	(15.0)	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に唐草文。	先行西壁 SF5001	造成 SD5001

第 31 表　Ｖ区出土遺物観察一覧ｂ

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 164 図 図版 16	31	貝製品	貝玉	マガキガイ Ⅰ類	―	縦 5.2	横 3.1	―	貝玉製作途中の未製品。ほぼ完形。	トレ６ SL5001	検出
	32	産地不明土器	蓋	―	―	(22.3)	―	―	胎土は浅黄橙色で軟質、赤色粒が混入。内面に種子類の圧痕か。	トレ１ SM5002	１層
	33	貝製品	貝玉	マガキガイ Ⅲ類	―	縦 2.05	横 2.7	―	貝玉製作途中の未製品。体層部に打割が見られ、螺軸上部を水平に加工。	トレ１ SM5002	３層
	34	中国産青磁	碗	Ｖ類	底部	―	―	(6.7)	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉、外底釉剥ぎ。文様は内外面胴部にヘラ書きによる唐草文、内底に印花文。	トレ１ SP5038	１層
	35	貝製品	貝玉	マガキガイ Ⅳ類	―	縦 1.4	横 2.3	―	貝玉製作途中の未製品。螺軸面と体層の打割面を水平方向に研磨。	トレ１ SS5002	１層
第 165 図 図版 16	36	高麗系瓦	平瓦	―	筒部	―	―	―	凸面に「癸酉年高麗瓦匠造」と思われる銘を鏡写しで重なるように打捺。銘の下に羽状文。凹面には糸切痕と布目痕、側面に切込み面が残る。	トレ１ SX5004	１層
	37	円盤状製品	―	―	―	縦 7.2	横 7.1	厚さ 2.1	中国産青磁碗の底部を加工。内外面からの打割。	トレ１ SX5004	半截
	38	本土産近代磁器	皿	―	底部	―	―	(8.0)	胎土は白色で堅緻。釉は内外面に透明釉を施釉、外底凹面以外を蛇の目釉剥ぎ。文様は内面に型紙摺りによる文様。外底蛇の目凹形高台。	SX5005	
	39	骨製品	ボタン	―	完形	縦 1.5	横 1.5	厚さ 0.3	表面は平坦、裏面は凸面になる。全面研磨され光沢を持つ。中央部に５点の孔を穿つが、中心の孔は貫通していない。	トレ 14 SX5007	１層
	40	中国産青磁	皿	Ｖ－０類	口～底部	(13.2)	3.7	(6.8)	胎土は灰白色と一部淡黄色と明褐色でやや軟質、白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内面と外底の一部まで厚く施釉、外底の中央は露胎。		Ⅰ層
	41	中国産青磁	盤	―	口～底部	(30.2)	5.5	(14.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面施釉後、外底釉剥ぎ。文様は外面に蓮弁文、内面は口縁部下に２条の波状文、胴部から内底にかけて草花文。内面に蓮弁文。		Ⅰ層
	42	中国産白磁	燭台	徳化窯系	底部	―	―	(3.4)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、外底釉剥ぎ。		Ⅰ層
	43	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	底部	―	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面に山水文か。		Ⅰ層
	44	中国産青花	皿	Ｂ１群 Ⅱ－１	底部	―	―	(6.0)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面に不明文様、内面に草花文か。景徳鎮窯系。		Ⅰ層
	45	中国産青花	皿	徳化窯系	底部	―	―	(7.1)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内面に草花文と花卉文、外底に不明文様。		Ⅰ層
	46	中国産青花	皿	Ｅ群 Ⅲ類	底部	―	―	(5.4)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面に不明文様、内面に鳳凰文と草花文か。外底に「宣徳□造」の銘あり、「宣徳年造」か。景徳鎮窯系。		Ⅰ層
第 166 図 図版 17	47	中国産青花	杯	景徳鎮窯系	口縁部	(5.6)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に不明文様。		Ⅰ層
	48	中国産青花	杯	―	口縁部	(5.4)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、口銹。文様は外面に山水文。		Ⅰ層
	49	中国産青花	小杯	景徳鎮窯系	底部	―	―	(1.5)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉されるが、劣化が見られる。文様は外面に渦巻帯文と蕉葉文。		Ⅰ層
	50	中国産青花	瓶	景徳鎮窯系	口縁部	(6.0)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に蕉葉文。		Ⅰ層
	51	中国産青花	瓶	景徳鎮窯系	胴部	―	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面上段に蓮弁文か、中段に双頭文、下段に唐草文か。		Ⅰ層
	52	中国産青花	馬上杯	漳州窯系	底部	―	―	(3.7)	胎土は浅黄橙色で軟質、白色粒が混入。釉は明緑灰色で外面脚部施釉、畳付から外底露胎。高台内側に一部釉が掛かる。文様は外面に不明文様。		Ⅰ層
	53	中国産色絵	碗	徳化窯系	口縁部	(11.0)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に赤色で腰部に蓮弁文、胴部に淡黄色と青色で区画分けされた斜格子文、口縁部下に蓮弁文か。		Ⅰ層
	54	中国産三彩	盤	―	口縁部	―	―	―	胎土は黄橙色で軟質、褐色粒と白色粒が混入。釉は緑釉で白化粧後に内外面施釉。		Ⅰ層
	55	中国産褐釉陶器	壺	―	口縁部	(19.0)	―	―	胎土はにぶい黄橙色で軟質、黒褐色粒と白色粒が混入。釉は褐色で内外面施釉。口縁部は貼り付けにより平坦。		Ⅰ層
	56	中国産褐釉陶器	壺	―	口縁部	(12.9)	―	―	胎土は暗赤褐色と一部赤色でやや堅緻、白色粒が多量に混入。釉は褐色で内外面施釉。		Ⅰ層
	57	中国産褐釉陶器	壺	―	口縁部	(16.6)	―	―	胎土は明褐色でやや軟質、白色粒が混入、白土が筋状になる。無釉。外面に格子状の叩き痕あり。		Ⅰ層
	58	中国産褐釉陶器	壺	―	口縁部	(9.2)	―	―	胎土は黒褐色でやや軟質、白色粒が混入。釉は褐色で外面と内面口縁部まで施釉。内面肩部は露胎。		Ⅰ層
	59	中国産褐釉陶器	壺	―	口縁部	(10.4)	―	―	胎土は灰白色でやや軟質、白色粒が混入。釉は褐色で外面と内面口縁部まで施釉、内面肩部は露胎。		Ⅰ層
	60	中国産褐釉陶器	壺	―	底部	―	―	(14.5)	胎土は灰白色と一部橙色でやや堅緻、白色粒と黒色粒が混入。釉は褐色で内面と外面胴部まで施釉、外底露胎。		Ⅰ層

※ 46：欠損している部分の文様は□で示した。

第 32 表　Ｖ区出土遺物観察一覧 c

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 166 図 図版 17	61	タイ産半練土器	蓋	－	撮	－	3.85	－	胎土は褐灰色と一部灰白色と浅黄橙色で軟質、白色粒と黒色粒が混入。		Ⅰ層
	62	西洋陶器	皿	－	底部	－	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は透明で内外面施釉。外底に星のマークと「Super…」の文字。		Ⅰ層
	63	本土産染付	皿	磁器皿Ⅴ期	口～底部	(15.2)	4.0	(8.8)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰白色で内外面施釉。文様は外面は唐草文、内面は区画と山水文。		Ⅰ層
	64	本土産色絵	碗	Ⅲ期	口縁部	(9.0)	－	－	胎土は灰白色でやや軟質。釉は透明釉で内外面施釉。文様は外面に口縁部と胴部に銅緑釉で太い圏線、圏線内に銅緑釉と赤色の不明文様。		Ⅰ層
第 167 図 図版 17	65	本土産陶器	碗	陶器碗 Ⅲ～Ⅳ期	口縁部	(11.0)	－	－	胎土は浅黄色でやや軟質、黒色粒が混入。釉は外面銅緑釉、内面灰白色釉を施す。		Ⅰ層
	66	本土産陶器	碗	陶器碗 Ⅲ～Ⅳ期	底部	－	－	(4.4)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は白色で内外面施釉。畳付に砂付着。		Ⅰ層
	67	本土産陶器	碗	陶器碗Ⅳ期	底部	－	－	(4.2)	胎土は灰白色でやや軟質、褐色粒と黒色粒が混入。釉は外面に銅緑釉を高台途中まで施釉。内面に灰白色釉を施釉。底部露胎。		Ⅰ層
	68	本土産陶器	碗	陶器碗Ⅲ期	底部	－	－	(3.4)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は透明で内面と外面胴部まで施釉、底部露胎。貫入あり。		Ⅰ層
	69	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅳ～Ⅴ期	底部	－	－	(12.7)	胎土は赤灰色でやや軟質、黒色粒が混入。釉は外面ににぶい赤褐色釉、内面に透明釉と緑色釉を施す、底部露胎。文様は内面に白土で４条の圏線と刷毛目文、鉄絵の草花文か。		Ⅰ層
	70	本土産陶器	鉢	薩摩系	口縁部	(32.0)	－	－	胎土は暗赤灰色と赤色で、白色粒と明褐灰色粒が混入。釉は黒色で内外面施釉、口唇部釉剥ぎ。口唇部に目痕あり。		Ⅰ層
	71	本土産陶器	擂鉢	備前系	口縁部	(26.8)	－	－	胎土はにぶい赤褐色でやや堅緻、白色粒が混入。		Ⅰ層
	72	沖縄産施釉陶器	碗	－	口～底部	(13.8)	6.7	(6.8)	胎土は浅黄橙色でやや軟質、白色粒と黒色粒が混入。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉、畳付釉剥ぎ、内底蛇の目釉剥ぎ、外面の施釉状況が不良。文様は外面に草花文。		Ⅰ層
	73	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅰ類	底部	－	－	(6.7)	胎土は灰白色で堅緻、黒褐色粒が混入。釉は明オリーブ色で内外面胴部まで施釉、内底と底部露胎。内底と外底に砂付着。		Ⅰ層
	74	沖縄産施釉陶器	小碗	－	口～底部	(8.5)	4.45	(3.9)	胎土はにぶい黄橙色でやや軟質、白色粒と黒色粒が混入。釉は外底を除く全面に白化粧後、透明釉を施釉、畳付釉剥ぎ、内底蛇の目釉剥ぎ。貫入あり。		Ⅰ層
	75	沖縄産施釉陶器	小碗	－	底部	－	－	(4.0)	胎土は褐灰色と一部浅黄橙色でやや軟質、黒色粒が混入。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉、畳付釉剥ぎ、外面面取り。内底蛇の目釉剥ぎ。貫入あり。		Ⅰ層
	76	沖縄産施釉陶器	皿	－	口縁部	(13.2)	－	－	胎土は灰白色で一部淡黄色でやや軟質、黒色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面ともに胴部途中まで施釉。		Ⅰ層
	77	沖縄産施釉陶器	小杯	－	口～底部	(4.8)	2.6	2.2	胎土は灰白色で堅緻、黒色粒が混入。釉は透明釉を内面と外面高台まで施釉、高台の一部と底部露胎。		Ⅰ層
	78	沖縄産施釉陶器	盃杯	－	底部	(2.7)	－	－	胎土は灰白色と一部黄橙色でやや軟質、黒色粒が混入。釉は灰白色で内面に施釉。外面露胎。		Ⅰ層
	79	沖縄産施釉陶器	瓶	－	口縁部	(3.4)	－	－	胎土は灰赤色でやや軟質、白色粒と黒色粒が混入。釉は口縁内側から外面頸部に黒褐色、肩部からオリーブ褐色の釉を施釉。内面頸部露胎。		Ⅰ層
第 168 図 図版 17	80	沖縄産施釉陶器	鉢	－	底部	－	－	(8.3)	胎土は灰白色でやや軟質、白色粒と黒色粒が混入。釉は内面に白化粧後に灰白色釉を、外面は黒褐色釉を施釉、畳付釉剥ぎ、内底蛇の目釉剥ぎ。内底に重ね焼きの痕あり。		Ⅰ層
	81	沖縄産施釉陶器	火取	－	底部	－	－	(7.9)	胎土は浅黄橙色で堅緻、黒色粒が混入。釉は褐色で沈線を引いた後外面腰部まで施釉。底部と内面露胎。文様は外面に斜沈線文。外底に墨書あり。		Ⅰ層
	82	沖縄産施釉陶器	灯明具	－	底部	－	－	(6.1)	胎土はにぶい橙色でやや軟質、白色粒が混入。釉は灰オリーブ色で内面と外面胴部途中まで施釉、外底露胎。内底に目痕あり。		Ⅰ層
	83	初期沖縄産 無釉陶器	瓶	－	底部	－	－	－	胎土は暗赤褐色で堅緻、浅黄橙色粒と白色粒が混入。釉は黒褐色で外面と内面の一部に掛かる。		Ⅰ層
	84	初期沖縄産 無釉陶器	擂鉢	－	口縁部	(26.8)	－	－	胎土は暗赤褐色で堅緻、白色粒が混入。釉は暗赤色で外面に掛かる。ロクロ成形。		Ⅰ層
	85	初期沖縄産 無釉陶器	水鉢	－	口縁部	(23.0)	－	－	胎土は赤褐色で堅緻、白色粒が混入。釉は自然釉が外面に掛かる。文様は外面胴部に２～４条１組の波状文。		Ⅰ層
	86	初期沖縄産 無釉陶器	甕	－	口縁部	－	－	－	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒、赤色粒が混入。釉は内外面に泥釉を施釉。文様は外面口縁部に波状突帯、胴部に縄目状突帯文。		Ⅰ層
	87	初期沖縄産 無釉陶器	香炉	－	底部	－	－	－	胎土は灰色と赤橙色でやや堅緻、白色粒が混入、白土が筋状になる。釉は浅黄色で外面施釉。脚を成形する際の芯と思われる部分が、割れにより内底と脚側面で確認できる。		Ⅰ層
	88	初期沖縄産 無釉陶器	香炉	－	底部	－	－	(11.4)	胎土は暗赤色でやや軟質、白色粒が混入。脚の付け根に顕著なナデ調整あり。ロクロ成形。		Ⅰ層
	89	初期沖縄産 無釉陶器	灯明皿	－	口～底部	(10.2)	3.05	(3.9)	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒、赤色粒が混入。釉は外面胴部の一部に自然釉が掛かる。		Ⅰ層
	90	沖縄産無釉陶器	壺	－	口縁部	(21.9)	－	－	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、黒色粒が混入。釉は外面口縁部か胴部の一部に自然釉が掛かる。		Ⅰ層

第 33 表　Ｖ区出土遺物観察一覧 d

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 169 図 図版 17	91	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	口縁部	(26.0)	－	－	胎土は赤色でやや軟質、白色粒が混入。擂目を密に施す。		Ⅰ層
	92	沖縄産無釉陶器	水鉢	－	口縁部	(26.4)	－	－	胎土は赤褐色でやや軟質、白色粒が混入。釉はにぶい赤褐色で外面胴部途中まで掛かる。文様は口縁部下に８～９条組の波状文。		Ⅰ層
	93	沖縄産無釉陶器	甕	－	口縁部	(47.0)	－	－	胎土は赤褐色と一部赤橙色と黒褐色でやや軟質、白色粒が混入。自然釉が内面の一部に掛かる。文様は外面胴部に不明文様。		Ⅰ層
	94	陶質土器	水鉢	－	口縁部	(14.8)	－	－	胎土は灰色と一部橙色でやや軟質、白色粒を混入。文様は胴部に４～６条１組の波状文。		Ⅰ層
	95	陶質土器	鍋	－	口縁部	(25.0)	－	－	胎土はにぶい橙色で軟質、雲母、赤色粒が混入。外面口縁部に煤付着。		Ⅰ層
	96	石製品	器種不明	－	－	縦 5.15	横 4.35	厚さ 3.0	孔は自然にできたものだが、孔の周りは人為的に擦られている。		Ⅰ層
	97	石製品	石臼	－	－	(34.4)	－	－	下臼と受け皿が一体化したものか。上臼との接地面は平坦だが、側面は凹凸が見られる。		Ⅰ層
第 170 図 図版 18	98	骨製品	歯ブラシ	－	柄	縦残存 (5.4)	横 1.05	厚さ 0.4	牛骨製。端部に孔が穿たれる。「TRADE T.N M…」の文字、「T.N」はひし形の圏線内にかかれており、「M…」は「MARK」が書かれていたと思われる。		Ⅰ層
	99	骨製品	半環状製品	－	－	縦残存 (2.55)	横 3.5	厚さ 0.6	ウシの四肢骨の骨幹部を使用。表面と短軸の切断面は磨かれ光沢を持つ、長軸の切断面にノコギリの切断痕が残る。		Ⅰ層
	100	円盤状製品	－	－	－	縦 7.05	横残存 (5.4)	厚さ 1.55	中国産青磁の皿の底部を加工。内外面から打割。		Ⅰ層
	101	円盤状製品	－	－	－	縦 2.9	横 2.6	厚さ 0.6	中国産褐釉陶器製。内外面から打割。		Ⅰ層
	102	円盤状製品	－	－	－	縦 2.9	横 2.85	厚さ 0.4	沖縄産施釉陶器製。内外面から打割。		Ⅰ層
	103	円盤状製品	－	－	－	縦 6.95	横 7.6	厚さ 1.75	沖縄産無釉陶器製。内外面から打割。		Ⅰ層
	104	銭貨	－	(古)寛永通寶	－	外径 2.5	孔径 0.56	厚さ 0.14	寛永通寶。古寛永（１期：1636 年)。背面無文。		Ⅰ層
	105	銭貨	－	(新)寛永通寶	－	外径 2.32	孔径 0.62	厚さ 0.13	寛永通寶。新寛永（３期：1697 年)。背面無文。		Ⅰ層
	106	銭貨	－	朝鮮通寶	－	外径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.21	朝鮮通寶（初鋳：1423 年)。背面無文。		Ⅰ層
	107	玉類	玉	Ⅱ類	－	外径 0.45	高さ 0.32	孔径 0.13	色調は緑色。表面は細かいアバタ状を呈す。		Ⅰ層
	108	窯道具	トチン	－	－	－	4.1	6.2	胎土は灰色で軟質。内外面は褐色に釉化する。上面に糸切痕あり。外底に砂付着。		Ⅰ層
	109	高麗系瓦	平瓦	－	筒部	－	－	－	凸面に交差して重なるように羽状打捺文が施される。凹面に糸切り痕と布目痕が残る。		Ⅰ層
	110	高麗系瓦	平瓦	－	筒部	－	－	－	凸面に「癸酉年高麗瓦匠造」と思われる銘と、羽状文を重なるように打捺する。凹面に糸切り痕と布目痕、側面に切込み面が残る。		Ⅰ層
第 171 図 図版 18	111	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ⅰ－Ⅰ－A	瓦当	－	－	－	笵バリが顕著で、丸瓦部がずれて瓦当に接合されている。瓦当裏はナデによる凹凸がみられる。		Ⅰ層
	112	明朝系瓦(灰色)	丸瓦	A	玉縁部	－	－	－	玉縁に縦位３本、横線１本のヘラ描きを施す。玉縁側面、上端面も面取りされ、玉縁端面は断面形台形になる。		Ⅰ層
	113	明朝系瓦	平瓦	－	広端部	－	－	－	硬質・陶器質。色調は表面が灰色、胎土はにぶい赤褐色を呈する。凸面はナデによる横位の線状痕、凹面に５列の桶板留紐圧痕が残存。		Ⅰ層
	114	塼瓦	－	Ⅶ類	－	－	－	厚さ 10.0	全体的に灰色を呈する。どの面も粗目で、胎土に白砂を多く含む。		Ⅰ層
第 172 図 図版 18	115	初期沖縄産 無釉陶器	香炉	－	口～底部	－	10.1	－	胎土は黒褐色と一部暗赤褐色でやや軟質、白色粒と黒色粒が混入、白土が筋状になる。内面胴部と外底の脚の付け根にナデ痕あり。		Ⅱ層
	116	初期沖縄産 無釉陶器	蓋	－	庇部	庇径 (10.2)	－	－	胎土はにぶい赤褐色で堅緻、白色粒が混入、白土が筋状になる。ロクロ成形。		Ⅱ層
	117	中国産白磁	皿	D 群	口～底部	－	－	－	胎土は浅黄色で軟質、白色粒が混入。釉は灰白色で内外面施釉、外面一部露胎。抉り高台。内底に窯詰め痕。	トレ 14 西	Ⅱ層
	118	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	－	－	4.6	胎土は灰白色で堅緻。釉は明オリーブ灰色で内面と外面高台内側まで施釉。外底露胎。文様は内底に印花文、印花文の中心に「徳」という文字。		Ⅱ２層
	119	円盤状製品	－	－	－	縦 7.6	横 6.1	厚さ 1.1	中国産青磁の碗の底部を加工。内外面から打割。周縁部分は一部研磨される。		Ⅱ２層
	120	中国産青磁	皿	－	底部	－	－	(6.6)	胎土は灰白色でやや堅緻、白色粒が混入。釉は明オリーブ灰色で内面と外面高台まで施釉、底部露胎。		Ⅱ３層

第 34 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 e

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 172 図 図版 18	121	中国産白磁	皿	E 群	口～底部	(13.2)	2.9	(7.7)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。景徳鎮窯系。		Ⅱ３層
	122	中国産三彩	水注	―	胴部	―	―	―	胎土は浅黄橙色でやや軟質、白色粒が混入。釉は灰白色釉、緑釉、黄釉で外面施釉、内面露胎。鴨形三彩で、鴨を彩色するように緑釉と黄釉を施す。		Ⅱ３層
	123	タイ産褐釉陶器	鉢	―	底部	―	―	(9.4)	胎土は灰白色でやや軟質、白色粒、黒色粒が混入。釉は黒褐色で外面は胴部途中、内面は全面に施釉。底部は碁笥底状。		Ⅱ３層
	124	本土産陶器	皿	陶器皿Ⅲ期	底部	―	―	6.6	胎土は白色で軟質、黒褐色粒が混入。釉は内面銅緑釉、外面透明釉を内面と外面途中まで施釉後、内底蛇の目釉剥ぎ、底部露胎。内底に目痕あり。		Ⅱ３層
	125	沖縄産施釉陶器	皿	―	底部	―	―	(5.2)	胎土は灰白色と一部浅黄橙色でやや堅緻、黒色粒が混入。釉は灰白色で外面胴部途中まで施釉、内底と底部露胎、また内底の一部に釉が垂れる。		Ⅱ３層
	126	玉類	玉	Ⅱ類	―	外径 0.4	高さ 0.2	孔径 0.2	色調は緑色。孔が大きめ。らせん状の筋が明瞭に観察できる。		Ⅱ３層
第 173 図 図版 18	127	沖縄産施釉陶器	小杯	―	口～底部	(5.4)	2.9	(2.4)	胎土は灰白色でやや堅緻、白色粒が混入。釉は透明で内面と外面胴部まで施釉、一部高台に釉が垂れる。底部露胎。		Ⅱ３b 層下
	128	金属製品	簪	―	竿部	縦残存 (5.3)	―	厚さ 0.35	竿は四角柱。		Ⅱ３b 層下
	129	中国産青磁	碗	Ⅶ類	口縁部	―	―	―	胎土は灰白色でやや軟質。釉はオリーブ灰色で内外面施釉。文様は外面に波状文に退化した雷文。		Ⅱ３c 層
	130	中国産青花	小杯	徳化窯系	底部	―	―	(1.9)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に砂付着。		Ⅱ３c 層
	131	玉類	玉	Ⅲ類	―	外径 0.35	高さ 0.4	孔径 0.15	色調は緑色。短いバネ状を呈する。巻き付け技法で製作されたと考えられる。		Ⅱ３c 層
	132	陶質土器	鉢	―	底部	―	―	(7.8)	胎土は灰褐色と橙色でやや軟質、白色粒が混入。外底に糸切痕あり。		Ⅱ４層
	133	中国産白磁	小碗	徳化窯系	底部	―	―	(4.0)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に砂付着。	トレ６	Ⅱ４層
	134	中国産白磁	皿	E 群	口～底部	(8.1)	2.0	(4.4)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。口銹。菊花皿。	トレ６	Ⅱ４層
	135	陶質土器	蓋	―	撮	撮径 (5.9)	―	―	胎土は橙色で軟質、白色粒が混入。	トレ６	Ⅱ４層
	136	沖縄産施釉陶器	燭台	―	口～底部	(5.2)	5.6	5.2	胎土は褐灰色で堅緻。釉は褐色で外底を除く全面に施釉。外底に糸切痕。		Ⅱ６層
	137	陶質土器	水鉢	―	口縁部	(20.4)	―	―	胎土は橙色で軟質、雲母、赤色粒が混入。文様は外面口縁部に３～４条の波状文。		Ⅱ８層
	138	中国産褐釉陶器	鉢	―	口縁部	(39.4)	―	―	胎土は灰黄色でやや堅緻、石英粒、黒色粒が混入。釉は黒褐色で内面と外面に施釉。一部口縁内側から外面にかけて露胎。		Ⅱ 10 層下瓦層
	139	中国産青磁	盤	―	口縁部	(19.4)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面を厚く施釉。		Ⅲ層
	140	中国産青花	杯	徳化窯系	口～底部	(5.6)	4.6	(2.7)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉、畳付釉剥ぎ。文様は外面に草花文。		Ⅲ層
	141	中国産白磁	碗	F 群	口縁部	(12.0)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で外面と内面胴部途中まで施釉、内面胴部途中から露胎。	トレ８	Ⅲ層
第 174 図 図版 19	142	中国産青磁	碗	Ⅵ－１類	口縁部	(13.2)	―	―	胎土は灰白色と一部黄橙色でやや軟質。釉は明オリーブ灰色で内外面施釉。文様は外面に線刻蓮弁文。貫入あり。	トレ 11	Ⅲ層
	143	中国産青磁	皿	景徳鎮窯系	口～底部	(12.7)	2.85	(6.0)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉、高台内を明緑灰色を施釉、畳付釉剥ぎ。菊花皿。	トレ 11	Ⅲ層
	144	中国産色絵	皿	景徳鎮窯系	底部	―	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面赤色で不明文様、内面赤色と明オリーブ灰色、暗オリーブ灰色で不明文様。	トレ 11	Ⅲ層
	145	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	―	―	―	玉縁上端面に２条のヘラ描き。凸面の玉縁と筒部上端にナデによる横位の凹線がみられる。凹面に布糸綴り痕。	トレ 11	Ⅲ層
	146	中国産青磁	香炉	―	口縁部	(12.6)	―	―	胎土は灰白色で堅緻、黒色粒が混入。釉はオリーブ灰色で口縁内側から外面に施釉。内面口縁部下は露胎。		Ⅲ１層
	147	中国産白磁	碗	―	口縁部	(12.2)	―	―	胎土は灰白色、一部にぶい橙色でやや軟質、白色粒が混入。釉は明オリーブ灰色で内外面口縁部から胴部途中まで施釉。		Ⅲ１層
	148	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	底部	―	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉、以下露胎。文様は外面に不明文様。外底に「○○成○○製」という銘あり、「大明成化年製」か。		Ⅲ１層
	149	中国産翡翠釉	皿	―	口縁部	―	―	―	胎土は灰白色で軟質、黒色粒が混入。釉は翡翠釉で内外面施釉しているが、内面の一部は剥離が見られる。		Ⅲ１層
	150	初期沖縄産 無釉陶器	擂鉢	―	口縁部	―	―	―	胎土は赤褐色と一部赤橙色でやや軟質、白色粒が混入、白土が筋状になる。釉は暗赤褐色で外面に施釉。擂目は４条１組。		Ⅲ１層

第 35 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 f

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 174 図 図版 19	151	石製品	石球	－	完形	縦 4.8	横 5.1	－	砂岩製の石球。いびつな球形を呈す。被熱痕あり。		Ⅲ１層
	152	玉類	玉	Ⅲ類	－	外径 0.35	高さ 0.4	孔径 0.2	色調は青色。短いコイル状を呈する。らせん状の筋が明瞭に観察できる。巻き付け技法で製作されたと考えられる。		Ⅲ１層
第 175 図 図版 19	153	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ⅰ－Ⅰ－Ａ	瓦当	－	－	－	笵バリあり。瓦当割れ面より、丸瓦部の接合部が露出。瓦当裏はナデにより粗く凹凸を呈し、手形も残る。		Ⅲ１層
	154	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	Ⅰ－Ⅰ－Ｂ	瓦当	－	－	－	瓦当文様が明瞭に残る。瓦当裏にはやや斜位に２条の削痕。		Ⅲ１層
	155	明朝系瓦(灰色)	丸瓦	Ａ	玉縁部	－	－	－	玉縁に十字のヘラ描き印が施され、凹面に皺の多い布目痕。		Ⅲ１層
	156	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	Ａ	玉縁部	－	－	－	玉縁に縦位４本のヘラ描き印あり。凹面に横位１条の布糸綴り痕。		Ⅲ１層
第 176 図 図版 19	157	宮古式土器	壺	－	口縁部	－	－	－	胎土に白砂、赤色粒が混入。外面胴部と内面口縁部を磨き調整。	トレ６	Ⅲ１層
	158	中国産青花	碗	Ｄ群 明Ⅱ－２	口～底部	(12.7)	6.0	(5.6)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面口縁部に波濤文、胴部に如意頭唐草文、内底に不明文様。景徳鎮窯系。		Ⅲ２層
	159	中国産青花	碗	Ｄ群 明Ⅱ－２	底部	－	－	(5.2)	胎土は灰白色と一部橙色でやや堅緻、白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面に不明文様、内面に花芯文か。景徳鎮窯系。		Ⅲ２層
	160	中国産青花	筒碗	Ｄ群 明Ⅱ－２	底部	－	－	(5.6)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部と内底に列点文。		Ⅲ３層
	161	中国産青花	皿	Ｂ１群 明Ⅰ－１	底部	－	－	(10.0)	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内面圏線内に玉取獅子文。景徳鎮窯系。		Ⅲ３層
	162	中国産青花	皿	Ｅ群 明Ⅲ類	底部	－	－	(8.9)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内外面に草花文。外底に銘あり。景徳鎮窯系。		Ⅲ３層
	163	中国産青花	瓶	徳化窯系	底部	－	－	(6.8)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で外面胴部に施釉、外面底部と内面露胎。文様は外面胴部に不明文様。		Ⅲ３層
	164	中国産翡翠釉	小皿	－	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色でやや軟質。釉は全面白化粧後に翡翠釉を施釉したと思われるが、外面胴部の一部のみに釉が残る。器形は稜花状で、外面に立体的な花弁文を成形。		Ⅲ３層
	165	明朝系瓦(褐色)	軒平瓦	Ⅰ－Ⅲ－Ａ	瓦当	－	－	－	瓦当裏に斜状のナデ痕。割れ面から瓦当と平瓦部の接合面が確認できる。		Ⅲ３層
	166	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	－	玉縁～端部	－	－	－	喜名古窯系の瓦と考えられる。凸面、凹面共に漆喰付着。胎土は白土が筋状になり、石英粒を含む。凹面は布目痕が残り、端部は面取り整形。		Ⅲ３層
第 177 図 図版 19	167	中国産色絵	碗	福建系	口～底部	(17.2)	6.2	(6.4)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰白色で内面から外面高台まで施釉。畳付から外底露胎。文様は外面に草花文。内底に不明文様。		Ⅲ 3a 層
	168	中国産色絵	皿	徳化窯系	底部	－	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。文様は内底に赤色と緑色の文様。外底に銘あり。		Ⅲ 3a 層
	169	本土産陶器	蓋	関西系	胴～庇部	庇径 (17.2)	－	－	胎土は浅黄橙色と一部橙色で軟質、黒色粒と白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で白化粧後、内外面施釉、庇部釉剥ぎ。ロクロ成形。		Ⅲ 3a 層
	170	瓦質土器	植木鉢	－	胴部	－	－	－	胎土は灰色と黄褐色のサンドウィッチ状で軟質、白色粒、赤色粒、黒色粒が混入。外面に草花文。		Ⅲ 3a 層
	171	骨製品	器種不明	－	－	縦残存 (6.0)	横 3.0	高さ 2.15	ウシの中足骨の骨幹部を使用。前面は斜め方向に研磨し平坦にする、後面は横方向に研磨し平坦にする。遠・近位部に切断痕が見られる。		Ⅲ 3a 層
	172	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	－	筒部	－	－	－	釘孔が空けられ、それで取れた胎土が一部凹面に残る。凹面には布目痕が残るが、ナデ消しが２条ほどみられる。側端面が平らに整形。		Ⅲ 3a 層
	173	明朝系瓦(灰色)	平瓦	－	筒部	－	－	－	凸面に斜線を１条。凹面に布目痕。		Ⅲ 3a 層
	174	中国産白磁	杯	Ｅ群	底部	－	－	(3.6)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は白色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ、内底蛇の目釉剥ぎ。底部碁笥底状。景徳鎮窯系。		Ⅲ 3c 層
	175	中国産白磁	灯明皿	Ｄ群	口～底部	(8.5)	2.15	(4.1)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰白色で内面に施釉。口唇部から外面は露胎。口縁部に煤付着。		Ⅲ 3c 層
	176	明朝系瓦(褐色)	平瓦	－	筒部	－	－	－	凸面に「×」字のヘラ描き印を施す。凹面に布目痕。胎土の黒色粒が目立つ。		Ⅲ３c 層
第 178 図 図版 19	177	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	Ａ	玉縁部	－	－	－	玉縁に「×」字のヘラ描き印。凸面筒部玉縁側は横位のナデが施される。		Ⅲ３c 層
	178	銭貨	－	(新)寛永通寶	－	外径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	寛永通寶。新寛永（３期：1697 年)。背面無文。		Ⅲ４層
	179	中国産青磁	皿	Ⅴ類	口～底部	(12.2)	3.2	(5.4)	胎土は青みがかった灰白色で堅緻。釉は灰オリーブ色で内外面施釉。文様は外面にヘラ描きによる蓮弁文、外底に胎土目あり。		Ⅲ５層
	180	玉類	勾玉	－	尾部	－	－	厚さ 0.9	まだらの乳白青色を呈する。気泡を含む。		Ⅲ５層

第 36 表　Ｖ区出土遺物観察一覧 g

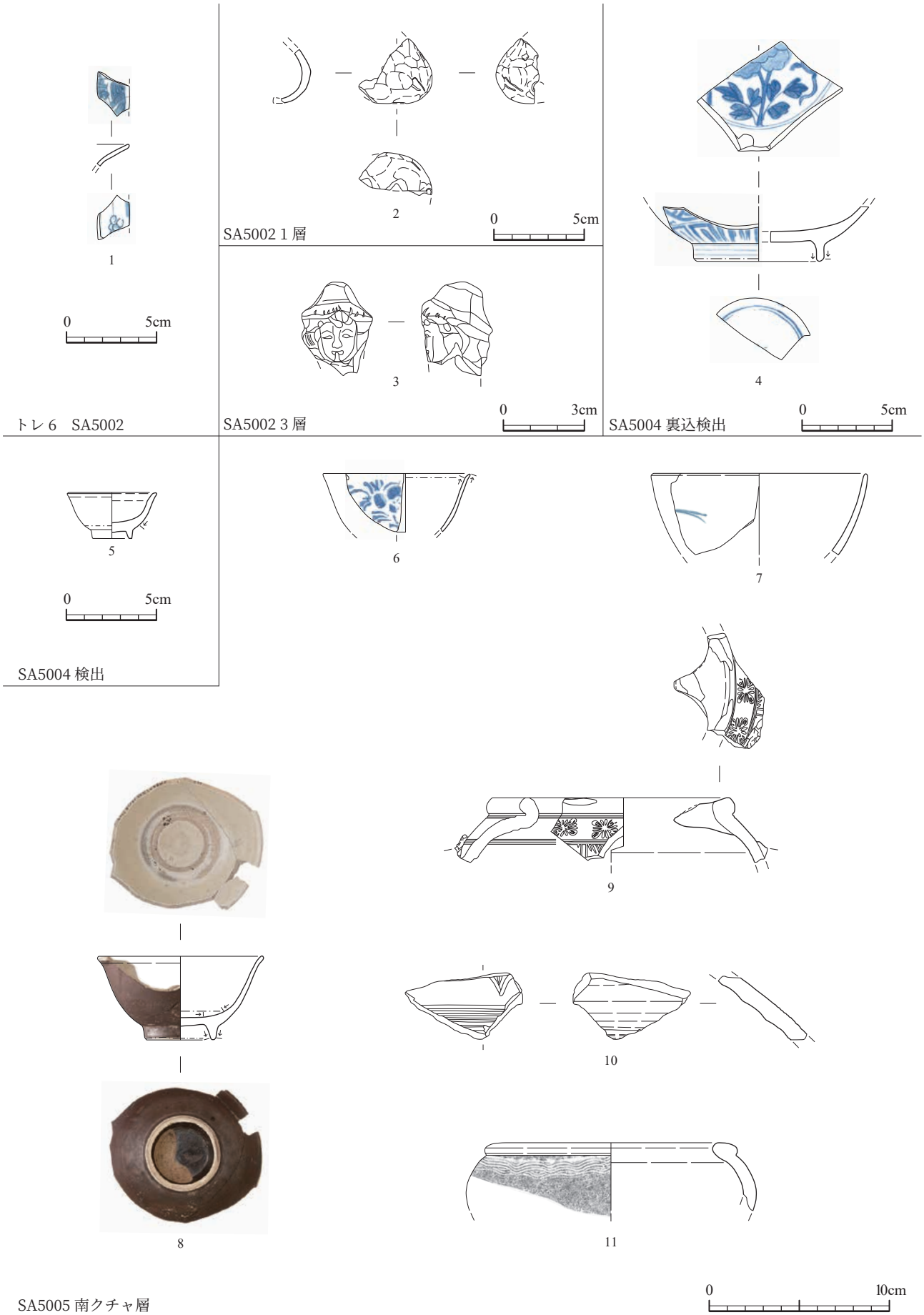
挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 178 図 図版 19	181	中国産青花	皿	Ｂ１群 明Ⅱ－１	口～底部	(21.2)	4.4	(12.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に唐草文、内面口縁部に四方襷文、内底に玉取獅子文か。景徳鎮窯系。		Ⅲ７層
	182	中国産色絵	皿	－	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色で軟質。釉は外面に緑色釉、内面に透明釉を施釉。内面に貫入あり。		Ⅲ７層
	183	中国産青磁	碗	Ｖ類	口縁部	(15.0)	－	－	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉。文様は外面口縁部にヘラ描きによる雷文帯、胴部に唐草文、内面胴部ヘラ描きの花文。		Ⅲ８層
	184	中国産青花	小杯	景徳鎮窯系	口～底部	(4.6)	3.4	(2.2)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に動物文。	トレ６	Ⅲ 9a 層
第 179 図 図版 20	185	中国産白磁	碗	大宰府Ⅳ類	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。		Ⅲ 9b 層
	186	中国産青花	碗	Ｂ１群 明Ｉ－１	口縁部	(12.8)	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に渦状唐草文、内面口縁部に四方襷文。		Ⅲ 9b 層
	187	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(18.0)	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に草花文、内面口縁部に四方襷文。粘土シワあり。		Ⅲ 9b 層
	188	中国産青花	小碗	景徳鎮窯系	口～底部	(10.6)	4.6	(5.2)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に唐草文、内底に折枝文。		Ⅲ 9b 層
	189	中国産青花	皿	徳化窯系	口～底部	(10.2)	2.3	(6.2)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内底に折枝文。底部が碁笥底状。粘土シワあり。内底中央が僅かに膨らむ。		Ⅲ 9b 層
	190	本土産陶器	擂鉢	備前系	口縁部	(29.8)	－	－	胎土は明赤褐色でやや軟質、白色粒、赤色粒が混入。内面胴部に擂目を施す。		Ⅲ 9b 層
	191	瓦質土器	台	－	底部	－	－	－	胎土は橙色で軟質、白色粒、赤色粒が混入、種子類のものと思われる空洞が見られる。		Ⅲ 9b 層
	192	明朝系瓦(褐色)	軒平瓦	Ｉ－Ⅱ	瓦当	－	－	－	外周縁下先端が突起状に成型される。瓦当文様の花弁が明瞭に残る。凹面に布目痕。		Ⅲ９ｂ層
第 180 図 図版 20	193	明朝系瓦(褐色)	丸瓦	－	玉縁部	－	－	－	玉縁と筒部側端面を面取り。筒部に釘孔が空き、漆喰が付着。		Ⅲ９ｂ層
	194	塼瓦	－	Ⅳ類	－	－	－	厚さ 3.9	側面、下面は灰色を呈するが、使用による摩滅により黒色の胎土が表出している。下面は粗い。		Ⅲ９ｂ層
	195	銭貨	－	(新)寛永通寶	－	外径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.13	寛永通寶。新寛永（３期：1697 年）。背面無文。		Ⅲ 14 層
	196	中国産白磁	蓋	福建系	胴～袴部	庇径 14.8	－	袴径 12.5	壺の蓋か。胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で外面庇部に施釉、庇部内面から胴部にかけて露胎。	トレ 10	Ⅲ 17 層
	197	中国産翡翠釉	皿	－	底部	－	－	(6.8)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は翡翠釉で内外面に施釉。外底の一部露胎。	トレ 10	Ⅲ 17 層
	198	宮古式土器	壺 or 鍋	－	口縁部	－	－	－	器面は橙色を呈し、胎土に白砂、暗赤色粒が混入。口縁部内面から外面胴部にかけて磨き調整、外面に指頭痕あり。外面胴部に煤付着。	トレ 10	Ⅲ 19 層
	199	中国産青磁	瓶	－	頸部	－	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉。文様は外面にヘラ描きによる蓮弁文。	トレ 10	Ⅲ 20 層
第 181 図 図版 20	200	塼瓦	－	Ⅲ類	－	－	－	厚さ 4.6	表面は灰黄色、胎土中央はオリーブ灰色を呈する。裏面は製作時の木枠痕か、木目状の線がはしる。	トレ 14 西	Ⅲ 25 層
	201	塼瓦	－	Ⅳ類	－	－	－	厚さ 3.3	表面は黄灰色を呈する。胎土は中央が灰色、外側は灰白色を呈する。表面は滑面だが、僅かに窪む。端部に噛み合わせの段差あり。	トレ 14 西	Ⅲ 25 層
	202	中国産青磁	盤	－	口縁部	－	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。口縁は稜花。幅広高台タイプの盤。	トレ８	Ⅲ 27 層
	203	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(14.0)	－	－	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に寿字文。粘土シワあり。	トレ８	Ⅲ 27 層
	204	中国産青花	碗	漳州窯系	底部	－	－	(4.2)	胎土は浅黄橙色で軟質。釉は内外面に灰白色釉を施釉、畳付釉剥ぎ。文様は内底に寿字文。	トレ８	Ⅲ 27 層
	205	中国産青花	皿	福建系	口縁部	(20.0)	－	－	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面胴部に不明文様あり。	トレ８	Ⅲ 27 層
	206	中国産褐釉陶器	壺	－	口縁部	(10.4)	－	－	胎土は灰黄褐色でやや軟質、白色粒、赤色粒、黒色粒が混入。釉は褐色で内外面に施釉。	トレ８	Ⅲ 27 層
	207	中国産陶器	蓋	宜興窯系	胴～袴部	庇径 (5.6)	－	袴径 (4.8)	急須の蓋か。胎土はにぶい赤褐色で堅緻。外面は磨かれ光沢を持つ。	トレ８	Ⅲ 27 層
	208	銭貨	－	元祐通寶	－	外径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	元祐通寶（初鋳年 1086 年）。背面無文。	トレ８	Ⅲ 27 層
	209	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ｉ類	口～底部	(13.1)	5.7	(6.5)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰オリーブ色で内外面口縁部から胴部途中まで施釉。畳付と内底に耐火土付着。	トレ８	Ⅲ 30 層
第 182 図 図版 20	210	塼瓦	－	Ⅳ類	－	－	－	厚さ 3.5	色調は全体的に橙色を呈す。裏面は粗いが、角が面取りしたかのように潰れている。	トレ８	Ⅲ 34 層

第 37 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 h

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第 182 図 図版 20	211	塼瓦	―	Ⅳ類	―	―	―	厚さ 4.4	表面は灰黄色、胎土は灰色を呈する。表面に圏線に「大」の字のスタンプ刻印を施し、横位の傷がつく。	トレ８	Ⅲ 34 層
	212	沖縄産施釉陶器	袋物	―	底部	―	―	(6.8)	胎土は淡黄色でやや軟質。内外面露胎。外面腰部から高台にかけて斜沈線が残る。	先行	Ⅲ・Ⅳ層
	213	中国産青磁	碗	Ⅳ’類	口縁部	18.1	―	―	胎土は灰色でやや堅緻、白色粒が混入。釉は内外面にオリーブ灰色を施釉。		Ⅳ２層
	214	中国産白磁	皿	D 群	底部	―	―	3.6	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で内面と外面胴部まで施釉、底部露胎。		Ⅳ２層
	215	グスク土器	鍋	―	口縁部	―	―	―	胎土に白色粒を混入。外面に指頭痕、内面にナデ調整。		Ⅳ２層
	216	中国産青磁	碗	Ⅴ－１類	口縁部	(17.8)	―	―	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉。文様は外面口縁部に圏線、胴部にヘラ描きの蓮弁文、内面胴部にヘラ描きの唐草文。		Ⅳ３層
	217	中国産青磁	皿	Ⅴ－１類	口縁部	(12.7)	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部にヘラ描きの蓮弁文。		Ⅳ３層
	218	中国産白磁	碗	C 群	口縁部	(14.6)	―	―	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で外面胴部と内底の圏線を引いた後、内面と外面胴部途中まで施釉、外面胴部下半は露胎。文様は外面胴部と内底に１条の圏線。		Ⅳ３層
	219	グスク土器	甕	―	口縁部	―	―	―	胎土に白色粒、石英粒、雲母が混入。内外面にナデ調整。		Ⅳ３層
	220	グスク土器	鍋	―	口縁部	(15.8)	―	―	胎土に白色粒、赤色粒が混入。内外面に指頭痕あり。		Ⅳ３層
	221	高麗系瓦	平瓦	―	筒部	―	―	―	凸面に羽状打捺文様。凹面に糸切り痕と布目痕が残る。		Ⅳ３層
	222	タイ産半練土器	壺	―	胴部	―	―	―	胎土は灰白色で表面は橙色、赤色粒、黒色粒が混入。外面に叩き目あり。	トレ７	Ⅳ６層
図版 22	223	中国産三彩	盤	―	口縁部	―	―	―	胎土は浅黄橙色で軟質、黒色粒が混入。釉は緑色で内面に白化粧後、全面に施釉。		Ⅰ層
	224	中国産三彩	水注	―	胴部	―	―	―	胎土は灰白色で軟質、黒色粒が混入。釉は外面胴部に白化粧後、緑色釉と黄色釉を施釉。内面に縦方向にナデ調整。		Ⅰ層
	225	本土産近代磁器	碗	―	口縁部	(5.9)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。文様は外面に色絵による不明文様。		Ⅰ層
	226	本土産近代磁器	碗	砥部産	底部	―	―	4.8	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。外面胴部に型紙摺りの花唐草文。内底に目痕あり。		Ⅰ層
	227	本土産近代磁器	碗	砥部産	底部	―	―	4.9	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。外面胴部に型紙摺りの文様、内底に松竹梅文。内底に目痕あり。		Ⅰ層
	228	本土産近代磁器	小碗	―	口～底部	(8.8)	4.4	(3.2)	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。外面胴部に不明文様。		Ⅰ層
	229	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	(7.8)	4.1	3.3	胎土は白色で堅緻。釉はクロム釉を内外面に施釉、底部露胎。外面胴部に飛び鉋。		Ⅰ層
	230	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	(9.2)	4.7	(3.4)	胎土は白色で堅緻。釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に銅板転写による草花文。		Ⅰ層
	231	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	(8.8)	4.0	3.5	胎土は白色で堅緻。釉はクロム釉を内外面に施釉、底部露胎。外面胴部に飛び鉋。		Ⅰ層
	232	本土産近代磁器	小碗	―	口～底部	(8.8)	4.8	3.5	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。		Ⅰ層
	233	本土産近代磁器	小碗	―	口縁部	(6.8)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。文様は外面胴部にゴム判の花文。		Ⅰ層
	234	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口縁部	(8.4)	―	―	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。文様は外面胴部に銅板転写による草花文。		Ⅰ層
	235	本土産近代磁器	小碗	―	底部	―	―	2.9	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。文様は内底に色絵による草花文。		Ⅰ層
	236	本土産近代磁器	筒碗	―	口～底部	(6.8)	7.1	4.5	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は外面胴部に色絵による文字。		Ⅰ層
	237	本土産近代磁器	皿	―	口～底部	(26.8)	3.2	(17.6)	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付釉剥ぎ。文様は内面に銅板転写の鳳凰文。外面に不明文様。		Ⅰ層
	238	本土産近代磁器	皿	―	底部	―	―	(8.2)	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。文様は内面に型紙摺りによる文様。外底蛇の目凹高台。		Ⅰ層
	239	金属製品	ピンセット	―	―	―	―	―	ミシン用のストッパー付きピンセットか。２つのパーツで構成される。先端内側は滑り止めの刻み目あり。		Ⅰ層
図版 22	240	ガラス製品	シャーレ	―	口～底	(6.6)	1.3	(6.6)	無色系。内面が顕著に銀化する。0.5 ～ 5mm 台の気泡を含む。		Ⅰ層

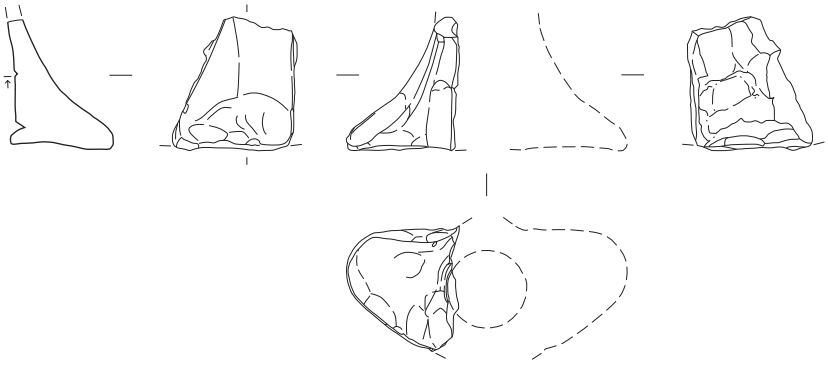
第 38 表　Ⅴ区出土遺物観察一覧 i

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
図版 22	241	ガラス製品	瓶	インク瓶	口～底部	2.1	4.6	3.3	色調は無色系。胴部横断面方形で、底面に円形の窪み。内部に僅かにインク付着。		Ⅰ層
図版 22	242	金属製品	ボタン	―	―	縦 2.2	横 2.2	厚さ 0.3	中央に「髙」の文字。沖縄県立首里高等学校のものか。		Ⅰ層
	243	金属製品	ボタン	―	―	縦 2.4	横 2.3	厚さ 0.4	中央に五弁花文。		Ⅱ 3a 層
	244	中国産三彩	水注	―	胴部	―	―	―	胎土は灰白色で軟質、黒色粒が混入。釉は外面胴部に白化粧後、緑色釉と黄色釉を施釉。内面に縦方向にナデ調整。		Ⅲ 3c 層



SA5005 南クチャ層

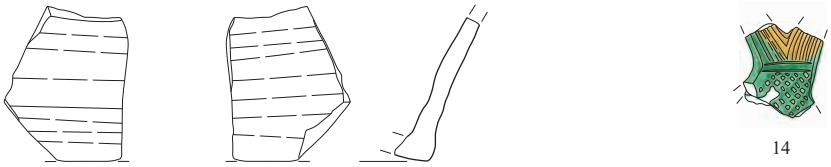
第 161 図　Ⅴ区の出土遺物１



12

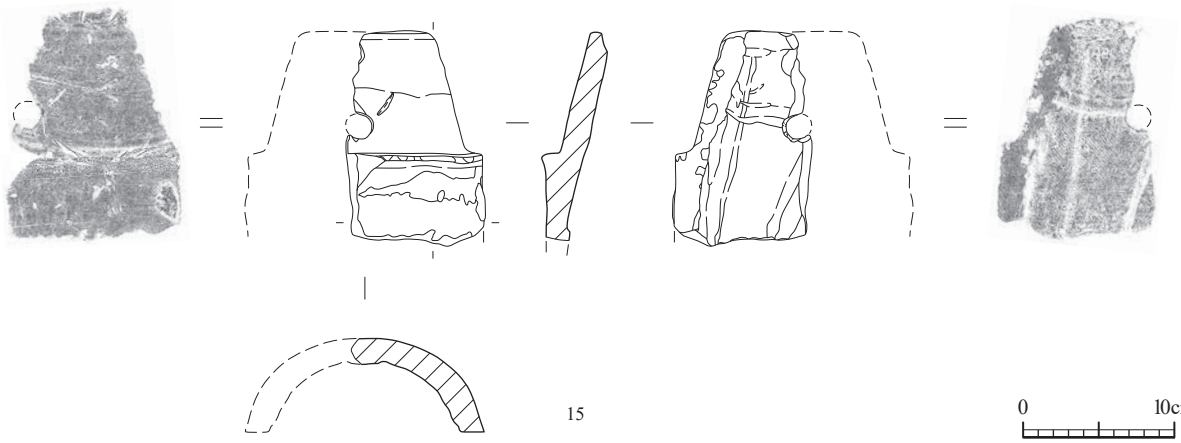
0　10cm

SA5005 南クチャ～裏込層



13　14

0　5cm

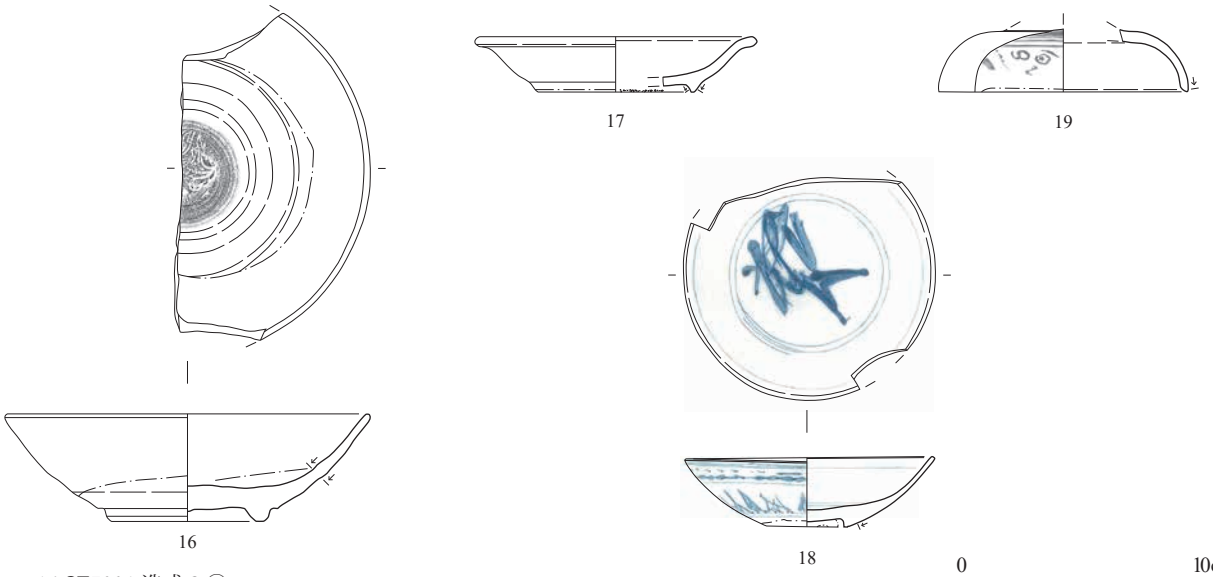


15

0　10cm

(15)

トレ 13 SF5001 造成２・３

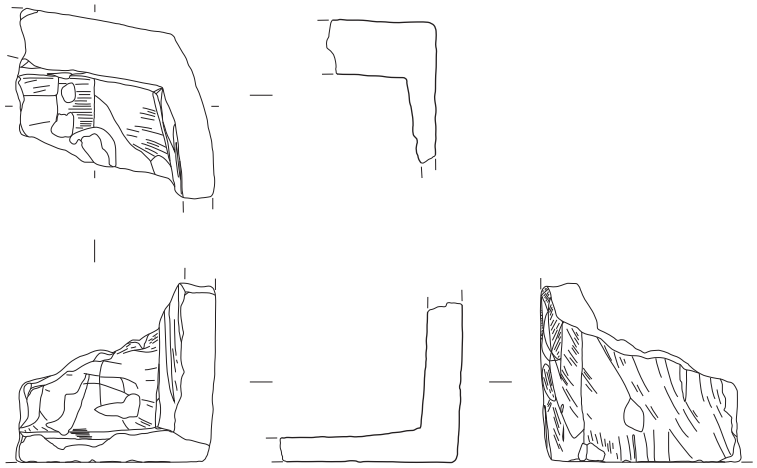


16　17　18　19

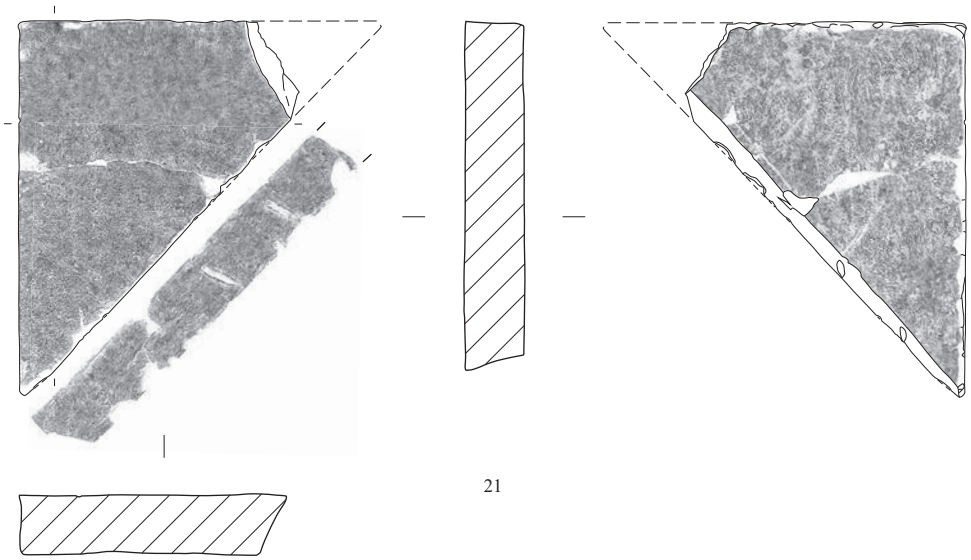
0　10cm

トレ 14 SF5001 造成２①

第 162 図　Ⅴ区の出土遺物２



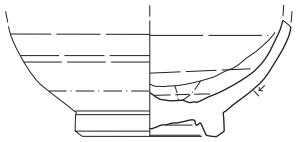
20



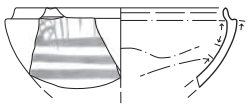
21

トレ 14 SF5001 造成２②

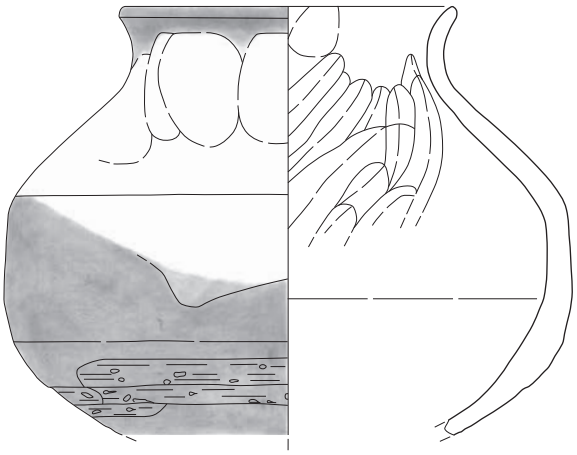
0　10cm



22



23

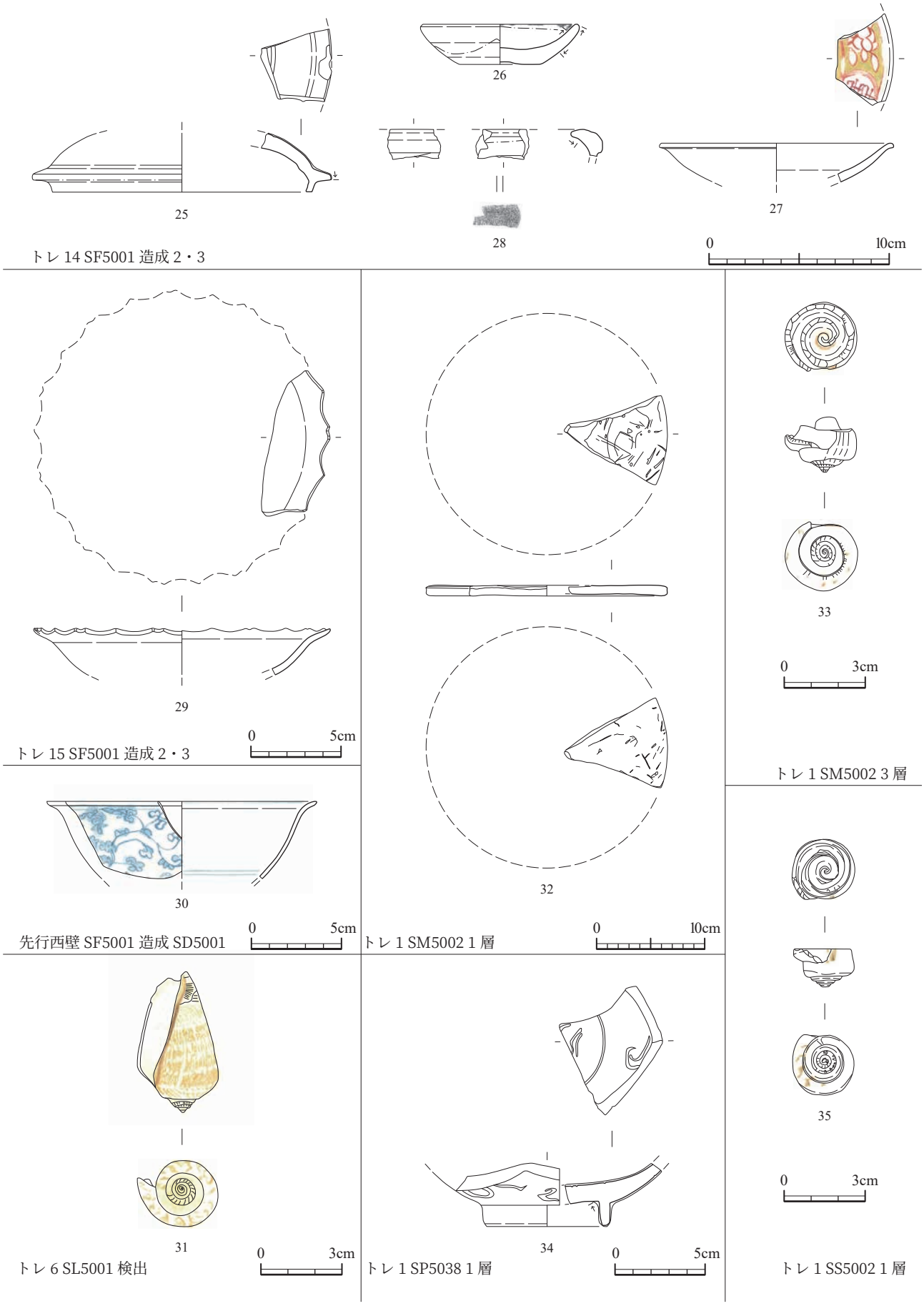


24

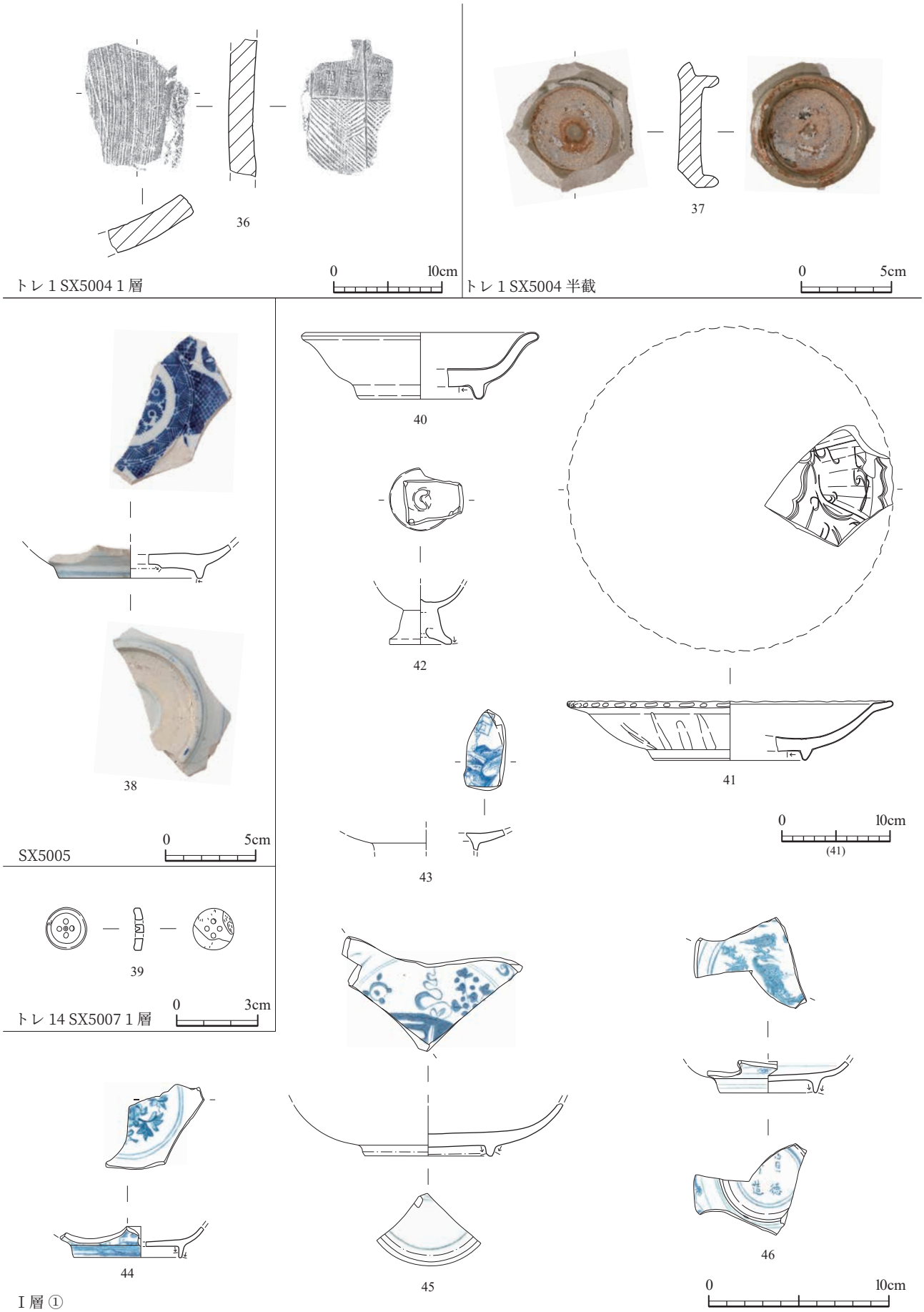
トレ 14 SF5001 造成２炭

0　10cm

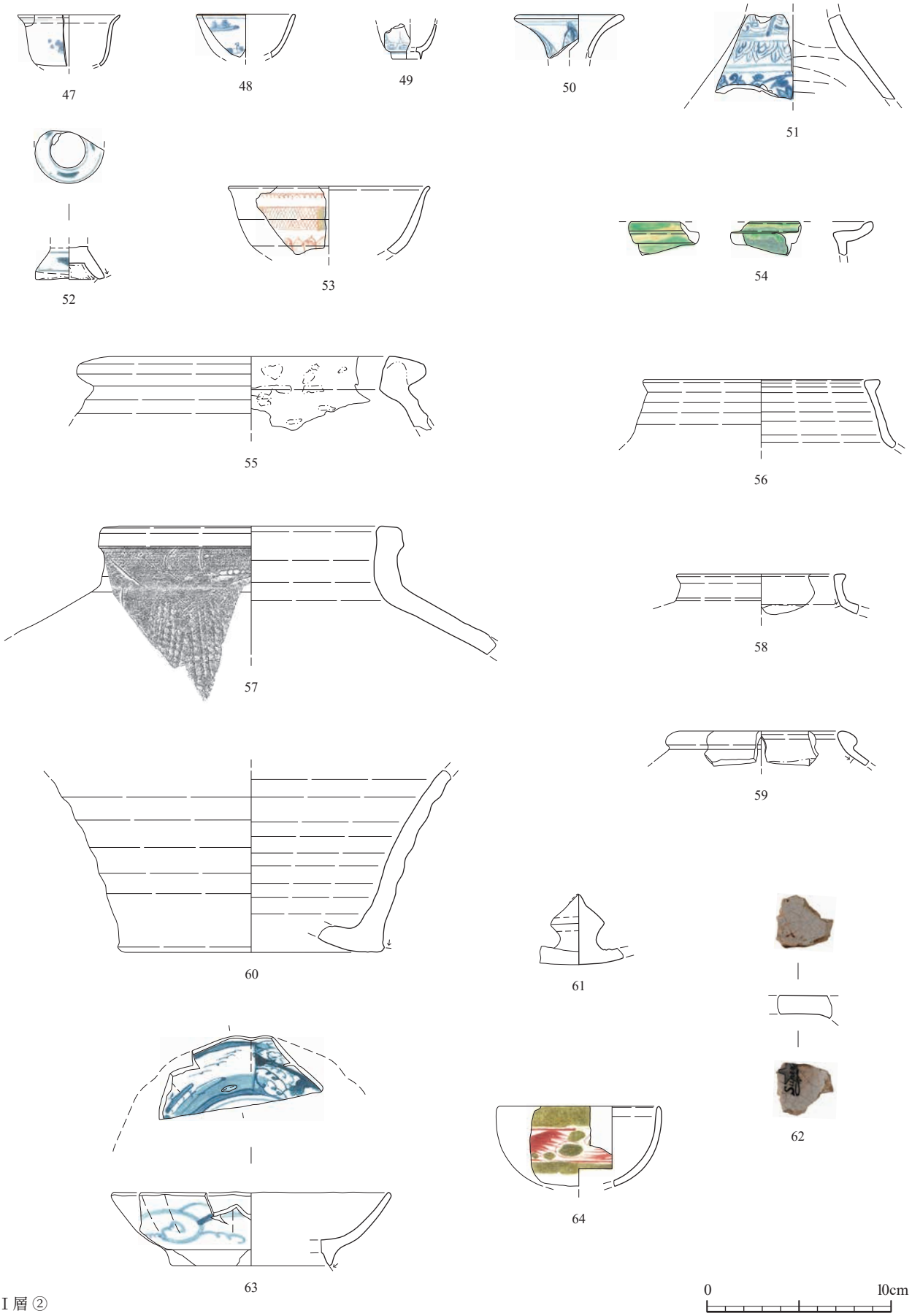
第 163 図　Ⅴ区の出土遺物３



第 164 図　Ⅴ区の出土遺物４

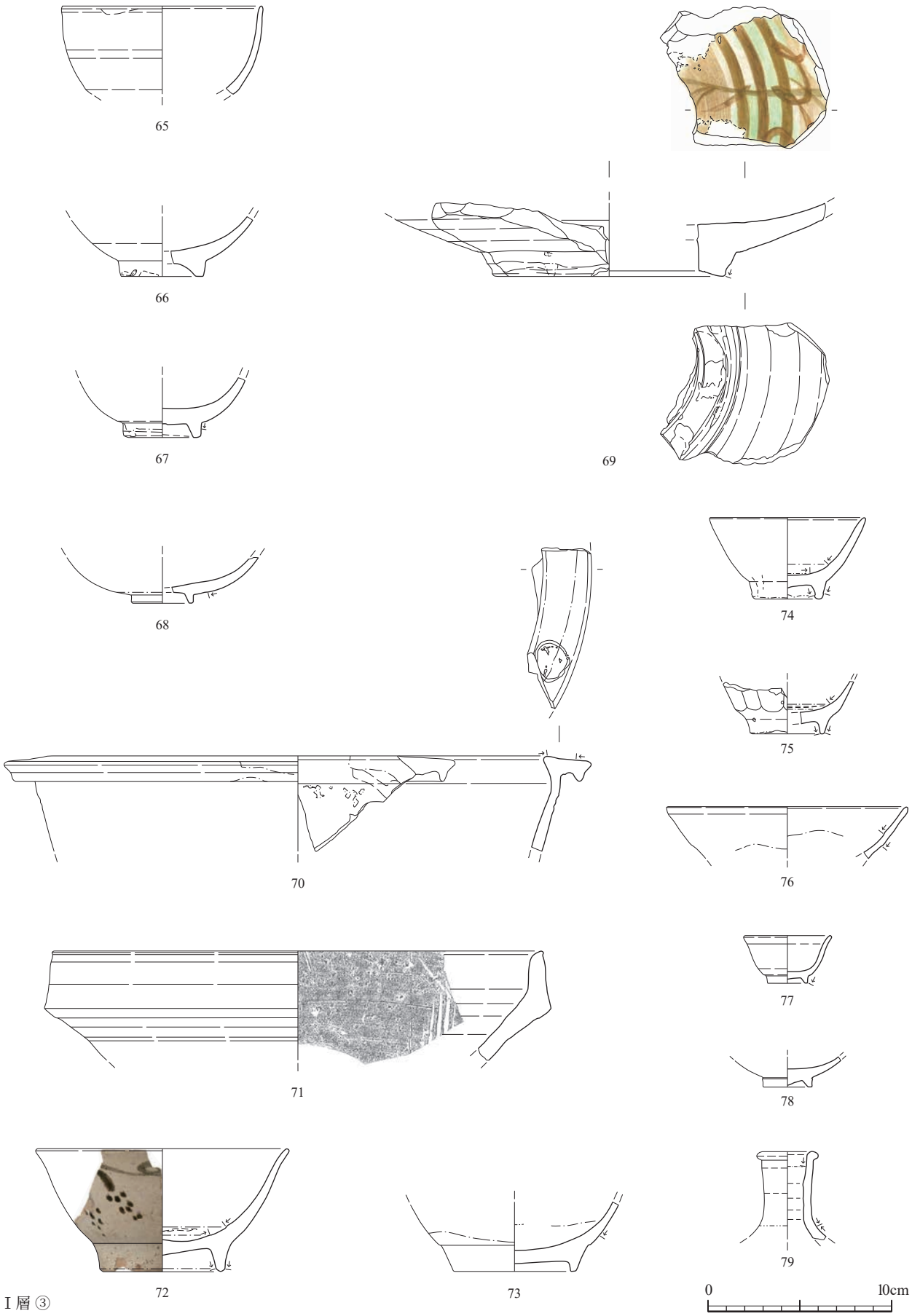


第165図　Ⅴ区の出土遺物５

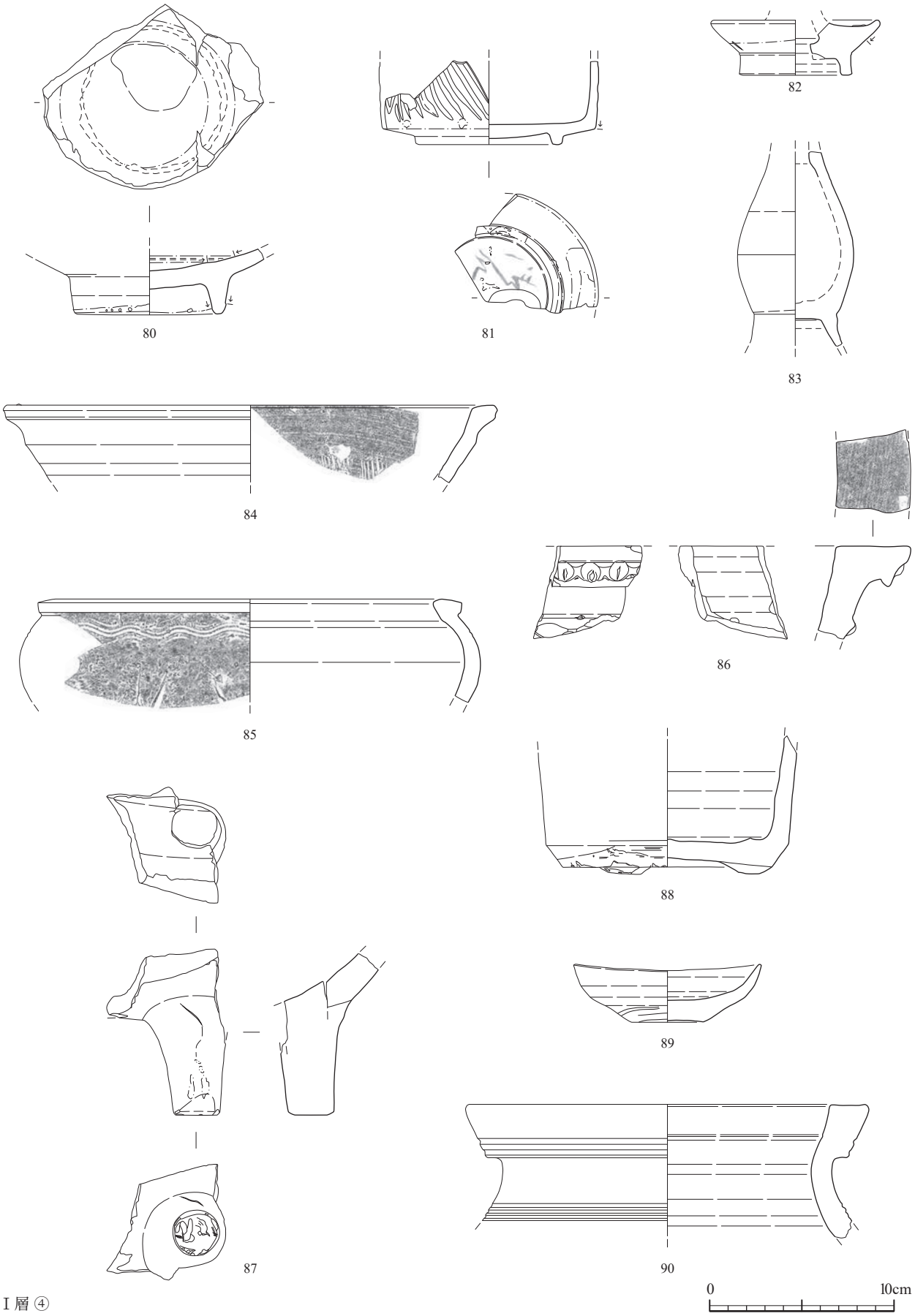


Ⅰ層②

第 166 図　Ⅴ区の出土遺物６

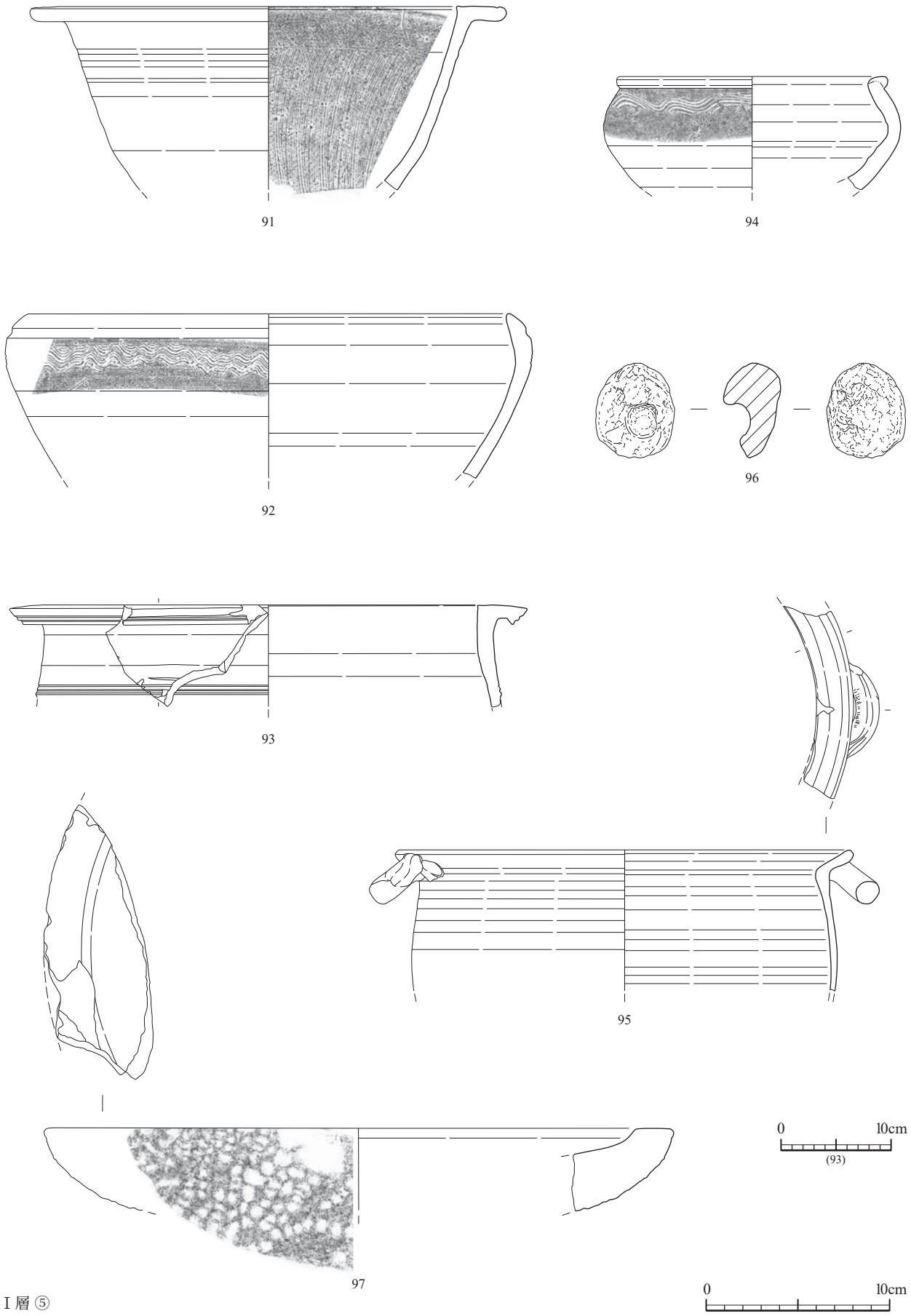


第 167 図　Ⅴ区の出土遺物７



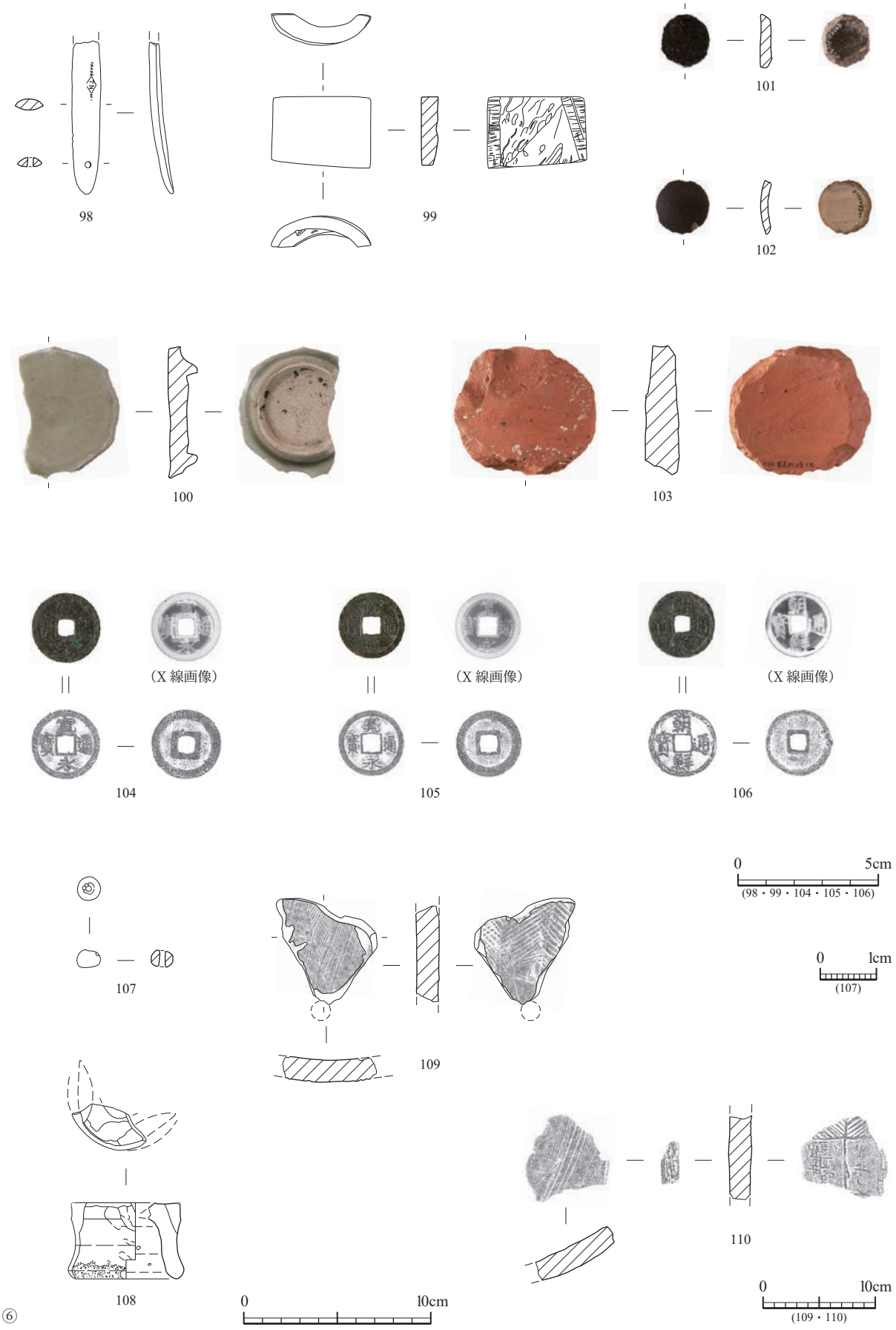
Ⅰ層④

第 168 図　Ⅴ区の出土遺物８

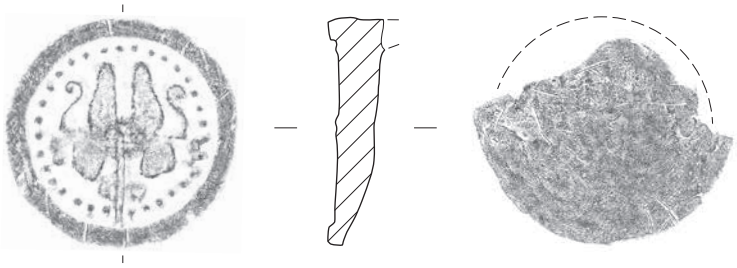


Ⅰ層 ⑤

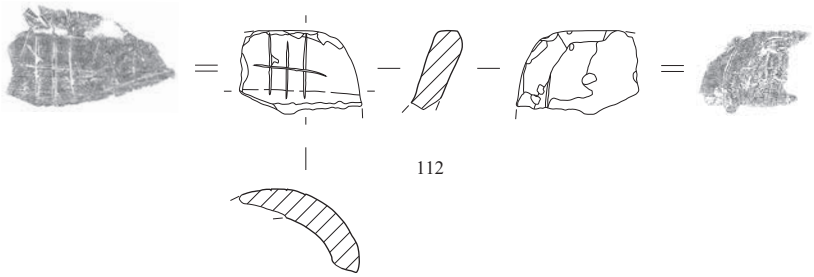
第 169 図　Ⅴ区の出土遺物９



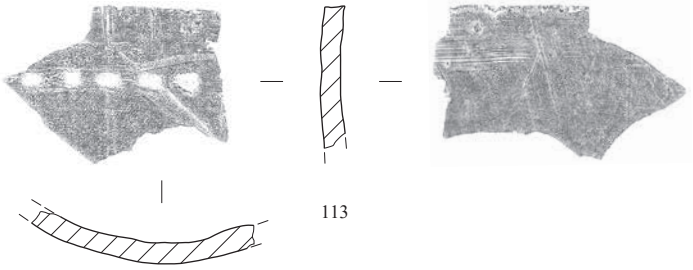
第 170 図　Ⅴ区の出土遺物 10



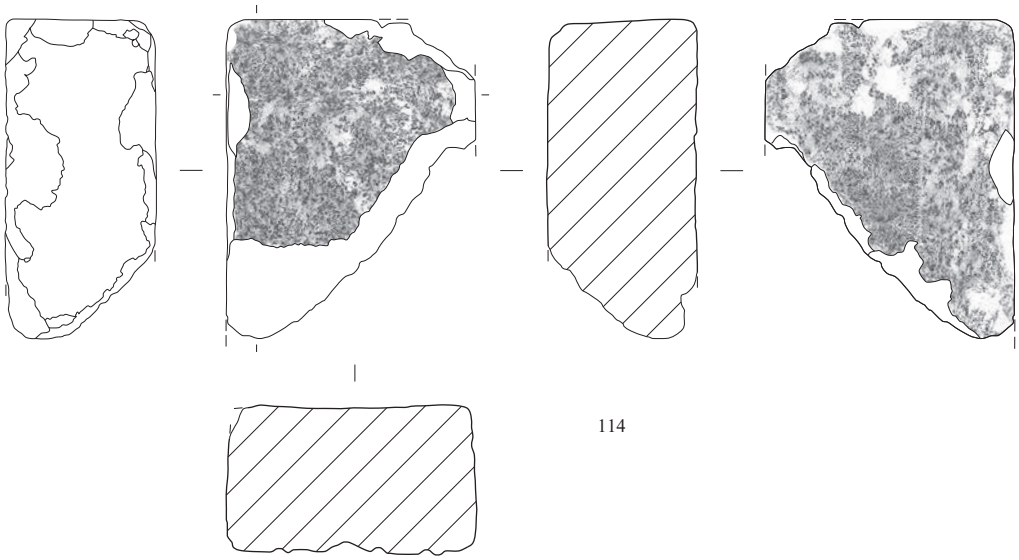
111



112



113

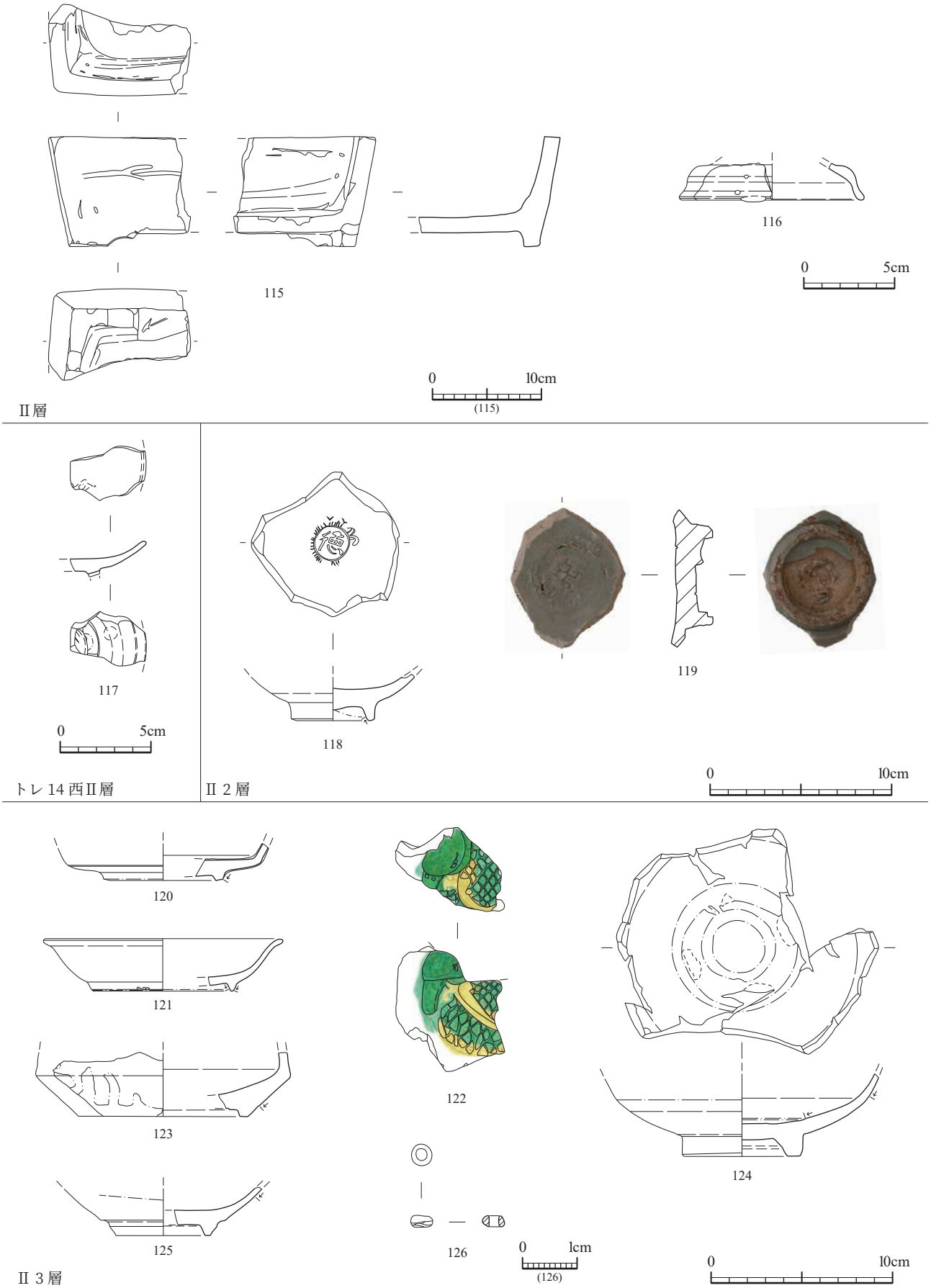


114

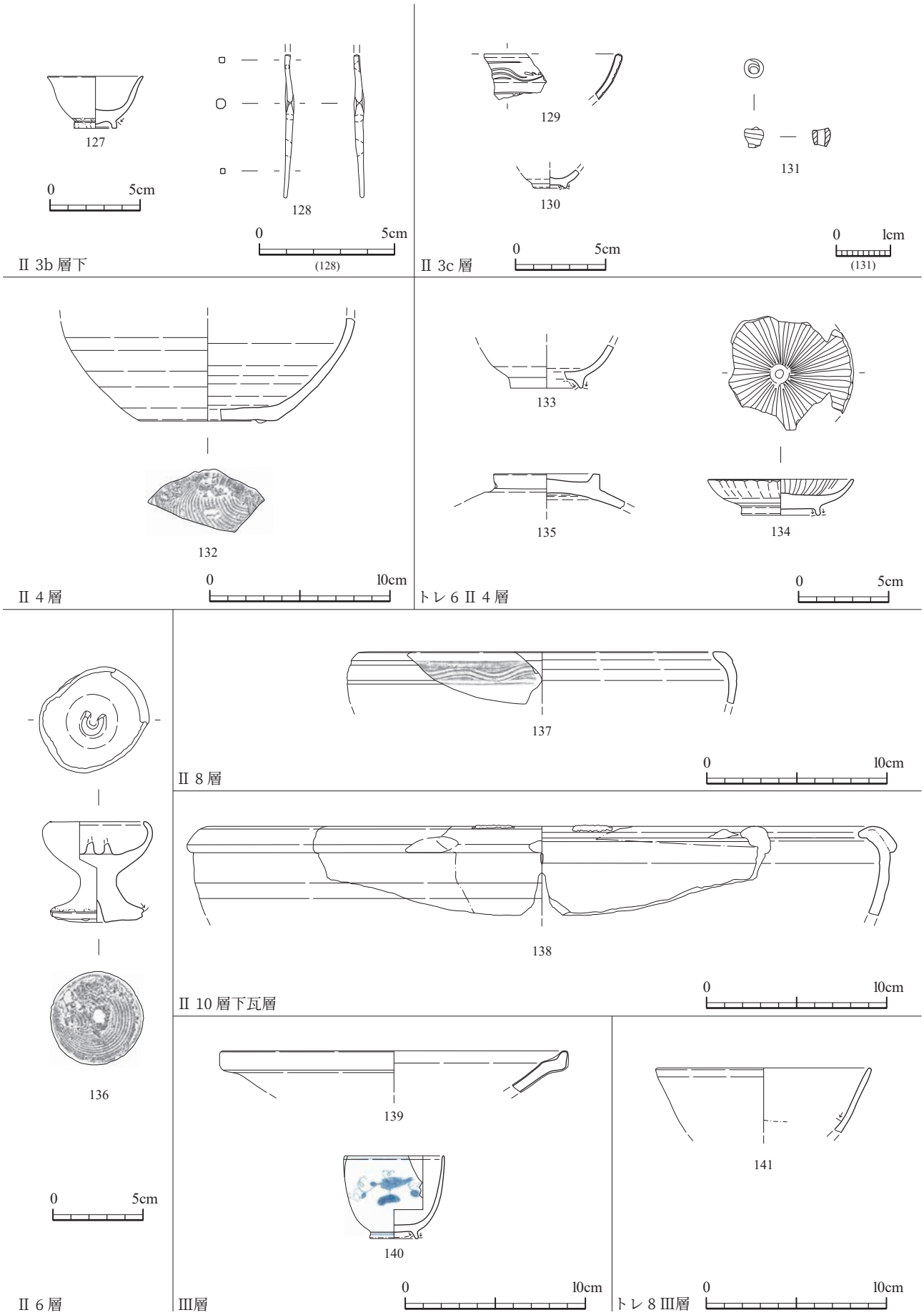
Ⅰ層⑦

0　10cm

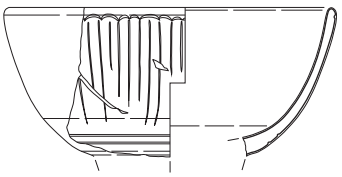
第 171 図　Ⅴ区の出土遺物 11



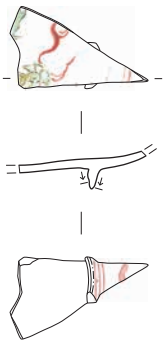
第 172 図　Ⅴ区の出土遺物 12

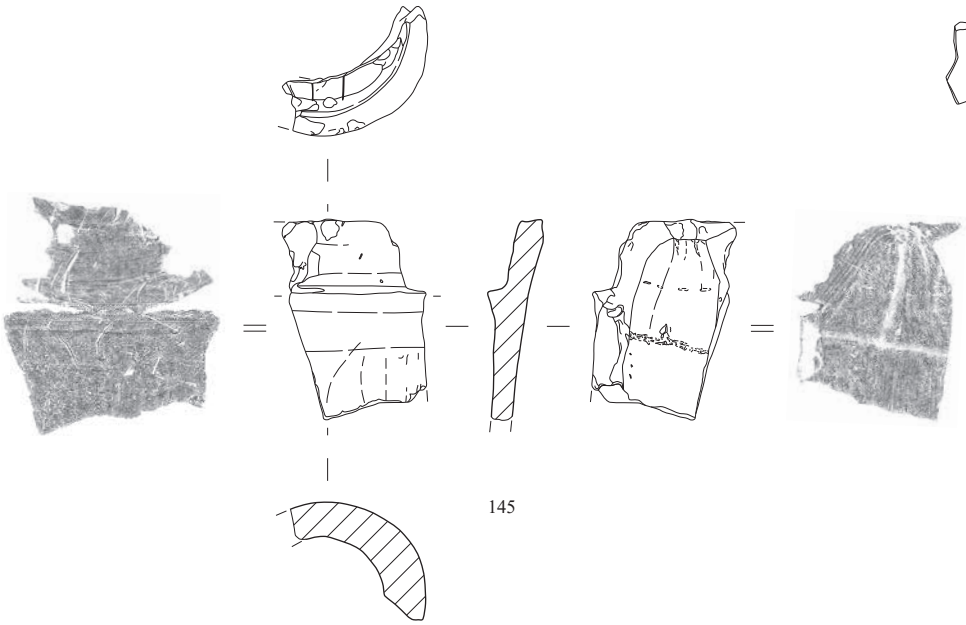


第 173 図　Ⅴ区の出土遺物 13


142

143

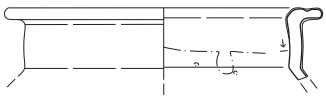

144

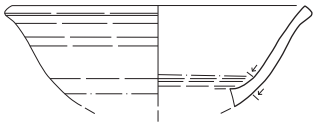

145

0　10cm
(145)

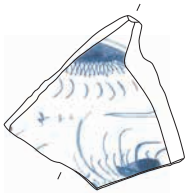
0　10cm

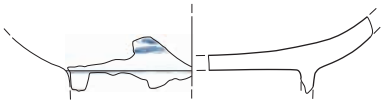
トレ 11 Ⅲ層

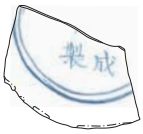

146


147

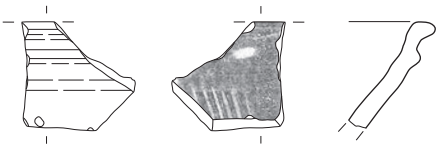
149

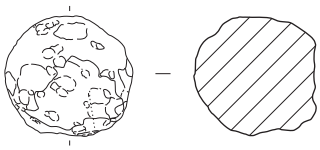


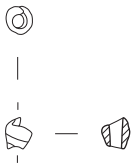




148


150


151

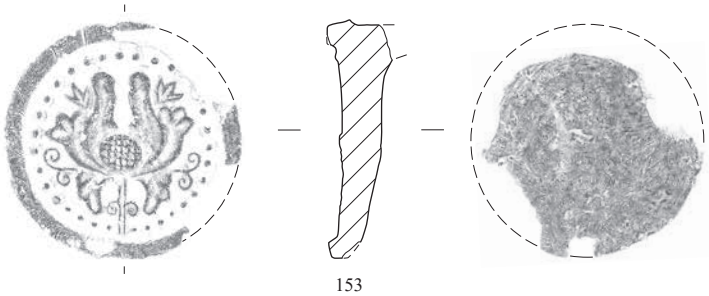

152

0　1cm
(152)

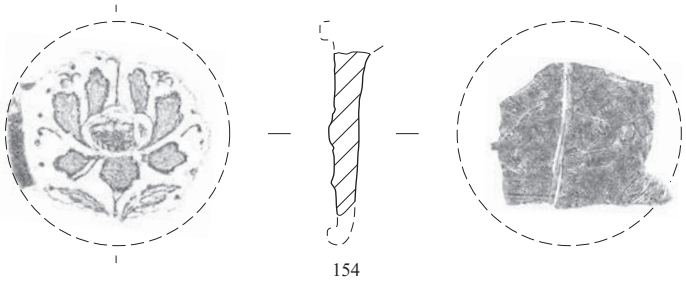
0　10cm

Ⅲ１層

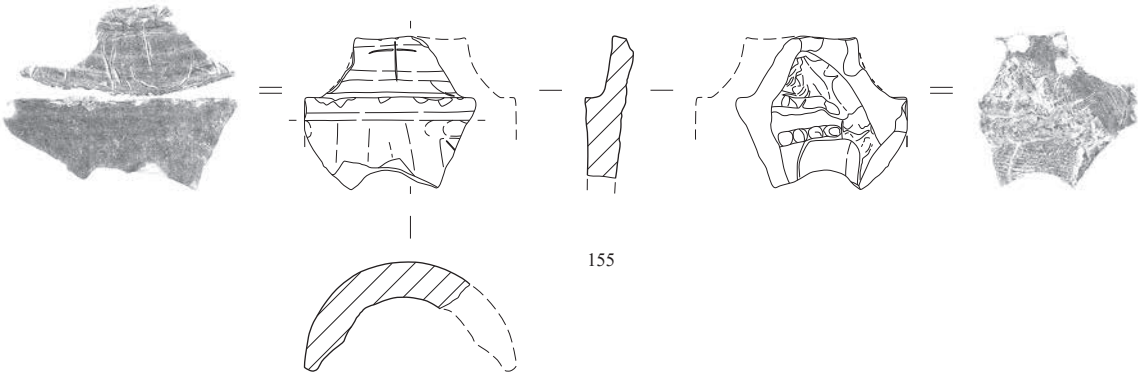
第 174 図　Ⅴ区の出土遺物 14



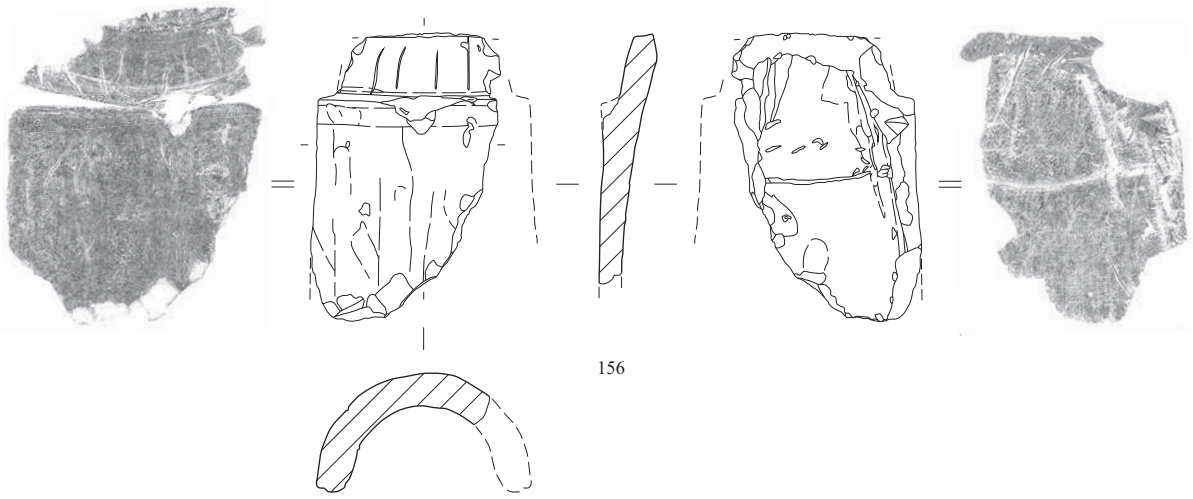
153



154



155

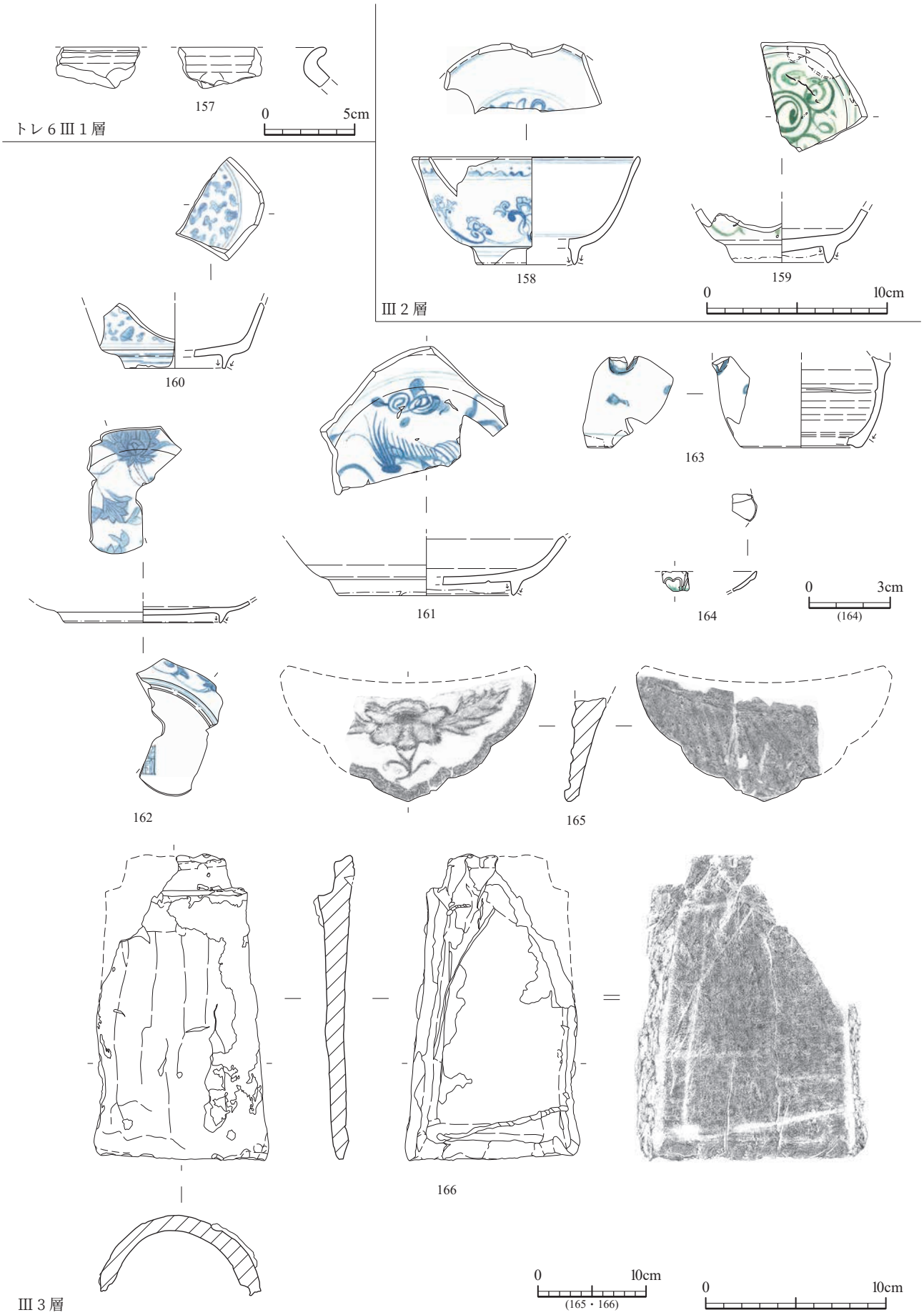


156

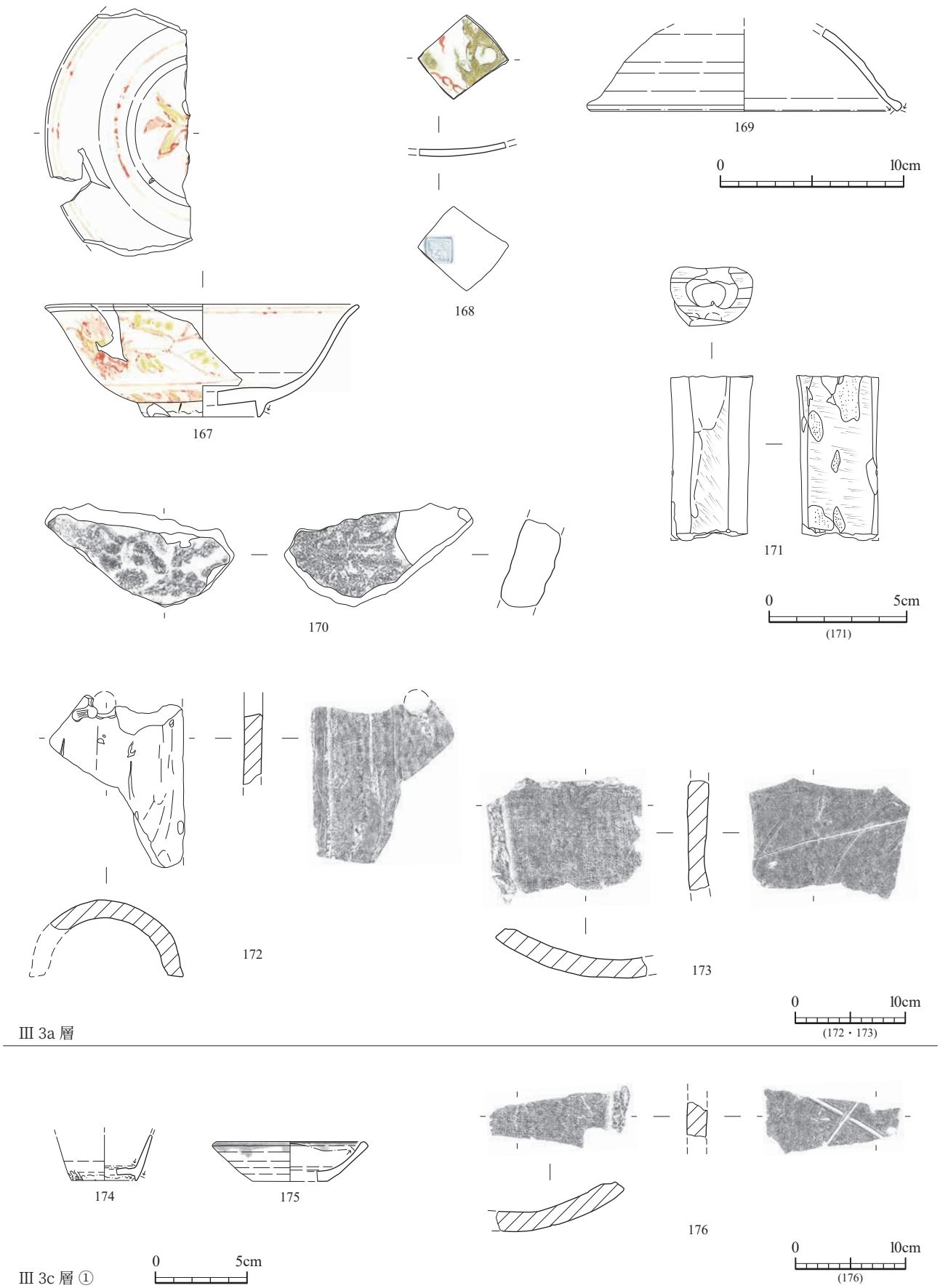
Ⅲ１層②

0　10cm

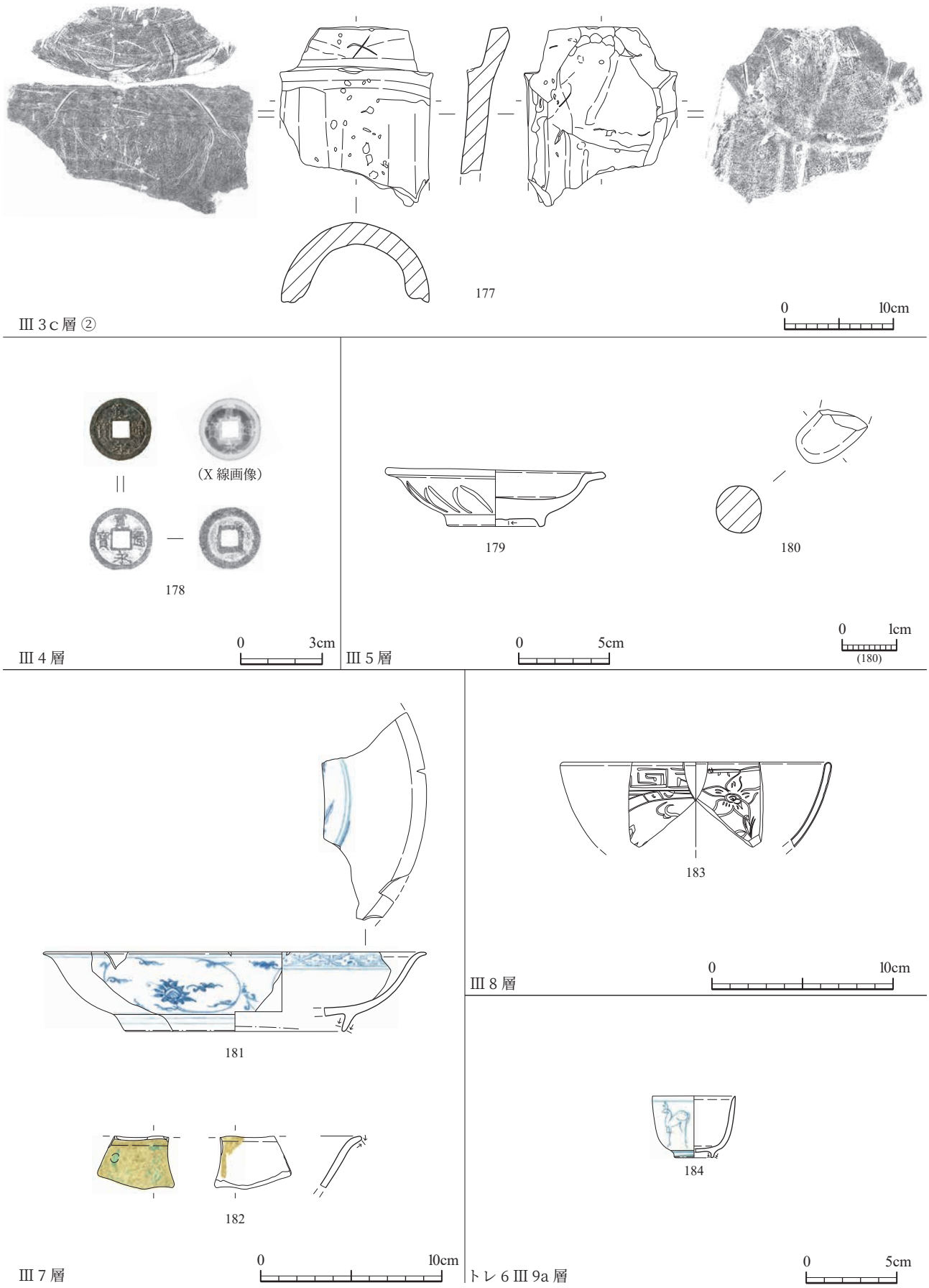
第 175 図　Ⅴ区の出土遺物 15



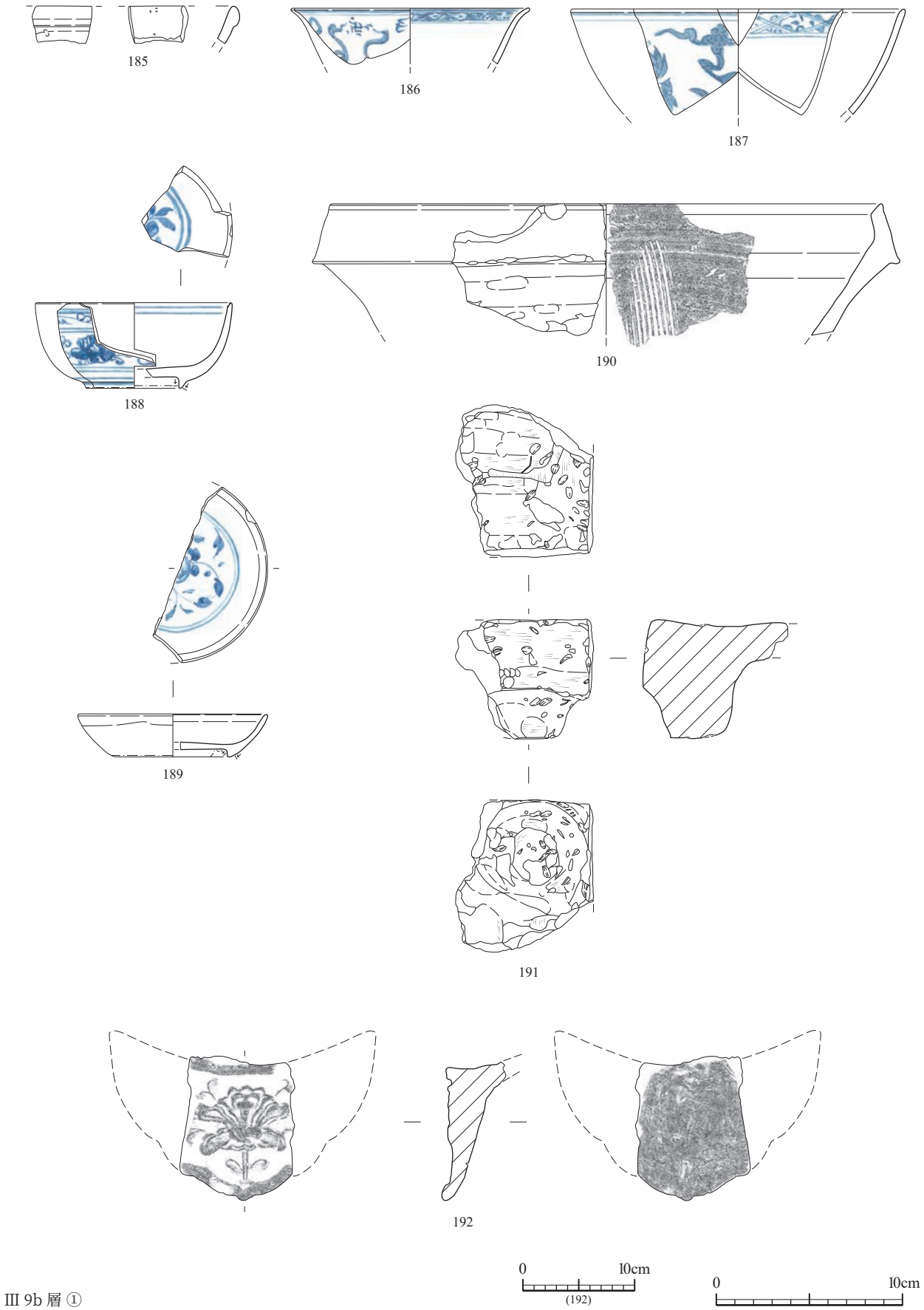
第 176 図　Ⅴ区の出土遺物 16



第 177 図　Ⅴ区の出土遺物 17

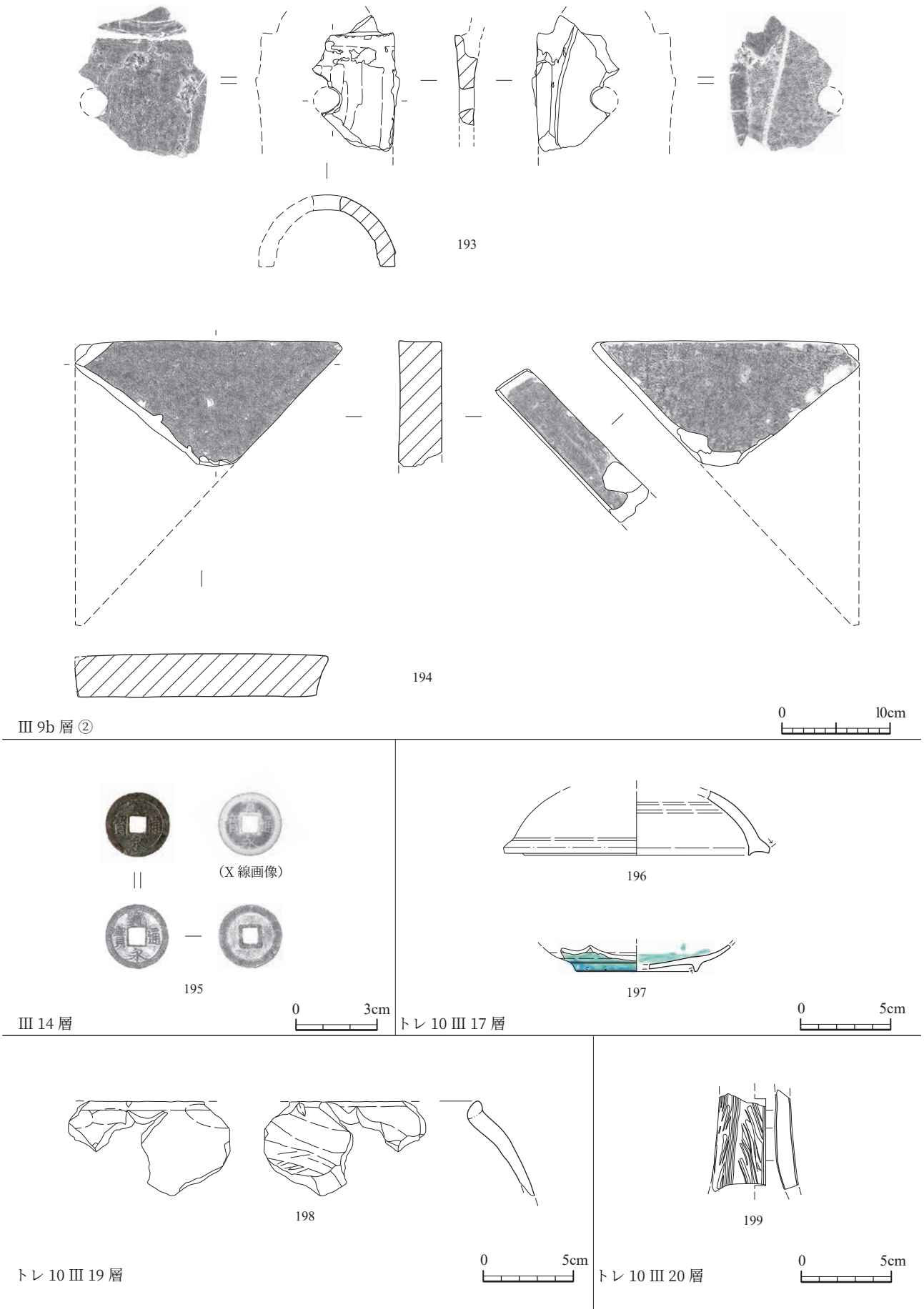


第 178 図　Ⅴ区の出土遺物 18

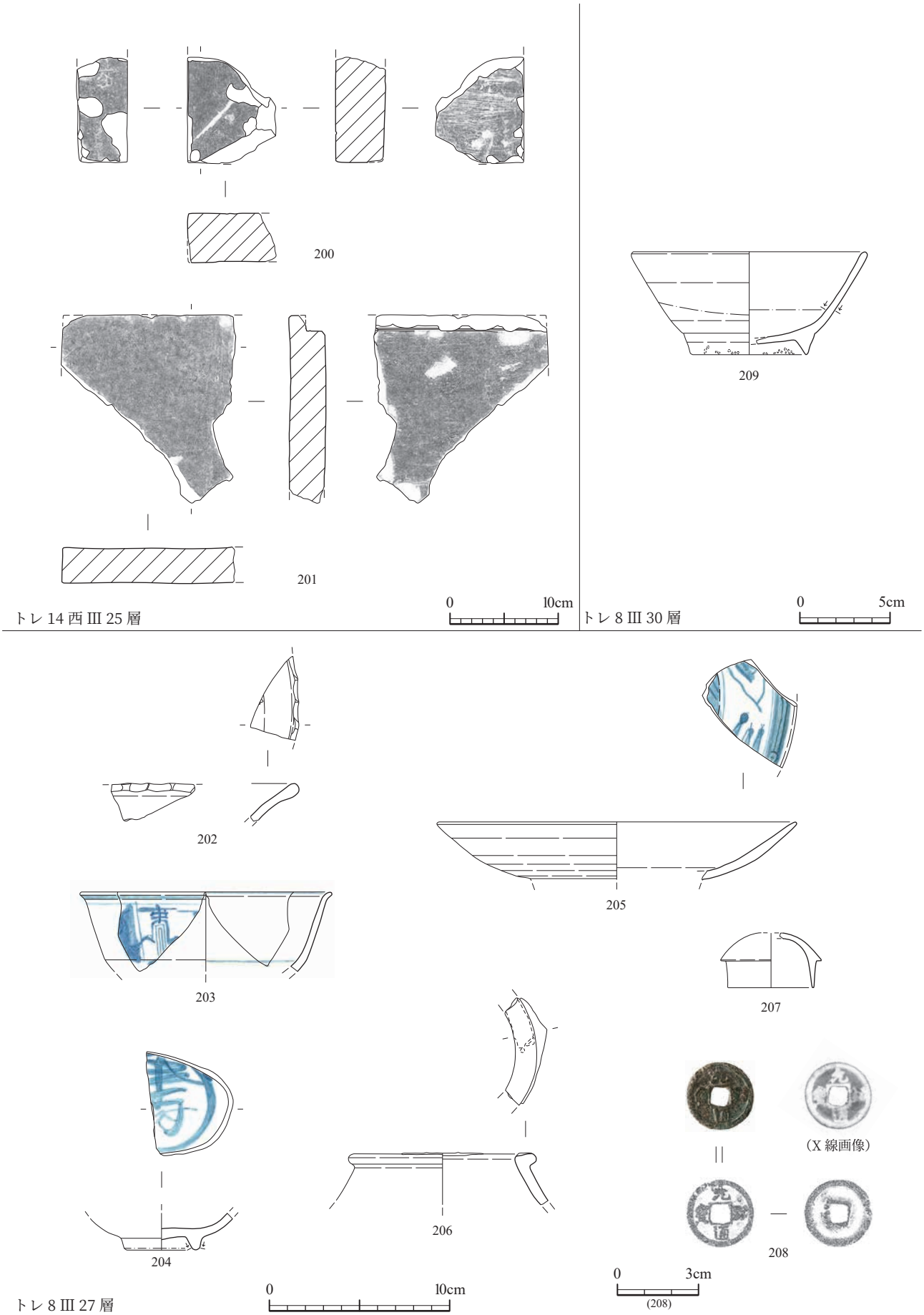


Ⅲ 9b 層 ①

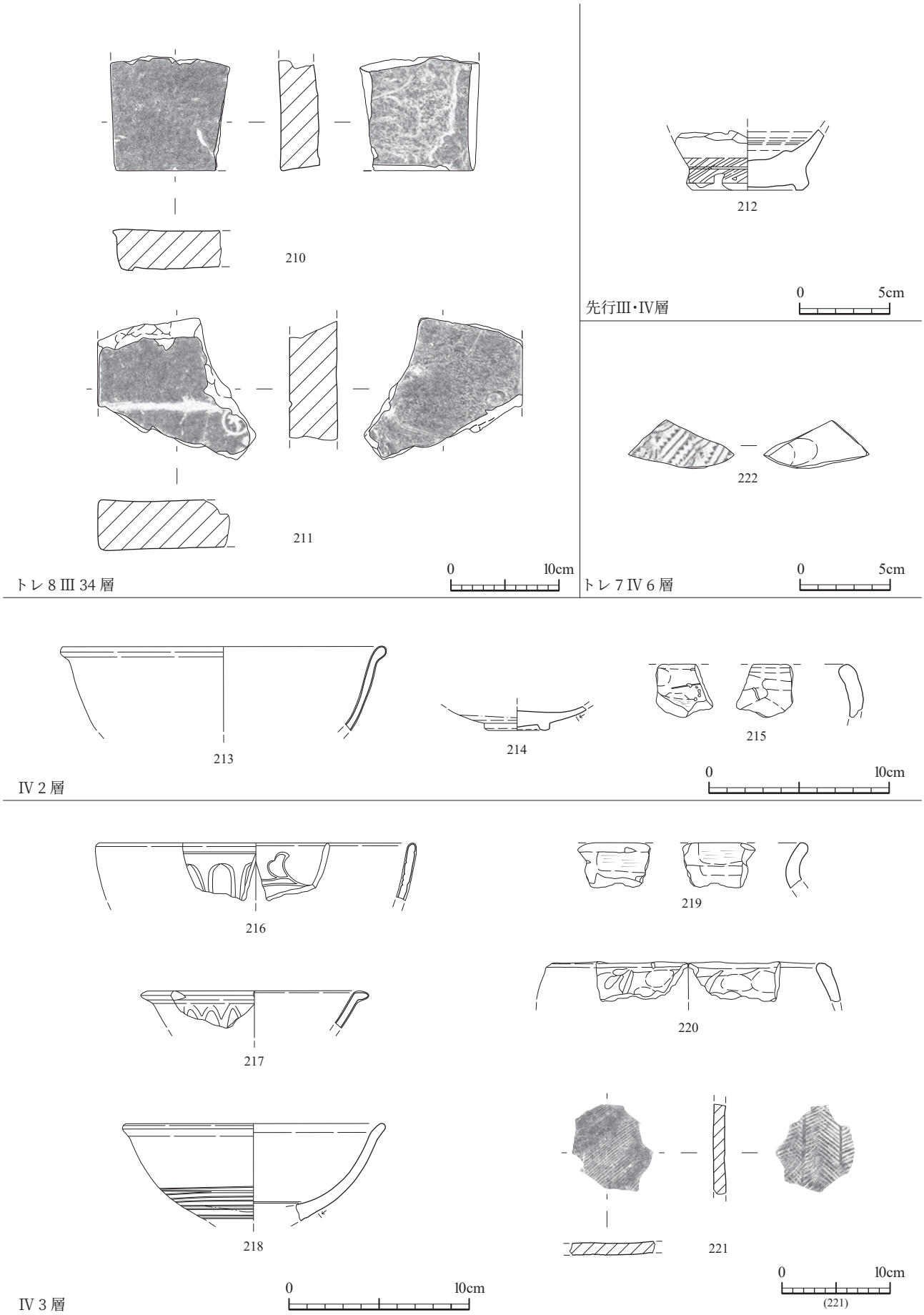
第 179 図　Ⅴ区の出土遺物 19



第 180 図　Ⅴ区の出土遺物 20



第 181 図　V 区の出土遺物 21



第 182 図　Ⅴ区の出土遺物 22

第２項　塼瓦Ⅷ類

塼瓦の分類のⅧ類について記す。平成 25・26 年度に実施した中城御殿跡（首里高校内）の調査で出土した軒平瓦（沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 第 14 図 13）と酷似した遺物が複数出土した。これらは完形品ではないが、後述の特徴から共通形態の塼瓦の一種と推察した。この塼瓦には県内で報告されている何れの系統の瓦にみられない特徴が確認されたため、本報告書では他の瓦類と項目を分けて報告する。

Ⅷ類は建造物の棟に葺かれる「棟瓦」としての用途を想定している。想定した完形品の部位をＡ、Ｂ、Ｃに分け、Ａ部は頂部、Ｃ部は側面部、Ｂ部はＡとＣの間の平坦部とした。内外面の呼称は丸瓦や雁振瓦を参考に、外側を凸面、布目痕の残る内側を凹面とした。文様の有無によって有文タイプと無文タイプに大別し、更に有文タイプはⅠ類、Ⅱ類の２つ、無文タイプはⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類の３つに細分した。ただし、Ａ部のみの資料は有文、無文どのタイプの一部か判然としないため、この分類は適応していない。また、有文・無文どちらにも分けられない特徴をもつものが１点確認されたが、それは「その他」とした。

各種破片にほぼ共通している特徴には、明朝系瓦をはじめとする屋瓦と比較して厚手であること、有文・無文タイプ共に凹面に布目痕があり、Ａ部からＣ部に至る形状が緩やかな階段状を成していることが挙げられる。想定される形態的特徴から、棟瓦の一種である丸桟二重箱冠瓦（坪井 1977 22 頁）に似たものと考えられる。色調は表面が灰色や褐色を呈するものが多い。

各種概要は以下のようになる。

有文タイプ　何れもＣ部に珠文を内包する左巻き三つ巴文が施される。Ｃ部上端に縁が付き、未確認であるものの破損具合から下部にも縁があった可能性がある。

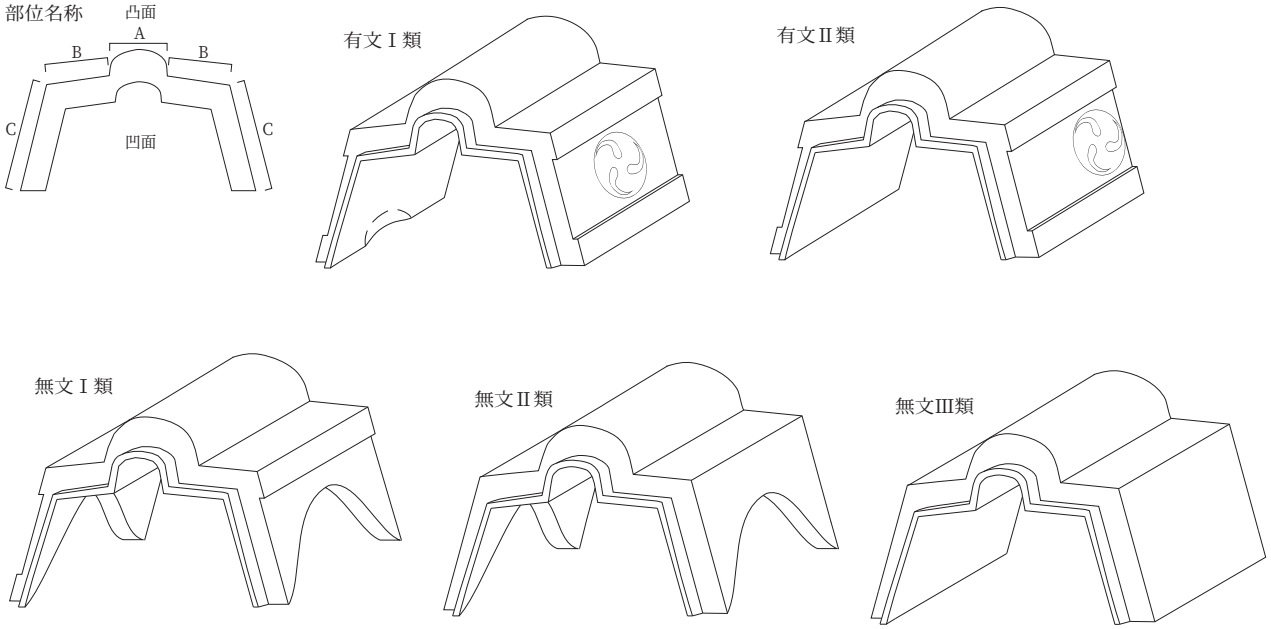
- **有文Ⅰ類**　明瞭な三つ巴文がＣ部正面観中央部寄りに付される。凹面に浅い抉りを施す。
- **有文Ⅱ類**　有文Ⅰ類と比較して段差が低く雑な三つ巴文がＣ部正面観右寄りに付される。明確に残存していないが、複数文様を施していた痕跡があるものもみられる。

無文タイプ　文様を施さないもの。

- **無文Ⅰ類**　Ｃ部上面に縁が付き、下端はアーチ状に整形されていたと想定される。
- **無文Ⅱ類**　Ｃ部に縁や文様が無く、下端をアーチ状に整形していたと想定される。
- **無文Ⅲ類**　Ｃ部に縁や文様が無く、下端が平坦で直線的に整形される。Ｃ部凹面の下部は布目痕がみられない。

その他　有文、無文いずれかに分類はできないが、厚手で縁のような造形が確認される。

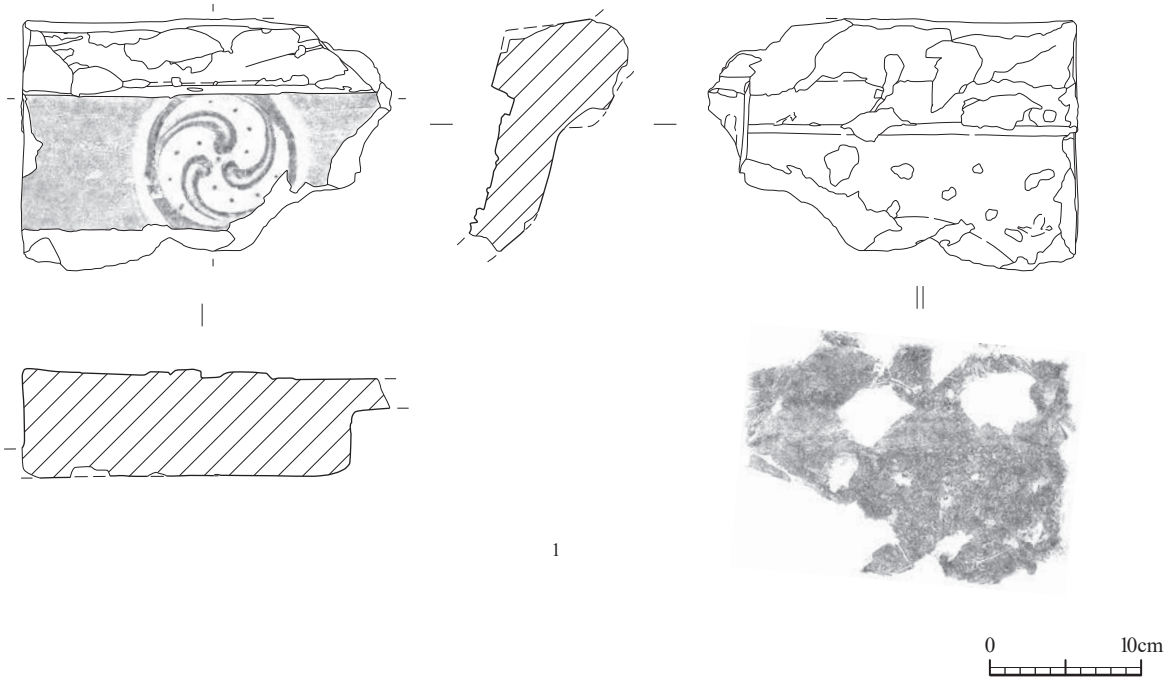
本報告では、先に述べた平成 25・26 年度に実施した中城御殿跡（首里高校内）の調査で出土した軒平瓦（第 184 図１）も、再度観察を行い併せて報告する。



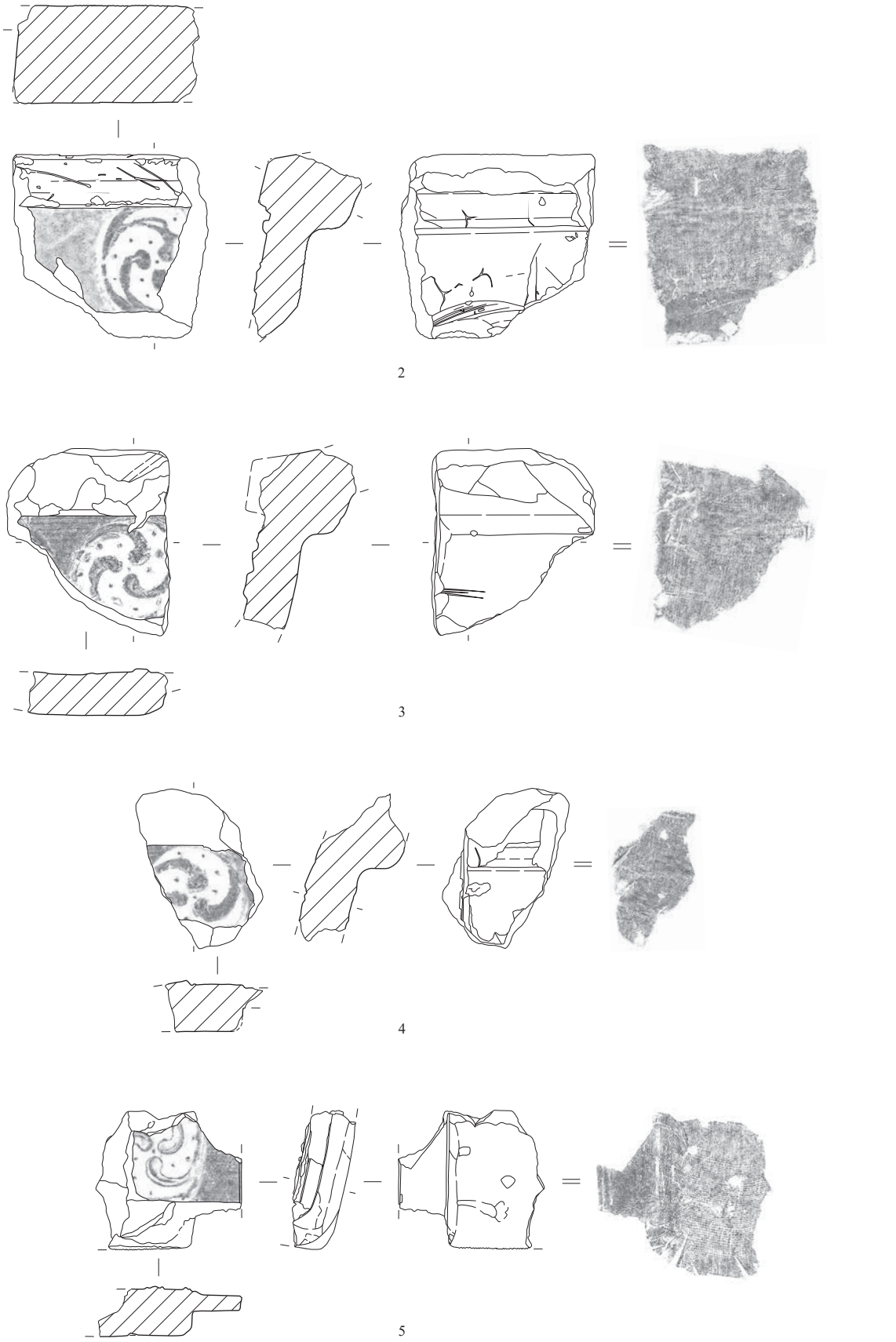
第 183 図　塼瓦Ⅷ類　模式図

第 39 表　塼瓦Ⅷ類観察一覧

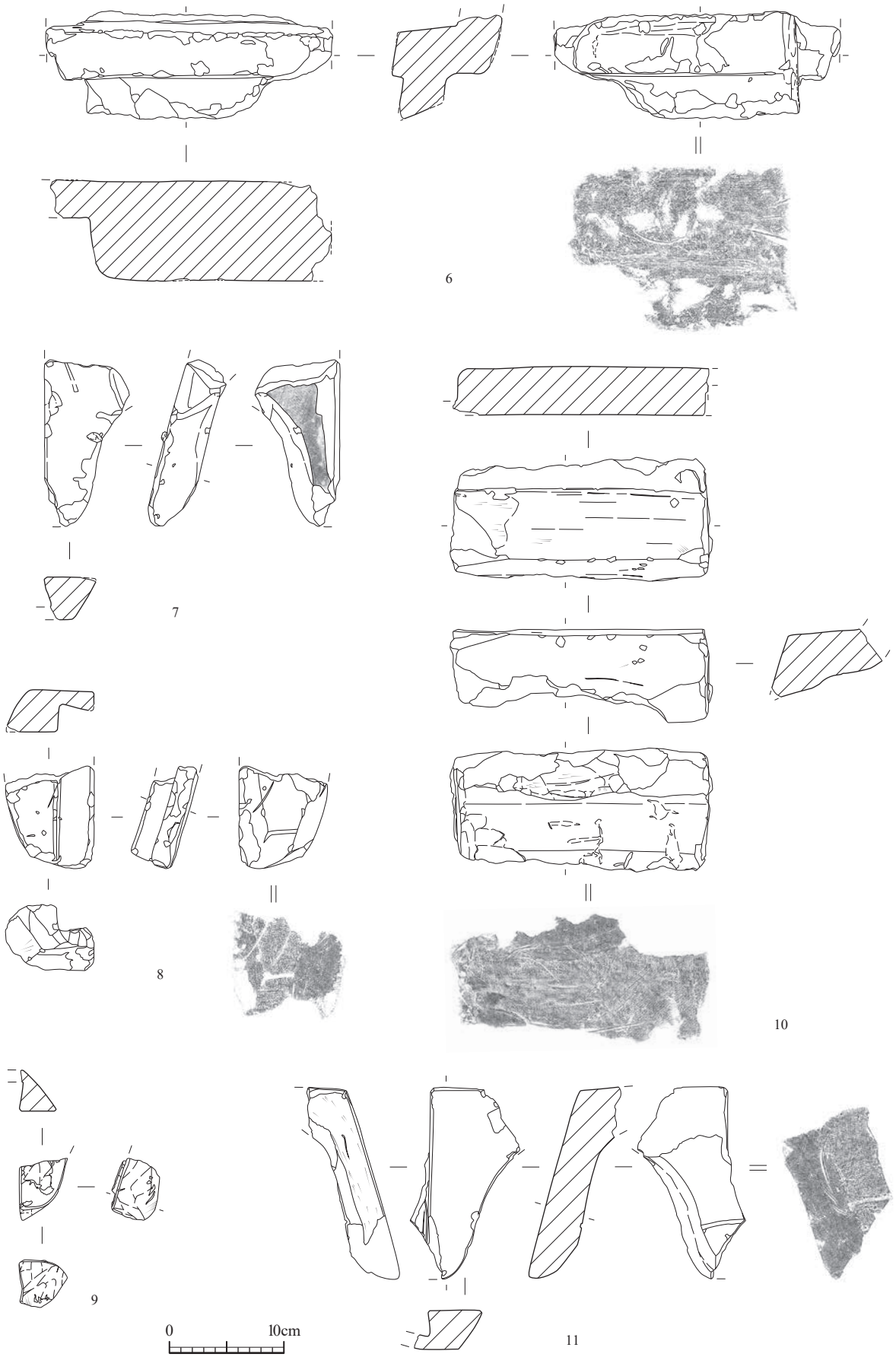
挿図番号 図版番号	番号	種類	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
					口径	器高	底径		遺構	層序
第 184 図 図版 21	1	塼瓦	Ⅷ類 有文Ⅰ	B ～ C 部	―	―	―	灰色を呈する。凸面 C 部中央に珠文 13 点を内包する左巻三つ巴文を配する。凹面に摩滅した布目痕が全体的にみられ、下端は緩やかな曲面の造形。両側端部には噛み合わせの段差が一部残る。	Ⅰ区 SG ２	
第 185 図 図版 21	2	塼瓦	Ⅷ類 有文Ⅰ	B ～ C 部	―	―	―	灰色を呈する。凸面 C 部に珠文（残存８点）を内包する左巻き三つ巴文を施す。凹面は段差を作り、C 部下端に緩やかな曲面の抉りを施す。抉りの箇所以外は布目痕が残る。	Ⅴ区トレ 14SF5001	造成２炭
	3	塼瓦	Ⅷ類 有文Ⅱ	B ～ C 部	―	―	―	褐色を呈する。凸面 C 部に珠文（残存 12 点）を内包する左巻き三つ巴文が施される。三つ巴文の左側に僅かな盛り上がりがあり、別に文様があった可能性がある。凹面には布目痕が残る。	Ⅳ区	Ⅰ層
	4	塼瓦	Ⅷ類 有文Ⅱ	B ～ C 部	―	―	―	褐色を呈する。凸面 C 部に珠文（残存７点）を内包する左巻き三つ巴文を施す。凹面に段を成形し、全面に布目痕が残る。	Ⅴ区トレ 13SF5001	１層
	5	塼瓦	Ⅷ類 有文Ⅱ	C 部	―	―	―	褐色を呈する。凸面 C 部に珠文（残存８点）を内包する左巻き三つ巴文を施す。また、三つ巴文は C 部側端に寄る。凹面に布目痕が残る。	Ⅴ区トレ 13SF5001	造成２・３
第 186 図 図版 21	6	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ	B ～ C 部	―	―	―	褐色を呈する。凸面 C 部上部に縁が付き、側端部には噛み合わせの段差が残る。C 部両側面下端は欠損しているが、元はアーチ状の造形が想定される。凹面には布目痕が残る。	Ⅲ区	Ⅲ 6d 層
	7	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ もしくはⅡ	C 部	―	―	―	灰色を呈する。凸面 C 部は全体的に平坦に整形され、中央に金属粒が付着する。凹面に布目痕が残り、下端から上部にかけて滑らかな曲面に整形される。	Ⅴ区	Ⅲ２層
	8	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ もしくはⅡ	C 部	―	―	―	灰色を呈する。C 部下部片。側面に噛み合わせの段差があり、凹面に布目痕が残る。	Ⅴ区	Ⅲ３ｃ層
	9	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ もしくはⅡ	C 部	―	―	―	灰色を呈する。C 部下先端片。凸面に漆喰が付着。	Ⅴ区	Ⅲ３a 層
	10	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ	B ～ C 部	―	―	―	灰色を呈する。凸面 B と C 部は平坦に整形され、両側端部に噛み合わせの段の痕を残す。C 部下端やや中央を曲面に抉る整形がされる。凹面に布目痕が残る。	Ⅴ区	Ⅲ３a 層
	11	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ	B ～ C 部	―	―	―	灰色を呈する。凸面 C 部は平坦。側面に噛み合わせの段差が僅かに残る。凹面に布目痕が残り、下端から滑らかな曲面を描くように整形。	Ⅴ区	Ⅲ３ｃ層
第 187 図 図版 21	12	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ もしくはⅢ	A ～ C 部	―	―	―	褐色を呈する。凸面 A 部は曲面に整形、B と C 部は平坦な面になる。凹面は緩やかな段になり、布目痕が残る。	Ⅴ区トレ 13SF5001	１層
	13	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ もしくはⅢ	B ～ C 部	―	―	―	灰色を呈する。B 部と C 部が合わさる角と考えられる。噛み合わせの段差が明瞭に残る。	Ⅴ区トレ 14SF5001	造成２・３
	14	塼瓦	Ⅷ類 無文Ⅲ	B ～ C 部	―	―	―	褐色を呈する。凸面は平坦な B 部から屈折して、C 部も下部まで平坦に整形する。C 部下端は直線的に造形され、凹面は C 部下部を除いて布目痕が残る。	Ⅳ区	Ⅲ 20 層
	15	塼瓦	Ⅷ類 その他	―	―	―	―	褐色を呈する。全形想定不可。有文タイプ、無文Ⅰにみられるような縁が残り、それに略三角形に破損した部位が直角に接合する。裏面には緩やかな曲面の造形がみられる。	Ⅴ区トレ 15SF5001	造成２・３
	16	塼瓦	Ⅷ類	A 部	―	―	―	灰色を呈する。厚手で半円状に造形される。整形時のものか、細い筋がみられる。凹面に布目痕が残る。	Ⅴ区トレ 14 西	Ⅲ 25 層
	17	塼瓦	Ⅷ類	A ～ B 部	―	―	―	灰色を呈する。A 部は半円状に成形され、凸面 B 部は平坦面が続くと想定される。凹面は布目痕が残るが、一部ナデ消しがみられる。	Ⅴ区トレ 14 西	Ⅱ層



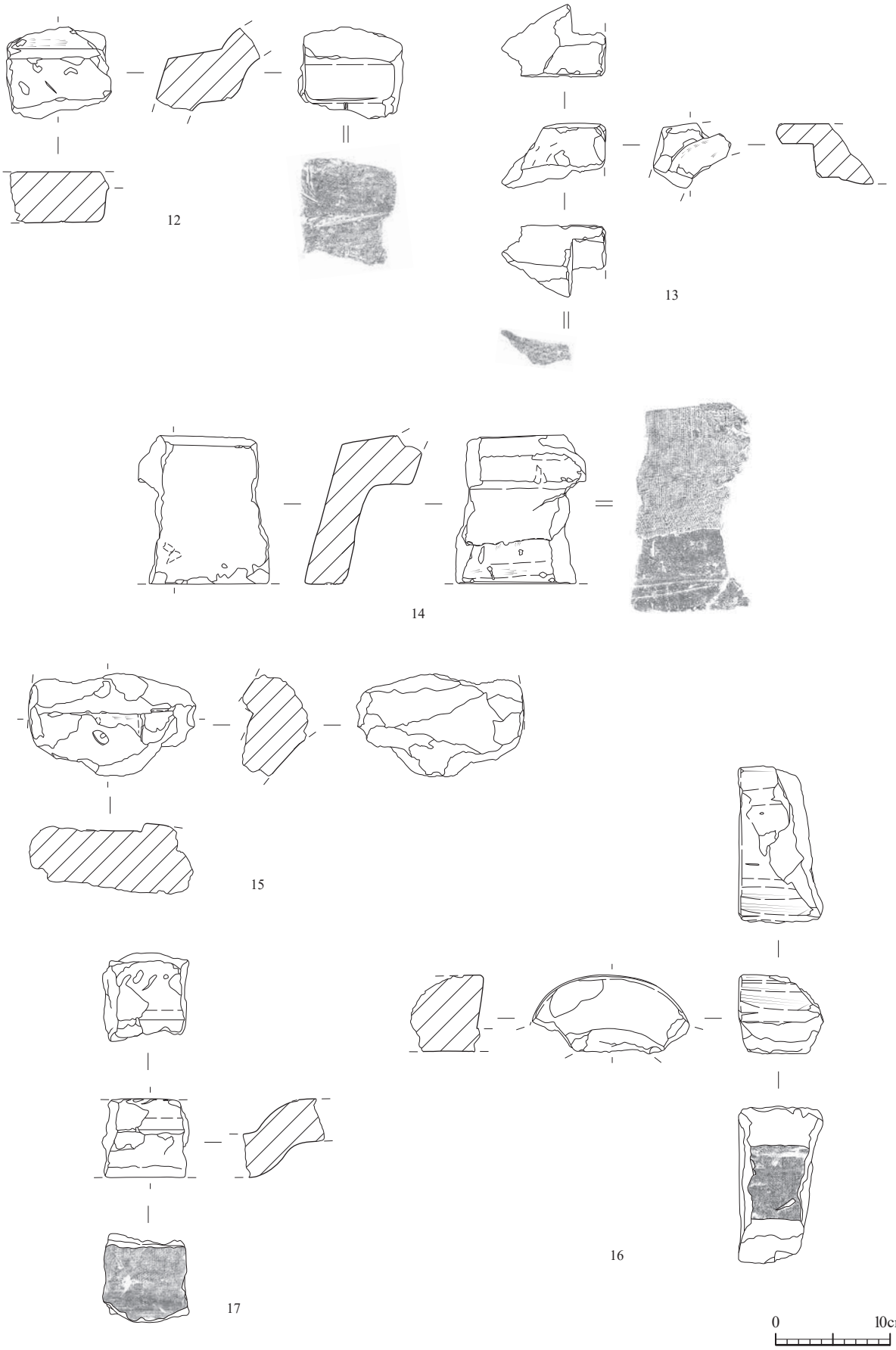
第 184 図　塼瓦Ⅷ類１



第 185 図　塼瓦Ⅷ類２



第 186 図　塼瓦Ⅷ類３



第 187 図　塼瓦Ⅷ類４

第３節　自然遺物

第１項　脊椎動物遺体

今回の発掘調査で得られた脊椎動物遺体については、当センター所蔵の現生標本を参考にして同定作業を行った。加えて、丸山真史氏（東海大学）に同定作業中に調査指導をしていただいた。

分析資料はすべて発掘現場で取り上げられた資料（ピックアップ資料）である。一部の遺構では土壌サンプル採取の際に、サンプル内に脊椎動物遺体の混入が確認されたが、土壌サンプルについては洗浄作業等を実施することが出来ていないので、反映していないデータとなる。

今回の発掘調査では、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が確認された（第 40 表）。

同定資料に関しては、同定標本数（NISP）で示しており、最小個体数については算出していない。また、イヌ？などの同定判断が困難な資料に関しては、各遺構の集計表には記載しているが、地区毎集計表やグラフデータからは省いている。例外として、ブタ？、イノシシ / ブタ？はイノシシ / ブタとして集計した。ウシ？、ウマ？、ウシ / ウマ？はウシ / ウマとして集計した。

第 40 表　脊椎動物遺体種類一覧

軟骨魚綱	CHONDRICHTHYES
サメ類	Lamniformes
エイ目	Rajifomes
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ダツ科	Belonidae
ボラ科	Mugilidae
カマス科	Sphyraenidae
ハタ科	Serranidae
アジ類	Carangidae
タチウオ科	Trichiuridae
シイラ属	Coryphaena
フエダイ科	Lutjanidae
クロダイ属	Acanrhpagrus
タイ科	Sparidae
ヨコシマクロダイ	Monotaxis grandoculis
フエフキダイ科	Lethrinidae
ベラ科	Labridae
ブダイ科	Scaridae
ニザダイ科	Acanthuridae
アイゴ科	Siganidae
モンガラカワハギ科	Balistidae
爬虫綱	REPTILIA
ウミガメ類	Chelonidae
鳥綱	AVES
カモ類	Anatidae (small)
ニワトリ	Galus galus
哺乳綱	MAMMALIA
ネズミ科	Muridae
イヌ	Canis familiaris
ネコ	Felis catus
ウマ	Equus feres
ウシ／ウマ	Bos taurus／Equus feres
ブタ	Sus scrofa domesticus
イノシシ／ブタ	Sus scrofa／S. s.domesticus
ヤギ	Capra hircus
ウシ	Bos taurus
イルカ	Delphinidae
ジュゴン	Dugong dugon

魚類　種同定に用いる部位を主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨を基本的な対象とし、必要に応じて擬鎖骨、舌顎骨、口蓋骨、上咽頭骨、下咽頭骨、棘などを加えた。大型魚種と思われる椎骨等も見られたが、サメ類以外に関しては椎骨での同定作業は行わなかった。

爬虫類　Ⅲ区及びⅤ区で出土している。

鳥類　ニワトリは烏口骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、手根中手骨、大腿骨、脛足根骨、足根中足骨を同定した。

カモ科の可能性がある資料も得られている。また、鳥類に属し、同定が困難な資料についてはトリとして報告する。

哺乳類　イノシシ / ブタとしたものが最も多く出土しており、それに類するが同定が困難な資料をイノシシ / ブタ？として集計した。ウシ、ウマも同様でどちらかに属するものはウシ / ウマとした。今回の調査では、イノシシ / ブタ、ウシ、ウマ、ウシ / ウマの遺体が主体を占めている。

第 41 表　脊椎動物遺体　出土数

種類＼地区	Ⅲ区 破片数	Ⅳ区 破片数	Ⅴ区 破片数
魚類	231	261	1754
爬虫類	1	0	1
鳥類	47	48	96
哺乳類	1050	552	1785
合計	1329	861	3636

第 42 表　魚類　同定標本数（NISP）

種類＼地区	Ⅲ区 （N ＝ 113）	Ⅳ区 （N ＝ 91）	Ⅴ区 （N ＝ 856）
サメ類	13	5	8
エイ目	0	0	2
ダツ科	0	0	16
ボラ科	0	0	1
カマス科	0	0	1
ハタ科	8	12	187
アジ科	13	4	36
タチウオ科	0	0	2
シイラ科	0	0	6
フエダイ科	1	3	14
クロダイ属	2	1	22
タイ科	8	6	17
フエフキダイ科	50	37	280
ベラ科	6	13	65
ブダイ科	12	9	166
ニザダイ科	0	1	14
アイゴ科	0	0	4
モンガラ カワハギ科	0	0	15
合計	113	91	856

その他、イヌ、ネコ、ヤギ、ネズミ科に属するものが出土している。

骨長計測は、鳥類・哺乳類で実施し、計測は丸山真史氏に行っていただいた。対象部位・計測位置はDriecsh1976に従っている。

出土遺体群の概要　包含層からの出土が多いが、遺構に伴い出土した資料もある。

魚類椎骨や部位不明破片も合わせて集計したものが第41表である。調査区全体の同定標本数では、Ⅲ～Ⅴ地区で鳥類及び哺乳類の比率が５割以上を占める状況となっている（第188図）。

Ⅴ区では哺乳類の出土が最も多く５割を超える状況となるが、魚類の出土も多い。出土数において哺乳類が主体を占める状況については、首里城地区内の出土様相とは異なる可能性が高い。しかしながら、遺構の土壌サンプルの水洗選別を実施しておらず小型魚類の資料は算出していないため、若干の変動がおこる可能性はある。

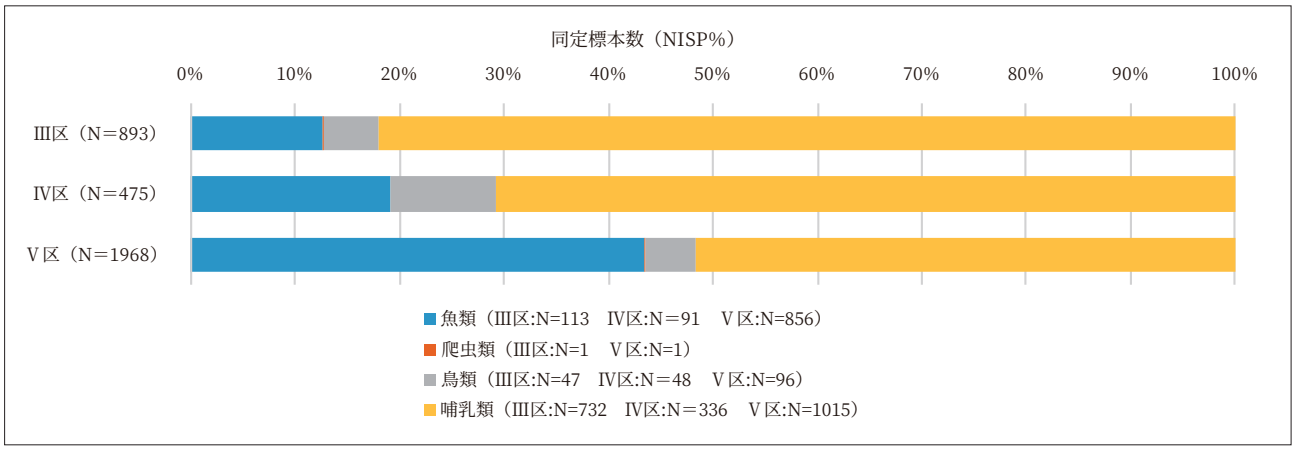
次に、出土した種類ごとに述べる。

魚類（第42表・第189図）　サメ類（ネズミザメ科）、エイ目、ダツ科、ボラ科、カマス科、ハタ科、アジ科、タチウオ科、シイラ科、フエダイ科、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、ニザダイ科、アイゴ科、モンガラカワハギ科が見られる。特にⅤ区から多く出土している状況が確認できた。

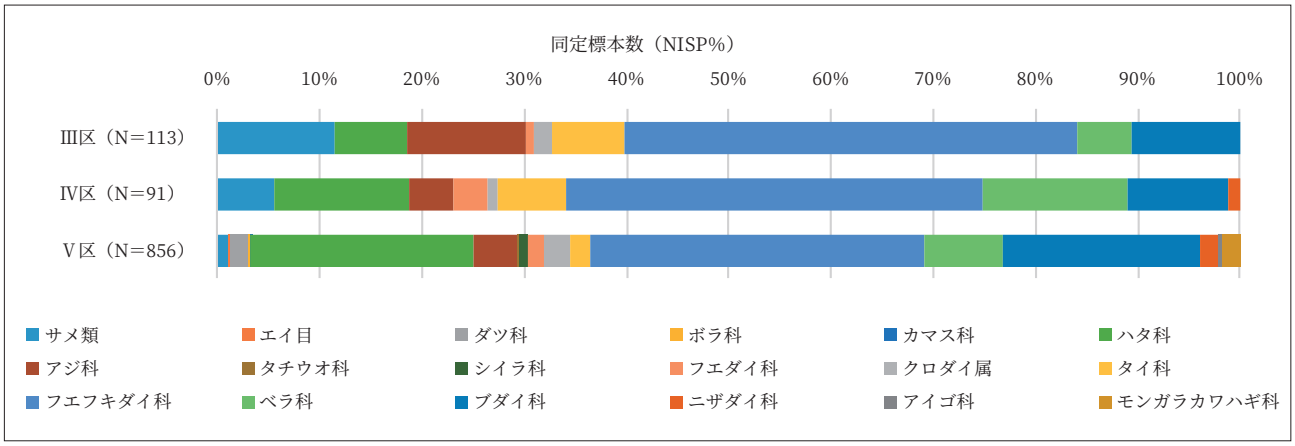
Ⅲ区　少数ではあるが石組土坑（SM）とした遺構からまとまって出土している状況がある。これらの石組土坑は、SM3001の年代観から17世紀前半～後半と考えられる近世期の遺構である。この遺構からは、フエフキダイ科、ブダイ科の資料が得られている。近い時期の類例として首里城跡御内原北地区のシーリ遺構がある。このシーリ遺構では土壌の水洗選別によって微細骨資料をもとに、トビウオ科やアジ科小型種などの分類群が得られている状況も考えると、今回の遺構からも検出される可能性は高い。

Ⅳ区　包含層からの出土が中心となるが、遺構内からも出土している。

Ⅴ区　包含層及び遺構内から出土しており、特にSM5002及びSF5001構築時の造成土から多く出土している（第43表・第190図）。SM5002は、ヤコウガイ殻などが多く得られている遺構だが、魚骨の出土数も多い。同定標本数ではブダイ科が最も多く、次いで、アジ科、フエフキダイ科と続く。ハタ科、ダツ科なども出土しており、Ⅲ区の石組土坑に比べ、多くの種類が確認されている。これらは食料残滓と考えられる。



第188図　脊椎動物遺体　同定標本数（NISP%）



第189図　魚類　同定標本数（NISP%）

SF5001 は、中城御殿跡と櫨園跡の間で確認した道跡である。構築時期は近世期であるが、造成に用いられた土はグスク期の土の可能性が非常に高いため、SF5001 構築層出土魚骨は近世期より古い時期の様相を示していると考えられる。フエフキダイ科、ブダイ科、ハタ科、ベラ科が多くみられる。

爬虫類　ウミガメと考えられる資料がⅢ区のⅡ層から得られている。Ⅴ区からは、カメ類と考えられる資料が SF5001 から得られている。

鳥類（第 44 表）　ニワトリ、カモ科？、トリが得られている。

Ⅲ区　遺構内でまとまって出土するのは少数であるが、SM3001 ～ 3003 の石組土坑内から出土している。

Ⅳ区　包含層からの出土が中心となるが、わずかに遺構内からも出土している。

Ⅴ区　包含層及び遺構内から出土している。魚骨と同様に、SM5002 及び SF5001 構築層からの出土が主体を占める。

哺乳類（第 45 表・第 191 図）　ネズミ科、イヌ、ネコ、ウマ、ウシ / ウマ、ブタ、イノシシ / ブタ、ヤギ、ウシ、ジュゴン？が得られている。

全体を通して、イノシシ / ブタが主体を占め、次いでウシ、ウシ / ウマとなる。食用として持ち込まれたものが多いと考えられる。

Ⅲ区　SM3001 ～ 3003 でまとまって出土しており、遺構内出土でもイノシシ / ブタが主体を占めている。

Ⅳ区　包含層からの出土が中心となるが、わずかに遺構内からも出土している。

Ⅴ区　包含層及び遺構から出土している。SM5002 では魚骨等の出土は多かったが、哺乳類骨の出土は少なかった。少数ながら、ウシが見られた。

SF5001 構築層からは、多くの動物骨が出土しているが、イノシシ / ブタが主体を占める。次いでウシの出土が多い。ウシ / ウマも見られ、ネコやヤギも得られている。

次に少数出土事例資料の概要を述べる。

ネズミ科

Ⅲ区　SM3001 で１点、Ⅲ層から２点出土している。

Ⅳ区及びⅤ区からの出土はなかった。

イヌ

Ⅲ区　Ⅰ層で３点、Ⅲ２c 層から１点出土しており、SA3001 構築層にあたる近世期の造成土中からの出土である。イヌに属する可能性のあるものが SM3006 から１点、Ⅲ層から１点出土している。

Ⅳ区　すべてⅠ層及びⅢ層から出土している。

Ⅴ区　すべてⅠ層からの出土である。

第 43 表　Ⅴ区　遺構出土魚類　同定標本数（NISP）

種類＼遺構	SM5002（N=115）	SF5001 造成土（N = 493）
エイ目	2	0
ダツ科	10	4
ボラ科	0	1
カマス科	1	0
ハタ科	12	102
アジ科	15	8
タチウオ科	2	0
シイラ科	0	6
フエダイ科	6	6
クロダイ属	9	5
タイ科	3	6
フエフキダイ科	15	184
ベラ科	8	38
ブダイ科	31	106
ニザダイ科	1	10
アイゴ科	0	3
モンガラカワハギ科	0	14
合計	115	493

第 44 表　鳥類　同定標本数（NISP）

種類＼地区	Ⅲ区（N = 47）	Ⅳ区（N = 48）	Ⅴ区（N = 96）
ニワトリ	36	43	77
ニワトリ？	0	0	12
カモ科？	1	0	0
トリ	10	5	7
合計	47	48	96

第 45 表　哺乳類　同定標本数（NISP）

種類＼地区	Ⅲ区（N = 732）	Ⅳ区（N = 336）	Ⅴ区（N = 1015）
ネズミ科	3	0	0
イヌ	4	10	4
ネコ	6	5	4
ウマ	16	27	39
ウシ／ウマ	90	46	95
ブタ	1	3	0
イノシシ / ブタ	534	212	669
ヤギ	19	8	23
ウシ	59	25	180
ジュゴン？	0	0	1
合計	732	336	1015

第 46 表　Ⅲ区　遺構出土哺乳類　同定標本数（NISP）

種類＼地区	SM3001（N = 38）	SM3002（N = 5）	SM3003（N = 119）
ネズミ科	1	0	0
ウマ	1	0	0
ウシ／ウマ	2	0	4
イノシシ / ブタ	33	4	115
ヤギ	1	0	0
ウシ	0	1	0
合計	38	5	119

第 47 表　Ⅴ区　遺構出土哺乳類　同定標本数（NISP）

種類＼遺構	SM5002（N = 15）	SF5001 造成（N = 335）
ネコ	0	1
ウマ	1	2
ウシ／ウマ	1	15
イノシシ／ブタ	2	277
ヤギ	0	3
ウシ	11	37
合計	15	335

ネコ

Ⅲ区　SX3001 から２点、他はⅠ～Ⅲ層で出土している。ネコに属すると考えられるものが SM3008 から１点出土している。

Ⅳ区　Ⅰ層及びⅢ層から出土している。

Ⅴ区　SF5001 の構築層から１点、他はⅠ層及びⅡ層からの出土である。

ブタ

Ⅲ区　Ⅰ層からの出土。どのような経緯で出土したかは不明。

Ⅳ区　ブタ及びブタと同定可能な資料は SK4007 から１点、他はⅠ層及びⅢ層から出土している。

Ⅴ区からの出土はなかった。

ヤギ

Ⅲ区　SM3001 で１点、SX3004 から１点出土している。他はⅠ～Ⅲ層から出土している。遺構外出土の資料にはカットマークやチョップマークが確認できるものもあり、食用とされた可能性がある。Ⅲ層出土のものも多いため、近世期頃には持ち込まれていた可能性が高い。

Ⅳ区　すべてⅠ～Ⅲ層で出土している。

Ⅴ区　SF5001 構築層のなかでも黒味の強い層から出土している。他はⅠ～Ⅲ層で出土しており、Ⅳ層でも１点確認できた。

ジュゴン / イルカ類

Ⅳ区　イルカ類に属する可能性のあるものがⅠ層から１点出土している。

Ⅴ区　ジュゴン？が SP5032 内から１点出土している。

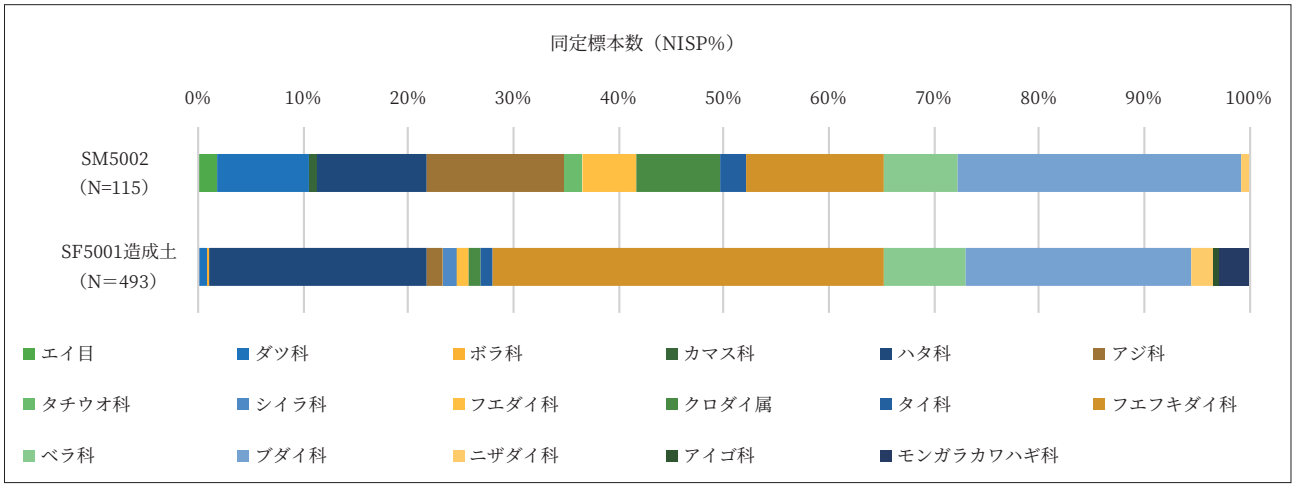
Ⅰ区の遺構　平成 25・26 年度に実施した調査の際に、魚骨及び動物骨が多く出土した遺構が多くあった。その中でも特徴的な SK22、SK51、SK59 の遺構について、改めて集計作業を行った（第 48 表・第 192 図）。

SK22　イノシシ / ブタの出土が多く、次いでウシ / ウマ、ウシ、ウマが出土している。

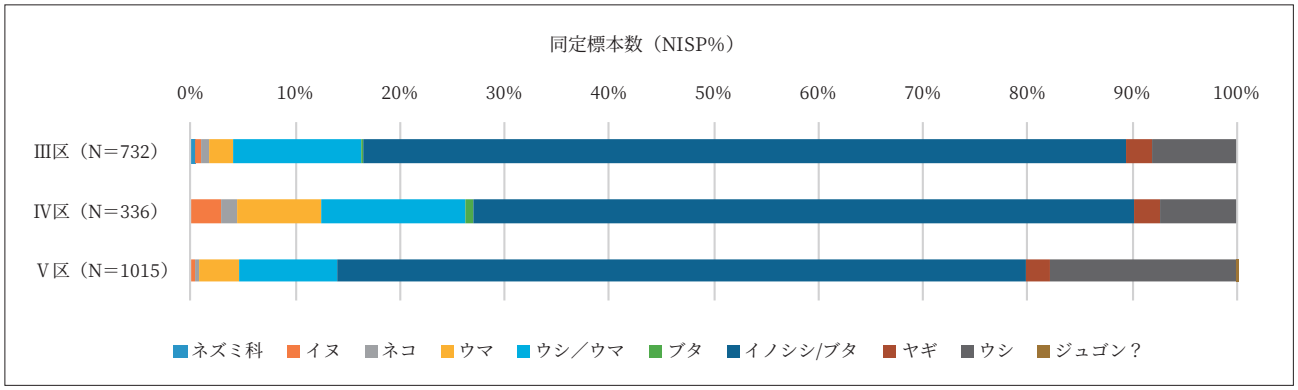
SK51　出土数が最も多い土坑。特にイノシシ / ブタの出土が多く、次いでウシが多い。ウマも一定数出土している。

SK59　イノシシ / ブタが多く、ウマ、ウシが次いで多く出土している。

３つの遺構から出土する動物骨では、イノシシ / ブタにカットマークが見られ、ウマにも確認できる。ウシは打ち割りされている資料もあった。他にも、螺旋状剥片なども見られることから、ほとんどの資料が食料残滓と考えられる。



第 190 図　Ⅴ区　遺構出土魚類　同定標本数（NISP%）



第 191 図　哺乳類　同定標本数（NISP%）

まとめ　今回の発掘調査では、様々な脊椎動物遺体が出土しているが、全体的な組成では、鳥類・哺乳類が多く出土し、魚類が少ない傾向が見られた。この傾向は、首里城内の発掘調査成果とはやや異なるため、食性利用もしくは廃棄方法が違っていた可能性が高い。

魚類については、フエフキダイ科が最も多く、ハタ科、ブダイ科、ベラ科の出土が見られた。これらの魚種利用は首里城地区と類似している傾向があるが、フエフキダイ科が最も多い点で、やや異なる可能性がある。

Ⅲ区の廃棄土坑(SM)に伴う魚骨は、フエフキダイ科とタイ科、ブダイ科であった。他魚種については椎骨等の同定不可資料に混ざっている可能性もあるが、今回確認できなかった。出土量としては少量にとどまることも特徴といえる。

Ⅴ区では、SM5002 と SF5001 構築層でまとまって出土が確認された。SM5002 では様々な魚種が確認できた。SF5001 構築層では、ハタ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科が主体を占める状況が確認できた。

鳥類では、Ⅲ～Ⅴ区をとおしてニワトリが多く確認でき、食用に用いられたものと考えられる。

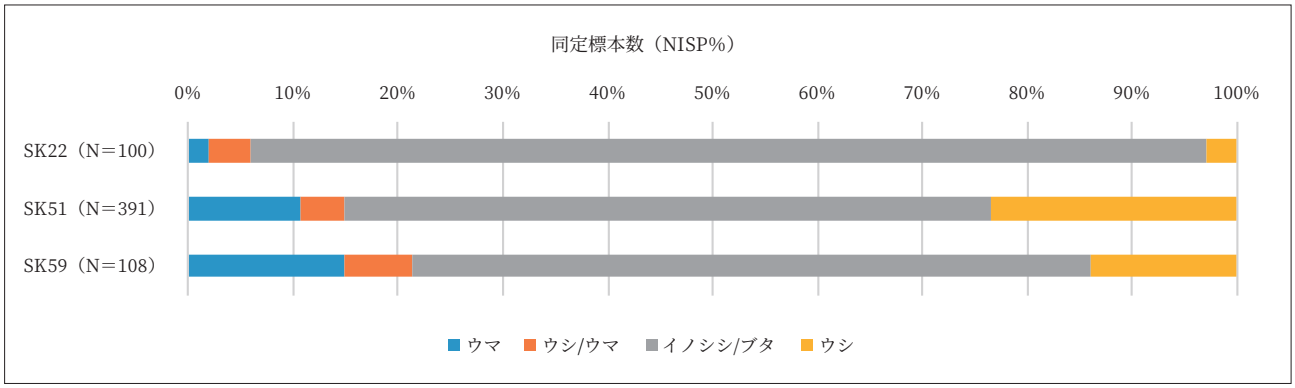
哺乳類では、Ⅲ～Ⅴ区をとおして、イノシシ / ブタが主体を占める。それ以外では、ウシ、ウマ、ウシ / ウマが多い状況が確認できた。これらはおそらく家畜類で構成されていると考えられる。首里城内での調査成果で、哺乳類が確認されているものでは、イノシシ / ブタが多いという特徴は共通している。

イヌやネコがⅢ層から出土しており、近世頃には飼育等がされていたと考えられるが、出土数も少ないことから検討が必要である。

ヤギはⅢ層から出土しており、わずかではあるが、SF5001 構築層からも出土している。出土資料の中にはカットマークなどの人為的解体痕がみられた。グスク期の土を造成に用いた土中から出土が認められるため、食用とされ、その残滓が造成土中に混入していた可能性が考えられる。

第 48 表　Ⅰ区　遺構出土哺乳類　同定標本数(NISP)

種類＼遺構	SK22 (N = 100)	SK51 (N = 391)	SK59 (N = 108)
ウマ	2	42	16
ウシ / ウマ	4	16	7
イノシシ / ブタ	91	241	70
ウシ	3	92	15
合計	100	391	108



第 192 図　Ⅰ区　遺構出土哺乳類　同定標本数(NISP%)

第 49 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 a

SK22

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	計
ニワトリ？ / ウズラ？	手根中手骨	ほぼ完形	―				2		2
ウマ	肋骨	骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				1	1
	指骨（末節骨）	―	―					1	1
ウシ / ウマ	肋骨	骨幹部	―					2	2
	肋軟骨	―	―					1	1
	大腿骨	遠位部	未癒合（遠位端）				1		1
イノシシ / ブタ	上顎骨	上顎体 /I1I3	I1I3 未萌出			1			1
		上顎体 /dI2	―				1		1
	遊離歯（上顎）	dI2	―			1			1
	椎骨（軸椎）	―	未癒合					1	1
			―					1	1
	椎骨（頸椎）	破片	―					2	2
		―	未癒合					2	2
			―	切痕				1	1
								1	1
	椎骨（頸椎？）	破片	―					1	1
	椎骨（胸椎）	棘突起	―					1	1
	椎骨（腰椎）	―	―					1	1
	椎骨（尾椎）	―	―					2	2
	椎骨	―	―					2	2
	肋骨	近位端	―			1			1
		近位端 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1	1		2
		近位端 - 骨幹部	―			1	1		2
		近位部	―			1	1		2
		近位部 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
							1		1
		骨幹部	―	切断			1		1
						1		7	8
	肩甲骨	近位部	―					1	1
		骨幹部	―					1	1
		骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
		骨幹部 - 遠位端	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
		遠位部	未癒合（遠位端）			1			1
	上腕骨	近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	ﾁｮｯﾌﾟﾏｰｸ？		1			1
	橈骨	近位端 - 骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ , ﾊﾂﾘ		1			1
							1		1
		近位部 - 遠位端	未癒合（近・遠位端）			1			1
		近位部 - 骨幹部	未癒合？（近位端）				1		1
		骨幹部	―					1	1
	尺骨	近位端 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
		近位端 - 骨幹部	―				1		1
		近位部	―	被熱		1			1
						3			3
		近位部 - 骨幹部	未癒合（近位端）	ﾁｮｯﾌﾟﾏｰｸ			1		1
						1			1
		遠位端	未癒合（遠位端）				1		1
	手根骨（中間）	―	―				1		1
	手根骨	橈側	―			1			1
		尺側	―			1			1
	中手骨（Ⅲ）	―	―			1			1
	中手骨（Ⅳ）	ほぼ完形	―			1	1		2
		近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）			1			1
	中手骨（Ⅴ）	ほぼ完形	―				1		1
	寛骨	腸骨	未癒合			1			1
			―			1			1
		腸骨 - 坐骨	―			1	1		2
		坐骨	未癒合				1		1
	大腿骨	近位骨端（破片）	未癒合（近位端）			1			1
		近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
						1	1		2
			未癒合（近位端）	ﾊﾂﾘ			1		1
		遠位端	未癒合（遠位端）				1		1
	膝蓋骨	―	―				1		1
	脛骨	ほぼ完形	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
		近位端	未癒合（近位端）				1		1
		近位部 - 遠位端	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
		近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）			1			1

第 50 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 b

SK22（つづき）

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	計
イノシシ / ブタ	脛骨	近位部 - 遠位部	未癒合(遠位端)				1		1
		遠位端	―	螺旋状剥片			1		1
	腓骨	完形	―				1		1
		骨幹部	―			2			2
	距骨	―	―				1		1
	踵骨	―	―				1		1
	足根骨(Ⅳ)	―	―				1		1
	中足骨(Ⅳ)	近位端 - 遠位部	―			1			1
	中足骨(Ⅴ)	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)			1			1
	指骨(基節骨)	完形	―				1		1
ウシ	椎骨(胸椎？)	椎体	―					1	1
	中手骨	骨幹部	―	打ち割り				1	1
	膝蓋骨	ほぼ完形	―			1			1
不明	不明	―	―					2	2
合　計						34	36	34	104

SK51

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	計
ウマ	下顎骨	結合部	―	打ち割り？			1		1
	肋骨	近位部	―				2		2
		近位部 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
		近位部 - 骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			2	2	4
							1		1
		骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				13	13
						1	2	7	10
	仙骨	―	―					1	1
	肩甲骨	骨幹部	―				1		1
		骨幹部 - 遠位端	―	叩切 , ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
	橈骨	骨幹部	―	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
				ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
	寛骨	寛骨臼付近	―	打ち割り				1	1
		寛骨臼 - 坐骨	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
	大腿骨	遠位端	未癒合(遠位端)				1		1
	脛骨	近位部 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
	指骨(末節骨)	―	―					1	1
ウマ？	肋骨	骨幹部	―					5	5
		骨幹部 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
ウシ / ウマ	椎骨(頸椎)	破片	―					3	3
	椎骨(頸椎？)	―	幼獣？					1	1
	椎骨(胸椎)	棘突起	幼獣？	ｶｯﾄﾏｰｸ				1	1
	椎骨(胸椎？)	棘突起？	―					1	1
	肋骨	骨幹部	―					2	2
		遠位部	―					1	1
イノシシ / ブタ	頭蓋骨	前頭骨	未癒合			1	1		2
		側頭骨	未癒合			1			1
		頭頂骨 + 後頭骨	未癒合	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
				叩切		1			1
						1			1
		後頭骨（頸静脈突起）	未癒合			1			1
			―				1		1
	上顎骨	上顎体 /dP2dP3dP4M1	M2 未萌出			1			1
		上顎体 /dP2dP4M1	M1 咬耗ほとんどなし				1		1
		上顎体	―			1			1
	遊離歯(上顎)	dP3	―				1		1
	下顎骨	下顎体 /dP2dP3dP4M1	M2 未萌出			1			1
		下顎体 /M1	P4M2 未萌出				1		1
		下顎体 /M1M2	M3 未萌出				1		1
		筋突起	―				1		1
	遊離歯	臼歯	―					1	1
	椎骨(環椎)	―	―					1	1
	椎骨(胸椎)	棘突起	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				2	2
								7	7
		―	未癒合					3	3
	椎骨(胸椎？)	棘突起	―					1	1
	椎骨(腰椎)	棘突起	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				1	1
								1	1
		横突起	未癒合					1	1
			―					1	1
		―	未癒合					3	3

第 51 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 c

SK51（つづき）

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	計
イノシシ / ブタ	椎骨(腰椎？)	棘突起	―					1	1
		椎体	未癒合					1	1
	椎骨(仙椎)	―	未癒合					1	1
	椎骨(尾椎)	―	―					1	1
	椎骨	破片	―					1	1
	肋骨(第 1)	近位端	―			2			2
	肋骨	近位端	―	切断		1			1
						2	1		3
		近位端 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
							1		1
		近位端 - 骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			3		3
						10	16		26
		近位部	―				7		7
		近位部 - 遠位部	―			2			2
		近位部 - 骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
							3		3
		骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		2	1	6	9
				叩切			1		1
				ｶｯﾄﾏｰｸ , 切断				1	1
				切断				1	1
				ﾊﾂﾘ				1	1
					骨増殖			1	1
						5	7	35	47
		骨幹部 - 遠位部	―			1			1
		遠位部	―	切断		1			1
	肩甲骨	近位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
						1			1
		近位部 - 遠位端	―				1		1
		骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
		骨幹部 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
		骨幹部 - 遠位端	未癒合(遠位端)			1			1
			―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
		前縁	―				1		1
		後縁	―	ﾊﾂﾘ		1	1		2
						2	2		4
		遠位部	―			1			1
		遠位端	―			1	1		2
	上腕骨	近位端	未癒合(近位端)			1			1
		近位部	未癒合(近位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
				叩切		1			1
		近位部 - 遠位部	未癒合(近位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
			未癒合(近・遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ			2		2
			―				1		1
		近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)	螺旋状剥片？		1			1
				螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
		骨幹部	―				1		1
	橈骨	骨幹部 - 遠位部	未癒合(遠位端)				1		1
	尺骨	近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)			1	1		2
	中手骨(Ⅲ)	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)				2		2
			―	切断			1		1
	中手骨(Ⅳ)	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ？			1		1
							1		1
	寛骨	腸骨	未癒合			1			1
			―	ﾊﾂﾘ		1			1
				叩切			1		1
							1		1
		腸骨 - 坐骨	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
							1		1
		腸骨 - 寛骨臼	―			1			1
		寛骨臼付近	―			1	1		2
		坐骨	未癒合	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
						1			1
			―	叩切			1		1
						2			2
	大腿骨	近位骨端（破片）	未癒合				1		1
		近位部 - 遠位部	未癒合(近・遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1

第 52 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 d

SK51（つづき）

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	計
イノシシ / ブタ	大腿骨	近位部 - 遠位部	―	カットマーク			1		1
		骨幹部	小さい、幼獣				1		1
		骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）				1		1
			―				1		1
		遠位部	未癒合（遠位端）	カットマーク		1			1
						1			1
		遠位端	未癒合（遠位端）			1			1
	膝蓋骨	ほぼ完形	―				1		1
	脛骨	近位端	未癒合（近位端）				1		1
		近位端 - 骨幹部	未癒合（近位端）	カットマーク			1		1
		近位部	未癒合（近位端）	螺旋状剥片		1			1
		近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）	肉削ぎ痕			1		1
		近位部 - 遠位部	未癒合（近・遠位端）	カットマーク	遠位部に病変	1			1
						1			1
						1			1
		近位部 - 骨幹部	未癒合（近位端）				1		1
		骨幹部	―				1		1
		骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	叩切			1		1
							1		1
	脛骨？	遠位部？	未癒合（近位端）				（右？）1		1
	腓骨	近位部 - 遠位部	未癒合（遠位端）				1		1
		骨幹部	―				1	1	2
	距骨	ほぼ完形	―				2		2
	踵骨	ほぼ完形	―				1		1
	中足骨（III）	近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）			1	1		2
	中足骨（IV）	近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）				3		3
	指骨（基節骨）	ほぼ完形	―				1		1
		近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）			1			1
イノシシ / ブタ？	肩甲骨？	骨幹部	―					（不明）1	1
ウシ	頭蓋骨	側頭骨（頬骨突起）	―	カットマーク			1		1
	下顎骨	下顎枝（前位）	―	打ち割り			1		1
	椎骨（軸椎）	―	―	叩切				1	1
	椎骨（頸椎）	―	―					2	2
	椎骨（胸椎）	棘突起	―	カットマーク				2	2
	肋骨	近位端	―	カットマーク		1			1
		近位端 - 遠位部	―	カットマーク			1		1
		近位端 - 骨幹部	―	切断，カットマーク		1	1		2
				切断		1			1
		近位部 - 遠位部	―	カットマーク				1	1
		近位部 - 骨幹部	―	カットマーク		1			1
		骨幹部	―	カットマーク				6	6
				カットマーク？				1	1
								10	10
		骨幹部 - 遠位部	―	カットマーク				1	1
		遠位部	―					1	1
	肩甲骨	近位部 - 骨幹部	―				1		1
		骨幹部	―			1			1
		後縁	―	螺旋状剥片			1		1
	上腕骨	近位部 - 遠位端	未癒合（近位端）	カットマーク			1		1
	橈骨	骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	螺旋状剥片，カットマーク			1		1
		遠位端	―	打ち割り			1		1
	手根骨（II + III）	―	―				1		1
	手根骨（中間）	―	―			1			1
	手根骨（IV）	―	―	カットマーク			1		1
	手根骨	橈側	―	カットマーク		1			1
							1		1
		尺側	―			1			1
	中手骨	近位端	―	螺旋状剥片		1	1		2
		近位端 - 骨幹部	―	螺旋状剥片，カットマーク			1		1
		遠位端	未癒合（遠位端）	打ち割り				1	1
			―	螺旋状剥片		1	1		2
	大腿骨	遠位部	未癒合（遠位端）	螺旋状剥片，カットマーク		1			1
			―	螺旋状剥片		1			1
	脛骨	遠位端	―	螺旋状剥片			1		1
		破片	―	螺旋状剥片			2		2

第 53 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 e

SK51（つづき）

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	計
ウシ	距骨	―	―				1		1
	踵骨	―	未癒合			1			1
			―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1	1		2
			―			1	1		2
	足根骨(Ⅳ)	―	―			1			1
	足根骨(Ⅳ＋中心)	―	―				2		2
	中足骨	近位端 - 骨幹部	―	螺旋状剥片		1			1
		近位端 - 骨幹部 1/2 半存		螺旋状剥片 , 打ち割り			1		1
		骨幹部 - 遠位端	―	螺旋状剥片		1	1		2
		遠位端	―	螺旋状剥片			（右？）1		1
		破片	―	螺旋状剥片		1			1
	中手骨 / 中足骨	遠位端	未癒合？（遠位端）					1	1
	指骨(基節骨)	完形	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
						3	2		5
		近位端 - 遠位部	―				1		1
		近位部 - 遠位端	―				1		1
	指骨(中節骨)	完形	―	叩切		1			1
							5		5
	指骨(末節骨)	完形	―			3	3		6
ウシ？	肋骨	近位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ？			1		1
合　計						1 / 100	1 / 150	140	391

SK59

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	計
ウマ	頭蓋骨	側頭骨	―			1			1
	肋骨	近位部 - 遠位部	―				1		1
		近位部 - 骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
						1			1
	手根骨(Ⅲ)	―	―				1		1
	手根骨(Ⅳ)	―	―				1		1
	中手骨(Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ)	近位端 - 骨幹部	―				1		1
	中手骨(Ⅲ)	完形	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
	大腿骨	近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
		遠位部	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
	脛骨	近位部 - 遠位端	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
	距骨	完形	―			1			1
	踵骨	完形	―			1			1
	指骨(基節骨)	骨幹部 - 遠位端	―	ｶｯﾄﾏｰｸ , 打ち割り				1	1
	指骨(中節骨)	―	―					1	1
	指骨(末節骨)	―	老齢？		骨病変？			1	1
ウシ / ウマ	椎骨(胸椎)	棘突起	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				1	1
	肋骨	近位部	―				1		1
		骨幹部	―					5	5
イノシシ / ブタ	上顎骨	上顎体 /dP3dP4M1	M1 やや咬耗				1		1
	遊離歯(上顎)	M2	未萌出				1		1
	下顎骨	下顎体 /M1	M3 未萌出				1		1
		下顎角	―				1		1
		関節突起	―				1		1
	遊離歯(下顎)	C	―			1			1
	椎骨(環椎)	―	―					2	2
	椎骨(軸椎)	―	未癒合					1	1
	椎骨(頸椎)	―	未癒合					1	1
	椎骨(胸椎)	―	未癒合(前後椎体)	切断				1	1
			―	ｶｯﾄﾏｰｸ				1	1
								1	1
	肋骨	近位端 - 遠位部	―			2			2
		近位端 - 骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		2			2
							3		3
		近位部	―			1			1
		近位部 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
						1	3		4
		近位部 - 骨幹部	―				1		1
		骨幹部	壮齢～老齢(老齢より？)	ｶｯﾄﾏｰｸ				1	1
			―	ｶｯﾄﾏｰｸ				3	3
				ﾊｯﾂﾘ				1	1
						1		4	5
		遠位部	―					1	1
	肩甲骨	骨幹部 - 遠位端	―				1		1
	上腕骨	近位骨端（破片）	未癒合(近位端)			1	1		2
		近位部	未癒合？（近位端）				1		1

第 54 表　Ⅰ区鳥類・哺乳類集計表 f

SK59（つづき）

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	―	個数
イノシシ / ブタ	上腕骨	近位部 - 遠位端	未癒合(近位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
		骨幹部 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		2			2
						1			1
		遠位部	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
	橈骨	近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)			1			1
	橈骨・尺骨	ほぼ完形	橈骨・尺骨も癒合				1		1
	中手骨(Ⅲ)	ほぼ完形	―				1		1
		近位端 - 骨幹部	―			1			1
	中手骨(Ⅴ)	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)				2		2
	寛骨	ほぼ完形（一部欠損）	―				1		1
		腸骨	未癒合				1		1
		腸骨 - 坐骨	―			1	1		2
		寛骨臼付近	―				1		1
	大腿骨	近位部 - 遠位部	未癒合(近・遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
			―				1		1
		骨幹部	―				1		1
		骨幹部 - 遠位部	未癒合(遠位端)				1		1
	脛骨	近位部	未癒合(近位端)			1			1
		骨幹部	―			1	1		2
	腓骨	近位端	―			1			1
		骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
	距骨	―	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
	中足骨(Ⅳ)	ほぼ完形	―			1			1
イノシシ / ブタ？	不明	―	―					1	1
ウシ	遊離歯(上顎)	P4	咬耗かなり進む			1			1
	肋骨	近位端 - 骨幹部	―	切断？			1		1
		近位部 - 骨幹部	―	ﾊｯﾘ		1			1
		骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				1	1
			―					1	1
	橈骨・尺骨	近位端 - 骨幹部	―	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
	中手骨	近位端 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
	寛骨	腸骨	―				1		1
	大腿骨	近位部 - 遠位端	未癒合(近・遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
		遠位端	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
			―	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ			1		1
	脛骨	近位骨端（破片）	未癒合(近位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
		近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ		1			1
	足根骨(Ⅳ＋中心)	―	―			1			1
	中手骨 / 中足骨	遠位端	―					1	1
合　　計						37	41	30	108

第 55 表　Ⅰ区イノシシ／ブタ臼歯計測値(mm)

遺構	部位	顎骨	左 / 右	左				右				
			部分	dP2	dP3	dP4	M1	dP2	dP3	dP4	M1	M2
SK51	上顎骨	上	長	8.1	9.5	10.1	11.8	7.9	×	10.2	13	
			幅	4.3	―	9.1	11.5	4.2	×	9.1	11.5	
	遊離歯		長						10.5			
			幅						7			
	下顎骨	下	長	6.3	8.6	14.4	12.4				13.3	15.4
			幅	3.2	4	7.1	8.6				9.3	11.9
			咬耗指数	―	―	d	c				c	d
SK59	上顎骨	上	長						10.2	11.1	12.5	
			幅						7.3	9.3	12.1	
	遊離歯		長									16.7
			幅									14.2
	下顎骨	下	長								11.6	
			幅								8.8	
			咬耗指数								c ～ d	

第 56 表　Ⅰ区ウシ臼歯計測値(mm)

遺構	部位	顎骨	左 / 右	左
			部分	P4
SK59	遊離歯	上	長	17.8
			幅	19

第 57 表　III区魚類出土状況

SA3001

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエフキダイ科	前上顎骨		1			1
	歯骨	1				1
種不明	未分類				5	5
合　計		1	1	0	5	7

SA3006

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
ハタ科	主上顎骨		1			1
フエフキダイ科	椎骨				1	1
合　計		0	1	0	1	2

SM3001

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエフキダイ科	神経頭蓋骨(破片)			1		1
	椎骨				1	1
	前上顎骨	1				1
	歯骨		1			1
	主鰓蓋骨		1			1
	後側頭骨		1			1
ブダイ科	舌顎骨		1			1
種不明	神経頭蓋骨(破片)			1		1
	上擬鎖骨	1				1
	未分類				8	8
合　計		2	4	2	9	17

SM3002

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
種不明	未分類				3	3

SM3003

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエフキダイ科	主鰓蓋骨	1	1			2
種不明	神経頭蓋骨(破片)			1		1
	前上顎骨		1			1
	舌顎骨	1	1			2
	尾骨				1	1
	未分類				7	7
合　計		2	3	1	8	14

SM3006

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
タイ科	椎骨				1	1
種不明	未分類				2	2
合　計		0	0	0	3	3

SM3007

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエフキダイ科	口蓋骨	1				1

SM3008

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
種不明	未分類				1	1

SP3027

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
タイ科	角骨		1			1

SX3001

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエフキダイ科	椎骨				1	1
種不明	未分類				1	1
合　計		0	0	0	2	2

SX3005

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
ハタ科	主上顎骨		1			1

層序

分類＼出土地	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層
サメ類	13			
ハタ科			5	1
アジ科	6		7	
フエダイ科	1			
クロダイ属	1			1
タイ科	1		3	2
フエフキダイ科	12	3	18	4
ベラ科	1	1	4	
ブダイ科	1	1	6	3
種不明	20	9	37	18
合計	56	14	80	29

第 58 表　IV区魚類出土状況

SK4006

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
ハタ科	口蓋骨	1				1
	歯骨		1			1
	方骨		1			1
アジ科	椎骨				1	1
	角骨	1	1			2
フエダイ科	主上顎骨		1			1
	口蓋骨	1				1
フエフキダイ科	神経頭蓋骨（破片）			1		1
	椎骨				4	4
	前上顎骨	1				1
	前鰓蓋骨	1				1
	尾骨				1	1
ベラ科（シロクラベラ）	椎骨				6	6
	口蓋骨	1				1
	角骨	1				1
	舌顎骨	1				1
ベラ科	尾舌骨				1	1
	上擬鎖骨		1			1
ブダイ科	方骨		1			1
	舌顎骨	1				1
	主鰓蓋骨		1			1
種不明	神経頭蓋骨（破片）			1		1
	椎骨				3	3
	舌顎骨		1			1
	主鰓蓋骨		1			1
	尾骨				2	2
	尾部棒状骨				1	1
	未分類				89	89
合　計		9	9	2	108	128

SM4002

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエダイ科	舌顎骨	1				1
タイ科	歯骨		1			1
フエフキダイ科	椎骨				2	2
種不明	歯骨	1				1
合　計		2	1	0	2	5

SM4003

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
種不明	椎骨				1	1

SR4001

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
アジ科	角骨		1			1
種不明	未分類				3	3
合　計		0	1	0	3	4

SR4005

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
ベラ科（シロクラベラ）	歯骨	1				1
種不明	未分類				1	1
合　計		1	0	0	1	2

層序

分類＼出土地	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層
サメ類	1		4
ハタ科	2		7
アジ科			
フエダイ科			
クロダイ属			1
タイ科		2	3
フエフキダイ科	2	2	23
ベラ科			1
ブダイ科	1		5
ニザダイ科			1
種不明	6	2	58
合計	12	6	103

第 59 表　Ⅴ区魚類出土状況 a

SA5002

分類	部位＼左/右	左	右	不明	―	計
ハタ科	椎骨				1	1
	主上顎骨	1				1
	口蓋骨	1				1
	歯骨	1				1
	方骨	1				1
	主鰓蓋骨		1			1
	擬鎖骨		1			1
アジ科	椎骨				1	1
クロダイ属	椎骨				1	1
	前上顎骨	1				1
フエフキダイ科	椎骨				1	1
	前上顎骨	1	1			2
	主上顎骨	1				1
	角骨		1			1
	方骨		1			1
	主鰓蓋骨		1			1
	上擬鎖骨	1				1
ベラ科（シロクラベラ）	角骨		1			1
ブダイ科	椎骨				3	3
	前上顎骨		2			2
ニザダイ科	椎骨				1	1
	舌顎骨	1				1
	楯鱗				1	1
種不明	上擬鎖骨		1			1
	未分類				24	24
合　計		9	10	0	33	52

SA5005

分類	部位＼左/右	左	右	不明	―	計
ハタ科	擬鎖骨		1			1
フエフキダイ科	椎骨				1	1
	前上顎骨	1				1
種不明	未分類				1	1
合　計		1	1	0	2	4

SD5002

分類	部位＼左/右	左	右	不明	―	計
フエフキダイ科	前上顎骨		1			1
ベラ科	方骨	1				1
合　計		1	1	0	0	2

SD5004

分類	部位＼左/右	左	右	不明	―	計
フエフキダイ科	椎骨				1	1
	前上顎骨	1				1
ブダイ科	椎骨				1	1
種不明	神経頭蓋骨（破片）			1		1
	椎骨				1	1
	未分類				2	2
合　計		1	0	1	5	7

SF5001

分類	部位＼左/右	左	右	不明	―	計
ダツ科	前上顎骨	1	1			2
	歯骨		1			1
	上咽頭骨		1			1
ボラ科	主鰓蓋骨		1			1
ハタ科	鋤骨				3	3
	椎骨				25	25
	前上顎骨	2	4			6
	主上顎骨	7	5			12
	口蓋骨	1				1
	歯骨	1	4			5
	角骨	1	2			3
	方骨	1	2			3
	舌顎骨	2	5			7
	前鰓蓋骨	4	1			5
	主鰓蓋骨	2	2			4
	角舌骨	3	4			7
	上擬鎖骨	4	2			6
	擬鎖骨	5	10			15
アジ科	椎骨				5	5
	主鰓蓋骨	1				1
	角舌骨	1				1
	上擬鎖骨		1			1
アジ科？	椎骨				3	3
シイラ科	椎骨				5	5
	前上顎骨	1				1
シイラ科？	歯骨	1				1
フエダイ科	椎骨				2	2
	前上顎骨		1			1
	角骨	2				2
	角舌骨		1			1
クロダイ属	前上顎骨		2			2
	歯骨	1	2			3
タイ科	椎骨				4	4
	前鰓蓋骨	1				1
	上擬鎖骨	1				1
フエフキダイ科（ヨコシマクロダイ）	椎骨				4	4
	擬鎖骨	1				1
フエフキダイ科	神経頭蓋骨（破片）			4		4
	椎骨				50	50
	前上顎骨	8	16			24
	主上顎骨	9	4			13
	口蓋骨	9	7			16
	歯骨	3	6	2		11
	歯			1		1
	角骨	5	6			11
	方骨	1	1			2
	舌顎骨	2	9			11

第 60 表　Ｖ区魚類出土状況 b

SF5001（つづき）

分類	部位＼左 / 右	左	右	不明	—	計
フエフキダイ科	前鰓蓋骨	4	10			14
	主鰓蓋骨	1	3			4
	角舌骨	3	1			4
	上擬鎖骨	2				2
	擬鎖骨		2			2
	尾骨				9	9
	尾部棒状骨				1	1
ベラ科（シロクラベラ）	椎骨				5	5
	前上顎骨	6	2			8
	主上顎骨	1				1
	歯骨	3	1			4
	上咽頭骨	1				1
	基鰭骨	3				3
ベラ科	椎骨				11	11
	前上顎骨		1			1
	歯骨	1	1			2
	下咽頭骨				1	1
	上擬鎖骨		1			1
ブダイ科	椎骨				30	30
	前上顎骨	9	12			21
	主上顎骨	4				4
	歯骨	6	5			11
	方骨	2	1			3
	下咽頭骨				2	2
	舌顎骨	4	5			9
	前鰓蓋骨	9				9
	主鰓蓋骨	3	4			7
	尾舌骨				2	2
	上擬鎖骨	1	1			2
	尾骨				4	4
	尾部棒状骨				2	2
ニザダイ科	椎骨				4	4
	舌顎骨		1			1
	主鰓蓋骨	2	1			3
	擬鎖骨	1				1
	基鰭骨			1		1
アイゴ科	神経頭蓋骨（破片）			1		1
	椎骨				2	2
モンガラカワハギ科	尾舌骨				3	3
	第１背鰭棘				7	7
	担鰭骨				4	4
種不明	神経頭蓋骨（破片）				53	53
	鋤骨				2	2
	椎骨				12	12
	前上顎骨		2			2
	主上顎骨			1		1

SF5001（つづき）

分類	部位＼左 / 右	左	右	不明	—	計
種不明	口蓋骨	1	1	1		3
	歯骨	2	1			3
	角骨		1			1
	舌顎骨			1		1
	前鰓蓋骨	2	1	4		7
	主鰓蓋骨		2	1		3
	角舌骨	2				2
	尾舌骨				1	1
	上擬鎖骨			3		3
	擬鎖骨		2			2
	基鰭骨			1		1
	尾骨				4	4
	未分類				434	434
軟甲綱（カニ）	不動指	1				1
合　計		155	163	21	694	1033

SK5001

分類	部位＼左 / 右	左	右	不明	—	計
種不明	未分類				1	1

SK5004

分類	部位＼左 / 右	左	右	不明	—	計
ハタ科	歯骨		1			1
アジ科	椎骨				1	1
タイ科	前上顎骨	1				1
フエフキダイ科	前上顎骨	1				1
	口蓋骨		1			1
	歯骨	1				1
ブダイ科	椎骨				1	1
種不明	未分類				3	3
合　計		3	2	0	5	10

SM5002

分類	部位＼左 / 右	左	右	不明	—	計
エイ目	椎骨				2	2
ダツ科	前上顎骨	3	5			8
	歯骨	2				2
カマス科（オニカマス？）	歯骨？	(左?)1				1
ハタ科	口蓋骨	1				1
	歯骨	1	2			3
	角骨	2				2
	方骨	2				2
	舌顎骨	1				1
	前鰓蓋骨	2				2
	擬鎖骨		1			1
アジ科	椎骨				15	15
タチウオ科	歯骨	1	1			2
タチウオ科？	前上顎骨 / 歯骨			1		1
フエダイ科	前上顎骨	1	3			4

第 61 表　Ⅴ区魚類出土状況 c

SM5002（つづき）

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエダイ科	歯骨		1			1
	角舌骨		1			1
クロダイ属	前上顎骨		3			3
	主上顎骨		1			1
	歯骨	3	1			4
	角骨		1			1
タイ科	椎骨				1	1
	口蓋骨	1				1
	主鰓蓋骨	1				1
フエフキダイ科	椎骨				8	8
	前上顎骨	1				1
	歯骨		1			1
	角骨		1			1
	前鰓蓋骨	1				1
	主鰓蓋骨	1				1
	上擬鎖骨	1	1			2
ベラ科（シロクラベラ）	前上顎骨	2	1			3
	歯骨	1	1			2
	上咽頭骨		1			1
	下咽頭骨				2	2
ブダイ科	椎骨				1	1
	前上顎骨	5	4			9
	歯骨	4	2			6
	上咽頭骨	5	3			8
	下咽頭骨				5	5
	主鰓蓋骨	1				1
	尾骨				1	1
ニザダイ科	椎骨				1	1
種不明	神経頭蓋骨（破片）			16		16
	椎骨				5	5
	歯骨	2				2
	歯			1		1
	方骨	1	1			2
	前鰓蓋骨	1				1
	主鰓蓋骨	1		1		2
	角舌骨			1		1
	擬鎖骨			1		1
	未分類				64	64
合　計		49	36	21	105	211

SP5032

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
アジ科	椎骨				3	3
種不明	椎骨				1	1
	未分類				3	3
合　計		0	0	0	7	7

SP5044

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
種不明	未分類				1	1

SP5065

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
ハタ科	角舌骨		1			1

SS5002

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
アジ科	椎骨				1	1
種不明	歯骨		1			1
	未分類				4	4
合　計		0	1	0	5	6

SS5004

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
ハタ科	擬鎖骨	1				1
フエフキダイ科	主鰓蓋骨	1	1			2
合　計		2	1	0	0	3

SX5001

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
ハタ科	歯骨		1			1
クロダイ属	歯骨	1				1
ベラ科	椎骨				1	1
種不明	椎骨				1	1
	尾骨				1	1
	未分類				3	3
合　計		1	1	0	6	8

SX5005

分類	部位＼左/右	左	右	不明	—	計
フエフキダイ科（ヨコシマクロダイ）	前上顎骨		1			1
種不明	主上顎骨			1		1
	未分類				2	2
合　計		0	1	1	2	4

層序

分類＼出土地	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層
サメ類	2	5	1	
ダツ科	1	1		
ハタ科	8	8	43	2
ハタ科？		1	4	
アジ科	3	1	2	1
フエダイ科		1	1	
クロダイ属		2	3	
タイ科	2	1	4	
フエフキダイ科	11	15	34	2
ベラ科	2	3	10	1
ブダイ科	3	7	12	
アイゴ科		1		
モンガラカワハギ科		1		
種不明	49	61	88	8
軟甲網（カニ）	1			
合　計	82	108	202	14

第 62 表　III区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a

SA3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	上腕骨	遠位部	—	ｶｯﾄﾏｰｸ	—		1			1
種不明	脛骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	部位不明	破片	—	—	—				6	6
合　　計						0	1	1	6	8

SA3006

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	上腕骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	大腿骨	近位端	—	—	—			1		1
		遠位端	—	—	—			1		1
	中足骨	骨幹部	—	—	—		1			1
ウシ / ウマ	遊離歯	臼歯	—	—	—			2		2
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合　　計						0	1	5	1	7

SA3008

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SD3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SK3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウマ	遊離歯（上顎）	P2	未萌出	—	—		1			1
イノシシ / ブタ	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	大腿骨	遠位骨端のみ	未癒合（遠位端）	—	—		1			1
	脛骨	近位部	—	螺旋状剥片	—		1			1
イノシシ / ブタ？	椎骨	椎体板	—	—	—				1	1
ウシ	踵骨	近位骨端のみ	—	—	—	1				1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				5	5
合　　計						1	3	1	6	11

SK3002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	肋骨	近位部 - 骨幹部	—	—	—	1				1

SM3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	橈骨	完形	—	—	—		1			1
	尺骨	近位部 - 骨幹部	—	—	—	1				1
	大腿骨	骨幹部 - 遠位端	—	—	—	1				1
ネズミ	大腿骨	近位部 - 遠位部	—	—	—		1			1
ウマ	中手骨	骨幹部 - 遠位端	—	—	—		1			1
ウシ / ウマ	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	部位不明	破片	—	—	—				1	1
イノシシ / ブタ	頭蓋骨	頭頂骨 + 前頭骨	—	—	—	1				1
		頭頂骨	—	—	—	1				1
		破片	—	—	—			1		1
	下顎骨	下顎体 P2P3	—	—	—	1				1
		下顎体 P3	—	—	—		1			1
		下顎体 M1	—	—	—		1			1
		下顎体 M2 M3	—	—	—	1				1
		下顎角	—	—	—		1			1
		破片	—	—	—			5		5
	遊離歯（下顎）	dI3	—	—	—	1				1
		I1	—	—	—	1	1			2
		I2	—	—	—	1	2			3
		I3	—	—	—		1			1
		C	—	—	—	1				1
		<M3>	未萌出	—	—		1			1
	肋骨	近位端 - 遠位端	—	—	—		2			2
		骨幹部	—	—	—		1	1		2
	上腕骨	近位部	未癒合（近位端）	—	—		2			2
		骨幹部 - 遠位端	—	—	—	1				1
	寛骨	坐骨	—	—	—	1				1
	中足骨（IV）	近位端 - 遠位部	—	—	—		1			1
イノシシ / ブタ？	肋骨	骨幹部	—	—	—			2		2
ヤギ	中手骨	近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	—	—		1			1
種不明	上顎骨	骨幹部	—	—	—		1			1
	大腿骨	近位端	—	—	—	1				1
	部位不明	破片	—	—	—				7	7
合　　計						13	19	10	8	50

第 63 表　III区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b

SM3002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	烏口骨	近位部 - 遠位部	—	—	—	1				1
	上腕骨	完形	—	—	—	1	1			2
	尺骨	近位部	—	—	—		1			1
イノシシ / ブタ	頭蓋骨	後頭骨	未癒合	—	—			1		1
	遊離歯（下顎）	dI2	—	—	—	1				1
	椎骨（頸椎）	棘突起	—	—	—				1	1
	中手骨（III）	近位部	—	—	—		1			1
ウシ	脛骨？	破片	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				2	2
合　　計						3	3	2	3	11

SM3003

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	肩甲骨	近位端	—	—	—	1				1
	脛足根骨	近位部	—	—	—		1			1
トリ	脛足根骨	骨幹部 - 遠位部	—	—	—		1			1
ウシ / ウマ	寛骨	破片	—	—	—			1		1
	部位不明	破片	—	—	—			3		3
イノシシ / ブタ	頭蓋骨	頭頂骨	—	—	—			1		1
		側頭骨 + 後頭骨	—	—	—	1				1
		側頭骨	—	—	—			2		2
		頬骨	—	—	—	1				1
		頬骨棘起	—	—	—		1			1
		後頭骨（頸静脈突起）	—	—	—		2			2
		破片	—	—	—			1		1
	上顎骨	上顎体 P3	—	—	—		1			1
	遊離歯（上顎）	C	—	—	—		1			1
	下顎骨	下顎枝	—	—	—	1				1
	椎骨（環椎）	完形	—	—	—				1	1
	椎骨（軸椎）	完形	—	—	—				1	1
	椎骨（頸椎）	完形	—	—	—				1	1
		椎体	—	—	—				4	4
		棘突起	—	—	—				1	1
		破片	—	—	—				1	1
	椎骨（胸椎）	完形	—	—	—				1	1
		ほぼ完形	—	—	—				1	1
		棘突起	—	—	—				5	5
		破片	—	—	—				1	1
	椎骨（腰椎）	ほぼ完形	—	—	—				1	1
		椎体	—	—	—				5	5
	肋骨	近位端	—	—	—	2				2
		近位端 - 遠位部	—	—	—		1			1
		近位端 - 骨幹部	—	—	—	1	2			3
		骨幹部	—	ｶｯﾄﾏｰｸ	—		1			1
				—	—	2	2	34		38
	肩甲骨	骨幹部 - 遠位端	—	—	—		1			1
	尺骨	近位部	—	—	—		1			1
	寛骨	腸骨 - 坐骨	—	—	—	1	1			2
		寛骨臼付近	—	—	—		1			1
		坐骨	—	—	—	1				1
	大腿骨	ほぼ完形	未癒合（近・遠位端）	—	—	1				1
		近位骨端のみ	未癒合（近位端）	—	—			1		1
		近位部 - 遠位端	未癒合（近・遠位端）	—	—		1			1
		遠位骨端のみ	未癒合（遠位端）	—	—	2				2
	膝蓋骨	完形	—	—	—	1				1
	脛骨	近位骨端のみ	未癒合（近位端）	—	—	1				1
		近位端	未癒合（近位端）	—	—	1	1			2
		近位部	—	—	—	1				1
	距骨	完形	—	—	—	1				1
	中足骨（III）	近位端 - 遠位部	未癒合（遠位端）	—	—		1			1
イノシシ / ブタ？	頭蓋骨	破片	—	—	—			3		3
	椎骨？	破片	—	—	—				2	2
	部位不明	破片	—	—	—				12	12
種不明	椎骨	椎体	—	—	—				1	1
	部位不明	破片	—	—	—				9	9
合　　計						19	20	46	47	132

第 64 表　III区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 c

SM3005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ？	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1

SM3006

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イヌ？	中手骨	完形	幼？	—	—		1			1
イノシシ / ブタ	肋骨	近位端 - 骨幹部	—	—	—		1			1
合　　計						0	2	0	0	2

SM3007

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	椎骨（腰椎）	棘突起	—	—	—				1	1
	肋骨	近位部	—	—	—	1				1
	肩甲骨	骨幹部	—	—	—	1				1
	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合　　計						2	0	0	2	4

SM3008

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ネコ？	大腿骨	骨幹部	—	—	—		1			1
イノシシ / ブタ	頭蓋骨	頭頂骨	—	—	—		1			1
		破片	—	—	—			4		4
	椎骨（軸椎）	破片	—	—	—				1	1
	肋骨	骨幹部	—	—	—			2		2
	肩甲骨	骨幹部	—	—	—	1				1
		破片	—	—	—			1		1
	上腕骨	遠位部	—	—	—	1				1
	橈骨	骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	—	—		1			1
	部位不明	破片	—	—	—				2	2
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合　　計						2	3	7	4	16

SM3009

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	肋骨	近位端 - 骨幹部	—	—	—	1				1

SP3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SP3009

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	遊離歯（下顎）	P4	—	—	—		1			1

SP3010

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SP3011

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SP3018

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウマ	遊離歯（下顎）	P3 /P4	—	—	—		1			1
イノシシ / ブタ	遊離歯（下顎）	C	—	—	—		1			1
合　　計						0	2	0	0	2

SP3024

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	腓骨	骨幹部	—	—	—			1		1
イノシシ / ブタ？	肩甲骨	破片	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				2	2
合　　計						0	0	2	2	4

第 65 表　III区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 d

SP3027

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウマ？	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	中手 / 中足骨	骨幹部	—	—	—			1		1
イノシシ / ブタ	橈骨	遠位部	未癒合（遠位端）	—	—		1			1
イノシシ / ブタ？	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				2	2
合　　計						0	1	3	2	6

SS3002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	肋骨	骨幹部	—	—	—		1			1

SS3004

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ / ウマ	部位不明	破片	—	—	—				2	2
イノシシ / ブタ	下顎骨	下顎角	—	—	—	1	1			2
	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合　　計						1	1	1	3	6

SX3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ネコ	橈骨	骨幹部	—	—	—	1				1
	寛骨	腸骨 - 寛骨臼	—	—	—		1			1
イノシシ / ブタ	上顎骨	上顎体 /P4 M1 M2	—	—	—		1			1
	橈骨	近位部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	ｶｯﾄﾏｰｸ	—		1			1
	寛骨	腸骨	—	—	—		1			1
	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
イノシシ / ブタ？	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	部位不明	破片	未癒合	—	—				1	1
			—	—	—				1	1
ウシ	部位不明	破片	—	—	—				1	1
種不明	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
		破片	—	—	—				5	5
合　　計						1	4	3	8	16

SX3003

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	大腿骨	近位部 - 遠位部	—	—	—	1				1

SX3004

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ヤギ	遊離歯（下顎）	M3	—	—	—	1				1

SX3005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
トリ	肋骨	骨幹部	—	—	—			2		2
イノシシ / ブタ	中手 / 中足骨（III / IV）	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—			6		6
合　　計						0	0	9	0	9

SX3006

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ / ウマ	部位不明	破片	—	—	—				1	1

層序

種類＼出土地	I 層	II 層	III層	IV層
ウミガメ？		1		
ニワトリ	12	7	4	
カモ科？	1			
トリ	3	2	2	
ネズミ科			2	
イヌ	3		1	
イヌ？			1	
ネコ	1	1	2	
ウマ	5	1	6	1
ウマ？			2	
ウシ / ウマ	37	2	23	2

（つづき）

種類＼出土地	I 層	II 層	III層	IV層
ウシ / ウマ？	1	9		
ブタ	1			
イノシシ / ブタ	147	38	98	12
イノシシ / ブタ？	1	23	15	4
ヤギ	7	2	8	
ヤギ？	2	1	3	
ウシ	13	1	36	3
ウシ？	1			
種不明	18	113	109	13
合　計	253	201	312	35

第 66 表　IV区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a

SA4003

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SD4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1

SD4002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	中手骨(IV)	近位端 - 骨幹部	—	—	—		1			1
	中手 / 中足骨	近位端 - 骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合　　計						0	1	1	1	3

SK4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	上腕骨	近位部 - 遠位端	—	—	—		1			1

SK4002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SK4006

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
トリ	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
イノシシ / ブタ	椎骨(胸椎)	棘突起	未癒合	—	—				1	1
	椎骨(腰椎)	棘突起	—	—	—				1	1
	橈骨	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	1				1
イノシシ / ブタ？	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
		破片	—	—	—			5		5
合　　計						1	0	8	2	11

SK4007

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ブタ	上腕骨	近位部 - 遠位端	—	—	滑車上孔閉鎖	1				1
イノシシ / ブタ	大腿骨	近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)	—	—		1			1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合　　計						1	1	0	1	3

SM4002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	中手骨	近位端 - 遠位端	—	—	—	1				1
トリ	大腿骨	遠位部	—	—	—		1			1
ウシ / ウマ	部位不明	破片	—	—	—				2	2
イノシシ / ブタ	頭蓋骨	類骨側頭突起	—	—	—	1				1
	遊離歯(下顎)	P3	—	—	—	1				1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				5	5
合　　計						3	1	0	7	11

第 67 表　Ⅳ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b

SM4003

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	遊離歯（下顎）	dm4	—	—	—	1				1

SP4008

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	遊離歯（下顎）	I2	—	—	—	1				1

SR4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	大腿骨	骨幹部 - 遠位部	—	ｶｯﾄﾏｰｸ	—	1				1
種不明	肋骨	破片	—	—	—			1		1
	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合　　計						1	0	1	1	3

SR4005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
		破片	—	—	—				3	3
合　　計						0	0	1	3	4

SS4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—			1		1

SX4007

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ / ブタ	椎骨（環椎）	破片	—	—	—				2	2
種不明	部位不明	破片	—	—	—				3	3
合　　計						0	0	0	5	5

層序

種類＼出土地	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	層不明
ニワトリ	10	1	30		
トリ			3		
イヌ	6		4		
ネコ	1		4		
ウマ	21		6		
ウマ？	1		3		
ウシ / ウマ	15	5	17		1
ブタ	1		1		
ブタ？			3		
イノシシ / ブタ	38	10	134	3	3
イノシシ / ブタ？			8		
ヤギ	2	3	3		
ヤギ？			1		
ウシ	3		20		1
ウシ？	1		1		
イルカ？	1				
種不明	44	12	131		1
合計	144	31	369	3	6

第 68 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a

SA5001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	上腕骨	骨幹部	―	螺旋状剥片 , ﾁｮｯﾌﾟﾏｰｸ			1			1

SA5002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
トリ	部位不明	骨幹部	―	―				1		1
ウシ / ウマ	部位不明	破片	―	―					5	5
イノシシ / ブタ	肋骨	近位端	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
		近位部	―	ﾁｮｯﾌﾟﾏｰｸ , ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		破片	―	―				1		1
	肩甲骨	遠位部	―	―		1				1
	脛骨	近位部 - 遠位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		骨幹部	―	螺旋状剥片		1				1
		骨幹部 - 遠位端	―	―			1			1
	部位不明	破片	―	―					4	4
ウシ	肋骨	破片	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				2		2
種不明	部位不明	破片	―	―					12	12
合　計						3	3	4	21	31

SA5005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ	大腿骨	近位部	未癒合(近位端)	―		1				1
イノシシ / ブタ	橈骨	近位部	―	―		1				1
ウシ	中足骨	破片	―	―				1		1
種不明	部位不明	破片	―	―					6	6
合　計						2	0	1	6	9

SA5006

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ	中手骨(Ⅲ)	近位端 - 骨幹部	―	―		1				1
イノシシ / ブタ	中手 / 中足骨	遠位端	―	―		1				1
種不明	部位不明	骨幹部	―	―				1		1
合　計						2	0	1	0	3

SD5001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ウシ	部位不明	破片	―	―					1	1
種不明	部位不明	破片	―	―					1	1
合　計						0	0	0	2	2

SD5002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	下顎骨	下顎体(破片)	―	―				1		1
	椎骨(腰椎)	椎体	―	―					1	1
	肋骨	近位端	―	―		1				1
		骨幹部	―	―				1		1
	上腕骨	骨幹部 - 遠位端	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
	中手骨(Ⅳ)	完形	―	―			1			1
	寛骨	破片	―	―				1		1
ウシ	部位不明	破片	―	―					1	1
種不明	部位不明	破片	―	―					3	3
合　計						1	2	3	5	11

SD5004

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	遊離歯(下顎)	M3	―	―			1			1
	腓骨	完形	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
種不明	部位不明	破片	―	―					9	9
合　計						1	1	0	9	11

SF5001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
カメ類？	脛骨 / 腓骨？	骨幹部	―	―				1		1
ニワトリ	椎骨(胸椎)	破片	―	―					1	1
	烏口骨	近位端 - 骨幹部	―	―		1				1
		近位部 - 骨幹部	―	―			1			1
		遠位端	―	―		1				1
	上腕骨	近位部	―	―			1			1
		遠位端	―	―			2			2
	大腿骨	完形	―	―			1			1
		骨幹部	―	―				1		1
	脛足根骨	近位部	―	―		1				1
		近位部 - 遠位端	―	―		1				1
		近位部 - 遠位部	―	―			1			1
		骨幹部	―	―		1	2			3
		骨幹部 - 遠位部	―	―		1				1
		骨幹部 - 遠位端	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
		遠位部	未癒合(遠位端)幼？	―		1				1
		遠位端	―	―		2				2
	中足骨	遠位端	♂	―		1				1
			―	―		1				1
ニワトリ？	大腿骨？	破片	―	―				1		1
	脛足根骨	骨幹部	―	―				1		1

第 69 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b

SF5001（つづき）

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ？	部位不明	骨幹部	―	―				2		2
		破片	―	―					1	1
ネコ	尺骨	近位端 - 骨幹部	―	―			1			1
ウマ	肋骨	骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				1		1
	中手骨(Ⅳ)	近位端	―	―			1			1
ウシ / ウマ	椎骨	椎体板	―	―					1	1
	椎骨(胸椎)	棘突起	―	―					1	1
	椎骨(尾椎)	椎体	―	―					1	1
	肋骨	骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				2		2
		破片	―	―				2		2
ウシ / ウマ？	部位不明	破片	―	―					8	8
イノシシ / ブタ	頭蓋骨	頭頂骨 + 前頭骨 + 側頭骨 + 頬骨 /M3	―	頭蓋半截			1			1
		頭頂骨 + 後頭骨	―	―		1				1
		側頭骨	―	―			1			1
		側頭骨？	―	―				5		5
		後頭骨	―	―			1		2	3
	上顎骨	上顎体 dm2dm3dm4	幼	―			1			1
		上顎体 I1	未萌出	―		1				1
		上顎体 M2M3	未萌出	―			1			1
	下顎骨	下顎体 + 下顎角 dm3dm4M1	♀？ 幼	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
			幼	―			1			1
		下顎体 dm3M1	幼	―		1				1
		下顎体 + 下顎角 M3	―	―			1			1
		下顎体	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
		下顎角	―	―		3				3
		関節突起	―	―			1			1
	遊離歯(下顎)	I1	―	―		1		1		2
	椎骨(環椎)	完形	―	―					1	1
	椎骨(軸椎)	ほぼ完形	―	―					1	1
	椎骨(胸椎)	ほぼ完形	―	―					1	1
		椎体	―	―					2	2
		棘突起	―	―					9	9
	椎骨(腰椎)	ほぼ完形	―	―					1	1
		椎体	―	―					1	1
		棘突起	―	―					3	3
		破片	―	―					1	1
	椎骨	椎体	―	―					1	1
		椎体板	―	―					4	4
		棘突起	―	―					3	3
		破片	―	―					4	4
	仙骨	破片	―	―					1	1
	肋骨	ほぼ完形	―	―		1	2			3
		近位端	―	―			1			1
		近位端 - 遠位部	―	―		3				3
		近位端 - 骨幹部	―	―			7			7
		近位部	―	―			1			1
		近位部 - 遠位部	―	―				7		7
		近位部 - 骨幹部	幼？	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
			―	―		13	6			19
		骨幹部	―	―			1	49		50
		破片	―	―				1		1
	肩甲骨	骨幹部	―	―		4				4
		骨幹部 - 遠位部	―	―			1			1
		骨幹部 - 遠位端	―	―		1				1
		遠位端	―	―		1	1			2
	上腕骨	近位部	―	―		1				1
		近位部 - 遠位部	未癒合(近・遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		近位部 - 骨幹部	―	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ		2				2
		骨幹部 - 遠位部	未癒合(遠位端)幼？	―		1				1
		骨幹部 - 遠位端	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
				―		1				1
		遠位部	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1

第 70 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 c

SF5001（つづき）

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	ー	計
イノシシ / ブタ	上腕骨	遠位部	ー	ー		1				1
	橈骨	ほぼ完形	ー	ー			1			1
		近位端	ー	ー			1			1
		近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ー			1			1
			ー	ー			1			1
		近位部	ー	ー		1				1
		近位部 - 遠位部	未癒合(近・遠位端)幼？	ー		1	1			2
		近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)幼？	ー			1			1
			ー			1				1
		骨幹部	幼？	ー				1		1
		遠位部	未癒合(遠位端)幼	ー			1			1
	尺骨	ほぼ完形	ー	ー			1			1
		近位端 - 骨幹部	ー	ー		1				1
		近位部 - 遠位端	未癒合(近位端)	ー		1	1			2
		近位部 - 遠位部	ー	ー		2				2
		近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)	ー			1			1
		骨幹部	ー	ー			1			1
		骨幹部 - 遠位端	ー	ー		1	1			2
	手根骨(中間)	完形	ー	ー		1				1
	中手骨(Ⅱ)	完形	ー	ー		1	1			2
	中手骨(Ⅲ)	完形	ー	ー			1			1
		近位端 - 骨幹部	ー	ー		2				2
	中手骨(Ⅳ)	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ー		2	3			5
			ー	ー		1				1
		近位端 - 骨幹部	ー	ー		1				1
	中手骨(Ⅳ？)	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ー			右？1			1
	中手骨(Ⅴ)	完形	ー	ー			1			1
		近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)幼？	ー			1			1
	寛骨	腸骨	ー	ー		1	1			2
		腸骨 - 寛骨臼	ー	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		寛骨臼付近	ー	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
				ー			1			1
		寛骨臼 - 坐骨	幼？	ー		1				1
			ー	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
		坐骨	ー	ー		1				1
	大腿骨	近位端 - 骨幹部	ー	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
		近位部	ー	ー			2			2
		近位部 - 遠位端	未癒合(遠位端)	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		近位部 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ー		1	1			2
			幼？	ー		1				1
			ー	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		近位部 - 骨幹部	ー	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		骨幹部 - 遠位部	未癒合(遠位端)	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
			ー				1			1
		骨幹部 - 遠位端	ー	ー			1			1
		遠位部	未癒合(遠位端)	ー			1			1
		遠位骨端のみ	ー	ー		3	1			4
	大腿骨？	遠位部	ー	ー		1				1
	膝蓋骨	ほぼ完形	ー	ー			1			1
	脛骨	完形	ー	ー			1			1
		近位端	未癒合(近位端)	螺旋状剥片			1			1
		近位端 - 骨幹部	ー	螺旋状剥片			1			1
		近位部	未癒合(近位端)	ﾁｮｯﾌﾟﾏｰｸ			2			2
		近位部 - 遠位部	幼？	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
			未癒合(遠位端)	ー		1				1
			ー	ー		1				1
		近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)	ー			1			1
		骨幹部	ー	ー		1				1
		骨幹部 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ー			1			1
			ー	ー		2				2
		遠位部	ー	ー		1	1			2
		遠位端	ー	ー		1				1
		破片	ー	ー				1		1
	腓骨	近位部 - 遠位端	ー	ー	病変？	1				1
		骨幹部 - 遠位部	幼	ー		1				1
		遠位端	ー	ー			1			1
	距骨	完形	ー	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
				ー			1			1
	踵骨	ほぼ完形	ー	ー			1			1
		近位骨端のみ	ー	ー			1			1
		近位部 - 遠位端	未癒合(近位端)	ー		2	1			3
	中足骨(Ⅲ)	近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)	ー		1				1
			ー	ー		2				2

第 71 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 d

SF5001（つづき）

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	中足骨(Ⅲ)	骨幹部 - 遠位部	未癒合(遠位端)	―		1				1
	中足骨(Ⅳ)	ほぼ完形	―	―			1			1
		近位端 - 遠位部	未癒合(遠位端)	―		1	2			3
	中手 / 中足骨	骨幹部	―	―				1		1
	指骨(基節骨)	完形	―	―		1	1			2
	指骨(中節骨)	完形	―	―		1				1
		近位部 - 遠位部	―	―			1			1
	指骨(末節骨)	完形	―	―		2				2
	部位不明	骨幹部	―	―				1		1
イノシシ / ブタ？	遊離歯(上顎)	C ？	―	―				2		2
ヤギ	肋骨	近位部 - 骨幹部	―	―			1			1
		骨幹部	―	―				2		2
ウシ	頭蓋骨	前頭骨	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
		破片	―	―				3		3
	遊離歯(上顎)	I2	―	―				1		1
		P3/P4	―	―		1				1
	遊離歯(下顎)	M1/M2	―	―			1			1
		M2/M3	―	―		1				1
	椎骨(胸椎)	棘突起	―	―					1	1
	椎骨(腰椎)	椎体	―	―					1	1
	肋骨	近位端	―	―		1				1
		近位部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ			1	1		2
				―			1			1
		骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				7		7
				―				1		1
	橈骨	骨幹部 - 遠位端	―	螺旋状剥片 , ｶｯﾄﾏｰｸ			1			1
	尺骨	骨幹部	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
	手根骨(橈側)	完形	―	―			1			1
	手根骨(中間)	完形	―	―		1				1
	中手骨	近位端	―	―		1				1
	大腿骨	近位骨端のみ	―	―				1		1
		遠位骨端のみ	―	ｶｯﾄﾏｰｸ		1				1
				―		1				1
	脛骨	近位部 - 遠位部	―	―			1			1
	距骨	破片	―	―				1		1
	足根骨(Ⅳ)	中心(完形)	―	―		1				1
	指骨(基節骨)	近位端 - 遠位部	―	―			1			1
	指骨(種子骨)	完形	―	―				1		1
	部位不明	破片	―	―					2	2
種不明	頭蓋骨	破片	―	ｶｯﾄﾏｰｸ				1		1
	上顎骨	上顎体(破片)	―	―				1		1
	下顎骨？	破片	―	―				4		4
	胸骨(剣状突起)	ほぼ完形	―	―					1	1
	椎骨	椎体	―	―					3	3
		破片	―	―					6	6
	部位不明	骨幹部	―	―				3		3
		破片	―	ｶｯﾄﾏｰｸ					2	2
				―					100	100
合　計						108	105	107	164	484

SK5002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
種不明	部位不明	破片	―	ｶｯﾄﾏｰｸ					1	1

SK5004

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ウシ	遊離歯(下顎)	M3	―	―		1				1
種不明	部位不明	破片	―	―					9	9
合　計						1	0	0	9	10

SM5001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ	中足骨	骨幹部	♂	―			1			1
種不明	部位不明	破片	―	―					1	1
合　計						0	1	0	1	2

SM5002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ	椎骨(胸椎)	破片	―	―					1	1
	上腕骨	近位端 - 遠位部	―	―			1			1
	尺骨	近位端 - 骨幹部	―	―		1				1
	脛足根骨	近位部 - 遠位端	―	―		1				1
		近位部 - 骨幹部	未癒合(近位端)幼鳥	―			1			1
		骨幹部 - 遠位端	―	―			1			1
	中足骨	骨幹部 - 遠位端	♂	―			1			1
トリ	部位不明	破片	―	―					1	1
ウマ	肋骨	骨幹部	―	―				1		1
ウマ？	肋骨	近位部	―	―		1				1
イノシシ / ブタ	肋骨	破片	―	―				1		1
	寛骨	寛骨臼付近	―	―		1				1

第 72 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 e

SM5002（つづき）

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ウシ	肋骨	骨幹部	―	カットマーク				6		6
	脛骨	近位骨端のみ	―	―		1				1
		近位部 - 骨幹部	―	カットマーク		1				1
		遠位骨端のみ	幼？	―		1				1
	足根骨	果骨	幼？	―		1				1
	部位不明	破片	―	―					1	1
種不明	椎骨（胸椎）	椎体	―	―					1	1
	肋骨	骨幹部	―	―					2	2
	部位不明	破片	―	カットマーク					4	4
				―					34	34
合　計						8	4	8	44	64

SP5001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	肋骨	破片	―	―				1		1

SP5032

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ジュゴン？	肋骨？	破片	―	―					1	1
種不明	部位不明	破片	―	―					1	1
合　計						0	0	0	2	2

SP5044

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
種不明	頭蓋骨	側頭骨（錐体？）	―	―		1	1			2
	部位不明	破片	―	―					1	1
合　計						1	1	0	1	3

SP5045

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ	大腿骨	遠位部	―	―		1	3			4

SP5062

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
種不明	部位不明	破片	―	―					1	1

SP5065

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ	尺骨	骨幹部	―	―		1				1
		骨幹部 - 遠位端	―	―			1			1
イノシシ / ブタ	遊離歯（下顎）	I3	―	―		1				1
合　計						2	1	0	0	3

SP5079

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ウマ	指骨（基節骨）	近位端	―	―			1			1
	指骨（中節骨）	近位端	―	カットマーク			1			1
種不明	部位不明	破片	―	―					16	16
合　計						0	2	0	16	18

SS5002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ニワトリ	大腿骨	骨幹部	―	―				1		1
ウシ / ウマ	肋骨	骨幹部	―	―				1		1
種不明	部位不明	破片	―	―					4	4
合　計						0	0	2	4	6

SS5004

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	上腕骨	近位部	―	―			1			1

SS5005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	遊離歯（下顎）	I3	―	―			1			1
種不明	部位不明	破片	―	―					2	2
合　計						0	1	0	2	3

SS5007

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	肋骨	近位部 - 骨幹部	―	―			1			1
	橈骨	骨幹部	―	―		1				1
	大腿骨	骨幹部 - 遠位部	未癒合（遠位端）	―			1			1
ウシ	肩甲骨	骨幹部 - 遠位端	―	カットマーク			1			1
種不明	部位不明	破片	―	―					4	4
合　計						1	3	0	4	8

SX5001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	大腿骨	遠位骨端（破片）	―	―				1		1
種不明	部位不明	破片	―	―					3	3
合　計						0	0	1	3	4

SX5002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	遊離歯（上顎）	C	―	―			1			1
	腓骨？	骨幹部	―	カットマーク			1			1
合　計						0	2	0	0	2

第 73 表　Ⅴ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 f

SX5004

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
ウマ	距骨	完形	―	―		1				1
イノシシ / ブタ	上顎骨	上顎体 P4M1M2M3	―	―		1				1
ウシ	肋骨	骨幹部	―	―				1		1
種不明	部位不明	破片	―	―					22	22
合　計						2	0	1	22	25

SX5005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	―	計
イノシシ / ブタ	遊離歯（下顎）	I2	―	―		1				1
	椎骨（頸椎）	椎体	―	―					1	1
	椎骨	破片	―	―					1	1
	肋骨	骨幹部	―	―				1		1
	中手骨（Ⅴ）	ほぼ完形	―	―		1				1
	脛骨	近位部	―	―		1				1
種不明	部位不明	破片	―	―					4	4
合　計						3	0	1	6	10

層序

種類＼出土地	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層
ニワトリ	14	8	14	2
ニワトリ？	6	1		
トリ	2	2	1	
イヌ	4			
ネコ	1	2		
ネコ？		1		
ウマ	18		13	2
ウマ？	1			
ウシ / ウマ	28	13	23	4
ウシ / ウマ？	2		1	
イノシシ / ブタ	125	62	154	8
イノシシ / ブタ？	1			
ヤギ	10	3	6	1
ヤギ？	2		1	
ウシ	44	13	60	7
ウシ？	1			
種不明	178	93	200	30
合計	437	198	473	54

第 74 表　III区ウマ臼歯計測値（mm）

遺構	部位	顎骨	左 / 右	左	
			部分	P2	P4
I 層	遊離歯	上	長		27.2
			幅		24.8
			高		61.01 以上
III 6e 層	遊離歯	下	長	29.6	
			幅	12.9	
			高	53.3 以上	

第 75 表　III区鳥類上腕骨計測値（mm）

遺構	種類	残存状況	左 / 右	GL	Bp	Bd
SM3002 3 層	ニワトリ	完形	左	82.5	24.7	19.5
		完形	右	75.9	20.7	16.6

第 76 表　III区哺乳類四肢骨計測値（mm）

遺構	種類	部位	残存状況	左 / 右	Bp	Bd
SM3001 4 層	ウマ	中手骨	骨幹部 - 遠位端	右		41.4
I 層	ウシ	橈骨	近位端 - 骨幹部	左	86.3	

第 77 表　IV区ウマ臼歯計測値（mm）

遺構	部位	顎骨	左 / 右	左	右
			部分	P3/P4	P3/P4
III 10 層	遊離歯	上	長	26.1	26.5
			幅	25.3	25.9
			高	38	53.8

第 78 表　IV区鳥類中手骨計測値（mm）

遺構	種類	残存状況	左 / 右	GL	Bp	Bd
SM4002 2 層	ニワトリ	近位端 - 遠位端	左	30.4		

第 79 表　IV区哺乳類計測値（mm）

遺構	種類	部位	残存状況	左 / 右	DPA	SDO
I 層	ウマ	尺骨	近位端 - 近位部	右	58.1	44.1

第 80 表　IV区哺乳類四肢骨計測値（mm）

遺構	種類	部位	残存状況	左 / 右	Bp	Bd
I 層	ウマ	中手骨	近位部 - 遠位部	右		43.4
		中足骨	遠位端	左		40.4

第 81 表　V 区ウマ臼歯計測値（mm）

遺構	部位	顎骨	左 / 右	左	右
			部分	P4/M1	P3
I 層	遊離歯	上	高		49.8
		下	長		23.9
			幅		15
			高		40.7
III 9b 層	遊離歯	下	長	24.5	
			幅	13.2	
			高	41.9	

第 82 表　V 区ニワトリ肢骨計測値（mm）

遺構	部位	残存状況	左 / 右	GL	GLl	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
SP5065	尺骨	骨幹部 - 遠位端	右										9.3
トレ 14 SF5001 造成 2 炭	大腿骨	完形	右	72.6				14.4	14.3				
	脛足根骨	近位部 - 遠位端	左						13				13.9
トレ 1 SM5002 3 層	中足骨	骨幹部 - 遠位端	右						17.1				

第 83 表　V 区イヌ四肢骨計測値（mm）

遺構	部位	残存状況	左 / 右	GL	GLl	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
I 層	橈骨	近位端 - 近位部	右					16					

第 84 表　V 区ネコ四肢骨計測値（mm）

遺構	部位	残存状況	左 / 右	GL	GLl	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
トレ 14 SF5001 造成 2	尺骨	近位端 - 骨幹部	右							9.3		10.5	

第 85 表　V 区ウマ四肢骨計測値（mm）

遺構	部位	残存状況	左 / 右	GL	GLl	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
III 3a 層	橈骨	近位端	左					72.5					

第 86 表　V 区イノシシ／ブタ四肢骨計測値（mm）

遺構	部位	残存状況	左 / 右	GL	GLl	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
I 層	橈骨	完形	右	124.7					29.2	16.3			
トレ 14 SF5001 造成 2 炭	橈骨	近位端 - 遠位部	右					24.1					
トレ 14 SF5001 造成 2	尺骨	ほぼ完形	右	163.2							24.8	30	
トレ 14 SF5001 造成 2 炭	脛骨	完形	右	174.3				43.7	24.2				
トレ 8 III 27 層	脛骨	近位部 - 遠位端	左						23.2				
SD5004 2 層	腓骨	完形	左	152.6									
トレ 14 SF5001 造成 2 炭	距骨	完形	右		34.3	32.2							

第 87 表　V 区ウシ四肢骨計測値（mm）

遺構	部位	残存状況	左 / 右	GL	GLl	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
トレ 14 SF5001 造成 2・3	橈骨	骨幹部 - 遠位端	右						85.3				
I 層	尺骨	近位部 - 骨幹部	右									54	
III 9b 層	尺骨	近位端 - 骨幹部	左								53.9	66.1	
トレ 10 III 17 層	中手骨	近位端 - 遠位部	右					60.7					
I 層	距骨	完形	左		60.5	58.8	40.9						
トレ 6 III 1 層	踵骨	完形	左	143.4			49						

第２項　貝類遺体

今回の発掘調査で得られた貝類遺体については、当センター所蔵の貝類標本を参考にして同定作業を行った。分析資料はすべて発掘現場で取り上げられた資料（ピックアップ資料）である。また、調査中に遺構内から大量に貝類遺体や動物骨等が出土し、取り上げ作業が困難な場合もあった。その際は、土ごと取り上げ、土壌サンプル資料として扱った。土壌サンプルについては洗浄作業等を実施することが出来ず、その数量は含んでいないため、暫定的な資料となる。

今回の調査では、貝類遺体 45 科 125 種が確認された。各地区で最小個体数が 10 点以上得られている貝類について述べる。貝種（生息地）出土点数で示す。調査区毎の出土点数は最小個体数（MNI）で示している。

III区

巻貝　サラサバテイラ（Ⅰ-4-a）21 点、ヤコウガイ（Ⅰ-4-a）99 点（内：蓋 60 点）、チョウセンサザエ（Ⅰ-3-a）136 点（内：蓋 30 点）、カンギク（Ⅱ-1-b）33 点（内：蓋３点）、オハグロガイ（Ⅱ-2-c）10 点、マガキガイ（Ⅰ-2-c）93 点

二枚貝　ウラキツキガイ（Ⅱ-2-c）57 点、イソハマグリ（Ⅰ-1-c）13 点、アラスジケマン（Ⅲ-1-c）278 点、ホソスジイナミ（Ⅱ-1-c）11 点、ハマグリの一種（Ⅱ-2-c）23 点、ダテオキシジミ（Ⅲ-1-c）21 点

第 88 表　貝類の生息場所類型

大区分		底質等	
Ⅰ	外洋－サンゴ礁域	a	岩礁
Ⅱ	内湾－転石域	b	転石
Ⅲ	河口干潟－マングローブ域	c	砂 / 泥
Ⅳ	淡水域	d	河川礫底
Ⅴ	陸域	f	植物上
Ⅵ	その他		

小区分			
0	潮間帯上部	5	止水
	Ⅰ－０ノッチ	6	流水
	Ⅱ－０マングローブ	7	林内
1	潮間帯中・下部	8	林内・林縁部
2	亜潮間帯上縁部	9	林縁部
	Ⅰ－２イノー内	10	海浜部
3	干瀬	11	打ち上げ物
4	礁斜面	12	化石

IV区

巻貝　サラサバテイラ（Ⅰ-4-a）17 点、ヤコウガイ（Ⅰ-4-a）59 点（内：蓋 34 点）、チョウセンサザエ（Ⅰ-3-a）189 点（内：蓋 49 点）、マガキガイ（Ⅰ-2-c）61 点

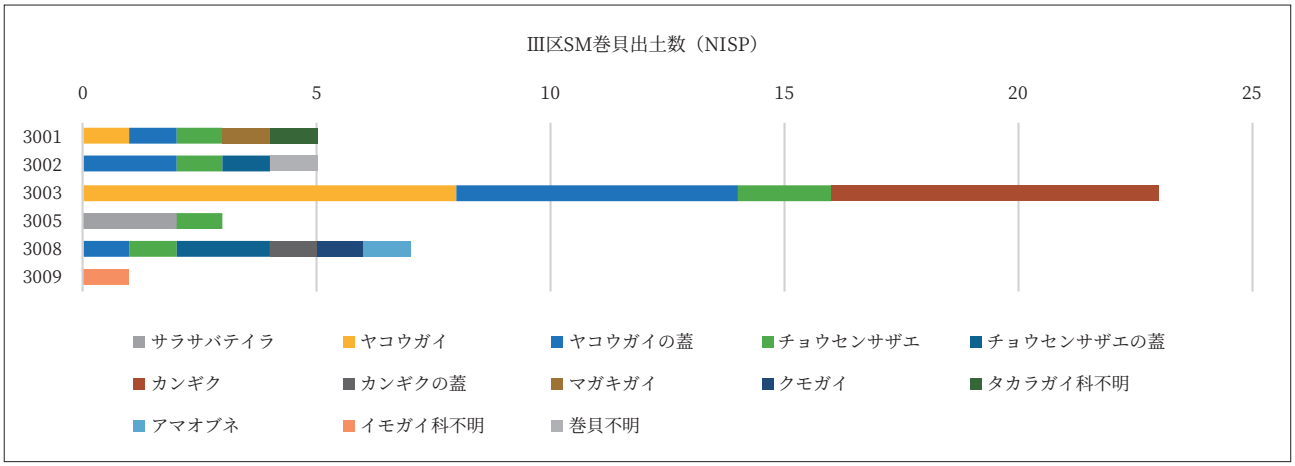
二枚貝　ウラキツキガイ（Ⅱ-2-c）73 点、アラスジケマン（Ⅲ-1-c）152 点、ハマグリの一種（Ⅱ-2-c）37 点、ダテオキシジミ（Ⅲ-1-c）15 点

第 89 表　III区石組土坑（SM）　巻貝出土数（NISP）

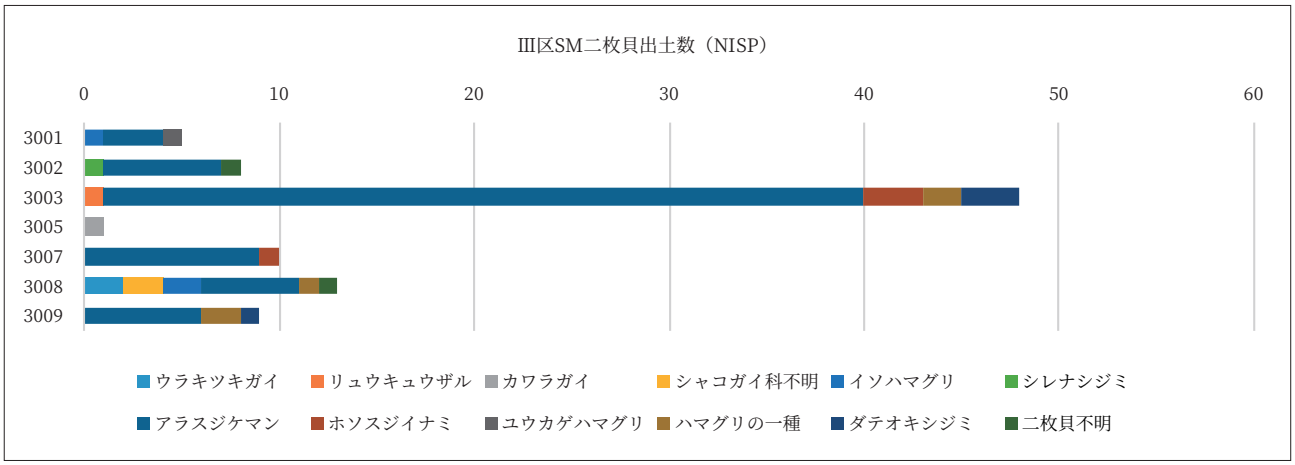
科 名	貝 種 名	SM						生息地
		3001	3002	3003	3005	3008	3009	
ニシキウズ科	サラサバテイラ				2			Ⅰ-4-a
リュウテン科	ヤコウガイ	1		8				Ⅰ-4-a
	ヤコウガイの蓋	1	2	6		1		Ⅰ-4-a
	チョウセンサザエ	1	1	2	1	1		Ⅰ-3-a
	チョウセンサザエの蓋		1			2		Ⅰ-3-a
	カンギク			7				Ⅱ-1-b
	カンギクの蓋					1		Ⅱ-1-b
アマオブネ科	アマオブネ					1		Ⅰ-1-b
スイショウガイ科	マガキガイ	1						Ⅰ-2-c
	クモガイ					1		Ⅰ-2-c
タカラガイ科	タカラガイ科不明	1						
イモガイ科	イモガイ科不明						1	
	巻貝不明		1					
合計		5	5	23	3	7	1	

第 90 表　III区石組土坑（SM）　二枚貝出土数（NISP）

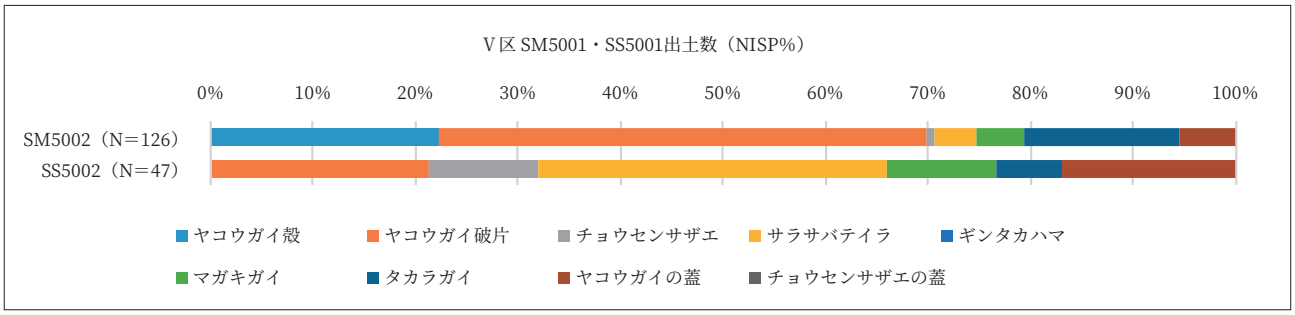
科 名	貝 種 名	SM							生息地
		3001	3002	3003	3005	3007	3008	3009	
ツキガイ科	ウラキツキガイ						2		Ⅱ-2-c
ザルガイ科	リュウキュウザル			1					Ⅱ-2-c
	カワラガイ				1				Ⅱ-2-c
シャコガイ科	シャコガイ科不明						2		
チドリマスオ科	イソハマグリ	1					2		Ⅰ-1-c
シジミ科	シレナシジミ		1						Ⅰ-1-a
マルスダレガイ科	アラスジケマン	3	6	39		9	5	6	Ⅲ-1-c
	ホソスジイナミ			3		1			Ⅱ-1-c
	ユウカゲハマグリ	1							Ⅱ-2-c
	ハマグリの一種			2			1	2	Ⅱ-2-c
	ダテオキシジミ			3				1	Ⅲ-1-c
	二枚貝不明		1				1		
合計		5	8	48	1	10	13	9	



第 193 図　Ⅲ区石組土坑（SM）　巻貝出土数（NISP）



第 194 図　Ⅲ区石組土坑（SM）　二枚貝出土数（NISP）



第 195 図　Ⅴ区石組土坑（SM）　貝類出土数（NISP%）

第 91 表　Ⅴ区石組土坑（SM）　貝類出土数（NISP）

遺構 / 貝種名	SM5002	SS5002
ヤコウガイ殻	28	0
ヤコウガイ破片	60	10
チョウセンサザエ	1	5
サラサバテイラ	5	16
ギンタカハマ	0	0
マガキガイ	6	5
タカラガイ	19	3
ヤコウガイの蓋	7	8
チョウセンサザエの蓋	0	0
合計	126	47

Ⅴ区

巻貝　サラサバテイラ（Ⅰ-4-a）46 点、ヤコウガイ（Ⅰ-4-a）205 点（内：蓋 120 点）、チョウセンサザエ（Ⅰ-3-a）186 点（内：蓋 18 点）、カンギク（Ⅱ-1-b）434 点（内：蓋 1 点）、オニノツノガイ（Ⅰ-2-c）12 点、イワ（ウミニナ）カニモリ（Ⅱ-1-b）266 点、オハグロガイ（Ⅱ-2-c）27 点、マガキガイ（Ⅰ-2-c）188 点、ハナビラダカラ（Ⅰ-1-a）12 点、ハナマルユキ（Ⅰ-3-a）18 点、オキナワヤマタニシ（Ⅴ-8）18 点

二枚貝　ウラキツキガイ（Ⅱ-2-c）45 点、イソハマグリ（Ⅰ-1-c）21 点、リュウキュウシラトリ（Ⅱ-1-c）11 点、アラスジケマン（Ⅲ-1-c）1476 点、ホソスジイナミ（Ⅱ-1-c）26 点、スダレハマグリ（Ⅱ-2-c）110 点、ハマグリの一種（Ⅱ-2-c）59 点、ダテオキシジミ（Ⅲ-1-c）17 点

上記のように、各地区での出土状況をみるとほとんど

が共通しているが、出土数の異なる貝類遺体も見られる。

Ⅲ区の石組土坑内貝種

巻貝　ヤコウガイやカンギク、チョウセンサザエが出土しており、SM3003 からの出土が多い（第 89 表・第 193 図）。

二枚貝　アラスジケマンの出土が多く、SM3003 からの出土が多い（第 90 表・第 194 図）。

人為的割り取りのみられる貝類

今回出土した貝類遺体のうち、ヤコウガイ、チョウセンサザエ、サラサバテイラなどは、首里城跡銭蔵東地区（以下、銭蔵東地区）や東村跡で出土した螺鈿細工に用いられたとされる貝の割り方に類似していた。そのため、この２遺跡の分析方法を参考に、分析を試みた。加えて、マガキガイとタカラガイについても人為的な加工の痕跡がみられた。マガキガイについては、貝玉の製作工程と考えられている勝連城跡（うるま市教育委員会 1990）の分析を参考にした。

今回、殻片の計測については実施することが出来なかった。

下記で述べる貝類遺体については、破片数の数量が重要となってくるので、最小個体数（MNI）ではなく、同定標本数（NISP）で示している。

ヤコウガイ　ヤコウガイの割れ方をもとに第 198・199 図のように分類を行った。殻をⅠ～Ⅳ類、破片になった状態のものをＡ～Ｆまで分類を行った。分類については、銭蔵東地区及び東村跡の分類を参考にした。

殻部分については、Ⅰ～Ⅳ類まで分類したが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類の出土数が８点と出土割合全体の１割に満たず、Ⅲ－①類～Ⅲ－③類と分類したものは 153 点で９割以上を占める。この傾向は、銭蔵東地区及び東村跡と同様である。

Ⅲ－①類～Ⅲ－③類の内訳をみると、Ⅲ－③類が最も多く 73 点、次いでⅢ－①類が 60 点となり、Ⅲ－②類が 20 点で最も少ない。この傾向は東村跡に類似する。破片になった状態のものについては、合計 458 点でⅢ区 113 点、Ⅳ区 74 点、Ⅴ区 271 点で、Ⅴ区からの出土が多い。Ⅲ区及びⅤ区では、人為的痕跡のみられる破片資料が多い傾向にあるが、Ⅳ区では人為的痕跡の見られない破片や不明破片が多い状況が確認できる。

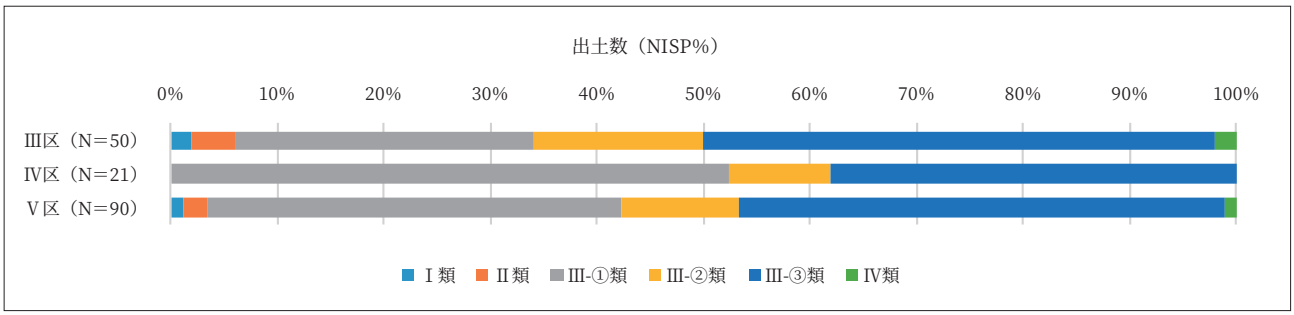
出土地点でみると、各地区で遺構及び包含層から出土しており、包含層からの出土量が多いが、Ⅴ区では SM5002 でⅢ類に分類したものが 27 点とまとまって出土している。

第 92 表　ヤコウガイ殻　出土数

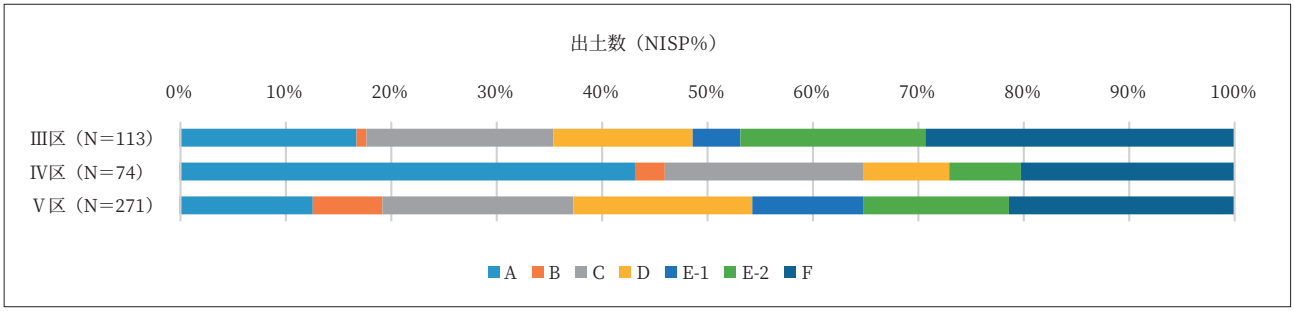
分類＼地区	Ⅲ区（N=50）	Ⅳ区（N=21）	Ⅴ区（N=90）
Ⅰ類	1	0	1
Ⅱ類	2	0	2
Ⅲ - ①類	14	11	35
Ⅲ - ②類	8	2	10
Ⅲ - ③類	24	8	41
Ⅳ類	1	0	1
合計	50	21	90

第 93 表　ヤコウガイ殻破片　出土数

分類＼地区	Ⅲ区（N=113）	Ⅳ区（N=74）	Ⅴ区（N=271）
A	19	32	34
B	1	2	18
C	20	14	49
D	15	6	46
E-1	5	0	29
E-2	20	5	37
F	33	15	58
合計	113	74	271



第 196 図　ヤコウガイ殻　出土数（NISP%）



第 197 図　ヤコウガイ殻破片　出土数（NISP%）

Ⅰ類　体層全体を残すもの（いわゆる完形）

Ⅲ-①類　体層を大きく欠損し、螺塔を残すもの

Ⅱ類　殻口から体層中央部まで欠損するもの

Ⅲ-②類　体層を大きく欠損し、螺塔及び螺唇、臍盤を残すもの

Ⅳ類　体層途中を欠損するもの

Ⅲ-③類　体層を大きく欠損し、軸唇、臍盤を残すもの

第 198 図　ヤコウガイ殻　分類

B　打ち割りのみ

C　打ち割り＋研磨

D　研磨＋穿孔

E　加工後の破片
E－１：殻皮あり　E－２：殻皮なし

※A：破片（人為的痕跡なし）　F：不明破片　　A・Fは写真なし

第 199 図　ヤコウガイ殻破片　分類

破片になった状態のものについても、Ⅴ区の SM5002 で 60 点出土している。

今回確認されたヤコウガイの殻には、人為的な切断痕や、穿孔の痕跡等がみられ、何らかの素材として利用していることが確認できた。殻サイズの計測を行っていないため、どれくらいの大きさのヤコウガイが持ち込まれたのか不明だが、用途としては銭蔵東地区や東村跡出土と同様に、螺鈿素材に用いられた可能性があると考えられる。

また、体層片が大きく残るＢ及びＣとしたものが一定数出土しており、貝匙等を製作する用途もあったと思われるので、何種類かの製作用途が考えられる。

ヤコウガイ蓋　　完形及び破片も含めて 365 点出土し、ヤコウガイの貝殻片は 619 点出土している。ヤコウガイ殻片がまとまって出土している SM5002 をみても、貝殻片 88 点に対し蓋は７点と、蓋より貝殻片の出土の方が多い。このことは銭蔵東地区と同様の傾向を示している。

チョウセンサザエ　　チョウセンサザエも多く確認されたため、残存部位毎に第 201 図のように分類を行った。

全体の出土量でみるとⅠ類(完形)が最も多く 135 点出土している。次いでⅡ類が 77 点出土している。Ⅴ類(殻頂部)としたものは、55 点出土しており全体の割合のなかでは 11%にとどまる。

地区別でみると、Ⅴ区での出土量が最も多く他地区に比べ、Ⅴ類(殻頂部)及び体層片であるⅦ－①類、Ⅶ－②類が僅かに多い傾向がある。螺塔部分と体層部分を切り離して利用していた可能性がある。

出土地点でみると、包含層に伴って出土しているものが多く、遺構に伴って出土しているものは僅かである。Ⅴ区の SM5002 からは完形が１点、SM5002 上部の SS5002 からは、破片資料が５点出土している。

今回の調査では、殻頂部分の残存が 1/4 以下にあたるⅤ類としたものは、殻頂部分を残すもののなかでも最も少なかった。また、Ⅱ類とした有孔があるものの出土が多いことが確認できた。小破片となった資料も確認できていることから、銭蔵東地区と同様に螺鈿素材に利用されたもののほか、別用途として体層部分を利用するための割り取りが行われていた可能性がある。

チョウセンサザエが多く出土し、人為的加工の痕跡が確認されている遺跡として、地域や時代が異なるが、宮古島アラフ遺跡（アラフ遺跡発掘調査団 2017）、伊江島ナガラ原第三貝塚（伊江村教育委員会 2017）がある。

アラフ遺跡では、体層下部片を意識的に割り取り、製品化している状況が想定されており、割り取り工程として体層部に有孔があるものがある。この体層部に有孔がある状態のものが、今回の出土品と類似しているが、製品として用いた体層下部片がアラフ遺跡では多く出土しているのに対し、今回の調査では見られないことから用途が異なると考えられる。

ナガラ原第三貝塚では、チョウセンサザエを打ち欠いた製品が出土し、そのなかでも打ち欠いたあとに残るつば部に、明瞭な摩耗痕があるとしている。同様な破片資料等や摩耗痕のあるものが今回の調査では確認できなかったので、用途が異なることが考えられる。

サラサバテイラ　残存度から第 202 図のように分類した。

Ⅰ類（完形）は、殻頂部が残存している 67 点中、５点のみであった。また、殻頂部が残存し、体層が欠損していくなかでほぼ殻頂のみが残存するⅢ類の出土が多く、破片資料にあたるⅣ類は遺構の出土量が多いことから、体層部を外して利用していた痕跡が伺える。

地区別でみると、Ⅲ区では 52 点出土しており、Ⅳ類～Ⅴ類といった破片資料が多い。Ⅴ区では、Ⅲ類とした体層部分が割取られ、殻頂部分が残存しているものが多く、殻口部や体層片が多い傾向がある。

出土地点でみると、包含層に伴って出土しているものがほとんどだが、Ⅴ区の SM5002 から５点、SS5002 から 16 点とまとまって出土している状況が確認できる。

銭蔵東地区や東村跡と同様に体層部分を割り取り、小破片に加工していく状況が確認できた。今回確認したサラサバテイラについても螺鈿素材としての可能性が考えられる。

ギンタカハマ　残存度からサラサバテイラで用いた分類と同様に実施した。

完形は出土しておらず、殻頂が残存するⅡ類及びⅢ類が 12 点出土している。体層部を割り取ったと考えられる破片である。

出土地点でみると、包含層に伴って出土しているものがほとんどである。

マガキガイ　合計 342 点出土している。独楽状製品とされることも多い（沖縄県教育委員会 1994）。一方、殻頂を加工した貝玉の未成品とする見方がある（勝連町教育委員会 1990・那覇市教育委員会 2012）。今回出土したマガキガイをみると、螺軸部を残存させて独楽状になるものはなく、螺軸を加工していく過程の製品と考えられるため、貝玉作成途中の未製品であると考えた。

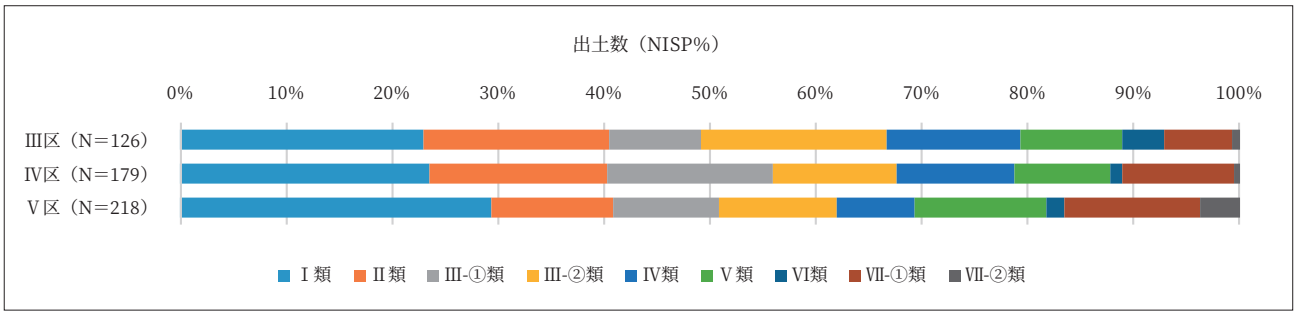
勝連城跡出土製品の分類を参考に第 97 表・第 204 図のように分類した。

Ⅱ類としたものが最も多く、268 点出土している。次いで完形のⅠ類が 38 点と多く、螺軸部分を欠損していくⅢ類が 35 点出土している。螺軸部をすべて欠損し、その部分を研磨しているⅣ類が１点出土し、完成品と考えられるⅤ類は１点も出土していない。

出土地点をみると、包含層に伴って出土しているものが主であるが、Ⅴ区の SM5002 から６点、SS5002 から５点まとまって出土している。

第 94 表　チョウセンサザエ　出土数（NISP）

地区 / 分類	Ⅲ区（N=126）	Ⅳ区（N=179）	Ⅴ区（N=218）
Ⅰ類	29	42	64
Ⅱ類	22	30	25
Ⅲ - ①類	11	28	22
Ⅲ - ②類	22	21	24
Ⅳ類	16	20	16
Ⅴ類	12	16	27
Ⅵ類	5	2	4
Ⅶ - ①類	8	19	28
Ⅶ - ②類	1	1	8
合計	126	179	218



第 200 図　チョウセンサザエ　出土数（NISP%）

Ⅰ類　完形

Ⅱ類　殻頂あり、体層が欠損し有孔状

Ⅲ-①類　殻口部分のみ欠損

Ⅲ-②類　体層中央まで欠損

Ⅳ類　殻頂及び体層が欠損

Ⅴ類　殻頂のみ

Ⅵ類　その他

Ⅶ-①類　破片（殻皮あり）

Ⅶ-②類　破片（殻皮なし）

第 201 図　チョウセンサザエ　分類

Ⅰ類　完形

Ⅱ類　下層部が割取られるもの

Ⅲ類　下層部の割り取りが進み、体層部まで及ぶもの

Ⅳ-①類　体層部の破片

Ⅳ-②類　下層部の破片

Ⅴ-①類　破片（殻皮あり）

Ⅴ-②類　破片（殻皮なし）

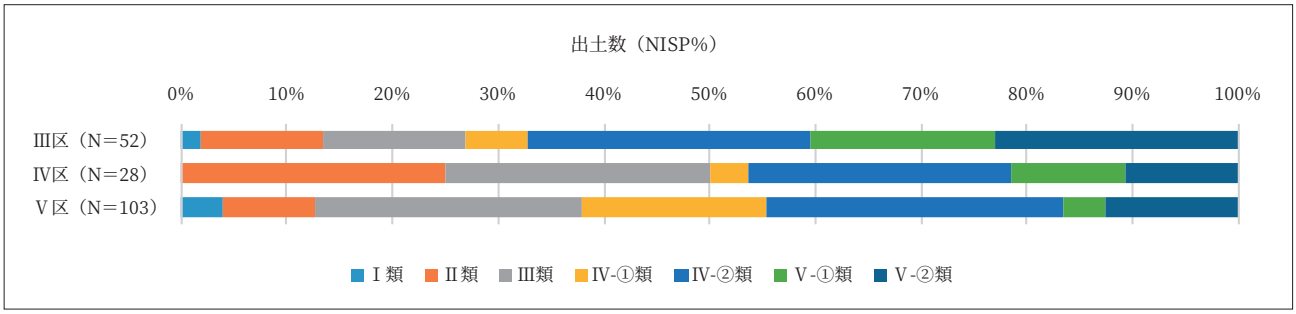
第 202 図　サラサバテイラ　分類

第 95 表　サラサバテイラ　出土数

分類＼地区	Ⅲ区（N=52）	Ⅳ区（N=28）	Ⅴ区（N=103）
Ⅰ類	1	0	4
Ⅱ類	6	7	9
Ⅲ類	7	7	26
Ⅳ-①類	3	1	18
Ⅳ-②類	14	7	29
Ⅴ-①類	9	3	4
Ⅴ-②類	12	3	13
合計	52	28	103

第 96 表　ギンタカハマ　出土数

分類＼地区	Ⅲ区（N= ５）	Ⅳ区（N= ４）	Ⅴ区（N=14）
Ⅰ類	0	0	0
Ⅱ類	4	2	2
Ⅲ類	1	1	2
Ⅳ-①類	0	0	2
Ⅳ-②類	0	1	1
Ⅴ-①類	0	0	5
Ⅴ-②類	0	0	0
Ⅵ類	0	0	2
合計	5	4	14



第 203 図　サラサバテイラ　出土数（NISP%）

Ⅰ類

Ⅱ類　Ⅲ類　Ⅳ類

※Ⅴ類の出土はなし

第 204 図　マガキガイ　分類

第 97 表　マガキガイ　分類

Ⅰ類	完形
Ⅱ類	螺軸に沿って体層部を欠損
Ⅲ類	螺軸まで欠損
Ⅳ類	螺軸面及び体層面を水平方向に研磨
Ⅴ類	螺軸と殻頂部が欠損、両面を研磨して穿孔

タカラガイ　背面を剥ぎ取りしている状況が伺えるものが出土しており、残存部位で４通りに分類した。

Ａ類（背面部）が 14 点、Ｂ類（下半部）が 11 点、Ｃ類（破片）24 点、Ｄ類（完形）36 点が出土している。人為的に剥ぎ取った痕跡が見られることから何らかの製品の製作工程中の遺物と考えた。

Ａ　背面部　　Ｂ　下半部

※Ｃ：破片　Ｄ：完形　　Ｃ・Ｄは写真なし

第 205 図　タカラガイ　分類

第 98 表　タカラガイ　分類

分類＼地区	Ⅲ区（N=18）	Ⅳ区（N=14）	Ⅴ区（N=53）
Ａ類	1	0	13
Ｂ類	3	2	6
Ｃ類	4	3	17
Ｄ類	10	9	17
合計	18	14	53

出土地点でみると、Ⅴ区の SM5002 からの出土が主体を占める。

SM5002 について　Ⅴ区で検出した石組土坑で、遺構検出前には石敷遺構（SS5002）が確認できた。遺構の詳細については第４章第１節で述べた通りである。SS5002 を掘削すると SM5002 が検出できた。この SS5002 も貝殻片等が多く含まれており、SM5002 の遺構内埋土が多く含まれていたためと考えられる。

貝類遺体については、他遺構では５点以下という出土だったが、第 91 表のとおり、SM5002 でまとまった出土があった。

人為的加工の痕跡のある貝類遺体のうち、ヤコウガイ殻片が特に多く出土し、サラサバテイラやタカラガイ等が出土しているなか、チョウセンサザエは出土が少ない

状況だった。チョウセンサザエについては殻の割り取り方についても銭蔵東地区や東村跡と様相が異なっている。

SA3001 門跡のシャコガイ

SA3001 の門跡部分で、門が埋戻されている状況が確認でき、その部分の南東隅の最下層にシャコガイが伏せられて設置されていた（第 206 図）。シャコガイは、沖縄の民俗事例から魔除けなどの意味をもつといわれている（上江洲 1973）。大型シャコガイの配置については、銭蔵東地区での発掘調査事例で特異な出土様式として述べられている（黒住 2016）。この門は、一部を埋めた後、使用され続けた可能性があり、継続して使用するためシャコガイを配置し、何らかの意味を込めたものと考えられる。

まとめ　今回の調査で得られたヤコウガイ、チョウセンサザエ、サラサバテイラ、ギンタカハマについては、人為的な割り取りの痕跡や加工痕跡がある小破片の存在から螺鈿素材としての利用が考えられる。また、ヤコウガイは体層片が大きく残る部分もあるため、螺鈿素材のみでなく貝匙等の製品素材としての用途があったことも考えられる。チョウセンサザエにおいても完形に近い状態で有孔部が残るものも多く存在することから、体層部片を利用するための割り取りと考えられ、こちらも螺鈿素材以外に、食料残滓や他製品素材等に用いられたと考えられる。銭蔵東地区及び東村跡との比較を中心として分析を行い、共通する事項が多い一方で、一部では異なる様相を示すものもあった。

これらの貝類遺体がまとまって出土した遺構 SM5002 は、貝製品製作に関連する遺構と考えられる。この遺構は、首里古地図で櫨園跡とされる部分から検出しており、漆を採取していたとされる場所で確認したことは、櫨園の機能を知るうえで重要だと考えられる。

SM5002 は出土遺物等から 16 世紀以降～ 18 世紀までの幅広い年代観があるが、近世期の遺構にあたり、銭蔵東地区及び東村跡の 15 世紀後半～ 16 世紀前半のものより新しい段階のものと考えられる。

第 206 図　設置されたシャコガイ（SA3001 門跡）

第４節　人骨

今回の発掘調査で、Ⅲ区から１点、Ⅴ区から４点出土している。部位別でみると永久歯４本、上腕骨が１点出土している。

今回人骨が出土したのは、すべて包含層からの出土である。グスク期の包含層（Ⅳ３層）から出土しているものもある。今回出土した資料は、すべて成人の永久歯と考えられる（第 99 表）。

個別に観察すると、Ⅰ層出土の永久歯（第 207 図 №１）は、激しい齲歯で、抜歯した可能性もある。

首里城跡御内原北地区で検出されたシーリ遺構から、永久歯の出土例がある（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）。シーリ遺構から検出された成人の永久歯は女官達のものと想定され、生活ゴミと同様に廃棄されていることから、抜けた歯を大切にする意識がなかったとされている。生活ゴミとして廃棄したかは不明だが、造成土や他目的で堆積した土中内に単独で混入している状況は、首里城跡御内原北地区シーリ遺構で出土した永久歯と同様の扱いだったことが考えられる。

右上腕骨は、近世期の包含層から出土しているが、混入した経緯等は不明である。

第 99 表　人骨出土一覧

№	部位	出土地区	層位	観察所見
1	下顎右第１臼歯	Ⅲ区	Ⅰ	歯根部分まで齲歯の影響。
2	上顎側切歯	Ⅴ区	Ⅱ３c	エナメル質減形成。
3	上顎右小臼歯	Ⅴ区	Ⅳ３	C ２段階の齲歯。
4	上顎右第３臼歯	Ⅴ区	Ⅳ３	齲歯の可能性有。
5	右上腕骨	Ⅴ区	Ⅲ	近位部－遠位部

第 207 図　出土人骨　歯

第 100 表　III区ギンタカハマ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	SA 3001 門Ⅰ層炭	Ⅰ	Ⅱ 6	合計
Ⅱ類		2	2	4
Ⅲ類	1			1
合計	1	2	2	5

第 101 表　III区サラサバテイラ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	SA 3001 門Ⅰ層炭	SM 3003	SM 3005	SP 3018	Ⅰ	Ⅱ 6	Ⅲ 1 a	Ⅲ 4	Ⅲ 5a	Ⅲ 6 a	Ⅲ 6 e	Ⅲ 6 f	Ⅲ 7a	Ⅲ 8	合計
Ⅰ類						1									1
Ⅱ類	2				2		1			1					6
Ⅲ類	1		1		3					1			1		7
Ⅳ - ①類					2									1	3
Ⅳ - ②類		1	1	1	4	2		1	1		1	1		1	14
Ⅴ - ①類					9										9
Ⅴ - ②類					12										12
合計	3	1	2	1	32	3	1	1	1	2	1	1	1	2	52

第 102 表　III区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地		SA 3001 門Ⅰ層炭	SA 3001 4	SD 3001 層不明	SM 3001 2	SM 3001 6	SM 3002 4	SM 3003 (北)2	SM 3003 2	SM 3003 3	SM 3008 1	SP 3023 1	SS 3004 1	SX 3005 1	Ⅰ	Ⅱ 1	Ⅱ 5	Ⅱ 6	Ⅲ 1c	Ⅲ 2d	Ⅲ 3a	Ⅲ 4	Ⅲ 6 a	Ⅲ 6 b	Ⅲ 6 c	Ⅲ 6 d	Ⅲ 6 e	Ⅲ 6 f	Ⅲ 7 a	Ⅲ 7 b	Ⅲ 7 c	Ⅲ 8	Ⅳ 1 b	Ⅳ 1 c	Ⅳ 1 d	合計
殻	Ⅰ類									1																										1
殻	Ⅱ類														2																					2
殻	Ⅲ - ①類													2	8			3						1												14
殻	Ⅲ - ②類														7	1																				8
殻	Ⅲ - ③類	1	1	1	1										19									1												24
殻	Ⅳ類														1																					1
合計		1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2	37	1	0	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50
蓋	完形					1	1	4	2						4			4									1		1		1		1	1	21
蓋	2/3 以上残													1	8			3		1			2			1	1		6			3	1			27
蓋	2/3 未満残			2			1				1	1	1	1	13	1	1	5	2	1	1	1	7	2	1	1	2	3	5		1	1				55
合計		0	0	2	0	1	2	4	2	0	1	1	1	2	25	1	1	12	2	2	1	1	9	2	1	2	3	4	11	1	1	5	1	1	1	103

第 103 表　III区ヤコウガイ　破片出土状況

分類＼出土地	SA 3001 門Ⅰ層炭	SM 3003 3	SP 3027 1	SX 3005 1	Ⅰ	Ⅱ 1	Ⅱ 6	Ⅲ 4	Ⅲ 6 a	Ⅲ 6 d	Ⅲ 6 e	Ⅲ 6 g	Ⅲ 7c	Ⅲ 8	Ⅳ 2a	合計
A					9	4			2		1			3		19
B					1											1
C					9		3	1	4	1	1		1			20
D	1				12		1					1				15
E-1						2					3					5
E-2				1	3	12				1	1				2	20
F	1	7	6	1	15	1				1				1		33
合計	2	7	6	2	49	19	4	1	6	3	6	1	1	4	2	113

第 104 表　III区チョウセンサザエ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地		SA 3001 門Ⅰ層炭	SA 3001 4	SA 3005 裏込	SA 3006 1	SA 3008 裏込	SM 3001 7	SM 3002 4	SM 3003 (北)2	SM 3003 層不明	SM 3005 1	SM 3008 1	SK 3002 1	SP 3024 1	SS 3002 層不明	SX 3001 1	SX 3005 1	Ⅰ	Ⅱ 1	Ⅱ 6	Ⅲ 1 a	Ⅲ 1 c	Ⅲ 1 h	Ⅲ 2 d	Ⅲ 4	Ⅲ 6 a	Ⅲ 6 c	Ⅲ 6 d	Ⅲ 7 g	Ⅲ 7 a	Ⅲ 7 e	Ⅲ 7 c	Ⅲ 8	合計
殻	Ⅰ類	2	2						1	1							2	15		2		1			1		1				1			29
殻	Ⅱ類	2																14										1	1	1	1		2	22
殻	Ⅲ - ①類										1							7	1	1											1			11
殻	Ⅲ - ②類	1																14		2	1			1				1		1			1	22
殻	Ⅳ類	2		1			1					1						10		1														16
殻	Ⅴ類							1										9					1						1					12
殻	Ⅵ類													1				4																5
殻	Ⅶ - ①類	1											1			1		5																8
殻	Ⅶ - ②類																	1																1
合計		8	2	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	2	79	1	6	1	1	1	1	1	0	1	2	2	2	3	0	3	126
蓋	完形				1	1		1				2			1			8		1		1			3	6			2	1		1	1	30

第 105 表　III区マガキガイ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	SA 3005 裏込	SA 3006 1	SA 3008 裏込	SK 3001 1	SM 3001 6	Ⅰ	Ⅱ 1	Ⅱ 5	Ⅱ 6	Ⅲ 1c	Ⅲ 2 b	Ⅲ 2 c	Ⅲ 4	Ⅲ 5 a	Ⅲ 6 a	Ⅲ 6 b	Ⅲ 6 c	Ⅲ 6 d	Ⅲ 6 e	Ⅲ 6 f	Ⅲ 6 g	Ⅲ 7 a	Ⅲ 7 b	Ⅲ 7 c	Ⅲ 7 e	Ⅲ 8	Ⅳ 1 a	Ⅳ 1 b	合計
Ⅰ類			1			1																			1				3
Ⅱ類	1	1	3	1	1	15	4	2	2	1	3	1	1	3	6	2	1	5	4	1	3	4	3		1	7	2		78
Ⅲ類						1	1								3				1	1	1	1		2				1	12
破片						1																							1
合計	1	1	4	1	1	18	5	2	2	1	3	1	1	3	9	2	1	5	5	2	4	5	3	2	2	7	2	1	94

第 106 表　III区タカラガイ科　貝製品

分類＼出土地	SM 3001 9	SX 3001 1	Ⅰ	Ⅱ 6	Ⅲ 2 c	Ⅲ 6 a	Ⅲ 6 b	Ⅲ 6 c	Ⅲ 6 e	Ⅲ 7 a	Ⅳ 9	Ⅳ 1 d	合計
A											1		1
B	1		1									1	3
C						1		1	1	1			4
D		1	3	1	1	1	1		1	1			10
合計	1	1	4	1	1	2	1	1	2	2	1	1	18

第 107 表　IV区ギンタカハマ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	Ⅰ	Ⅲ 10 b	Ⅲ 13	合計
Ⅱ類		1	1	2
Ⅲ類	1			1
Ⅳ - ②類	1			1
合計	2	1	1	4

第 108 表　IV区サラサバテイラ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	SA 4003 裏込	Ⅰ	Ⅲ 10 層	Ⅲ 10 a	Ⅲ 11 b	Ⅲ 11 c	Ⅲ 11 d	Ⅲ 12	Ⅲ 13	Ⅲ 18	合計
Ⅱ類			1		1	1	1		1	2	7
Ⅲ類		4			1				1	1	7
Ⅳ - ①類		1									1
Ⅳ - ②類		1		1			2	1		2	7
Ⅴ - ①類	1		1				1				3
Ⅴ - ②類			3								3
合計	1	6	5	1	2	1	4	1	2	5	28

第 109 表　IV区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地		SM 4002 1	SM 4003 1	SR 4001 層不明	Ⅰ	Ⅱ 7	Ⅲ 1 層	Ⅲ 10 層	Ⅲ 10 a	Ⅲ 10 d	Ⅲ 11 層	Ⅲ 11 b	Ⅲ 11 c	Ⅲ 11 c 層炭	Ⅲ 11 d	Ⅲ 11 e2	Ⅲ 12 層	Ⅲ 12 a	Ⅲ 15 d	Ⅲ 15 e	合計
殻	Ⅲ - ①類				4			2	1				1		1		2				11
殻	Ⅲ - ②類	1							1												2
殻	Ⅲ - ③類	1			5				1	1											8
合計		2	0	0	9	0	0	2	3	1	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	21
蓋	完形	1			3		1	1	1		1	2		1			3		1		15
蓋	2/3 以上残				3			1	3	1		1	2	1	1			1	1		13
蓋	2/3 未満残		2	1	14	2		6	10				1		1	1		1	1	2	42
合計		1	2	1	20	2	1	8	14	1	1	3	3	2	2	1	3	1	2	2	70

第 110 表　Ⅳ区ヤコウガイ　破片出土状況

分類＼出土地	SM 4002 1	SR 4001 1	SX 4007 完掘	Ⅰ	Ⅱ 7	Ⅲ 10 層	Ⅲ 10 a	Ⅲ 10 b	Ⅲ 11 b	Ⅲ 11 d	Ⅲ 11 e2	Ⅲ 15 e	Ⅲ 15 e2	Ⅲ 18	Ⅲ 20	Ⅳ 3	合計
A		2		16		6	6	1	1								32
B					2												2
C				5			3	2		1				1	1	1	14
D				2			3	1									6
E-2				1							1		3				5
F	5		1	4	1		1					1	2				15
合計	5	2	1	28	3	6	13	4	1	1	1	1	5	1	1	1	74

第 111 表　Ⅳ区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類

分類＼出土地		SA 4003 裏込	SD 4002 層不明	SK 4002 1	SK 4006 1	SK 4007 層不明	SM 4002 1	SR 4001 1	Ⅰ	Ⅱ 7	Ⅱ 8	Ⅲ 10 層	Ⅲ 10 a	Ⅲ 10 a1	Ⅲ 10 a3	Ⅲ 10 a4	Ⅲ 10 a5	Ⅲ 10 a7	Ⅲ 10 b	Ⅲ 10 d	Ⅲ 11 a	Ⅲ 11 b	Ⅲ 11 c	Ⅲ 11 c2	Ⅲ 11 c 層炭	Ⅲ 12 層	Ⅲ 12 a	Ⅲ 12 b	Ⅲ 13	Ⅲ 15 層	Ⅲ 15 d	Ⅲ 15 e2	Ⅲ 20	層不明	合計
殻	Ⅰ類		1		1	2	2		6	2		1		1	2		2		2			3	4			5	1	1	4	1			1		42
	Ⅱ類					2			9	3		1	2						2			1	2			4	2	1			1				30
	Ⅲ - ①類					1	1		15	1		1	1								1			1		4		2							28
	Ⅲ - ②類								10	1			3													5	2								21
	Ⅳ類					1	2		2	1		1							1				1	1		9	1								20
	Ⅴ類					2				1		1	2						2						1	4	2		1						16
	Ⅵ類								1								1																		2
	Ⅶ - ①類			3			1		1	3		2	1						2				1			4	1								19
	Ⅶ - ②類																									1									1
合計		0	1	3	1	8	6	0	44	12	0	7	9	1	2	0	3	0	9	0	1	4	8	2	1	36	9	4	5	1	1	0	1	0	179
蓋	完形	1	1	1				1	6	4	2	1	4	1		1		1	1	1		1	4	2	7		4					1	3	1	49

第 112 表　Ⅳ区マガキガイ殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	SA 4003 裏込	SM 4002 1	SR 4001 1	Ⅰ	Ⅱ 7	Ⅱ 8	Ⅲ 10 層	Ⅲ 10 a	Ⅲ 10 a5	Ⅲ 10 d	Ⅲ 11c 層炭	Ⅲ 12 層	Ⅲ 12 a	Ⅲ 12 b	Ⅲ 15 e	Ⅲ 18	Ⅲ 20	Ⅳ 3	合計
Ⅱ類	1	1	2	27	3	1	2	1	3	2	2	4	1	1		1	2	1	55
Ⅲ類			1				1	2			1				1				6
合計	1	1	3	27	3	1	3	3	3	2	3	4	1	1	1	1	2	1	61

第 113 表　Ⅳ区タカラガイ科　貝製品

分類＼出土地	SM 4003 1	Ⅰ	Ⅱ 7	Ⅲ 10 層	Ⅲ 10 a	Ⅲ 11 b	Ⅲ 11 c	Ⅲ 20	合計
B		1	1						2
C		1		1	1				3
D	1	1			1	1	4	1	9
合計	1	3	1	1	2	1	4	1	14

第 114 表　Ⅴ区ギンタカハマ殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	SS 5007 Ⅲ 1b	Ⅰ 3	Ⅱ	トレ 10 Ⅲ 20	トレ 8 Ⅲ 27	合計
Ⅱ類			1	1		2
Ⅲ類		1			1	2
Ⅳ - ①類					2	2
Ⅳ - ②類					1	1
Ⅴ - ①類		5				5
Ⅵ類	1	1				2
合計	1	7	1	1	4	14

第 115 表　Ⅴ区サラサバテイラ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地	SD 5001	トレ 1 SM 5002 5001 堀形	トレ 1 SM 5002 1	トレ 1 SM 5002 3	トレ 1 SM 5002 4	トレ 1 SM 5002 半截	トレ 1 SS 5002 1	トレ 1 SX 5004 1	Ⅰ	Ⅱ	トレ 6 Ⅱ 4	Ⅲ	トレ 6 Ⅲ	トレ 8 Ⅲ	Ⅲ 1	Ⅲ 3 層	Ⅲ 3 a	Ⅲ 4	Ⅲ 5	Ⅲ 7 層	Ⅲ 7 a	Ⅲ 9 層	Ⅲ 9 b	トレ 14 西 Ⅲ 25	トレ 8 Ⅲ 34	トレ 8 Ⅳ 4	合計
Ⅰ類									1							1					1					1	4
Ⅱ類									3		1				1		1	1				1			1		9
Ⅲ類	1			1			1	2	1	13	1								1	1			3	1			26
Ⅳ - ①類							1	5		9		1			1		1										18
Ⅳ - ②類		1		1	1			3		9			1	2			2		1	4		1	3				29
Ⅴ - ①類								1		2													1				4
Ⅴ - ②類								5	2	2							2						2				13
合計	1	1	1	1	1	2	16	3	39	1	2	1	2	1	1	1	6	1	2	5	1	1	10	1	1	1	103

第 116 表　Ⅴ区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類

分類＼出土地		トレ 7 SA 5002 3	SA 5003 裏込	SA 5005 ｹﾁｬ	SA 5005 南ｹﾁｬ	SA 5005 南ｹﾁｬ～裏込	SD 5002 堀形	SD 5002 下Ⅲ	SD 5004	トレ 13 SF 5001 1	トレ 13 SF 5001 造成 2･3	トレ 14 SF 5001 1	トレ 14 SF 5001 造成 2	トレ 14 SF 5001 造成 2 炭	トレ 14 SF 5001 造成 2･3	トレ 15 SF 5001 造成 2･3	先行西壁 SF 5001 造成 SD5001	トレ 3 SK 5003 4	SK 5004 半截	トレ 1 SM 5001 1	トレ 1 SM 5002 1	トレ 1 SM 5002 3	トレ 1 SM 5002 半截	トレ 1 SP 5032 1
殻	Ⅰ類																							
	Ⅱ類																							
	Ⅲ - ①類	3			1					1									1		4	1	3	
	Ⅲ - ②類		1																		2	1		
	Ⅲ - ③類																				10		6	
	Ⅳ類																				1			
合計		3	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	17	2	9	0
蓋	完形						1	1				2	7	4	5	1	1				3	3		
	2/3 以上残	1							1									1			1			
	2/3 未満残	3		2		1				1	1		3		1					1				1
合計		4	0	2	0	1	1	1	1	1	1	2	10	4	6	1	1	1	0	1	4	3	0	1

第 117 表　Ⅴ区ヤコウガイ　殻の欠損状況による分類（つづき）

分類＼出土地		SP 5065	トレ 1 SS 5002 1	トレ 4 SS 5005 4	SS 5007 Ⅲ 1b	先行 SX 5001 1	SX 5005 1	SX 5005 上	SX 5005	Ⅰ	Ⅱ	トレ 14 西 Ⅱ	Ⅱ 2	Ⅱ 3	Ⅱ 3 b	Ⅱ 3 c	Ⅱ 7	Ⅱ 12	Ⅲ	トレ 6 Ⅲ	トレ 11 Ⅲ	Ⅲ層 SX5001 炭層下	Ⅲ 1	Ⅲ 3 層	Ⅲ 3 a	Ⅲ 3 c	Ⅲ 4	Ⅲ 5	トレ 6 Ⅲ 5	Ⅲ 7 層	Ⅲ 7 a	Ⅲ 8	Ⅲ 9 b	トレ 10 Ⅲ 16	Ⅲ 17	トレ 10 Ⅲ 20	トレ 14 西 Ⅲ 25	トレ 8 Ⅲ 27	トレ 8 Ⅲ 34	Ⅳ 2	トレ 7 Ⅳ 4	トレ 7 Ⅳ 6	合計
殻	Ⅰ類									1																																1
	Ⅱ類									1				1																												2
	Ⅲ - ①類				1					12									2					2		1						1			1				1			35
	Ⅲ - ②類									2														1				2						1									10
	Ⅲ - ③類									14	1	1	1			1							1	2	1							2		1									41
	Ⅳ類																																									1
合計		0	0	0	1	0	0	0	0	30	1	1	1	1	0	1	0	0	0	2	0	0	1	5	1	1	0	0	2	0	0	0	3	1	1	1	0	0	1	0	0	0	90
蓋	完形									18	1				1	1					1		1	1	1	1							4				1			1		1	61
	2/3 以上残		2					1	1	19				1			1	1					2	2		3		1					1										39
	2/3 未満残	1	6	1		1	1		1	39	1		1	1		1			3			1	1	1	3	2	1		1	1	1	3	1					2		1	2		92
合計		1	8	1	0	1	1	1	2	76	2	0	1	2	1	2	1	1	3	0	1	1	4	4	4	6	1	1	1	1	1	3	6	0	0	0	1	2	0	2	2	1	192

第 118 表　Ⅴ区ヤコウガイ　破片出土状況

分類＼出土地		SA 5005 ｹﾁｬ	SA 5005 南ｹﾁｬ	SD 5004	トレ 13 SF 5001 造成 2・3	トレ 14 SF 5001 1	トレ 14 SF 5001 造成 2	トレ 14 SF 5001 造成 2 炭	トレ 3 SK 5002 2	トレ 1 SM 5002 1	トレ 1 SM 5002 3	トレ 1 SM 5002 4	トレ 1 SM 5002 半截	先行 SP 5027 1	トレ 1 SP 5040 1	トレ 1 SP 5062	トレ 13 SQ 5005 1	トレ 1 SS 5002 1	SS 5007 Ⅲ 1b	先行 SX 5001 1	SX 5005 1	Ⅰ	トレ 14 西 Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ 3 a	Ⅱ 3 b	トレ 6 Ⅱ 4	Ⅱ 7	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ 1	Ⅲ 3 層	Ⅲ 3 a	Ⅲ 3 c	トレ 12 Ⅲ 3 b	Ⅲ 7	Ⅲ 8
A					1		1			4				1	1							14	1			2		1			1			1		1	1
B					1					1			4						1			7															
C							1			10	1	2	4					10	1			13		1												2	1	
D		3			1		2		1	3	1	2	1						1		1	17		1	2	1			1			2	3		1	1		
E-1		2			1	1				2		4				1						10	2															
E-2				1	1														1			12	3		2	1	1	1			1		2	3		4	
F			1					3	1	5			16			2	3		5			8			1	2			1	1	3	1		2		1	
合計		5	1	1	5	1	4	3	2	25	2	8	25	1	1	3	3	10	7	3	1	81	6	2	5	6	1	2	2	1	9	5	2	7	1	8	1

第 119 表　Ⅴ区ヤコウガイ　破片出土状況（つづき）

出土地 / 分類	III	トレ 10 III	III	トレ 10 III	トレ 14 西 III	トレ 8 III	IV	合計
	9 b	16	17	19	25	27	4	
A	2			1				34
B	3				1			18
C							1	49
D		1						46
E-1	3		3					29
E-2	4							37
F			1			1		58
合計	12	1	4	1	1	1	1	271

第 120 表　Ⅴ区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類

出土地 / 分類		トレ 7 SA	SA				SD			トレ 13 SF	トレ 14 SF			トレ 15 SF	SK	トレ 1 SM		トレ 1 SP	トレ 1 SS	トレ 5 SS	トレ 4 SX	SX		I	II	トレ 14 西	II					
		5002	5005	5005		5006	5002	5004	5004	5001	5001			5001	5004	5001	5002	5062	5002	5003	5002	5005	5005					3	3 a	3 c	11	12
		3	南ｸﾁｬ	南ｸﾁｬ～裏込		検出	下III	1		造成 2・3	造成 2	造成 2 炭	造成 2・3	造成 2・3	半截	2	1	2~3	1	1	2	上面				II						
殻	I 類	1	5				1				8	4	2		1		1							14	1		4	1		1	
	II 類										2	1	1			1							1	9	1	1	1				1
	III - ①類										4		1						1			1		13							
	III - ②類		1			2							2						1	1	1			6							
	IV類	1																						8	2						
	V 類							1						1					1					12							
	VI類																							2							1
	VII - ①類		1							1	4			1					2					14							
	VII - ②類									2														6							
合計		2	7	0		2	1	1	0	3	18	5	6	2	1	1	1	0	5	1	1	1	1	84	4	1	5	1	0	1	2
蓋完形			1	1			1		1									1						5			1	1	1		1

第 121 表　Ⅴ区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類（つづき）

出土地 / 分類		トレ 8 III	トレ 11 III	III 1	III 3 層	III 3 a	III 3 b	III 3 c	III 5	トレ 6 III 5	III 7	トレ 6 III 9 a	トレ 6 III 9 b	トレ 10 III 17	トレ 10 III 18	トレ 10 III 20	トレ 8 III 27	トレ 8 III 34	IV 4	トレ 7 IV 5	IV 6	合計
殻	I 類	1		5	1	1		1	1			1	5			1	2			1		64
	II 類				2								1	2	1							25
	III - ①類															1	1					22
	III - ②類	1		2	2						1		2					1			1	24
	IV類	1		2					1										1			16
	V 類	1	1	2	2	1	1			1	1					1	1					27
	VI類			1																		4
	VII - ①類	1	1	1									1					1				28
	VII - ②類																					8
合計		5	2	13	7	2	1	1	2	1	2	1	9	2	1	3	4	2	1	1	1	218
蓋完形				1	2			1														18

第 122 表　Ⅴ区マガキガイ殻の欠損状況による分類

出土地 / 分類	トレ 6 SA	トレ 7 SA	SA		SD		トレ 13 SF	先行西 壁 SF	先行西 壁 SF	SK	トレ 6 SL	トレ 1 SM						トレ 1 SP	トレ 1 SP	トレ 1 SS	先行 SX	I	II	II 1	II 3 層	II 3 a	II 3 b	II 3 c	II 7	II 8	II 10 層下 瓦層	III	トレ 6 III
	5002	5002 3	5002 南堀形	5005 南ｸﾁｬ	5004 1	5004	5001 造成 2・3	5001 造成より下	5001 造成 SD5001	5004 半截	5001 検出	5001 1	5002 2	5002 1	5002 3	5002 4	5002 半截	5032 1	5062 1	5002 1	5001 1												
I 類								1	1	1	2							1		2		13			2	1						2	
II 類	1	6	1	1	1	1	1		2	3	3	1		3		1	1		1	2	3	51	7		1	3	1	1	1		1	3	3
III類		1											1		1						6	4		1					1	1		1	
IV類																				1													
破片																							1										
合計	1	7	1	1	1	1	1	1	3	4	5	1	1	3	1	1	1	1	1	5	9	68	8	1	3	4	1	1	2	1	1	6	3

第 123 表　Ⅴ区マガキガイ殻の欠損状況による分類（つづき）

出土地 / 分類	III 1	III 3	III 3 a	III 3 c	III 5	III 7	III 8	III 9 b	III 13	トレ 10 III 16	トレ 10 III 17	トレ 10 III 18	IV 2	IV 3	トレ 7 IV 4	トレ 7 IV 5	合計
I 類				1		2						2			2	2	35
II 類	3	6	1	3	1	5	2	1	2	1	1	2	1	1		1	135
III類																	17
IV類																	1
破片																	1
合計	3	6	1	4	1	7	2	1	2	1	1	4	1	1	2	3	189

第 124 表　Ⅴ区タカラガイ科　貝製品

出土地 / 分類	トレ 14 SF 5001 造成 2	トレ 14 SF 5001 造成 2 炭	SK 5004 半截	トレ 1 SM 5002 1	トレ 1 SM 5002 3	トレ 1 SM 5002 4	トレ 1 SM 5002 半截	トレ 1 SP 5032 1	SP 5048	トレ 1 SP 5062 1	トレ 1 SS 5062 3	トレ 1 SS 5002 1	先行 SX 5001 1	I	II 1	II 3 c	II 4	II 12	III 7	III 9 b	トレ 6 II 6	トレ 7 IV 6	合計
A				3	2	6	2																13
B				2	2	1								1									6
C						1			2	1	1	1	1	4	1	1	1	1		1	1	1	17
D	1	2	1						1	1		2	1	5	1				2				17
合計	1	2	1	5	4	8	2		1	2	2	1	3	2	10	1	1	1	1	2	1	1	53

第 125 表　III区巻貝出土状況 a

SA3001

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c		1	1	1
イモガイ科	アンボンクロザメ	Ⅰ - 2 - c			1	1
	イモガイ科不明			1		1
合　　計			0	2	2	3

SA3005

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a			1	1
合　　計			1	0	1	2

SK3001

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1

SM3002

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
巻貝不明					1	1

SM3003

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	5	1	1	6

SM3008

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギクの蓋	Ⅱ - 1 - b	1			1
アマオブネ科	アマオブネ	Ⅰ - 1 - b	1			1
スイショウガイ科	クモガイ	Ⅰ - 2 - c			1	1
合　　計			2	0	1	3

SM3009

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
イモガイ科	イモガイ科不明				1	1

SP3010

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b		1	1	1
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ - 1 - c	1			1
合 計			1	1	1	2

SP3024

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a			1	1

SP3027

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニノツノガイ科	イワ(ウミニナ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b			1	1

SS3004

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1

SX3003

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	1			1

SX3005

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	1			1
トウガタカワニナ科	スグカワニナ	Ⅳ - 6	1			1
合　　計			4	0	0	4

Ⅰ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	4	1	2	5
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	2		1	2
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c	1			1
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b		1		1
ヘナタリ科	カワアイ	Ⅲ - 1 - c			1	1
	センニンガイ	Ⅲ - 0 - c	1			1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	7		1	7
	ムカシタモト	Ⅰ - 2 - c	1			1
	クモガイ	Ⅰ - 2 - c		1		1
ヤツシロガイ科	スクミウズラガイ	Ⅰ - 2 - c	1			1
フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ - 4 - a			2	1
アッキガイ科	ツノレイシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
	シラクモガイ	Ⅰ - 3 - a	2			2
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	5		1	5
	ヒメイトマキボラ	Ⅰ - 2 - b	1			1
	ナガイトマキボラ	Ⅰ - 2 - a			1	1
イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	Ⅰ - 2 - c	1			1
	サヤガタイモ	Ⅰ - 1 - a	1			1
	アカシマミナシ	Ⅰ - 2 - c			1	1
	ヤナギシボリイモ	Ⅰ - 2 - a	2			2
	イモガイ科不明				1	1
合　　計			31	3	11	39

Ⅱ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	3			3
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c		2		2
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	1			1
ヘナタリ科	センニンガイ	Ⅲ - 0 - c			1	1
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明				1	1
巻貝不明					1	1
合　　計			4	2	3	9

Ⅲ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	1			1
	オキナワイシダタミ	Ⅱ - 1 - b	1			1
	ニシキウズ科不明				1	1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	10	5	2	15
	カンギクの蓋	Ⅱ - 1 - b	1			1
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c	2	2	1	4
	コオニノツノガイ	Ⅰ - 2 - a	1			1
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	2	4	1	6
	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b	1	3	1	4
スイショウガイ科	クモガイ	Ⅰ - 2 - c		1	1	1
ヤツシロガイ科	スクミウズラガイ	Ⅰ - 2 - c	1			1
アッキガイ科	ウネレイシダマシ	Ⅰ - 1 - b			1	1
	ツノレイシ	Ⅰ - 3 - a	3			3
	シラクモガイ	Ⅰ - 3 - a	1			1
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ - 3 - a	5			5
イトマキボラ科	ﾘｭｳｷｭｳﾂﾉﾏﾀｶﾞｲ	Ⅰ - 3 - a	1			1
イモガイ科	ヤナギシボリイモ	Ⅰ - 2 - a			2	1
	イモガイ科不明				1	1
合　　計			30	15	11	49

※完形と殻頂の数を足した合計を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた）

第 126 表　III区巻貝出土状況 b

IV層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	1			1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1
	カンギクの蓋	Ⅱ - 1 - b			1	1
オニノツノガイ科	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b			1	1
スイショウガイ科	クモガイ	Ⅰ - 2 - c		1		1
オニコブシ科	オニコブシ科不明				1	1
イモガイ科	マダライモ	Ⅰ - 1 - a	1			1
トウガタカワニナ科	スグカワニナ	Ⅳ - 6		1		1
巻貝不明					1	1
合　　計			3	2	4	9

第 127 表　IV区巻貝出土状況 a

SA4003

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ムラサキウズ	Ⅰ - 3 - a	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	2			2
イモガイ科	キヌカツギイモ	Ⅰ - 2 - a	1			1
合　　計			4	0	0	4

SK4001

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1

SK4006

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
トウガタカワニナ科	スグカワニナ	Ⅳ - 6	1			1

SR4001

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b			1	1
オニノツノガイ科	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	1			1
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
合　　計			2	0	1	3

Ⅰ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	1			1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1
アマオブネ科	オオマルアマオブネ	Ⅰ - 1 - b	1			1
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c	5		2	5
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	1			1
スイショウガイ科	ネジマガキ	Ⅰ - 2 - c	1			1
アッキガイ科	シラクモガイ	Ⅰ - 3 - a	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	4			4
	ヒメイトマキボラ	Ⅰ - 2 - b	1		1	1
	ナガイトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	1			1
イモガイ科	ゴマフイモ	Ⅰ - 2 - c			1	1
	サラサミナシモドキ	Ⅰ - 2 - c			1	1
	ヤナギシボリイモ	Ⅰ - 2 - a	1			1
巻貝不明					1	1
合　　計			18	0	7	22

Ⅱ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b	1			1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	3			3
イモガイ科	ゴマフイモ	Ⅰ - 2 - c			1	1
巻貝不明					1	1
合　　計			5	0	2	7

第 128 表　IV区巻貝出土状況 b

Ⅲ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	1			1
	ムラサキウズ	Ⅰ - 3 - a	1			1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	4		2	4
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c	1	2		3
	コゲツノブエ	Ⅲ - 1 - c	1			1
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	1	1	1	2
	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b	2	1		3
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	2			2
スズメガイ科	カワチドリ	Ⅰ - 3 - a	1			1
オキニシ科	オキニシ	Ⅰ - 3 - a	1		2	1
アッキガイ科	ツノレイシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
	シラクモガイ	Ⅰ - 3 - a	1			1
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ - 3 - a	2			2
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ - 1 - c	3			3
イトマキボラ科	ヒメイトマキボラ	Ⅰ - 2 - b	1			1
イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	Ⅱ - 2 - c	1			1
	クロフモドキ	Ⅰ - 2 - c			1	1
	マダライモ	Ⅰ - 1 - a	3			3
	サヤガタイモ	Ⅰ - 1 - a	2			2
	ヤナギシボリイモ	Ⅰ - 2 - a	1	1	1	2
	キヌカツギイモ	Ⅰ - 2 - a	1			1
	イモガイ科不明			1	1	1
合　　計			31	6	8	38

IV層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ - 3 - a	1			1

層不明

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニコブシ科	オニコブシ	Ⅰ - 3 - a	1			1

第 129 表　V 区巻貝出土状況 a

SA5002

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c	1			1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ - 3 - a		1		1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	1			1
イモガイ科	ヤナギシボリイモ	Ⅰ - 2 - a	1			1
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ - 9	1			1
合　　計			6	1	0	7

SA5003

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	1			1
合　　計			2	0	0	2

SA5005

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1
ヘナタリ科	センニンガイ	Ⅲ - 0 - c	3			3
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	1			1
イモガイ科	イモガイ科不明		1			1
合　　計			6	0	0	6

SD5002

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ユキノカサ科	リュウキュウノアシ	Ⅰ - 1 - a	1			1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	11			11
アマオブネ科	マルアマオブネ	Ⅱ - 1 - b	1			1
合　　計			13	0	0	13

SD5004

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1

※完形と殻頂の数を足した合計を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた）

第 130 表　Ⅴ区巻貝出土状況 b

SF5001

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	1			1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	350	2	2	352
アマオブネ科	アマオブネ	Ⅰ - 1 - b	4			4
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c		1		1
	メオニノツノガイ	Ⅰ - 4 - c	1			1
	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b		1		1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	10	1		11
アッキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ - 4 - a	1			1
	ツノレイシ	Ⅰ - 3 - a	2			2
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ - 1 - c	2			2
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	1			1
イモガイ科	アカシマミナシ	Ⅰ - 2 - c		1		1
巻貝不明					2	1
合　　計			372	6	4	379

SK5004

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
アマオブネ科	コシダカアマガイ	Ⅰ - 1 - b	1			1

SM5001

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
イトマキボラ科	ヒメイトマキボラ	Ⅰ - 2 - b		1		1

SM5002

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	3	2	1	5
オニノツノガイ科	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	2			2
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ - 8			1	1
合　　計			6	2	2	9

SP5032

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	2			2
オニノツノガイ科	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	2			2
合　　計			4	0	0	4

SP5062

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b		1		1
オニノツノガイ科	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b		1		1
	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b		1		1
合　　計			0	3	0	3

SP5065

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	1			1

SP5079

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オニノツノガイ科	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	9	6	3	15

SS5002

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ムラサキウズ	Ⅰ - 3 - a	1			1

SS5005

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	2			2

SS5007

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a			1	1

SX5001

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b		1	1	1

SX5002

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	3			3

SX5004

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b		1		1
アマオブネ科	アマオブネ	Ⅰ - 1 - b	1			1
オニノツノガイ科	オニノツノガイ科不明				1	1
アッキガイ科	コガンゼキ	Ⅰ - 2 - a	1			1
イモガイ科	サヤガタイモ	Ⅰ - 1 - a	1			1
合　　計			3	1	1	5

SX5005

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オニコブシ科	オニコブシ	Ⅰ - 3 - a	1			1

Ⅰ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ツタノハ科	オオベッコウガサ	Ⅰ - 1 - a			1	1
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a		2	2	2
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	17	2	1	19
アマオブネ科	アマオブネ	Ⅰ - 1 - b	2			2
	ニシキアマオブネ	Ⅰ - 1 - c	1			1
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c		6	2	6
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	3			3
	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b		1		1
	ナガタケノコカニモリ	Ⅰ - 1 - c		1		1
ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Ⅰ - 0 - a	1			1
ヘナタリ科	フトヘナタリ	Ⅲ - 0 - d			1	1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1	3	4	4
	クモガイ	Ⅰ - 2 - c		1		1
タマガイ科	リスガイ	Ⅰ - 2 - c	1			1
オキニシ科	オキニシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
アッキガイ科	アカイガレイシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
	ツノレイシ	Ⅰ - 3 - a	3			3
	シラクモガイ	Ⅰ - 3 - a	1			1
オニコブシ科	オニコブシ	Ⅰ - 3 - a		1		1
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ - 2 - a	2	1		3
イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	Ⅱ - 2 - c	1			1
	マダライモ	Ⅰ - 1 - a	1			1
	ユキゲイモ	Ⅰ - 2 - c	1			1
	ヤキイモ	Ⅰ - 2 - c	1			1
	ヤナギシボリイモ	Ⅰ - 2 - a	3			3
	アジロイモ	Ⅱ - 2 - c	1			1
	イモガイ科不明		1	1		2
タケノコガイ科	キタケノコガイ	Ⅳ			1	1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ - 8	3		3	3
巻貝不明					2	1
合　　計			106	93	211	203

※完形と殻頂の数を足した合計を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた）

第 131 表　Ⅴ区巻貝出土状況 c

Ⅱ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	6	1	1	7
	カンギクの蓋	Ⅱ - 1 - b	1			1
オニノツノガイ科	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	3	1		4
	クワノミカニモリ	Ⅰ - 1 - b		1		1
ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ - 1 - c		1		1
ヘナタリ科	カワアイ	Ⅲ - 1 - c			1	1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1	1	2	2
アッキガイ科	シラクモガイ	Ⅰ - 3 - a	1			1
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ - 1 - c	2			2
イモガイ科	マダライモ	Ⅰ - 1 - a	1			1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ - 8		1		1
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ - 8			1	1
オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	Ⅴ - 8			2	1
巻貝不明					1	1
合　　計			16	6	8	26

Ⅲ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	3		2	3
	ニシキウズ科不明				1	1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	5	2	3	7
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c		2		2
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b		1		1
スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ - 2 - c	1			1
	ムカシタモト	Ⅰ - 2 - c		1		1
	クモガイ	Ⅰ - 2 - c		1		1
アッキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ - 4 - a	1			1
	ツノレイシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
	シラクモガイ	Ⅰ - 3 - a	2			2
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ - 1 - c	1			1
イトマキボラ科	チトセボラ	Ⅰ - 2 - c			1	1
イモガイ科	マダライモ	Ⅰ - 1 - a	1			1
	サヤガタイモ	Ⅰ - 1 - a		1		1
	ジュズカケサヤガタイモ	Ⅰ - 1 - a	1			1
	ヤナギシボリイモ	Ⅰ - 2 - a		1		1
	イモガイ科不明			1		1
トウガタカワニナ科	スグカワニナ	Ⅳ - 6	1			1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ - 8	12	2	2	14
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ - 9	1		2	1
合　　計			30	12	11	44

Ⅳ層

科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ - 2 - a	1			1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ - 1 - b	16	8	20	24
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ - 2 - c		2		2
	イワ(ｳﾐﾆﾅ)カニモリ	Ⅱ - 1 - b	26	212	237	238
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明				1	1
オキニシ科	オキニシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
アッキガイ科	ウネレイシダマシ	Ⅰ - 1 - b	1			1
	ツノレイシ	Ⅰ - 3 - a	1			1
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ - 1 - c	2			2
イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	Ⅱ - 2 - c	1			1
合　　計			49	222	258	272

※完形と殻頂の数を足した合計を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた）

第 132 表　III区二枚貝・ウニ網出土状況 a

SA3001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
シャコガイ科	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c				1		1

SA3005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	1	1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	9	7		1		9
	イオウハマグリ	Ⅱ - 1 - c		1				1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c				1		1
合　計			10	9	0	2	0	12

SA3006

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
フネガイ科	エガイ	Ⅰ - 1 - a	1					1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		1				1
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c			1			1
合　計			1	1	1	0	1	4

SA3007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2					2

SA3008

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		3				3
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2	2				2
合　計			2	5	0	0	0	5

SK3001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c		1				1

SK3002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		1				1

SM3001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c			1			1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	1			1	1
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ - 2 - c		1				1
合　計			1	2	1	0	1	3

SM3002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a	1					1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	4	2				4
二枚貝不明							1	1
合　計			5	2	0	0	1	6

SM3003

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ - 2 - c		1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	21	13		3	2	21
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	1	2				2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1		1			2
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	3					3
合　計			26	16	1	3	2	29

SM3005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c	1					1

SM3007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	4	5				5
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	1					1
合　計			5	5	0	0	0	6

SM3008

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	1	1				1
シャコガイ科	シャコガイ科不明						2	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	1	1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2	3				3
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1					1
二枚貝不明							1	1
合　計			5	5	0	0	3	8

SM3009

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2	4				4
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c		2				2
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	1					1
合　計			3	6	0	0	0	7

SP3002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1					1

SP3010

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c		1				1

SP3018

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
シャコガイ科	シャコガイ科不明						2	1

SP3023

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c		1				1

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた）

第 133 表　Ⅲ区二枚貝・ウニ網出土状況 b

SP3024

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1					1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1					1
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c					1	1
二枚貝不明							1	1
合　計			2	0	0	0	2	4

SP3027

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2					2

SS3002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c		1				1

SS3004

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c		2				2

SX3001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	1				1

SX3004

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c			1			1

SX3005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	1					1
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ - 2 - c		1				1
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ - 2 - c					1	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c			1			1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	6	2	2	1		8
合　計			7	3	3	1	2	13

Ⅰ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	13	15				15
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ - 2 - a		1			1	1
	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c					4	1
	オオシラナミ（ｼﾗﾅﾐ）	Ⅰ - 2 - a					1	1
	シャコガイ科不明					1	13	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	2	4				4
イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ - 1 - c	1	2				2
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c	1	2			2	2
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	28	26	6	4	6	34
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	4	3				4
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ - 2 - c	1					1
	マルオミナエシ	Ⅰ - 2 - a					1	1
	ハネマツカゼ	Ⅰ - 1 - c		1				1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	3	4	3	2	4	6

Ⅰ層（つづき）

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	9	7	1		4	10
二枚貝不明							2	1
合　計			62	65	10	7	38	85

Ⅱ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	3	6				6
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c		1				1
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ - 2 - a	1					1
	オオシラナミ（ｼﾗﾅﾐ）	Ⅰ - 2 - a	1				1	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	2	2				2
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a	1	2				2
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c	1					1
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	26	20	1	2	2	27
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	1					1
	イオウハマグリ	Ⅱ - 1 - c		1				1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1	2			1	2
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c		2		2		4
合　計			37	36	1	4	4	49

Ⅲ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
フネガイ科	エガイ	Ⅰ - 1 - a	1					1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	25	23		2	2	25
	ツキガイ科不明						1	1
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c		1		1		2
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ - 2 - a	1					1
	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c			1			1
	シャコガイ科不明						3	1
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ - 2 - c		1			1	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	4	1				4
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ - 1 - c		1				1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a		1	2	2	1	3
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	115	104	20	15	9	135
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	2	1	1			3
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ - 2 - c	2	1				2
	オイノカガミ	Ⅱ - 2 - c	2	1	1			3
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	2	1			1	2
	イオウハマグリ	Ⅱ - 1 - c	2	2				2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	4	1	4	1	1	8
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c		1		1		2
二枚貝印象化石			1	1				1
二枚貝不明							7	1
合　計			161	141	29	22	26	200

Ⅳ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ウミギク科	メンガイの一種		1	1				1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		2				2
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	10	10		2	2	12
合　計			11	13	0	2	2	15

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた）

第 134 表　Ⅳ区二枚貝・ウニ網出土状況

SA4002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c		1				1

SD4002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	1					1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c		2				2
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c		1				1
合　計			1	3	0	0	0	4

SK4002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	2	1	2			4
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c			1		1	1
合　計			2	1	3	0	2	6

SK4006

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a					1	1
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c		1				1
合　計			0	1	0	0	2	3

SK4007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ツキガイ	Ⅰ - 2 - c					1	1

SM4002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1					1
二枚貝不明						1		1
合　計			1	0	0	1	0	2

SM4003

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
シャコガイ科	オオシラナミ（ｼﾗﾅﾐ）	Ⅰ - 2 - a					1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	6	5				6
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c		1				1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1					1
合計			7	6	0	0	1	9

SP4002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1					1

SP4007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c					1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c			1			1
マルスダレガイ科	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c					1	1
合　計			0	0	1	0	2	3

SR4001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	2	1				2
シャコガイ科	オオシラナミ（ｼﾗﾅﾐ）	Ⅰ - 2 - a					1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	7	6	1			8
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	1					1
合　計			10	7	1	0	1	12

SR4005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	1				1

SX4007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c				1		1

SX4010

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1					1
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	1	1				1
合　計			2	1	0	0	0	2

Ⅰ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	5	5			1	5
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c	1					1
シャコガイ科	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c					1	1
	オオシラナミ（ｼﾗﾅﾐ）	Ⅰ - 2 - a				1	1	1
	シャコガイ科不明						3	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	1					1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a		3				3
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c	4	4			1	4
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	14	19	2	3	1	22
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	7	5		1	1	7
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	5	3				5
合　計			37	39	2	5	9	51

Ⅱ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ - 2 - c		1				1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	1	4				4
シャコガイ科	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c					1	1
	オオシラナミ（ｼﾗﾅﾐ）	Ⅰ - 2 - a					2	1
	シャコガイ科不明					1		1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c		1				1
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c			1		2	1
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	4	1			4
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	1					1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1				1	1
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	1					1
合計			5	10	2	1	6	17

Ⅲ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
フネガイ科	エガイ	Ⅰ - 1 - a	1					1
タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅱ - 2 - c		1				1
ウミギク科	メンガイの一種		1					1
イタボガキ科	オハグロガキ	Ⅰ - 1 - a			1			1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	52	49	2	1	5	54
	ヒメツキガイ	Ⅰ - 2 - c	1	2				2
キクザル科	シロザル	Ⅰ - 4 - a	1					1
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ - 2 - c	1					1
	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c	3	2	2			5
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ - 2 - a	1		1			2
	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c		1		1		2
	オオシラナミ（ｼﾗﾅﾐ）	Ⅰ - 2 - a	1			1		1
	シャコガイ科不明						2	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	2	3				3
フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅰ - 1 - c	1					1
イソシジミ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ - 1 - c		1				1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a	6	1	2	1	1	8
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c	1	1		1		2
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	85	88	16	9	3	101
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	5	4				5
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	2	2	1			3
	イオウハマグリ	Ⅱ - 1 - c		1				1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	23	6	3	5	6	26
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	6	6		3	3	9
ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ - 3 - a					1	1
合　計			193	168	28	22	21	234

Ⅳ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		2				2
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2	1				2
合　計			2	3	0	0	0	4

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた）

第 135 表　Ⅴ区二枚貝・ウニ網出土状況 a

SA5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c		1				1

SA5002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ - 2 - c		1				1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		1				1
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c			1			1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a		1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	7	6	2	1	1	9
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c		1				1
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ - 2 - c			2			2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1		2			3
合計			8	10	7	1	1	19

SA5005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	クチベニツキガイ	Ⅰ - 2 - c	1					1
	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	1	4				4
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c		2				2
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	2	1			2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c		1		1		2
合計			3	9	1	1	1	12

SA5006

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1					1
合計			1	1	0	0	0	2

SD5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ - 2 - c		1				1

SD5002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	32	31			1	32
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	2	1				2
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c		2				2
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c		1				1
二枚貝不明						1		1
合計			34	35	0	1	1	38

SD5004

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ウミギク科	メンガイの一種				1			1
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ - 1 - c	1					1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	11	8				11
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	3	1				3
合計			15	9	1	0	0	16

SF5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ - 1 - a	2	1				2
イタヤガイ科	イタヤガイ科不明						1	1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	2					2
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ - 2 - c	1					1
	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c	1					1
シャコガイ科	オオシラナミ(ｼﾗﾅﾐ)	Ⅰ - 2 - a	1	1				1
	シャコガイ科不明						1	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	1	1				1
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ - 1 - c		2			1	2
イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ - 1 - c		1				1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a			1			1
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c		1				1
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	909	883	9	11	6	918
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	11	11				11
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ - 2 - c	1	1				1
	ヒメアサリ	Ⅱ - 2 - c	3	2				3
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	90	84	1	1	5	91
	イオウハマグリ	Ⅱ - 1 - c	4	4				4
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	3		1			4
マルスダレガイ科	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	3	5	1	2		7
	マルスダレガイ科不明		2	1				2
二枚貝不明							2	1
合計			1034	998	13	14	16	1057

SK5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c				1		1

SK5002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c		1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c				1	1	1
合計			0	1	0	1	1	2

SK5004

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ウミギク科	メンガイの一種		1					1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	5	5	1	1		6
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c		1				1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1	1				1
合計			7	7	1	1	0	9

SL5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	Ⅰ - 1 - a	1					1
ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ - 1 - a		1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	2				2
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	1					1
二枚貝不明							1	1
合計			3	3	0	0	1	6

SM5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c				1		1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1					1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c			1			1
合計			1	0	1	1	0	3

SM5002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ヒメツキガイ	Ⅰ - 2 - c		1				1
キクザル科	キクザル科不明			1				1
シャコガイ科	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c		2			1	2
	シャコガイ科不明				1		4	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	1	2		2		4
フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅰ - 1 - c		1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	13	13	4	3		17
	イオウハマグリ	Ⅱ - 1 - c	1					1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1	1		1	2	2
二枚貝不明							2	1
合計			16	21	5	6	9	31

SP5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
二枚貝不明							1	1

SP5032

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c			1	2		2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c					1	1
合計			0	0	1	2	1	3

SP5040

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	1				1

SP5041

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c		1	1			1

SP5062

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2	1			1	2

SP5065

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	2		1			3

SP5074

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
二枚貝不明							2	1

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた）

第 136 表　Ⅴ区二枚貝・ウニ網出土状況 b

SP5079

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c			1			1

SP5085

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c			1	1		1

SQ5005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c					1	1

SS5002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
シャコガイ科	オオシラナミ(ｼﾗﾅﾐ)	Ⅰ - 2 - a	1					1
	シャコガイ科不明						3	1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a					1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	5	3	2	3	2	7
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	1		1		2	2
二枚貝印象化石							1	1
二枚貝不明							2	1
合計			7	3	3	3	11	14

SS5004

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		1				1
二枚貝印象化石			2	2				2
合計			2	3	0	0	0	3

SS5005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1

SS5007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	2	2				2
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	4	1		1		4
合計			6	3	0	1	1	7

SX5001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c			1			1
シャコガイ科	シャコガイ科不明						1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	1	1		2	1	3
合計			1	1	1	2	2	5

SX5002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ニッコウガイ科	ニッコウガイ科不明						1	1

SX5004

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
イタボガキ科	カキの一種						1	1
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c				1		1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a			1			1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c				2		2
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c			1			1
二枚貝不明							1	1
合計			0	0	2	3	2	7

SX5005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c			2			2
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	1		1			2
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	16	18	6	3	2	22
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	2	2				2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c				1		1
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	1					1
合計			20	20	9	4	2	30

Ⅰ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
フネガイ科	エガイ	Ⅰ - 1 - a	2					2
	ベニエガイ	Ⅰ - 2 - a				1		1
	ハイガイ	Ⅲ - 1 - c	1					1
イタヤガイ科	イタヤガイ	Ⅵ(Ⅰ - 4 - c)					2	1
ウミギク科	メンガイの一種		1				1	1

Ⅰ層(つづき)

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
イタボガキ科	カキの一種						1	1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	12	12	6	3		18
キクザル科	シロザル	Ⅰ - 4 - a		1				1
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ - 2 - c		1				1
シャコガイ科	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c				1		1
	オオシラナミ(ｼﾗﾅﾐ)	Ⅰ - 2 - a			2	2	3	2
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	2	4		1		5
イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ - 1 - c			2			2
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a				1		1
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c	1					1
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	85	95	49	46	4	141
	オイノカガミ	Ⅱ - 2 - c		1				1
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c		5	1			5
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	5	4	12	8	9	17
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	3	1	1	2		4
二枚貝印象化石			2	2				2
二枚貝不明							12	1
合計			114	126	73	65	32	210

Ⅱ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
フネガイ科	エガイ	Ⅰ - 1 - a	1					1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c		3	1			3
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c				1		1
シャコガイ科	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c					1	1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	1	1		1		2
イソシジミ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ - 1 - c	1					1
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a		1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	83	87	10	13	7	100
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	1	3				3
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ - 2 - c	1	1				1
	ヒメアサリ	Ⅱ - 2 - c	1					1
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	1			2	1	2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	5	1		1	4	5
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	1	2				2
二枚貝不明							3	1
ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ - 3 - a					1	1
合計			96	99	11	18	17	126

Ⅲ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ - 1 - a			1			1
イタヤガイ科	キンチャクガイ	Ⅵ -12					1	1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	6	2	3	2		9
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ - 2 - c	1	1				1
	カワラガイ	Ⅱ - 2 - c	1	1				1
シャコガイ科	ヒレシャコ	Ⅰ - 2 - c		1		1		2
	オオシラナミ(ｼﾗﾅﾐ)	Ⅰ - 2 - a	1			1		1
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ - 1 - c	2	1		1		2
ニッコウガイ科	ヌノメイチョウシラトリ	Ⅲ - 1 - c		1				1
イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ - 1 - c	1	2				2
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ - 1 - a		2		1	2	3
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ - 1 - c	1	1		1	3	2
	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	133	122	15	19	4	148
	ホソスジイナミ	Ⅱ - 1 - c	5	5				5
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ - 2 - c		1				1
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	3	1				3
	イオウハマグリ	Ⅱ - 1 - c	1					1
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	8	8	8	3	3	16
	ダテオキシジミ	Ⅲ - 1 - c	1	1	1	1		2
二枚貝印象化石					1	1		1
二枚貝不明							9	1
合計			164	150	29	31	22	204

Ⅳ層

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個対数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ - 2 - c	2	1		1		2
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ - 2 - a		1				1
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ - 1 - c	6	6	2	2	2	8
イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ - 1 - c				2		2
	リュウキュウマスオ	Ⅱ - 1 - c					1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ - 1 - c	16	13	21	18	3	37
	スダレハマグリ	Ⅱ - 2 - c	1	1		1		2
	ハマグリの一種	Ⅱ - 2 - c	3	1	1		3	4
二枚貝不明							3	1
合計			28	23	24	24	12	58

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた)

第５章　総括

概要

今回の発掘調査では、中城御殿跡、櫨園跡、両遺跡の間にある道跡を確認した。近世期の中城御殿の遺構を中心として、グスク時代の遺構や近・現代の遺構が残存する複合遺跡だということが判明した。

確認した主な遺構は、中城御殿北側石牆(SA3001、SA5004)、中城御殿東側石牆(SA5003)、中城御殿屋敷内石積(SA4001、SA5005)、廃棄土坑(SM 群)、道跡及び付随する排水溝跡(SF5001、SD5001・SD5002)、櫨園跡に関連する廃棄土坑(SM5002)、中城御殿創建当初と考えられる石積(SA4002)、中城御殿創建以前の遺構(柱穴跡)である。

これらの遺構は、大量の造成土により削平、もしくは造成後に構築された状況が確認できた。

造成土は遺跡内もしくは周辺地からの持ち込みと考えられ、古い時期の遺物で占められる場合もあり、造成土単体では年代設定を行うには検討を要するものが多い。しかしながら、造成層の前後にある遺構内埋土からの出土遺物の状況をみると、時期設定が可能な遺構がいくつか確認された。このような出土状況から、造成の順序や遺構の廃棄過程を想定することができた。

今回の発掘調査成果は過年度調査成果と同様、遺構の検出状況と造成土の堆積状況により判明した。

時期決定基準となる遺構　出土状況が良好な遺構があり、年代観を決定するための基準遺構とした。

SM3001　Ⅲ区で確認した SM3001 は廃棄土坑と考えられ、中国産陶磁器、初期沖縄産無釉陶器、明朝系瓦が主に出土している。種類毎にみると中国産青花では、碗が明Ⅱ－２類、Ⅱ－３類、皿は明Ⅲ類が出土している。これらの陶磁器の出土組成としては、15 世紀後半～16 世紀後半の様相を示す(瀬戸 2010)。沖縄産の無釉陶器では、初期沖縄産無釉陶器とされる一群が確認されている。これらは、17 世紀前半～中葉の年代観を示す(新垣 2013)。明朝系瓦では、軒丸瓦で灰色のＩ－Ｉ－Ａ、褐色のＩ－Ｉ－ＢとⅢ－Ｉ、軒平瓦では灰色のＩ－Ｉ－Ａタイプが確認された。これらは、灰色瓦生産開始時期と想定される 16 世紀後半から灰色瓦と赤色瓦の交替期に当たる 17 世紀後半～18 世紀前半に該当すると考えられる(沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 233 頁－241 頁)。明朝系瓦は、首里城跡御内原北地区で第７期とされる出土瓦と同様のものが出土しており、第７期は 17 世紀前半頃に位置付けられている(沖縄県立埋蔵文化財センター 2013)。これら３種の遺物組成をみると、陶磁器類では 16 世紀後半～17 世紀中葉頃のものが出土し、明朝系瓦は主に 17 世紀前半～ 18 世紀前半までのものが出土している。SM3001 の廃棄年代はこれらを考慮し、17 世紀末頃と捉えた。

SM3002　中国産青磁Ｖ・Ⅵ類、中国産白磁Ｅ群、Ｄ’群が出土しており、15 世紀後半～16 世紀前半頃の様相を示している。中国産青花ではＩ群が出土しており、16 世紀末～17 世紀初頭のものが出土している。これらの資料に、SM3001 と同様の初期沖縄産無釉陶器や明朝系瓦が出土している状況なので、廃棄年代は SM3001 と同一時期として考えられる。

SM3001・SA3002 と造成土　両遺構は、Ⅲ４層とした造成土に遺構の一部が削平された後、覆われている状況で検出した。そのため、Ⅲ４層を造成した際に機能終了したことが考えられる。Ⅲ４層はⅢ区の調査で確認した造成土で、Ⅳ区(Ⅲ 10a4・Ⅲ 11b・Ⅲ 12・Ⅲ 12b)、Ⅴ区(Ⅲ 29・Ⅲ 33・Ⅲ 34)の調査時にも、それぞれⅢ４層と同一層と考えられる層を確認した。これらの層は中城御殿の敷地範囲内に広がり、下層にあたる遺構を削平、もしくは覆うような形で堆積している。このことから、中城御殿敷地内を大規模に造成した際の造成土と考えられ、敷地内で平場形成を行っていたことが考えられる。

Ｉ区(平成 25・26 年度調査)　Ⅲ～Ⅴ区で確認された上記造成土と同一層と考えられるのが、造成４とした層で、調査区全体に広がっていた造成土である。造成４の上面では SJ３(18 世紀後半)が確認されていることから、中城御殿の大規模造成は、17 世紀末～18 世紀後半までの間に行われたことが想定される。造成４に対応する層を今回の調査でも確認できたため、過年度調査で確認した遺構との相対関係が明らかになった(第４表･第５表)。

過年度調査成果との照合　今回の発掘調査で、17 世紀末頃に廃棄された遺構(SM3001・SA3002)と造成の痕跡を確認することが出来た。過年度の調査では年代観が把握できる遺構として、SK51（16 世紀中葉～後半)、SJ３(18 世紀後半)が確認されている。これらの遺構は、造成土と相関関係にあり、16 世紀中葉から 18 世紀後半までの３時期の遺構及び造成土が確認されたことになる。

過年度の調査では、下記の時期区分を行ったが、この時期区分は、今回調査の成果を合わせても妥当性があると考えられる。

近世１(18 世紀末～中城御殿移転まで)
近世２(18 世紀代)
近世３(中城御殿創建～17 世紀代)
グスク１・２(15 ～ 16 世紀代)

今回の調査では主に近世２段階の時期を示す遺構及び造成土を確認した。以下、確認した遺構の各時期の様相を示す。

グスク時代

概要　グスク時代の遺構は主に柱穴跡や石積が確認された。遺構内埋土や包含層の出土遺物から、15 ～ 16 世紀頃の遺構と考えられる（第 208 図）。

柱穴跡　グスク時代と考えられる層を確認した部分は、下層確認地点など一部分に限られる状況だったため、明確な建物跡を確認することは出来なかった。柱穴跡が確認できた部分では、遺構密度が高い状況で分布しており、頻繁な建物建て替えが想定される。

SA5006　Ｖ区で確認した南北軸に延びる石積遺構で、この石積を挟んで東側と西側で、当時の機能面に高低差があることが判明した。断片的に残存している遺構だったが、当時の土地利用を考える上で重要な遺構である。

SF5001 を挟んだ東側と西側　18 世紀代に築造された SF5001 は、築造段階でグスク時代の包含層を削平している状況が確認できた。18 世紀代以前には、一連の空間だったものが、SF5001 築造段階に分断され、土地の利用状況が変化したと考えられる。

出土遺物　グスク期にあたる遺物は、Ⅳ層から中国産青磁等の陶磁器類が得られている。また、敷地内造成の際にこれらの層が掘り起こされ、造成土中に混入している状況も確認できた。近世期にあたる遺物と遺構内で共伴している事例も多いことから、遺物そのものの使用期間は長期間にわたることが考えられる。

自然遺物も確認され、魚類ではハタ科やフエフキダイ科が得られている。哺乳類では、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ類の家畜関連資料が見られ、食用等に用いられたことが考えられる。貝類では、Ⅳ層からアラスジケマンが多く見られた。

小結　今回の調査では、グスク時代に関する遺構について確認した部分が限られている。これらの遺構は、近世期の遺構の下層に存在し、現地保存できた遺構の下部にあたる部分が多かったためと考えられる。確認した部分での遺構密度の高さを考えれば、未確認部分にもグスク時代の遺構や包含層が広く残存しているものと考えられる。

Ｉ区の調査とあわせると、16 世紀段階では当該地が生活域として利用されていたことが判明している。また、出土遺物が多く得られた廃棄土坑（SK51）があり、中国産青磁や青花等の陶磁器類に加え、県内で出土事例の少ないガラス製品が出土している。これらの廃棄物には、首里城の各地区で出土する陶磁器と類似する種類や組成のものが出土している。そのため、廃棄土坑中から出土した遺物は、王府関連施設からの廃棄物の可能性があり、隣接していたとされる大美御殿からの廃棄物と想定される。もう一つの可能性として、遺構内出土遺物の様相が、

第 208 図　グスク時代の遺構

首里城各地区の出土状況と類似していることから、中城御殿の前身となる屋敷が当該地にあり、そこからの廃棄物だった可能性もある。『李朝実録』世祖８(1462)年の記事によると、「王子は国王と同処せず、別に他所に在り。」(池谷ほか 2005)とあることから、15 世紀中頃にはすでに王子が生活する屋敷が別の場所にあったことが伺える。これらについては、直接的な遺構等を確認することができなかったので今後の課題である。

近世

概要　近世の遺構及び造成土は調査区全体で最も多く確認された。これらの遺構は、中城御殿跡、櫨園跡、両遺跡の間にある道跡の遺構である。ここでは、過年度の調査成果(Ⅰ区)も合わせて報告する。

中城御殿跡　今回の発掘調査では、北側石牆(SA3001・SA5004)と石牆内に設置された門跡、東側石牆(SA5003)、屋敷内の石積(SA２・SA4001・SA5005)、廃棄土坑群(SM3001 ～ SM3009)などが確認された。

中城御殿の敷地内造成を目的としていた造成層(Ⅲ区：Ⅲ４層、Ⅳ区：Ⅲ 10a4・Ⅲ 11b・Ⅲ 12b・Ⅲ 12、Ⅴ区：Ⅲ 29・Ⅲ 33・Ⅲ 34)も確認している。この造成層はⅠ区の造成４に相当する。造成時期は、Ⅲ区で確認した SM3001 の年代観から、17 世紀末以降と考えられる。この造成層を境にして下層の遺構を近世前期、上層の遺構を近世後期と捉えた。下層遺構は 16 世紀～17 世紀末頃、上層遺構は 17 世紀末～ 18 世紀前半頃のものと考えられる。Ⅰ区の成果と合わせると、下層の遺構は「近世３」、上層の遺構は「近世１･近世２」に相当する。これらの遺構を第 209 図、第 210 図で示す。

近世前期の遺構

SA4002　SA4001 築造するため中城御殿内を大規模造成した際に、上部が削平され埋められた石積遺構である。この石積はⅠ区で確認された SA３の延長部分にあたる。前述したように 17 世紀末～18 世紀後半までに行われた造成により埋められているため、少なくとも 18 世紀より古い遺構であることから、中城御殿が創建された当初期の遺構である可能性が高い。石積構築にあたり、岩盤整形を行っていることも判明した。この遺構は、当時の石積構築方法を示すとともに、中城御殿が改築された痕跡を示している。

廃棄土坑(SM 群)　Ⅲ区で確認された廃棄土坑(SM3001 ～ SM3003)は、中城御殿内での廃棄物がまとめられた場所と考えられる。特にこの３基の遺構は隣接した遺構だったが、遺構内埋土の堆積状況と、出土遺物に差がある状況だった。SM3001 は、炭や廃棄物が多く、何度か掻き出した痕跡もあったことから、有機質のものや生活雑器などが廃棄され、遺構内が充填されると、掻き出されて繰り返し利用されたものと考えられる。SM3002 は埋土が水平堆積しており、使用終了後に短期間で埋められた状況だったため、機能時には遺構内があいた状態だったことが考えられる。機能時の状況と床面に敷石等がない状況から、生活用水等を排水するための遺構だと考えられる。SM3003 は、SM3001 や SM3002 に比べ小規模の廃棄土坑だった。遺構内からは、貝や動物骨などの自然遺物が多く見られた。これらの状況から食料残滓等を廃棄する土坑であった可能性が高い。

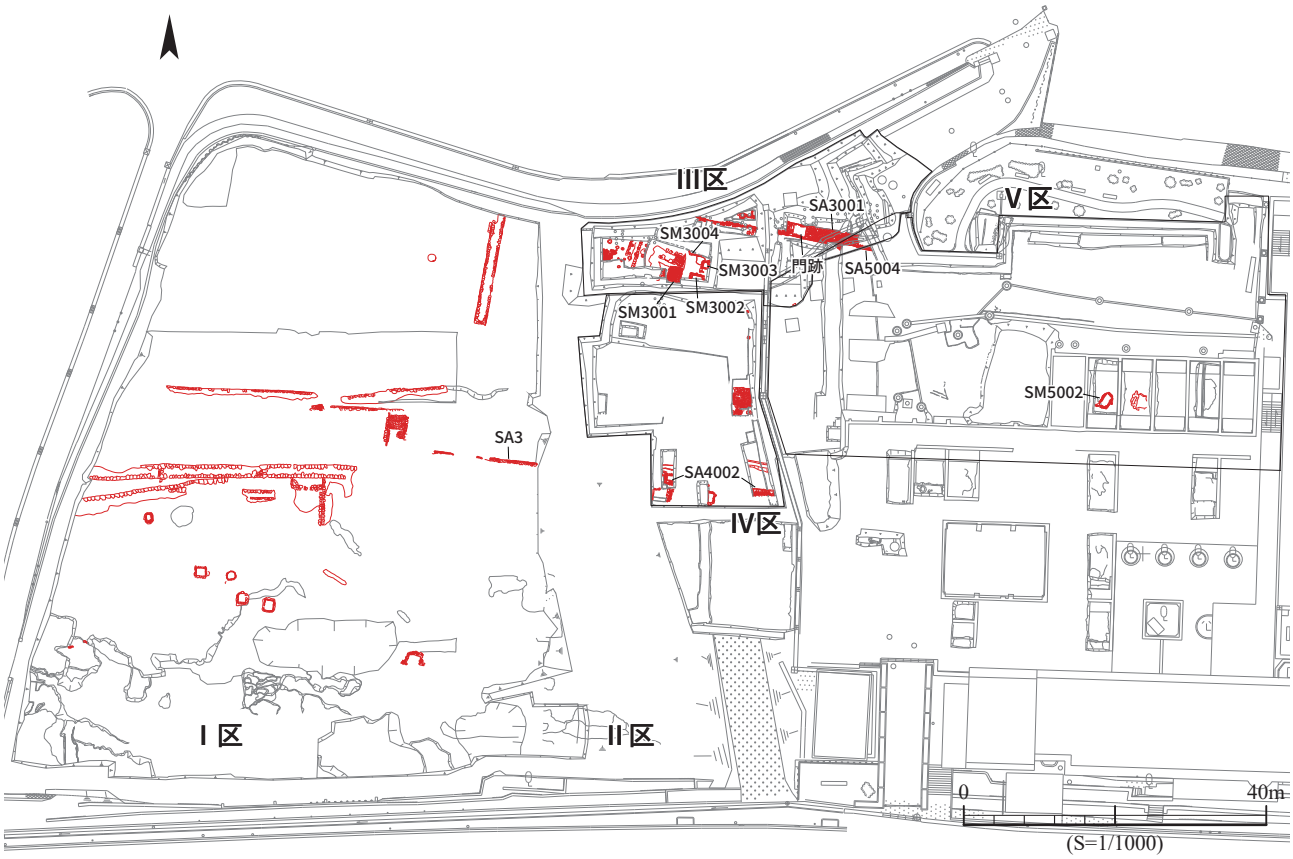
以上のように、SM3001 ～ SM3003 は、それぞれで機能が異なることが想定でき、廃棄物の種類によって使い分け、分別を行っていた可能性が高い。SM3004 も SM3001 ～ SM3003 と同時期に利用された遺構だと考えられるが、現地保存可能な遺構だったので、掘削等は行わなかった。

SM3007 ～ SM3009 は、SM3001 ～ SM3003 が設置されていた造成土より、新しい造成土に設置されているため時期差がある。後世の削平を大きく受けているものや、出土遺物が少ない状況だが、利用方法としては SM3001 等と同様に廃棄土坑だと考えられる。

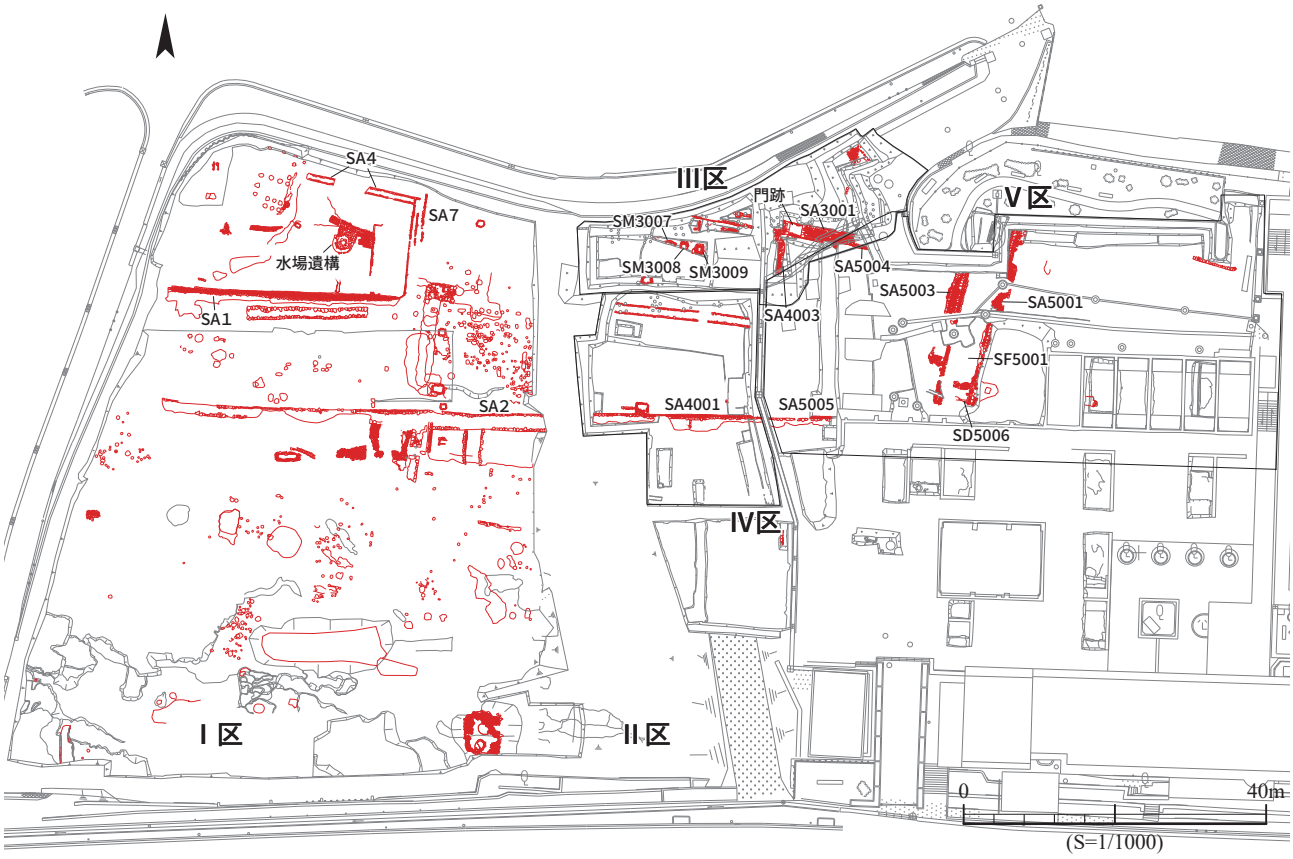
これらの廃棄土坑群が確認された部分は、中城御殿の北側部分にあたる。中城御殿の改築により、一旦廃棄土坑(SM3001 ～ SM3004)は埋められたが、同じ場所に再び廃棄土坑(SM3007～SM3009)が設置され利用されていることから、改築前後で同じ土地利用のされ方をしている。生活に伴う廃棄物等が集約されることから、北側部分は中城御殿内における裏の空間にあたる部分だったということが考えられる。

中城御殿の北側石牆(SA3001・SA5004)　石積内で段差がある部分があり、当初石積と増築石積の２時期で構築されていた。構築にあたり、増築石積部分の機能面は、Ⅲ 27・Ⅲ 31 層と判断できた。この層はⅢ 29 層より上層にあたることから、敷地内造成にあわせて石積増築が行われたことが考えられる。

SA3001 は、近世前期から後期にかけて機能していた石積と考えられ、門にあたる部分も確認された。門の部分は小礫で埋められている状況だった。また南東端の最下部にはシャコガイ(１枚)が伏せられた状態で配置されていた。この門は、SA3001 の石積増築時に下部が埋められた可能性が高い。門跡部分の上部は沖縄戦の爆弾により破壊され、残存していない状況だったため、石積増築後の状況について把握することは困難だが、近世後期の段階にも継続して門として利用されていた可能性が高い。門としての機能が継続し、人の往来が行われるため、埋めた部分にシャコガイを配置したことが考えられる。シャコガイは二枚(１個体)セットとしてムンヌキムン(魔除けの意)とされている(上江洲 1973)。今回の状



第 209 図　近世前期の遺構



第 210 図　近世後期の遺構

況をみると、二枚（１個体）でなくても魔除け等の意味をもたせていたことが考えられる。この門跡部分は現地保存の対象となったので、シャコガイ部分も含め掘削を行わなかった。今後掘削する際には、門を埋める小礫からの遺物出土状況を観察し、埋められた年代を把握するとともに、配置されたシャコガイの内側に何らかの埋納物がないか確認する必要がある。

爆弾の被害を免れた部分の石積が一定の高さで残存していたことから、敷地造成によって地中にあった部分は、爆弾の被害を受けず残存していたことが想定される。このような状況から中城御殿北側石牆は、中城御殿が移転した後も、敷地内の石牆として機能が継続し、沖縄戦時に露出していたものが被害を受けたと考えられる。石積を破壊した爆弾の種類を特定することは困難だが、Ⅰ区部分から多くの不発弾が発見されており、不発弾には米国製 75 ㎜榴弾砲、米国製 5 インチ砲弾、米国製 250 kg 爆弾等があった。陸上戦闘による榴弾、海上からの艦砲射撃、戦闘機からの空爆のいずれかにより破壊されたことが考えられる。

これまでの調査で、中城御殿内で石積遺構が確認されているが、石積に暗渠が併設されているものは、この北側石牆のみである。確認できた部分でも３か所（SD3003・SD3004・SD3005）あることから、屋敷内部から外部へ雨水等を排水する役割をもっていたことが考えられる。

中城御殿の東側石牆（SA5003）　道跡の東側部分で確認した石積で、北側部分では２m以上の高さがあり、南側にいくにつれ石積の高さが低くなっている。この石積の高さに合わせるようにして、根石付近には当時の機能面と考えられるコーラルが敷かれた面が確認できた。

この石牆の東側には、SF5001 とした道跡が隣接しており、排水溝も設置されていた。

南側部分では、道跡に伴う造成土層の上部に石積やコーラルが敷かれた面が確認できたことから、道を築造後、同時期頃に構築されたと考えられる。

中城御殿内の石積（SA4001・SA5005）　石積遺構は、それぞれⅢ 11b 層、Ⅲ 12 層、Ⅲ 29 層に根石が設置されている状況から、敷地内造成後に構築された石積ということが考えられる。

SA4001･SA5005 は、Ⅰ区で確認した SA２の延長部分にあたり、中城御殿敷地内で東西軸に延びる石積である。

石積面石部分には、琉球石灰岩とサンゴ石灰岩の２種類の石材が用いられている。２種類の石材を用いて石積を構築する事例はあまり見られないため、今後類例調査が必要である。２種類の石材を用いた理由については、色調や材質の差による意匠表現、または材料調達時の石材供給によって２種類の石材を用いたことが考えられる。

石積背面に大規模な造成（Ⅲ 10 層等）が行われていることから、この石積を土留擁壁とし、その背面に平場を形成することを目的とした遺構であると考えられる。

設置された根石の標高は、西から東にいくにつれ高くなっていく状況があった。これは斜面地形に沿って根石を設置していったことによるものと考えられる。東側端部分は校舎基礎により残存していない状況だったが、西から東にかけて地形に合わせて石積を設置し、石積上端を揃える構築方法だったことが考えられる。

この石積を境にして南北で高低差のある屋敷配置だったことが造成土の状況から判明した。南側については、Ⅰ区調査時にも攪乱が多く詳細が不明な状況だった。北側は SA4001 の根石を一段覆う高さで堆積していた層（Ⅱ７層）があり、この層の上面が当時の機能面だった可能性があり、屋敷全体が平坦な屋敷構造ではなく段差をもつ屋敷配置だったことが判明した。

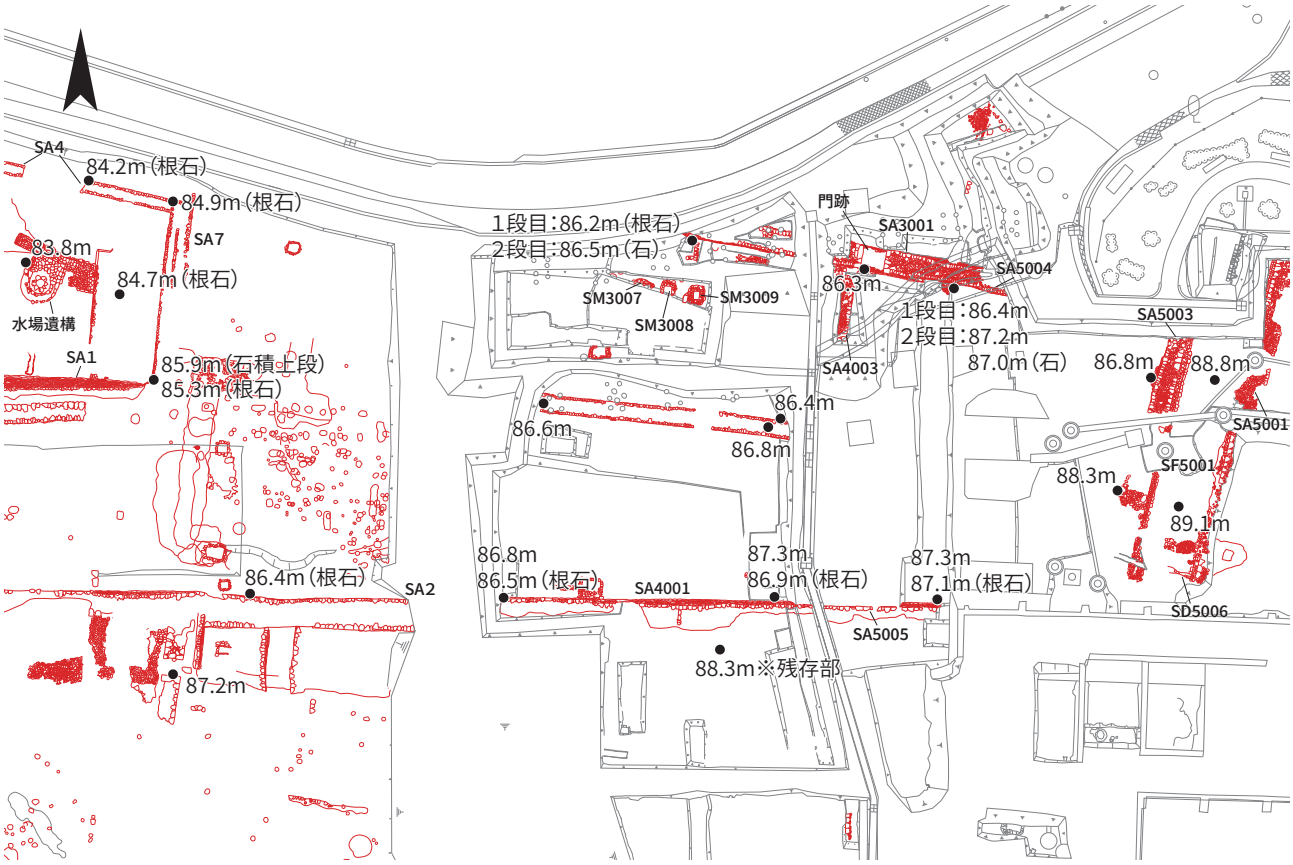
第 211 図は、中城御殿の北側部分の調査で判明した遺構面の標高を示した図である。屋敷跡を示す遺構等は確認出来なかったが、基礎構造としての造成土や構築面は現地に残存しているので、残存部の標高をもとに示している。当時の地表面は示した標高よりわずかに高いことが考えられる。平場形成の造成土をもとに検討しているが、将来この部分を調査することがあれば、現地保存した範囲内に屋敷関蓮の遺構がないか注意しながら実施する必要がある。

第 212 図は標高をもとに屋敷内の段差構造を示した模式図である。SA4001 の南北で段差構造があるだけでなく、北側部分にもいくつか段差があり、それぞれ平場が確認できる。Ⅰ区部分の水場遺構部分は標高が最も低く、この部分に降りるためのスロープ状に傾斜した石積遺構（SA４・SA７）が確認されていることからも、屋敷内に高低差があり、スロープ等を利用しながら敷地内を移動していたことを示している。

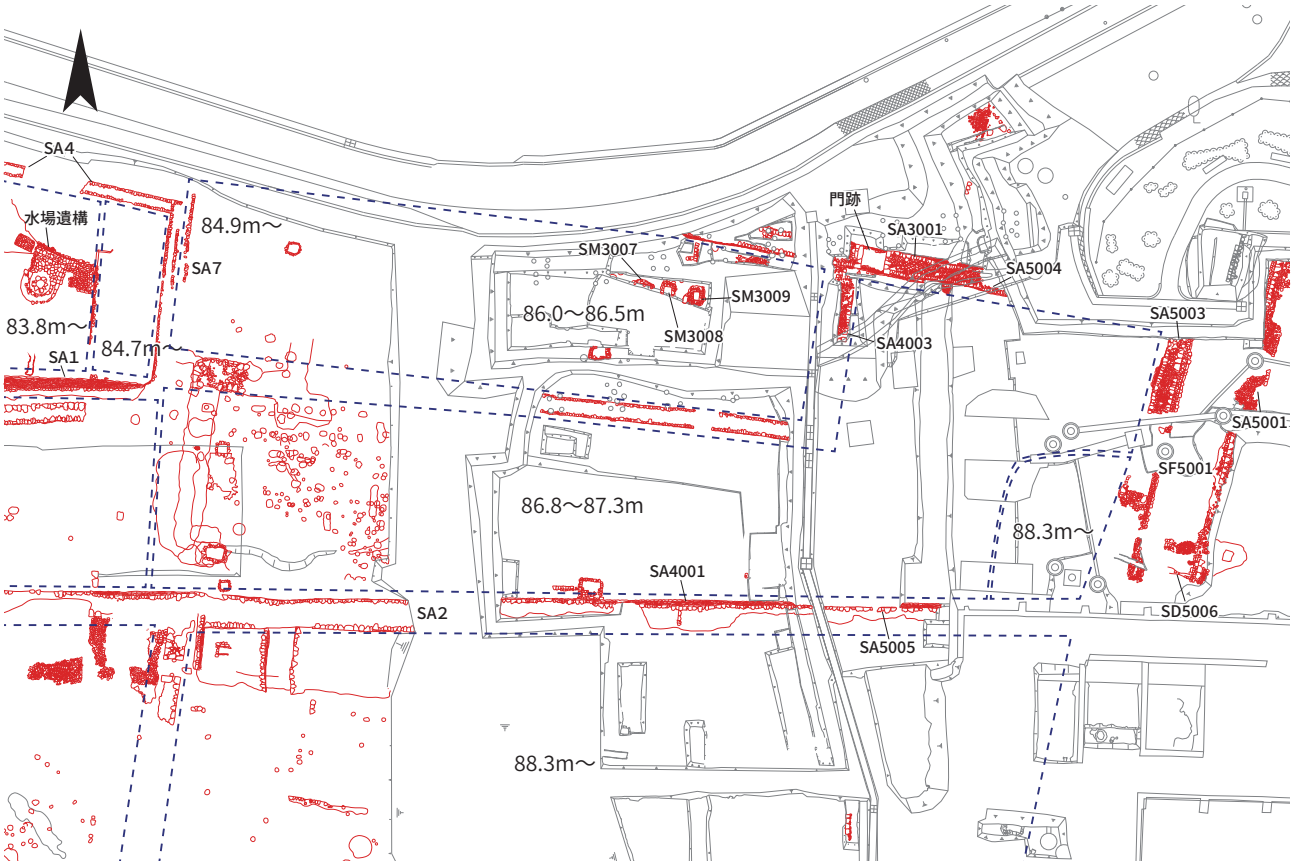
首里古地図に描かれる中城御殿内の石積　18 世紀代に描かれたとされる「首里古地図」には、屋敷内で東西に延びる石積が描かれている。Ⅰ区調査時に、SA１がこの石積にあたる可能性があるとしたが、石積が途中で途切れ、判断が困難なことから今後の検討課題としていた。

今回の調査成果を合わせると、SA１より南側にある石積（SA２・SA4001・SA5005）が中城御殿全体の東西軸に広がっていることが判明した。中城御殿の敷地内を大規模に造成した後に築造された石積で、構築年代は 17 世紀末以降と考えられる。この石積を境にして南北に高低差が存在し、加えて北側にはより細かい段差構造があったことが判明した。

以上のことから、「首里古地図」に描かれる東西の石



第 211 図　近世後期の遺構面標高



第 212 図　近世後期の屋敷内段差構造

積は、当初想定していた石積(SA１)よりも南側にあったと捉えることができる。

首里古地図と調査成果　中城御殿の北側と東側の石牆、道跡を確認したことにより、中城御殿の敷地範囲が明確になるとともに、「首里古地図」と現地で確認した遺構について検討することが可能になった。

発掘調査では、建物跡を示す直接的な遺構を確認することが出来なかった。これは、建物構造として柱穴等の地面を掘り込む柱構造ではなく、礎石建ての建物だったことに由来し、これら地表面に露出している部分は、後世に撤去されたことが考えられる。建物跡を確認することは出来なかったが、建物建築時の基礎構造を示す造成土や造成土の土留めや段差構造をつくる石積遺構を確認することが出来た。

南北の高低差　「首里古地図」に描かれる東西の石積を境にして屋敷内では高低差があり、南側部分が高い部分にあたり、主要建物を配置するための造成工事が行われてたことが考えられる。

北側の屋敷配置　北側部分は、南側より低い位置にあり、細かい段差構造を有している。「首里古地図」に描かれる４棟の建物をみると、最も東側の建物は東西方向を軸にしている。これはSA4003の東西軸と関連しており、隣にある南北軸の建物は、Ⅰ区のSA７の南北軸と関連している可能性が高い。残りの西側にある２棟の東西軸に伴う石積は、SA１の軸と関連している可能性がある。

北側石牆(SA3001)　増築の痕跡があり、当初築造時は、地盤整形を行ったのちに根石が設置され構築されていた。17世紀末以降の敷地内造成に伴い積み増しが行われたSA3001の南側の中城御殿にあたる部分には、石敷遺構(SS5010)が伴う。

北側の門　SA3001内の門跡は、「首里古地図」の北側石牆に描かれる門の部分にあたる。この門跡は、17世紀末ごろに一部が埋められるが、門としての機能は継続していた可能性が高い。

東側石牆(SA5003)　道跡(SF5001)と隣接し、中城御殿と道の境界線となっている。北側は石積の高さが高く、南側にいくにつれ地形に沿って低くなる状況が確認できた。道跡の造成土の上部に位置しており、道跡の造成後に設置されている。この石積自体に増築の痕跡は確認出来なかった。道跡の造成に伴い、既存の石積を撤去して新たに設置した可能性もあるが、下層部分は今回の調査では現地保存の対象だったため、確認していない。

道跡(SF5001)　道の歩道面は石灰岩を細かく砕いたものが充填されており、石畳ではなかった。両脇には排水溝を設け、一部には歩道内部に暗渠(SD5006)があった可能性もある。

南側から北側へ向けて緩やかに傾斜しており、傾斜が急ではないことから、歩道面を石畳にしなかったと考えられる。これは沖縄県歴史の道調査の結果とも一致している(當眞 1985)。

現地で確認した遺構と「首里古地図」を照らし合わせた際に、絵図という２次元的情報に、屋敷内の高低差や段差構造などの３次元的情報を加えることにより、中城御殿内の様相を詳細に把握することができた。屋敷内の縮尺や石積のわずかな向きといった差はあるものの、調査で得られた考古学的情報からみても、「首里古地図」に描かれる情報の精度が高いことが改めて伺える。

櫨園跡　櫨園跡は、蝋燭や漆器の原料となる漆を採取する場所とされ、19世紀には醸造所を設置したとされる(球陽 1617号　球陽研究会編 1974)。

当該部分は後世の攪乱が多く、遺構や包含層はほとんど残存していない状況だった。旧校舎の地中梁の間にわずかに遺構や包含層が残存している部分があり、そこから石組土坑(SM5002)を検出した。この遺構からは多量の貝殻片が見られた。これらの破片はヤコウガイ殻破片を含む貝片で、首里城跡銭蔵東地区や東村跡と同様、螺鈿関連の遺物が混入している可能性があったため、詳細な分析を行った(第４章第３節第２項参照)。その結果、螺鈿に用いるための貝殻加工の痕跡に加え、それ以外の製品を製作するための加工痕跡も見られたことから、螺鈿や貝製品製作に関連するものが廃棄された土坑ということが判明した。

類例遺跡として、本遺跡周辺の御細工所跡がある。発掘調査によって貝摺に使用されたヤコウガイや金工関係の遺物が確認され、貝製品や金属製品などを加工する総合製作所だったとされている(那覇市教育委員会 1991)。櫨園跡においても、貝製品を製作するような工房施設が設置されていたと考えられる。

今回の調査により、櫨園跡で行われていた作業について確認することができたのは、重要な調査成果といえる。

近代

近代の遺構として、戦前の首里高校に関連する遺構が確認された。SA3006、SD3001、SD4001、SX4001、SX5005、SX5006があたる。排水溝や、校舎の痕跡がみられている。SX5005は、排水溝もしくは道跡と考えられるが、近世のSF5001と軸が同じで一部掘削を行い利用している部分もあった。

出土遺物　首里高校に関連すると思われるガラス製品や校章のあるボタン等が出土している。Ⅰ区の調査で出土したインク瓶なども出土しており、学校内で利用されていたことが伺える。

遺構の現地保存

経緯　首里高校の校舎改築は遺構保存が可能な部分があり、校舎改築に関連する工事等の際に、県教育庁文化財課及び埋蔵文化財センターの立会調査や遺構保護に関する調整等を関係機関と実施してきた。詳細は第１章第４節及び第５節で述べたとおりである。

関係機関との情報共有　改築工事の際、地中の遺構等に影響が発生する可能性がある場合、立会調査を実施した。この立会調査を行うにあたり、県教育庁文化財課と埋蔵文化財センターは、改築工事定例会（毎週開催）に出席し、工事の進捗や遺構に影響が発生する工事箇所の計画等を工事関係者と情報共有することができた。今後も関係機関と調整を行い、このような形で工事と埋蔵文化財についてお互いに情報共有を行うことで、埋蔵文化財の保護につながるのと同時に、工事計画への影響も少なくなることが考えられる。

立会調査　立会調査は既設電柱の撤去や新設、基礎梁の撤去、根切工事、汚水桝新設等、多くの工事に伴い実施した。

遺構保護　遺構保護の材料には、工事掘削の際に確認しやすいことに加え、地中で十分に充填できることから保護砂を用いて実施した。現地保存可能な遺構上部には保護砂が覆われている状態になっている。

SF5001　新校舎の基礎梁等の部分について記録保存調査を実施した。その結果、道の構築状況や遺構の前後関係について把握することができた。一部の遺構は現地保存が可能な部分があり、基礎梁の形状変更等の対応を行っていただき、現地保存に向けた対応ができた。

SA5002　基礎梁がかかる部分があったため、石積を断ち割り、内部構造を確認した。また、校舎基礎に近い部分で現地保存する部分は、防湿シートで覆いながら遺構保護を行った。防湿シートは、他部分でも使用している。

総括

今回の発掘調査で、中城御殿の屋敷構造について把握することができた。屋敷内には元々の地形に由来した段差構造があり、屋敷内を平坦にするまで造成していないことが判明した。また、「首里古地図」に描かれている石積や屋敷の向きは、これらの段差構造による建物配置を表現していることが考えられる。

中城御殿は明治８（1875）年の移転に際して、久米村の地理師を中国福州まで派遣して風水を学ばせた後、移転場所を選定したとされている（球陽 2206 号　球陽研究会編 1974）。移転の背景には、風水をもとにした場所選定があったとされるが、段差構造をもつ敷地範囲という立地条件もあり、御殿内部での移動や土地の利便性の面も考慮して、移転したことも考えられる。移転後の中城御殿に関連する遺構や遺構面の標高は 97m ～ 98m の間で確認されており、北西部にある庭園や上之御殿以外の部分は平屋構造の屋敷だったことが判明している（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a、2011、2012b、2018）。敷地内の構造が段差構造から平屋構造に変わっていることが伺える。

中城御殿の敷地内で東西に伸びる石積 SA２、SA4001、SA5005 は、17 世紀末以降に築造されており、「首里古地図」に描かれる屋敷内部の石積にあたる可能性が高い。

櫨園跡では、螺鈿や貝製品加工のための工房施設等に伴う廃棄土坑を確認することが出来た。

道跡は地表面に露出していないことから、いままで確認されていなかったが、今回の発掘調査により道の場所が判明し、歩道面の状況等も確認することができた。この道跡を造る際の基礎工事についても把握することができた。これらの設置工事は 17 世紀末以降に行われたと考えられ、道の造成や中城御殿内で大きく敷地造成が行われ、当該地周辺を含めて広く造成したことが考えられる。

このような調査成果から、中城御殿の変遷過程のみならず、首里地域の形成過程についても検討することができる重要な成果が確認できた。これらに関連する遺構の一部は、新校舎の地中に現地保存することが出来た。今後、中城御殿の取り扱いが決定した際には、重要な遺構として保護するのと同時に、掘削を行っていない部分の確認調査等を実施していくこととしたい。

第 137 表　III区出土遺物点数表 a

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SA3001	中青磁	1	中白磁	4	中青花	18	中色絵	2	中三彩	-	中褐釉	9	（イノシシ / ブタ、種不明） < フエフキダイ科、種不明 > ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、チョウセンサザエ、オハグロガイ、アンボンクロザメ、イモガイ科不明、ヒレシャコ
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	6	本陶	8	近陶磁	56	沖施	204	
	初沖無	3	沖無	90	陶土	39	土器	4	円盤	4	金属製品	5	
	骨・貝製	1	ガラス	42	石製品	4	瓦	7	青銅	4	その他	11	
SA3002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	1	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	-	
SA3003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1	
SA3005	中青磁	1	中白磁	-	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	チョウセンサザエ、クワノミカニモリ、マガキガイ、イトマキボラ、ウラキツキガイ、アラスジケマン、イオウハマグリ、ハマグリの一種
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	2	沖無	-	陶土	1	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	1	ガラス	-	石製品	-	瓦	15	青銅	-	その他	5	
SA3006	中青磁	1	中白磁	1	中青花	4	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（ニワトリ、ウシ / ウマ、種不明） < ハタ科、フエフキダイ科 > チョウセンサザエの蓋、マガキガイ、エガイ、ウラキツキガイ、シャコガイ科不明、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	4	近陶磁	-	沖施	10	
	初沖無	-	沖無	8	陶土	3	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	4	青銅	-	その他	6	
SA3007	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	-	アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	1	
SA3008	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（種不明） チョウセンサザエの蓋、マガキガイ、ウラキツキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	4	青銅	-	その他	-	
SA3009	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	1	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	-	
SD3001	中青磁	2	中白磁	-	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（種不明） ヤコウガイ
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	4	本陶	1	近陶磁	9	沖施	5	
	初沖無	1	沖無	3	陶土	2	土器	1	円盤	-	金属製品	2	
	骨・貝製	-	ガラス	4	石製品	-	瓦	1	青銅	1	その他	2	
SD3003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	-	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産白磁・ベトナム産青花・
タイ産鉄絵　本磁：本土産磁器・本土産青磁・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器　円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・
金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系 (丸・平・近代大和タイプ)・大和瓦　青銅：青銅製品(銭貨含む)
その他：坩堝・石材・滑石石鍋・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・碍子・マンガン・塼瓦・塼・煉瓦・乾電池・炭　（獣骨）・< 魚骨 >・貝類については出土種を掲載。

第 138 表　III区出土遺物点数表 b

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SK3001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ウシ、種不明） カンギク、マガキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	4	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-	
SK3002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（イノシシ / ブタ） チョウセンサザエ、ウラキツキガイ
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	9	青銅	-	その他	-	
SM3001	中青磁	5	中白磁	1	中青花	10	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	5	（ニワトリ、ネズミ、ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、種不明） ＜フエフキダイ科、ブダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、マガキガイ、タカラガイ科不明、 イソハマグリ、アラスジケマン、ユウカゲハマグリ
	タイ褐	2	他陶磁	1	本磁	-	本陶	2	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	11	沖無	3	陶土	-	土器	4	円盤	-	金属製品	2	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	304	青銅	-	その他	11	
SM3002	中青磁	4	中白磁	3	中青花	6	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（ニワトリ、イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） ＜種不明＞ ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、巻貝不明、シレナシジミ、 アラスジケマン、二枚貝不明
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	2	沖無	1	陶土	1	土器	1	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	17	青銅	-	その他	9	
SM3003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（ニワトリ、トリ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、種不明） ＜フエフキダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、リュウキュウザル、 アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	2	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	1	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	1	瓦	9	青銅	-	その他	2	
SM3004	中青磁	3	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SM3005	中青磁	2	中白磁	-	中青花	10	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（イノシシ / ブタ？） サラサバテイラ、チョウセンサザエ、カワラガイ
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	-	本陶	3	近陶磁	4	沖施	56	
	初沖無	-	沖無	14	陶土	37	土器	4	円盤	3	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	1	石製品	-	瓦	197	青銅	1	その他	5	
SM3006	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（イヌ？、イノシシ / ブタ） ＜タイ科、種不明＞
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SM3007	中青磁	3	中白磁	2	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（イノシシ / ブタ） ＜フエフキダイ科＞ アラスジケマン、ホソスジイナミ
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	1	沖無	-	陶土	-	土器	2	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	13	青銅	-	その他	-	
SM3008	中青磁	2	中白磁	1	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（ネコ？、イノシシ / ブタ、種不明） ＜種不明＞ ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギクの蓋、アマオブネ、 クモガイ、ウラキツキガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、アラスジケマン、 ハマグリの一種、二枚貝不明
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖施	2	
	初沖無	1	沖無	-	陶土	-	土器	2	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	57	青銅	-	その他	1	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産白磁・ベトナム産青花・
タイ産鉄絵　本磁：本土産磁器・本土産青磁・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器 土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器　円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・
金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）・大和瓦　青銅：青銅製品(銭貨含む)
その他：坩堝・石材・滑石石鍋・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・碍子・マンガン・塼瓦・塼・煉瓦・乾電池・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 139 表　III区出土遺物点数表 c

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SM3009	中青磁	3	中白磁	1	中青花	7	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（イノシシ / ブタ） イモガイ科不明、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	
	初沖無	1	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	8	青銅	-	その他	1	
SP3001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（ウシ）
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SP3002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SP3009	中青磁	-	中白磁	-	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（ウシ）
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	3	沖施	2	
	初沖無	-	沖無	3	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	12	青銅	-	その他	2	
SP3010	中青磁	2	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（種不明） カンギク、シマベッコウバイ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SP3011	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（種不明）
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SP3012	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	-	
SP3018	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（ウマ、イノシシ / ブタ） サラサバテイラ、シャコガイ科不明
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	18	青銅	-	その他	4	
SP3023	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	ヤコウガイの蓋、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	-	
SP3024	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、種不明） ニシキウズ、チョウセンサザエ、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝不明
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	2	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	2	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産白磁・ベトナム産青花・
タイ産鉄絵　本磁：本土産磁器・本土産青磁・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器 土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器　円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・
金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系 (丸・平・近代大和タイプ)・大和瓦　青銅：青銅製品(銭貨含む)
その他：坩堝・石材・滑石石鍋・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・碍子・マンガン・塼瓦・塼・煉瓦・乾電池・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 140 表　III区出土遺物点数表 d

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SP3027	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（ウマ？、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、種不明） < タイ科 > ヤコウガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SS3002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（ウシ） チョウセンサザエの蓋、ヌノメガイ
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SS3004	中青磁	2	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、種不明） ヤコウガイの蓋、オハグロガイ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	4	
SX3001	中青磁	3	中白磁	1	中青花	11	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	6	（ネコ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ウシ、種不明） < フエフキダイ科、種不明 > チョウセンサザエ、ハナビラダカラ、アラスジケマン
	タイ褐	1	他陶磁	1	本磁	1	本陶	1	近陶磁	5	沖施	27	
	初沖無	3	沖無	13	陶土	4	土器	-	円盤	3	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	7	石製品	-	瓦	8	青銅	5	その他	6	
SX3003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	4	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（イノシシ / ブタ） イトマキボラ
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	9	
	初沖無	-	沖無	1	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SX3004	中青磁	-	中白磁	-	中青花	14	中色絵	4	中三彩	-	中褐釉	-	（ヤギ） ウラキツキガイ
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	3	本陶	4	近陶磁	20	沖施	106	
	初沖無	-	沖無	20	陶土	10	土器	1	円盤	7	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	5	石製品	-	瓦	1	青銅	1	その他	-	
SX3005	中青磁	1	中白磁	2	中青花	4	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（トリ、イノシシ / ブタ、種不明） < ハタ科 > ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、オハグロガイ、 イトマキボラ、スグカワニナ、ウラキツキガイ、リュウキュウザル、シャコガイ科不明、 リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	7	
	初沖無	-	沖無	3	陶土	2	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	20	青銅	-	その他	-	
SX3006	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（ウシ / ウマ）
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	2	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	1	
Ⅰ層	中青磁	131	中白磁	119	中青花	578	中色絵	26	中三彩	8	中褐釉	125	（ニワトリ、カモ科？、トリ、イヌ、ネコ、ウマ、ウシ / ウマ、ウシ / ウマ？、ブタ、 イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ヤギ？、ウシ、ウシ？、種不明） < サメ類、アジ科、フエダイ科、、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、 種不明 > ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、 チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、 イワ(ウミニナ)カニモリ、カワアイ、センニンガイ、オハグロガイ、ムカシタモト、マガキガイ、クモガイ、コモンダカラ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、 スクミウズラガイ、ホラガイ、ツノレイシ、シラクモガイ、コオニコブシ、イトマキボラ、 ヒメイトマキボラ、ナガイトマキボラ、ナンヨウクロミナシ、サヤガタイモ、 アカシマミナシ、ヤナギシボリイモ、イモガイ科不明、ウラキツキガイ、ヒメシャコ、 ヒレシャコ、オオシラナミ(シラナミ)、シャコガイ科不明、イソハマグリ、マスオガイ、 ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、マルオミナエシ、 ハネマツカゼ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝不明
	タイ褐	27	他陶磁	37	本磁	55	本陶	113	近陶磁	509	沖施	2058	
	初沖無	79	沖無	992	陶土	447	土器	39	円盤	66	金属製品	49	
	骨・貝製	4	ガラス	138	石製品	23	瓦	253	青銅	47	その他	136	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産白磁・ベトナム産青花・
タイ産鉄絵　本磁：本土産磁器・本土産青磁・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器　円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・
金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系 (丸・平・近代大和タイプ)・大和瓦　青銅：青銅製品(銭貨含む)
その他：坩堝・石材・滑石石鍋・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・碍子・マンガン・塼瓦・塼・煉瓦・乾電池・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 141 表　III区出土遺物点数表 e

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
II 層	中青磁	26	中白磁	11	中青花	71	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	21	（ウミガメ？、ニワトリ、トリ、ネコ、ウマ、ウシ / ウマ、ウシ / ウマ？、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ヤギ？、ウシ、種不明） < フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、種不明 > ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、センニンガイ、マガキガイ、スイショウガイ科不明、ハナビラダカラ、巻貝不明、ウラキツキガイ、カワラガイ、ヒメシャコ、オオシラナミ(シラナミ)、イソハマグリ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	8	他陶磁	4	本磁	5	本陶	20	近陶磁	15	沖施	71	
	初沖無	16	沖無	28	陶土	8	土器	7	円盤	4	金属製品	3	
	骨・貝製	-	ガラス	12	石製品	-	瓦	137	青銅	11	その他	18	
II 6 層	中青磁	18	中白磁	7	中青花	53	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	16	（ニワトリ、トリ、ネコ、ウシ / ウマ、ウシ / ウマ？、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ヤギ？、ウシ、種不明） < フエフキダイ科、ブダイ科、種不明 > ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、センニンガイ、マガキガイ、ハナビラダカラ、巻貝不明、ウラキツキガイ、カワラガイ、オオシラナミ(シラナミ)、イソハマグリ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	5	他陶磁	4	本磁	4	本陶	17	近陶磁	-	沖施	19	
	初沖無	11	沖無	15	陶土	2	土器	5	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	1	石製品	-	瓦	127	青銅	3	その他	13	
III 層	中青磁	148	中白磁	28	中青花	79	中色絵	1	中三彩	6	中褐釉	128	（ニワトリ、トリ、ネズミ科、イヌ、イヌ？、ネコ、ウマ、ウマ？、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ヤギ？、ウシ、種不明） < ハタ科、アジ科、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、種不明 > ニシキウズ、サラサバテイラ、オキナワイシダタミ、ニシキウズ科不明、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、カンギクの蓋、オニノツノガイ、コオニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、クモガイ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、スクミウズラガイ、ウネレイシダマシ、ツノレイシ、シラクモガイ、コオニコブシ、リュウキュウツノマタガイ、ヤナギシボリイモ、イモガイ科不明、エガイ、ウラキツキガイ、ツキガイ科不明、カワラガイ、ヒメシャコ、ヒレシャコ、シャコガイ科不明、リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、リュウキュウシラトリ、シレナシジミ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、オイノカガミ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝印象化石、二枚貝不明
	タイ褐	41	他陶磁	9	本磁	-	本陶	6	近陶磁	-	沖施	14	
	初沖無	6	沖無	9	陶土	1	土器	71	円盤	6	金属製品	13	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	5	瓦	354	青銅	9	その他	77	
III 2b 層	中青磁	5	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	3	（トリ、ネズミ科、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ヤギ、ウシ、種不明） < タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、種不明 > マガキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	2	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	3	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	2	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	2	その他	-	
III 4 層	中青磁	15	中白磁	4	中青花	7	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	3	（イヌ？、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ウシ、種不明） < ベラ科、ブダイ科、種不明 > サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、マガキガイ、ツノレイシ、シラクモガイ、ウラキツキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	2	沖無	1	陶土	-	土器	31	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	13	青銅	1	その他	6	
III 6a ～ 6e 層	中青磁	76	中白磁	14	中青花	53	中色絵	-	中三彩	6	中褐釉	63	（ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ウシ、種不明） < タイ科、フエフキダイ科、ブダイ科、種不明 > サラサバテイラ、ニシキウズ科不明、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、クモガイ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、スクミウズラガイ、ツノレイシ、コオニコブシ、ヤナギシボリイモ、イモガイ科不明、エガイ、ウラキツキガイ、ツキガイ科不明、ヒレシャコ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、シレナシジミ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、オイノカガミ、スダレハマグリ、ハマグリの一種、二枚貝不明
	タイ褐	19	他陶磁	5	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	4	
	初沖無	1	沖無	1	陶土	-	土器	22	円盤	4	金属製品	3	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	3	瓦	190	青銅	2	その他	49	
IV 層	中青磁	41	中白磁	2	中青花	4	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	12	（ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ウシ、種不明） < ハタ科、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ブダイ科、種不明 > ニシキウズ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、カンギク、カンギクの蓋、イワ(ウミニナ)カニモリ、マガキガイ、クモガイ、ハナマルユキ、オニコブシ科不明、マダライモ、スグカワニナ、巻貝不明、メンガイの一種、ウラキツキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	1	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	11	円盤	-	金属製品	5	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	36	青銅	-	その他	16	
IV 1a ～ 1f 層	中青磁	4	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	2	（ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ウシ、種不明） < クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ブダイ科、種不明 > ニシキウズ、ヤコウガイの蓋、カンギク、カンギクの蓋、イワ(ウミニナ)カニモリ、マガキガイ、クモガイ、ハナマルユキ、オニコブシ科不明、マダライモ、スグカワニナ、メンガイの一種、ウラキツキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	1	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	34	青銅	-	その他	8	
IV 2a ～ 2d 層	中青磁	37	中白磁	1	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	10	（ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、種不明） < ハタ科、フエフキダイ科、種不明 > ヤコウガイ、巻貝不明、アラスジケマン
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	11	円盤	-	金属製品	4	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	8	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産白磁・ベトナム産青花・タイ産鉄絵　本磁：本土産磁器・本土産青磁・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器 土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器　円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系 (丸・平・近代大和タイプ)・大和瓦　青銅：青銅製品(銭貨含む)
その他：坩堝・石材・滑石石鍋・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・碍子・マンガン・塼瓦・塼・煉瓦・乾電池・炭　（獣骨）・< 魚骨 >・貝類については出土種を掲載。

第 142 表　Ⅳ区出土遺物点数表 a

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SA4002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SA4003	中青磁	2	中白磁	-	中青花	7	中色絵	1	中三彩	1	中褐釉	8	（種不明） ムラサキウズ、サラサバテイラ、チョウセンサザエの蓋、マガキガイ、イトマキボラ、キヌカツギイモ
	タイ褐	3	他陶磁	1	本磁	1	本陶	5	近陶磁	1	沖施	29	
	初沖無	6	沖無	20	陶土	7	土器	2	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	1	ガラス	-	石製品	-	瓦	12	青銅	-	その他	4	
SD4001	中青磁	-	中白磁	1	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（種不明）
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	8	沖施	2	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	2	
	骨・貝製	-	ガラス	2	石製品	1	瓦	3	青銅	1	その他	-	
SD4002	中青磁	1	中白磁	-	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（イノシシ / ブタ、種不明） チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、ウラキツキガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	1	
	初沖無	1	沖無	1	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	17	青銅	-	その他	1	
SK4001	中青磁	-	中白磁	1	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（ニワトリ） カンギク
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1	
SK4002	中青磁	1	中白磁	-	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（種不明） チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、ウラキツキガイ、シャコガイ科不明、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-	
SK4006	中青磁	2	中白磁	1	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（トリ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、種不明） ＜ハタ科、アジ科、フエダイ科、フエフキダイ科、ベラ科（シロクラベラ）、ベラ科、ブダイ科、種不明＞ チョウセンサザエ、スグカワニナ、シャコガイ科不明、シレナシジミ、ホソスジイナミ
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	2	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	10	青銅	-	その他	3	
SK4007	中青磁	1	中白磁	-	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	4	（ブタ、イノシシ / ブタ、種不明） チョウセンサザエ、ツキガイ
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	2	
	初沖無	4	沖無	4	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	56	青銅	-	その他	2	
SM4002	中青磁	2	中白磁	5	中青花	6	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	2	（ニワトリ、トリ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、種不明） ＜フエダイ科、タイ科、フエフキダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、マガキガイ、ハマグリの一種、二枚貝不明
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	1	本陶	3	近陶磁	1	沖施	42	
	初沖無	10	沖無	26	陶土	18	土器	-	円盤	2	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	26	青銅	-	その他	4	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産緑釉・中国産褐釉染付・中国産黒釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産青花・ベトナム産色絵・タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・宮古式土器・八重山諸島産土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・石材・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・塼瓦・塼・煉瓦・炭・釉溜り　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 143 表　IV区出土遺物点数表 b

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SM4003	中青磁	6	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	5	（ウシ） < 種不明 > ヤコウガイの蓋、ハナマルユキ、オオシラナミ（シラナミ）、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	3	
SP4002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SP4003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SP4005	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	-	
SP4007	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	ウラキツキガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SP4008	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（イノシシ / ブタ）
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SR4001	中青磁	9	中白磁	-	中青花	3	中色絵	-	中三彩	1	中褐釉	5	（イノシシ / ブタ、種不明） < アジ科、種不明 > ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエの蓋、カンギク、イワ（ウミニナ）カニモリ、マガキガイ、コオニコブシ、ウラキツキガイ、オオシラナミ（シラナミ）、アラスジケマン、ホソスジイナミ
	タイ褐	1	他陶磁	1	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	1	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	3	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	23	青銅	-	その他	-	
SR4005	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（種不明） < ベラ科（シロクラベラ）、種不明 > アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	1	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SS4001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	-	（種不明）
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	2	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	1	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	-	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産緑釉・中国産褐釉染付・中国産黒釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産青花・ベトナム産色絵・タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・宮古式土器・八重山諸島産土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・石材・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・塼瓦・塼・煉瓦・炭・釉溜り　（獣骨）・< 魚骨 >・貝類については出土種を掲載。

第 144 表　Ⅳ区出土遺物点数表 c

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SX4001	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	4	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-	
SX4007	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	（イノシシ / ブタ、種不明） ヤコウガイ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SX4010	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	アラスジケマン、ホソスジイナミ
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	-	
SX4016	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
Ⅰ層	中青磁	110	中白磁	46	中青花	191	中色絵	7	中三彩	3	中褐釉	153	（ニワトリ、イヌ、ネコ、ウマ、ウマ？、ウシ / ウマ、ブタ、イノシシ / ブタ、ヤギ、ウシ、ウシ？、イルカ？、種不明） ＜サメ類、ハタ科、フエフキダイ科、ブダイ科、種不明＞ ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オオマルアマオブネ、オニノツノガイ、イワ（ウミニナ）カニモリ、ネジマガキ、マガキガイ、ホシダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、シラクモガイ、イトマキボラ、ヒメイトマキボラ、ナガイトマキボラ、ゴマフイモ、サラサミナシモドキ、ヤナギシボリイモ、巻貝不明、ウラキツキガイ、カワラガイ、ヒレシャコ、オオシラナミ（シラナミ）、シャコガイ科不明、イソハマグリ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	36	他陶磁	8	本磁	24	本陶	36	近陶磁	158	沖施	477	
	初沖無	55	沖無	257	陶土	117	土器	22	円盤	17	金属製品	13	
	骨・貝製	1	ガラス	65	石製品	13	瓦	407	青銅	20	その他	41	
Ⅱ層	中青磁	22	中白磁	12	中青花	85	中色絵	3	中三彩	1	中褐釉	23	（ニワトリ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ヤギ、種不明） ＜タイ科、フエフキダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、クワノミカニモリ、オハグロガイ、マガキガイ、キイロダカラ、イトマキボラ、ゴマフイモ、巻貝不明、リュウキュウサルボオ、ウラキツキガイ、ヒレシャコ、オオシラナミ（シラナミ）、シャコガイ科不明、イソハマグリ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	2	他陶磁	3	本磁	11	本陶	15	近陶磁	36	沖施	319	
	初沖無	16	沖無	133	陶土	78	土器	9	円盤	15	金属製品	9	
	骨・貝製	-	ガラス	23	石製品	1	瓦	121	青銅	5	その他	29	
Ⅱ７層	中青磁	17	中白磁	8	中青花	78	中色絵	3	中三彩	1	中褐釉	18	（ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ヤギ、種不明） ＜フエフキダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、クワノミカニモリ、オハグロガイ、マガキガイ、キイロダカラ、イトマキボラ、ゴマフイモ、巻貝不明、リュウキュウサルボオ、ウラキツキガイ、ヒレシャコ、オオシラナミ（シラナミ）、シャコガイ科不明、イソハマグリ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	1	他陶磁	3	本磁	9	本陶	12	近陶磁	34	沖施	288	
	初沖無	12	沖無	98	陶土	72	土器	8	円盤	15	金属製品	9	
	骨・貝製	-	ガラス	23	石製品	1	瓦	95	青銅	5	その他	21	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産緑釉・中国産褐釉染付・中国産黒釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産青花・ベトナム産色絵・タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・宮古式土器・八重山諸島産土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・石材・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・塼瓦・塼・煉瓦・炭・釉溜り　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 145 表　IV区出土遺物点数表 d

遺構	出土遺物												（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
Ⅲ層	中青磁	198	中白磁	81	中青花	302	中色絵	10	中三彩	5	中褐釉	165	（ニワトリ、トリ、イヌ、ネコ、ウマ、ウマ？、ウシ / ウマ、ブタ、ブタ？、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ヤギ？、ウシ、ウシ？、種不明） ＜サメ類、ハタ科、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、ニザダイ科、種不明＞ ニシキウズ、ムラサキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、コゲツノブエ、イワ（ウミニナ）カニモリ、クワノミカニモリ、オハグロガイ、マガキガイ、カワチドリ、ハナビラダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、オキニシ、ツノレイシ、シラクモガイ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、ヒメイトマキボラ、ナンヨウクロミナシ、クロフモドキ、マダライモ、サヤガタイモ、ヤナギシボリイモ、キヌカツギイモ、イモガイ科不明、エガイ、ソメワケグリ、メンガイの一種、オハグロガキ、ウラキツキガイ、ヒメツキガイ、シロザル、リュウキュウザル、カワラガイ、ヒメシャコ、ヒレシャコ、オオシラナミ（シラナミ）、シャコガイ科不明、イソハマグリ、リュウキュウナミノコ、リュウキュウマスオ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、パイプウニ
	タイ褐	26	他陶磁	13	本磁	66	本陶	100	近陶磁	11	沖施	261	
	初沖無	160	沖無	154	陶土	79	土器	44	円盤	18	金属製品	15	
	骨・貝製	2	ガラス	-	石製品	4	瓦	1101	青銅	15	その他	83	
Ⅲ 10 層	中青磁	17	中白磁	8	中青花	17	中色絵	2	中三彩	1	中褐釉	9	（ニワトリ、ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ウシ、種不明） ＜ハタ科、フエフキダイ科、ブダイ科、種不明＞ サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、コゲツノブエ、イワ（ウミニナ）カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、ハナマルユキ、シマベッコウバイ、サヤガタイモ、ウラキツキガイ、イソハマグリ、アラスジケマン、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	2	本陶	3	近陶磁	-	沖施	15	
	初沖無	14	沖無	6	陶土	1	土器	2	円盤	-	金属製品	3	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	117	青銅	3	その他	4	
Ⅲ 11b 層	中青磁	7	中白磁	9	中青花	11	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	4	（トリ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、種不明） ＜フエフキダイ科、種不明＞ サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、キイロダカラ、ウラキツキガイ、イソハマグリ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	14	本陶	17	近陶磁	1	沖施	-	
	初沖無	13	沖無	1	陶土	1	土器	1	円盤	1	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	1	瓦	235	青銅	-	その他	4	
Ⅲ 11c 層	中青磁	21	中白磁	12	中青花	42	中色絵	2	中三彩	1	中褐釉	12	（ニワトリ、イヌ、ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ウシ、種不明） ＜ハタ科、タイ科、フエフキダイ科、種不明＞ サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、オニノツノガイ、イワ（ウミニナ）カニモリ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、シラクモガイ、シマベッコウバイ、ヒメイトマキボラ、ヤナギシボリイモ、ウラキツキガイ、ヒメツキガイ、カワラガイ、ヒメシャコ、ヒレシャコ、オオシラナミ（シラナミ）、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	9	本陶	24	近陶磁	3	沖施	2	
	初沖無	19	沖無	3	陶土	-	土器	6	円盤	3	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	1	瓦	105	青銅	3	その他	7	
Ⅲ 12b 層	中青磁	2	中白磁	1	中青花	8	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	6	（ニワトリ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、種不明） チョウセンサザエ、マガキガイ
	タイ褐	-	他陶磁	1	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖施	8	
	初沖無	9	沖無	4	陶土	4	土器	1	円盤	1	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	5	青銅	-	その他	3	
Ⅳ層	中青磁	3	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	（イノシシ / ブタ） ヤコウガイ、マガキガイ、コオニコブシ、ウラキツキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1	
層不明	中青磁	9	中白磁	1	中青花	7	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	3	（ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） チョウセンサザエの蓋、オニコブシ、ウラキツキガイ、アラスジケマン
	タイ褐	1	他陶磁	-	本磁	1	本陶	2	近陶磁	1	沖施	17	
	初沖無	2	沖無	1	陶土	3	土器	1	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝製	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	2	その他	2	

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産翡翠釉・中国産緑釉・中国産褐釉染付・中国産黒釉磁器・中国産陶磁器・ベトナム産青花・ベトナム産色絵・タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器　沖施：沖縄産施釉陶器
初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・宮古式土器・八重山諸島産土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製品：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・石材・煙管・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・塼瓦・塼・煉瓦・炭・釉溜り　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 146 表　Ⅴ区出土遺物点数表 a

遺構	出土遺物														（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SA5001	中青磁	1	中白磁	-	中青花	9	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	（イノシシ / ブタ） スダレハマグリ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	13	初沖無	-	
	沖無	6	陶土	3	土器	-	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	1	瓦	9	青銅	-	その他	1					
SA5002	中青磁	14	中白磁	3	中青花	8	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	28	タイ褐	8	（トリ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） ＜ハタ科、アジ科、クロダイ属、フエフキダイ科、ベラ科（シロクラベラ）、 ブダイ科、ニザダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、 オニノツノガイ、オハグロガイ、マガキガイ、コオニコブシ、 イトマキボラ、ヤナギシボリイモ、オキナワウスカワマイマイ、 リュウキュウサルボオ、ウラキツキガイ、カワラガイ、シレナシジミ、 アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、ハマグリの一種
	他陶磁	2	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖施	20	初沖無	-	
	沖無	8	陶土	12	土器	19	カムイ焼	-	円盤	3	金属製	2	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	4					
SA5003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	ヤコウガイ、オハグロガイ、イトマキボラ、
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖施	1	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	1	その他	1					
SA5004	中青磁	1	中白磁	-	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	7	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	3	沖施	6	初沖無	1	
	沖無	4	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SA5005	中青磁	5	中白磁	8	中青花	32	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	13	タイ褐	1	（ニワトリ、イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） ＜ハタ科、フエフキダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、 カンギク、センニンガイ、マガキガイ、イトマキボラ、イモガイ科不明、 クチベニツキガイ、ウラキツキガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、 アラスジケマン、ハマグリの一種
	他陶磁	3	西洋陶	-	本磁	4	本陶	-	近陶磁	1	沖施	84	初沖無	15	
	沖無	45	陶土	27	土器	2	カムイ焼	-	円盤	4	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	2	石製品	1	瓦	119	青銅	1	その他	5					
SA5006	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	（ニワトリ、イノシシ / ブタ、種不明） チョウセンサザエ、ウラキツキガイ、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SD5001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	3	中色絵	-	中三彩	1	中褐釉	-	タイ褐	-	（ウシ、種不明） サラサバテイラ、リュウキュウサルボオ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	16	初沖無	-	
	沖無	3	陶土	4	土器	1	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-					
SD5002	中青磁	3	中白磁	1	中青花	4	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	4	タイ褐	-	（イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） ＜フエフキダイ科、ベラ科＞ リュウキュウノアシ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、 チョウセンサザエの蓋、カンギク、マルアマオブネ、 アラスジケマン、ホソスジイナミ、スダレハマグリ、 ダテオキシジミ、二枚貝不明
	他陶磁	1	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	8	初沖無	1	
	沖無	1	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	-	瓦	10	青銅	1	その他	3					
SD5004	中青磁	5	中白磁	3	中青花	10	中色絵	-	中三彩	1	中褐釉	7	タイ褐	-	（イノシシ / ブタ、種不明） ＜フエフキダイ科、　ブダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、 オハグロガイ、マガキガイ、メンガイの一種、リュウキュウシラトリ、 アラスジケマン、スダレハマグリ
	他陶磁	2	西洋陶	-	本磁	2	本陶	1	近陶磁	1	沖施	67	初沖無	8	
	沖無	23	陶土	13	土器	1	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	9	青銅	1	その他	5					

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産瑠璃釉染付・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶器・中国産無釉陶器・
タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　西洋陶：西洋陶器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器
沖施：沖縄産施釉陶器　初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・窯道具・石材・木製品・煙管・鉄滓・勾玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・碍子・塼瓦・塼・煉瓦・
近代タイル・軽石・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 147 表　Ⅴ区出土遺物点数表 b

遺構	出土遺物														（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SF5001	中青磁	52	中白磁	44	中青花	107	中色絵	4	中三彩	1	中褐釉	71	タイ褐	19	（カメ類？、ニワトリ、ニワトリ？、ネコ、ウマ、ウシ / ウマ、ウシ / ウマ？、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ウシ、種不明） ＜ダツ科、ボラ科、ハタ科、アジ科、アジ科？、シイラ科、シイラ科？、フエダイ科、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科（ヨコシマクロダイ）フエフキダイ科、ベラ科（シロクラベラ）、ベラ科、ブダイ科、ニザダイ科、アイゴ科、モンガラカワハギ科、種不明、軟甲綱（カニ）＞ ニシキウズ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、アマオブネ、オニノツノガイ、メオニノツノガイ、クワノミカニモリ、オハグロガイ、マガキガイ、ヤクシマダカラ、ハナビラダカラ、ガンゼキボラ、ツノレイシ、シマベッコウバイ、イトマキボラ、アカシマミナシ、巻貝不明、ミドリアオリ、イタヤガイ科不明、ウラキツキガイ、リュウキュウザル、カワラガイ、オオシラナミ（シラナミ）、シャコガイ科不明、イソハマグリ、リュウキュウシラトリ、マスオガイ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、ヒメアサリ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、マルスダレガイ科不明、二枚貝不明
	他陶磁	7	西洋陶	-	本磁	1	本陶	5	近陶磁	1	沖施	200	初沖無	18	
	沖無	86	陶土	95	土器	20	カムイ焼	-	円盤	7	金属製	10	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	3	瓦	666	青銅	3	その他	57					
SK5001	中青磁	5	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	＜種不明＞ アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SK5002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	（種不明） ヤコウガイ、イソハマグリ、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	初沖無	-	
	沖無	2	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	26	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	1	その他	-					
SK5003	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	ヤコウガイの蓋
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	4	青銅	-	その他	-					
SK5004	中青磁	2	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	4	タイ褐	2	（ウシ、種不明） ＜ハタ科、アジ科、タイ科、フエフキダイ科、ブダイ科、種不明＞ ヤコウガイ、チョウセンサザエ、コシダカアマガイ、マガキガイ、ハナマルユキ、メンガイの一種、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種
	他陶磁	1	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	初沖無	1	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1					
SK5008	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	1	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SL5001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	マガキガイ、リュウキュウヒバリガイ、ミドリアオリ、アラスジケマン、スダレハマグリ、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-					
SM5001	中青磁	1	中白磁	2	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	3	タイ褐	2	（ニワトリ、種不明） サラサバテイラ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、マガキガイ、ヒメイトマキボラ、ウラキツキガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖施	6	初沖無	-	
	沖無	6	陶土	2	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	27	青銅	-	その他	1					

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産瑠璃釉染付・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶器・中国産無釉陶器・
タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　西洋陶：西洋陶器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器
沖施：沖縄産施釉陶器　初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・窯道具・石材・木製品・煙管・鉄滓・勾玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・碍子・塼瓦・塼・煉瓦・
近代タイル・軽石・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 148 表　Ⅴ区出土遺物点数表 c

遺構	出土遺物														（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SM5002	中青磁	2	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	26	タイ褐	13	（ニワトリ、トリ、ウマ、ウマ？、イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） ＜エイ目、ダツ科、カマス科、ハタ科、アジ科、タチウオ科、タチウオ科？、フエダイ科、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科（シロクラベラ）、ブダイ科、ニザダイ科、種不明＞ サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、イワ（ウミニナ）カニモリ、オハグロガイ、マガキガイ、キイロダカラ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、シュリマイマイ、ヒメツキガイ、キクザル科不明、ヒレシャコ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、リュウキュウナミノコ、アラスジケマン、イオウハマグリ、ハマグリの一種、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	1	土器	7	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	5	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	3					
SP5001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	（イノシシ / ブタ） 二枚貝不明
	他陶磁	1	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	3	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	2	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5004	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5027	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	ヤコウガイ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5031	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	4	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	3	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	-					
SP5032	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	8	タイ褐	-	（ジュゴン？、種不明） ＜アジ科、種不明＞ ヤコウガイの蓋、カンギク、イワ（ウミニナ）カニモリ、マガキガイ、ハナビラダカラ、アラスジケマン、ハマグリの一種
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	2	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1					
SP5038	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5039	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5040	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	-	ヤコウガイ、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産瑠璃釉染付・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶器・中国産無釉陶器・
タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　西洋陶：西洋陶器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器
沖施：沖縄産施釉陶器　初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・窯道具・石材・木製品・煙管・鉄滓・勾玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・碍子・塼瓦・塼・煉瓦・
近代タイル・軽石・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 149 表　V 区出土遺物点数表 d

遺構	出土遺物														（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SP5041	中青磁	-	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	3	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	8	青銅	-	その他	3					
SP5044	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	（種不明） ＜種不明＞
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5045	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	（ニワトリ）
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5048	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	タカラガイ科不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	1	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5062	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	3	タイ褐	-	（種不明） ヤコウガイ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、イワ（ウミニナ）カニモリ、 クワノミカニモリ、マガキガイ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、 アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	6					
SP5065	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	-	（ニワトリ、イノシシ / ブタ） ＜ハタ科＞ ヤコウガイの蓋、カンギク、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	5	青銅	-	その他	-					
SP5073	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5074	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5079	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	（ウマ、種不明） イワ（ウミニナ）カニモリ、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SP5085	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産瑠璃釉染付・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶器・中国産無釉陶器・
タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　西洋陶：西洋陶器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器
沖施：沖縄産施釉陶器　初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・窯道具・石材・木製品・煙管・鉄滓・勾玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・碍子・塼瓦・塼・煉瓦・
近代タイル・軽石・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 150 表　Ｖ区出土遺物点数表 e

遺構	出土遺物														（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SQ5005	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	-	ヤコウガイ、ヌノメガイ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	11	初沖無	-	
	沖無	5	陶土	3	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	1					
SQ5006	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	-	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	1	
	沖無	3	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	5	青銅	-	その他	-					
SS5001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	1	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	-					
SS5002	中青磁	5	中白磁	1	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	34	タイ褐	6	（ニワトリ、ウシ / ウマ、種不明） ＜アジ科、種不明＞ ムラサキウズ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、 チョウセンサザエ、マガキガイ、ハナビラダカラ、オオシラナミ（シラナミ）、 シャコガイ科不明、シレナシジミ、アラスジケマン、ハマグリの一種、 二枚貝印象化石、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	2	陶土	-	土器	7	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	1	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	6					
SS5003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	2	タイ褐	-	チョウセンサザエ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	8	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SS5004	中青磁	1	中白磁	-	中青花	8	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	2	タイ褐	-	（イノシシ / ブタ） ＜ハタ科、フエフキダイ科＞ ウラキツキガイ、二枚貝印象化石
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	2	沖施	38	初沖無	1	
	沖無	12	陶土	11	土器	-	カムイ焼	-	円盤	3	金属製	5	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	1	瓦	15	青銅	-	その他	9					
SS5005	中青磁	4	中白磁	2	中青花	4	中色絵	2	中三彩	-	中褐釉	4	タイ褐	2	（イノシシ / ブタ、種不明） ヤコウガイの蓋、オハグロガイ、シャコガイ科不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	2	沖施	50	初沖無	2	
	沖無	15	陶土	11	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	-	瓦	7	青銅	1	その他	3					
SS5007	中青磁	1	中白磁	2	中青花	5	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	-	（イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） ニシキウズ、ギンタカハマ、ヤコウガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、 アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	初沖無	6	
	沖無	-	陶土	1	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	187	青銅	-	その他	11					
SX5001	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	8	タイ褐	1	（イノシシ / ブタ、種不明） ＜ハタ科、クロダイ属、ベラ科、種不明＞ ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、カンギク、マガキガイ、ハナビラダカラ、 ハナマルユキ、ウラキツキガイ、シャコガイ科不明、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	6					
SX5002	中青磁	2	中白磁	-	中青花	6	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	5	タイ褐	1	（イノシシ / ブタ） チョウセンサザエ、オハグロガイ、ニッコウガイ科不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	3	沖施	43	初沖無	-	
	沖無	9	陶土	19	土器	1	カムイ焼	-	円盤	2	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	-	瓦	6	青銅	2	その他	3					

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産瑠璃釉染付・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶器・中国産無釉陶器・
タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　西洋陶：西洋陶器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器
沖施：沖縄産施釉陶器　初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・窯道具・石材・木製品・煙管・鉄滓・勾玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・碍子・塼瓦・塼・煉瓦・
近代タイル・軽石・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 151 表　Ⅴ区出土遺物点数表 f

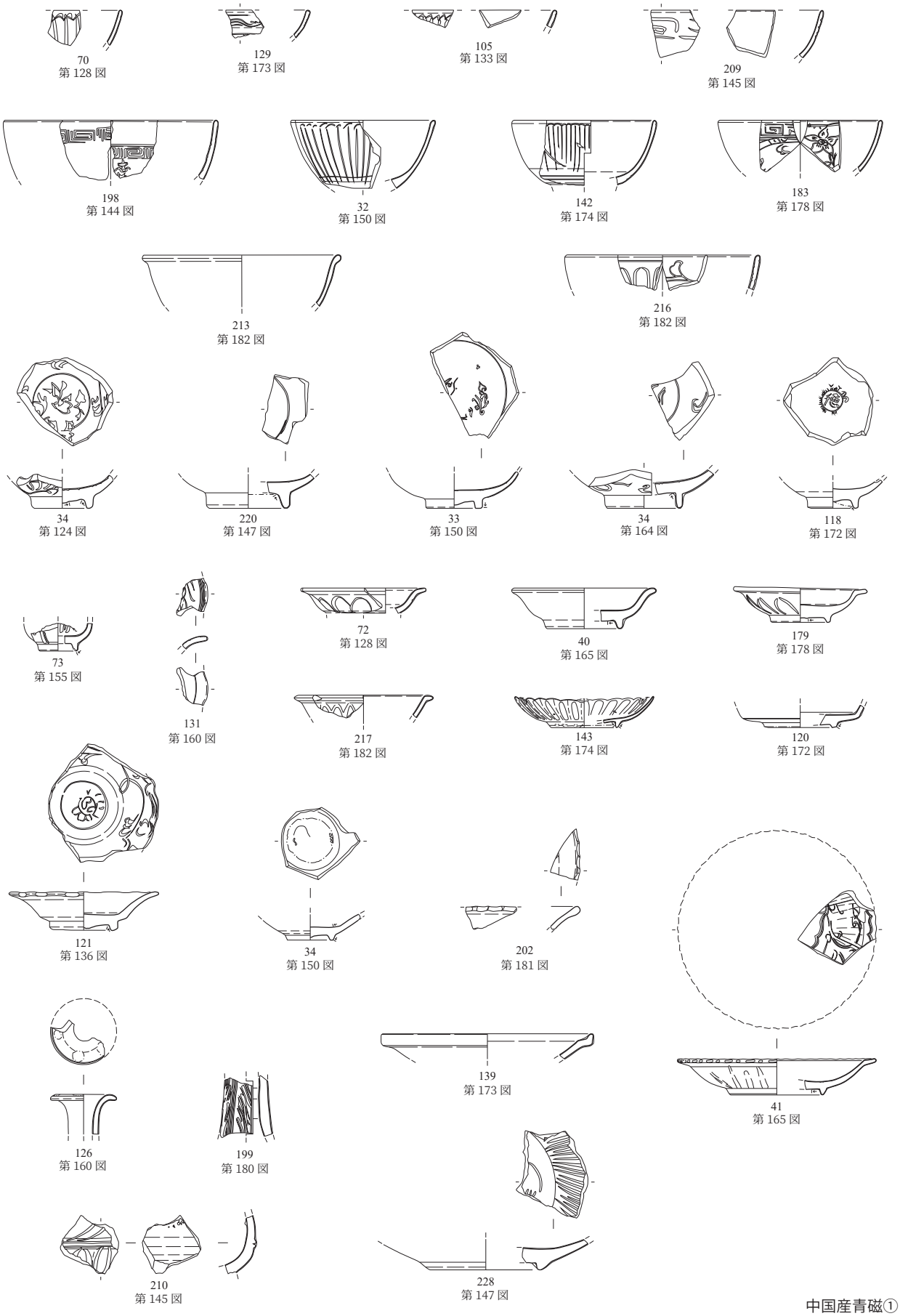
遺構	出土遺物														（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
SX5003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	2	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖施	2	初沖無	-	
	沖無	2	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SX5004	中青磁	21	中白磁	4	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	2	タイ褐	1	（ウマ、イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） サラサバテイラ、カンギク、アマオブネ、オニノツノガイ科不明、 コガンゼキ、サヤガタイモ、カキの一種、カワラガイ、シレナシジミ、 アラスジケマン、ホソスジイナミ、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	3					
SX5005	中青磁	15	中白磁	4	中青花	22	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	16	タイ褐	3	（イノシシ / ブタ、種不明） < フエフキダイ科（ヨコシマクロダイ）、種不明 > ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オニコブシ、 ウラキツキガイ、イソハマグリ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、 ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	2	近陶磁	4	沖施	67	初沖無	5	
	沖無	22	陶土	22	土器	3	カムイ焼	-	円盤	2	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	-	瓦	16	青銅	-	その他	9					
SX5007	中青磁	-	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	1	タイ褐	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	4	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	1	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	2	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	1					
Ⅰ層	中青磁	347	中白磁	164	中青花	525	中色絵	23	中三彩	7	中褐釉	465	タイ褐	103	（ニワトリ、ニワトリ？、トリ、イヌ、ネコ、ウマ、ウマ？、ウシ / ウマ、 ウシ / ウマ？、イノシシ / ブタ、イノシシ / ブタ？、ヤギ、ヤギ？、ウシ、ウシ？ 種不明） < サメ類、ダツ科、ハタ科、アジ科、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、 ブダイ科、種不明、軟甲網（カニ）> オオベッコウガサ、ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウ ガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カン ギク、アマオブネ、ニシキアマオブネ、オニノツノガイ、イワ（ウミニナ） カニモリ、クワノミカニモリ、ナガタケノコカニモリ、ゴマフニナ、フト ヘナタリ、オハグロガイ、マガキガイ、クモガイ、ホシダカラ、コモンダ カラ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、リスガイ、オ キニシ、アカイガレイシ、ツノレイシ、シラクモガイ、オニコブシ、イト マキボラ、ナンヨウクロミナシ、マダライモ、ユキゲイモ、ヤキイモ、ヤ ナギシボリイモ、アジロイモ、イモガイ科不明、キタケノコガイ、オキナ ワヤマタニシ、巻貝不明、エガイ、ベニエガイ、ハイガイ、イタヤガイ、 メンガイの一種、カキの一種、ウラキツキガイ、シロザル、リュウキュウ ザル、ヒレシャコ、オオシラナミ（シラナミ）、イソハマグリ、マスオガイ、 シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、オイノカガミ、スダレハマ グリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝印象化石、二枚貝不明
	他陶磁	18	西洋陶	1	本磁	25	本陶	64	近陶磁	259	沖施	1526	初沖無	224	
	沖無	623	陶土	422	土器	45	カムイ焼	1	円盤	80	金属製	28	骨・貝製	2	
	ガラス	40	石製品	7	瓦	721	青銅	24	その他	145					
Ⅱ層	中青磁	49	中白磁	53	中青花	169	中色絵	8	中三彩	1	中褐釉	83	タイ褐	11	（ニワトリ、ニワトリ？、トリ、ネコ、ネコ？、ウシ / ウマ、 イノシシ / ブタ、ヤギ、ウシ、種不明） < サメ類、ダツ科、ハタ科、ハタ科？、アジ科、フエダイ科、クロダイ属、 タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、アイゴ科、 モンガラカワハギ科、種不明 > ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、 チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、カンギクの蓋、 イワ（ウミニナ）カニモリ、クワノミカニモリ、リュウキュウウミニナ、カ ワアイ、オハグロガイ、マガキガイ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、 シラクモガイ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、マダライモ、オキナワ ヤマタニシ、シュリマイマイ、パンダナマイマイ、巻貝不明、エガイ、 ウラキツキガイ、カワラガイ、ヒレシャコ、イソハマグリ、リュウキュウ マスオ、シレナシジミ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマ グリ、ヒメアサリ、スダレハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、 二枚貝不明、パイプウニ
	他陶磁	4	西洋陶	-	本磁	4	本陶	16	近陶磁	33	沖施	444	初沖無	47	
	沖無	146	陶土	213	土器	16	カムイ焼	-	円盤	21	金属製	9	骨・貝製	-	
	ガラス	10	石製品	5	瓦	241	青銅	9	その他	50					

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産瑠璃釉染付・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶器・中国産無釉陶器・
タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　西洋陶：西洋陶器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器
沖施：沖縄産施釉陶器　初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・窯道具・石材・木製品・煙管・鉄滓・勾玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・碍子・塼瓦・塼・煉瓦・
近代タイル・軽石・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

第 152 表　Ⅴ区出土遺物点数表 g

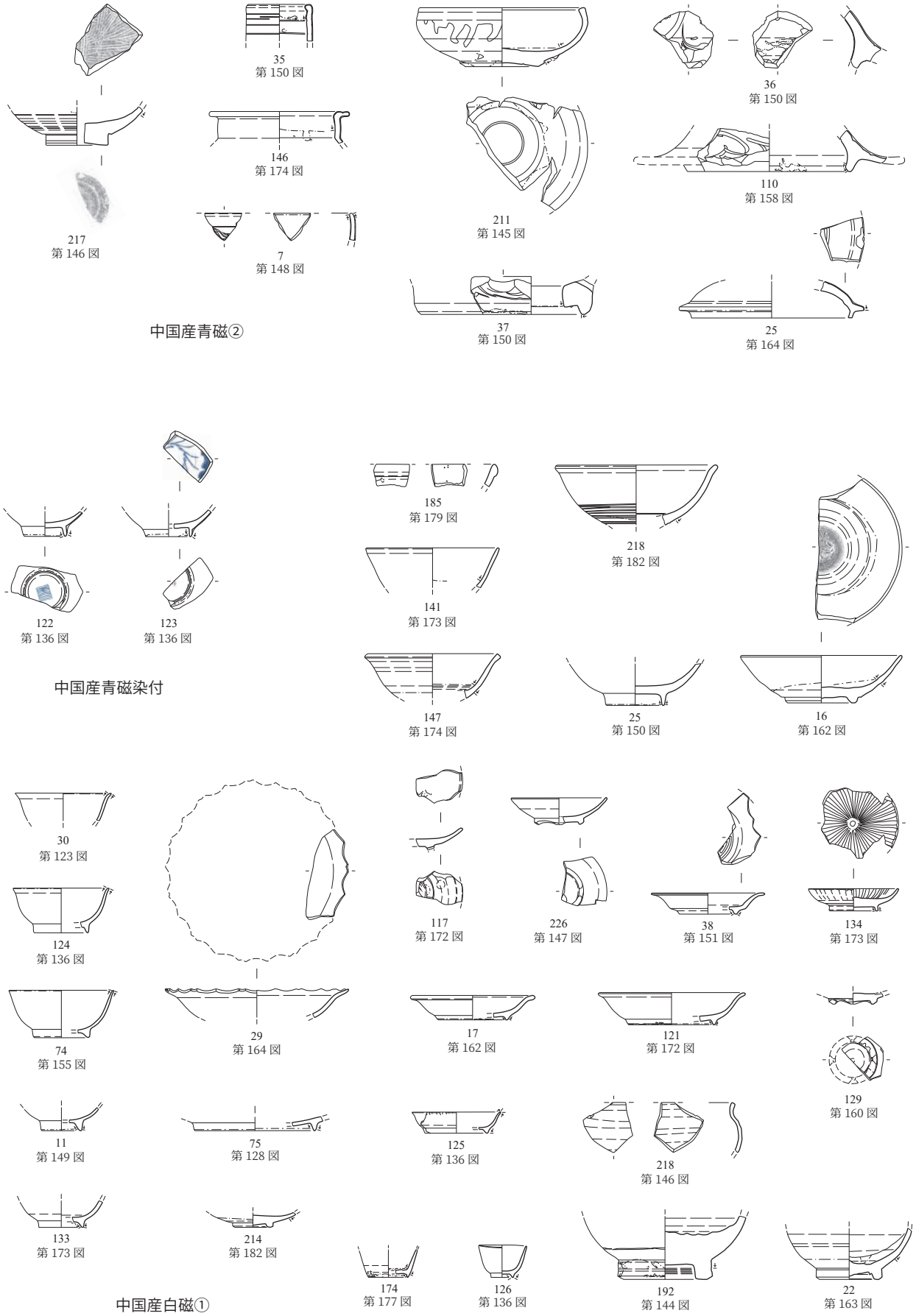
遺構	出土遺物														（獣骨）・＜魚骨＞・貝類遺体
Ⅲ層	中青磁	180	中白磁	84	中青花	334	中色絵	18	中三彩	5	中褐釉	270	タイ褐	85	（ニワトリ、トリ、ウマ、ウシ / ウマ、ウシ / ウマ？、イノシシ / ブタ、ヤギ、ヤギ？、ウシ、種不明） ＜サメ類、ハタ科、ハタ科？、アジ科、フエダイ科、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、種不明＞ ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ニシキウズ科不明、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ（ウミニナ）カニモリ、オハグロガイ、ムカシタモト、マガキガイ、クモガイ、ナツメモドキ、ハナマルユキ、ガンゼキボラ、ツノレイシ、シラクモガイ、シマベッコウバイ、チトセボラ、マダライモ、サヤガタイモ、ジュズカケサヤガタイモ、ヤナギシボリイモ、イモガイ科不明、スグカワニナ、オキナワヤマタニシ、オキナワウスカワマイマイ、ミドリアオリ、キンチャクガイ、ウラキツキガイ、リュウキュウザル、カワラガイ、ヒレシャコ、オオシラナミ（シラナミ）、イソハマグリ、ヌノメイチョウシラトリ、マスオガイ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝印象化石、二枚貝不明
	他陶磁	18	西洋陶	-	本磁	8	本陶	20	近陶磁	11	沖施	138	初沖無	62	
	沖無	48	陶土	43	土器	63	カムイ焼	-	円盤	17	金属製	9	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	10	瓦	1472	青銅	13	その他	116					
Ⅲ１層	中青磁	8	中白磁	13	中青花	45	中色絵	2	中三彩	-	中褐釉	19	タイ褐	8	（ニワトリ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ヤギ、ウシ、種不明） ＜ハタ科、ハタ科？、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、種不明＞ ニシキウズ、ニシキウズ科不明、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、オハグロガイ、ムカシタモト、マガキガイ、ウラキツキガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、ヌノメイチョウシラトリ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
	他陶磁	2	西洋陶	-	本磁	-	本陶	4	近陶磁	2	沖施	12	初沖無	19	
	沖無	2	陶土	5	土器	5	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	4	瓦	246	青銅	1	その他	15					
Ⅲ７層	中青磁	7	中白磁	-	中青花	4	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	29	タイ褐	15	（ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ウシ、種不明） ＜アジ科、タイ科、種不明＞ ニシキウズ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、マガキガイ、ナツメモドキ、ハナマルユキ、ウラキツキガイ、ヒレシャコ、アラスジケマン、ハマグリの一種
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	初沖無	1	
	沖無	3	陶土	-	土器	4	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	8	青銅	-	その他	7					
Ⅲ 17 ～ Ⅲ 25 層	中青磁	17	中白磁	7	中青花	19	中色絵	1	中三彩	-	中褐釉	36	タイ褐	8	（ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ヤギ、ヤギ？、ウシ、種不明） ＜ハタ科、フエフキダイ科、種不明＞ ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、イワ（ウミニナ）カニモリ、マガキガイ、リュウキュウザル、シャコガイ科不明、シレナシジミ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、二枚貝印象化石、二枚貝不明
	他陶磁	1	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	4	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	1	土器	10	カムイ焼	-	円盤	2	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	24	青銅	-	その他	9					
Ⅳ層	中青磁	68	中白磁	4	中青花	8	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	29	タイ褐	4	（ニワトリ、ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ヤギ、ウシ、種不明） ＜ハタ科、アジ科、フエフキダイ科、ベラ科、種不明＞ ニシキウズ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、オニノツノガイ、イワ（ウミニナ）カニモリ、マガキガイ、スイショウガイ科不明、タカラガイ科不明、オキニシ、ウネレイシダマシ、ツノレイシ、シマベッコウバイ、ナンヨウクロミナシ、ウラキツキガイ、ヒメシャコ、リュウキュウシラトリ、マスオガイ、リュウキュウマスオ、アラスジケマン、スダレハマグリ、ハマグリの一種、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	6	初沖無	2	
	沖無	2	陶土	4	土器	47	カムイ焼	-	円盤	2	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	5	青銅	2	その他	4					
トレ６ Ⅳ層	中青磁	3	中白磁	1	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	5	タイ褐	-	（ウシ / ウマ、種不明） アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	2	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	1	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	-					
Ⅳ２～ Ⅳ３層	中青磁	30	中白磁	3	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中褐釉	8	タイ褐	1	（ニワトリ、ウマ、ウシ / ウマ、イノシシ / ブタ、ヤギ、ウシ、種不明） ＜ハタ科、アジ科、種不明＞ ヤコウガイの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ（ウミニナ）カニモリ、マガキガイ、スイショウガイ科不明、ウネレイシダマシ、シマベッコウバイ、ナンヨウクロミナシ、ウラキツキガイ、ヒメシャコ、リュウキュウシラトリ、マスオガイ、リュウキュウマスオ、アラスジケマン、スダレハマグリ、ハマグリの一種、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	3	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	1	土器	40	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	1	その他	2					

※凡例…中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付　中白磁：中国産白磁　中青花：中国産青花　中色絵：中国産色絵　中三彩：中国産三彩・中国産素三彩　中褐釉：中国産褐釉陶器
タイ褐：タイ産褐釉陶器　他陶磁：中国産瑠璃釉・中国産瑠璃釉染付・中国産翡翠釉・中国産天目・中国産褐釉染付・中国産褐釉磁器・中国産陶器・中国産無釉陶器・
タイ産鉄絵・産地不明陶磁器　西洋陶：西洋陶器　本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵　本陶：本土産陶器・薩摩焼・備前焼　近陶磁：近代磁器・近代陶器
沖施：沖縄産施釉陶器　初沖無：初期沖縄産無釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器　陶土：陶質土器　土器：タイ産半練土器・瓦質土器・土器・産地不明土器
円盤：円盤状製品　金属製：鉄製品・金属製品　骨・貝製：骨製品・貝製品　ガラス：ガラス製品　石製品：各種石製品　瓦：高麗系・明朝系（丸・平・近代大和タイプ）
青銅：青銅製品（銭貨含む）　その他：坩堝・窯道具・石材・木製品・煙管・鉄滓・勾玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・碍子・塼瓦・塼・煉瓦・近代タイル・軽石・炭　（獣骨）・＜魚骨＞・貝類については出土種を掲載。

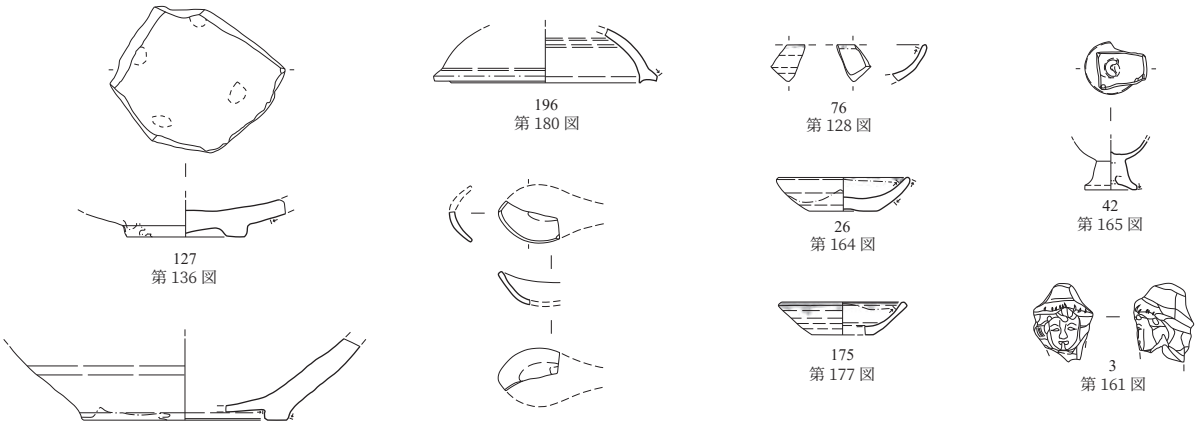


中国産青磁①

第 213 図　出土遺物一覧 1



第 214 図　出土遺物一覧２



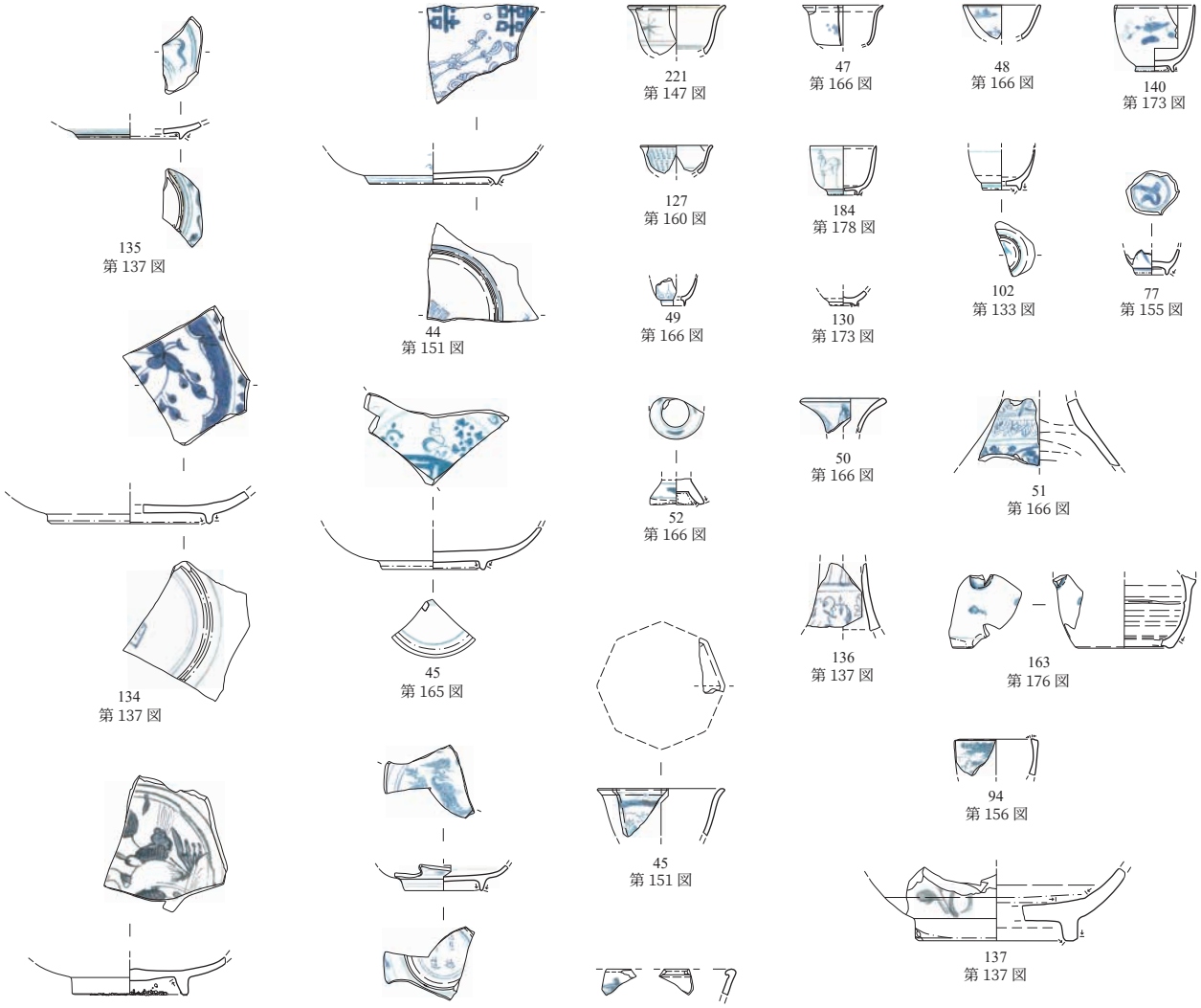
中国産白磁②

中国産青花①

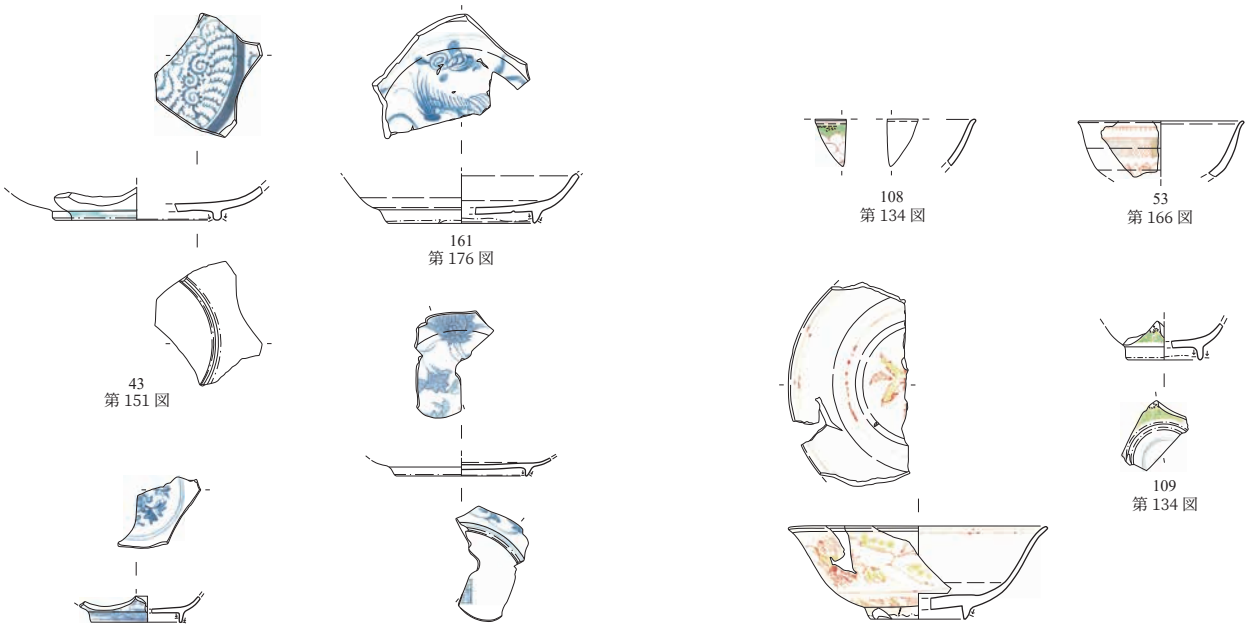
第 215 図　出土遺物一覧 3

中国産青花②

第 216 図　出土遺物一覧４



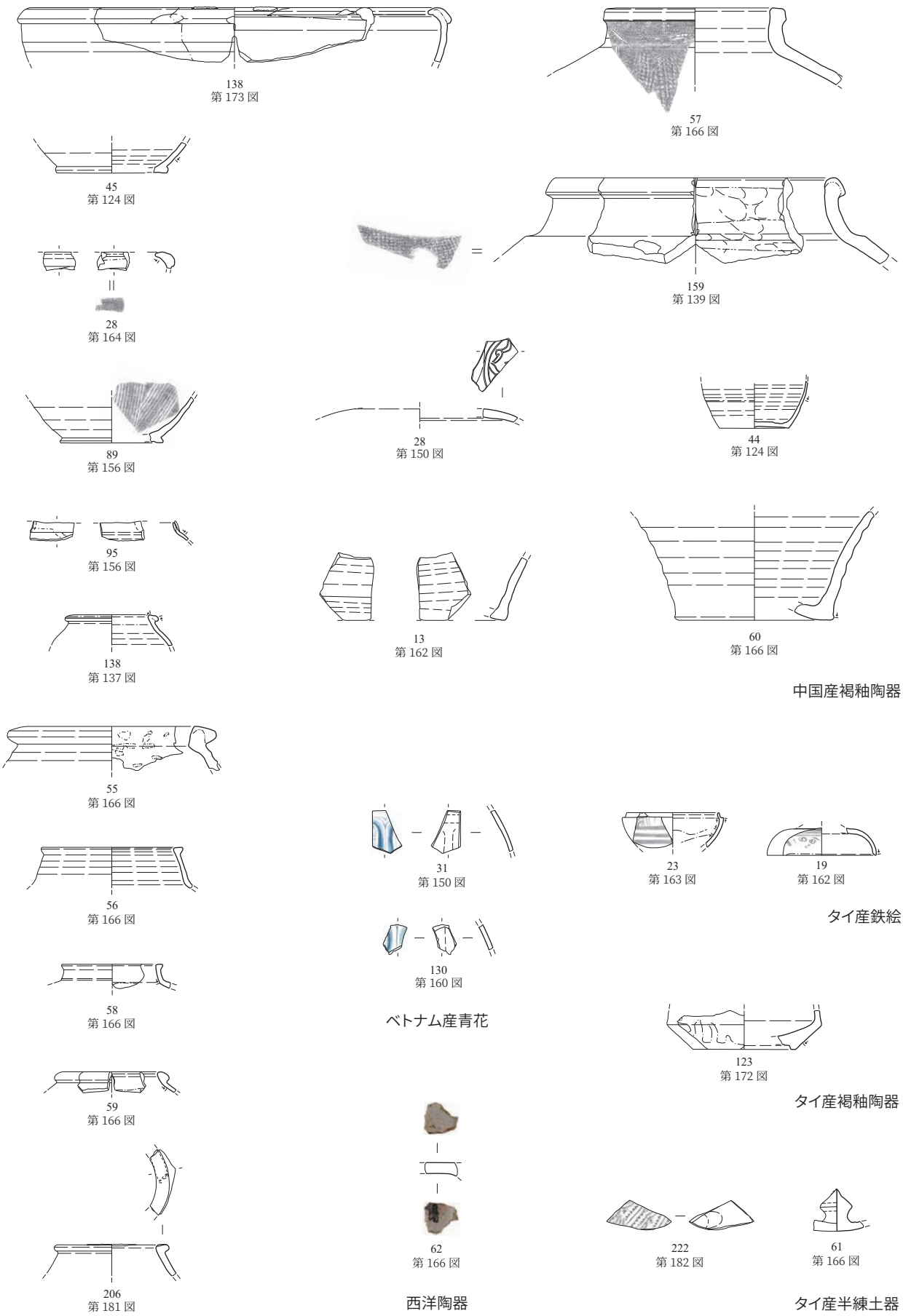
中国産青花③



中国産色絵①

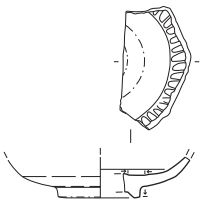
第 217 図　出土遺物一覧 5

第 218 図　出土遺物一覧６

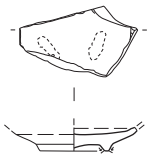


第 219 図　出土遺物一覧 7

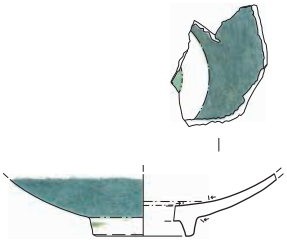
第 220 図　出土遺物一覧８



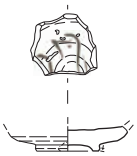
146
第 138 図



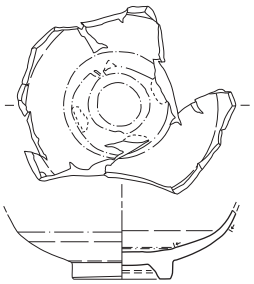
9
第 148 図



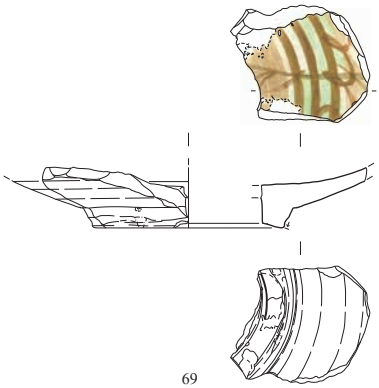
97
第 156 図



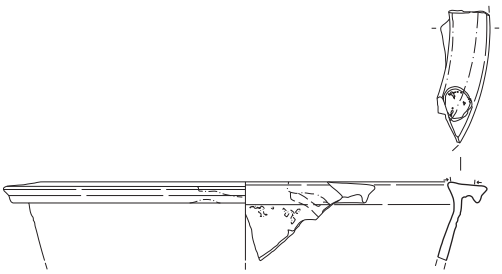
98
第 156 図



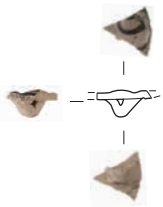
124
第 172 図



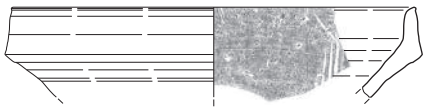
69
第 167 図



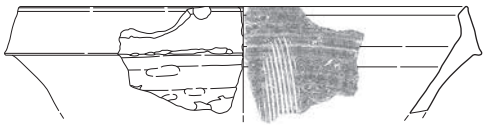
70
第 167 図



54
第 126 図

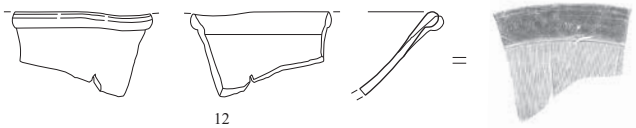


71
第 167 図

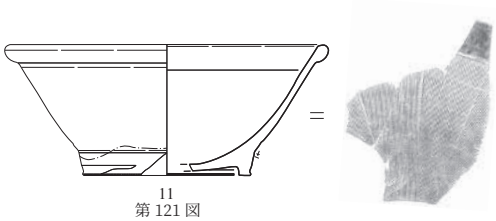


190
第 179 図

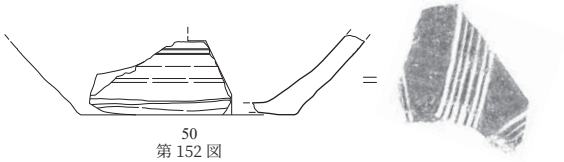
本土産陶器②



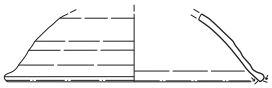
12
第 122 図



11
第 121 図



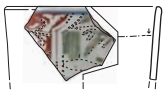
50
第 152 図



169
第 177 図

147
第 138 図

5
第 121 図

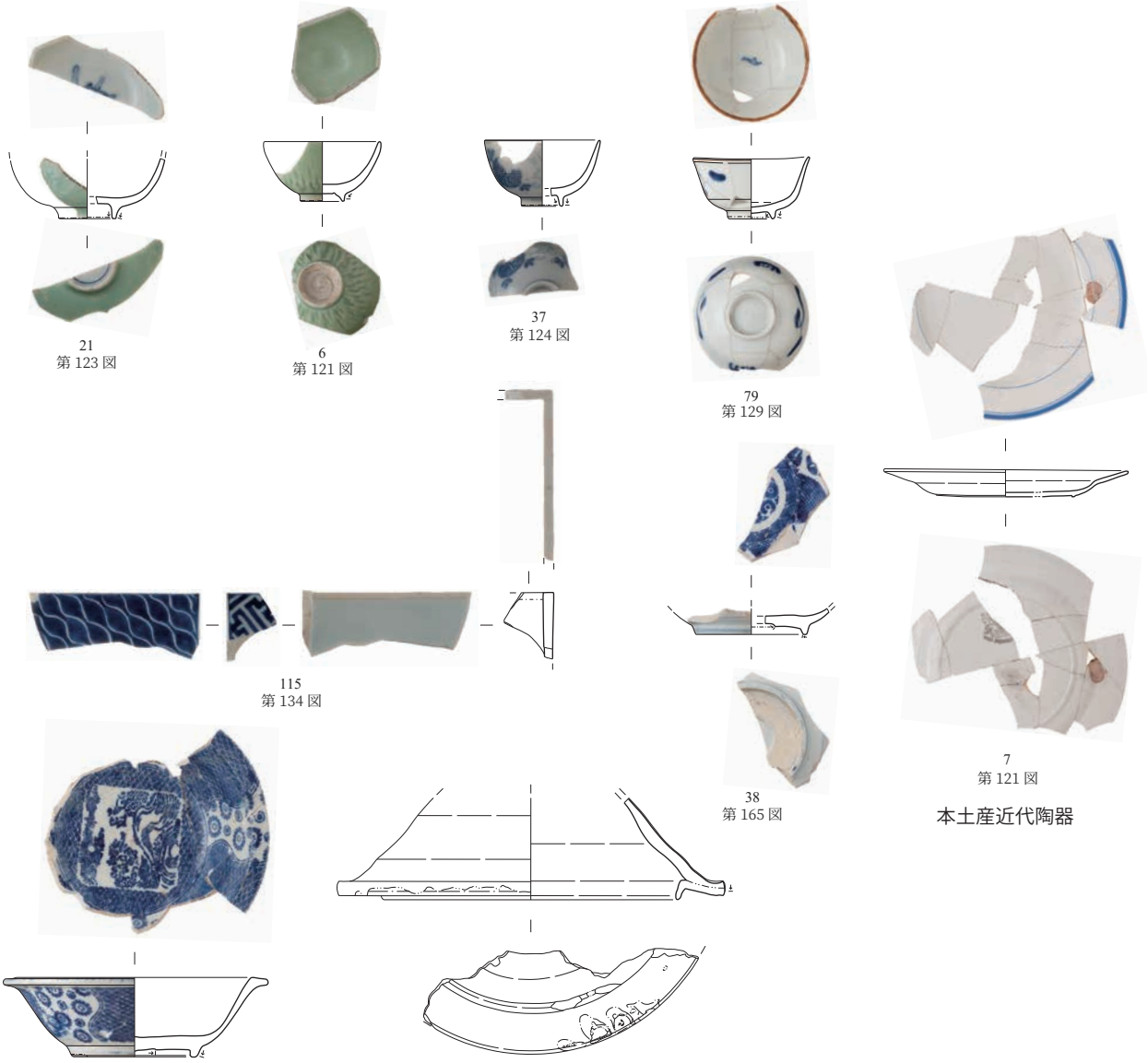


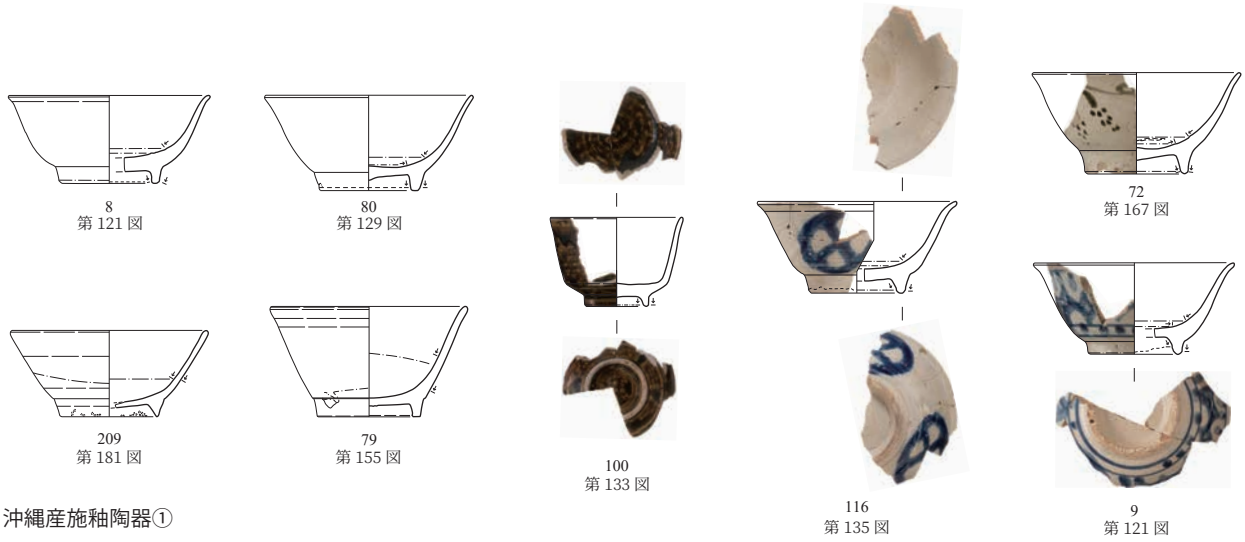
35
第 124 図

114
第 134 図

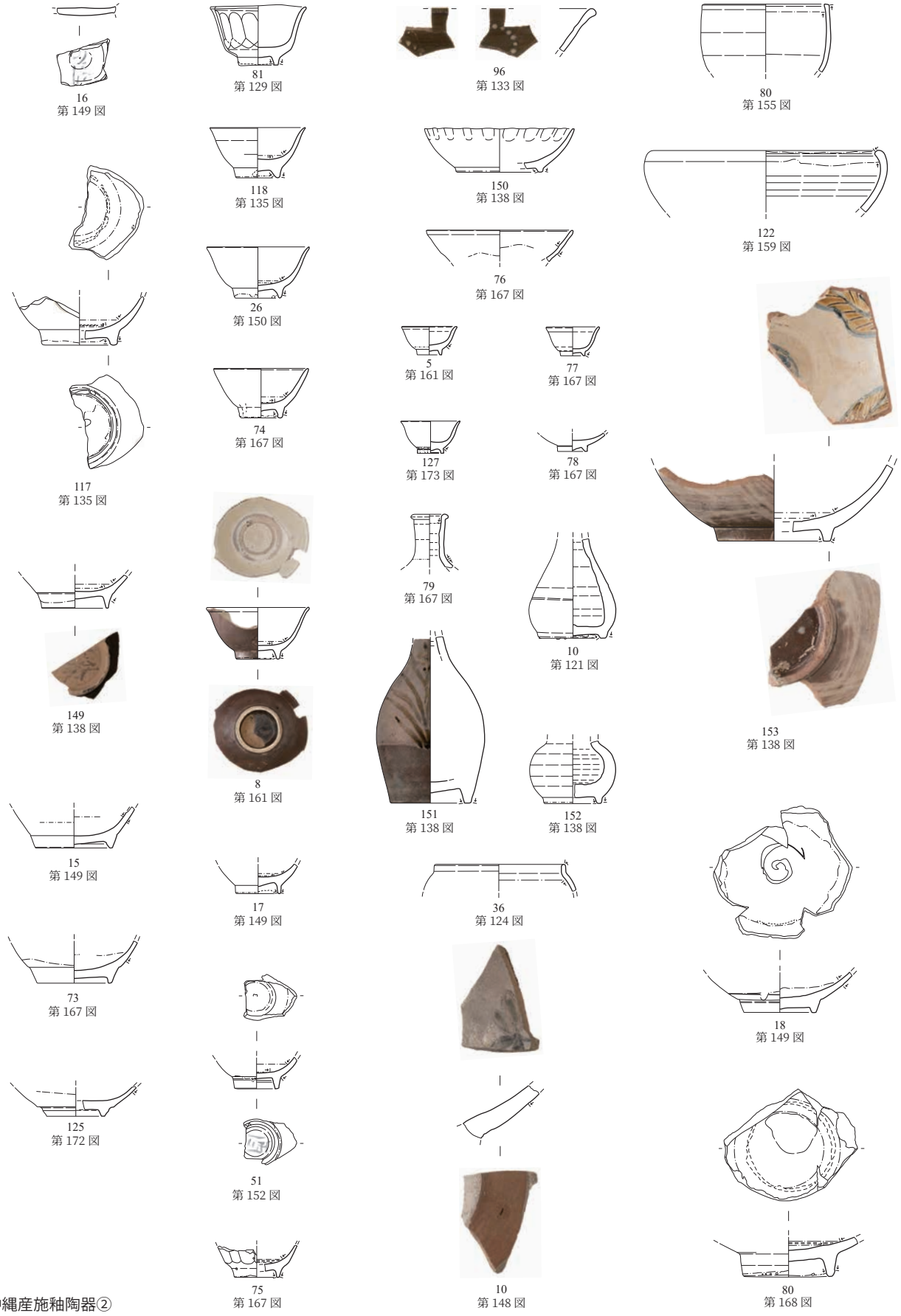
本土産近代磁器①

第 221 図　出土遺物一覧 9



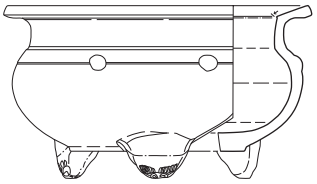


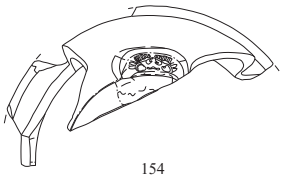
第 222 図　出土遺物一覧 10



沖縄産施釉陶器②

第 223 図　出土遺物一覧 11



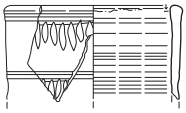


154
第 139 図

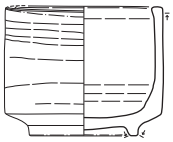
81
第 155 図

9
第 161 図

22
第 123 図

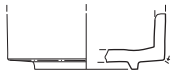


82
第 155 図

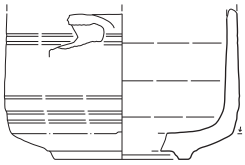


82
第 129 図

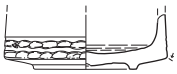
99
第 157 図



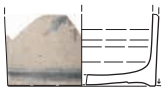
119
第 135 図



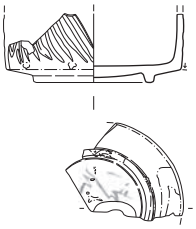
155
第 139 図



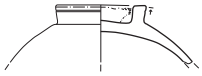
52
第 152 図



123
第 159 図

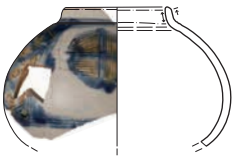


81
第 168 図



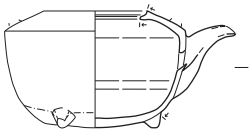
157
第 139 図

156
第 139 図

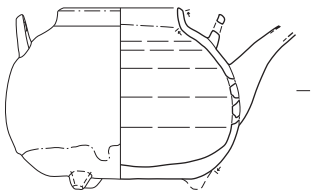


13
第 122 図

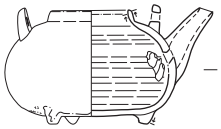
23
第 123 図



83
第 129 図

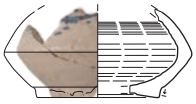


158
第 139 図

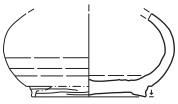


54
第 152 図

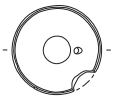
83
第 155 図



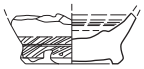
14
第 122 図



84
第 129 図



53
第 152 図



212
第 182 図

沖縄産施釉陶器③

第 224 図　出土遺物一覧 12

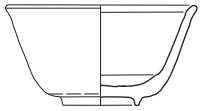
15
第 122 図

136
第 173 図

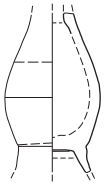
82
第 168 図

沖縄産施釉陶器④

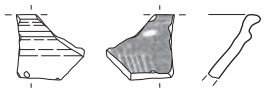
112
第 158 図



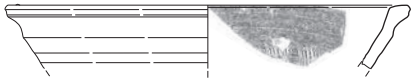
48
第 125 図



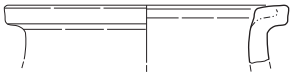
83
第 168 図



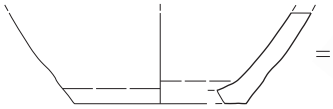
150
第 174 図



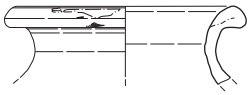
84
第 168 図



19
第 149 図

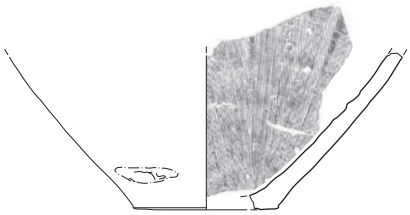


6
第 148 図

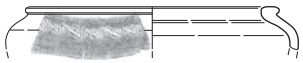


106
第 157 図

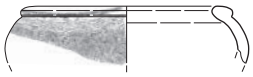
10
第 161 図



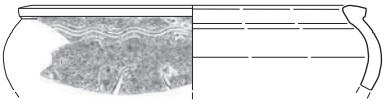
105
第 157 図



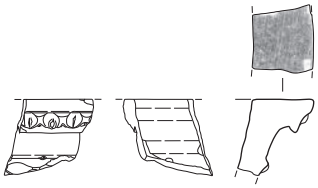
160
第 140 図



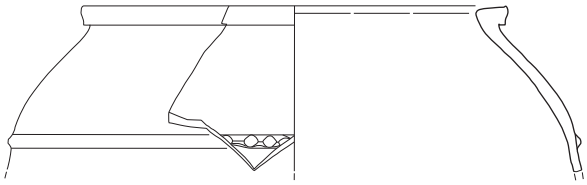
11
第 161 図



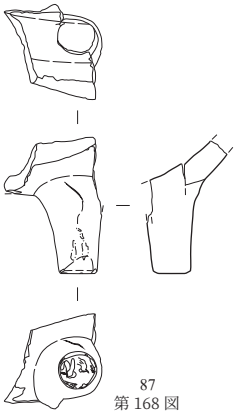
85
第 168 図



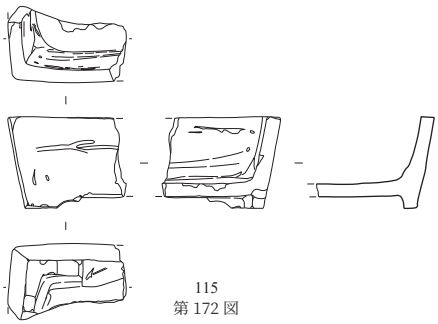
86
第 168 図



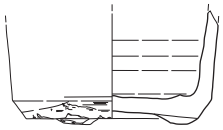
55
第 152 図



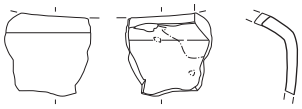
87
第 168 図



115
第 172 図



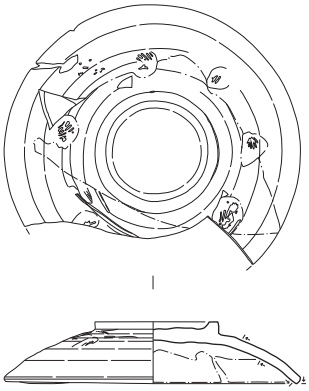
88
第 168 図



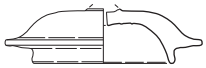
74
第 128 図

初期沖縄産無釉陶器①

第 225 図　出土遺物一覧 13

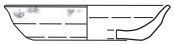

212
第 145 図

20
第 149 図


56
第 152 図

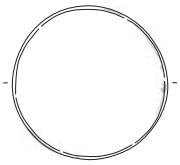
116
第 172 図

84
第 155 図

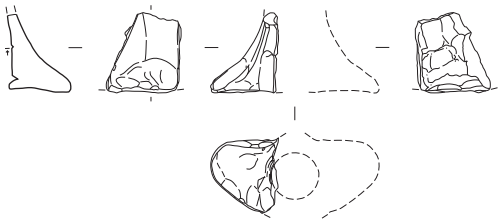

49
第 125 図

55
第 126 図

68
第 128 図


61
第 127 図

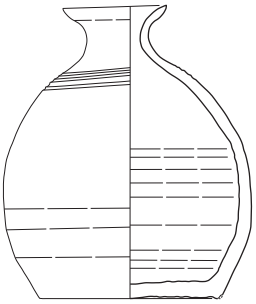
89
第 168 図

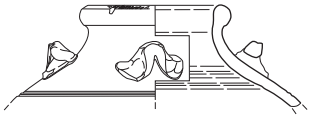

12
第 162 図

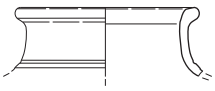
初期沖縄産無釉陶器②

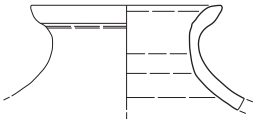
32
第 123 図

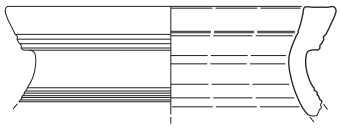
161
第 140 図

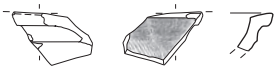

85
第 129 図

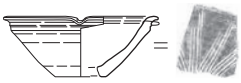

16
第 122 図

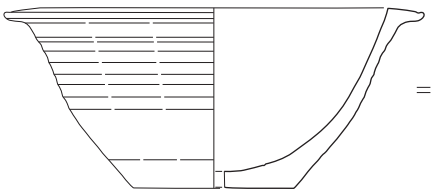

41
第 124 図

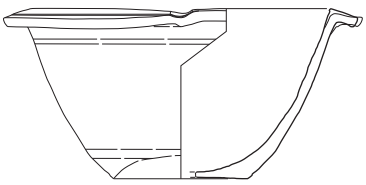

162
第 140 図

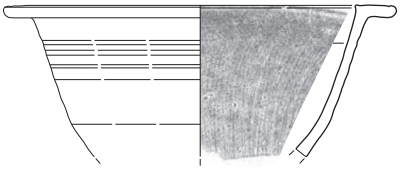

90
第 168 図


24
第 123 図


104
第 157 図

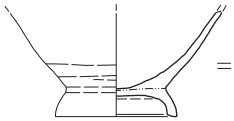

120
第 135 図


21
第 149 図

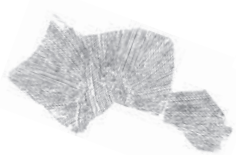

91
第 169 図

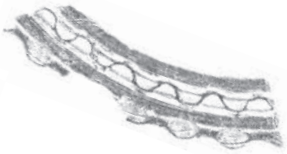
沖縄産無釉陶器①

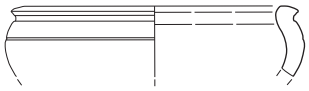
第 226 図　出土遺物一覧 14



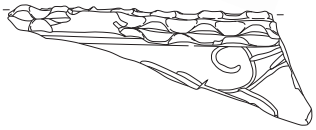
22
第 149 図

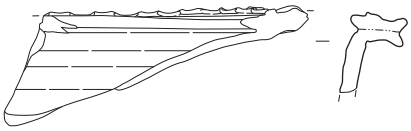




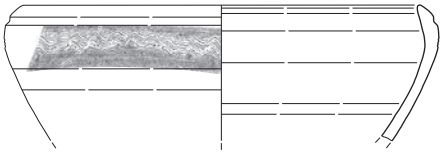


17
第 122 図



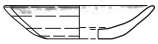


163
第 140 図

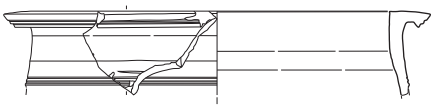


92
第 169 図

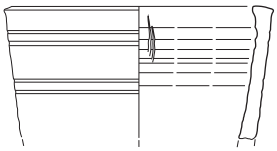
202
第 144 図



23
第 149 図

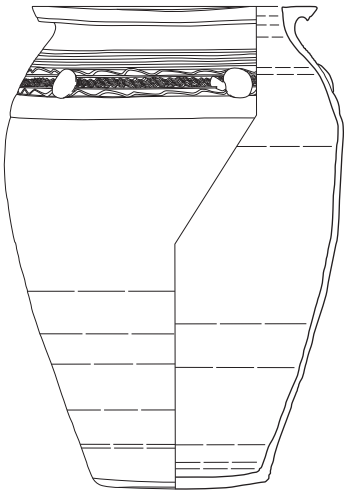


93
第 169 図

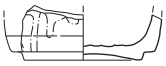


164
第 140 図

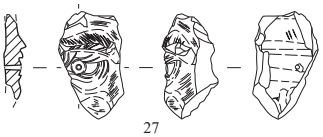
100
第 157 図



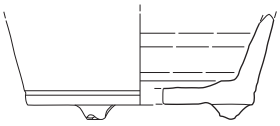
57
第 153 図



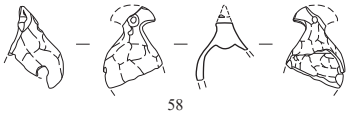
165
第 140 図



27
第 150 図

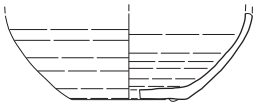


166
第 140 図

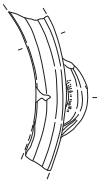


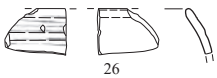
58
第 153 図

沖縄産無釉陶器②

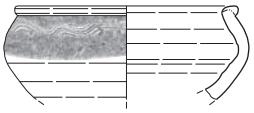


132
第 173 図

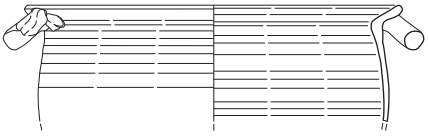




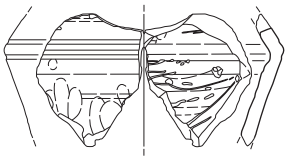
26
第 123 図



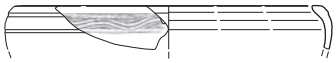
94
第 169 図



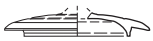
95
第 169 図



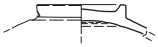
113
第 158 図



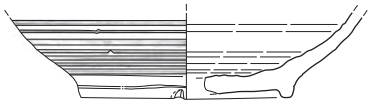
137
第 173 図



86
第 129 図



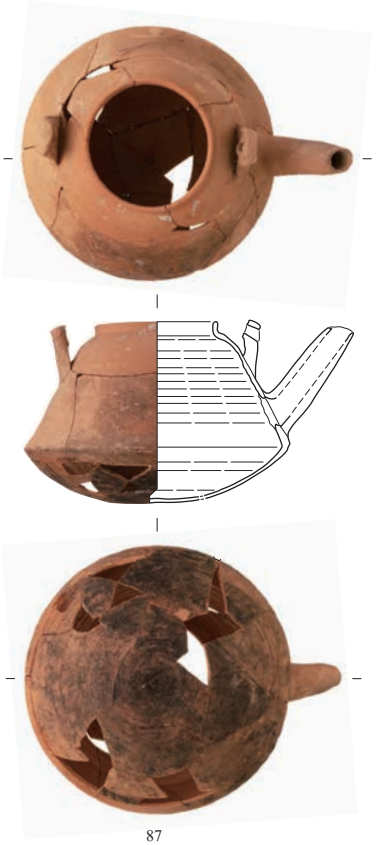
135
第 173 図



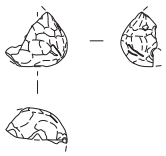
24
第 149 図

陶質土器①

第 227 図　出土遺物一覧 15

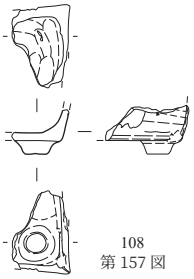


87
第 130 図

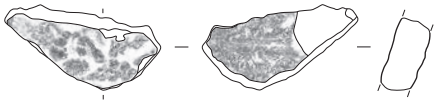


2
第 161 図

陶質土器②

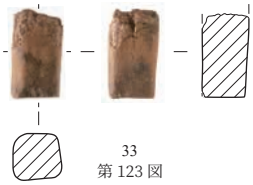


108
第 157 図

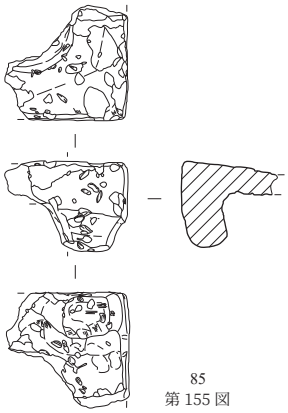


170
第 177 図

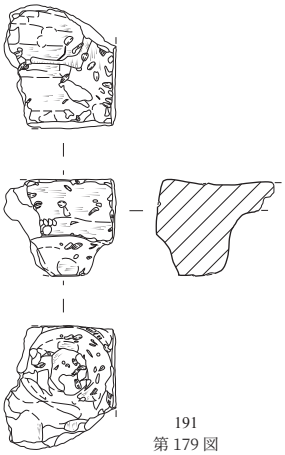
88
第 130 図



33
第 123 図



85
第 155 図



191
第 179 図

瓦質土器

101
第 157 図

157
第 176 図

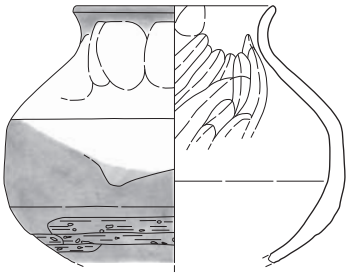
215
第 182 図

219
第 182 図

198
第 180 図

116
第 158 図

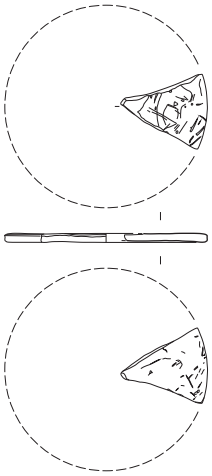
220
第 182 図



24
第 163 図

土器

第 228 図　出土遺物一覧 16



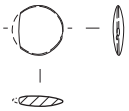
32
第 164 図

産地不明土器

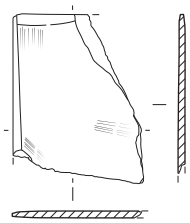
167
第 140 図

坩堝

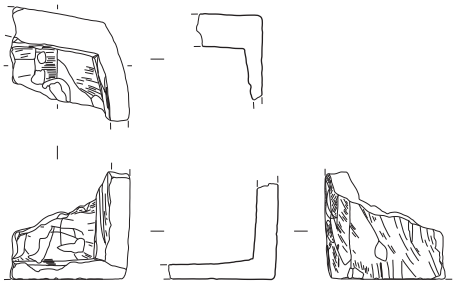
59
第 153 図



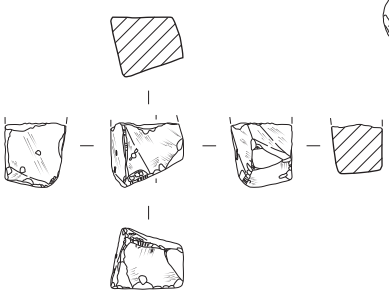
169
第 141 図



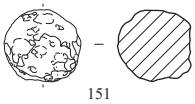
60
第 153 図



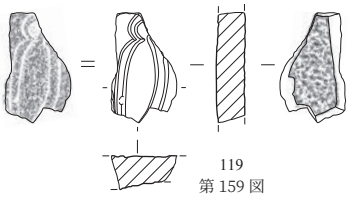
20
第 163 図



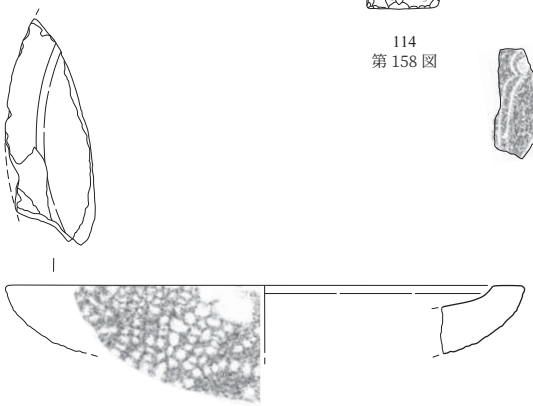
114
第 158 図



151
第 174 図



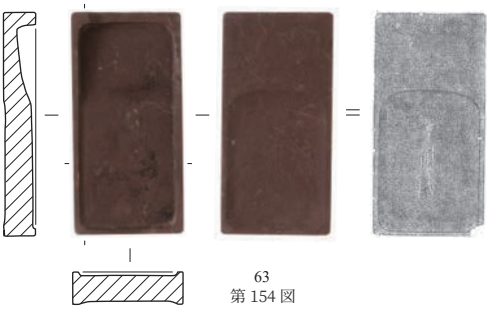
119
第 159 図



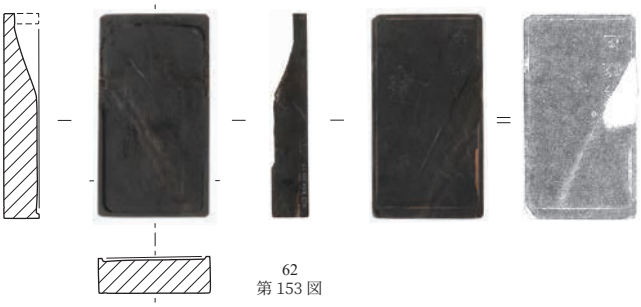
97
第 169 図

96
第 169 図

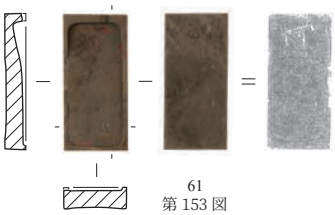
168
第 140 図



63
第 154 図



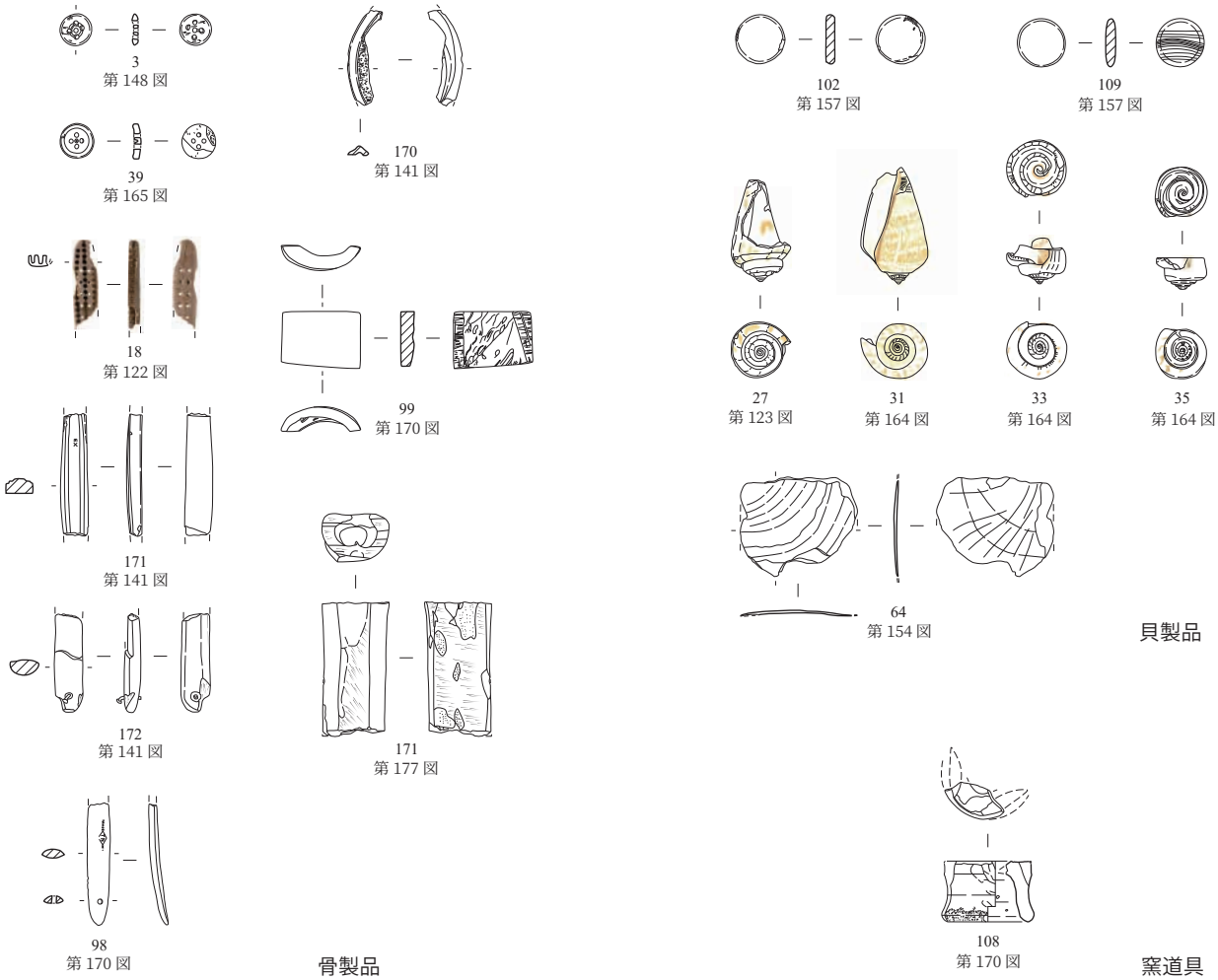
62
第 153 図

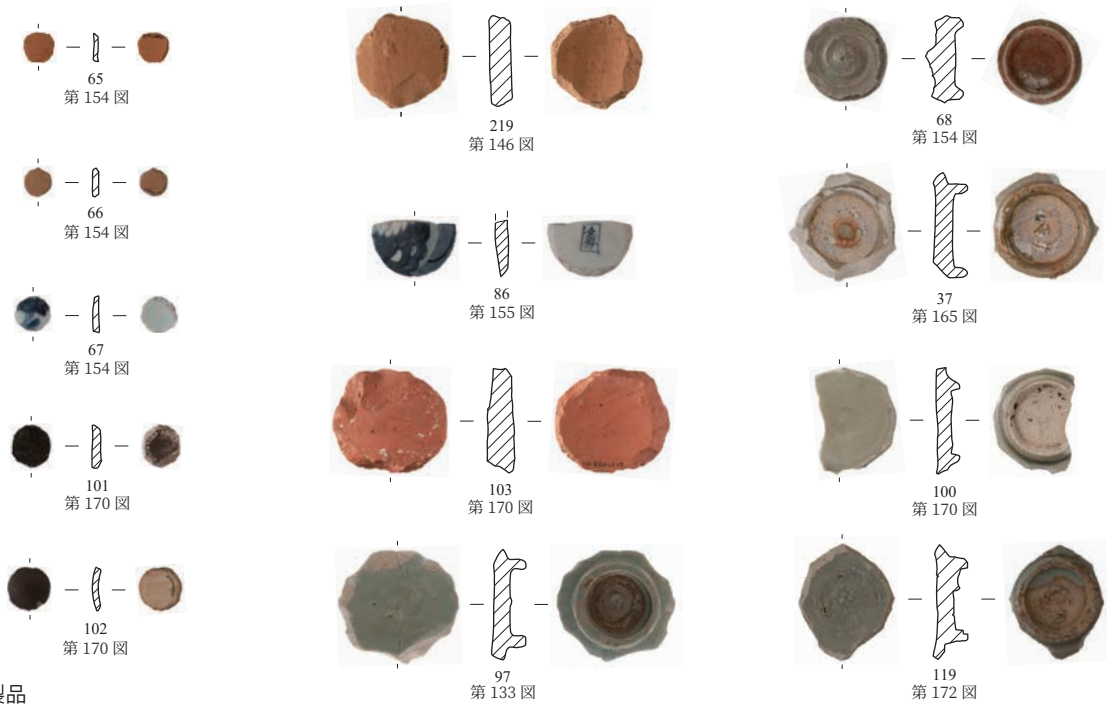


61
第 153 図

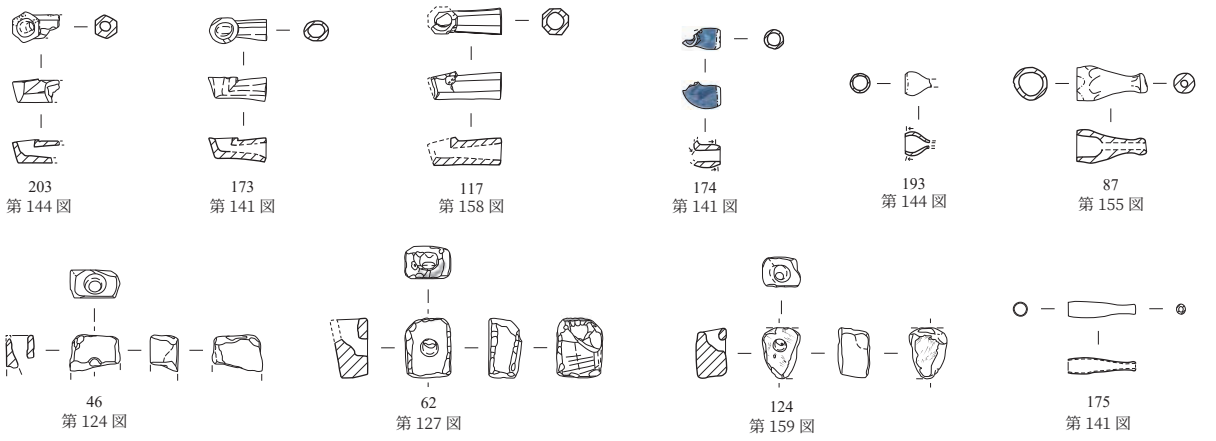
石製品

第 229 図　出土遺物一覧 17

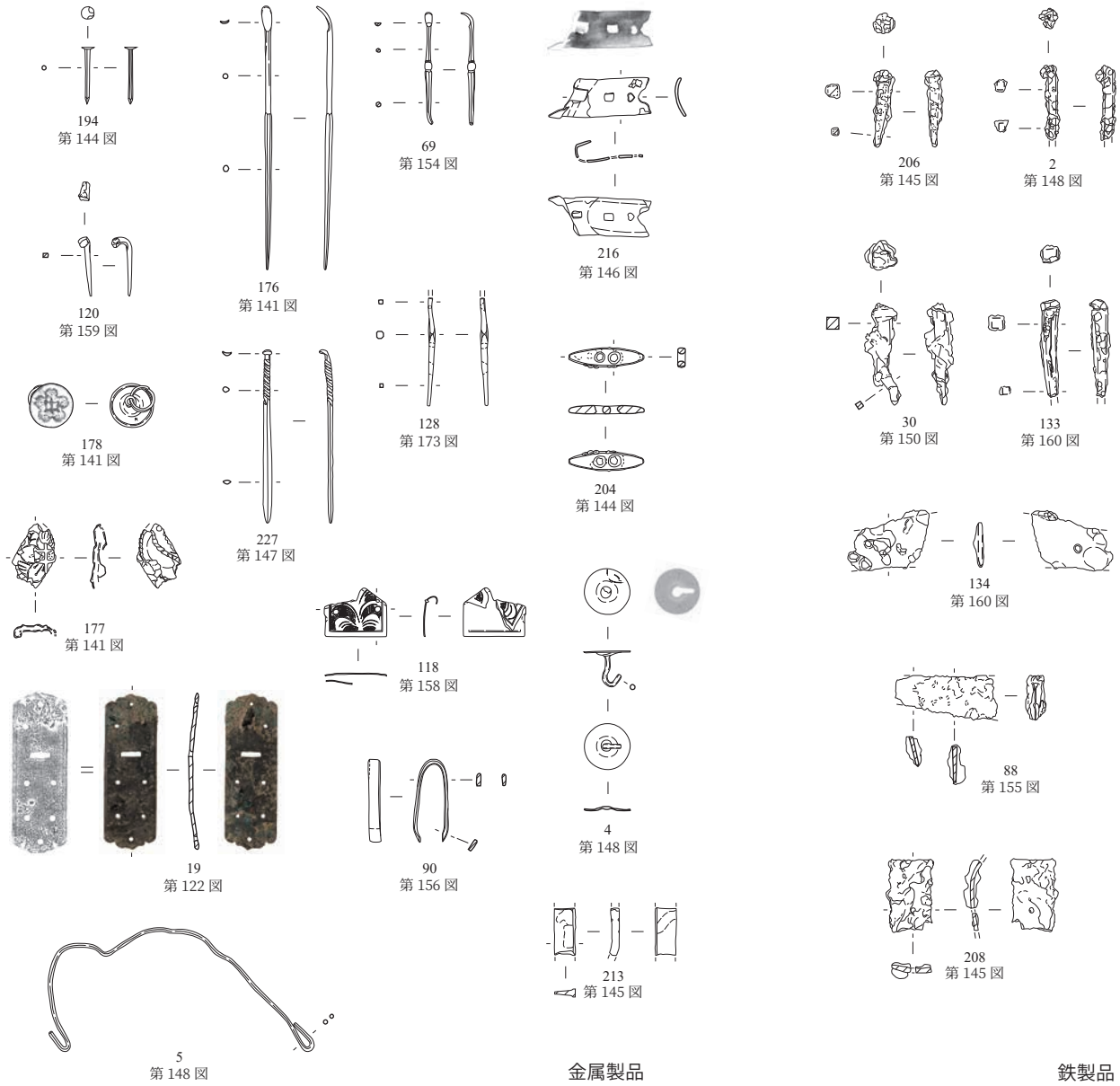




第 230 図　出土遺物一覧 18

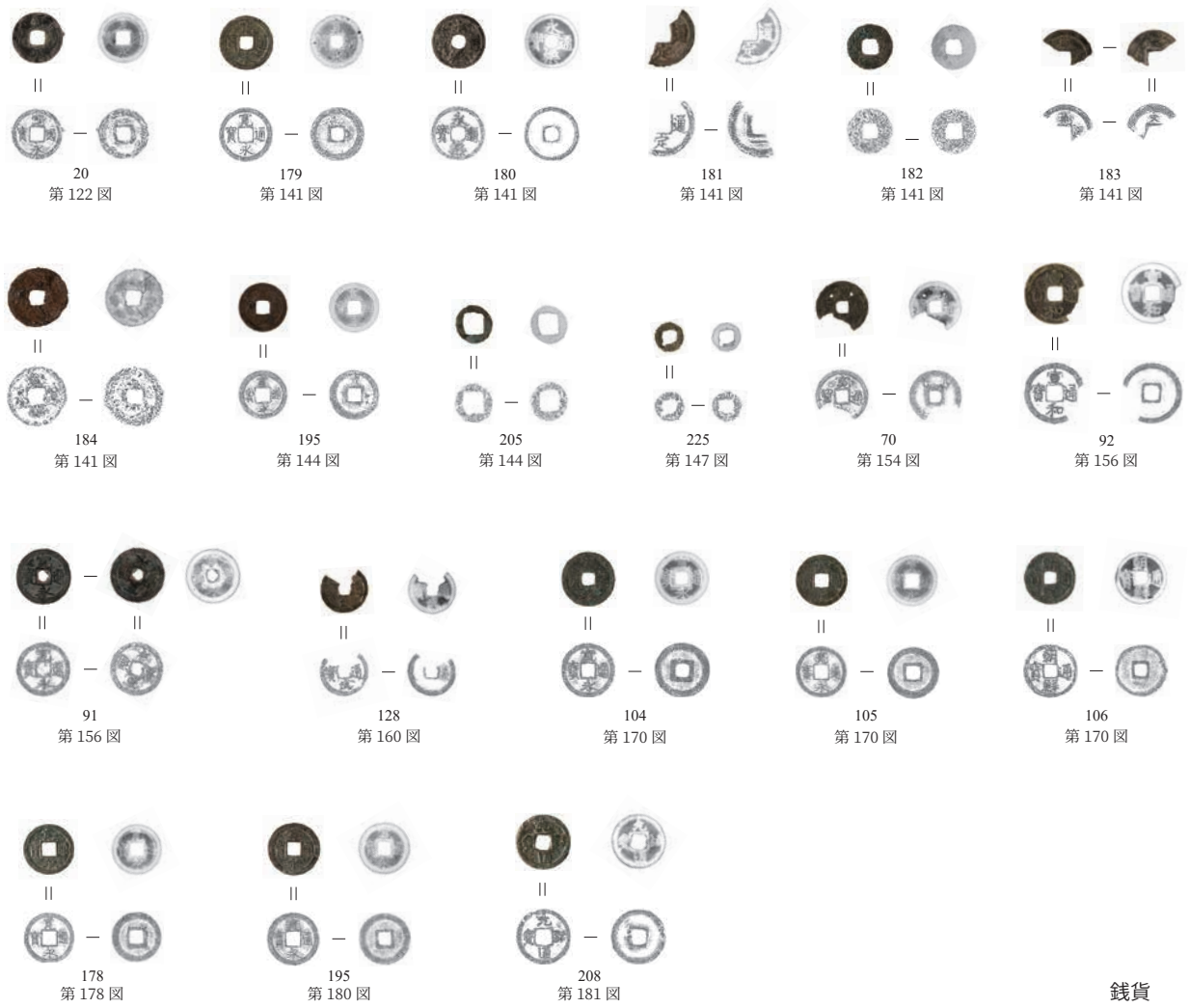


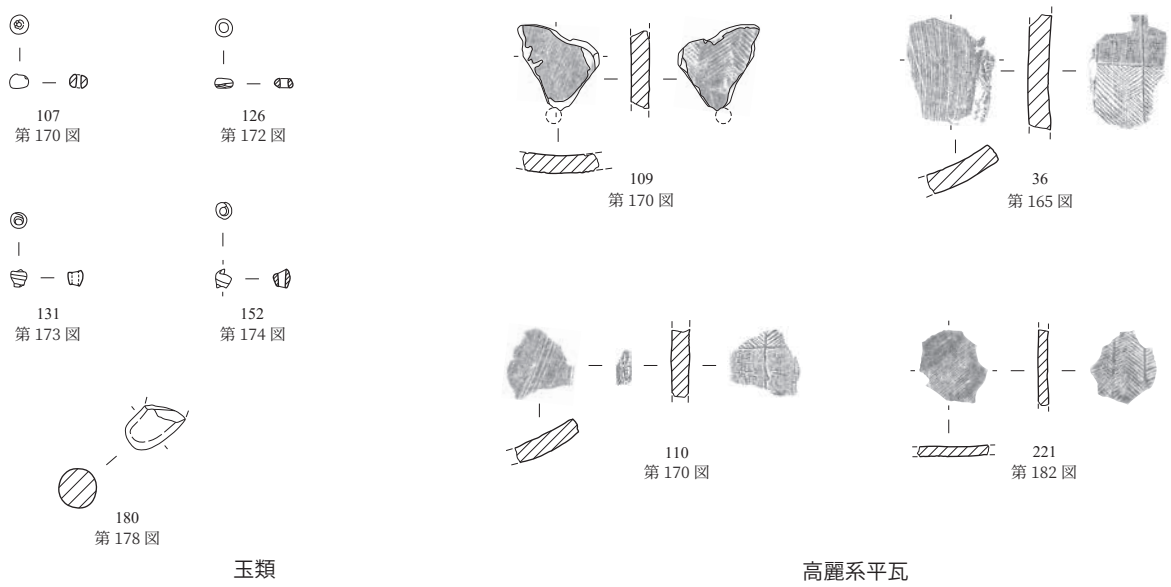
煙管



金属製品　　鉄製品

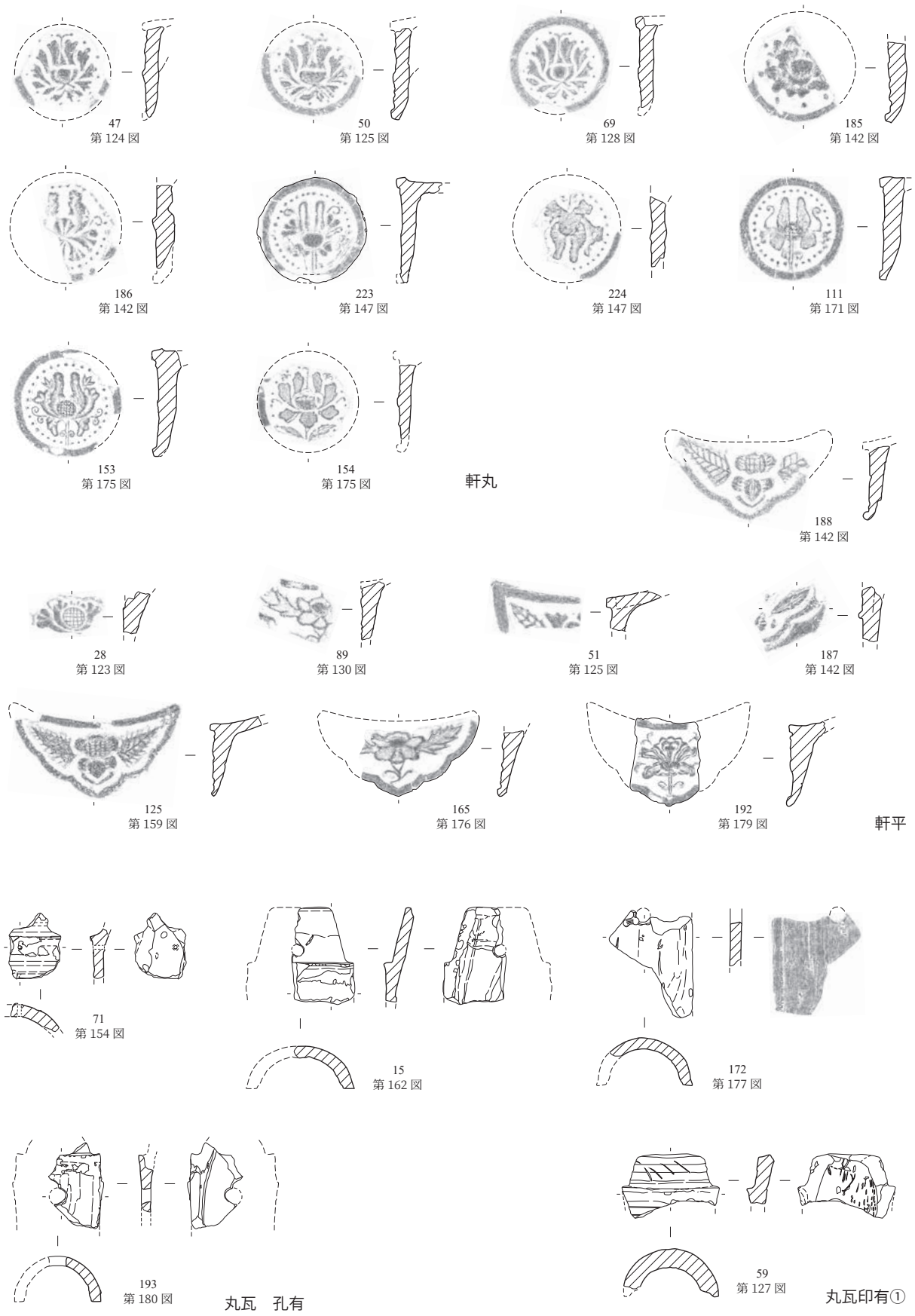
第 231 図　出土遺物一覧 19





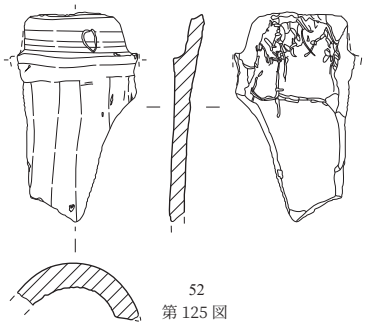
瓦1

第 232 図　出土遺物一覧 20

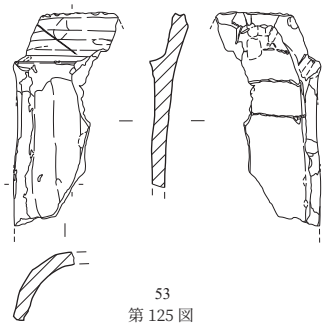


瓦2

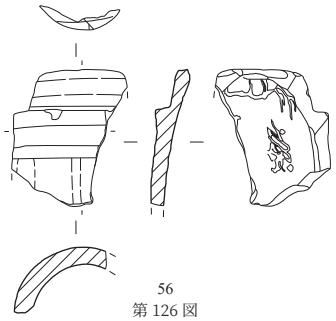
第 233 図　出土遺物一覧 21



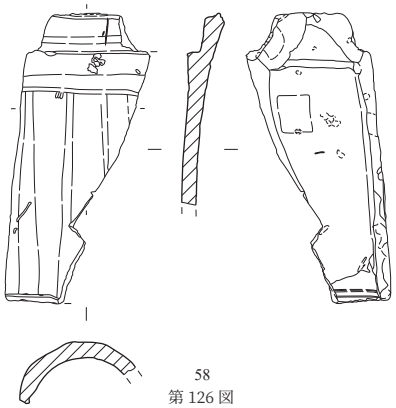
52
第 125 図



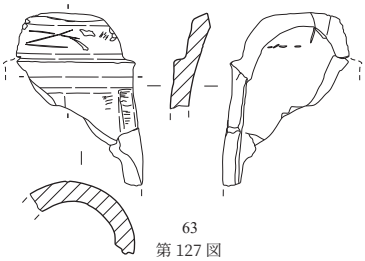
53
第 125 図



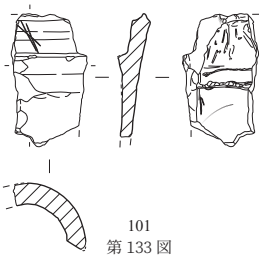
56
第 126 図



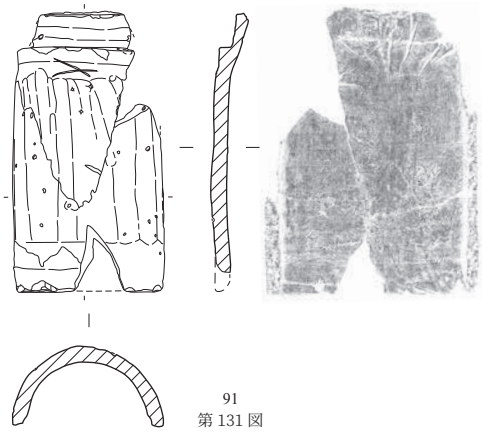
58
第 126 図



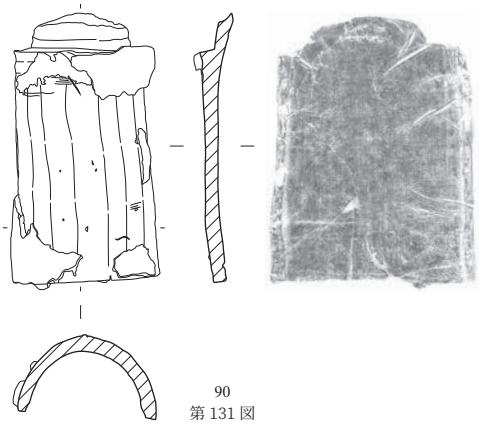
63
第 127 図



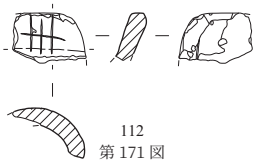
101
第 133 図



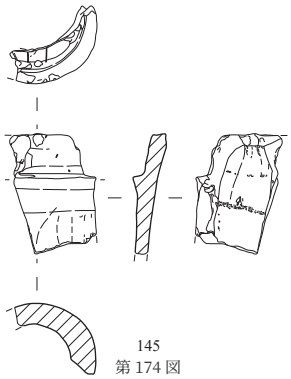
91
第 131 図



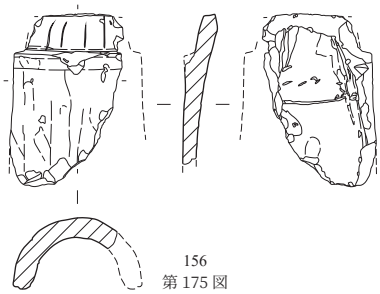
90
第 131 図



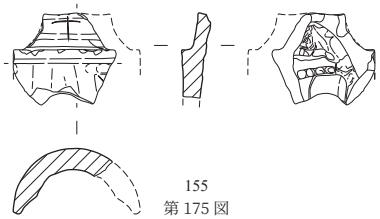
112
第 171 図



145
第 174 図



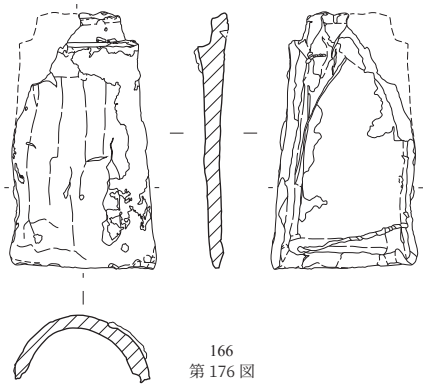
156
第 175 図



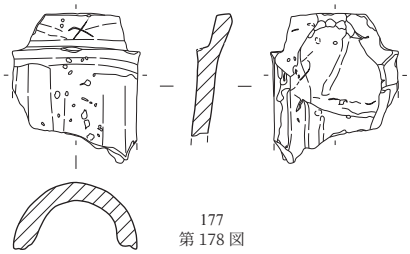
155
第 175 図

丸瓦印有②　　瓦３

第 234 図　出土遺物一覧 22

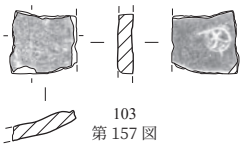


166
第 176 図

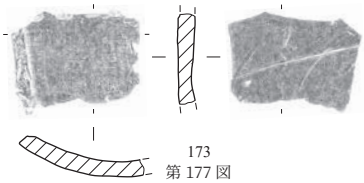


177
第 178 図

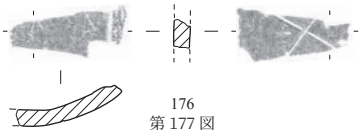
丸瓦印有③



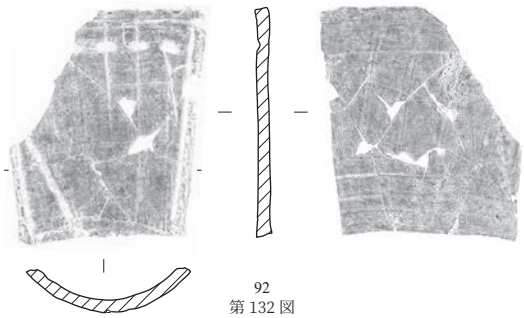
103
第 157 図



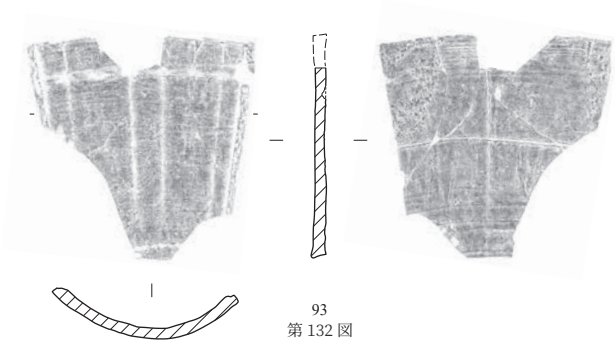
173
第 177 図



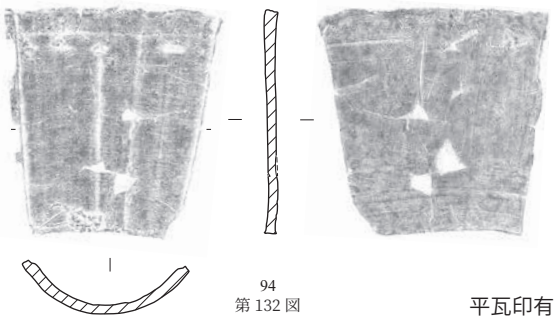
176
第 177 図



92
第 132 図

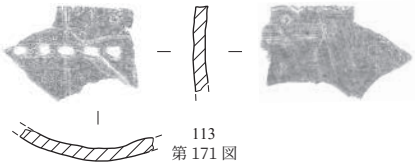


93
第 132 図



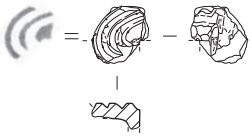
94
第 132 図

平瓦印有

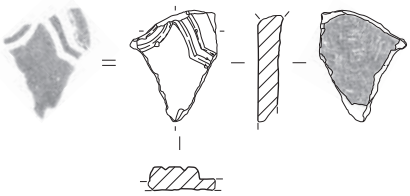


113
第 171 図

平瓦　硬質陶器質



189
第 143 図

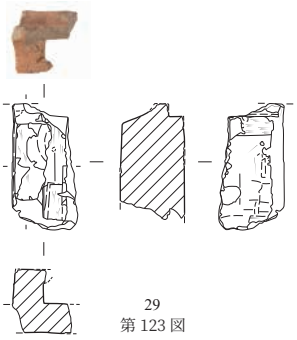


190
第 143 図

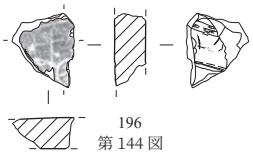
大和瓦

瓦4

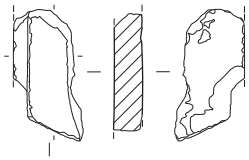
第 235 図　出土遺物一覧 23



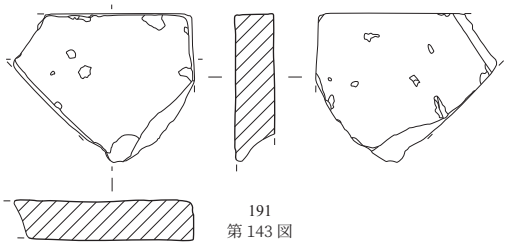
29
第 123 図



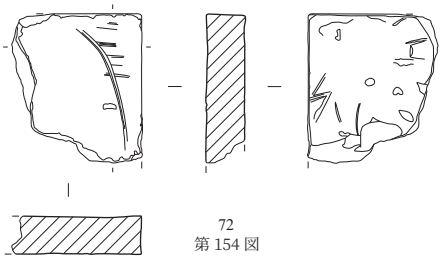
196
第 144 図



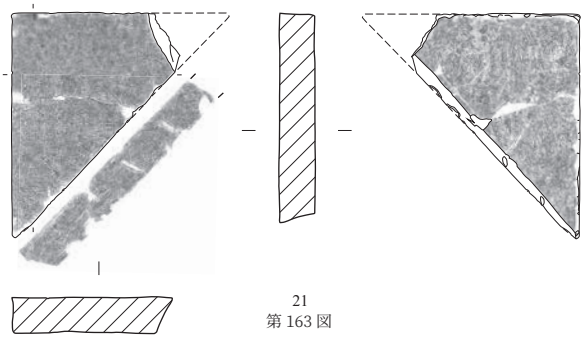
197
第 144 図



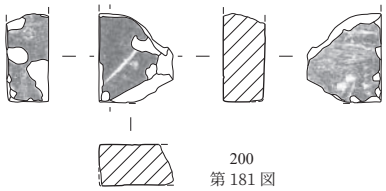
191
第 143 図



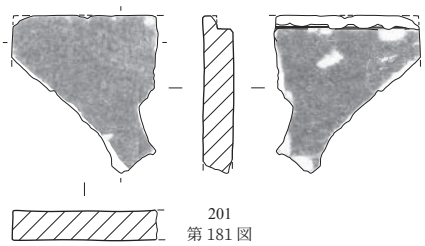
72
第 154 図



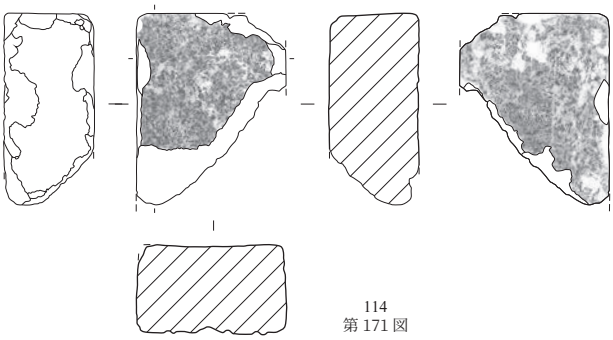
21
第 163 図



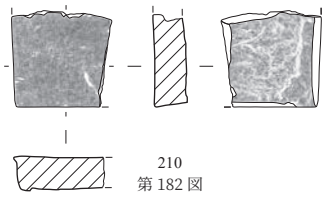
200
第 181 図



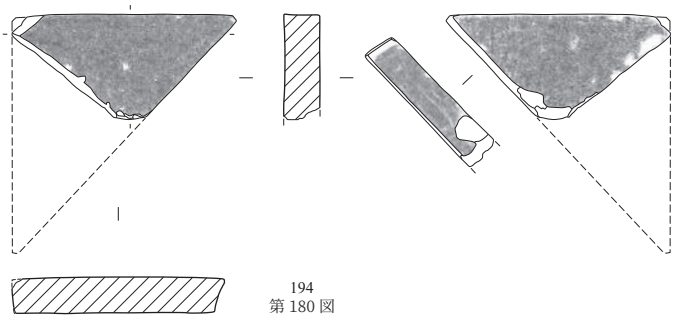
201
第 181 図



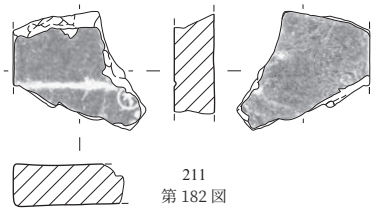
114
第 171 図



210
第 182 図



194
第 180 図



211
第 182 図

塼瓦

第 236 図　出土遺物一覧 24

引用・参考文献

愛知県陶磁器美術館・九州国立博物館　2014 『桃山・江戸の華やき 古唐津・古武雄』

新垣力　2003 「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要 沖縄埋文研究』1　沖縄県立埋蔵文化財センター

2013 「17 世紀前半～中葉の琉球陶器について－「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響－」『鹿児島考古』第 43 号 鹿児島考古学会

池田榮史・津波古聡　1991 「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館紀要』第 17 号 沖縄県立博物館

池谷望子・内田晶子・高瀬恭子　2005 『朝鮮王朝実録 琉球史料集成【訳注篇】』榕樹書林

伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 編纂　1972 『琉球史料叢書』第三巻(琉球国旧記) 東京美術

上江洲均　1973 『沖縄の民具』考古民俗叢書〈12〉慶友社

上原静　2011 「琉球の塼と煉瓦」『南島考古』No.30 沖縄考古学会

2013 『琉球古瓦の研究』榕樹書林

上原静・仲宗根求・小原裕也・伊波勝美・上門大悟　2011 「喜名古窯跡(瓦編)」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第 35 号

大分市歴史資料館　2003 『平成 15 年度秋季(第 22 回)特別展 豊後府内 南蛮の彩り～南蛮の貿易陶磁器～』

沖縄県教育庁文化課(編)　1983 『重新校正　中山世鑑 巻五』沖縄県教育委員会

沖縄県教育委員会　1993 『湧田古窯跡(Ⅰ)－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査』沖縄県文化財調査報告書第 111 集

1994 『カイジ浜貝塚－竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』前同第 115 集

1998 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』前同第 132 集

2008 『沖縄の金工品関係資料調査報告書』前同第 146 集

2011 『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』前同第 149 集

沖縄県立埋蔵文化財センター　2001 『首里城跡－下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 3 集

2007 『渡地村跡』前同第 46 集

2010a 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』前同第 53 集

2010b 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)－』前同第 54 集

2011 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)－』前同第 58 集

2012a 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)－平成 6 年度調査の遺物編(1)－』前同第 62 集

2012b 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』前同第 63 集

2013 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』前同第 69 集

2016 『首里城跡－銭蔵東地区発掘調査報告書－』前同第 80 集

2017a 『東村跡』前同第 92 集

2017b 『中城御殿跡(首里高校内)－首里高校校舎改築に伴う発掘調査－』前同第 93 集

2018 『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(6)－』前同第 95 集

2019 『神山古集落－普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書－』前同第 99 集

小野正敏　1982 「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

勝連町教育委員会　1990『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－(1)』勝連町の文化財第 11 集

河西大地　2018 『琉球ガラスの年代物コレクション ～沖縄ガラス工芸図鑑～』白天草木庵

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 10 周年記念 九州近世陶磁学会

球陽研究会(編)　1974 『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成 5 角川書店

金武町誌編纂委員会　1983 『金武町誌』金武町役場

久手堅憲夫　2000 『首里の地名－その由来と縁起－』南島文化叢書 22 第一書房

熊本県教育委員会　1997 『浜の館＝阿蘇大宮司居館跡＝』熊本県文化財調査報告書 21 号

斎藤晴子・井上暁子　2016 『明治、大正、昭和のレトロでかわいい器と生活雑貨 美しい和のガラス』誠文堂新光社

佐賀県立九州陶磁文化館　1998 『平成 10 年企画展 沖縄のやきもの－南海からの香り－』

桜井準也　2019 『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房

首里高等学校　2020 『写真で辿る 養秀百四十年』国学創建二百二十年 沖縄県立第一中学校・首里高等学校 創立百四十周年記念事業実行委員会(編)

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志　2007 「沖縄における貿易陶磁研究－ 14 ～ 16 世紀を中心に－」『紀要 沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター

高橋誠一　2000 「「首里古地図」と首里城下町の復原」『東西学術研究所紀要』第 33 巻 関西大学東西学術研究所

高良倉吉　1996 「琉球王国成立期の首里城に関する覚書」『前近代における南西諸島と九州－その関係史的研究』多賀出版株式会社

都築晶子　2005 「龍のひそむ島－近世琉球の風水－」『沖縄県史各論編第４巻 近世』沖縄県教育委員会

坪井利宏　1977 『図鑑 瓦屋根』理工学社

土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター　2008 『元屋敷跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター

當眞嗣一　1985 「第４章　交通遺跡と金石文　3　石畳道」『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅱ－国頭・中頭方西海道(Ⅰ)・弁ヶ嶽参詣道－』沖縄県教育委員会文化課編

永井久美男　1996 『日本出土銭総覧 1996 年版』兵庫埋蔵銭調査会

長崎市教育委員会　2001 『国指定史跡 出島和蘭商館跡－護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書－』

中里太郎右衛門　1989 『唐津』日本陶磁大系第 13 巻 平凡社

今帰仁村教育委員会　2005 『今帰仁城周辺遺跡Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第 20 集

那覇市教育委員会　1991 『御細工所跡－城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第 18 集

1992 『壺屋古窯跡群Ⅰ－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査－』前同第 23 集

2005 『首里旧真和志村跡 個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査』前同第 68 集

2010 『那覇市内遺跡Ⅲ－首里金城村跡・首里旧真和志村跡－』前同第 82 集

2012 『渡地村跡－臨港道路那覇１号線整備事業に伴う緊急発掘調査－』前同第 91 集

新島奈津子　2005 「古琉球における那覇港湾機能－国の港としての那覇港－」『専修史学』第 39 号 専修大学

波佐見町教育委員会　2013 『くらわんか藤田コレクション－寄贈記念図録－』

東恩納寛惇　1950 『南島風土記－沖縄・奄美大島地名辞典－』注釈 南島文化史料研究室

森達也　2014 「清朝輸出陶瓷の生産地について 巡回展「魅惑の清朝陶磁」に寄せて」『陶説』第 734 号 公益社団法人日本陶磁協会

森毅　1995 「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に－」『ヒストリア』第 149 号 大阪歴史学会

森勉　1982 「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

Angela Von Den Driesch　1976 "A Guide to Measurement of Animals Bones From Archeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of Aecheology and Ethnology. Harvard University

1　Ⅲ区東 SA3001 内の砲弾破裂痕 検出状況（西から）

2　Ⅲ区西 SA3001 北側・SA3009 検出状況（東から）

3　Ⅲ区東 SA3001 設置されたシャコガイ（南から）

4　Ⅲ区東 SD3003 半截状況（北から）

5　Ⅲ区西 完掘状況（東から）

6　Ⅲ区西 完掘状況（西から）

7　Ⅲ区西 SM3001 検出層序（北から）

8　Ⅲ区西 SM3001 半截状況（北から）

図版１　遺構１

1　Ⅲ区西 SM3002 半截状況（北から）

2　Ⅲ区西 SM3002 3 層 遺物出土状況（北から）

3　Ⅲ区西 SM3003 半截状況（東から）

4　Ⅳ区 完掘状況（西から）

5　Ⅳ区 SX4001 完掘状況（南西から）

6　Ⅳ区 SD4001 完掘状況（北西から）

7　Ⅳ区 SA4001 立面（北西から）

8　Ⅳ区 SA4001 裏込め検出状況（東から）

図版 2　遺構 2

1　Ⅳ区 SA4003 検出状況（北西から）

2　Ⅳ区 SA4002 検出層序（北西から）

3　Ⅳ区 SA4002 立面（北から）

4　Ⅳ区 SM4002 半截状況（西から）

5　Ⅳ区 SM4002 完掘状況（西から）

6　Ⅳ区 SK4002 半截状況（北から）

7　Ⅴ区 SF5001 検出状況（南から）

8　Ⅴ区 SF5001 検出状況（東から）

図版３　遺構３

1　V区 SA5002 検出状況（南から）

2　V区 SA5002 検出状況（西から）

3　V区 SA5002 断ち割り状況（西から）

4　V区 SA5004 検出状況（背面は遺構保護砂）（南西から）

5　V区 SA5005 検出状況（東から）

6　V区 SA5005 検出状況（北東から）

7　V区 SA5006 検出状況（南西から）

8　V区 SA5006 立面（西から）

図版 4　遺構 4

1　Ⅴ区 SM5002 完掘状況（東から）

2　Ⅴ区 SP5032 ～ 5040 完掘状況（南西から）

3　Ⅴ区 SA5003 立面（西から）

4　Ⅴ区 SD5006 検出状況（西から）

5　Ⅴ区 SA5003・SD5002 検出状況（北から）

6　Ⅴ区 SD5002 検出状況（南西から）

7　Ⅴ区 SD5001 検出状況（北から）

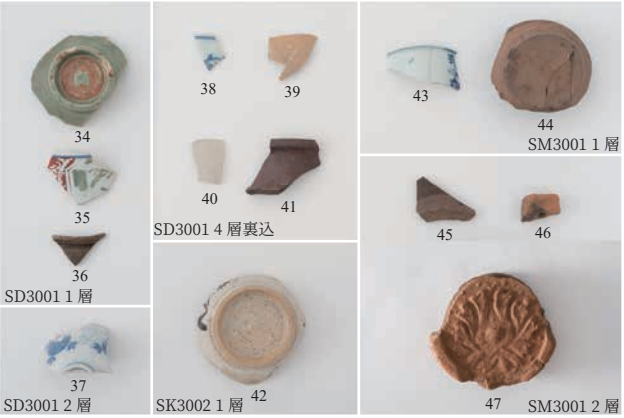
8　Ⅴ区 SA5003 根石付近 遺構面（コーラル面）
検出状況（北から）

図版 5　遺構 5

Ⅲ区の出土遺物１

Ⅲ区の出土遺物２

Ⅲ区の出土遺物３



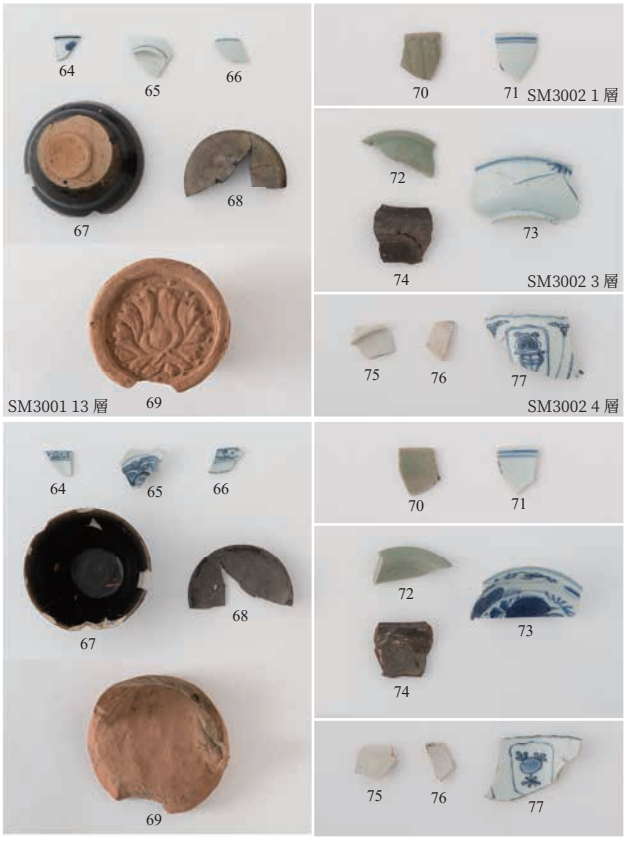
Ⅲ区の出土遺物４

図版 6　出土遺物１

Ⅲ区の出土遺物５

Ⅲ区の出土遺物６

Ⅲ区の出土遺物７



Ⅲ区の出土遺物８

図版７　出土遺物２

Ⅲ区の出土遺物 9

Ⅲ区の出土遺物 10

Ⅲ区の出土遺物 11

Ⅲ区の出土遺物 12

図版 8　出土遺物 3

Ⅲ区の出土遺物 13

Ⅲ区の出土遺物 14

Ⅲ区の出土遺物 15

Ⅲ区の出土遺物 16

図版 9　出土遺物 4

Ⅲ区の出土遺物 17

Ⅲ区の出土遺物 18

Ⅲ区の出土遺物 19

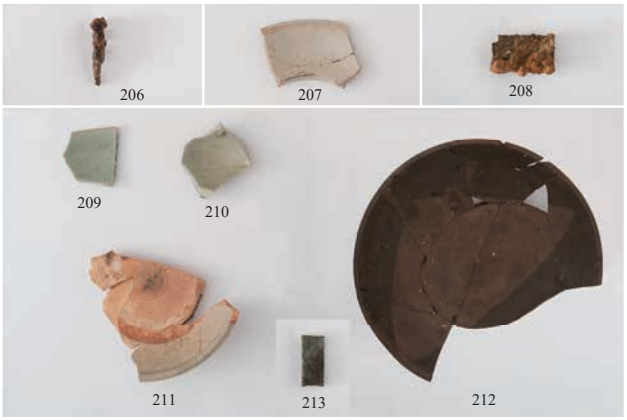
Ⅲ区の出土遺物 20

図版 10　出土遺物 5

Ⅲ区の出土遺物 21

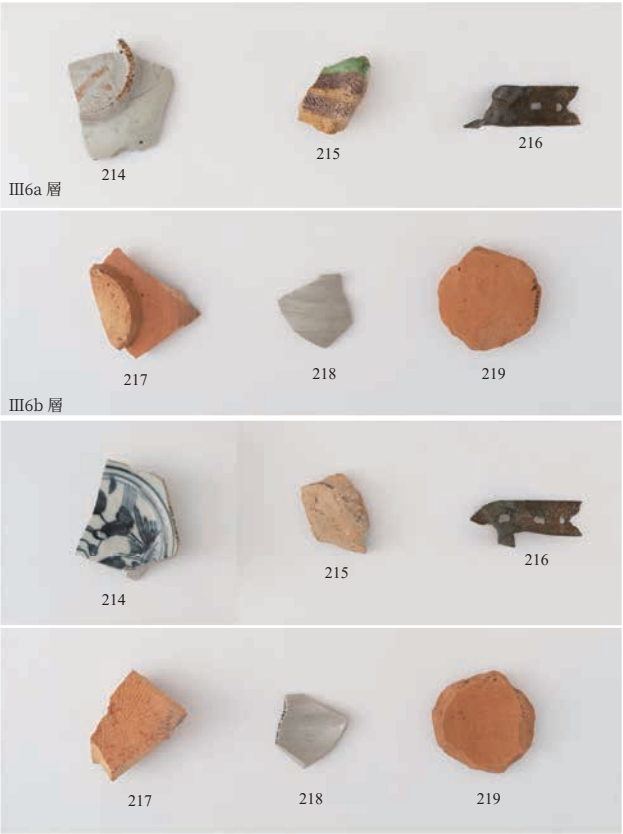
Ⅲ区の出土遺物 22・23

Ⅲ区の出土遺物 24



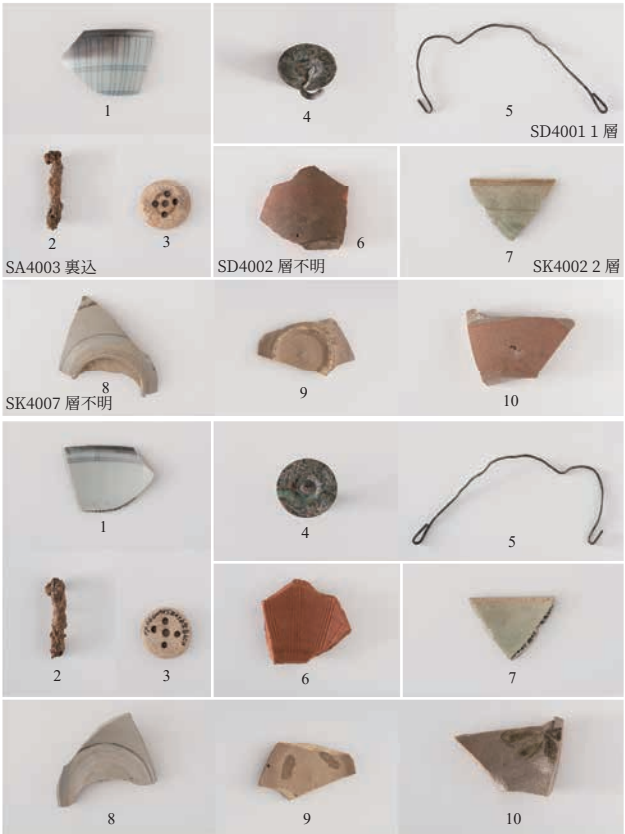
Ⅲ区の出土遺物 25

図版 11　出土遺物 6

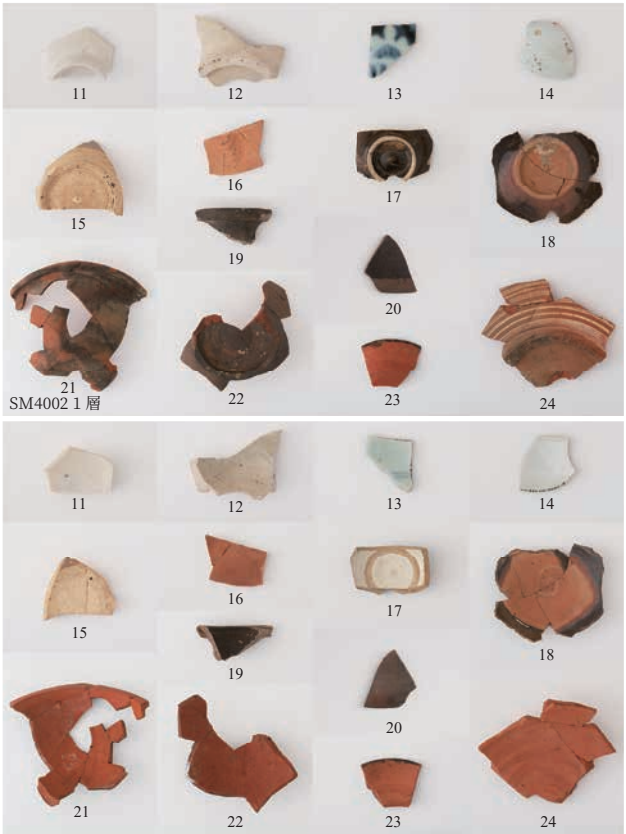


III区の出土遺物 26

III区の出土遺物 27



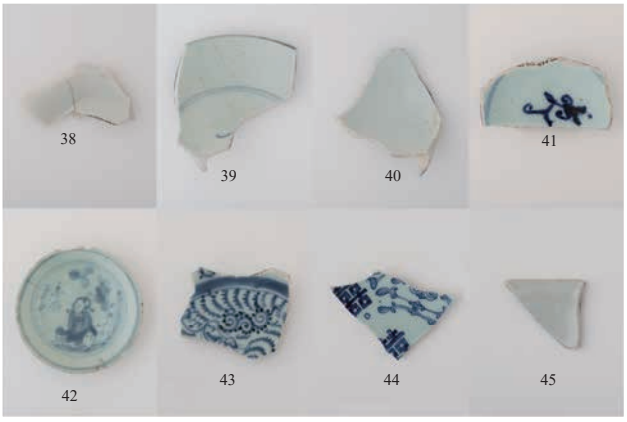
IV区の出土遺物 1



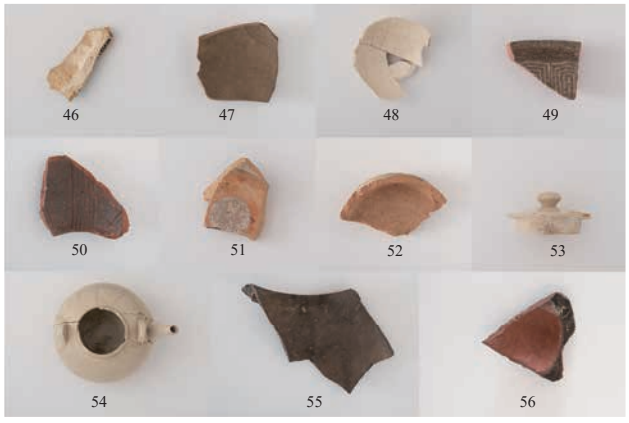
IV区の出土遺物 2

図版 12　出土遺物 7

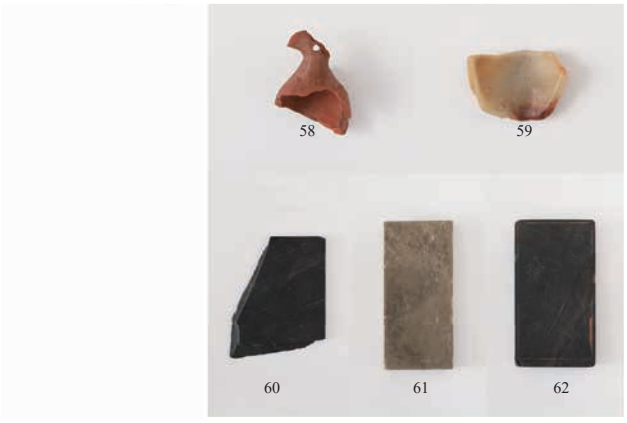
IV区の出土遺物３



IV区の出土遺物４



IV区の出土遺物５



IV区の出土遺物６

図版 13　出土遺物８

IV区の出土遺物７

IV区の出土遺物８

IV区の出土遺物９

IV区の出土遺物 10

図版 14　出土遺物９

IV区の出土遺物 11

IV区の出土遺物 12

IV区の出土遺物 13

V 区の出土遺物 1

図版 15　出土遺物 10

Ⅴ区の出土遺物２

Ⅴ区の出土遺物３

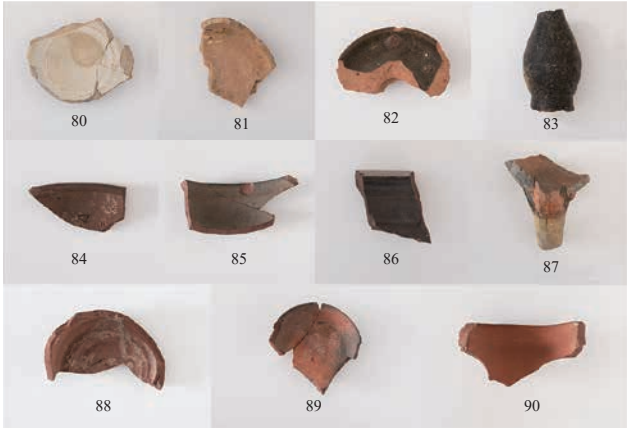
Ⅴ区の出土遺物４

Ⅴ区の出土遺物５

図版 16　出土遺物 11

Ⅴ区の出土遺物６

Ⅴ区の出土遺物７



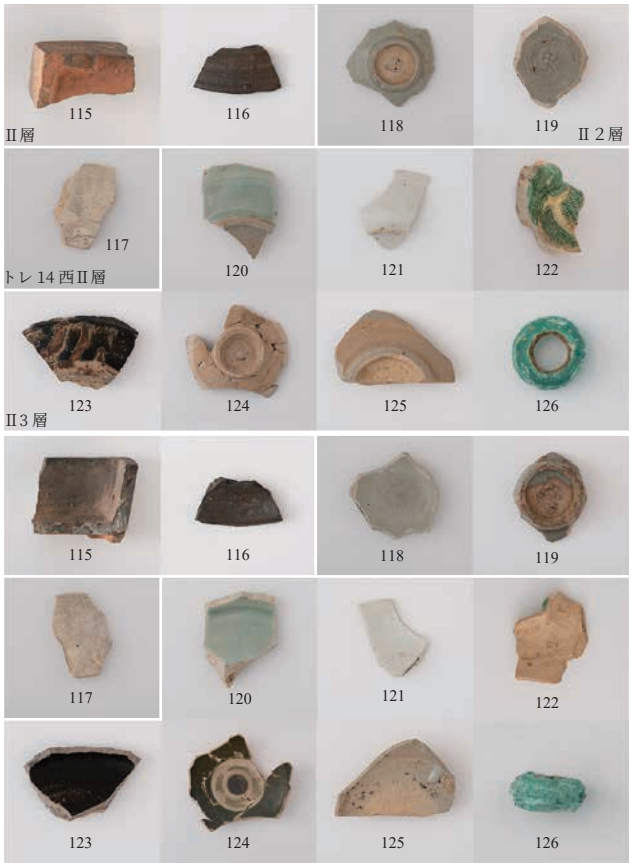
Ⅴ区の出土遺物８

Ⅴ区の出土遺物９

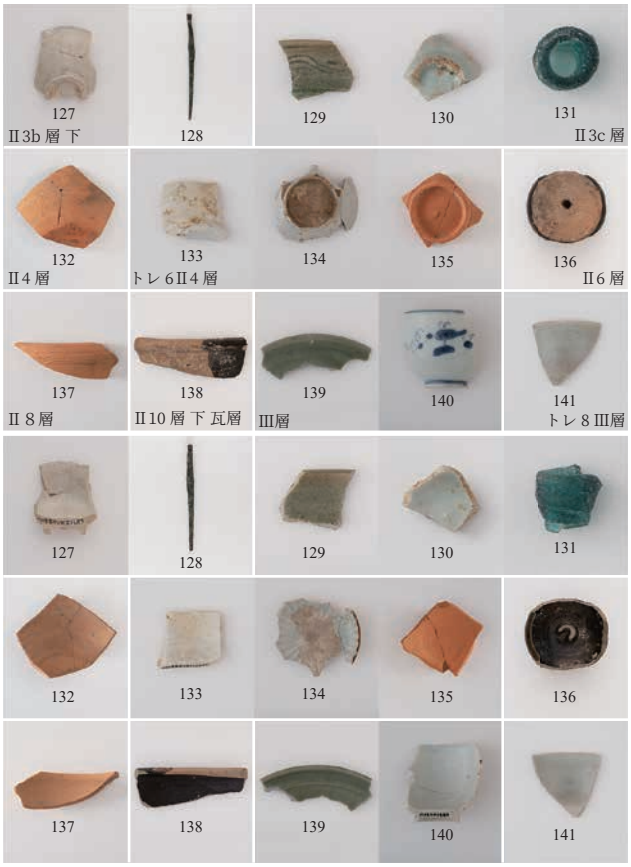
図版 17　出土遺物 12

Ⅴ区の出土遺物 10

Ⅴ区の出土遺物 10・11



Ⅴ区の出土遺物 12



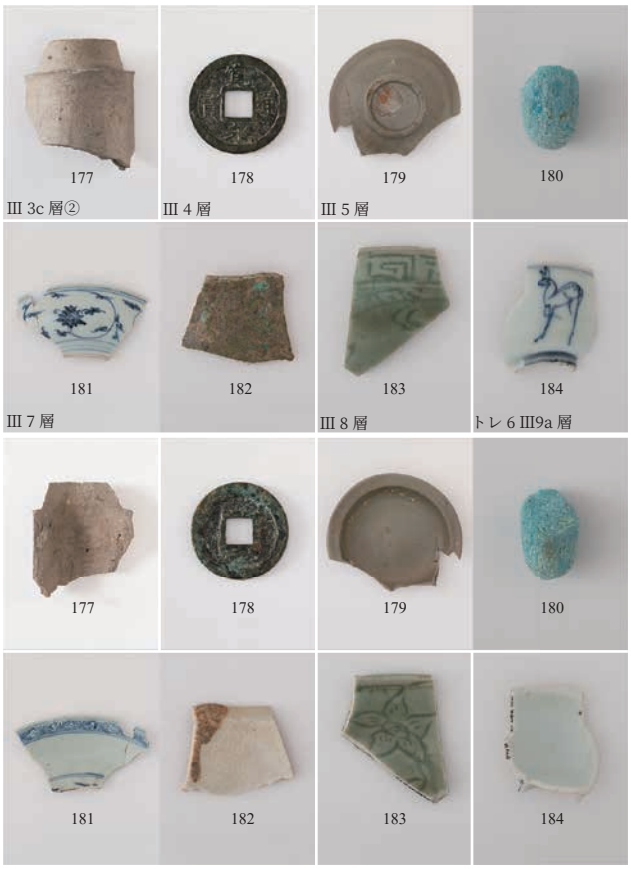
Ⅴ区の出土遺物 13

図版 18　出土遺物 13

Ⅴ区の出土遺物 14・15

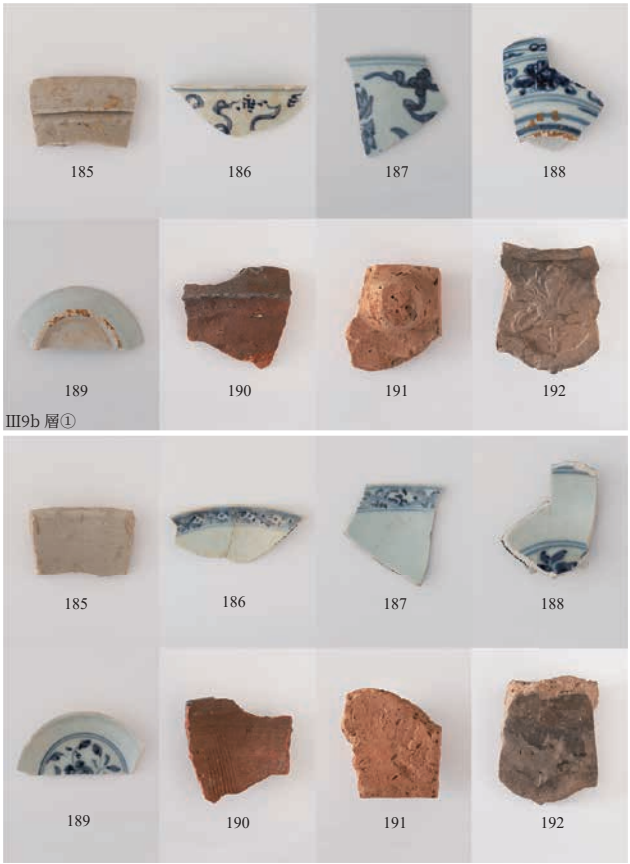
Ⅴ区の出土遺物 16

Ⅴ区の出土遺物 17



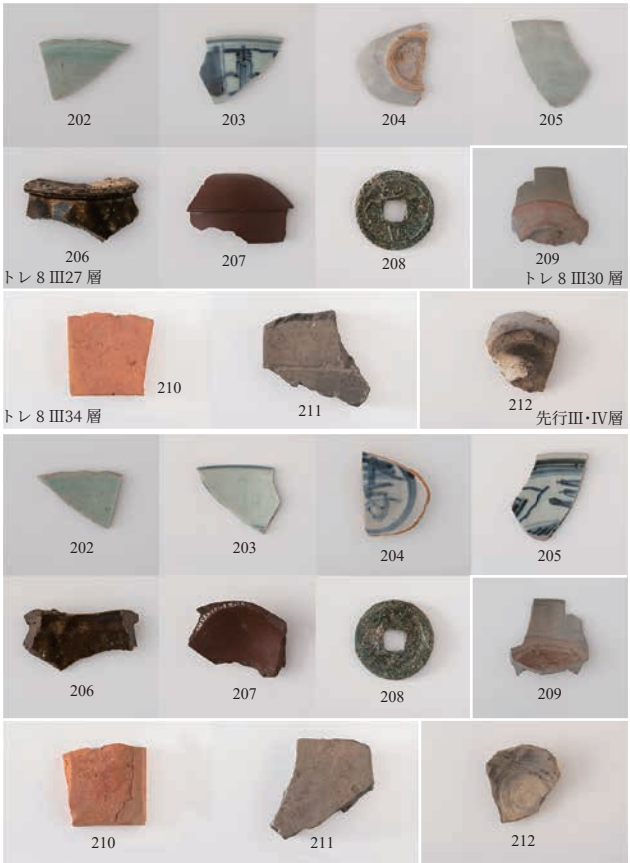
Ⅴ区の出土遺物 18

図版 19　出土遺物 14

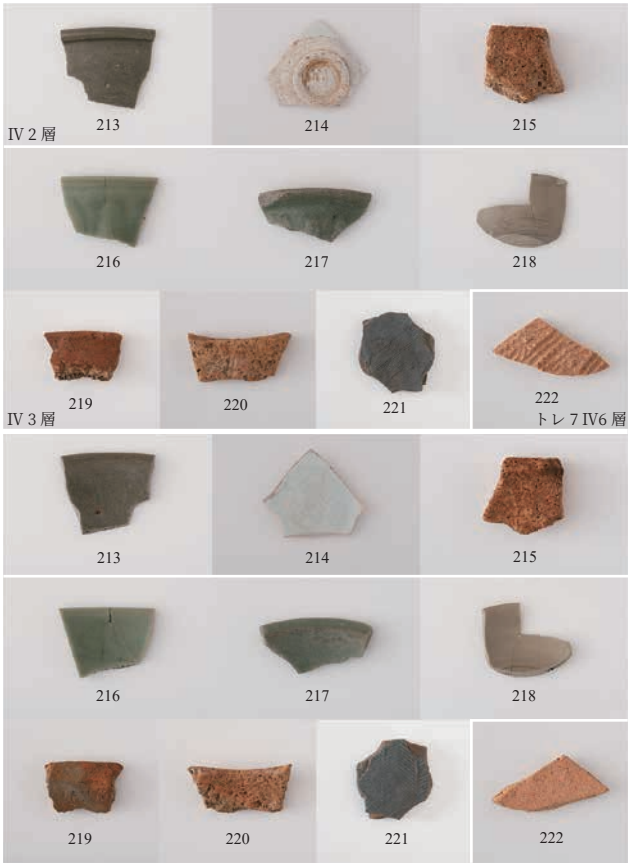


Ⅴ区の出土遺物 19

Ⅴ区の出土遺物 20・21

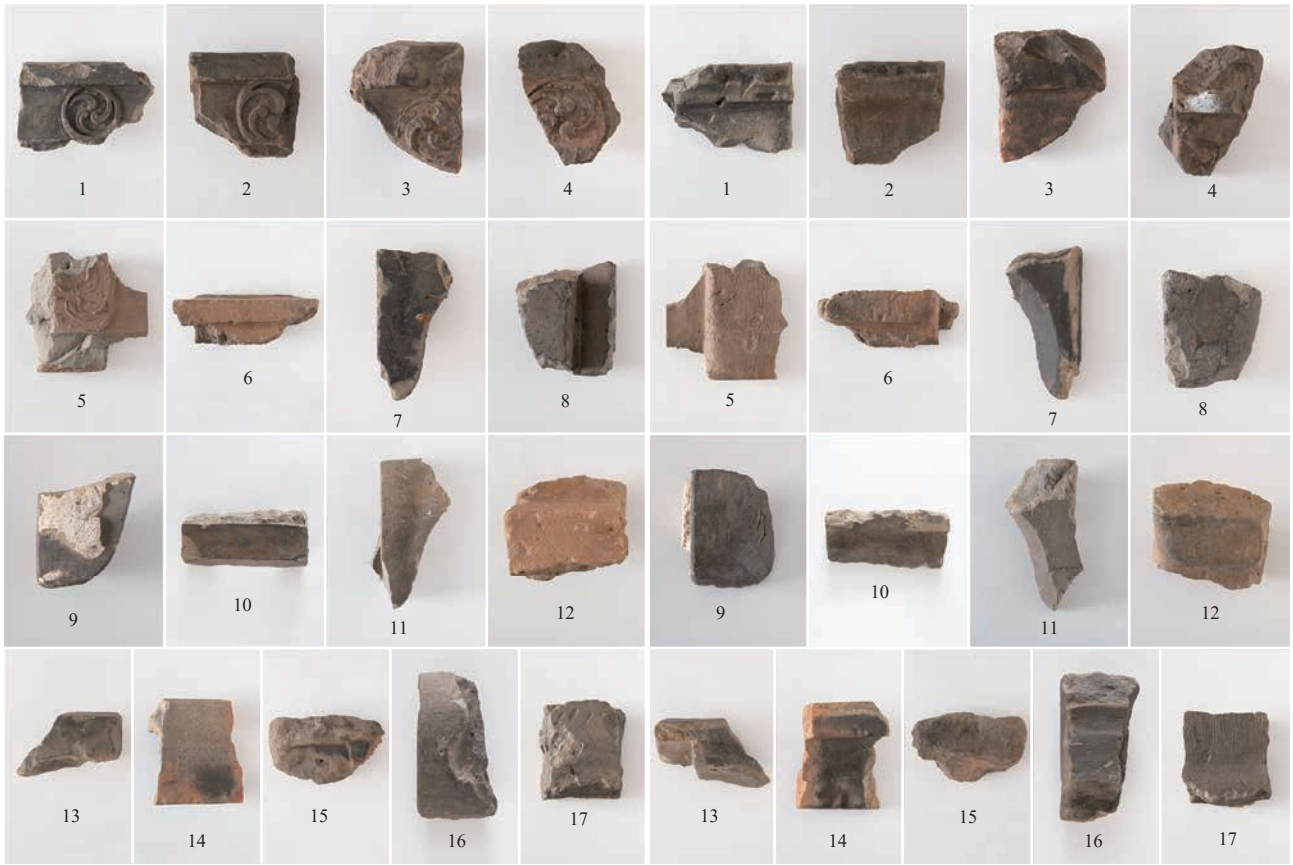


Ⅴ区の出土遺物 21・22



Ⅴ区の出土遺物 22

図版 20　出土遺物 15



Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区 塼瓦

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区 塼瓦集合

図版 21　出土遺物 16

Ⅲ区 写真のみ

Ⅴ区写真のみ

Ⅳ区 写真のみ

Ⅲ･Ⅳ･Ⅴ区 ガラス製品集合

Ⅲ･Ⅳ･Ⅴ区 三彩集合

図版 22　出土遺物 17

図版 23　脊椎動物遺体 1

ネズミザメ科 1. 椎骨　**サメ類** 2~4. 椎骨　5. 歯　**エイ目** 6. 椎骨　**ダツ科** 7. 前上顎骨 右　8. 歯骨 左　9. 上咽頭骨 右　**ボラ科** 10. 主鰓蓋骨 右　**カマス科オニカマス？** 11. 歯骨？ 左？　**ハタ科** 12・14. 前上顎骨 左　13・15. 前上顎骨 右　16・17・19. 歯骨 右　18. 歯骨 左　20. 主上顎骨 左　21. 主上顎骨 右　22. 口蓋骨 左　23. 口蓋骨 右　24. 角骨 左　25. 角骨 右　26・27. 方骨 左　28. 舌顎骨 左　29. 舌顎骨 右　30. 前鰓蓋骨 左　31. 前鰓蓋骨 右　32. 主鰓蓋骨 右　33. 角舌骨 左　34. 角舌骨 右　35. 後側頭骨 右　36・37. 上擬鎖骨 右　38・39. 擬鎖骨 右　40~42. 腹椎

図版 24　脊椎動物遺体 2

アジ科 1. 角骨 右　2. 主鰓蓋骨 右　**タチウオ科** 3. 歯骨 左　**タチウオ科？** 4. 前上顎骨 / 歯骨　**シイラ科** 5. 前上顎骨 左　**フエダイ科** 6・7. 前上顎骨 右　8. 主上顎骨 右　9. 角骨 左　10. 口蓋骨 左　11. 角舌骨 右　12. 腹椎　**クロダイ属** 13. 前上顎骨 右　14. 前上顎骨 左　15. 歯骨 左　16. 歯骨 右　17. 主上顎骨 右　18. 角骨 右　**タイ科** 19. 前鰓蓋骨 左　20. 主鰓蓋骨 左　**ヨコシマクロダイ** 21. 前上顎骨 左　**フエフキダイ科** 22. 前上顎骨 左　23・24. 前上顎骨 右　25・26. 歯骨 右　27. 主上顎骨 左　28. 主上顎骨 右　29・30. 口蓋骨 左　31・32. 角骨 右　33. 方骨 右　34・35. 舌顎骨 右　36. 前鰓蓋骨 右　37. 前鰓蓋骨 左　38. 主鰓蓋骨 右　39・40. 角舌骨 左　41. 後側頭骨 右　42・43. 上擬鎖骨 左　44・45. 擬鎖骨 右

図版 25　脊椎動物遺体３

シロクラベラ 1・2. 前上顎骨 左　3・4. 歯骨 左　5. 主上顎骨 左　6. 口蓋骨 左　7・8. 角骨 右　9. 上咽頭骨 右　10. 下咽頭骨　**ベラ科** 11. 前上顎骨 左　12. 前上顎骨 右　13. 歯骨 右　14. 上咽頭骨 左　15・16. 下咽頭骨　17. 尾舌骨　18. 上擬鎖骨 右　**ブダイ科** 19. 前上顎骨 左　20・23. 前上顎骨 右　21. 歯骨 右　22・24. 歯骨 左　23. 前上顎骨 右　25・26. 主上顎骨 左　27. 角骨 左　28・29. 方骨 右　30. 上咽頭骨 右　31. 上咽頭骨 左　32. 下咽頭骨　33・34. 舌顎骨 右　35. 前鰓蓋骨 左　36. 主鰓蓋骨 左　37・38. 尾舌骨　39. 上擬鎖骨 右　40・41. 腹椎　**ニザダイ科** 42. 舌顎骨 右　43. 主鰓蓋骨 左　44. 擬鎖骨 左　45. 楯鱗　46・47. 腹椎　**モンガラカワハギ科** 48. 前上顎骨 左　49. 尾舌骨　50. 担鰭骨　51. 第１背鰭棘　**カニ** 52. 可動指 右　53. 不動指 左

図版 26　脊椎動物遺体 4

ニワトリ 1. 烏口骨 左　2. 烏口骨 右　3. 肩甲骨 右　4. 上腕骨 左　5. 上腕骨 右　6. 尺骨 左　7. 尺骨 右　8・9. 中手骨 左　10. 大腿骨 右
11. 脛足根骨 左　12. 脛足根骨 右　13. 中足骨（オス）右　14. 中足骨（メス）右　**イヌ** 15. 下顎骨 P_4M_1 左　16. 下顎骨 M_2 左　17. 肩甲骨 右
18. 上腕骨 右　19. 橈骨 右　20. 尺骨 左　21. 尺骨 右　22. 中手骨 V 右　23. 中手骨 左　24. 寛骨 左　25. 脛骨 左　26. 中足骨III 左
ネコ 27. 下顎骨 $P_3P_4M_1$ 右　28. 橈骨 右　29. 尺骨 右　30. 中手骨III 左　31. 寛骨 右　32. 中足骨III 左　33. 中足骨 II 右　**ネズミ科** 34. 大腿骨 左

図版 27　脊椎動物遺体 5

イノシシ / ブタ 1. 頭蓋骨 M^3 右　2. 上顎骨 P^4~M^3 左　3. 上顎骨 dm^2~dm^4 右　4. 下顎骨 P_3~M_3 右　5. 下顎骨 C・dm_3~M_1 右　6. 環椎　7. 肩甲骨 右　8. 肩甲骨 左（**ブタ**）　9. 肋骨 右　10・11. 肋骨 左　12. 上腕骨 左（カットマーク）　13. 上腕骨 左（**ブタ**）　14. 橈骨 右（カットマーク）　15. 橈骨 右　16. 尺骨 右　17. 尺骨 左　18. 中手骨Ⅱ左　19. 中手骨Ⅲ右　20. 中手骨Ⅳ右　21. 中手骨Ⅴ右　22. 寛骨 右　23. 寛骨 左　24. 大腿骨 右（カットマーク）　25. 大腿骨 左　26. 大腿骨 右 (回転叩切)　27. 膝蓋骨 右　28. 脛骨 左　29. 脛骨 右　30. 腓骨 左（カットマーク）　31. 距骨 右（カットマーク）　32. 踵骨 左　33. 中足骨Ⅱ左　34. 中足骨Ⅲ右　35. 中足骨Ⅳ右　36. 中足骨Ⅴ左　37. 基節骨 左　38. 中節骨 左　39. 末節骨 左

図版 28　脊椎動物遺体 6

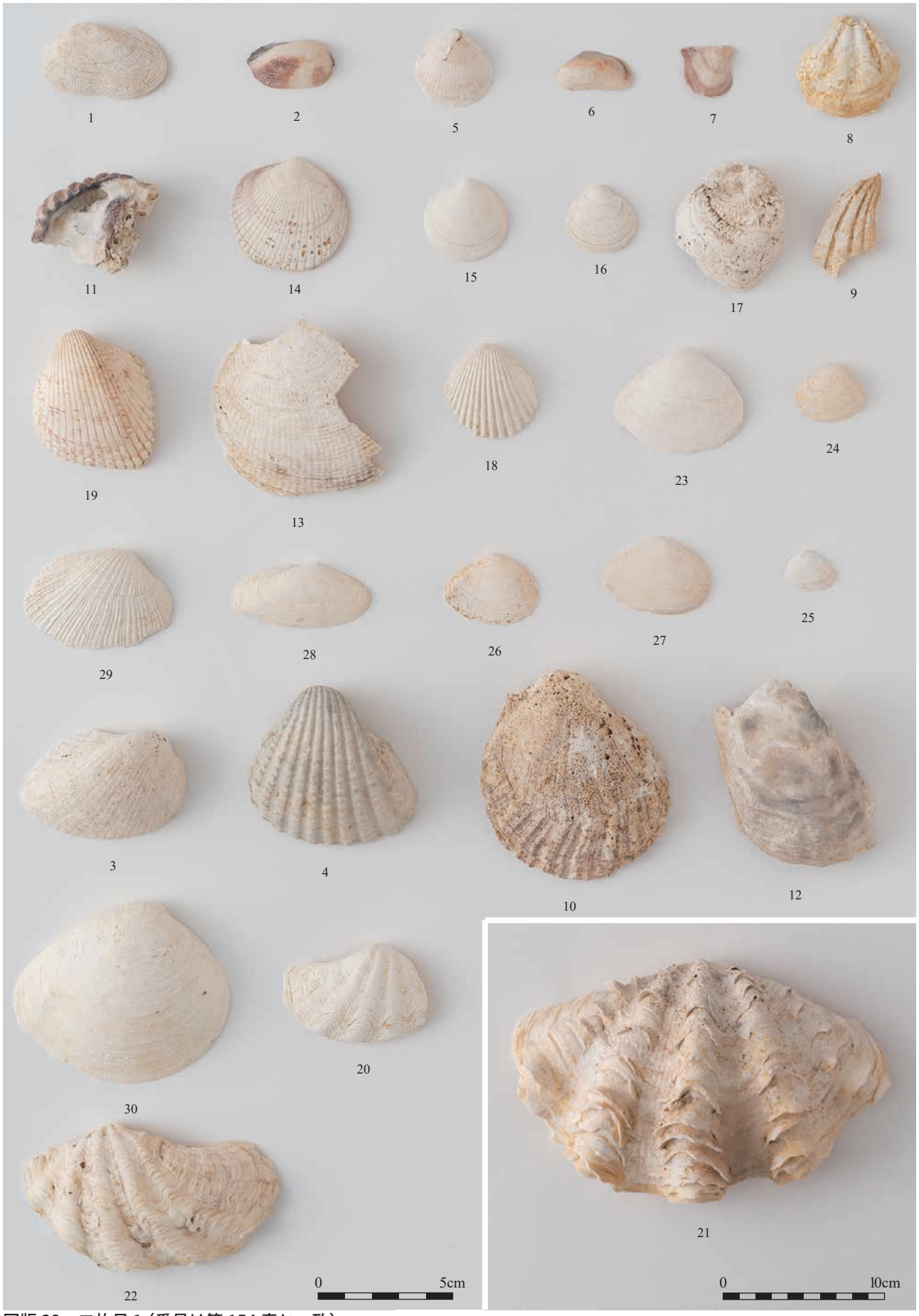
ウシ 1. 角突起　2. 上顎 P^3/P^4 右　3. 上顎 M^1/M^2 右　4. 上顎 M^1/M^2 左　5. 上顎 M^2 左　6. 下顎骨 P_3~M_3 右　7. 肩甲骨 右（カットマーク）　8. 上腕骨 右（螺旋状剝片、カットマーク）　9. 肋骨 右　10. 橈骨 左（螺旋状剝片）　11. 橈骨 右（螺旋状剝片、カットマーク）　12. 尺骨 左（カットマーク）　13. 尺骨 右（チョップマーク）　14. 手根骨 右　15. 手根骨（中間）左　16. 手根骨Ⅳ 左　17. 中手骨 右（カットマーク）　18・19. 大腿骨 左　20. 脛骨 右（螺旋状剝片、カットマーク）　21. 脛骨 左（チョップマーク）　22. 中心第 4 足根骨 左　23. 中心第 2 第 3 足根骨 右　24. 中足骨 左（螺旋状剝片、カットマーク）　25. 距骨 左（チョップマーク、カットマーク）　26. 踵骨 左　27. 基節骨 右　28. 中節骨 右　29. 末節骨 左

図版 29　脊椎動物遺体 7

ウマ 1. 上顎 P^3 右　2. 上顎 I^1 右　3. 下顎 I_3 右　4. 下顎 P_3 右　5. 下顎 P_4/M_1 左　6. 上腕骨 左（カットマーク）　7・8. 肋骨　9. 橈骨 左（螺旋状剝片）　10. 尺骨 左（カットマーク）　11. 手根骨 左（カットマーク）　12. 中手骨 右　13. 脛骨 右（螺旋状剝片）　14. 距骨 左　15. 足根骨　16. 中足骨 右（螺旋状剝片、カットマーク）　17. 中足骨 左（螺旋状剝片、カットマーク）　18. 中足骨 左　19. 種子骨　20. 基節骨　21. 中節骨 左　22. 末節骨
ヤギ 23. 上顎 M^1/M^2 右　24. 上顎 M^3 右　25. 下顎 M_3 左　26. 上腕骨 左　27・28. 橈骨 左　29・30. 尺骨 左　31. 中手骨 右　32. 寛骨 右
33. 大腿骨 右（螺旋状剝片、カットマーク）　34. 中足骨 左　**イルカ類？** 35. 後頭骨　**ウミガメ？** 36. 指骨？

図版 30　巻貝 1（番号は第 153 表と一致）

図版 31　巻貝 2（番号は第 153 表と一致）



図版 32　二枚貝 1（番号は第 154 表と一致）

図版 33　二枚貝 2（番号は第 154 表と一致）

第 153 表　巻貝出土一覧

番号	科 名	貝 種 名	生息地
1	ツタノハ科	オオベッコウガサ	Ⅰ -1-a
2	ユキノカサ科	リュウキュウウノアシ	Ⅰ -1-a
3	ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ -2-a
4		ムラサキウズ	Ⅰ -3-a
5		ギンタカハマ	Ⅰ -4-a
6		サラサバテイラ	Ⅰ -4-a
7		オキナワイシダタミ	Ⅱ -1-b
-		ニシキウズ科不明	
8	リュウテン科	ヤコウガイ	Ⅰ -4-a
9		ヤコウガイの蓋	Ⅰ -4-a
10		チョウセンサザエ	Ⅰ -3-a
11		チョウセンサザエの蓋	Ⅰ -3-a
12		カンギク	Ⅱ -1-b
13		カンギクの蓋	Ⅱ -1-b
14	アマオブネ科	コシダカアマガイ	Ⅰ -1-b
15		マルアマオブネ	Ⅱ -1-b
16		オオマルアマオブネ	Ⅰ -1-b
17		アマオブネ	Ⅰ -1-b
18		ニシキアマオブネ	Ⅰ -1-c
19	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ -2-c
20		コオニノツノガイ	Ⅰ -2-a
21		メオニノツノガイ	Ⅰ -4-c
22		コゲツノブエ	Ⅲ -1-c
23		イワ（ウミニナ）カニモリ	Ⅱ -1-b
24		クワノミカニモリ	Ⅰ -1-b
25		ナガタケノコカニモリ	Ⅰ -1-c
-		オニノツノガイ科不明	
26	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Ⅰ -0-a
27	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ -1-c
28	ヘナタリ科	フトヘナタリ	Ⅲ -0-d
29		カワアイ	Ⅲ -1-c
30		センニンガイ	Ⅲ -0-c
31	スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ -2-c
32		ムカシタモト	Ⅰ -2-c
33		ネジマガキ	Ⅰ -2-c
34		マガキガイ	Ⅰ -2-c
35		クモガイ	Ⅰ -2-c
-		スイショウガイ科不明	
36	スズメガイ科	カワチドリ	Ⅰ -3-a
37	タカラガイ科	ヤクシマダカラ	Ⅰ -2-a
38		ホシダカラ	Ⅰ -2-a
39		ナツメモドキ	Ⅰ -2-a
40		コモンダカラ	Ⅰ -1-a
41		ハナビラダカラ	Ⅰ -1-a
42		キイロダカラ	Ⅰ -1-a
43		ハナマルユキ	Ⅰ -3-a
-		タカラガイ科不明	

番号	科 名	貝 種 名	生息地
44	タマガイ科	リスガイ	Ⅰ -2-c
45	オキニシ科	オキニシ	Ⅰ -3-a
46	ヤツシロガイ科	スクミウズラガイ	Ⅰ -2-c
47	フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ -4-a
48	アッキガイ科	コガンゼキ	Ⅰ -2-a
49		ガンゼキボラ	Ⅰ -4-a
50		ウネレイシダマシ	Ⅰ -1-b
51		アカイガレイシ	Ⅰ -3-a
52		ツノレイシ	Ⅰ -3-a
53		シラクモガイ	Ⅰ -3-a
54	オニコブシ科	オニコブシ	Ⅰ -3-a
55		コオニコブシ	Ⅰ -3-a
-		オニコブシ科不明	
56	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ -1-c
57	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ -2-a
58		ヒメイトマキボラ	Ⅰ -2-b
59		ナガイトマキボラ	Ⅰ -2-a
60		リュウキュウツノマタガイ	Ⅰ -3-a
61		チトセボラ	Ⅰ -2-c
62	イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	Ⅱ -2-c
63		アンボンクロザメ	Ⅰ -2-c
64		クロフモドキ	Ⅰ -2-c
65		マダライモ	Ⅰ -1-a
66		サヤガタイモ	Ⅰ -1-a
67		ジュズカケサヤガタイモ	Ⅰ -1-a
68		ゴマフイモ	Ⅰ -2-c
69		アカシマミナシ	Ⅰ -2-c
70		サラサミナシモドキ	Ⅰ -2-c
71		ユキゲイモ	Ⅰ -2-c
72		ヤキイモ	Ⅰ -2-c
73		ヤナギシボリイモ	Ⅰ -2-a
74		キヌカツギイモ	Ⅰ -2-a
75		アジロイモ	Ⅱ -2-c
-		イモガイ科不明	
76	タケノコガイ科	キタケノコガイ	Ⅳ
77	トウガタカワニナ科	トウガタカワニナ	Ⅳ -5・6
78		スグカワニナ	Ⅳ -6
79	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ -8
80	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ -8
81	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ -9
82		パンダナマイマイ	Ⅴ -8
-	巻貝不明		

第 154 表　二枚貝出土一覧

番号	科名	貝種名	生息地
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ -1-a
2		ベニエガイ	Ⅰ -2-a
3		リュウキュウサルボオ	Ⅱ -2-c
4		ハイガイ	Ⅲ -1-c
5	タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅱ -2-c
6	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	Ⅰ -1-a
7	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ -1-a
8	イタヤガイ科	キンチャクガイ	Ⅰ -1-c
9		イタヤガイ	Ⅰ -4-c
-		イタヤガイ科不明	
10	ウミギク科	メンガイの一種	
11	イタボガキ科	オハグロガキ	Ⅰ -1-a
12		カキの一種	
13	ツキガイ科	ツキガイ	Ⅰ -2-c
14		クチベニツキガイ	Ⅰ -2-c
15		ウラキツキガイ	Ⅱ -2-c
16		ヒメツキガイ	Ⅰ -2-c
-		ツキガイ科不明	
17	キクザル科	シロザル	Ⅰ -4-a
-		キクザル科不明	
18	ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ -2-c
19		カワラガイ	Ⅱ -2-c
20	シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ -2-a
21		ヒレシャコ	Ⅰ -2-c
22		オオシラナミ（シラナミ）	Ⅰ -2-a
-		シャコガイ科不明	
23	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ -2-c
24	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ -1-c
25	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅰ -1-c
26	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ -1-c
27		ヌノメイチョウシラトリ	Ⅲ -1-c
-		ニッコウガイ科不明	
28	イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ -1-c
29		リュウキュウマスオ	Ⅱ -1-c
30	シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ -1-a
31	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ -1-c
32		アラスジケマン	Ⅲ -1-c
33		ホソスジイナミ	Ⅱ -1-c
34		ユウカゲハマグリ	Ⅱ -2-c
35		マルオミナエシ	Ⅰ -2-a
36		オイノカガミ	Ⅱ -2-c
37		ヒメアサリ	Ⅱ -2-c
38		スダレハマグリ	Ⅱ -2-c
39		ハネマツカゼ	Ⅰ -1-c
40		イオウハマグリ	Ⅱ -1-c
41		ハマグリの一種	Ⅱ -2-c
42		ダテオキシジミ	Ⅲ -1-c
-		マルスダレガイ科不明	
43	二枚貝印象化石		
-	二枚貝不明		
44	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ -3-a

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどぅんあと しゅりこうこうない・はじえんあと
書名	中城御殿跡（首里高校内）・櫨園跡
副書名	首里高校校舎改築に伴う発掘調査（2）
巻次	—
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第110集
編著者名	亀島慎吾（編）　太田樹也　平良和輝　古堅あゆみ
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　　TEL　098-835-8752
発行年月日	令和3（2021）年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
中城御殿跡（首里高校内）櫨園跡	沖縄県那覇市首里真和志町2丁目	472018	—	26°13′10″	127°42′45″	2017.08.24～2018.04.27 2018.09.12～2019.04.24	3,260㎡	首里高校校舎改築に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	グスク時代	柱穴、土坑、石組土坑、石積	中国産陶磁器、石製品	中城御殿創建以前のグスク時代の遺構を検出した。 近世は検出した遺構や造成土の状況から前期・後期に区分することが出来た。 中城御殿移転後の遺構も確認され、首里高校に関連する遺構及び遺物が見られた。
		近世	石積、一括廃棄遺物、柱穴、土坑、石組土坑、石敷	中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、石製品、骨製品、貝製品、金属製品、明朝系瓦	
		近代～現代	井戸、集石遺構、石列、石組土坑	中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、ガラス製品、石製品	
櫨園跡	その他	近世	石積、石組土坑	中国産陶磁器、貝製品、自然遺物	石積や石組土坑を確認した。石組土坑からは、貝製品製作に関連すると考えられる貝殻片が多く出土した。

要約

中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、近世初期に創建され、1875（明治8）年に那覇市首里大中町の龍潭池の北側に移転した。移転後の当地は、沖縄県立第一中学校を経て、首里高校となっている。

櫨園跡は、蝋燭や漆器の原料となる漆を採取する櫨園が置かれた場所とされている。

首里高校校舎改築に伴い実施された発掘調査である。当初、記録保存調査として実施していたが、関係各機関と調整を行い、一部現地保存が可能な部分があった。

調査の結果、グスク時代、近世、近代～現代の遺構、遺物を確認した。グスク時代の遺構は柱穴や石組土坑がある。近世の遺構は中城御殿が機能していた時期の石積、石組土坑など多種多様な遺構及び遺物を確認した。近代～現代の遺構は、首里高校校舎等に関連する遺構が確認された。

櫨園跡の部分からは、石積や石組土坑が確認できた。石組土坑内からはヤコウガイをはじめとする貝殻片が多く出土し、貝製品等を製作していた痕跡が確認された。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 110 集

中城御殿跡（首里高校内）・櫨園跡

－首里高校校舎改築に伴う発掘調査（２）－

発行年　令和３（2021）年９月 30 日
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　098（835）8751（総務班）・8752（調査班）

印　刷　沖縄自分史センター株式会社
〒 903-0804
沖縄県那覇市首里石嶺 4-288
TEL　098（960）4104